
馬鹿とテストと大脱走!!

勇吾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馬鹿とテストと大脱走！！

【Nコード】

N2760S

【作者名】

勇吾

【あらすじ】

馬鹿テストのパロディです

主人公は脱走癖あり、しかしテストは最強の男。

振り分け試験を脱走したとき、彼の人生ははじまった。

謙太「……つてか、題名「大脱走」なのに、全く逃げてねえんじやねえか？」作者「ええ。それが何か？」謙太「開き直るなっ！！」「優希」と、いうわけで、下手&mp;支離滅裂な、アホ作者が書いてるんですけど、元がいいから大丈夫ですよね」「作者「否定できないぜ……。と、とにかく……」「……よろしくお願い

します！」「」「

受験により定期更新が難しくなっていました。読者のみなさん、本当にごめんなさい・・・

プロローグ（前書き）

はじめまして!!

これが処女作なのでおかしいところも多いと思いますがどうか気を悪くせず呼んでもらえば幸いです。

ちなみにアニメ版を元にして書いていますので原作とは違うところもあると思いますがどうかご容赦を…

プロローグ

ここは話題の試験校文月学園である。

何故有名なのかというところの文月学園には偶然によって生まれた「試験召喚システム」がある。

そしてそのシステムを生かした「試験召喚戦争」略して「試召戦争」というものが存在する。

この話はこの学校初の「観察処分者」が入学したと同時に入学してきた、ある普通（？）の生徒の物語である・・・

改めて言うが俺は佐藤謙太^{さとうけんた}。文月学園の普通の生徒だ。

何故俺が自己紹介をしているかというと、一応俺がこの話の主人公だからである。

いきなりだが俺は試験召喚戦争が目的でこの学校に入った。

勉強の成績で戦争ができるなんて楽しいと思うだろ？

この話はそんな俺が馬鹿と繰り広げる色々な問題（？）を（主に）俺目線で書いたものだ。

楽しみにしてくれよ!!

俺が文月学園に入学してから約一年がたった。

今日はあの振り分け試験の日だ。

正直設備には興味がなかったが、一応参加することにした。

「第一問・・・」

（結構楽勝だな・・・）

そんなことを思いながら外を見る。

(いい天気だな・・・)

外は春らしい、雲ひとつない青空だった。

少し外を見ていると、ある考えが頭をよぎった

(なんか遊びに行きたいな・・・)

俺は一瞬よぎった考えを払拭できなくなった。

「先生」

俺はテスト担当である先生を呼ぶと、こういった。

「遊びたいので帰ります。」

先生は「は？」といった顔になった。当然である。

そういった俺はバッグに筆記具をぶち込むと、外へと駆け出した。

(なんてすがすがしいんだ!!!)

そんなことを考えていると後ろから足音がすごい足音が…

ドタドタドタドタ!!!

訂正しよう。ものすごい足音がしてきた。

「ごらああああああ！佐藤！！何をしているか！！」

鉄じ…西村先生である。

「え？遊びに行ってるだけですよ？」

「今はテスト中だろうが！！0点でもいいのか！！」

「お好きにどうぞ」

そういった俺は一目散に駆け出した。

足だけは学年1を自負しており、鉄人にも負けない自信があった。

「待たんか、佐藤おおお！！！！」

ここでつかまるわけには行かない俺は、学校外まで逃げ出して、何とか逃げ延びた。

そして二年の始業式

「おい佐藤!!」

俺が振り向くと、後ろには鉄人が立っていた。

「オハヨウゴザイマス、鉄人」

俺はにこやかに挨拶した。挨拶は大事だからだ。

「何故に棒読みなんだ・・・。まあいい、受け取れ。」

渡されたのはクラス分けの結果である。

俺はそれをポケットに押し込んだ。

「なんだ、みないのか？」

「見なくても分かるでしょう？それより他の生徒に渡さなくていいんですか？」

俺がそういうと、鉄人はふっ、と笑った。

「俺は問題児限定だからな。後は吉井と坂本だけだ。」

吉井明久に坂本雄二。この二人は要注意人物としてマークされている。

特に吉井は、この学園初の「観察処分者」だからだ。

(吉井に坂本か、面白いクラスになりそうだな・・・)

俺は内心ほくそ笑んだ。

同じクラスになったことがないから面識はないが、彼らはあらゆる意味で有名である。

一部では両思いだなんて噂も立っているほどだ。

そんな奴らと一緒にになったのだから、楽しいに違いない。

(試召戦争もかなり荒れそうだな・・・)

俺はそんなことを考えながら、クラスに向かった。

プロローグ（後書き）

とりまきようはここまでですっ！！！！

初めてだから文がおかしいかも知れませんが、

もし読んでくれた人はコメントお願いします！！

第一話（前書き）

まだ誰もみてないのか・・・
ともかくがんばります！！

第一話

俺は、真面目にテストを受けなかったことを後悔した。

Fクラスの設備は最低だった。

「さすが、学園最下位クラスだ。」

しかし設備など関係なかった。

なぜなら俺は試召戦争をしにここへ来たからだ。

教卓には坂本がいた。

「どうした？元神童」

「先生が来ないから教卓に立ってみた。そっちこそどうした？元が

く・・・いや、脱走犯か」

お互い皮肉を言い合い俺は席についた。

すると隣の美少女（？）に声をかけられた。

「お主が振り分け試験を脱走した佐藤か？」

「ああ、そっちは？」

「ワシは木下秀吉。演劇部に所属しておる。」

「あの演劇部のホープか。」

「一応言っておくがワシは男じゃぞ？」

「はいはい。とにかく、よろしくな。」

「うむ、よろしくたのむ。」

「そこ、いいですか。」

俺らへの注意のため、先生が教卓を叩いた。

ポンポン

ガラガラガラ・・・

教卓が壊れた。

「替えを取ってきます。」

そう言っ先生は教室から出ていった。

戻ってきた先生が一人の生徒をつれてきた。

「遅れてすみません。保険室に行っていたら遅れました。」

その生徒をみた皆が呆然とした。

もちろん俺も。

「何でここにいるんだ？」

そこにいたのは姫路瑞希だった

第一話（後書き）

PSP不便すぎる！

というわけで今回は姫路さんの登場で締めてみました。（何が、というわけだ・・・）

次回まではバトルシーンはないですが、飽きずにみてくださいー！

第二話（前書き）

暇なんでもいっこと書いてちゃいます!!..
相変わらず読者のoppoいケドがんばりますので!!..

第二話

「姫路・・・さん？」

誰かが呆然としながら尋ねた。

いや、正確に言えば呆然としているのは俺を含めたFクラスの全員だった。

「はい。姫路瑞希です・・・って吉井君!？」

姫路は答えた。どうやらコイツも振り分け試験を脱走したのだろう。

「そっか、やっぱりFクラスになっちゃったんだ。」

そこで俺は気づいた。この騒動の中で吉井だけが冷静だ。

「吉井、どうということ?」

尋ねたのは島田美波だった。

ちなみにコイツは帰国子女で、字が読めないからFクラスに入ってしまった(らしい。)

「ああいや、実は姫路さん、試験のときに倒れちゃって、無得点扱いになっちゃったみたいなんだよ。」

(脱走じゃなかったのか・・・)

吉井の説明が珍しく通じ、みんなは納得して席に着いた。

「あ、えっと・・・とりあえず一年間よろしくおねがいます。」

姫路はそういうと、空いている席に座った。

そのとき俺は密かに、

(何で一応Aクラス候補だった俺と姫路の差がこんなにあるんだ? などということも思っていた。)

HR中、先生が急用で出て行ったため、皆は雑談を始めた。その間に俺は姫路のところに行き事情を聞いた。

「何があつたんだ、姫路？」

「あ、佐藤君。えっと試験の最中に高熱を出してしまったんです。」

「へえ。で、もういいのか？」

「はい、大した事はありませんから。」

姫路はそういうとにっこりと笑った。

俺はまんざらでもなかったが、ふと後ろから殺気を感じて振り返ってみると、

「佐藤君？何をしているのかな？」

後ろには武器を構えた吉井と、その他Fクラスの面々が立っていた。

「え？普通に話しているだけだが？」

あきらかにおかしい殺気を前に、俺は戦闘体制をとりつつ答えた。

「だったらその笑顔はおかしい！！総員、かかれ！！！」

吉井の号令の下、Fクラスの生徒が次々と襲い掛かってきた。

「やつば、逃げるぞ、姫路！！！」

「え？ちよつと、佐藤君？」

俺は姫路の手を引き逃げようとした。しかし逆効果だったらしい。

「おい、あいつら手をつないでいるぞ！！！」

「佐藤謙太、許すまじ！！！」

切れすぎて自我を失ったFクラス生徒（怪物）たちは、次々と俺に武器を投げつけてくる。

「ああもつ、最終手段だ！！！」

俺は持つていたある写真をばら撒いた。

「え？佐藤君、それって・・・？」

「姫路は見るな！！それより行くぞ！！！」

俺は無理やり姫路を引っ張り、校舎の端へと逃げていった。

後に聞こえるのは、

「おおおおおお！！秀吉のレア写真だ！！！」

「なッ！！佐藤、何をばら撒いておるのじゃ！！！」

「吉井！！何見てんのよ！！！」

「違つよ島田さん！！これはただの情報集しゅ腕が今までにない痛

みに襲われている!!」
・・・忘れよう。

「ところで姫路？大丈夫かその体で？」

俺はFクラスの面子から逃げ切った後、姫路に聞いた。

「あ、ちよっときついかもしれないです。」

「だろうな・・・」

俺たちが話しているのは姫路の体調についてある。

姫路は体が弱い。そしてあのFクラスで勉強するとなると、これ以上ひどくなるかもしれない。

「けど・・・大丈夫です!!吉井君が、あと佐藤君もいますし。」

「俺はついでか・・・。にしても、まだ吉井が好きだったんだな。」

「え？はわわっ、そういうわけじゃ!!」

「隠さなくていいって。そんなことより、そろそろ戻るか？」

「はい。そうですね!!」

そういつて俺らはクラスへ戻っていった。

(本当に吉井が好きなんだな・・・)

戻る途中に少しだけスキップする姫路を見て、

俺は少しだけ複雑な気分だった。

戻ると同時に、俺はFクラスの奴ら(特に秀吉と吉井)に睨まれた。
どうやらまだ先生は帰ってきてないらしい。

それを知った俺は、クラス代表である坂本と、吉井を廊下に連れ出した。

「どうした？何か用か？」

坂本は言った。

そこで俺は、

「ああ、面白い話をしよう。俺たちで、Aクラスをぶっ倒さないか？」

吉井は驚いたが、坂本は少しも動じなかった。

「何でさ、佐藤君？」

「謙太でいい。理由はここの設備が、余りにも酷いからだ。」

「理由はそれだけか？」

坂本が問いかけてきた。目が笑っている。

「わかった。本音を言おう。俺は姫路が好きだ。」

「えっ？謙太？それどういう・・・」

「だが姫路はバカはいやだといってきた。だからあいつを見返してやろうとおもってな。」

「そうだね！！やろうよ、雄二！！」

俺のついた嘘に、吉井は乗ってきた。

(後は坂本だが・・・)

坂本のほうを見ると、坂本はすべてを見通したような目で言った。

「そうか、面白い。俺もやろうと思っていたところだ。それに、策もある。」

「それなら、交渉成立だな。」

俺は坂本と拳を合わせた。

「ちよつと？僕を忘れないで？」

吉井がさびしそくに言ってきた。

「ああ、悪かったな。」

俺は吉井とも拳を合わせた。

「3人とも、何をしているんですか？教室に戻ってください。」

ここで、先生が戻ってきて、HRが再開された。

「さつきはよくもやってくれたのう・・・」

席に戻った俺は、秀吉からすごい目で睨まれた。

「悪い。逃げるにはあれしかなかったんだ。」

俺は、素直に謝った。

「まあいいがのう、それより、外で何をしておったんじゃ？」

少し不機嫌だったが、秀吉は俺にさつきの事を聞いてきた。

「まあ、すぐにわかるさ。」

俺は話をそらして教卓を見た。

教卓には、最後の自己紹介をするために、坂本が教卓に立っていた。

「俺は坂本雄二、代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ。」

それより、Aクラスはリクライニングシートにシステムデスクらし
いが、不満はないか？」

「・・・大有りだ!!!」

「だろうな、俺だってこの現状は大いに不満だ。」

そこでだ。俺たちはAクラスに試召戦争を仕掛けたいと思う。」

「・・・!?」

皆首を傾げたが、当然である。

「大丈夫だ。策はある。それより・・・」

坂本が見ている先には、姫路のスカートを除く小柄な少年がいた。

「おい、ムツツリーニ。いつまで姫路のスカートを覗いているんだ
？」

そう指摘された少年は、無言のまま大きく首を横に振った。

「あいつは土屋康太。あいつがああ「寡黙なる性識者」へムツツリ

「ニ」だ。」

「・・・何だと!?」

説明しよう。ムツツリーニとは、保健体育に関しては、教師並みの
点数を誇る天才である。

「それに姫路だっている。」

「確かに!!」

「姫路さんがいるなら何もいらぬ。」

「それに佐藤康太だっている。」

「あいつか!!」

「あの振り分け試験を脱走した、学年主席か!!」

「当然俺も本気を出す。」

言い忘れていたが、坂本は昔神童と呼ばれるほど頭がよかつたのだ。

「まさかAクラス級が三人も!!」

「いけるぞ!!このメンバーなら!!」

「それに・・・吉井明久だっている!!」

・・・

場の空気が凍つた。

「吉井明久?それって誰?」

「雄二!!僕の名前は才手扱いかよ!!」

「いや、違うぜ?知らないなら教えてやる。この吉井明久は、「観察処分者」だ!!」

「何だと!!?あいつが?」

再びクラスがざわめき始めた。

「あのお・・・」

そこに姫路が質問した。

「観察処分者って、そんなにすごいですか?」

「そうだ、普通の奴じゃない。観察処分者とは、成績が悪く、問題ばかり起こす奴に与えられる称号だ。」

「つまり、バカの代名詞ということじゃな。」

秀吉の意見に皆がうなずいた。

「ちがうよ。ちよつとお茶目な16歳の・・・」

「そうだ、バカの代名詞だ。」

「雄二まで!?!」

坂本の言葉に、本気で落ち込む吉井。

「バカは放つて置くとして・・・」

それを無視する坂本。

(こいつら、ほんとに友達か?)

俺はふとそんな疑問を抱いた。

きつと吉井もそんな気持ちだったはずだ。

「とにかく、このクラスはAクラスに勝てる!!しかしそのためには、皆の協力が必要だ・・・」
坂本は一瞬ためてこういった。

「皆、やってみないか?」

「モチロンだ!!」

「よしそれじゃあ行くぞ!!」

「おおおおおお!!」

クラスが1つにまとまった。

「それじゃあ手始めに、1つ上のEクラスを攻めたいと思う。明久くん?」

「Fクラス大使としてEクラスに宣戦布告してきてくれ」

「え?下位勢力の使者って、たいてい酷い目にあうよね?」

一応説明すると、上位クラスは下位クラスを倒しても何の特もない。なのでただの手間になる戦争ということになる。

だからその鬱憤を使者に晴らすのである。

「それなら大丈夫だ、吉井。」

俺は口を挟んだ。

「俺が逃げ方を教えてやる。」

一応俺は逃走のプロだ。そこで、そのノウハウを吉井に教えることにした。

「へえ。で、どうやるの?」

「用件を伝え終わったら、こいつを投げろ。」

そういつて俺はある袋を吉井に手渡した。

「佐藤よ、それはもはや・・・」

「え？ほんとに？ありがとう佐藤君！！」

そういつて中身を取り出す吉井。

「バカ！！ここで出したら・・・」

あわてて止めるも時すでに遅し。

あたり一面になんともいえない匂いが拡散した。

「なっ、何じゃこれは!？」

「アンモニアだ！！アンモニウムと塩酸をその中で混ぜ合わせたんだ。」

「何でそんな危険なものを・・・」

「鉄人からにげるにはこんぐらい必要なんだ!!」

そういつて俺はガスマスクを2つ取り出した。

「・・・姫路、島田これを使え。」

「佐藤、お前漢だな・・・」

〈10分後〉

Fクラスの生徒は女子以外残らず撃沈した。

第二話（後書き）

ふう、どうでしたか？

結構オリジナル展開にしてみました。

とりあえず目指せ読者一人で行きますんで、応援よろしくお願いします。

つてかアニメ展開って難しいな・・・

訂正します。

・ 枠組みだけアニメ、中身は原作よりのオリジナルで行きますので・・・

・ 有言不実行ごめんなさい！！！！

ちなみに友人に見せたら

「レベル低いな・・・」

とリアルに言われました・・・

ガンバレ！！俺！！

第三話（前書き）

ついに感想がきました!!!

これでやる気が出てきました!!!

がんばります!!!

第三話

「ふう・・・」

意識を取り戻した俺らは、Eクラスへの宣戦布告を無事に終えて（特製アンモニア弾のおかげで、無傷だった。）、作戦会議を行っていた。

黒板に大まかな図面を書いた坂本が、作戦の説明を始めた。

「戦闘には長谷川先生を使う。ちょうど五時限目でEクラスに向かうところを確保する。」

「長谷川先生というと・・・教科は数学？」
そうきいたのは明久だった。

何故明久と呼んでいるのかというと、あれのおかげで無傷だった明久が、

「ありがとう謙太様！！僕のことには明久って呼んでくれていいよ？
なんていうことを言ってきたからだ。」

「数学なら、うちは得意よ？」
そういったのは島田だ。

島田は字が読めないだけで、決してバカではない。
だから、数式だけの問題はそれなりに解ける。

「その島田の得意な数学を主力にして戦う。」
坂本はそういった。

どつやらロイツも島田の事は分かっているらしい。

「姫路さん、数学は？」

「苦手ではないですが・・・」

「というか、姫路に苦手科目はない・・・」

と言いかけて俺はあることを思い出した。

「どうしたの、佐藤？」

「い・・・いや、何でもない。」

姫路の苦手教科は、後で分かるだろう。

「じゃあ一緒に戦えるね？姫路さん」

「いいや、ダメだ。」

そこに坂本が割って入った。

「どうして？」

「最後に受けたテストの点数が、召喚獣の戦闘力になる。そして俺たちが最後に受けたテストは・・・」

「振り分け試験？」

「私は途中退席したから、0点なんです。」

(そうだった。姫路は途中退席したから、0点だった。)

試召戦争では、0点になると戦死扱いになる。

そして、戦死したものにはある罰が下される。それは後でわかるだろう。

「だが、うちにはもう一人のAクラス候補、佐藤謙太がいる。」

「そうか、なら今回は姫路さんの出番はないね。」

「一応試召戦争中は、回復試験というもので、点数を回復できる。」

しかし、回復試験とはいえ、試験だから時間がかかるのも確かだ。

「よし！！今回は姫路を使わず、楽に勝とうぜ！！！！」

「・・・おおおおお！！！！」

とりあえず作戦が決定して、皆は張り切っていた。

「姫路、今回はゆっくりしてくれ。」

「はい。私も皆と戦いたかったですが、しょうがありませんね」

そういつて姫路はにっこりと笑った。

そのとき俺は、

(ん？そういえば俺、何点だった？)

俺は自分の点数を思い出せずに奮闘していた。

「長谷川先生確保!!」

捕獲班からの叫び声で、雄二が教卓を(壊さないように)叩き、こ
ういった。

「開戦だ!!総員、戦闘開始!!」

「「「おおおおおお!!」」」

そういった皆は俺の後に続いて、教室から出た。

俺は島田、秀吉、康太と組んで、相手の教室に向かった。

そして、三人のEクラス生徒とぶつかった。

「ここは俺に任せてくれ。佐藤謙太、行く・・・」

「ちょっと待つんじゃない!!」

そういったのは秀吉だった。

「え？なんで・・・」

「お主は試験を脱走したからこのクラスになったんじゃないが!!」

「「「は?」」」

全員が目を丸くした。

「あつ・・・そうだった。」

俺はようやく思い出した。自分も振り分け試験を途中退席(脱走)
したことを。

「やっぱり・・・どうしょ・・・」

相手は、これ幸いと召喚獣を呼び出した。

(秀吉の女装写真は女だから通用しないし・・・)

「くっ・・・最終手段だ!!!」

俺は懐からピンポン玉のようなものを取り出すと、三上に投げた。

それは三上の前で破裂し、煙を出した。

「なっ、余計な真似を・・・」

三上は召喚獣が見えずに、指示を出せない。

「いまね、サモン!!!」

島田がこの隙に召喚獣を呼び出し、三上の召喚獣を切り倒した。

Fクラス島田美波、87点

Eクラス三上美子、0点

「数学じゃ、Eクラスなんかに負けないんだから!!!」

「そ、そんな・・・」

三上は悲しそうにうつむいた。そのとき、

「戦死者は補習!!!!」

その声と共に、鉄人が現れ、三上を担ぎ上げた。

戦死者の説明をしよう。戦死者は、鉄人(西村先生)に鬼の補習を受ける羽目になる。

鉄人曰く、鬼の補習を受けたものは、趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎という理想の生徒(?)になるらしい。

「佐藤!!!早くテストを受けてきてよ!!!」

「分かった。何とか時間を稼いでくれ!!!」

俺は島田にそう言われ、急いでテスト会場に向かった。

テスト会場では、姫路もテストを受けようとしていた。

「あれ、佐藤君？どうしてここに・・・？」
「話している場合じゃない。先生、俺も数学の回復試験を受けます
！！」
「そうして俺はテストを受けた。」

吉井目線

まずい・・・

謙太まで補給中なんて・・・

「ねえ雄二、大丈夫かな？」

「何がだ？」

雄二は相変わらず余裕そうだ。

「姫路さんも謙太もテストを受けてるのに、勝てるの？」

「さあな？前線の時間稼ぎ次第だ。」

「そんな・・・じゃあ今押し切られたら？」

「そのためにお前がいるんだろ？」

「そうか・・・そうだった。」

僕はもし佐藤君がダメだった場合の時間稼ぎ役だった。

「うん・・・僕、がんばるよ！！」

「よっしそんじゃあ存分に時間を稼いでくれ！！」

「え？」

僕が前を見たときには、数人のFクラス生徒と、Eクラス代表率いるEクラスのフルメンバーが戦っていた。

しかし、一瞬で勝負が付いた。

「相手にならないわね。」

そういったのはEクラス代表の中林宏美だった。

「もう終わりかしら？Fクラス代表さん？」

「Eクラス代表自ら乗り込んでくるとは、余裕じゃないか？」

「新学期早々宣戦布告だなんて、バカじゃないの？振り分け試験直後なんだから、クラスの差は点数の差よ。あなたたちに勝ち目があると思ってるの？」

中林は、あきれたように言った。

「さあ？どうだろうな？」

それなのに雄二はちつとも動じてない。

「そっか。それがわからないバカだからFクラスなんだ。」

僕はだんだん不安になってきた。

(ねえ雄二、本当に勝てるの？)

「そういえば、まだ作戦が残っていたな。」

「え？」

そっか、僕に時間を稼がせて、姫路さんを待つ作戦か。

「そっか、分かったよ。」

「まさか、アナタは・・・」

「そうさ、この吉井明久は観察処分者だ。明久、お前の力を見せてやれ!!」

「しょうがないな・・・結局最後は僕が活躍するんだね。」

僕はうなずき召喚の呪文を唱えた。

「試験召喚獣、サモ・・・」

「ちよっと待った!」

「え？」

謙太目線

「よし終わった。姫路、先に行って雑魚を片付けとくから、代表を倒せよ?」

俺はそういうと、試験場を後にして、全力ダッシュした。

おれがFクラスに戻ったとき、明久が召喚しようとしていた。

「試験召喚獣、サモ・・・」

「ちよつと待った!!」

俺はそれをさえぎった。

「あら？誰かと思えばさつき逃げ出した臆病者じゃない？」

「ふん、バカにしてると痛い目見るぜ？サモンツ!!!!」

俺は改めて召喚した。

Eクラス平均75点×10

佐藤謙太、455点

再び全員が目を丸くした。

しかし、同じ行動でも、内容はぜんぜん違う。

「嘘・・・なんであんなのがFクラスに・・・」

「さつきまでの威勢はどうした？行くぜ!!」

俺はそう言つと、ドラゴンに命令を下した。

「やれ、雑魚を炎で焼き払え!!」

俺がそういうと、ドラゴンは思いっきり息を吸い、素晴らしい量の火球を放った。

「くぐつ、やられた!!」「」

その言葉と共に次々と消えていく召喚獣。

そして、残ったのは中林の召喚獣だけだった。

「なんてこと・・・」

俺は、笑いながらこういった。

「俺をバカにしたら痛い目見るって言っただろ？」

そして俺は真顔になって続けた。

「本来なら俺が倒したいが、折角だしコイツに倒してもらおう。姫路？」

その言葉と同時に、召喚獣を連れた姫路が現れた。

「アナタは・・・姫路瑞希さん？なんでここに・・・？」

「はい。Eクラス代表中林宏美さん、Fクラス姫路瑞希が、数学勝負を申しこみます。」

「えっ？」

そういうや否や姫路の召喚獣は中林を真っ二つにしていた。

「ごめんなさい!!！」

「そ、そんな・・・」

こうして、一学期最初の試召戦争は、Fクラスの勝利で終わった。

第三話（後書き）

どうでしたか？

バトルシーンの描写が微妙かもしれませんが、何とかがんばってみました。

しばらくは、1日1話更新で行けたらな〜と思っています。

それでは引き続きがんばりますので、応援よろしくお願いします！！

キャラ紹介？（前書き）

今日は暇で余裕があるのでキャラ紹介もしたいと思います。

tkものすごく進行おそいですよね？

後笑いが見つからない・・・

キャラ紹介？

キャラ紹介

主人公

名前：佐藤謙太
さとうけんた

容姿：身長：175cm

顔：イケメン、

体型：体育会系ではない。細め

髪：そこそこ長髪、クセ毛ぎみ。

性格：言葉遣いは悪いが温厚で、滅多に本気で怒らない。しかし大人しくはない。怒るとかなり酷い。　　が、決して表に出さない。（今のところ）

趣味：脱走、またはその方法を考える。

特技：走り（スピードだけなら鉄人以上）

成績：元学年主席、すなわち最高ランク。総合科目、4511点

得意科目：数学、化学、現国、古典（平均400）450、最高、
数学510）

苦手科目：保健体育（平均200）250）

召喚獣：ドラゴンマスター、ドラゴンの背にまたがり、ドラゴンの火と自身が持つ大きな槍で戦う。

腕輪（400以上の時）：巨大化子供くらいの大きさになり、火を噴きながら暴れまくる。

弱点：情にもろい、姫路に振られている（古傷）、女に弱い（美人限定）。

人間関係：吉井、姫路とは同じ小・中学校。しかし吉井とはほとんど接点なし。

姫路に振られたことは吹っ切れてないが、吉井のことを認め、応援している。

坂本とは気が合いそうだと、自分では思っている。

秀吉は（一応）男だと認めている。

姫路の写真を売っているムツツリ商会は叩き潰してやりたい（らしい）

島田は好みらしい。恋愛対象ではないらしいが…

Aクラスには知り合いが多い。

特に優子、愛子、久保は親友のような間柄

悩み：Fクラスの友人が少ない。

過去：昔から勉強をしたことがなく、天才ともてはやされてきた。

しかし、「勉強は楽しくない、スポーツのほうがいい」といつてスポーツに打ち込みすぎたおかげで、秀才にありがちな高圧的な物言いではなく、人当たりのよい温厚な性格にもなった。

実はムツツリー二のようなムツツリが大嫌い。しかし決して表に出さないようにしている。

備考：実は一人暮らし。後々オリ話で紹介するかも…

キャラ紹介？（後書き）

こんな感じですよ。

わからないことがあったら感想に書いてください。

もしかしたら久保やその他Aクラスのキャラとのオリ話を書くかも
しれないので、お楽しみに！！

第四話（前書き）

あの・・・

とりあえずすみません！！

姫路さんの希の字を間違えてたり、試召戦争のルールを変えたりしちゃってました。

その部分は書き直しておいたので、よかったら見てください。

第四話

「やったあ!!!」

明久は大きくバンザイをした。

なぜなら、俺たちはEクラスに勝ったからである。

「これも姫路さん・・・と謙太のおかげだよ!!!」

「俺はついてかよ・・・」

「そんな・・・ありがとうございます。」

姫路は好きな明久にお礼を言われ、少し赤くなっていた。

「これで僕らは、Eクラスと教室の設備を交換できるんだよね？」

「少しだけど、今までよりいい環境になるよ。」

「いや、設備は交換しない。」

「そういったのは坂本だった。」

「・・・え?」

当然俺らは首をかしげた。

「設備は今までのままだ。いい提案だろ?Eクラス代表さん?」

「そんな・・・どうして?」

負けたEクラスの代表、中林宏美は悔しくて小さくなっている。

「なんで!!!折角勝ったのに・・・」

と明久が講義しようとしたとき

ガラガラッ

教室のドア（引き戸）が開き、ある人物がやってきた。

「決着は付いた?」

「どうしたの?秀吉、その格好は・・・そっか!!!やっと本当の自分に目覚めたんだね!!!」

「明久よ、わしはこっちじゃぞ。」

「ってか、さつきから秀吉はいただろ？」
そういったのは俺だ。

今は、Fクラスの主要メンバーで話し合いををしている最中だったのだから、秀吉がいるのは当然である。

「それは、木下の双子の姉貴、木下優子だ。」

「そう。秀吉は私の双子の弟よ?」

木下優子、学力、運動共にトップクラスであり、ルックスもいいということ、かなりの人気を誇っている人物である。

まあ俺は、Aクラスの奴らとは大体仲がいいから、コイツの裏の顔も知っているんだが・・・

「コホン」

優子は小さな咳をして、それから続けた。

「改めて言うけど、私は2 - Aクラスから来た大使、木下優子。我々Aクラスは・・・」

「あなたたちFクラスに対して宣戦布告をします!!」
優子が放った言葉に、その場にいた全員が驚いた。

いや、坂本だけは相変わらず不敵な笑みを浮かべていた。

「『えええええ!!』」

「どうしてAクラスが僕らなんか・・・」

そういったのは明久だ。

「最下位クラスだからって、手加減はしないわ。容赦なく叩き潰すから、そのつもりで。」

次の日・・・

俺らは教室にいた。

「流石は瞬間接着剤。一瞬で修理完了!!!!」
そういったのは明久だ。

「よかつたのう明久。接着剤は良くなつたんじゃな。」

「折角苦労して勝つたんだもん。支給品ぐらいレベルアップしてくれないと。」

「お前は何もしてねえだろ!!!」

「そういえば、頭がガンガンするんだけど、昨日何かあつたっけ？」

「奇遇じゃのう、明久。実はわしもなんじゃ。」

「・・・同じく」

「話をそらすな!!!」

（つてかこいつら・・・Aクラスに宣戦布告された事まで忘れてやるな？）

なんてことを思ったが、よく考えたら俺のせいだった。

実は昨日、優子が帰った後にあまりにもうるさくてアンモニア弾を開放したから、そのせいで記憶が飛んでいるのかもしれない。

ちなみに女子にはガスマスクを渡しているから、俺のポリシー上問題なかった。

「何言ってるのよ、吉井、秀吉!!!昨日、Eクラスに勝つた後、Aクラスに宣戦布告された事忘れたの？」

「ああ、そうだった!!!」

二人はようやく記憶を取り戻した。

「そういえば雄二、どうしてEクラスと設備を交換しなかったのさ？」

「何だ明久、あんなボロツちい木の机がすきなのか？」

「こんなすぐ壊れる卓袱台よりは良いに決まってるじゃないか!!!」
そういつて明久は卓袱台をたたいた。

そのとき・・・机に乗っていた瞬間接着剤を明久が押しつぶし、出てきた接着剤が明久の手と卓袱台をくっ付けた。

「わああっ!!!手がああああ!!!」

「流石は瞬間接着剤じゃのう。一瞬でくっ付くとは驚きじゃ。」

「感心してないで、何とかしてよ秀吉い・・・」

明久の手は完全に卓袱台の中央に引っ付いており、簡単には取れな

さそうだ。

「でもさくどうせ吉井は勉強しないんだから、机なんて関係ないんじゃない？」

そうだったのは島田である。

「そんなことないよ！机はお弁当食べたり、居眠りしたり、落書きしたり、学園生活の大事なパートナーじゃないか！！」

「・・・というより、一心同体。」

明久の言葉に、ムツリニが付け足した。

「しかし・・・そのパートナーが今日次第ではシステムデスクになるんだぜ？」

(こいつら・・・また忘れてないか？。)

そう思った俺は一応言った。

「そうだった。雄二、大丈夫なの？」

流石にAクラス戦となつては、不安を拭い去れないらしい。

そう言う俺も、不安でしようがなかった。

「ちよつと計画が狂ったが、問題ない。事はすべて、俺の計画通りに進んでいる。な？姫路。」

「え？あ、はい。」

そういった坂本は、席を立ち、廊下へ出た。

「さて、Aクラスに乗り込むぞ！」

にしても、何でさつき姫路を呼んだんだ？

「ここがAクラス・・・」

「まるで高級ホテルじゃのう。」

「ふん、僕が学園生活を送るには、ふさわしい設備じゃないか。」

「しかし、今日次第ではこのクラスが俺らのものになるからな。悪くないな。」

Aクラスに着いた皆は、口々に感想を言っていた。

三番目は、卓袱台を手につけた奴が言うにはあきらかにおかしい台詞だと思うが、あえてスルーしておく。

「見て、吉井！フリードリリンクにお菓子が食べ放題よ！！」

確かに、この設備はすごかった。冷蔵庫に、巨大スクリーン、さらには個人用パソコンまである。

「フン、そんなことに一々驚いてたら、足元を見られるよ？もっと堂々と構えてないと」

そんなことを言った明久の下には、食べ散らかしたお菓子が散乱していた。

「・・・ことごとく発言と行動が伴わないな・・・」

俺は思わずそう言ってしまった。

そんな会話をしていたときに、背後から声がした。

「あら？」

振り返ってみると、優子がいた。

「姉上・・・」

「開戦は明日じゃないの？それとも、もう降伏しに来たの？」

「もうすぐ俺たちのものになる設備の下見だ。」

皮肉を皮肉で返す坂本。

（やっぱりこいつはやる奴だ。）俺はそう思った。

「へえ、ずいぶん強気ね？」

「そんな話はおいというて、俺らは交渉にきたんだ。」

あまりに話が進まないのので、俺が割って入った。

「交渉？」

驚く優子に坂本が答えた。

「そうだ。クラス代表同士の一騎打ちを申し込みたい。」

「・・・えっ！？」

これには、Aクラスはともかく、俺以外のFクラス面々まで驚いた。

「あなたバカじゃないの？二年のクラス代表に、一騎打ちで勝てるわけないじゃないの。」

「怖いのか？」

坂本はそういった。

「何ですって？」

少しムツとする優子。そんな優子を見無視し、坂本は話を続けた。

「確かに、終戦直後で弱ってる弱小クラスに攻め込む卑怯者だしな・

・・・」

「・・・今、ここでやる？」

さすがに切れた優子。こうなると交渉は不可能だ。

(しょうがない、俺が一肌脱ぐか)

そう思った俺は、優子に歩み寄り、あることを囁いた。

「(優子、一騎打ちを受けてくれ。そうしないと、俺はお前の性癖をばらす羽目になる)」

一気に顔が真っ赤になる優子。そんな優子に俺は続けた。

「(幸い坂本も、まだお前がB L雑誌好きの腐女子だということは知らない。だがお前の返答次第では・・・)」

「分かったわよ!!!」

顔を真っ赤にした優子が照れながら叫んだ。こうしてみると案外可愛いところもある。

「代表、良いですか？この提案を呑んでも？」

「・・・別にいい。」

そういうと、Aクラスのクラス代表、つまり学年主席である霧島翔子が現れた。

「・・・雄二の提案、受けても良い。」

「代表、いいんですか？」

優子が安心そうに言った。どうやら、本気でばらされなくなかったらしい。

「・・・でも、条件がある。」

「・・・え？」

驚く俺らを見無視し、霧島は姫路の前に行き、姫路に顔を近づけた。

「・・・負けたほうが、なんでも1つ言うことを聞く。」

「……え？」

「それが、Fクラスに宣戦布告した理由か？」

「そういえば、霧島は美人の上に秀才なのに誰とも付き合わないから女が好きだなんていわれていたっけ？」

「っておいおい……それってマズくないか？」

「霧島はこの条件を使って、姫路をどうにかするつもりなのか……？マズイ、本格的にマズイぞ……！」

「ちょっと待ってくれ、お互い5人の代表者を出して、代表者同士の5対5っていうのはどうだ？」

「何だと？」

「お前だけに任せるわけにはいかねえ。俺らも戦わせてくれ。」

「……分かった。」

「坂本は頷くと、霧島のほうに向き合った。」

「だそうだ。いいか？」

「……構わない。」

「代表!？」

「それじゃあ、交渉成立だな。」

「そうだった坂本はAクラスから出て行き俺らも後に続いた。」

「どうすんだよ、雄二。」

「俺らは屋上でAクラスから貰った《パクツた》お菓子を食べながら作戦会議をしていた。」

「何がだ？」

「試召戦争だよ。大丈夫なの、あんな約束して？」

「大丈夫だ。相手が言いなりになる特典がついて、良かったじゃねえか。」

「ってか坂本、勝つたらどんなお願いするんだ？」霧島さんを、自

さっきのこともあってか、話題は主に霧島のことについてだ。

「そういえば、霧島翔子には変な噂があるのじゃ。」
ギクツ・・・

「成績優秀、才色兼備、あれだけの美人なのに、周りには男子が居らんという話じゃ。」

まさかあの話じゃ・・・

「へえ〜モテそうなのだね。」

俺は島田の感想も耳に入らず、ひたすらあの事じゃありませんようにと願っていた。

「噂では男子には興味がないらしい。」

俺の願いは届かなかった。

やはり本当だったのか・・・

「男子にはって・・・まさか霧島さんの目的って!?!」

どうやら明久も気づいたらしい。

「・・・!?!」

いつの間にか戻ってきていたムツツリーニ。

鼻血を垂らしながらカメラを磨いている。

「い、いや、ままままさか・・・そんなはずは。そ、それって変だよ。そんなことがこんな身近にあるわけないじゃない。ねえ?

島田さん?」

島田、否定してくれ!!!

「ある。そんな変な子、身近にいるわ!!!」

マジかよおおおおお!!!

俺が否定しようとしたとたん、動かぬ証拠が・・・

「見つけましたわ、おねえさまあ〜!!!」

そういうと同時に島田に飛びつく女。

「み、美春?」

そうか、コイツもそうだったのか。

2-D、清水美春。まさかこんな近くにいるなんて・・・

「ひどいですわおねえさま!!!美春を捨ててこんな汚らわしい豚ど

もとお茶会だなんて・・・」

「離しなさい！！寄らないで！！」

「おねえさま」

「やめて、離してよ！！」

「恥ずかしながらいください、おねえさま！！本当は美春の事を愛してくださってるのに照れ屋なんですわね？」

「ウチは普通に男子のことが好きなの！！吉井、何とかいってやって！！」

そういつて乱暴に手を離す島田。

「そうだよ清水さん！！女同士なんて間違ってるよ。」

「お、珍しくまともな事言ってるじゃないか。」

俺は素直に褒めた。

「確かに島田さんは、見た目も性格も、胸のサイズも男と区別がつかないくらいに四の字固めがきまつてえ！！」

「うちはどう見ても、オンナでしょう！！」

「そうです。美春はおねえさまを女性として愛しているんです！！」

「前言撤回だ、明久。今のはお前が悪い。」

今明久は、島田に四の字固めを、清水に腕ひしぎ十字固めを食らっていた。

俺もさすがに島田が可哀想だったので、あえて放っておく。

さっきなんかおかしい声も聞こえたがそれも放っておく。

「そんなあゝ、謙太、どうにかしてよ！！」

「流石に俺もそつからは脱走できないな・・・」

この場合脱出というのだから、おそらく無理だ。

おそらくどんなマジシャンでも、この装置（？）からは脱出できないだろう。

そして、その装置を熱心に（ローアングルから）観察（？）している奴もいる。

大体分かると思うが、ムツツリーニである。

そんなことを言っている間に、明久には限界が訪れていた。

「助けて島田さん!!何でも言うこと聞くから!!」

「本当!?!」

その瞬間、島田の目が輝いた。

(島田まで明久のこと好きなのか・・・つくづく羨ましい奴だな。)

「それじゃあ今度、駅前の「ラ・ペリス」でクレープ食べたいな」

「え?そんな、僕の食費が・・・」

言いかけた明久は地獄を見た。

島田がさらに強く締めただからある。

「ハイッ!!オゴラセテイタダキマス。」

「棒読みだぞ〜明久。」

俺がそんなこと言っても、今の明久の耳には届いていないだろう。

その後も島田のお願い(命令)は続く。

「それから、ウチの事を『美波様』って呼びなさい!ウチは「アキ」
って呼ぶから。」

これはもう絶対王政である。いや、島田はドイツ育ちだからファシ
ズムと呼ぶべきか?

「は、はい!!美波様!!」

可哀想な明久だが、自分でまいた種である。

「それから、それから・・・」

島田が急に口ごもり始めた。もう終わりなのか。大した事ないな。

「う、ウチの事、あ、愛してるって言うってみて?」

前言撤回。島田、お前はたいした奴だ。このタイミングでそれを言
うとは・・・

「はい、いいます・・・」

最早明久には言語の意味を考える余裕もないらしい。もうこれは機
械だ。

「言わせませんわ!!」

何とか言わせまいとより強く締める美春に、

「言いなさい!!」

と何とか言わせようと締める島田。

「島田、言わせたいなら緩めるよ……って聞こえないか。」

「さあ、ウチの事、愛してるって言いなさい!!」

そして明久が一言

「ハ、ハイ!!ウチノコト、アイシテルツテイイナサイ。」

「……」

「この……ばかあ!!!!」

明久の断末魔が響き渡った。

その日の帰り道……

「なあ、島田？」

俺は島田の真意を聞くために、あえて一緒に帰った。

いつもは姫路と帰るのだが、今日は見当たらなかった。

「なに？謙太？」

「お前、明久のことが好きなんだ？」

俺の言葉に、顔が真っ赤になる島田。

「い、いや？あれはほんの冗談で……」

「ふうん？にしてはすいぶん怒ってたな？」

「い、いや？あれは……」

「まあどつちでもいいんだがな。島田」

「え？」

俺は一瞬ためて、こういった。

「あいつは鈍感だし、人の話を聞かないバカだから、大変かもしれ
ないけど……がんばれよ!!」

「え……うん、ありがとう。謙太って、いい奴なんだね。ウチの
事は美波って呼んで？」

「分かった。じゃあな、美波。」

「え……あ、うん。またあした。」

一瞬美波の顔が赤くなった気が・・・何だ、夕日のせいかな。

第四話（後書き）

どうでしたか？

今回はちよつとオリジナルにしてみました。

もしおかしいところがあつたら、一言ください！！

さてこの次はいよいよAクラス戦です！！

果たして勝つかまけるか・・・

お楽しみに！！

第四・五話（前書き）

なんか時間があるので、オリ話書いちゃおうかな・・・
てきな勢いで書くものなんであんまし期待しないでください。
ちなみに本編とリンクしてます。

第四・五話

むう……

何だこの状況は……

「あれ？起きたんだ？」

そう言ったのは明久だった。

ってマジで何この状況……

俺は記憶の糸を辿った。

（えっと確か……昨日は美波と帰って……

昨日……

俺は家に帰った後、家で色々なことを考えていた。

（美波と姫路に好かれる明久か……俺はどっちを応援すればいいんだ？姫路とは長い付き合いだし、美波には明久の鈍感ぶりにあきらめたとはいえ、応援するようなことを言ってしまったしな……）
そんなことを考えながらふと時計を見ると、時計は8時をさしていた。

「おっと、そろそろ飯買いに行くかな……」

そう思い、家を出ようと玄関に向かった時、丁度玄関のチャイムが鳴った。

「こんな時間に、誰だ……？」

俺がドアを開けると、明久に坂本、秀吉にムツツリーニが立っていた。

「……新聞なら要りません。」

そういって、ドアを閉めようとすると、あわてて明久が止めた。

「ちよっと待って！！あしたはAクラス戦だから、皆で勉強しよう

「と思って。」

「なんだ、そんなことか。」

「やっぱり迷惑だったかのう?」

「いや、秀吉と明久は別に良いが、その他の二人は飯を買ってきてくれ。」

「おい!!秀吉はともかく、どうして明久は良いんだ!」

「冗談だつて!!じゃあジャンケンで負けた二人がいつてきてくれ。」

結局坂本とムツツリーニが行くことになった。

「じゃあ入ってくれ。狭い家だな。」

俺の家は、学園近くのマンションだ。親に頼んで借りてもらっている。

「ここに一人で住んでるの?」

「一人には広すぎる家じやのう。」

「まあ座ってくれ。といつても水くらいしかないか。」

俺はそういつてコップに入つた水を二人に渡した。

「ところで、勉強会つてこんな時間からすんのか?」

「うん。だつてAクラスには姫路さん並に点数が高い人が多いんだよ?」

「だから今日は泊ろうと思つてのう。」

「まあ良いが、親には言つたのか?」

「大丈夫じゃ。わしはきちんと言つて来たぞい」

「それなら良いが・・・おっ、帰つてきたみたいだな。」

そういつて俺は玄関へ向かつた。

あいつらは近くのスーパーでカップめんや菓子を買つてきたようだ。

そのの量を見て明久と秀吉は驚いた。

「いくら人が多いからって、こんなに買う必要はなかったんじゃない？」

不思議そうに聞く明久に、坂本は答えた。

「俺もそのつもりだったんだが、行くときに「レシートを見せてもらうから、横領したらどうなるか分かるよな？」なんて事を言われたから、もらった金全部使ってきたんだ。」

「貰ったとは・・・いくらなのじゃ？」

「確か2万は渡したと思ったが？」

「「2、2万？」」

「ってか、全部使ったのかよ・・・それ、俺の食費なんだけど・・・」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

「ま、まあ、細かいことは気にせずに、中で食べようではないか？」

秀吉が場を取り仕切り、とりあえず、中に入った。

「すまん！！謙太。」

「・・・すまない。」

「ったく、しょうがない。今月分は残りで何とかするか。」

何とか1万は家に残してたので、どうにか今月は持ちそうだ。

「で？とりあえず、何を教えて欲しいんだ？」

俺は坂本たちが買って来たカップラーメンを食べながら、苦手科目を聞いた。

「僕は日本史を・・・」

「ワシは英語が苦手なの・・・」

「俺は物理で頼む。」

「・・・数学。」

「皆別々か・・・じゃあとりあえず1教科に絞らないか？ちなみに俺は、保健体育以外ならそれなりに教えられるぞ？」

「じゃあ数学にしないか？昨日の試召戦争でも、姫路以上の点数だったし。」

「わかった。じゃあこれを解いて、分からないところを教えてください。」

そして俺たちの勉強合宿（？）が始まった。

↳2時間半後↳

「うーん」

俺は大きく伸びをした。時計は11時を指している。

「少し休憩するかのう？」

「たしかにな、謙太も教えてばかりで疲れただろ？」

「じゃあ、さっき買って来たお菓子をたべながら、話でもしようよ。」

「・・・飲み物もある。」

というわけで、俺らは一旦休憩することにした。

「そういえば、お菓子って何を買ってきたんだ？」

「・・・これ。」

ムツリーニが指した先には、大量のお菓子の山があった。

「1種類を1個ずつ買って来た。」

「なんて無駄遣いを・・・」

俺はため息をつきながらお菓子の袋を開けた。

「そっいえばさあ」

明久が話を始めた。

「謙太つて、姫路さんに告白したことがあるんだよね？」

「ん？あれは嘘だ。」

「え？」

「好きだったのは確かだが、告白したことはない。」

俺は嘘をついた。これを攻められるのはいやだったからな・・・

「それより明久よ、飲み物を取ってくれないか？」

「ああ、はい。」

「すまぬ。」

それより・・・さつきから秀吉の顔が赤いのは気のせいだろうか・・・

「そつえば、飲み物つて何だ？明久、一本取ってくれ。」

俺は他の奴らが飲んでる缶に見覚えがなかったため、明久に一本貰った。

（つてこれ・・・酒じゃねえか！！）

一瞬で気づいたが、口には出さなかった

なるほど、秀吉はさつきからこれを飲んでいたら赤かったのか・・・

（これは面白い・・・もつと飲ませて本音を探ろうか・・・）

俺はあえて喉が渴きそうなお菓子を開けて、さり気なく机に置いた。

（15分後）

「明久・・・好きじゃ！！」

「秀吉！？その気持ちは嬉しいけど、どうしたの？」

「翔子・・・」

「・・・」(ブシュッ)

・・・やりすぎた。

この15分を振り返って見ると・・・

最初に壊れたのは秀吉だった。

最初のほうは

「ワシは男じゃー!!」

とひたすら言っていたが、そのうち明久に抱きつき始めた。

その次は坂本だ。

坂本は5分前くらいから遠い目をしながら、

「翔子・・・」

と呟いている。

ムツツリーニはアルコールで妄想に拍車がかかり、勝手に鼻血を流して倒れている。

流石にまずいな・・・

「明久、そろそろ寝るぞ。これ以上はマズイ」

「そうだね。」

「それじゃあ今日はそろそろ寝るか。皆、ついて来てくれ。」

そして俺はまず個室に案内し、

「秀吉、お前はここで寝てくれ。」

「なぬ？ワシは明久と寝るんじゃー!!」

「・・・(ブシュッ)」

「ムツツリーニー!!しっかりしろ!!」

「・・・翔子」

「雄二も!!」

しょうがないな・・・

「じゃあそこに明久と秀吉が寝てくれ。明久、手えだすなよ?」

「分かってるよ!!」

「じゃあ雄二、ムツツリーニ、来てくれ。」

そうして俺たちは床についた。

もっとも俺は、片付けをしていたせいで、寝る時間がほとんどなか

った。

そうだった。そういえばそんなことが・・・

「おい明久、雄二とムツツリー二と秀吉は？」

「あの三人はまだ寝てるよ。」

「そうか・・・明久」

「ん？」

「すまん!!」

俺はそういうと、明久の首を締めて、落とした。

これでどうにか、昨日の記憶は消えてくれただろう。

「さてと・・・起きろ明久」

「ん・・・何で僕ねてんの？」

「さあな、それより、昨日の夜は何があった？」

「えっと・・・忘れちゃったよ。」

（よかった。）

「そうか。じゃああの三人を起こしてくれ。」

「分かった。」

そう言った明久は秀吉を起こしに行った。

そして、「ちよつと秀吉？何で裸なの？ってムツツリー二？大丈夫

か？ムツツリーニイイイ!!」

・・・忘れよう。

こうして俺らの勉強合宿は俺の気苦労だけを残して終わった。

未成年の飲酒は犯罪です。絶対に真似しないでください。

第四・五話（後書き）

なんか大変なことになって終わりました。

ちよつと強引過ぎたかも・・・

とにかく、この記憶は謙太の心の中にしまわれる筈ですので・・・
ちなみにこの話は伏線になっていきますので、次話をおたのしみに
最後に、おかしな所があったら是非一言お願いします!!!

第五話（前書き）

ぐああああああ!!

書いていた小説が・・・間違えてコンセント蹴ったら全部消えちまった・・・

1時間はかかったのに・・・

ちなみに・・・祝3000PV突破です。

皆さんありがとうございます。

第五話

「それでは、Fクラス対Aクラスの5本勝負、一回戦を始めます。今俺たちがいるのはAクラス、これからここで、俺たちにとって最大の戦いが始まる。」

「ところで・・・」

しかし俺は、そのことに集中できずにいた。なぜなら・・・

「何でそんな格好をしているんだ、秀吉？」

秀吉が、ラウンドガール？の格好をしていたからである。

「決まってるじゃないか、謙太！！」

なぜか俺の問いに明久が答えた。

まあろくなことを言わないと思うが・・・

「秀吉以外にラウンドガールをできる人が、ここにはいないじゃないか！！」

ブチッ

「アキ〜？それってどういう意味よ？」

「え？決まってるじゃないか？」

漆黒のオーラを纏った美波に明久が当然のように答えた。

「だって姫路さんは試合をしなきゃいけないし、美波には似合わないぜか左足に激しい痛みがっ！！」

「ウチも試合をするんだけど？」

「・・・ミナミモ、シアイヲスルカラデス」

痛みで日本語がカタコトになっている明久にとりあえず合掌。

（助け舟を出してやるか。一応試合あるしな。）

そう思った俺は、

「・・・ところで美波？」

「ん？」

「試合に行かなくていいの？」

「あ！！そうだった！！ごめん。」

「まあ俺はいいが、早く行けよ。」
「ウン、そうする。」

美波はそういうと、急いでフィールドの中央へ行った。

一回戦は、優子対美波だった。

「茶番劇は終わったかしら？」

「あら？秀吉？どうして女装してんの？」

「……」

あ、美波が地雷踏んだ。

「……じゃないわよ。」

「え？」

「私はあんなオカマじゃないわよ！！！」
うわあ。やっちゃった。

「少なくともアンタよりは女っぽいわよ！！！」

「何ですって！？弟にラブレターの数負けてる奴が、何いってんのよ！！！」

「え〜っと、早く始めてください。」

そこを高橋先生が止めに入るが……

「人に関節技かける男みたいな奴（弟にルックス負けてる奴）に
言われたくないわよ！！！」

……

あ、二人とも自爆した。

「そ、それでは、二人とも召喚してください。」

二人は無言で頷き、

「……サモン。」

召喚したがいいが、どちらとも一歩も動かない。

「それじゃあ引き分けということ・・・」
結局、高橋先生の判断により、引き分けになった。

「大丈夫？美波？」

明久が心配したように尋ねる。

「う、うん・・・」

「それでは二回戦を始めます。選手、前へ」

「そんじゃ、行って来るかな。」

「がんばれよ、佐藤。」

「がんばって、謙太！！」

「・・・がんばって。」

ちなみに最後のは意気消沈（精神崩壊）した美波である。

「教科はどうしますか？」

「教科は物理で。ところで、俺の相手は？」

あたりを見渡すと、見覚えのないメガネっ子がたっていた。

「アンタが、俺の相手？」

俺の問いにメガネっ子は小さく頷き、自己紹介した。

「Aクラス所属、佐藤美穂です。サモン」

美穂の召喚獣はなかなか特徴的だった。

鎖鎌を持ち、さながら女山賊といったところか。

「佐藤か、俺と同じ苗字だな。まあ関係ないな。そんじゃサモンッ

と」
俺が唱えると、ドラゴンが姿を現し、その背にまたがる俺の召喚獣が現れた。

Aクラス、佐藤美穂、389点

Fクラス、俺、445点

「・・・嘘ッ!!」
そういつた佐藤は俺に向かって鎖鎌を投げつけてきた。

「甘いッ!!」
俺は槍で鎖鎌を払い、それから腕輪の能力を使った。

「やれ!! 焼き尽くせ!!」
巨大化したドラゴンが、炎を吐きそれに当たった美穂の召喚獣が消え去った。

「そんな・・・」
「勝者、Fクラス。」

その言葉を聞いた俺は、さっさと皆のいるところに戻った。

「それでは第三回戦を始めます。選手、前へ」

「・・・(スクツ)」

無言で立ったムッツリーニがフィールドの中心へ向かった。

「教科はなんにしますか？」

「・・・保健体育。」

(まあここは余裕だろうな。)

俺は安心していたが・・・

「Aクラス、工藤愛子です。」

相手は愛子か・・・

俺に一抹の不安がよぎる。

「キミ？保健体育が得意なんだってね。ケド僕もかなり得意だよ？

それも、『実技』でね。」

ブシユウウウウ

「ムッツリーニ!!！」

倒れたムッツリーニに、明久が駆け寄る。

「よくもムッツリーニに・・・、なんて酷い事を・・・卑怯だぞ!

！」

確かに、ムッツリーニにはキツイ仕打ちだな・・・

「キミが選手交代する？でも勉強苦手そうだね。保健体育でよかつ

たら、教えてあげようか？それも・・・」

愛子が再びあの言葉を口にする。

「実技でね。」

バシユウウウウウ×2

「吉井君?!！」

「アキ!？」

倒れた明久にウチの紅二点が近寄る。

「フツ・・・望むところ・・・」

「余計なお世話よ!!アキにはそんな機会永遠にないから!!！」

「ゴホツ、そうです。よ、吉井君にはこんりんじゃい必要ありません！」

答えようとした明久を遮り、姫路と美波が反論する。

「……にしてもひどい言われようだな。」

「ってか姫路はどうした？やけに顔が赤いが？」

「二人とも、明久が泣いてるぞ？」

「ひどいよ二人とも……ってムツツリーニ？」

「……大丈夫、これしき……」

その時、ムツツリーニの鼻血で工藤がコケて、スカートの中が……
ってノーパン！？

ブシューウウウウウウウウウウウウウウウウ……

ムツツリーニは倒れた。ってかこれ、放送禁止じゃね……

「アツ、今日パンツはいてない……」

「ってことはまさか、ムツツリーニは……」

顔を真っ赤にして走り去っていく工藤と、顔を輝かせる明久。

「明久、そんな顔すると……ってもう遅いか。」

明久は美波に締められていた。

ちなみに、これも引き分け扱いになり、今は1勝2分け。

「次は姫路だが……あれ、姫路？」

「どうしたの瑞樹!？」

姫路は、顔を真っ赤にして倒れていた。

「ちよつと頭が……」

「早く保健室に……!」

「分かった。先生、この勝負、俺らの負けでいいから、進めていてくれ。」

「分かりました。それでは最後の勝負です……」

俺は、姫路と（ついでに）ムツツリー二を担いで保健室に急いだ。

「どうですか？先生。」

俺は保健の先生に二人の容態を聞いた。

「康太君も姫路さんも、大した事はないわ。今日一日安静にすれば大丈夫だと思うわ。」

「そうですか・・・」

（良かった。）

俺は二人（主に姫路）が無事なことをしって、安堵の息を漏らした。

「それじゃ俺は戻るんで。後、よろしくお願いします。」

「はい。分かりました。」

俺はそういうと、保健室を後にした。

改めてAクラスに戻ると、ちょうど結果発表の時間だった。

「では、限定テストの結果を発表します。」

高橋先生の言葉に、全員が集中した。

「Aクラス代表、霧島翔子・・・97点」

その結果に、Fクラスは沸き立ち、

「・・・おおおおお！！！！」

「やったああああ！！」

「Aクラス代表は、満点を逃したぞ！！」

「今日からこの設備が、ウチらのものになるのね！！」

「読みどおりだな！！坂本！！」

Aクラスは落胆した。

「まさか代表が・・・」

「百点を逃すなんて・・・」

「続いて、Fクラス代表、坂本雄二。」

しかし、そう簡単にAクラスの設備が俺らのものになる訳なかった。

「53点」

「……え？」

この結果に、AクラスもFクラスも目を丸くした。

（まさかとは思ったが……）

こうして、俺らの机はみかん箱になった……

第五話（後書き）

疲れた・・・

2回もブツチしてしまつた・・・

tkこれほとんどオリ話になつちやっています。

とりあえず、試召戦争編は次で最後です。

といつても次はあとがきみたいなもんですけど・・・

その次は明久デート編になっていきますのでお楽しみに。

最後に・・・この小説を読んでくださっている皆様、これからもよろしく願います！！

第六話（前書き）

これで試召戦争編は終わりです。

このペースだと2ヶ月くらいでアニメ分が終わりそうです・・・

もし終わったら、原作分を書いたりしようと思います。

つてかもう少し主人公に特徴を持たせないとな・・・

ご意見募集してます。

第六話

「どういうことだよ雄二!!」

明久が坂本に詰め寄った。

「0点とかなら名前の書き忘れとかで納得できるけど・・・」

「納得するなよ・・・」

「何だよ53点って!!」

「いかにも、俺の全力だ。」

詰め寄った明久をかわず様に、坂本は開き直った。

「自分が100点を取らないと、作戦が成り立たないだろう?」

「まさか、あんな伏兵が潜んでいるとは、意外だった。」

「自分が伏兵になってどうする!!」

珍し的に射たツツコミをする明久。その時・・・

「・・・雄二」

霧島がやって来た。

()(まさか、この前の約束を果たすため?!)()

俺と、明久と、ムツツリー二が同時に反応した。

「・・・約束」

「やっぱりか!!!」

思わずツツコミが口に出してしまった。

「わかった。何でも言え。」

雄二がそういうと、姫路のほうに歩いてくる霧島。

「・・・(シャキーン)」

それにあわせて無言でカメラを磨きだすムツツリー二。

さらに、

「い、いけないよ!!霧島さん!!女同士だなんて・・・」

とレフ版を掲げながら注意する明久。

「行動と発言が伴わない。それはもうお前の属性なのか?」

俺は呆れながら突っ込む。

俺がそんなこと考えていると、明久が姫路に言った。

「え？」

「前より酷い設備になっちゃって・・・」

「いいえ、いい教室ですよ？」

「え？」

「私、大好きですよ！！このFクラス。」

「姫路さん・・・」

黙って聞いていた俺は、ふとこんなことを思った。

（たしかに、Aクラスとの設備の差は月とすっぽんだが、悪いクラスじゃないな・・・

「それと・・・」

「さーてアキ！！クレープ食べに行くわよ！！」

姫路が言おうとしたことを邪魔したのか、美波が明久と手を組みながら言った。

「え？それは週末って約束じゃ・・・」

「週末は週末、今日は今日」

「そんなあ！！2度も奢らされたら、今月の僕の食費があああああ
ああ！！」

「ダメですよ！！」

今度は姫路が明久の手を取りながらこういった。

「明久君は、私と映画を見に行くんです。」

「ええ！？姫路さん、それは話題にも上がってないよ！？」

「はい。今決めました！！」

「ほらはやく！！クレープ食べに行くんでしょ！！」

「吉井君はどんな映画に連れてってくれますか？」

「そんなあ、僕の生活費が！！栄養があああああ！！」
・・・

（バカだな・・・）

明久は気づいてないみたいだが、これは立派な「デート」のお誘いである。

「あいつはもしかしたら、本当のバカなのかもしれんのかな……」

「……（コクン）」

秀吉とムツツリーニも同じ気持ちらしい。

それと同時に、
（姫路もこんなアプローチができるようになったんだ。）
俺は幼馴染を見ながら、少し悲しくなった。

その帰り道……

俺はムツツリーニと帰っていた。

「そういえばムツツリーニ？」

「……」

「愛子のスカートの中見たんだよな？」

「……」

ブシュ……

バタ……

「あ、言わなきゃ良かった。」

倒れたムツツリーニを負ぶって帰っていると、偶然愛子に会った。

「あ、佐藤君と……ムツツリーニ君!？」

あきらかにあわてている。

「どうしたんだ？そんなに慌てて。お前らしくないぞ？」

「い、いや……。さっきあんなとこ見られたんだから、慌てない

ほうがおかしいでしょう？」

「ああ、そういうことか。」

俺らはその後他愛もない話をしながら歩いた。

（そういえば、愛子と二人きりになったことなかったな……）

愛子が引越してきてから、俺、優子、愛子の三人（+久保）でしゃべる事は多かったが、

その頃の俺らはどっちかと言うと優子が話して、俺と愛子が聞き役になるという感じが多かった。

必然的に愛子との二人きりでの会話は無いということが多かった（気がする。）

「あのさ、佐藤君？」

「？」

俺がそんなことを考えていると、愛子が話しかけてきた。

「私・・・ああいや、ボクのこと、どう思う？」

何だいきなり？

とは言わなかったが、様子がおかしかった。

いつもなら、ニコニコと笑って放送禁止用語を言うような奴だ。しかし、明らかに今日はいつもとは違う、おかしな感じだった。どっちかと言うと照れてるといっつか・・・珍しい行動だった。

「ねえ？聞いている？」

「んあ？」

「相変わらずボクの話の話を聞かないなあ・・・」

「ああいや、聞いているけど・・・？」

「じゃあなんといいたでしょう？」

「『ボクのことどう思う？』って言ったろ？」

「ああ、聞いてた・・・で、どう思うの？」

「え〜っと・・・」

よく考えたらコイツのことあんまり考えたことなかったな・・・愛子といえは・・・スタイルはいいし美人だし、頭も良いな・・・（つてか俺は、何を考えてるんだ？）

疲労と昨日の寝不足でだんだん頭が回らなくなってきた。

「どう思うの？」

「スタイルいいし、美人だし・・・って何いつてんだおれは!？」

「え・・・？」

「愛子・・・今のは忘れてくれ。今、頭が回らないんだ・・・」

「・・・佐藤君」

「？」

「・・・あの、今の話、続けて
どうしたんだ？」

明らかに様子がおかしい・・・

「大丈夫か？熱でもあんのか？」

「いや、そんなんじゃない・・・」

「佐藤君がわた・・・ボクのことどう思っているのかな？」と思って
さ！..!」

「ふくん、そうか。」

そんな意味不明な会話をしていたら、愛子の家が近くなってきた。

「じゃあな、愛子」

「あ、うん。またね・・・」

心なしか愛子の顔がさびしそうに見えた。

ん？何か忘れてる・・・

「・・・」

ムツツリーニだ・・・

第六話（後書き）

・・・フラグ立てるのムズ!!
つてか読者に丸分かりじゃん!!
まあいいか・・・
これからの目標は、目指せPV5000です。
それでは又次の話で・・・
・・・疲れた。

第七話（前書き）

祝、5000PV!!

結構たくさんの方が見てくれてるみたいで嬉しいです!!

これからもがんばります!!

第七話

Aクラスとの試召戦争が終わり、その日の放課後。

皆遊んだり、次の試召戦争へ向けて勉強したり、異端者を駆つたり（？）と思いきいの放課後を過ごしていた。

その中で、俺、秀吉、ムツツリーニの三人は、ある映画館へ向かっていた。

なぜかというと、無理やりデートに連れて行かれた明久が、

件名：助けて・・・

本文：僕の食費が二時間で無くなっちゃう・・・

などというメールを送ってきたからである。

「しょうがない、皆で明久にカンパしに行くか。」

「そうじゃの。そうでもせんと明久が生きていなくなるからの。」

「・・・許すまじ。」

という、あまりかみ合っていない会話をして、俺らは学園の近くにある映画館へ向かった。

俺は、

（邪魔しちゃ悪いか？）

と一瞬思ったが、このままじゃ明久が死んでしまうので一応行くことにした。

「それにしても、どうして明久は気づかんのかのう？」

映画館へ向かう途中、秀吉がそんな疑問を口にした。

「それは、鈍感だからだろ？」

「それはそうなのじゃが、さすがにあそこまでされたら普通気づくのではないか??」

「・・・明久、自分はそんなのに縁がないと思ってるんだろ?」
「なるほど・・・」

そんな会話をしていると、目的地の映画館に着いた。

「吉井君、これ見ませんか?」

「へえ、良いんじゃない?」

映画館に入ると、そんな会話が聞こえてきた。

「そ・・・そう。じゃあ僕は良いから、二人で見に来てよ。」

「「ええ!?!?どうしてですか?」」

やはり明久は渋っているようだ。

「じゃあアニメにする?」

「そうじゃなくて・・・」

「要するに、金がないんだろ?」

「そう、もう食費が・・・って謙太に秀吉?」

「まったく、何をしておるのじゃ?」

明久は、俺らを見て驚いた。

「自分であんなメール送っておいて、何驚いてるんだ?」

俺はそういいながら、秀吉、ムツツリーニ、俺が金を入れた封筒を渡した。

「ありがとう・・・ってこれは?」

「お前が食費がどうか言ってたから、金。」

「ええ!?!?ありがとう!?!」

そういつて急いで封筒を開ける明久。

入っていたのは約5000円

「やった!!!これでこの一ヶ月は・・・」

「ここで使ってしまったえよ?そうしないと返却してもらっ。」

「そんな・・・」

俺の言葉でがっくりと肩を落とす明久。

「とにかく、今日を楽しめよ。」

「ありがとう、謙太。」

「姫路たちはどの映画を見るかに夢中で、俺らに気づいてないから、今のうちに。」

「え？一緒に見ないの？」

「そう問いかけてくる明久。」

「俺らが一緒にいたら、迷惑だろう？」

「そ、そんなこと・・・。」

「とにかく、もう俺らは行くからな。楽しめよ。」

「わしらのことは気にしなくて良いぞ、明久よ。」

「・・・。」

「う、うん。ありがとう。三人とも」

と言って俺らが映画館を出ようとしたとき、異様な光景を目にする。両手を拘束具に繋がれている男に、それを無理やり引きずる女。

坂本に、霧島だ。

「・・・どうした、坂本？」

流石にこの雰囲気では皮肉は言えず、とりあえず事情を尋ねた。

「・・・謙太。」

「？」

「男とは、無力だ。」

すべてを悟ったかのように遠い目をする坂本。

「そ、そうか。なかなかお似合いじゃないか。」

「・・・お前の目は節穴か？」

「・・・すまん。」

「・・・分かればいい。」

雰囲気流され、俺まで肩を落とす。

「・・・雄二、どれが見たい？」

俺たちのやり取りを静観していた霧島が、坂本に聞いた。

「早く、自由になりたい。」

「・・・じゃあ」

坂本の希望(?)を聞いて映画を探す霧島。そして・・・

「・・・地獄の黙示録、完全版。」

「ちよつと待て!! それ3時間23分もあるぞ!!」
霧島の希望をツッコむ坂本。

「・・・2回見る。」

「一日の授業より長いじゃないか!!」

「・・・授業の間、雄二に会えない分の、う・め・あ・わ・せ」

理不尽な霧島の主張を聞いて、坂本が出口のほうへ向かい歩きだす。

「・・・やっぱ帰る。」

「・・・今日は、返さない。」

そういつてスタンガンを取り出す霧島。

「な、何だ翔子、それ・・・ガッ、バツ」

「・・・学生二枚、2回分」

気絶した坂本を連れて、店員にチケットを頼む霧島。

「はい。学生一枚、気を失った学生一枚、無駄に2回分ですね？」

・・・合掌。

次の日・・・

俺は玄関で二人の話を聞いていた。

「映画館って、恐ろしいね・・・」

「・・・そうだな。」

「もしあのお金そのまま僕の物になっていたら、この一ヶ月はリツチな生活が送れたのに・・・」

「まあいいじゃないか。明久はタダでデートを出来たんだし。で、坂本は？」

「え？雄二もいたの？」

「俺はあの後・・・目が覚めると繋がれた牛が殺されるシーンだった。」

「え……」

「隙を見て逃げ出そうとしたら、また電気ショックを食らって気を失い、目が覚めたら、また牛が……」

「ホントに2回見たんだな……」

「2回も見たんだ……」

「又逃げようとしたら、また気を失って、永遠に牛を殺すシーンで目が覚めるんじゃないかという強迫観念に襲われ、目が、開かなくなっただ。」

「永遠に映画の最初は見れないんだね……」

「つてか金の無駄だな……」

俺らは朝からテンション最低になった。

「ハア、次の仕送りまでどうしよう。」

「俺らが渡した金じゃ足りなかったのか？」

「いや、昨日お金が浮いたからと思って、またゲーム買った。」

「じゃあ他のゲームを売ればいいじゃないか？」

「なんて事を言うんだ！！何物にも変えがたい、優秀な作品たちを、食べ物なんかで替えられる訳ないじゃないか！！」

「おまえ、自業自得って言葉を知ってるか？」

俺らは同時にため息をついた。

「雄二と謙太は、余裕があるからそんなことをいえるんだよ！！僕なんか、命にかかわるんだよ？」

「明久、俺はともかく、コイツは……」

俺がそう言おうとした時、坂本が明久の肩をたたいて、こっぴつた。

「明久、お前は俺に命の危険がないと思ってるのか？」

「……ごめん。」

「分かればいいんだ。」

「まさか、これ以上設備が酷くなるとはな・・・」
今の設備は、みかん箱に、腐った畳で、座布団すらないと言う状況だ。

「それと言うのも・・・全部貴様のせいだ!!」
そういつて明久は雄二を指差した。

「皆が力を合わせた結果に文句を言うとは、無粋な奴だな？」

「雄二が一人で負けたんだらう？」

「・・・確かに・・・」

明久の意見に、皆が賛成した。

確かに今回は、俺が1勝、美波とムツツリー二が引き分け、姫路が不戦敗と、実質坂本以外は一人も負けてない。しかし・・・

「けど、アキが言えることじゃないでしょ？」

「・・・確かに・・・」

そもそも明久はこの勝負に参加していない。従って言う権利はない。

「けど、美波様も悪口を言い合っただけで、勝つてな頭蓋骨が割れるように痛い!!!」

「何よ!? 美波様って、バカにしてんの？」

明久はアイアンクローをかけられた。

「自分がそう呼べって言ったんでしよう!？」

「普通に美波でいいの!!」

「仲がいいのか悪いのか、よくわかんないな・・・」

「・・・(シュッ)(シュッ)」

その時、ムツツリー二が、美波を撮ろうとして一言。

「・・・その技、面白くない。」

「ハア、ハア」

やっと開放された明久が、痛そうに頭をさすった。

「だけど・・・」

そして再び雄二を指差す。

「コイツは作戦の要なのに、小学生レベルの問題で100点を取れなかつたんだよ!？」

「坂本君を攻めちゃダメですよ。私、この教室、好きですよ?だって、この教室、好きな席に座っていいし・・・」

講義を続ける明久に、姫路が言った。

姫路の追い討ちに、明久は戦意を失っていた。

その時、

「キーンコーンカーン」

と言つまつたく機械的な感じのしないチャイムがして、鉄人が現れた。

「あれ?鉄人?何でいんの?」

事態を把握できてない皆を代表して、俺が聞いた。

「鉄人と言つな。」

最初にそういつた後、鉄人は続けた。

「お前らがあまりにもバカなので、少しでも成績向上を目指そうと、今日から、福原先生に代わって補習授業担当であるこの俺が、Fクラスの担任を務めることになった。」

「なっ・・・」

俺たち全員が啞然とした。

「鉄人が、担任・・・?」

「そうだ。これから、容赦なくビシバシいくから、覚悟しとけよ!

!後、鉄人と言つな、西村先生と言え。」

「・・・なにいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!?」

ここから、俺たちの地獄の学園生活が始まった。

第七話（後書き）

投稿が遅れました。

頭使うと眠くなります。（小学生か・・・）

これからもがんばるので、よろしくお願いします!!

（・・・眠い。）

第八話（前書き）

相変わらず一日1000PVもくるので嬉しいです!!
これからもこつこつがんばります!!

第八話

「ハア・・・」

明久がため息をついた。

今は昼休み。俺たちは屋上に来ていた。

「これじゃ毎日が鬼の補習になるようなものじゃないか・・・」

なぜかと言うと、試召戦争に負けて、ただでさえ最低の設備を落とされた拳句、本来なら補習担当である鉄人が担任になるという、最早いじめとしか思えない待遇になったからである。

「そうだな・・・」

「どうにかならないもんじゃろうか。」

俺と秀吉が言った。確実にこれでは身が持たない。

「そうだ!!」

明久が何かを思いついたみたいだ。

「どうした?」

「もう一回試召戦争をすればいいんだ。」

「ハア・・・」

俺たちは一斉にため息をついた。

「それは無理な話だ。」

「どうして?」

「試召戦争に負けたクラスは、3ヶ月間宣戦布告が出来ないルールだ。」

「3ヶ月・・・」

明久はガツクリと肩を落とした。

「しかし、どうしてそんなルールを作ったのかのう?」

不思議がる秀吉に、俺が説明した。

「負けたクラスが宣戦布告をしつづける様な、戦争の泥沼化を防ぐためらしい。」

「へえ」

秀吉と明久が頷いた。

「それに、3ヶ月なんてあっという間だ。」
坂本が言った。

「その間に、新しい作戦でも立てるさ。」

「ハア・・・」

そうは言っても、なかなか立ち直れないみたいだ。

すると、ムツツリーニが明久の肩を叩いて、こういった。

「・・・いい事だつてある。」

そういいながら見せたのは、秀吉のラウンドガール写真だった。

「・・・1枚500円」

「かつたあああああ!!」

「・・・毎度あり。」

明久は、惜しげもなく金を出した。

「お前、食費は?」

「ぬあああああ!!」

「そこ、悩む必要ないだろ・・・」

「そうだよね!!男なら、後悔しない!!」

「勇者だな・・・」

「・・・そういう意味じゃないと思うがのう。」

「これで、次の送りまで一日カップラーメン一個確定だ・・・。」
落ち込む明久に、秀吉が追い討ちをかける。

「明久よ・・・お主、何か忘れておらぬか?」

「え?」

そこに、姫路と美波がやってきた。

「あ、ここにいたんですね?」

「ねえねえアキ、週末の待ち合わせ、どうする?」

「まち・・・あわせ?」

何の事だか分かっていない明久に、二人は詰め寄る。

「忘れたとは言わせないわよ?クレープ奢ってくれるんでしょう?」

「え!?それって・・・昨日ので終わりじゃ・・・。」

「昨日は昨日、約束は約束!!」

「私も一緒にしたいんですが・・・」

そこに姫路が口を挟んだ。

「実は、吉井君と一緒に見たい映画があるんですが・・・」

明久は絶望に満ち溢れた顔をしながら言った。

「僕の・・・食費がつ!!」

「ハア・・・」

はたから見ればモテモテなのに、そのことにまったく気づいていない明久に、皆がそれぞれため息をついた。

そして一言。

「「お前、^{おぬし}バカだろ（じゃろ）?」「」

その日の放課後・・・

「ねえ。」

背後から声をかけられ、ふと後ろを向くとそこには優子が立っていた。

「（謙太、本当に私がB.Lだつて事、誰にも言っていないみたいね。）

「声を潜めながら、優子は言った。

「ああ、当たり前だろ?」

「そっか。ありがとう。」

「・・・?」

「お礼といっちゃ何だけど、今度、一緒に映画でも行かない?」

そう言つて、優子は映画のチケットを2枚取り出し、1枚を俺に渡した。

「別に良いが・・・何で俺?」

「だからあ、お礼つて言つてるでしょ?」

「本音は？」

「たまたまチケット当たったから、使わないと持っていたいな〜と
思っで……っって言わせるな!!!」

「ふ〜ん？なるほど……」

「で？行くの？行かないの？」

若干怒った優子が聞いてきた。

断る理由がなかったたので、俺はOKした。

「分かったよ。行くよ。」

「そっか、よかった〜、無駄にならなくて。」

「本音でてんじゃねえか……」

「細かいことは気にしないの!!!」

「で？いつなんだ？」

「今週の週末。」

「そっか……」

俺は明久たちの事を考えていた。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。」

「じゃあ、10時に映画館で。」

「分かった。じゃあな。」

俺は手を振って優子と別れた。

そして週末。

俺は5分前に待ち合わせの場所、映画館に行った。

「遅いわよ!!!」

「悪い……ってまだ5分前じゃないのか？」

「女を待たせたら負けよ!!!」

「はいはい・・・」

お前は女なのか？という疑問は心にしまった。

「で、何見るんだ！？」

「もちろんこれよ！！」

そういつて優子が指差したのは、BLの恋愛映画だった。

「・・・優子」

「なによ？文句あんの？」

「いや、こんな映画見ているとこ、学園の奴に見つかってもいいのか？」

俺がそういつと、優子は不敵に笑った。

「そうしたら、アンタに無理やり見せられたつて言えばいいわ。」

「待て、そうしたら俺がBL扱いになるじゃねえか・・・」

「良いじゃない？」

「いいわけあるか・・・」

「それに、謙太とは幼馴染とでも言っておけばいいしね。」

「ハア・・・もあいよ。好きにしろ」

坂本、俺も気づいたよ。男とは、無力だ。

「じゃあいこう！！」

「はいはい・・・」

俺は、優子に引きずられながら、スクリーンへ向かった。

「あー面白かった」

「あんな気持ち悪いのが面白かったのか？」

「男には分からないわよ。」

「一生分かりたくないな・・・」

映画を見終わった俺たちは、そう言いながら映画館のロビーへ向かった。

そこには明久一行が

「あれ？謙太？」

「ん？明久か？」

「どうしてここにいるの？しかも秀吉と？」

「秀吉じゃない。優子だ。コイツに連れらあだだだだだ！！」

俺が事の経緯を語ろうとしたら、優子に口をつねられた。

「（話したら殺すわよ）」

「（分かったからとりあえず離せ！！）」

「優子さんと謙太くんって付き合ってたんですねえ・・・」

その時、俺らのやり取りを見た姫路が、ポツリともらした。

「「付き合ってたない！！」」

「にしては、ずいぶん仲いいわね。」

「「ノノノ」」

「あ、赤くなってるよ」

「「な、なってるない！！」」

「「「お幸せに！！」」」

「「う、うるさい！！」」

そういつて俺らは映画館からダツシユで逃げた。

その途中に捕まった坂本を見かけたが知ったことか！！

「ふう・・・」

「なんか疲れたわね・・・」

俺らは、映画館の近くの喫茶店で休憩していた。

「まあしばらくはあいつらも出てこないだろ・・・」

その後、無言の時間が10分ほど続いて、俺が口を開いた。

「そついえば、お前誰かと付き合わないの？」

「えっ!?!」

突然の俺の質問に、驚いたような様子を見せた優子。

「だって……」

「？」

「私、腐女子だし……」

「そんなこと気にしない奴なんて、山ほどいるだろ？たとえば……」

「

「それにつ、私好きな人いるから!!」

「え？」

初耳だった。そんな話を聞いたことなかった。

「誰だ？」

「それは……」

「いけないなら良いが……」

俺のその言葉に、何故か優子は驚いた。

「え？気にならないの？」

「気にはなるが、あんまし無理させたくないしな……」

「／／／」

俺の言葉に、少しだけ優子が赤くなった。

「何赤くなってるんだ？」

「べ、別に!!そういうえば、私の友達の話聞いてくれない？」

「良いけど……？」

いきなりそう言った優子は、俺の返事の後、優子は話を始めた。

「……私の友達ね？好きな人がいるの。それも高校に入ってから

「

「ふん」

「……聞く気ある？」

「有るけど？」

「ならいいや。でね、その人はね、ちょっと問題児だけど、とって

も優しい……らしいんだ。」

「それで？」

「だけどその好きな人には、私の友達がその人を好きになったのよ

りずくと前から、好きな人がいるの。」

「そうか・・・」

「・・・質問なんだけど、もし謙太だったら、その人に告白する？」

「え・・・」

いきなり話を振られたので、少し驚いたが、自分が思ったことをそのまま答えた。

「俺は・・・するかな。」

「ホントに？」

「ああ。だつてさ、もしかしたら、その人はもう吹っ切れてるかもしれないだろ？」

これは、自分の経験が元になっている。といつても、俺は自分の事を言っているだけだが。

昔から姫路が好きだったが、もう吹っ切れ、姫路の恋愛を応援することになっている。

「そつか・・・」

俺の言葉に、納得する優子。

そして、

「私ね、実は・・・」

ヒュン！！

優子が何かを言おうとしたとき、背後からフォークが飛んできた。

「え！？何これ！？」

「知らん！！」

俺が見た方向には、フォークを構えた美春、驚く明久、泣きそうな姫路、あたふたしている美波がいた。

「あいつら・・・」

学校外でも問題を起こすか・・・

俺は、知らぬ振りをした。

「ほつといていいの？」

「ほつとけばどうにかなるだろ？」

「そんなもんなんだ・・・」

「で？何を言おうとしていたんだ？」

「え？い、いやなんでもない。」

「そうか。」

優子がそうだったので、俺は再びあいつらを見た。

にしてもあいつら、これ以上騒ぎを起こすとめんどくさいな。

「・・・ちよっと手伝ってくる。」

「え？」

「わりいな優子。今日はありがとな。」

「あ、ウン。こっちこそ。」

「もう1つお願いがある。ここの金は払っておいてくれ。」

「え？ちよ、ちよっと!?!」

「後でちゃんと返すから!?!」

そういつて俺はあいつらの騒いでいるところへ言った。

「・・・!?!」

優子の声がかきこえたが、何を言っているのか分からなかった。

第八話（後書き）

なんか文がおかしい気が・・・
まあとにかく、後半に続きます。
お楽しみに！！

第九話（前書き）

順調にPV伸びています!!

この調子でがんばります!!

そういえば、テストで謙虚って書くとところに謙太って書きちゃった・

・

俺もこいつら（明久）と同レベルか？

第九話

「おい!!」

「うわあつ!!」って謙太か・・・」

俺は襲われかけていた明久の手をつかみ、店の外へと逃げた。

「あつ!! 僕のクレープ!!」

「クレープなら今度奢ってやるから走れ!!」

「待ちなさい!! 豚野郎共!!」

そう言いながら逃げる俺らと追う清水。

「俺まで豚扱いか・・・」

「まあしょうがないよ。そういえば、姫路さんたちはどうするの?」

「どっかに逃げるから、学校かどっかで待つといてもらえ」

「分かった。」

そういつて携帯でメールを送る明久。

「で? どうやって逃げるの?」

「しょうがないから、これを使う。」

「え? まさかそれって・・・」

俺が取り出したのは、美波の写真×20枚だ。

「・・・なんでそんなの持ってるの?」

「気に食わんが、ああ言う奴らから逃げるため、ムツツリーニから買った。」

「・・・へえ、ムツツリ商会のお得意様なんだ。」

「・・・俺はムツツリなんて大嫌いだ。いつかムツツリ商会はつぶす。」

「言ってることとやってる事が違うよ?」

「それ以上言うな・・・」

俺は、美波の写真をばら撒いた。

「あ!! おねえさまの写真ですわ!!」

美波の躍起になって集める美春。

「この間に逃げるぞ。」

「う、うん。」

・・・すまん、美波。

美波の尊い犠牲のおかげで、何とか逃げ切った。

そして学校。

「お疲れ、アキ。」

「お疲れ様です。吉井君。」

「あ、うん。」

「・・・俺に言葉はないのか」

何とか逃げ切った俺たちは、学校に集まっていた。

「ハア・・・で？この後どうするんだ？」

「えっと、今日はもう遅いから、帰ろうと思う。」

逃亡に時間をかけすぎたせいで、もう夕方になっていた。

「今日は楽しかったわね。ありがと、アキ。」

後ろめたさで美波の顔を直視できない俺たち。

その時、

「見つけましたわ！！おねえさま！！」

俺たちが美波を直視できない原因が現れた。

「み、美春！？」

「また、面倒なのがきやがったな・・・逃げるぞ！！」

「そうだね、逃げよう！！」

そういつて俺らは走った。

（コイツはどっかに監禁しとかないとメンドイな・・・待てよ？監禁？そうか、あの手があった。）

俺はあることを思いつき皆に言った。

「みんな！！先生を捜してくれ！！」

「謙太に姫路さんがいれば余裕だね!!」

明久がそう言った。

確かに、俺と姫路はAクラス並みの点数を誇っていて、負けるはずがない。

俺と姫路の召喚獣が特攻した。

「清水さん、ごめんなさい!!」

姫路が攻撃を仕掛けようとしたその時、

「そうは行きません!!」

美春はそういい、召喚獣が姫路の攻撃を避け美波に攻撃を仕掛けた。

「え!?ウチに!?!」

清水は何故か美波に止めを刺した。

「メンド臭エな・・・」

俺はそう言い放ち、清水の召喚獣を後ろから槍で突き刺した。

「0点になったものは補習!!」

鉄人の声が鳴り響き、何処からかやってきた鉄人に連れて行かれる美波に清水。

「今日はお休みなのに・・・」

「おねえさまとなら、鬼の補習も天国です!!」

「げ・・・私はイヤアアアア!!」

「これが目的だったのか・・・」

とりあえず、今日2度目の犠牲になった美波に合掌・・・

そして、廊下には俺ら3人と竹内先生だけになった。

「竹内先生、ありがとうございます。」

「どういたしまして。」

竹内先生にお礼を告げて、俺たちは玄関へ向かった。

「それじゃあ、俺はもう帰るから。」

俺はそういつて、あいつらを二人だけに見てみることにした。

「え？あ、うんまた明日。」

「さようなら、謙太君。」

俺は片手を振ってわかれた。

帰る途中に、

(優子には悪いことをしたな・・・今度BL映画のチケットでもやるか?)

などということを考えていたら、偶然優子に会った。

「おお、優子」

「さっきの後始末はついたの？」

「なんとかな・・・」

そういつて俺たちは一緒に帰った。

「にしても、たとえ幼馴染とはいえ、デートで女を置いて帰るってどうかと思うけど?」

「悪かったよ・・・」

「まあいいんだけどね。」

「そのお詫びといつたらアレだけど、また今度、映画に行くか？」

「え?」

「今日はあることがあつて、あんまり楽しめなかつただろ?」

「あ・・・うん。別にいいけど?」

「それじゃ、とりあえず来月でいいか?明久じゃないけど今月、食費がやばいしな。」

坂本たちの横暴のせいで、いまの所持金は7〜8000円前後だ。

これであと10日ほど過ごさなくてはならない。

「来月・・・うん、いいよ。」

「OK。それじゃ、また連絡するから、見たいBL映画決めとけ・・・つてその関節はそっちには曲がらなくあああああ!!!」

「大声で言うな!!!」

「分かった、もう大声でBLなんていわないから離せ!!!」

「すでに言ってるじゃないの!!」

「グアアアアアアアアア!!!!」

こうして、俺の騒がしい休日が終わった。

次の日・・・

「おお明久。」

俺は玄関で明久に会った。

「ってどうした？」

明久は玄関で死んでいた。

「・・・これ」

そういつて渡してきたのは、一通の手紙と写真だった。

吉井君へ

いきなりこんな手紙が届いて驚いているかもしれませんが。

しかし自分の本当の気持ちを伝えたくて、筆を取りました。

いつも明るく陽気な吉井君の姿を見ると、心が癒されている自分に気づかされます。

いつかきつとあなたに、この気持ちを伝えたいと思います。

どうか受け取ってください。

僕の大好きな吉井君へ・・・

「ラブレターの自慢か？」

「違う！！もつとよく見て！！」

「何処を？」

「最後の行だよ！！」

「僕の大好きな吉井君へ・・・って男か？」

「そうだよ・・・」

「それに写真のほうは、お前の女装写真だな。」

「うっ・・・」

うなだれる明久の肩に、いつの間にか来ていた坂本が手を置いていた。

「明久」

「・・・ん？」

「がんばれよ。」

「いやああああああ！！！！」

第九話（後書き）

今日はちょっと美時まめに書きました。

そろそろオリ腕輸出したいな〜なんて思ってます。

もうアイデアもあるんですよ？

というわけで、早く出せたら良いな〜

それでは早くオリ腕輸出せるようにがんばるので、応援お願いします！！

第十話（前書き）

とりあえず・・・

祝！！合計1万PV！！

これからもがんばります！！

第十話

「明久」

俺は明久を呼んだ。

「・・・」

「どうしてグラウンドに倒れているんだ？」

「鉄人にやられた・・・」

明久は、グラウンドでうつ伏せになっていた。

「鉄人？ああ・・・またパシられたんだな・・・」

「どうして僕ばっかり!!」

「・・・」

理不尽な怒りを表す明久に、俺は言った。

「観察処分者だからじゃないか・・・？」

今日は日曜日。普通なら学生は休日を満喫している筈である。しかし、

「今日はここまで。帰ったらちゃんと復習しておくように。」

「・・・はい。」

俺たちFクラスは補習をしていた。

「ところで吉井君、その格好・・・？」

姫路が明久に言った。

「いや・・・ちよつと復讐をね・・・」

「返り討ちにあったんだろ？」

「そのようじゃな。」

どうやら明久は、あの後鉄人に再び挑んだらしい。

グウウウウ・・・

その音と共に明久は、みかん箱に突っ伏した。

「ああ・・・おなかすいた・・・今日は散々働かされたから余計に腹ペコだよ・・・」

「便利なようで、不便な召喚獣ね。」

美波が言った。その時、

ガラガラガラ・・・

「・・・雄二、お昼。」

「翔子？」

扉のところには、霧島が立っていた。

「どうして？お前らAクラスには補習なんて無いだろ？」

確かに、Aクラスどころか、Fクラス以外には補習なんてあるはずが無い。

すると霧島は、参考書を取り出していった。

「・・・一人で自習してた。雄二がいるなら日曜日でも来る。」

「来なくてイイ。」

内心嬉しいはずなのに、何故か坂本は否定した。そして霧島が続けた。

「雄二がいないなら、平日でも来ない。」

「それは問題あるだろ・・・」

霧島翔子、やっぱり変人だな。

どうやら、この学園の学年主席には、変人しかならないみたいだ。

「そういえば、明久の昼食は？」

俺は明久に聞いた。

「これ。」

そういつて明久は弁当箱を取り出した。

「明久は今日は弁当かのう？」

「へえ、珍しいな。」

「中身は？」

「これだよ。」

コロコロコロ・・・

「明久、これは？」

中に入っていたのは、角砂糖くらいの塊が一個だけだった。

「1/67のカップめん」

「？」

「半端な大きさだな・・・」

「カップめん、半分の半分の半分の半分の半分。」

「それって・・・」

俺は違和感に気づいた。

いや、ココにいる明久以外の全員が違和感を感じていた。

「明久、それは・・・」

「「1/64だ!!」」

「明久に分数の計算は鬼門じゃのう・・・」

「食事がこれだけとは、わびしいな・・・」

そして明久は、1/64のカップめんを食べようとした。

「こんな飯に入らない。」

俺はそういつて明久のカップめんを食べた。

「あつ!! 僕のカロリーが・・・」

「こんなもん食うなら学食行くぞ。」

「え?でもお金が・・・」

「そんなぐらい俺が奢ってやる。」

「え!?! いいの!?!」

「ちよつと待つて!!」

そういつたのは美波だった。

「ど、どうせなら、ウチの弁当分けてあげようか?」

「え? いいの?」

「けど・・・美波の飯がなくならないか?」

「いや・・・今朝、ちよつと作りすぎちゃって」

そういつてバツクを漁る美波。

「良かったな明久、まともなものが食べそうじゃねえか。」

喜ぶ明久。

しかし、美波の様子がおかしい事に気づくまでに、それ程時間がからなかった。

「あれ？おかしいな・・・」

「み、美波・・・まさか・・・」

「ごめん、家に忘れてきちゃったみたい。」

「そんな!!」

「・・・折角作ってきたのに」

明らかに落ち込む美波。

「まあ、しょうがないよ!!」

「アキ・・・」

美波を励ます明久。

(こういう所がモテるんだろうな・・・)

俺は明久をみて、そう思った。

「お弁当を作るなんてそんな女の子らしいことを美波が出来ると思つた僕の頸椎が砕ける!!」

前言撤回。どうしてコイツがモテるんだ神様よ・・・

「持つてくるのを忘れただけって言ってるでしょう!!」

美波は明久にバックドロップを仕掛けた。

そして美波のスカートの前にムツツリーニが

「み、み、見え・・・」

なんて事を言いながら覗いていた。

お前にはそれしか脳が無いのか・・・

その傍らで、どうやら美波のスカートを覗こうとした坂本が、目を押さえて悶えていた。

どうやら霧島に潰されたらしい。

「ハア・・・」

俺は大きなため息をついた。

このクラス、ホントにバカばかりだな・・・

騒動が終わりかけたとき、小学生くらいの女の子がやってきた。

「あの〜バカのFクラスってここですか？」

「は、葉月？どうしたのこんな所に？」

そういつて立ち上がる美波。

そして、そのスカートを、反射的に覗こうとして蹴られたムツツリ
一二。

「え？葉月って・・・」

「あ！！バカのお兄ちゃん！！」

「すごいな明久！！」

坂本が突然そういつた。

「お前のバカが、全国まで知れ渡っているとは・・・」

「せめて町内といつて！！」

「町内は否定しないのかよ・・・」

「やっぱりバカのお兄ちゃんです！！」

そういつて明久に抱きつく葉月。

「葉月、なんでアキの事を知ってるの？」

美波が尋ねた。

俺は、別に興味が無かったから聞き流していたが・・・

「だって、葉月のお嬢さんだもん。」

え・・・？

ちよつと待て、まさか・・・

「・・・明久？まさかお前、小学生にまで・・・？」

「お兄ちゃんとは、結婚を前提にしたお付き合いをしてるんです。」

「「「ええ！？」「」」

「ちよつとアキ？うちの妹に何を・・・」

「これより、異端審問を始める。」

美波が質問したときには、そこに明久はいなかった。

明久は、教室の端のほうで、異端審問を掛けられていた。

Fクラスには、恋愛を許さない、FFF団という組織があり、明久は彼らによって異端審問を掛けられていた。

「被告、吉井明久は……」

なんか始まったな……

「そういえば、飯食ってねえな……」

もうメンどかつたので、俺は教室から出て、購買部へ向かった。

購買部に行き、パンを買って戻ると、教室に明久たちの姿が無かった。

廊下に美波がいたから、あいつらの場所を聞いた。

「……アキたちなら、屋上にいるんじゃない？」

「どうした、美波？らしくないな。」

「あのね謙太、このお弁当、実はアキのために作ったの。」

「……だろうな。」

「けど、恥ずかしくって素直に渡せなかったの。」

「さつきまで見てた。」

「そしたらね、瑞樹もお弁当を作って……」

「なっ！？姫路が？」

「うん。だから、素直に渡せばよかったなあってね。」

「……美波」

「ん？」

「その弁当、取っとくべきだ。」

「どうして？」

「あいつはきつとカロリーを摂取できないはずだ。」

「え？」

「だから、あいつのために取っというてやれ。それじゃ……！」

俺はそう言っつて美波と別れた。

「マズイ・・・」

俺は屋上へと急いだ。

姫路の唯一の弱点。それが料理だ。

小学校のころ、姫路が俺に弁当を作ってくれたことがある。

そのときに、姫路は弁当の隠し味に、水酸化ナトリウムを入れたことがある。

本人曰く、「酸味がまして美味しくなる」らしい・・・
量が少なかつたから大事には至らなかつたが、それでも俺の内臓に深刻なダメージを与えたことは確かだ。

「今ならあいつ・・・硫酸でも入れかねないぞ!!」
俺が屋上に着いたとき、そこに姫路はおらず、倒れた4人の勇者がいた。

「遅かつたか・・・」

しかし、まだ弁当は1/3くらい残っていた。

コイツを残しておく、姫路はショックを受けるだろう・・・

俺は良心の声を聞き、その弁当を食べ、天に召された。

第十話（後書き）

疲れた・・・

ようやく姫路の必殺弁当をネタに出来ました。

これからもがんばりますので、どうかお願いします。

おかしい所や疑問点には、どんどん感想ください!!!

第十一話（前書き）

相変わらず結構なPV数です！
この調子でいけたらいいなあ・・・

第十一話

美波目線

「ハア・・・」

ウチは、噴水に座って多めに作ったお弁当を見ていた。

「折角作ったのに・・・正直に食べてって言えばよかったな。」

確かに、ウチがこんな事をするのは、ガラじゃないと思ったし、アキに直接渡すのは照れくさかったけど・・・

その時、

「意外だった・・・姫路さんにこんな苦手科目があるなんて・・・」
その声はアキのものだった。

(今なら、渡せるかな・・・?)

一瞬渡そうとしたけど、やっぱり出来なかった。

もう、瑞樹のお弁当食べちゃってるもんね・・・

「余計に腹が減っちゃったよ・・・」

え?もしかして、ウチの弁当を食べるために、瑞樹のお弁当を食べなかつたの・・・?

「アキ・・・」

「バカのおにいちゃ〜ん」

「は、葉月ちゃん?」

葉月?どうしてここに・・・?

「お姉ちゃんドコへ行ったか知らないです?」

「そういえば・・・見なかったな。」

グウウウウ

「お昼は?」

「色々あつてカロリーは摂取できなかつたよ・・・」

「じゃあおなかペコペコです?」

「ハア、美波のお弁当もらえてたらな・・・」

「お姉ちゃんのですか?」

「うん。どんなお弁当作ったんだろうつて。たべたかったなあ。」
「やっぱりそう。」

アキは、ウチのためにわざわざ瑞樹のお弁当食べなかつのかも・・・
「・・・よし!!」

ウチは決心して、アキのところへ行くこととした。

「・・・アキ？お弁当・・・」

「お弁当食べましょ？おねえさま!!」

「みつ、美春!？」

なんてタイミングで出てくるのよこの子は!!

「探しました、おねえさま!!腕によりをかけた美春特製のお弁当
召し上がってください!!」

「ど、どうしてここにいるのよ!!Dクラスは補習ないでしょ?」

「おねえさまがいるなら日曜日でもきます!!おねえさまがない
なら平日でも来ません!!」

「どうしてこの学園には常識が歪んでる子ばかりなの!？」

「おねえさま!!美春と一緒に、幸せな午後のひと時を過ごしまし
よう!!」

「かまわないで!!」

こうして、再びウチはアキにお弁当を渡すチャンスをなくした。

謙太目線

「ウツ・・・」

迎えに来た天使に、「人違いです」と告げ、無理やり連れて行くこ
うとした天使達を少し大人しくさせてから、俺は屋上で目を覚ました。
日が少し傾いている。

どうやらあの後、結構な時間がたっているみたいだ。

「ふう・・・何とか生きていたか。」

体のあちこちが痛い、何とか生還した喜びを噛み締めつつ、俺は

下に降りて行った。

「そういえば、昼飯まだだったな。」

姫路の弁当のせいで、胃の中のパンが溶かされたから、胃には何も入っていない状態だった。

「購買部は・・・もう閉まっているだろうな。」

しょうがない。今日は昼飯抜きで我慢するか・・・

そう思ったとき、俺のケータイが鳴った。
誰だ？

そう思いながらケータイの表示を見る。

「木下優子」

そして俺はケータイに出る。

「もしもし？」

『やっとうた・・・』

「どうした？秀吉はいないぞ？」

『あいつに用があるなら直接電話するわよ。』

「冗談だ。用事は何だ？」

『そっけないわね・・・』

「元からだ。で？」

『いや、大した用事じゃないけど・・・お昼ごはん、食べた？』

「食べたうちには入らない。」

『？』

「コツチの話だ。」

『つまり、食べてないって事？』

「そういうことだ。」

『よかった・・・』

「それがどうかしたか？」

『いや、今日学校で自習してるんだけど、一緒に弁当食べない？』

「弁当？ああ、別に良いけど」

『そっか、じゃあAクラスに来て。』

「わかった。そんじゃ。」

俺は電話を切り、Aクラスへと向かった。

「おじやましま〜つす。」

「やっと来たわね。」

「電話を切ってまだ1分もたってないだろ？」

「確かにそうね。」

「分かったんならいい。」

そういつて俺はAクラスを見渡した。

「にしても・・・折角の休日だというのに結構人がいるな。」

まあ俺なら、クーラー代を節約するために、ここでノートパソコンいじってる可能性はあるが。

「そりゃあ、Aクラスだもん。」

「・・・カンケーないだろ。」

「それより、早くお弁当食べよう？」

「そうだな。」

そういつて俺は誰のかわからない席に着き、優子もその隣に座った。

「そういえば、優子って料理できなかったよな・・・？」

「練習したのよ!!！」

「五月蠅い。」

「・・・まあ食べてみれば分かるわ。」

そういつて優子は俺に弁当を差し出した。

「・・・ふうん。」

「ね？おいしいでしょう？」

「・・・美味しい。」

「やっぱり!!！」

「本当に上手くなったな。」

「て言うか、嬉しいのは嬉しいんだけど、まったく料理をしない謙太に言われたくないんだけど・・・。」

「俺はやれば出来る男だからな。」

「冗談はいいから。」

「・・・冗談じゃねえ」

「ふうん？」

「・・・」

俺は、そんな他愛もない会話をしながら、優子の弁当を食べていた。

明久目線

・・・今日は色々あったな。

葉月ちゃんが来たり、姫路さんの必殺弁当食べたり、鉄人から補習を受けたり・・・

とりあえず・・・

「おなかへったあ・・・」

時刻はもうすぐ4時。

昼間ほとんど食べていない僕にとってはもっとも空腹がきつい時間だった。

「さすがに、もう誰もいないかな・・・？」

そう思っただけで周りを見渡すと、美波が弁当を捨てようとしていた。

そして、美波は少し悲しそうだった。

(美波・・・)

僕は決心し、美波のところへ向かった。

「待って!!」

「アキ？」

「それ、捨てちゃうの？」

「なによ？」

「なにっつて、えっと・・・」

僕は説得する方法考えた。そして、最近流行っている地球温暖化に

ついで言えば納得してくれろと思ひ、美波に言った。

「資源を無駄にするのは感心しないな!!」

「は？」

「地球の温暖化のためにも、食べ物を粗末にしちゃいけないんだよ？もつたいないことをすると、もつたいないお化けが出るし、エコな環境のためにも、資源は有効活用しなきゃいけないと・・・僕は思う。」

美波はボーっとしながら聞いていたが、僕の話が終わると、笑い出した。そして、

「はい。食べるの？」

「え？」

「たべないの？」

良かった。これでかなりのカロリーが摂取できそうだ。

「じゃ、じゃあ貰つところかな。資源は大切にしないと・・・」

僕がそういつたら、突然美波がぶつかってきて、また小さく笑った。

「・・・美波？」

そして、美波は僕を見ながら、こういった。

「バーカ」

その表情は、とても明るかった。

第十一話（後書き）

疲れた・・・

毎回言ってる気がするけど疲れた・・・

流石にサッカーの後にこれを書くのはキツイな・・・
それでもがんばります！！

第十二話（前書き）

ようやく腕輪が出せます!!

今回は、結構な原作ブレイクになると思いますが・・・

まあがんばります!!

第十二話

「何だコレ？」

俺たちは、教室の壁に貼られたある掲示物を見ていた。

「文月学園主催、豪華賞品争奪オリエンテーリング大会・・・？」

「なかなか面白そうじゃのう。」

「豪華賞品つてのが引つかかるな・・・」

告知もされていなかった突然の学校行事に、みんなはそれぞれ違った感応をしていた。

「賞品は何だ？」

「ここに書いてあるものみたいじゃぞ。」

「えーつと・・・」

そこに書かれていたものは、

学食一年分の食券

新作ゲーム

フィーとノインとアインの限定ストラップセット

学食デザート一年分

など、なかなか豪華なものだった。

その中で、一際異彩を放っている商品があった。

「シークレットアイテム・・・？」

シークレットアイテムという記載以外何も情報が載っていないその賞品が、どうやらこの大会の目玉らしい。

そして、シークレットアイテムには二種類あるのか、シークレットAとシークレットBがあった。

「なかなか面白そうだな・・・」

俺たちが大会について話していると、明久がやってきた。

「あれ？どうしたの？」

「なんかやるらしいぞ。」

明久の問いに、坂本が答えた。

「なんかって・・・？」

明久は、そういつて例のポスターを見た。

「文月学園主催、豪華賞品争奪オリエンテーリング大会!？」

「学園長が言つてたのは、このことだったのか・・・」

「あのクソババアに会つたのか？」

「まあチヨットね・・・」

「ふうん。」

「そんなことより賞品はここに書いてあるわよ？」

そこに書いてある豪華賞品を、食い入るように見つめる明久。

「あっ!!！」

「どうした？明久？」

「フィーのノインとアインの限定版ストラップ!!！」

「・・・確かに人気だが、そんなものが欲しいのか？明久？」

このキャラクターはは女性や子供向けで、男に利用価値があるとは思えない。

「い、いいだる別に!!それより、どうやったらコレをもらえるの!？」

「分かつたから落ち着け」

そういつて俺たちは近くの席に陣取った。

「コレが学園の地図じゃ。」

そういつて秀吉がRPGの宝の地図みたいなものを出してきた。

「この中から探し出すのか」

「要するに、宝探しゲームみたいなもんだ。」

「僕、RPGで宝箱さがすの得意なんだ」

明久がどうでもいい自慢をしてきたがスルーし、話を続けた。

「しかし、このクソ広い学園を闇雲に探すのは無理があるだろ……？」

「そのために、座標のヒントはある。」

「そして、コレが試験問題じゃ。」

「え……!？」

秀吉のその言葉に、独り言を続けていた明久が我にかえり、絶望した。

「試験問題と座標にどういう関係が……?」

「それはだな」

俺の質問に坂本が答えた。

「試験の答えが、賞品のある場所の座標になっていて、そこに隠してあるチケットが、商品の引換券だ。」

「そ、それじゃあ、テストが解けなきゃもらえないじゃないか!!」

「しかも早い者勝ちで、他のチームとぶつかったときは、召喚獣バトルで奪いとつてもいいそうじゃ。」

「何から何まで不利じゃないか……」

坂本と秀吉の説明にさらに落ち込む明久。

「そうだ!! 姫路さんと組めば……」

明久が姫路を探そうとしたとき……

「みんな席につけ」

そういつて鉄人が来た。

「何気に、オリエンテーリングのチーム分けを発表するぞー」
チーム分けは、

吉井明久、坂本雄二、木下秀吉

姫路瑞樹、島田美波、ムツリーニ土屋康太

佐藤謙太

は？

「どういうことだ鉄人？」

「鉄人というな！！！」

「俺のチームメイトは？」

俺が当然の疑問をぶつけると、何故か呆れたように首を振る鉄人。

「お前にチームメイトなんて付けたら、それこそ何しでかすか分からんからな。」

「ふざけんな！！！」

「それとも、ずっと補習室にいるか？」

「クツ・・・」

ここまで言われたら、引き下がるしかなかった。

「・・・分かった。」

「そうか。」

「この大会、メツチャクツチャにしてやるよ！！！」

「何！？」

「ハアツハツハ！！俺を敵に回したことを後悔するんだな！！！」

そいつって問題をバツクに突っ込み逃げて行く俺。

「待て！！！」

しかし、流石にバツクを持って鉄人と正面対決は避けたい。

「喰らえ！！！」

そいつって俺はお笑い芸人がよく使うローションをばらまいた。

「ぬおっ!!」

そういつて盛大にコケる鉄人。

「ダッセエ格好だな!!じゃあな!!」

俺はそれを見届けた後、絶対に鉄人がこれないところに来た。

吉井目線

「ヤバイな・・・」

「どうしたの雄二?」

雄二は、謙太が逃げた後、何故か顔を真っ青にしている。

「謙太は、一度切れると何をするか分からない奴だ。もしかしたら、賞品の総ナメを目論んでいる可能性がある。」

「そうか・・・」

普段優しい人ほど、切れると怖いって言うけど・・・

確かに、謙太は鬼の形相で去っていったな・・・

「どうする?」

僕は雄二にどうするかを聞いた。

「こうなったら、木下に手伝ってもらおうか・・・」

「木下って、優子さん?」

「そうだ。あいつなら、もしかしたら止めれるかもしれない。」

「確かにそうだね。」

「そして、俺たちも一応止めてみるか。」

「うん!!」

雄二の言葉に僕は頷いた。

「それじゃ行こう!!」

そういつて、僕たちは謙太を探した。

ちなみに、鉄人は途中でオールスター○謝祭みたいに、つるつると滑っていていい気味だった。

謙太目線

俺は、一人で問題を解きまくっていた。

「ええつと・・・硫化鉄の元素記号は・・・FeSだったよな」

そういつて俺はどんどんと問題を埋めていく俺。

「それじゃ、そろそろ出発するか。」

そういつて俺は立ち上がった。ちなみにここは、屋上の危険区域（Fクラス真上）

何故危険かというのと、体重が重い人が乗ると、一瞬で崩れるからだ。

「まず一個目は、X座標が・・・」

そんな感じで順調に賞品を集める俺。すると、

「フツフツ・・・お前をつけてよかった。」

俺の後ろには、須川率いるFクラスメンバーの3人だった。

「お前一人なら負けない！！死ねや佐藤！！」

「ハア・・・」

正直関わりたくなかったが、しょうがないので、
殺虫スプレー

「ぐあああああ！！目が！！」

「そこでクタバツテロ。」

そういつて俺は、再び宝を探し始めた。

「もうめぼしい物は集まったな・・・」

俺は、集めたカプセルを見てそういつた。

「後は、シークレットアイテムか・・・」

そういつて、俺は再び問題を解いた。

そして次の座標へいこうとしたとき、

「ちよつと謙太!!」

「謙太君!! 独り占めはよくないです!!」

「・・・(コクコク)」

そういつて姫路小隊が現れた。

「そんなのルールに無かつたぜエ？」

俺は敢えて挑発した。

「もう許さない!! サモン!!」

そういつて奴らは召喚してきた。

「チツ・・・メンドクせエな・・・」

そういつて俺は、召喚した。

数学、 姫路瑞樹 / 4 1 1、 島田美波 / 1 8 6、 土屋康太 / 3 1

数学、 佐藤謙太 / 6 3 3

「・・・ええ!?!」

俺の点数を見た奴らは驚愕した。

「どうしてそんな点数を・・・?」

「さあな? とりあえず、クタバレッツ!!」

そういつて、俺は一瞬で片付けた。

「覚えてなさい!!」

「酷いです!! 謙太君!!」

「・・・許すまじ」

三人とも負けた悪党のような台詞をはいて、逃げて言った。

「・・・続きをやるか。」
俺は手に持っていた問題の座標の位置に向かった。

そこには、明久小隊がいた。

「やっと見つけたぜえ？謙太？」

「謙太、これ以上はやらせないよ！！」

「観念するのじゃ！！謙太！！」

何で俺は目の敵にされているんだ？

まあいい、そんなことは関係ないからな。

「サモン！！」

「ちよつとメンドイが、サモン」

日本史、坂本雄二／199、吉井明久／60、木下秀吉／77

日本史、佐藤謙太／420

「やっぱキツイか・・・」

「残念だったな。それじゃ、しばらく寝てな！！」

これまた一瞬で片付け、商品をゲットした。

シークレットアイテムBか・・・ラッキーだな。

俺は再び、危険区域へと舞い戻った。

こんだけ集まったし、賞品集めはもういいか。

そう思った俺は、放課後まで居眠りすることにした。

ちなみに俺が集めたカプセルは11個、ちょうど賞品の半分だ。

「ほとんどイラネエモノだな・・・」

大会は結構邪魔できたし、まあいらねえのはは明久にやればいいか
そう思つて横になり、俺は目を閉じた。

そして俺は深い眠りに落ちた。

P r r r r P r r r r

「何だ・・・？」

携帯の着信で、俺は目が覚めた。

ディスプレイには、

「木下優子」

と出ていた。

「何だ？」

『謙太・・・』

「用がないなら切るぞ。」

『ちよつと待つてッ!!』

「何だよ？」

『な、何でそんなに怒ってるの?』

「・・・俺のプライドが傷つけられたからだ。」

『そう・・・』

「用事はそれだけか？」

『えつと・・・』

「なんだ？」

『私と、召喚獣で勝負しない？』

「・・・理由は？」

『だって、勝ったら賞品が私のものになるでしょ？』

「どうせ俺はいらんから、欲しいならくれてやる。」

『そうじゃなくて!!』

「心配するな、俺は半分しかとっていない。」

『ひ、一人で半分も？』

「どうかしたか？」

『・・・』

「・・・心配するな。」

『えっ?』

「俺はお前らに怒ってるわけじゃない。鉄人に一泡吹かせたかっただけだ。」

『そうなの？私てつきり・・・』

「そういうことだ。じゃあな。」

『えっ!?!ちよつとまっ・・・』

ブツッ

俺は電話を切った。

そして、

キーンコーンカーンコーン

「終わったか・・・」

俺の一人勝ちとも言える結果で、オリエンテーリング大会は幕を閉じた。

そして夕方、大量の賞品と、大量の課題が俺の机に乗っていた。

「さつきはすまなかつたな」

「まあしょうがないよ!!!」

「それにしても凄いな・・・」

「これ全部、一人で集めたんじやのう・・・」

「そういえば、お前らも賞品ゲットしたんだよな？」

「うん!!!これで、葉月ちゃんも喜ぶよ!!!」

なるほど、それで大方理解できた。

コイツは、美波の妹のために、ストラップを探していたんだ・・・

「それに、シークレットアイテムも入ってたし。」

「お前らもゲットしたのか。で、何だった？」

「これだよ!!!」

そういつて、明久は腕輪を見せてきた。

「それか？」

「うん!!!『黒金の腕輪』。」

「で、能力は？」

「見てて!!!『アウエイクン!!!』」

明久の合言葉で、召喚獣フィールドが展開された。

「なるほど、凄いな。だが、秀吉と坂本は？」

「バカにしか使えないみたいで、俺らのはぶっ壊れた。」

「なるほど、それも凄いな。」

「でしょ!!!そういえば謙太のは？」

「いつとつくケド褒めてねエから・・・」

そういえば・・・まだ俺のシークレットアイテムが何かが分かってなかったな。

「俺のは今から見る。」

そして、シークレットアイテムの箱を開けた。

「・・・金色の腕輪」

「さしずめ、『黄金の腕輪』と言った所だろ。」

「使ってみてよ!!!」

「ああ、わかった。サモン」

俺は、明久のフィールドで召喚した。

「合言葉は、『シンクロ』・・・？コレってまさか？」

俺が合言葉を唱えたたん、召喚獣が光り、俺と召喚獣は一心同体になった。

「何だコレ、すげエな！！」

「なにがおきたの？光っただけ？」

「俺と召喚獣は、今完全に召喚獣とシンクロしている。」

「どういうこと？」

「つまり、一心同体ということだ。」

「それって・・・」

「今なら、お前よりも上手く使いこなせるぜ！！」

「物ももてるのかのう？」

「ほらよ！！」

「謙太にその能力なら、鬼に金棒だな。」

「けど、そしたら痛みもフィールドバツクどころじゃないんじゃない？」

「そこは不安だが、まあコレならいいぜ！！」

俺は、召喚獣と感覚を共有している事に高揚感を覚えながら、召喚を解除した。

「これじゃ、ますます謙太が手ごわくなるじゃん・・・」

「だな！！」

こうして、俺は最強とも言える腕輪を手に入れた。

第十二話（後書き）

やっとオリ腕輸出せた!!

これでバトルシーンが面白くなりそうです!!

それではまた次回!!

第十二 五話（前書き）

1日2話投稿

今回はオリ話です

オリ腕輪についての事を書こうかな・

第十二 五話

突然だが、俺たちは今、学園長室にいる。

腕輪のテストという名目で、呼び出されたのだ。

そのテストとは、

「アウエイクン!!」

明久がフィールドを出し、

「サモン、そしてシンクロ!!」

俺が腕輪を使い、ある召喚獣と戦うという簡単なものだが、

「おい・・・どういっつもりだ、クソババア」

「クソババアとはずいぶんな言い草だねクソガキ」

俺の相手は、

「言っておくが、テストだからといって手加減はせんからな。」

鉄人だった。

「・・・この前の恨みを晴らすつもりか？」

「教育者がそんなことするはず無いだろう？」

「お前が教育者なら、子を持つ親はみんな絶望するだろう。」

「無駄話はいいから、早く始めな。」

俺たちの冷戦にババアが割って入った。

「失礼しました、それでは行くぞ!! サアアモオオン!!。」

その言葉と共に、鉄人の召喚獣が現れた。

「ウルセエ」

俺は、そういつつ鉄人の召喚獣に槍を突き出した。

その攻撃をよけながら、鉄人の召喚獣も攻撃してきた。

俺は、それを避けつつ、ドラゴンに炎を吐かせる。

「ふん、なかなかやるな。」

「・・・お前、教師をなめてるだろ？」

「さあな。」

ちなみに点数は、

数学、佐藤謙太 / 655

数学、西村宗一 / 711

正直言つて強え・・・
勝てるかどうかはかなり微妙だった。

「どうした？大見得切つてその程度か？」

「フン、笑わせるな。」

俺は、痛そうだから使いたくなかった技を使った。

「くらえッ!!！」

俺は正面からぶつかりに行った。

「やけになつたか？」

そういつた鉄人は、俺を思いつきり攻撃してきた。

その時、俺はギリギリで左にかわし、攻撃態勢に入ろうとした。

「ぐっ!!！」

右脇腹を鉄人の攻撃がかすめ、意識が飛びそうなほどの痛みを負ったが、何とか持ち直し、俺は思いつきり突いた。

「チエ、チエツクメイトだ・・・」

「それはどうかな？」

「なにつ!!？」

数学、佐藤謙太 / 211

数学、西村宗一 / 183

「・・・まだクタバラナカッタノカ」

痛みのせいで、そろそろ言語能力が怪しくなってきた。

「流石に痛そうだな？もうやめるか？」

「・・・バカニスルナ」

そういつて俺はドラゴンにまたがり、再三攻撃を仕掛けた。

「バカの1つ覚えみたいに!!！」

そういつた鉄人の攻撃はドラゴンを貫いたが、俺にはダメージがなかった。

「・・・オワリダ」

そういつて俺は鉄人に止めをさした。

数学、佐藤謙太 / 35

数学、西村宗一 / 0

「いよっしよあああ!!！」

そういつた俺は深い眠りに落ちた。

「・・・夢？」

俺が目を覚まし最初に見たのは、見慣れない天井だった。

「ここは・・・保健室？違うな。」

そして俺は体を起こした。

「イテテッ！！」

右脇腹に激しい痛みを感じ、夢じゃないと実感した。

「そうか、本当に鉄人に勝ったんだな・・・」

それと同時に、あの腕輪の強さ、そして恐ろしさも感じた。

ダメージもフィードバック以上で、まともに食らってたら確実に意識飛んでた。

「・・・むやみには使えないな。」

そして、俺がベッドから出ようとしたとたん

「起きた？」

その声と共に、優子が入ってきた。

「・・・」

「どうしたの？」

「何故ここにいる？ツつうか、ここ何処だ？」

その質問に、優子は答えた。

「クスツ、寝ぼけてるの？ここはね、先生たちの仮眠室。そして、

私は明久君から連絡を受けて看病しに来たの。」

「看病・・・」

「勘違いしないでよ？べ、別に来なくなかったけど、明久君に言われたし、一応来てみたの。」

「そうか、ありがとう。」

「・・・ッ！！」

優子は顔を背けた。

「と、とにかく、大丈夫なら早く出ることね。」

「・・・何故？」

「鉄人が面白いことになってるから。」

「補習、受けてるのか？」

「そうよ！それも高橋先生から。」
それは面白い。

俺は痛い脇腹をさすりながら、廊下へ出た。
すると・・・

「すげえぞコイツ！！Fクラスのクセに鉄人を倒しやがった！！」

「何でこんな人がFクラスなの！？」

「とりあえず胸上げだあ！！！！」

何故か俺はA〱Fクラスの全員に祝福されながら、教室へ向かった。

「胸上げて・・・俺、腹痛いんだけど・・・」

そんな俺の主張も空しく、俺は胸上げされながらFクラスへと連れてかれた。

そしてFクラスでは、

「やるじゃねえか、謙太」(坂本)

「ワシは本当に見直したぞい。」(秀吉)

「すごいわね、謙太！！」(美波)

「すごいよ！謙太！！」(明久)

「・・・賞賛に値する。」(ムッツリーニ)

「謙太君・・・流石です。」(姫路)

「・・・すごい。」(翔子)

「キミにはかなわないよ・・・」(久保)

「さっすがだね〱謙太君！！」(愛子)

「美春、あなたなら・・・」(美春)

「・・・よくやった、佐藤！！」(Fクラス)

つとまあこんな感じで、とにかくお祭り騒ぎだった。

そして優子は、

「おめでとう！！謙太！！」

といって抱きついてきた。

「イテテテ！！おいっ！！FFF団から逃げるのめんどいんだぞ！！」

「・・・今日は許す！！」

「ええ〜・・・」
そして、文字どつりお祭りが始まった。
まあ、こういうのも悪くないかな・・・
俺はそんなものを感じながら、祭りに参加していた。
ちなみにテストはただの報復だったらしい。
やっぱりな・・・

余談であるが、この後俺のファンクラブが出来たらしい。
「けい○んか!」
なんて突っ込みも空しく、ムツリ商会には俺のプロマイドが
出ることになった。

ムツリ二・・・印税よこせ

第十二 五話（後書き）

つかれたあ！！！！

今回は完全オリ話です。

ちよつと無理があつたかな？

とにかく、これからもがんばりますので、応援お願いします！！！！

第十三話（前書き）

なんかもうすぐネタ切れしそうだ・・・
というわけで！！（何がというわけだ・・・ってかデジャヴ）
これから少し内容濃くして、オリ展開の回数増やすので、よろしく
お願いします！！

第十三話

俺と明久は、明久の家でゲームをしていた。

「そういえば、坂本は？」

「雄二なら、買い物から帰ってきて、シャワーを浴びに行ったよ？」

「シャワー、ねえ・・・」

「どうしたの？」

俺は、明久の家では日常茶飯事になりつつあることを聞いた。

「お前、水道代とガス代払ったのか？」

「あ、ガス代払うの忘れてた・・・」

「まあ坂本ならどうにかなるだろ？」

「けど、冷水シャワーの浴び方知らないと・・・」

その台詞とともに、坂本が凄い形相でやってきた。

「何だここのシャワーは！！」

「そういえば、ガス代払ってないから今は水しか出ない。」

「先に言えや！！」

「けど、普通温度確かめるだろ？バツカだな」

「んだとお！？」

「まあ落ち着いて！！」

俺と坂本の会話に、明久が割って入った。

「まず、心臓から離れた手や足に先にかけてから、徐々に心臓へと・

・・・」

「誰が冷水シャワーの浴び方を聞いた！？」

「ってかその様子だと、浴びなれてるな・・・」

冷水を浴びたはずなのに、熱くなっている坂本に、明久が続けた。

「何でそんなに熱くなってるのさ？そうだ！！冷たいシャワーを浴

びて、冷静に・・・」

「浴びたから熱くなってるんだ、ボケエ！！」

「・・・とりあえず服着ろよ。誰もお前の裸なんて見たくない。」

素っ裸で凄んでいる坂本に、取り敢えず服を渡した。

「誰のせいで見せてると思ってるんだ!？」

「・・・自分のせいだろ？」

「何!？」

「明久がガス代を払わないことを予想しなかったお前が悪い。」

「何気に酷い事いっね・・・」

「そうか・・・そうだったな・・・」

「分かったんならいい。」

「・・・って、それただの責任転嫁だろ!!」

「バレたか・・・」

「せきにんてんか・・・?」

再び切れる坂本に、それをめんどくさがる俺に、責任転嫁が分からない明久。

「それに・・・」

一旦落ち着いた坂本が続ける。

「ガスは止まつてるし、食える物は何にもねえし、どうやって生きてんだ?」

その言葉は怒りを通り越して、呆れが入っていた。

「失礼だなあ・・・ちゃんとカロリーになるものはあるよ?」

そういつて明久は机の上を指差した。

「・・・は・・・?」

俺と坂本の反応がかぶるのも無理はない。

そこにあつたのは、砂糖とサラダ油だけだった。

「確かにカロリーにはなるが・・・」

「俺にはサラダオイルを飲む趣味はねえ。」

流石にこの生活は酷い。

いつ体を壊すか分かったもんじゃない。

つてかむしろ生きてることが不思議だ・・・

「冷蔵庫にはなんかあるのか?」

「どうせ空っぽだろ?」

俺らは冷蔵庫に向かいドアを開けた。
入っていたのは、保冷剤だけだった。

「……」

「ホントに空っぽとは思わなかったな……」

「空っぽじゃないよ!!」

「……じゃあお前、保冷剤食べるのか?」

本当に、どうやって生きているんだこいつは……?

「ばっかだなあ、食べるわけないじゃないか!!」

その後、明久は衝撃的な台詞を口にした。

「それは、飲むんだよ?」

「「は?」」

再び、俺と坂本の声がかぶった。

「あはは、冗談だよ!!」

「お前が言っと、冗談には聞こえないからやめろ……」

その後、俺たちは食事の時間にする事にした。
ちなみに、俺と坂本が買ってきたものは、

坂本：コーラ、コーヒー、ラーメン、冷やし中華。

俺：スパゲティ、おにぎり×2、サイダー×2。

「で、雄二は何食べるの?」

「コーラと、コーヒーと、ラーメンと、冷やし中華。」

「何!?!」

坂本の言葉に、明久は信じられないことを言った。

「貴様！！僕に僕に割り箸しか食べさせない気だな！！」

「・・・」

コイツには、食に関する教育が行われていないのだろうか？

「割り箸くつきかお前は？」

「無機物のレジ袋よりは、食べ物に近いよ？」

「バカだろ・・・」

有機物だからといって、何でも食べられるわけではない。

こんな当たり前のことを知らない明久を見て、俺の目頭が熱くなっ
た。

「俺は、恵まれて育ったのか・・・ありがとう、親父」

「謙太？ついにおかしくなったか？それに明久、割り箸もやらん。」

「どうして!？」

「俺に飯を素手で食わせる気か？それに・・・」

そっぴいなながら、坂本はもう1つのレジ袋を明久に渡した。

「コレは、お前の分だ。」

「え！？ありがとう雄二！！」

「何が入ってるんだ？」

「えっと・・・」

明久：ダイエットコーラ、蒟蒻ゼリー、ところてん。

「全部カロリー0じゃないか！！」

「お前がメタボにならないよう、俺の気遣いだ。」

「僕の食生活の何処にそんな心配があるんだよ！！」

「俺は、お前がいつ死ぬか分からなくて心配だ。」

「糖分と脂肪ばかり取ってるんだろっ？」

「それしか取ってないんだよ！！」

「バカだな・・・そんなんじゃ死ぬぞ？」

「カロリーが足りなくて死にそうなんだよ!!もう怒った!!」
「何だやんのか?」

「ああ、いずれは決着を付けなければと思っていた。」
「良いだろう。望むところだ。」

二人にただならぬ殺気を感じた俺は、取り敢えず撤退した。

「逃がすか・・・」
「言っておくが、星をつけても殺気はぜんぜん消えてないからな!」
「?」

「さつさと構えろ!!」

「チツ!!」

俺は、サイダー×2を構え、片方を明久に、片方を坂本に構えた。

「・・・」

場に緊張した空気が流れる。

・・・ピチヨン

何処からか聞こえたその音と共に俺たちは一斉に、

「ウオオオオオオオオオ」

一斉に炭酸飲料を振り始めた。

ブツシュウウウウ!!

「グアアアアアア」

「めがああああ!!」

傍から見ると、凄くバカな光景だった。

何故か明久と坂本は、俺を狙い、俺が二人を狙うという構図だった。

「・・・やるじゃねえか」

「お前からこそな・・・」

「だが、こつからが本気だ!!」

「手加減はしないぞ!!」

そういつて襲い掛かってくる坂本と明久。

「コレでも食らえ!!!」

俺は、密かに持ってきていたアンモニア弾とガスマスクを使用した。

「又アツ!!!」

「これでオワリだな・・・」

匂いが消えた所で、俺はガスマスクをはずした。

「「今だ!!!」」

その言葉と同時に、明久がところてんを、坂本がラーメンをぶちまけて来た。

「な・・・何故生きている?!!」

二人は倒れた俺に向かって、ある物を突き出してきた。

「甘いな!!!」

「これのおかげで生き残ったんだよ!!!」

そういつて二人が突き出したのは、鼻栓だった。

「クツ・・・そんなものが・・・」

「「形勢逆転だな・・・」

「まだまだ!!!」

俺は、おにぎり×2を顔面に投げた。

「まだ、終わらないつ!!!」

その後、30分間戦いは続いた。

「・・・もうやめにしよう。」

「この戦いは、あまりにも不毛だ・・・」

「そうだな・・・」

俺たちは、結局買ってきた食べ物全てを戦闘に使い、何も残らなかった。

「あゝあ、またシャワー浴びなきゃ。雄二、先に入っているよ」

「「このシャワーは浴びたくない!!!」」

「じゃあどうするんだ?この時間なら、銭湯もあいてないぞ?」

「ちゃんと温水の出る所に行く。」

「え?」

「ここは・・・」

俺たちが来たのは、学校だった。

「更衣室のシャワーなら、自由に使えるだろ？」

「そっか!! あったまい」

「ばれたらしんねえぞ・・・？」

「大丈夫だろ？」

「さっさと帰れば、ばれないよ!!」

「・・・確かに、このままだとキモチワリイしな。」

「そうと決まれば、さっさと行くぞ!!」

そして俺たちは、誰にもばれずにシャワーを使い終わった。

「ふう〜さっぱりした。」

「久しぶりにお湯を浴びたよ!!」

「それじゃ、さっさと帰るぞ!!」

俺は、さっさと帰ろうとした。

しかし、

「おっ・・・プール、水はいつてるじゃん。」

「ホントだ〜」

「どうせなら泳いで帰るか？」

「・・・バカだろ？」

何故かはしゃぎだす明久たちを、俺が止めた。

「ばれたらどうするんだ？」

「大丈夫だって!!」

「10分くらいなら、どうにかなるだろ？」

「おい！！ちよつとま・・・」

俺の言葉を見無視して、プールで泳ぎだす明久と坂本。

「ひゃっほう！！」

「あゝ気持ちいゝ」

「・・・もうしらん！！！！」

優雅(?)に泳ぐあいつらを見て、俺のリミッターも外れた。

パンツ一枚になり、泳ぎだす俺。

すると、

「だれだああああ！！！！」

「やつば！！鉄人だ！！！！」

「どうしよう・・・逃げ切れないよ！！！！」

「しょうがない。逃げ切る作戦を思いついた。」

俺はそう思った。

「どうやるの？」

「簡単だ。明久、坂本、プールにもぐれ。」

「え？」

「今は暗いから、しばらくはばれない。」

「ケド、そんなに息持たないよ??」

「俺が遠くで物音を立てるから、そしたら鉄人はコッチにくるだろ

う。」

「なるほど、やってみよう！！！！」

予想どおり引つかかった。

「じゃ、出来るだけがんばれよ！！！！」

そういつて学校の外に逃げる俺。

しかし、偶然鉄人に見られて、服を落としたせいで、逃げ切れなかった。

「なるほど・・・」

俺たちは、鉄人の前で正座させられていた。

「それで勝手に忍び込んで、シャワー浴びてついでにパンツ一丁で泳いでいたというわけだな!!!」

結局あのあと、俺がプールに連れてこられて、その後、明久たちは耐え切れずに出てきた。

「何か言い訳はあるか？」

その言葉と同時に、俺が土下座した。

「すみマセンでしたあ!!!!!!」

「なんだ、謙太が悪いのか？」

「そうだよ!!! 謙太がちゃんと逃げないから!!!」

「そうだそうだ!!!」

「だあまあれえ!!!」

「!!!?」

「他人に罪を擦り付けるとは、言語道断!!!」

「でも・・・」

鉄人の言葉に、明久たちは反論しようとした。

「もういい、」

「!!!?」

「お前らが底抜けのバカだということがよく分かった!!!」

そして、明久と坂本の頭を掴み、俺に足でヘッドロックを掛けた。

「罰として来週末は、プール掃除をするように!!!」

「!!!..はい!!!」

第十三話（後書き）

アニメ5分を、引き伸ばせるだけ引き伸ばしました。

次はプールに入れるかな・・・？

とりま目指せ1日1回更新です！！

応援コメントたくさんお願いします！！

第十四話（前書き）

これから段々恋愛系になっていくと思います。

書いてる俺が言うのもなんですけど、謙太うらやましい・・・
というワケで、お楽しみに！！

第十四話

朝、俺は優子と一緒に学校に行っていた。

「へえ〜。昨日、そんな事があつたんだ。」

昨日というのは、例のプール事件である。

「俺はするきなかったけどな・・・」

言い訳だと分かっていたいながらも、ついつい弁解してしまう俺。

「まあ良いじゃん。プール掃除さえすれば、プール使い放題なんですよっ?」

「それはそうだが・・・」

俺は少し考えた。

「確かに、そう考えれば悪くないな、それに・・・」

そう言いながら、俺は優子を見た。

「なっ、何よ?」

(優子の水着姿にも興味あるし・・・)

「・・・今、ヤラシイ事考えてた?」

「いや?優子を見ながらそんな事を考えるわけ・・・いだだだっ
!!!!」

信号待ちの途中にプロレス技をかけられる俺、周りの視線が痛い。

「何よ?私より秀吉のほうが異性に見えるですって??」

「そんな事言つてないだろ!!!」

そういつて、ようやく離して貰う俺。

「ヤラシイ事つてワケじゃないが・・・優子?」

「ん?」

「お前も、プール掃除来ないか?」

「え!?!」

顔が真っ赤になる優子。

まあ普通の反応だろうが、にしても可愛いな・・・

「だ、だって私・・・」

「どうした？」

「・・・胸小さいし・・・」

「いまさら何をい・・・だだだだだだだ！！」

「何ですって？」

「優子！！落ち着け！！その間接はそつちにはまがらな・・・」

「ふん！！」

「ぐああああ！！」

俺の断末魔が響き渡った。

「・・・」

「・・・ごめん」

「・・・分かってくれたならいい」

外れた関節を直しつつ、俺と優子は学校へ向かった。

「で、どうするんだ？」

「け、謙太がそこまで言うなら行ってもいいけど・・・」

「それじゃ、決まりだな。」

そういつて俺は優子に笑いかけた。

「／／／」

「？どうした？」

「な、何でも・・・」

「そうか。楽しみだな。」

「えっ！？／／／」

「普通だろ？皆でプールだぜ？」

「そつちか・・・」

「なんか言ったか？」

「ううん、なんでもない。」

「？まあ別にいいか。ついでに、優子も誘っておいてくれ。」

「そうね。久保君は？」
「アハハ、あいつはヤメロ・・・」
「あはは、目が笑ってないよ？」
そういつて、俺たちは学校へ向かった。

「・・・それは散々じゃったのう。」

俺たちは、秀吉に事のあらましを説明していた。

「まあこいつらが悪いんだがな。」

「お前がミスるからだろ！！！」

「あはは・・・まあまあ」

「まあまあじゃない！！！」

「ケドいいだろ？プールを自由に使えるんだからよ。」

「それはそうか・・・」

簡単に納得した二人。

「ムツツリーニ？手伝いに来ない？」

「・・・パス。」

珍しくムツツリーニがパスした。

「そうか、残念だな・・・姫路と島田を誘うつもりだったんだが・・・」

「」

「ちなみに優子も来るらしい。」

「・・・やめておく。」

これでも断るか・・・

何か用事があるみたいだな

「（最終手段だ。）」

「（何をするの？）」

「（まあ見とけ。）」

「あゝ、ムツツリー二?」

「・・・何だ?」

「愛子も・・・」

「ブラシと洗剤を用意して置け!!」

まんまと引つかかった。わかりやすいな〜こいつ。

「面白そうじゃのう?ワシも掃除を手伝うから、相伴させてもらえぬか?」

「もちろん!!」

「一応言っておくが、秀吉は男だぞ・・・?」

聞こえていないみたいだ。

「何の話をしてるの?」

「楽しそうですね?」

そこに、姫路と美波が入ってきた。

「週末、俺たちだけでプールを借りられるんだ。」

「二人とも、来ないか?」

俺と雄二が言った。

「「え!?!」」

「どうかしたか?」

俺たちの言葉に、顔を見合わせる二人。

「プールって、水着ですよ?」

「プールって、水着だし・・・」

流石に拒むよな・・・

「ちなみにだが、秀吉は明久に水着を見せに来るぞ?」

「なっ・・・」

「それ本当、秀吉!?!」

「卑怯よ、木下!!自分に自信があるからって!!」

「そうです!!木下君はずるいです」

「おいおい・・・」

秀吉に詰め寄る三人。

最近、姫路が壊れてる気がするのはいのせいか?

そのころ、ムッツリー二はというと・・・やっぱり鼻血でダウンしてた。

「おぬしらは何を言っているのじゃ？ワシは男じゃ！！」

「で、どうするんだ、2人とも？」

「行くわ！！・・・色々準備して・・・」

「そうですね！準備は大事ですよね！！ご飯減らしてダイエットしなきゃ・・・」

「うっし、後は翔子に声をかければ終わりだな。」
え？

俺はこの言葉に違和感を感じた。

「坂本、おまえ・・・」

「なんだ？」

「やっぱり霧島の水着が気になるか・・・？」

「なッ！？」

「雄二も大人になったね！！」

「明久、謙太、」

坂本は、俺と明久の肩に手を置いていった。

「もし後になって翔子にばれたら、俺の命はどうなると思うっ？」

「雄二・・・」

「それと、俺はあいつの水着なんかに興味はない！！！！」

「いだだだだだだ！！！！！！」

何故か俺のほうにだけかなりの力を入れて、坂本はそういった。

「・・・それは困る。」

「なッ！？翔子！？」

「お、霧島、ちょうどよかった。」

「・・・？」

「坂本は、お前のじゃなくて、姫路の水着に興味があるらしいぞ？」

「はわわっ！？」

「・・・」

俺はそういって、坂本から離れた。

姫路は顔を真っ赤にし、霧島は般若のオーラを醸し出していた。

「なッ、落ち着け、翔子！！ご、誤解だ！！」

「そう言えばそうみたいだな。」

「……？」

「坂本は、お前の水着の中に興味があるらしいぞ」

「ハア！？」

「……そう。それなら……」

そういつて、いきなり脱ぎだす翔子。

「んなっ！！俺はそういう意味で言ったんじゃないで、二人きりのときにつて事らしいぞ。」

「おい謙太！！いい加減にしやがれ！！」

「……そう。じゃあ今からでも」

そういつてスタンガンを取り出す霧島。

「翔子！！やめ……ぐああああああ！！！！」

「」「合掌。」「」

第十四話（後書き）

結局プールの日にもなってますん

まあお楽しみは取っておくというところで。

このペースだと8話位になるかも・・・

第十五話（前書き）

どうも

な、なんとアクセス二万突破です！！

こんな拙い文章が読んでもらえているのが不思議なくらいです！！
これからもよろしく願います。

第十五話

「やっと着いたか。」

週末、水着と掃除用具を持って、俺は学校へ来た。まだ、誰も来ていないようだ。

「俺とすることが、はしゃぎ過ぎたかな・・・」

「良いんじゃない？」

「ああ、そうだな・・・って優子!？」

「何よその化け物を見るような目は？」

いつ来たのか、優子が俺の後ろに立っていた。

「いや、誰も来てなかったから・・・」

「私はアンタについてきてたんだから、当然じゃない？」

「おい！普通に話しかけてこいよ！」

「そ、そんなに怒らなくてもいいじゃない!!」

「俺はつけられるのが大嫌いなんだよ・・・」

「だったら今度からもっと後ろに気を配ることね。」

「・・・言い返せねエ」

そんな会話をしていると、遅れて秀吉が来た。

「姉上、何であんなに急いだのじゃ？」

「え？何でって・・・」

「ぬ？謙太か、おはようなのじゃ。」

「ああ、おはよう。」

「・・・なるほどのう」

そういって、秀吉は珍しく不敵に笑った。

「外に謙太を見かけたから、あわててついていこうと・・・って姉上？その間接はそっちにはまがらな・・・」

「あんたの口が悪いのが悪いのよ!!」

「優子？今の言葉、いまいち意味が分からない。」

「ほっというて良いわ。」

「・・・そうか。」

「け、謙太、たすけ・・・」

秀吉の断末魔が響き渡った。

「おはようございます・・・ってあれ？」

姫路がやってきて、俺と優子を見て言った。

「木下君、ああえつと秀吉君はまだなんですか？」

「忘れ物をしたから、取りに帰ってるわ。」

「・・・天国にな。」

「け〜ん〜た？何か言った？」

「何でもありません・・・」

「えつと・・・邪魔でしたか？」

「そうじゃないわよ、姫路さん。」

「そうですか？」

優子？オーラが怖いんだが・・・

そこに、忘れ物を取りに帰っていた秀吉がやってきた。

「いたた・・・姉上、何故かさつきまでの記憶がないのじゃが？」

「さあね〜？」

「秀吉、お前は優子に・・・」

「け〜ん〜た〜？」

「寝てたんだ。」

「そうかの？こんなところでの・・・」

「まあいいじゃない。」

「いいのかのう・・・？」

「いいんだよ・・・」

そうこうしている内に、明久以外の全員がそろった。
ちなみにメンバーは、

俺、優子、秀吉、姫路、美波、葉月、霧島、坂本、ムッツリーニだ
った。

葉月は、美波に無理を言っつけて付いて来たらしい。

特に話す相手もないので、周りに聞き耳を立ててみると、

「瑞樹？何を持ってるの？」

「あ……えつと、秘密です！！！」

「姉上、昨日急いで買った水着はどうしたのじゃ？」

「そんなこと大声で言わないでよ！！！」

「姉上の方が声が大きいと思うがのう……」

「おねえちゃん？何してるです？」

「いや、ちよつとね……あれ？どこやったんだろう……」

「……雄二、私の水着、見たい？」

「別に興味ない。」

「それは困る。」

「翔子？待て、スタンガンはプールには危険だ！！！」

色々、ハプニングが起きてるらしい。

「そついえば優子？」

「ん？」

「優子はどうしたんだ？」

「優子は、ちよつと遅れてくるんだって。」

「そうか……」

「……私だけじゃ不満なの？」

「その言い方は色々誤解を招くと思うぞ？」

そこに……

「おはようみんな！！！」

「お、明久か。」

明久がやってきた。

「おはようございます、吉井君。いいお天気でよかったですね。」

「ワシは今日のために、水着を新調してきたぞ」

「え?!どんな水着?」

「・・・(コクコク。)」

秀吉の水着に期待するとは・・・コイツは男だぞ?

「トランクスタイプじゃ。」

「だろうな。」

といつつ、ほんの少し残念だった俺。

「男物じゃないか!!」

「・・・見損なつた。」

こいつらよりはマシだ。

「秀吉、僕の事が嫌いになつたの?」

「何でわしが攻められておるのじゃ?」

確かにその顔で男物はズルイ。

「おかしいのはお前らだぞ?明久。」

「応マトモぶつておくが、

「お前もいえないぞ?」

「なつ、何を言ってるんだ坂本?」

まさか、読まれていたとは・・・

「バカのおにくちゃん、おはようです!!」

「は、葉月ちゃん?」

「この子ったら、付いて来るって言つて聞かなくて・・・」

「これで、全員そろつたな。」

「全員って言い方引つかかるケド、まあいい。」

「それじゃ、水着に着替えて、プールサイドに集合だ。」

「ハイ!!!!!!」

張り切って返事する葉月。
そして、男子更衣室に向かう俺たち。
その後ろを、葉月と秀吉がついてきた。
「ここら、コッチは男子更衣室だよ！」
明久が注意する。
「葉月ちゃんと秀吉はあっち。」
「やっぱバカだ。」
「えへへ、冗談です。」
「ワシは冗談ではないのじゃが……」
そこに、美波の声が飛んでくる。
「ここら、遊んでないで行くわよ！葉月、木下。」
「おっ、おぬしまで!?!」
「ま、普通の反応だな……」
「いやじゃ!?!ワシ一人女子更衣室に混ざるのは……」
「……雄二の前で脱いだら……」
「どうしてそうなるのじゃ?」
この学校は、常識がおかしいな。
「あきらめろ、秀吉。この世は見た目だ。」
「それ、使い方違うよね?」
「なっ!?!明久に突っ込まれるだ!?!」
「……死にたい。」
「どうしてそうなるのさ!?!」
「取り敢えずみんな落ち着け。大丈夫だ秀吉、ホラ見ろ。」
そこには、
「秀吉更衣室」
と書かれた看板があった。
「秀吉って性別なんだ……」

「ふう、」

俺たちは、一足先に着替えて、プールサイドにいた。

「にしても熱いな・・・」

今日は、今年最初の夏日で、結構な温度だった。

「今日は血圧上がって大変だぞ〜?」

「・・・問題ない。」

そう言ったムツツリーニは、スポーツバッグを開いていった。

そこには、輸血パックがパンパンに詰め込まれていた。

「よくこんな金持ってたな?」

「突っ込むところそこ!?!」

また明久に突っ込まれた・・・

「もう死んでやる・・・」

「だからなんでそうなるのさ!?!」

「わかるぜ?謙太。」

「・・・同感。」

「みんなまで!?!」

そこに、

「おにいちゃんたち、おまたせです!?!」

「あ、葉月ちゃん、って・・・」

「どうしたあきひ・・・」

俺たちは、葉月の姿を見て絶句した。

葉月の胸には、姫路に負けないほどの巨乳がスク水に収まっていた。

「・・・(ブッシュウウウウ!!)」「」

「姉妹でなんと言う差だ・・・」

「あれって、犯罪じゃね?」

「・・・弁護士を呼んで欲しい。」

「ってかお前ら、何小学生の水着で興奮するな。」

な、なんと言うことだ・・・

坂本に突っ込まれて心が痛む。

Fクラスのせいで、俺までおかしくなってきたらしい。

「こらー！葉月！返しなさい！！それが無いと胸が・・・」

「ほえ？ああ、ずれちゃいました・・・」

そういつて、葉月は自分の胸からあるものを取り出した。

「返しなさい！！これ高かったんだからね！！つてはっ・・・」

「それつていわゆる、ヌーブ・・・ごはっ！！！！」

「忘れなさい！！今見たもの全部忘れなさい！！」

そういつて明久に関節技を仕掛ける美波。

しかし、水着のサイズが合っていないのに過激な技をしたせいで、

ハラリ・・・

「ブツハッ！！」

ムツツリーニは倒れた。

「ムツツリーニ？大丈夫か？」

「だれか・・・シャツターを・・・」

そういつて、ムツツリーニの意識は無くなった。

「この場は一旦退散するか・・・」

俺は、更衣室に逃げていった。

第十五話（後書き）

眠い・・・

相変わらず眠い・・・

書いてる途中に足攣って、危うくパソコン壊れるところだった・・・
取り敢えず、（何が取り合えずだ・・・）

これからもゆるゆるがんばりますので、応援お願いします！！

第十六話（前書き）

こんにちはわ！

これでプールは第4話目くらいです。

この調子で言ってもあと1ヶ月持つかどうか・・・
とりまがんばります！！

第十六話

「そろそろ片付いたかな・・・？」

明久の生命活動が停止したのを察知して、俺は更衣室から出て行った。

そこには、倒れた明久、血だらけのムッツリーニ、明久を介抱する葉月、それを見ている坂本がいた。

「美波は何処行った？」

「あいつなら、また着替えに行ったぞ？」

「・・・だろうな。」

そして、俺は準備運動をしながら他を待った。

・・・明久が生命活動を再開し始め、ムッツリーニの意識がもどったところ、再び美波が出てきた。

美波は、スポーツタイプのシンプルな水着を着ていた。

「折角用意してきたのに・・・葉月のほかあ・・・」

その光景を、明久がニヤニヤしながら見ていた。

「何見てるのよ、どこがおかしいの？」

「そんなことないよ！！凄く似合ってるよ？」

「ホント!？」

「うん、胸も、バストも、ボインもほっそりしてすごく・・・足の親指ガツ!!!」

「胸が小さいって3回言わなかった？」

「・・・ってかセクハラだぞ？それ。」

遠回しに胸が小さいと3回も言った明久は、美波に足を踏まれていた。

「やれやれ・・・」

助ける気にもならないな。

「まあそう怒るな。」

そこに助け舟を出したのは坂本だった。

「口ではそういつてるが、明久はお前の水着姿を意識してるぞ？」
「もおくアキつてば、素直に思ったとおり言えばいいのに。」
「そういいながら顔を逸らす美波。」

「助かったな、明久。」

「うん。なんとかね・・・美波？」

「なあに？アキ？」

「正直に言うけど、美波の胸小さいね。」

「・・・アンタの目エ潰すわ。」

「あはは、冗談だよ。」

「冗談に聞こえないんだけど・・・。」

そして、霧島が出てきた。

黒を基調にしたシックなデザインの水着だ。

「・・・。」

俺たちは言葉を失った。

なんて美人だ・・・

そんな霧島は、雄二の下に歩み寄って・・・

バスッ！！

「ぐああああ！！！」

え？

俺の目の前には、チヨキをする霧島。

そして目を押さえてのたうち回る坂本。

「霧島？」

「・・・？」

「おまえ、愛情表現がおかしいぞ？」

「・・・これは愛情表現ではない。」

「どういうことだ？」

「・・・雄二が他の人を見ないように。」

「ああ・・・そういうことか・・・」

そして、葉月が霧島に駆け寄った。

「おねえさん!!きれいです!!」

「・・・そういわれると、嬉しい」

「坂本、お前も何か言ったらどうだ？」

「そ、そうだな・・・」

そして、坂本は霧島を見て、こういった。

「しよ、翔子・・・」

「ティツシユをくれ。涙が止まらん・・・」

「そこじゃねえだろ？」

「水着の感想いえよ・・・」

俺と明久に突っ込まれる坂本。

「視界を奪われてどうしろと!？」

「まったく・・・雄二には困ったもんだね。ムツツリーニ？」

ムツツリーニは、再び血だらけで倒れていた。

「ムツツリーニ!!」

「・・・すまない・・・先に行く」

「くそう、誰がこんな事を・・・」

ムツツリーニを血の海に沈められるのは、あいつくらいである。

「ダメだ明久、逃げろ!!」

「えっ？」

俺はそういつたが、時すでに遅し。

「すみませえん!!背中 of 紐を結ぶのに、手間取っちゃって・・・」

「グベラッ!!」

姫路の水着姿を見て、倒れる明久。

「・・・これって、生物兵器？」

「使い方は間違いじゃない。」

「よ、吉井君?!」

そういつて駆け寄る姫路。

つてか俺もまともに見てたらアウトだったな。

何とかムツツリーニのおかげで助かった。

「ありがとう、ムツツリーニ。ムツツリは嫌いだが、お前のことは忘れない。」

「何を言ってるんだ？というか、何が起きているんだ？」

ようやく視力を取り戻し、場面を把握しようとした坂本だったが・

・
バコツ！！

「ぐあああああ！！！」

なんかデジャヴ・・・

そして美波は、

「○*#%&@?」

「何だあれ？」

「おねえちゃんは、ショックを受けるとドイツ語に戻っちゃうんです。」

「あれ、ドイツ語なのか？」

「とりあえず、これで全員ですか？」

「いや、後木下姉妹が・・・」

「いや、兄弟だ。」

「違うだろ！！姉弟だ！！」

「どうして謙太が怒ってるの？」

「ほっとけ！！」

「秀吉、どんな水着だろ？」

「・・・トランクス」

「そうだった・・・」

バカの会話をききながら、俺は、優子の水着に期待していた。
(そういえば、あいつとプールに入るの、初めてだな・・・)
「すまぬ。待たせたのう!!」

「・・・」

木下姉弟が出てきた。

それを見た明久&ムッツリーニが一言。

「もう打ち止めです。」

なぜなら、トランクスはトランクスでも、女物の上がある水着だった。

「みんな、そろったかの？」

そのことを知ってか知らずか、満面の笑みでかけてくる秀吉。

「木下、アンタ何処までうちの邪魔したら気が済むの!!」

「卑怯です!!油断させておいて、最後に裏切るなんて!!」

「おねえちゃんとしても可愛いです。!!」

「わしいは見てのとおり男じゃぞ？」

「その水着、女の子用ですよ？」

「なんじゃと?店員には普通のトランクスが欲しいといったのじゃぞ？」

「・・・何も知らない人は、女物を進めると思いますよ?」

なんて会話が行われていた。

その輪から抜けて、俺はプールの端にいた優子に近づいていった。

「優子？」

「はひゃっ!?謙太?!」

「似合ってるじゃないか。」

「え?う、うん。アリガト・・・」

優子は、スカートタイプのシンプルな水着だった。

「どうした？」

「・・・皆秀吉見てるから・・・」

「そういうことか・・・」

まわりは、みんな秀吉の話題で持ちきりだった。

「えっと・・・」

「？」

「少なくとも俺は、だが・・・」

「なに？」

「この中で一番お前が可愛いと思うぞ？」

「えっ!？」

「俺はだがな・・・」

「／／／」

「心配しなくとも、お前は可愛いぞ？」

「そう、アリガト!!」

「さてと、皆のところに行くか。」

俺は優子に手を差し出した。

「ウン!!」

その手を取った優子と、一緒に皆のところに行った。

「わぁ〜おねえさんも可愛いです!!」

「そ、そう？」

「ほんとと、凄く似合ってるわ!!」

「・・・優子、綺麗。」

「木下さん、可愛いです!!」

「ありがと、皆も可愛いわ!!」

よかった。優子が元気になってくれて。

「ところで坂本は？」

「雄二なら、あそこでのた打ち回ってるよ?」

「いつそ殺してくれ!!!!」

「まあほっとけばいいか。」

「そうだね。」

第十六話（後書き）

まだまだつづきそうです。

ちなみにこの話の後は、結構オリ話入れようと思いますので、お楽しみに！！

内容は、主に腕輪&日常について書くつもりです。

第十七話(前書き)

どうも!!

ユニーク二千突破です!!

これからもがんばります!!

第十七話

周りもやつと落ち着き、俺は水に浮きながら、その光景を見ていた。葉月と遊ぶ秀吉、日向ぼっこをしている霧島、その横で縛られている坂本、そして・・・

「吉井君、泳ぐの上手ですね。」

「姫路さんは泳がないの？」

「実は私、ぜんぜん泳げないんです。水に浮く位しか出来なくて・・・」

「ウチが教えてあげよっか？水泳得意だから。」

「私も手伝うわ。」

そういつて、優子と美波が姫路に水泳を教えている。

「ねえ、謙太？」

「どうした？明久。」

「こうして見ていると、美波がAクラスで、姫路さんがFクラスみたいだね。」

「優子は相変わらずAだがな・・・って優子?!」

「わあっ!!って美波?どうした・・・」

「あんたたち、私たち(ウチ達)の悪口言つてたでしょ!!」

「え?僕達はただ、美波がAで、姫路さんがFって・・・」

「おい!!そんな誤解を招く言い方するな!!」

「「やっぱり・・・」」

「おい、落ち着け、優子!?その間接は、そっちにはまがらな・・・」

「誤解だよ美波!!僕はただ、美波がA・・・」

「「寄せてあげればBくらいあるわよ!!」」

「「グアアアアアア!!」」

俺達は、女性陣の関節技に倒れた。

その様子を見ていた霧島と坂本は、

「・・・ちなみに私はCランク」
「はひほひっへふんは、ほはへは（何を言ってるんだ、お前は）
なんて会話をしていた。」

何とか復活した俺は、また水に浮きながら辺りを見ていた。
すると、いきなり・・・

「ぶはっ!?!」

水に引きずり込まれた。

「何すんだ・・・ってか誰だ!!」

「私よ!!」

「なっ・・・優子?!何すんだ!!」

よく見ると、優子が俺を引きずり込もうとしていた。

「水中鬼よ!!」

「『水中鬼』?」

「取り敢えず、溺れて頂戴!!」

「何のお願いだ!!」

「良いから!!」

「いやだ!!」

そういつてもがいていると、何か微妙にやわらかい感触が・・・

「何だこれ・・・?」

「・・・(////)」

「どうした優子?」

俺は、手の方向を見るよ、そこには優子の微乳が・・・

「誰が微乳よ!!!」

「口に出してないのに何故分かった!!」

「取り敢えず、死んで!!」

「ぐあっ!!!!」

薄れ行く意識の中で、

(優子、胸触ったことに切れてなかったな・・・?)
なんて事を考え、俺の意識はブラックアウトした。

「・・・じょうぶ?」

「んあ?」

「大丈夫?」

俺の視界には、優子がいた。

「・・・自分が溺れさせておいて、なにをいう?」

「ゴメン・・・」

「別に気にはしないが・・・」

そう言つて、俺は辺りを見た。

明久と葉月が遊んでいて、美波は姫路に水泳を教えていた。

「やっと落ち着いたみたいだな・・・」

「うん。やっとね。」

「そんじゃ俺も一泳ぎ・・・」

そういつてプールに行こうとした時、

「みんな遅れてごめんね〜」

そういつて愛子が来た。

「やっと来たか、遅かったな・・・」

「えへへ・・・ゴメンゴメン。」

「まあいい。さっさと着替えてこいよ。」

「そうだね。」

そういつて駆け出す愛子。

その途中、一旦止まって、俺達を地獄に引きずり込む一言。

「男性陣の皆さん?覗くなら、ばれないようにね〜」

「「「なっ!?!?」「」「」

その言葉に反応する男性一同。

そして、

「吉井君？余計な動きを見せたら、大変な目に合いますよ？」

「生きて帰りたくないの？アキ？」

オーラを出す2人。

「……」

ボスツ！！

「グアアアア！！」

無言で目を潰す霧島。

「……（ブツシユウウウ！！！！）」

鼻血まみれのムツツリーニ。

そして……

「け〜ん〜た？ちよつと来て？」

「なんだ？今から重要なミッションが……」

「そのミッションには逝かせないわよ？」

「おい、チョイ待ち、字が違わないか？」

「あってるわよ。」

「……じゃあ何故俺は関節技をかけられているんだ？」

「さあねえ〜、ふんっ！！！」

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

俺は、断末魔と同時に本日2度目のブラックアウトを行った。

泳ぎ始めて約2時間

「泳いだらお腹すいてきたな〜」

明久がそう漏らした。

「それなら、良い物がありますよ？」

姫路が言った。

「ちよつと失敗しちゃって、人数分用意できなかったので、黙っていたんですけど・・・」

そういつて、姫路は『手作りの』ワッフルを3つ取り出した。

「優子？お菓子なんかもってきてないか？」

「え？あ、あるにはあるけど・・・？」

「一緒に食べないか？」

「え・・・？べ、別にイイケド？（ノノノ）」

それを見た俺は、優子とティータイムと洒落込む事にした。

「なっ！！おい、謙太！！」

「よかつたなあ明久？姫路のデザートが食べれて。」

「全然良く・・・良かったよ・・・」

そういつて落胆する明久。

「けど、このままじゃ行かないからな？雄二！！」

「そんじゃ、第一回！！」

「最速王者決定戦！！」

「ガチンコ水泳対決！！！！」

「イエエエエエイ！！！！」

「・・・？」

男達の突然の行動に、女性陣は啞然とした。

「ルールは簡単。このプールを往復して、最初にゴールした奴の勝ちだ。」

「へえ、がんばれよ」

「謙太？行っておくがこれは男は強制参加だ。」

「なんだとっ！？」

「（そして、勝者二人が生き延びることが出来る。）」

「それでは全員、位置に着け！！！！」

「・・・おっ！！！！」

坂本の号令で、位置につく俺ら。

「それじゃいくよ」

ちなみに審判は、愛子である。

「位置について、よいい、ドン!!」

「シネエエエエ!!!!」

「何故俺を狙う!？」

坂本と明久が、同時に俺にかかって来た。

「貴様には、必ず食わせてやる!!!!」

「逃げようとした罰だね。謙太？」

「くっそ・・・どうすれば・・・」

「どうでもいいけど、先頭はもう折り返しだよ？」

「何だと!？」

見ると、秀吉、ムツツリー二の順で、折り返しを済ませ、こちらへ向かっていた。

「一時休戦だ!!」

雄二が叫ぶ。

「分かった。俺はムツツリー二を止める。明久!!」

「うん、僕は秀吉だね？」

「分かってるじゃないか。たのんだぞ!!」

そういつて、俺はムツツリー二の前に立ち塞がった。

「・・・邪魔をするな。」

「行かせるかよ!!!!」

「・・・」

そして、俺とムツツリー二が激突しようとした瞬間・・・

「・・・(ブッシュウウウ!!!!)」

「どうした!？」

見ると、ムツツリー二は鼻血を流して溺れていた。

「明久まで?!」

その言葉に、俺は明久のほうを見て、啞然とした。

「・・・秀吉?その格好は?」

「何じゃ?文句あるのかのう?」

「・・・お前が裸だと、周りが迷惑だと思いが・・・」

「何故じゃ？ワシは男じゃぞ？」

「・・・じゃあ何故胸を手で隠している？」

「そ、それは・・・」

・・・バカだ。

そのころ、ムッツリーニは、

「・・・死してなお、一遍の悔い無し・・・」

・・・やっぱりバカだ。

第十七話（後書き）

ようやくプール編終わりです。

こっからそのまま温泉編へレッツゴ〜!!

応援お願いします!!

もしかしたら明日は更新できないかもです。

ごめんなさい!!

第十八話（前書き）

何とか更新できます。

結構短い文ですが、どうかご容赦を・・・

第十八話

プールの帰り道……

「面白かったですね。」

「うん!!」

姫路と美波が言った。

「でもなんか疲れた気が……」

明久が言った。

「疲労ではなく、貧血ではないかのう?」

「そりゃあそうだろ? あんだけ血を出して、生きてるほうが不思議なくらいだ。」

「あはは……」

明久とムツツリー二は、二人合わせると軽く1人分くらい出血したはずだ。

「そうだな……じゃあ一ツ風呂浴びていくか。」

「はい!!」

雄二の提案に、葉月が大きく頷いた。

そして銭湯にて……

俺たちは、男女に分かれて風呂に入ろうとした。

その時……

「ここらこら? こっちは男湯だよ?」

明久が葉月に注意した。

「葉月ちゃんと秀吉はむこつ。」

「えへへ、冗談です。」

「ワシは冗談ではないのじゃがのう……」

まったくだが、秀吉が入ると危険なことには変わらない。

「こら、遊んでないで行くわよ葉月、木下。」

「やっぱりバカだ・・・ってかデジャヴ？」

こんな光景が最近あった気が・・・忘れたからいいか。

「またか！またなのか！？ワシー人女湯にまざるのはいやじゃぞ
！！」

「じゃあ、木下・・・秀吉が女湯で、優子さんが男湯に行けば良い
んじゃない？」

そこに美波が提案した。

「・・・え？」「」

「確かに、それで解決だね！！」

「何を言っている明久？解決どころか、むしろ酷くなってるだろ？」
流石におかしいので、俺がフォローする。

「確かに優子は胸が洗濯板みた・・・って優子？その関節はそつち
には曲がらないぞ？」

「分かってるわよ。」

「そうか、それなら安心・・・っておい！！分かっててやるのはお
かしいだろ！？」

「あんたのせいよ！！フン！！」

「グアアアアアアアアア！！！！！！！！」

優子の関節技に倒れる俺。

「大丈夫だ、秀吉、木下、ほら」

坂本が、あるドアを指差した。

そこには、

「男湯」

「女湯」

「秀吉湯」

「・・・は？」

「世間に認知されてるんだ・・・」

「ってか坂本くん？」

「なんだ？」

「何で私を呼んだの？」

「え？そりゃ、性別が逆転してんなら・・・」

「誰がそんな事言いましたか？」

「・・・優子？取り敢えず、俺から降りてくれ。」

「誰がもなにも、胸がまな板・・・」

「誰がまな板よー！！」

「どうでも良いけど俺を締めるなああああああ！！！！！！」

俺、風呂入りに来てこんなに疲れるってどう言う事だ？

第十八話（後書き）

これで六話目かな・・・？

予告どおりにはいかなさそうです。

まあ何とか2期が始まるまで持たせたいと思います！！

（その文才リ話が超増えそうです・・・）

これからもよろしく願います！！！！

第十九話（前書き）

今回の話は一気に書くべきか、それとも・・・
ってな感じで書くので、ミスとかあったらごめんなさい。

第十九話

「ふう〜」

俺は、温泉につかり、優子から受けたダメージを回復していた。

「いい湯だ〜」

「暖まるねえ〜」

明久と坂本も和んでいる。

今日は疲れたからな・・・いろんな意味で。

「・・・（ブクブクブク）」

そんな中で、ムツツリーニは女湯との境の壁を見ていた。

「どつたの、ムツツリーニ？」

「・・・この向こう、女湯」

「何?!」

「・・・知らなかったのか？」

「アハハ・・・銭湯なんて来ないからね・・・」

そんな話をしてしていると、

「おねえさま？美春と洗いつこしましょう!!」

「み、美春?! どうしているの?!」

「美春にはおねえさまを害虫から守るための特別な情報網がありますから!!」

「いや! 離れて!!」

「お風呂なら、何があっても合法です!!」

「何があってもって、何する気・・・」

そこで、何故か美波の声が途切れた。

そして数秒後、

「うわああああ!!」

という台詞が聞こえてきて、

「あ、えっと、大きくてもいい事ありませんよ? 肩が凝って大変ですし・・・」

という姫路のフォロー(?)。
そして、

『『巨乳は皆そう言っわ!!』』』

という、美波、優子、愛子の見事な八モリが聞こえてきた。
どっちも大変だな・・・

騒ぎ(女子風呂の)が落ち着いて、俺たちは体を洗っていた。

「明久、シャンプーくれ。」

「はい。」

明久が手渡したのはシャンプーではなく、石鹸だった。

「それはさっき俺が買った石鹸だろ?」

坂本が言った。

「明久、お前は自分では何も買っていないのかよ?」

「これでも泡は出るから、別に買わなくてもいいかなーと思って、」

「坂本、こいつに頼んだお前がバカだった。」

「・・・そうだな。」

「え?それってどういう・・・?」

「バカは黙ってる。」

「酷い!!!」

泣いてる明久を一瞥して、坂本は立ち上がった。

「おゝい、翔子、シャンプー貸してくれ。」

『・・・(ポイツ)』

「サンキュ〜」

「お前、ついに心を開いたのか?」

「・・・黙れ独り身。」

「ウツ!!!」

坂本の野郎、的確に急所を突いてきやがる。

そっちがそうなら・・・

『・・・雄二、石鹸貸して』

「ホラよ。」

「お前ら、夫婦みたいだな。（笑）」

「おい、（笑）はどういうことだ？」

「坂本、夫婦ってところは否定しないんだな（笑）」

「なッ!？」

「そんなに照れんたって」

「余計なことを言うな、そんな事言つと、その気になって面倒・・・」

「

そこで坂本の言葉は途切れた。

どうやら霧島があつちにあるもの全て坂本に投げたみたいだ。

「ざゝまあみる!!き・り・し・ま・ゆ・う・じ!!」

倒れている坂本に、俺は最大限の皮肉を言つてやった。

『霧島雄二・・・いい響き』

「全然良くねええええええ!!!!」

『ねえ知ってる?』

いきなり、愛子が俺たちに話しかけてきた。

『銭湯の湯船つて繋がってるんだよね』

キュピーン!!

俺は衝動的に行こうとしたが、そこを理性で抑えた。

いかん、今行つては、明久やムツツリと同レベルになってしまう・・・

・

「もぐつたらなんか見えたりして?」

「「ヒヤッホゝイ!!」」

そういつて明久とムツツリはダイブを行った。

「「こ、これは!？」」

「なッ!？ホントに繋がってるのか?」

「あちちちちちち!!!」
「どうやら、そこは高温地帯みたいだ。」
「あそこはお湯が沸いてる高温地帯だ!!!」
「水でよく冷やしてから・・・」
「再チャレ〜ンジ!!!」
「グアアアアア、めがああああ!!!」
「・・・期待した俺がバカだった。」
「・・・全員バカだろ?」
坂本が再び何か言ってきたので、皮肉ることにした
「いいよな〜坂本は、霧島の裸見放題で。」
「なッ!!!」
「だからこんなことしなくても、大丈夫なんだよな?」
「いいだろう、やってやろうじゃないか。」
「さっさと行け。」
「分かってる!!!うおおおお!!!」
「そういつて勢いよく・・・」
「あちちちちち!!!」
「バ〜カ」
『あはは、残念だった見たいだねえ。』
「くっそお!!!よくもからかったな!!!」
「・・・許すまじ。」
「確かに、プライドが傷ついたのは確かだな。そんじゃ、」
「目には物を見せてやろうぜ!!!」
俺たちは一致団結し、明久が黒金の腕輪でフィールドを展開した。
「明久、ムツツリのカメラ借りとけ。」
「そうだね。サモン!!!」
「そんじゃ行つくぜえ?サモン!!!」
「そういつて俺と明久は召喚獣を呼び出した。」
「明久、俺の後ろに乗れ!!!」
「OK!!!しっかりしてよね?」

危なかった。銭湯だから良かった様なものだ・・・

「仕方ない。シンク口解除。」

「・・・背後いただき。」

「ゴメンなさい!!!」

「やっぱ!!!」

ドォーン!!!

謙太 / 35、明久 / 23

姫路 / 204、翔子 / 340、優子 / 15、愛子 / 20、美春 / 5、
美波 / 3

『勝負ありね。』

「・・・止めを刺せ。」

『いやよ？補習室に行く前に、私がたつぷりお仕置きしてあげる。』

「なっ・・・それはちよつと・・・」

『吉井君、しっかり抑えておいてね?』

「え?」

「明久?お前今何してた?」

「何って、写真撮影?」

「・・・グツジョブ。」

『『『『『何してんのよ!!!』』』』』』

「ぎゃああああ!!!」

明久の召喚獣は全ての敵に攻撃され、生きたえた。

そして、

「戦死者は補習!!!!」

鉄人が現れ、明久を連れ去っていった。

余談ではあるが、俺はあの後、温泉で癒した体力がゼロになるほど
酷い仕打ちを受けた。

「・・・補習のほうがあった・・・」

第十九話（後書き）

プール編終わり！！！！！！
次からオリ話です。お楽しみに！！！！

第十九、五話 その巻（前書き）

どうも

今回からオリ話です。

第十九、五話 その巻

「『第一回、第二学年による、召喚獣デスマッチ大会』?!」
俺たちは、黒板に張られたチラシを見た。

それは、坂本がつけたようなタイトルの大会のチラシだった。

「入賞賞品は、召喚獣のコスチューム変更とかだったよ。」

「へえ、好きに変えられんのか?」

「そうみたいだよ?」

明久が言った。

「そんなら、俺はもつと扱いやすそうな武器にするかな・・・
そうすれば、俺はあの腕輪の能力を遠慮なく使える。」

「ワシは・・・」

「女物にするんだね?!」

秀吉が何か言おうとしたが、明久が遮った。

「なっ、そんなことは言うておらぬぞ!!」

「ケチだなあ・・・」

「そういえば、どんなルールなの?」

美波が言った。

「ここには書いてないけど?」

「デスマッチということは・・・殺し合いか?」

「「殺し合い!?!」」

「とはいっても、召喚獣同士らしいがな。」

「なぐんだ。」

「全然良くないよ!!フィードバックが半端ないから!!」

「お前なら大丈夫だろ?」

「いやだよ!!痛いよ!!」

「まあバカはほつといて。」

「酷い!!見捨てないで!!」

「詳しい話は鉄人がするんじゃないか?」

「そうね。」

「それまで待つとするかの。」

「・・・無視された。」

俺たちは朝のHRを待った。

「それでは、今回の大会のルールを説明する・・・のは面倒だし、どうせ忘れるだろうからプリントを刷ってきた。」

そして、俺たちにはワラ半紙が配られた。

そこには・・・

第一回、第二学年による、召喚獣デスマッチ大会

制限時間：HR終了後から、放課後のチャイムまで

ルール：この時間帯は、常にフィールドが展開されており、必ず召喚していなくてはならない。

そして、教科は、時間によってランダムで変わる。

戦死者はFクラスで補習。補給試験はA〜Cの好きなクラスで行える。

なお、他人の所有物、そのクラスの設備を触るのは禁止。

勝利条件：撃破数が一番多い生徒の勝利。

なお、同率だった場合、生徒同士の召喚獣バトルで決める。

考察：各腕輪の使用は許可する。

また、何か事故が起きた場合、即刻大会を中止し、解散とする。その場合、優勝賞品は該当者に渡される。
5位までは入賞とし、入賞者にも賞品が渡される。
戦死者の補習は1時間、その後、復活できる。

と、まあこんな感じで書かれていた。

「それでは、各自の健闘を祈る。」

といって鉄人が出て行った。

「なかなか面白そうだな・・・」

「そうだね。」

「腕が鳴るのう。」

「ウチもがんばらないと。」

「がんばります!!」

「・・・優勝」

「興味ないな・・・」

ツとまあこんな感じでクラスはざわついていた。

「ところで・・・」

俺は気になっていたことを口にした。

「優勝賞品は何なんだ?」

「そういえばそうじゃのう・・・」

「なんだろう?」

「また如月ハイランドのペアチケットなんじゃない?」

「それは二位の副賞みたいじゃぞ?」

「なっ・・・ペアチケットもあるのか・・・?」

ペアチケットという言葉聞いた坂本がいきなり立ち上がり、

「ぜってえ勝つ!!!」

・・・分かりやすい奴だ。

そして、

キーン、コーン、カーン、コーン
戦いの火蓋が斬って落とされた。

「……佐藤、覚悟……!!」

「おいっ!!いきなりかよ!!」

俺は、開始早々Fクラスの奴らに囲まれた。

ちなみにフィールドは展開済みである。

「……女子とプールに行きやがって……査問……!!」

「字が違う……!!サモン……!!」

そういつて召喚した。

数学、Fクラス平均73×35

数学、俺/658

「あゝメンドクサ……」

「……何だと?!!」

「さっさとくたばれや……シンクロ……!!」

俺の召喚獣は輝き、俺とシンクロした。

「食らえ……!!」

俺は手に持った槍を大きく振るい、教室のドアの方へと衝撃波を放った。

衝撃波を受け、ドア付近の4〜5人（召喚獣）が倒れる。

「……ぐあああ……!!」

「今のうちだっ！！！」

俺は、例にもよって屋上の危険地帯へ向かった。
ちなみに、自分の撃墜ランクと記録は、召喚獣の背中に表示される。

佐藤謙太、5 KILL、1位

「厄介なことになりそうだ・・・」

俺は屋上へと走った。

第十九、五話 その巻（後書き）

どうですか？

なんかおかしいところがあったらどんどん感想ください。

第十九、五話 その式（前書き）

オリ話その2です。

第十九、五話 その貳

「さうて、どうすつかないかな・・・」

俺は屋上で作戦を立てていた。

下を見てみると、校庭でもたくさんさんのバトルが行われている。

「ってか、他の学年に迷惑じゃないのか？」

「そうでもないみたいよ？他は観客として自由に見て回ってるみたいだし。」

「そうなのか・・・って優子?!」

俺の後ろには、召喚獣を連れた優子がいた。

「お前、俺を殺りにきたのか？」

「そんなわけないでしょ？私があんたに勝てるわけじゃない。」

「それもそうだな・・・」

今の俺と優子では、点数に約2倍くらいの差がついているし、俺には腕輪がある。

「そうじゃなくて、私と共闘しない？」

「・・・なるほど、そういうことか。別にいいぞ」

「ホント!? やった」

「それじゃ、さっさと校庭に繰り出すぞ。」

「さっさと行こうよ。」

そういって、俺たちは校庭へと向かった。

「そういえば、今の一位は誰だ？」

「Aクラスの教室横の、特別設置された電光掲示板に書いてあるみたいよ？」

「へえ・・・」

「見に行く？」

「そうするか。」

俺たちはAクラスへと向かった。

Aクラスには、負傷者がたくさんいて、回復試験を受けていた。

「え〜つと・・・一位はつと」

「坂本君みたいね。二位が代表だし。」
ランキングは、

1位、坂本雄二、 8 K I L L

2位、霧島翔子、 7 K I L L

3位、佐藤謙太、 6 K I L L

こんな感じだった。

「坂本か・・・潰しに行くか。」

「あれ？そういえば、戦死したらポイントはどうなるんだろう？」
優子が言った。

確かに、それは疑問だ。

「そうだな。試してみるか・・・須川」

「どうした・・・ってお前、何故秀吉が女装している!？」

須川は、優子を見てとんでもないことを口走った。

「「これ（私）は優子だ（よ）!!!」」

「ああ、すまん・・・ってお前は何で女と一緒にいるんだ!！」

さすがFFF団会長。女と一緒に絶対許さないか・・・

「そんなことはどうでもいいが・・・」

「どうでもよくない!!お前を潰してやる・・・」

「須川？お前何位だ？」

「俺はまだ2人しか倒してない。」

「質問には答えるんだ・・・」

「そんじゃ、死ねッ!!!」

「え？確かに潰すといったが、そういう意味ではな……ぐあああ
ああ!!!」

須川は倒れた。

「あれ？フィードバックするの？」

優子の質問に、俺はさらりと答えた。

「いや、俺が殺虫スプレーで目を潰した。」

「なかなか酷いよ？それ。」

「ほっとけ。そんなことより……」

俺は、須川の召喚獣を確認する。

「あ、点数消えてるな……」

「それなら、上位を潰していけば大丈夫だね。」

「しかし……流石に霧島には手を出したくないな……」

「どうして？」

「あいつに補習は似合わないだろ？」

「ふうん……」

「だから、俺は女子は狙わねエ事にしてるんだよ。」

「へえ……」

「ちなみに秀吉は範囲外だ。」

「そうなんだ……」

「まあそんな話はいいか……いくぞ？」

「え……？ああ、うん。」

俺らは校庭に飛び出した。

「優子、腕輪を使う。下がってる!!!」

「あ、うん。」

「いっくぜえ……？シンクロ!!!」

俺は召喚獣とシンクロした。

「遊びの時間は終わりだ。行くぜ!!!」

「なっ、鉄人キラーだ!!!逃げる!!!」

「木下さんまで?!絶対に勝ち目ないわ!!!」

俺の姿を見るや否や、全力で逃げ出す生徒たち。

そんな中で・・・

「よお、遅かったじゃねえか。」

「・・・負けない。」

坂本と霧島だけが俺らを見据えて立っていた。

「探したぜ?そんじゃあ死んでもらおうか、坂本。」

「代表、手加減しないからね。」

数学、俺 / 604、優子 / 324

数学、坂本 / 322、霧島 / 449

「優子、俺が片付けるまで持ちこたえる!!!」

「やってみる!!!」

そういつて、俺は坂本に、優子は霧島に斬りかかる。

「坂本?さっさと消えてくれるとありがたいんだが・・・?」

「ヘッ、それはコツチの台詞だ!!!」

坂本は、メリケンサックを着けた拳で俺に殴りかかった。

「あつぶねエな・・・」

俺はその拳をギリギリで避け、槍を突き出した。

「何ッ。よけるだど?!」

「けど、まだまだだな。」

坂本の召喚獣は俺に喉を貫かれ、息絶えた。

「優子、大丈夫か?!」

「えっと、ギリギリ・・・」

数学、優子 / 43

数学、霧島、402

優子が俺のほうを向いたとき、霧島が優子に切りかかった。

「危ない!!」

とっさに俺は優子の盾になった。

「痛ッッ・・・!!!!」

俺の胸元に激しい痛みが走り、思わず膝をつく。

「大丈夫?!」

「結構痛いな・・・」

優子が俺に走り寄る。

「・・・油断大敵」

霧島は、優子に切りかかった。

「・・・させるかッ!!!!」

俺はドラゴンを操り、ドラゴンが優子の盾になる。

「謙太!!無理しないで!!」

「なんの・・・これしき!!」

俺は気力で立ち上がり、霧島を見据える。

数学、俺 / 229

数学、霧島 / 379

「この点数差で勝てるか・・・？」

いや、勝てる。俺はあの鉄人にも勝ったんだ。

そう思ったその時・・・

「えゝ連絡です。これより、フィールドを日本史へ変更します。」
福原先生の声がし、フィールドが変わった。

日本史、俺 / 551

日本史、霧島 / 433

「・・・行けるッ！！！」

俺は槍を大上段に振りかぶり、霧島を斬った。

「・・・クッ」

「イツケエエエエエ！！！」

日本史、俺 / 533

日本史、霧島 / 33

「・・・何故止めを刺さない？」

不思議そうに尋ねる霧島。

「そんなことしたら、代表として居づらくなるだろ？」

「・・・ありがとう。」

クツ、可愛い。おもわず顔を逸らしてしまうほどだ。

「お、お礼はいいから、早く補給試験受けてこいよ。今なら誰にでもやられるぞ？」

「・・・うん。」

「優子、お前も数学の試験受けてこい。」

「そうね。行こ、代表！」

「・・・うん！」

優子と霧島は回復試験を受けに行った。

「そんじゃ、俺は一眠り・・・」

「佐藤謙太、勝負！！！」

まだまだ眠れそうもない。

第十九、五話 その弐（後書き）

今回の話もおかしい所が多いかもしれないので、指摘お願いします。
まだまだ続きます。さて、謙太に挑んできたのはいったい誰？！

第十九、五話 その参（前書き）

まだまだ行きます！！
オリ話その参です！！

第十九、五話 その参

「佐藤謙太、勝負!!」

俺が優子たちを送り出し、一眠りしようとしたとき、勝負を仕掛けてきた奴がいた。

「んあ? どうした、久保?」

そこにいたのは、学年次席、久保利光だった。

「君に召喚獣勝負を申し込む。」

「・・・パス。」

俺は丁重に断った。

「何だと? 怖いのか?」

「眠いから・・・」

「そんなのは理由にならない!!」

「俺にとっては大問題・・・ってかお前さ、何でそんなに燃えているの?」

何故か久保の目に、闘志の炎が見えるくらい、久保は熱血だった。

「いいだろう別に!!」

「まあいいけど・・・」

「それでは行くぞ!!」

俺の返事を待たずに、久保は攻撃してきた。

日本史、俺 / 533

日本史、久保 / 425

「・・・この点数差で勝てると思ってるのか？」

「な・・・ここまでだと？」

「取り敢えず、死んでくれ。シンク口。」

俺はシンク口時の輝きを利用し、久保の攻撃を避け、槍を突き出した。

しかし、

「ウグツ・・・」

さっきの戦いのダメージのせいで、槍の軌道がずれ、かすっただけだった。

「貰った!!!」

久保の大鎌にまともに切り裂かれる俺。

「クツ、痛ツツ・・・!!!」

もろにダメージを受け、床に倒れ伏す俺。

日本史、俺 / 135

日本史、久保 / 233

「くっそ・・・負けるか・・・」

「これでおわりだ!!!」

俺が槍に貫かれようとしたとき、

「そうはさせない!」

見覚えのある木刀が、久保の大鎌をはじいた。

「なっ・・・あ、明久？」

「吉井君?! どうしてここに?!」

明久の登場に驚く久保。

「僕の大切な人を傷つけるのは許さない。」

「なんだと・・・?」

絶句する久保。しかしコイツは・・・

「明久、そんなことを言うと、俺が勘違いされるだろ・・・」

「え？」

「吉井君・・・」

久保がうつむいたまま、明久に言った。

「不純だよ！！！」

「は？」

「ハア・・・」

久保は泣きながら走り去っていった。

「まあ何にせよ、助かった。ありがとう。」

「いや、それ程でもないよ」

「そんなじゃ俺は寝るから、見張りよろしく。」

「分かった・・・って、え？どういうこと？」

「優子がきたら起こしてくれ。」

「？え〜っと、見張りって？」

俺は明久の質問をシカトして、眠りに落ちた。

「謙太、起きて！」

俺が目を覚ましたとき、優子がいた。

「えっと・・・今何時だ？」

「時間はわかんないけど、たぶんもうすぐ日本史が終わると思う。」

もうすぐ日本史が終わるって事は、30分ほど寝ていたということだな。

「それじゃ、順位確認して、1位潰す？」

優子が言った。しかし、俺には別の考えがあった。

「面白いことをしよう。優子、愛子と霧島を呼んできてくれ。」

「いいけど、何するの？」

首をかしげる優子。

「それはお楽しみだ。教科が変わったら、死に物狂いで働くことになるぞ。」

「？なんかわかんないけど分かった」

「そんじゃ、校門で待つといてくれ。」

「謙太は何処に行くの？」

「俺は、放送室だ。」

「ふん。がんばってね。」

「任せな。絶対一位になってやるから。」

そういつて、俺は優子と別れた。

「え、連絡です。これより、教科が化学にかわります。」

福原先生の放送後、俺は行動を開始した。

「よっし、出番だな。」

俺は、放送室をジャックして、放送器具で呼びかけた。

「え、つと、二年E、Fクラスのバカ共、俺が滅ぼしてやるから、校門で待ってな。」

そういつて、俺は校門に急いだ。

「何のつもり？」

校門に着いた俺は、優子に聞かれた。

「これで、探しに行く手間が省けるだろ？」

「ああ、そういうこと・・・。」

「相変わらず無茶するねえ。」

優子が言った。

「けど、E、Fなら俺ら4人でヨユーだろ？」

「確かにね。」

「けど、姫路さんはどうするの？」

姫路は、Fクラスが大好きだから、バカにされたら必ず来るはずだ。

「どうにかなるだろ、来たぞ。」

「謙太あああああああ！！！！」

「・・・面倒臭そうだな」

「自分が仕掛けたんでしょ？」

大体4〜50人程度だ。

化学、俺 / 566、優子 / 322、愛子 / 313、霧島 / 447

「そんじゃ行くぜえ？シンクロ、そして巨大化あ！！！！」

俺は、ドラゴンを巨大化させ、巨大火球を連続で放たせた。

チユドーン！！

「ぐあああ！！！！」

約10人撃破。

「優子、愛子、霧島、仕掛けてくれ！！！！」

「OK！！！！」

「そんじゃいつけええええ！！！！」

再び俺は火球を放つ。

ドーン！！

「これ以上はやらせません！！！！」

「姫路か・・・」

俺が見た先には、姫路が立っていた。

「いくら謙太君とはいえ、これ以上は許しません！！！！」

その言葉と同時に、姫路は腕輪で熱線を放つ。

「当たるかよっ！！！！」

俺はそれを避け、縮小化したドラゴンにまたがった。

化学、俺 / 424

「点数は五分か・・・それなら!!」

俺はドラゴンから離れ、槍を振り、衝撃波を放った。

「キヤアツ!!!!」

見事に直撃。流石に操作には慣れてないか・・・

「まだです・・・」

「もうおわりだ・・・これ以上は止めて、降参してくれ。」

姫路の点数はもう0に等しい。

しかし、俺はまだ400近くある。

「・・・分かりました。」

負けを認め、大人しく去っていく姫路。

そして、その姿を見て、意気消沈するE & amp; Fクラス。

「よっし、片付け終わったな。」

「そうね。」

「おつかれさま」

「・・・お疲れ。」

ちなみに、俺は、

順位1位、26KILL

だった。

そして、

「え、これより昼休みに入ります。1時間ほど、休憩してください。」

午前中の戦いは終わった。

第十九、五話 その参（後書き）

どうでしたか？

おかしいところは校正お願いします！！

オリ話は疲れる・・・

第十九、五話 その四（前書き）

オリ話その四です。

第十九、五話 その四

昼休みになり、俺、優子、霧島、愛子（ついでに坂本）は学食へ向かっていった。

その時、

「連絡です。佐藤謙太君は学園長室へ行って下さい。」

何故か俺が学園長に呼ばれた。

「メンドクサ……」

「また何かしたの？」

優子に聞かれるが、俺は首を振る。

「何もしてない。しいて言えば、放送室無断使用ぐらいだが……」

「それじゃおかしいわね。」

俺は、色々と考えたが、何も思いあたらなかった。

「取り敢えず行ってくる。」

「あ、私も行く。」

「いつてらっしょい。」

愛子に見送られ、俺と優子は学園長室へと向かった。

「失礼します。」

「俺に何か用か、クソババア？」

「謙太!!!」

俺たちは挨拶をして学園長室に入った。

「相変わらずご挨拶だね。クソガキ。」

「それはどうでもいいとして、用事は何だ？」

さっさと昼飯を喰いたかったので、早速本題に入った。

「まったく……まあいいさ。この大会、あんたに負けて欲しいの
な。」

「・・・何故だ？」

「この大会の優勝賞品は、黒金の腕輪Ver.2なんだけどね・・・」

「Ver.2？」

「そうさ、今回は、得点による使用制限を完全に修理したもののさ。」

「ふうん・・・で？」

「そこまではいいんだけど・・・アンタはもう一つ腕輪を持ってるだろう？」

「ああ。」

「だから、アンタには使えないのさ。」

「なるほど・・・」

「どうということ？」

優子が聞いた。

「たぶん、不正防止かなんかのために、2つ以上の腕輪の同時使用が出来ないんだ。」

「へえ・・・」

「そういうことさね。だから、アンタに1位を取られると厄介なのさ。」

俺は考えた。

「・・・見返りは？」

「ちよつと謙太!？」

「ただでこんな楽しい戦いを放棄するわけには行かない。」

俺はこの戦いを楽しんでいる。これは真実だ。

「まったく・・・ちゃんと用意してあるよ。」

「え？学園長？」

だろうな。俺がただで動くとは思っていない筈だ

「それは何だ？」

「今回の腕輪に、アンタがシンクロしたとき、面白い仕掛けを用意しておいたさ。」

ようするに、何か起こるようにしたんだろう。

「なるほど。分かった。」

「そんじゃ、交渉成立さね」

「邪魔したな。」

俺は、用事が済むとさっさと外へと向かった。

「ちよつと謙太・・・」

「あら、もう行くのかい？」

「早く帰らないと、飯食う時間がない。」

「今回の協力の礼に、ここで飯を食わせてやるうと思ったんだけど、残念だったさね。」

思わず足が止まった。

「・・・メニユーは？」

一番肝心なことを尋ねた

「あんたの好きそうなものばかりさ。」

「分かった。さっさと持って来い。」

よし、いいもんゲット。

「謙太・・・あんたって・・・」

「まったく、アンタは礼儀を知らないのかい？」

「俺が礼儀を使うのは、人間だけだからな。」

「・・・飯が欲しくないのかい？」

「すみませんでした!!」

気づいたときには土下座をしかけていた。

「分かればいいのさ。シエフ、急いで作ってくれ。」

「シエフがいるのか・・・？」

こうして、俺たちは優雅な昼食を送った。

「ひっさしぶりにいいもん喰ったな。」

「アンタって、ホントに礼儀がないよね・・・」

「気にすんな。」

俺たちが、学園長室から戻っていると、放送があった。

「え、途中経過を発表します。1位、佐藤謙太。2位、木下優子さん。3位、霧島翔子さん……」

「何で俺だけ呼び捨てだ……!!」

福原先生、あんたの事、信じてたのに……

「そして、これより午後のバトルを開始します。最初の科目は英語Wです。健闘を祈ります。」

その声と共に、後半戦の火蓋がきって落とされた。

「……佐藤謙太!! 覚悟!!」

「またか……」

俺は一位になつてはいけないので、俺がダメージを与え、優子に止めを刺させてる。

後半戦が始まって約1時間。

そろそろ科目が変わる筈だ。

「そろそろ科目が変わるぞ。踏ん張れよ!!」

「分かつてる!! 私を誰と思つてんの?」

優子はかなり頼もしかった。

確実に止めを刺し、グングンKILL数が上がっている。

「これって、コー〇、オブ、デューティみたいだな……」

「何の話?」

「いや、なんでもない。」

俺たちはそんな話をしながら、次々に相手を補習室送りにした。

そして、その戦いが一段落したとき、

「……佐藤謙太、覚悟」

クナイと共に、俺の目の前に相手が現れた。

「・・・ムツツリー二か。」

それは、ムツツリ商会の経営者、ムツツリー二だった。

「・・・覚悟。」

「いくら消耗していても、お前には負けない、シンクロ!!」

俺の召喚獣が輝き、感覚を同調させた。

英語W、俺 / 324

英語W、ムツツリー二 / 32

「くたばれえ!!」

俺は止めを刺そうとした。しかし、ムツツリー二は小太刀で俺の攻撃を受けきっていた。

「なっ・・・あの点数差で？」

「・・・よく見る。」

よく見ると、いつの間にか教科が保健体育に変わっていた。

「うっそだろ・・・？」

保健体育、俺 / 221

保健体育、ムツツリー二 / 552

「・・・勝ち目ねえな、こりゃ。」

「・・・俺の勝ち。」

ムツツリーニが、俺に止めを刺そうとした。

「まあ、一人だったらの話だがな！！！！」

「・・・何?!」

「はああああああ！！！！」

優子が、ムツツリーニに向かって槍を振り下ろした。

「・・・クツ」

ムツツリーニがそれを回避する。

保健体育、俺 / 210、優子 / 345

保健体育、ムツツリーニ / 532

「助かった。」

「ボーっとしないの！！」

「わりい・・・」

「・・・(メラメラメラ)」

俺たちの様子を見ていたムツツリーニが、何故か燃えていた。

「どうした？ムツツリーニ？」

「・・・許さない。加速。」

ムツツリーニの腕輪が光り、ムツツリーニが姿を消した。

「なっ・・・何処だ？」

俺は取り敢えず槍を振り回して衝撃波を起こし、ムツツリーニを捉えた。

「・・・甘い」

若干のダメージを与えたが、それでも止まらない。

ムツツリーニ（本体）のほうを見てみると、優子の方を見ている。

「狙いは優子か・・・させるか!!！」

俺は優子の召喚獣の前に立ち、ムツツリーニと正面から刺し違えた。

保健体育、俺 / 0

保健体育、ムツツリーニ / 299

「ゲアツ!!！」

俺は戦死した。

「・・・俺の勝ち。」

「・・・俺の負けだ。だが、優子!!！」

「うん!!！」

優子は高く飛び、その勢いでムツツリーニを叩き割った。

保健体育、優子 / 311

保健体育、ムツツリーニ / 0

「・・・負けた。」

ムツツリーニは立ち去った。

そして、

「・・・よくやった、優子。」

俺は、フィードバックで多大なダメージを受け、倒れた。

第十九、五話 その四（後書き）

謙太、初の戦死です！！

ホントはさせるつもりなかったんですけど、なんか存在が完璧すぎで、バランスおかしかったんで、一回してみました。

取り敢えず、今後もどんどん感想とか質問とかお願いします。

第十九、五話 その五（前書き）

オリ話その五です。

第十九、五話 その五

「んっ……」

「大丈夫？」

俺は、保健室で目を覚ました。

「ああ、なんとかかな……」

まだ刺されたと所は痛むが、大した事はない。

「補習に行かないとな……」

俺は、鉄人の補習へ行こうとした。

「待つて。そういえば、今のは戦死扱いにならなかったみたいだよ？」

それを、優子が遮っていった。

「何？」

俺は、召喚獣を確認した。

なるほど、確かにKILL数が減っていない。

「学園長が、『あのガキに恩を売っておくのも悪くないさね』なんて事を言ってたから、たぶん学園長のお陰だと思っ。」

「ババアもたまにはいい事やるじゃないか。」

助かった。

こっからまた30前後もやるのは苦痛だ。

「……それでも6位か。」

「急がないと、もう時間がないよ？」

「分かってる。」

俺は、時計を確認した。

もう既に3:30を回っている。

この大会は、4:00までで、もう時間がない。

「優子、5位は誰だ？」

俺は、潰すべき相手を聞いた。

「えっと……確か久保君だったと……」

「・・・又あいつと闘るのか・・・」
さつき潰したために、少しやり辛い。

「えっと、取り敢えず急ごう?」

「そうだな。アリガトな、優子。」

取り敢えず付き添ってくれていた優子に礼を言った。

「え?えっと、うん。」

「そんじゃ行くか。」

俺は、久保を探して学校内を走り回った。

「よう、久保。」

「・・・キミか。」

「さつきは俺に勝負を仕掛けてきたが、もういいのか?」

「ああ。なぜならもう5位だからね。」

「そんじゃ、潰させてもらおう。」

「・・・やれやれ。」

そういつて、奴は臨戦態勢に入った。

総合、俺 / 3172

総合、久保 / 2440

「なっ・・・何故消耗してないんだ?!」

「さあな? 1と2教科まったく使っていないからじゃないか?」

実際は結構消耗しているが、久保をやるには十分な点数だった。

「そんじゃ、死ね。」

「なっ・・・そんなバカな・・・」

俺の斬撃は、久保を真つ二つに切り裂いた。

それと同時に、

キーンコーンカーンコーン

この大会が幕を閉じた。

そして表彰式。

一位は優子。

二位は霧島。

三位は愛子。

四位は姫路。

そして俺が五位だった。

「さて、まず副賞の、召喚獣のデザイン変更がしたい奴は、後で学園長室にきな。」

ババアが言った。

「そして、メインの賞品だが、1位の賞品は、黒金の腕輪Ver2だよ。」

「ありがとうございます。」

その賞品を、優子が受け取り、俺に向かってガッツポーズをした。

「二位は如月グランドパークの特別ペアチケットだ。」

「……ありがとうございます。」

霧島は、望みの物が手に入ったらしい。

小躍りして喜んでいる。

坂本は顔を真っ青にしていた。

「三位は点数による腕輪の能力変更だよ。やりたかったら、学園長室にきな。」

「ありがとうございます。」

愛子は軽い返事をして、チラッとムツツリー二を見た。

どうやら同じ能力にしようか迷っているらしい。

「四位は腕輪を使える点数の減少だ。プログラミングするから、学園長室にきな。」

「ありがとうございます。」

姫路は丁寧にお辞儀をした。

「そして5位のアンタだけ……アンタは腕輪の改修でいいさね。」

「……モンクない。」

「そうかい。それなら、これにて終了だね。」

こうして、表彰式は終わった。

「優子」

「分かってるわ。」

優子は、分かったように俺をみて、

「アウェイクーン!!」

フィールドを展開した。

「そんじゃ行くぜ。サモン。そしてシンクロ!!……!!」

そのとたん、俺の意識は消えた。

「「いってて・・・」」

「え？」

優子が何故か俺を見て驚いている。

つてか、なんか声がしたぞ？

「「優子？」」

「はひっ?!」

明らかに驚いている、つてか声がハモってる。

「「もしかして、召喚獣がしゃべってる？」」

「う、うん。」

優子はまだ動揺を隠しきれないようだ。

「「えっと、これが面白いことか。」」

「そう、みたいだね・・・」

この程度か・・・

正直がっかりしたが、まだこれだけではなかった。

「「そういえばもう一個キーワードがあつてね。」」

「へえ。使ってみるよ。」

「うん。えっと・・・チェンジ」

ふたたび、俺の意識は途切れた。

「「えっと・・・」」

「あれ？何にも変わってない？」

「「俺的にはメツチャ変わってる。」」

「え？」

「「今俺、召喚獣の視線だ。」」

「え・・・？」

今俺は、視線が完全に優子の膝くらいだ。

「「こねって・・・バグ？」
「
なんか面白いことになってきた。」

第十九、五話 その五（後書き）

どうでしたか？

要するに、意識が召喚獣に移っちゃったって事ですね。
分かりづらかったらスミマセン・・・

第十九、五話 その六（前書き）

オリ話完結編です。

第十九、五話 その六

「さで、どうしよう・・・」

なんだかんだで、俺は、この状況を楽しんでいた。

そして、いくつか出来た疑問を、1つずつ解消してみた。

まず、武器は使えるのか？

「おつ、武器出てきた。」

俺が武器の事を考えたとき、あの槍が出てきた。

「へえ、結構重いんだな。」

俺は、あの槍を振り回してみた。

「ふん!!」

槍を思いっきり振ると、例の衝撃波が出た。

「技使えるんだな・・・」

次の疑問、ドラゴンには乗れるのか？

「ドラゴン、出て来い!!!」

俺がそういうと、ドラゴンが現れた。

「このサイズで見ると、結構怖いな・・・」

そう言いつつ、俺はドラゴンにまたがった。

「いい眺めだね。」

俺は、ドラゴンで空を飛んだ。

結構な高さで、いい気分だった。

そして最後の疑問、腕輪は使えるのか。

「巨大化!!!」

そういうと、ドラゴンが大きくなり、子供くらいの大きさになった。

「なるほど・・・」

要するに、この状態でもフツーに戦えるんだな。

「これは面白いな。」

この状態で、戦うとどうなるんだろうか・・・

「……そろそろ、召喚解いてくれないかな？」

俺の姿に、優子がかなりビビッていた。

俺と召喚獣が完全に同じタイミングで話していたからだ。

「「そうだな。解除」」

俺は召喚を解除した。

すると、何故か俺の本体が消えて、俺（召喚獣）だけが残った。

「……あれ？」

「どうしよう、謙太が消えちゃった!？」

優子はかなりあせっている。

「謙太、戻ってきてよ……謙太!！」

そして、何故か泣き出してしまった。

「優子、俺はここに居……」

「私、まだ本当の気持ちも言えてないのに、こんなやだよ!!!！」

「え？」

優子のその言葉を聞いて、ここは、口を挟むところじゃないと悟った。

優子の本心を聞いてみたい、俺はそう思い、端に隠れた。

「私、ずっと謙太の事が好きだったのに、こんなところで消えちゃうなんて……あんまりだよ!！」

優子は一人で続ける。

「謙太って、とつても友達思いで、いくら私が冷たく接しても、全然苦しなかつたよね。」

昔の優子は、家でのズボラを隠すために、ほとんど友達を作らなかつた。

「そんな謙太のおかげで、私にも友達がたくさん出来たし、笑う機会がすつごく増えた。」

「そして、私の部屋を見たときも『良かった。優子も完璧じゃない

んだ。』なんていつてくれて、とっても嬉しかった。」

「優子……」

「だから、いつかこの気持ち伝えようと思ったのに……俺はそんなにいい奴じゃない。」

優子にとても申し訳なくなつた。

そして、それと同時に優子がとても愛おしく思った。

「ババアに直させるか……」

俺は、聞かなかつた事にして、その場を後にした。

「邪魔するぞ、ババア」

「おや、面白い姿じゃないか。クソガキ。」

「取り敢えず、元に戻せ。」

「どうしてだい？あの娘に直してもらえばいいじゃないか。」

「それが無理だからここに来たんだ。」

俺は物凄い形相でババアをにらんだ。

それは、優子に対する申し訳無さをぶつけたものだ。

「ハア、分かつたよ。コツチにきな。」

俺は、ババアのパソコンの横に座つた。

「まったく、手間を掛けさせてくれるさね。」

ババアの皮肉を無視して、俺は寝た。

そして、数十分後。

「さつさとおきな。」

「終わったのか？」

「終わったよ。」

俺は、元の姿に戻っていた。

そして、何故か腕輪が輝いている。

「腕輪の改修と一緒にやっておいたから、感謝するんだね。」
「ああ、すまなかった。」
「ばかに正直じゃないか。」
「モンクあんのか?」
「いや、素直な奴は嫌いじゃないよ。」
「そうか、じゃあな。」
俺は、学園長室を後にした。

「優子!!」
「け、謙太!?!」
優子は、まださっきのところに座っていた。
「どうしたのよ!?!いきなり消えたから、驚いたじゃない。」
優子は、真っ赤に腫らした目をこすりながら、俺のほうに向かってきた。

「わりい。目が覚めたら、Fクラスの端のほうに倒れてたんだ。」
俺は嘘をついた。流石にあのことを言ったら、ショックで倒れるかもしれないからだ。
「まったく、心配したんだからね。」
「?なんか言ったか?」
「なんでもないわよ!!」
優子は、顔を真っ赤にして俺を小突いた。
「悪かった。お詫びになんか1個言うこと聞いてやるから。」
「ホント?じゃあ・・・」
優子は、腕を組んで考えた。
「また遊びに行こ?」
「OK。金はあるぜ。」
「やった!!全部奢ってね!!」
「え・・・?それはちよつと・・・」

「けつて〜い!〜!」

「おいおい、相変わらず強引だな・・・」
ま、いいか。

こうして、今大会は幕を閉じた。

余談ではあるが、霧島は坂本を如月グランドパークに誘ったらしい。
坂本、終わったな・・・

第十九、五話 その六（後書き）

どうでしたか？

初のオリ話連載でした。

召喚獣のデザイン変更は、また別の番外編でやりますので、お楽しみに！

第二十話（前書き）

今回は、アニメ第7話のプロローグみたいなものです。
設定オリジナルなので、おかしいところはすぐ言ってください。

第二十話

カンカン照りの太陽が夏の訪れを感じさせる、いつもと同じ平日。あの大会が終わり、俺たちは一時の休息を楽しんでいた。

「そういえば、腕輪の改修って何されたの？」

優子が聞いてきた。

優子には、この前のことは言っていないから、昨日もう一度学園長室に行った。

「ああ、大した事じゃない。シンクロ率を自分で決められるようにしただけだ。」

要するに、今までは100%だったシンクロ率を、30、50のように低くしたり、あるいは120、150とそれ以上にあげることもあるということだ。

「へえ、それなら、謙太があんなに痛い思いをする必要がなくなるんだね？」

「まあな。」

逆に、これ以上ダメージを受けることもあるわけだが・・・

「良かったね。いつつ倒れてたから・・・もう看病できないのは、ちよつと残念だけど。」

「ん？なんか言ったか？」

「ううん、なんでもない。」

優子が小さい声で何か言ったが、聞き取れなかった。

「そうか。そういえば、霧島はどうしたんだろうな？」

「え？代表がどうかしたの？」

「ああ、霧島の賞品って、ペアチケットだったろ？」

二位は、どっかのペアチケットだった筈だ。

「うん。それがどうかしたの？」

「それってどこの奴だっけ？」

「えっと、確か如月グランドパーク？」

「そう、そこ。あそこって、来たカップルが幸せになるとか言っジ
ンクスがあつたる?」

そのジンクスを作るために、この学園をはじめ色々なところにペア
チケツトを配っているらしい。

「そういえばそんなものがあつたわね・・・」

「ん〜っと、ちょっと霧島に協力してやろうかな・・・?」

「それは面白そうね。私も参加したい。」

俺は、ちよつとしたいはずらをする事にした。

「それじゃ、学園長室に行くか?」

「最近、あそこに結構お世話になつてるよね〜」

優子が知らないところも含めれば、あのババアにはかなり世話にな
っている。

結構助かっているから、呼び方を直したほうが良いか?

「そりゃこの学園の長だからな。」

「理由になつてないよ。」

「まあいい、さっさと行こう。」

俺たちは学園長室へと向かった。

「邪魔するぞ。」

「失礼します。」

「なんだ、また来たのかい、腕輪コンビ?」

予期せぬ来客に、少し驚く学園長。

「一体何の用だい?腕輪が故障したのかい?」

「折り入って頼みがあります。」

俺は、敬語を使って話した。

「どうしたんだい?アンタらしくないさね。」

「いや、大した事じゃないんですが、如月グランドパークのオーナ
ーに、俺たちを紹介して欲しいんです」

「そんな事かい・・・？」

「ちなみに、その日は霧島さんに渡したチケットと同じ日にして欲しいんです。」

「別にかまわないさね。」

「え？ありがとうございます。」
「やけに素直だな。」

最近学園長の俺に対する態度が良過ぎる気がする。

「オーナーには、私から連絡を入れておくから、直接会いに行くといい。」

「色々ありがとうございます。しかし、何故そこまで行ってくれるのですか？」

俺がそのことを聞くと、学園長は苦い顔をして、こう言った。

「そうさね。それじゃあ、そっちの優等生は外に出といてくれないかい？」

「え？あ、はい。分かりました。」

学園長の言葉を受けて、優子は外に出て行った。

「それで、何故ですか？」

「アンタに渡した腕輪は、まだ完成形じゃなくてね・・・」

「それがどうかしたのですか？」

「実は、その腕輪には・・・」

「死の危険があることが分かったのさ。」

「・・・ッ!？」

俺は言葉を失った。

「まあ可能性は低いんだけどね・・・」

「シンクロするからなのか？」

気づくと俺は、敬語を止めていた。

「それもあるんだけど、一番の原因は、黒金の腕輪の所為だよ。」

「優子が貰った？」

「そうさ。アレで、チェンジってあったろ？」

「ああ。」

「それを使うと召喚獣と入れ替わっただろ？」

「アレか。」

「それなんだよ。それを使うと、魂が入れ替わるんだけど、魂が上手く入れ替わらない可能性がある。」

「・・・ということは・・・？」

「魂が体から離れたまま、二度と戻って来れなくなる訳さ。」

「マジかよ・・・」

召喚獣の所為で死ぬなんてゴメンだ。

「けど、チェンジを使わなければいいんだろう？」

「そうは行かないのさ。」

学園長は言った。

「私も教育者の端くれだから、子供に死の危険を伴わせるのは気が進まない。しかしあの能力は、データが足りないからね。もっと使う必要がある。ただし・・・」

学園長は続けた。

「アンタが辞退するのを止めはしない。」

「・・・」

思わず黙り込んでしまった。

優子のあの姿が、本当のものになる可能性がある。そう思うと胸が痛かった。

しかし、

「どうするんだい？」

「・・・俺が止めたら、別の奴が？」

「そうなるさね。」

俺以外の奴に死の危険を伴わせるわけには行かない

「・・・やる。」

「ここまで聞いて、やるのかい??」

学園長は言った、

「俺がやらずに誰がやるんだ。」

「たいした根性さね。それなら・・・」

学園長はこう言った。

「私に出来ることなら、何でもするから言いな。」

学園長は、そう言って俺にあるものを渡した。

「わかった。確かに、相応の対価だな。」

俺は、そう言って外に出ようとした。

「ちよいと待ちな。」

「なんだ？」

「アンタ、あの彼女を泣かすんじゃないよ。」

「彼女じゃねえ!!！」

「はいはい。」

「つたく・・・じゃあな。」

そういつて俺は外に出た。

「何の話だったの？」

優子は、Aクラスの教室に戻っていた。

「いや、腕輪についての説明があっただけだ。」

「ふうん。」

「それじゃ、さっさとオーナーに会いに行くぞ。」

そういつて、俺たちは如月ハイランドに向かった。

第二十話（後書き）

どうでしたか？

なんか重い話になりました・・・

たぶん主人公が死ぬことはない・・・と思います。
感想お願いします。

第二十一話（前書き）

如月ハイランド編です

第二十一話

俺たちは、如月ハイランドのオーナーに会いに行った。

「よく来たね。私が如月ハイランドの責任者だ。」

オーナーは、初老の優しそうな男性だった。

「こんにちは。」

「キミたちがここで働きたい人達かい？」

「いえ、後4〜5人居ます。」

オーナーとは、主に優子が話していた。

4〜5人とは、Fクラスの明久、姫路達と、愛子である。

「そうかい。働けるのは今週の日曜日らしいね。」

「はい。実は、その事で相談が・・・。」

言いづらそうに本題を切り出す優子。

「なんだい？文月学園の学園長さんから、何でも協力してあげてくださいって言われてるから、何でも言いな。」

学園長は、話を通しておいたらしい。

「そうなんですか？実は、文月学園に配られたペアチケットの企画がありますよね？」

「ウエディング体験のことかい？」

「それです。そのウエディング体験を一組だけプロデュースさせて欲しいのです。」

「そんな事かい？全然いいよ。」

「そのために、お化け屋敷を貸して欲しいのですが・・・。」

「分かった。今週の日曜日にお化け屋敷を貸してあげるよ。」

「ありがとうございます。」

交渉は余裕で成功した。

「そのかわり」

・・・ワケじゃなかった。

「もう1カップル来て欲しいんだけど」

「え？えつと・・・」

「キミ達が、別の日に来てくれないかい？」

「え？」

俺と優子は、啞然とした。

「ちようどいいじゃないか。お似合いカップルだよ？」

「・・・ツ！？（ノノノ）」

お似合いカップルだと！？傍から見るとそうなのか・・・？

「どうしたんだい？顔が真っ赤だけど？」

「何でもありません！！」

思わず大声を出してしまった。

「そんなに怒らなくても・・・」

「すみません・・・」

「いやならいいんだよ？」

「いえ、タダで協力してもらうのは、心苦しいので、行きます。」

「え？」

ちよつと待て、そんなことしたら・・・

「そうかい。ありがとう。」

「ちよつと、俺は何も・・・」

「それでは、失礼しました。」

「ありがとうね。」

そういうと、優子は俺を掴んで外に出て行った。

「優子。」

「なに？」

外に出て、俺は優子に言った。

「いいのか？あんな約束して？」

「しょうがないでしょ？背に腹は変えられないって言うじゃん。」

「そうか、まあいい。」

「え？」

俺の言葉に、優子が驚いた。

「謙太、嫌じゃないの？」

「何が？」

「何がって・・・その、私と如月グランドパークに行くこと。」

「嫌な理由がない。」

「え？」

「まあ、優子がいやなら別にいいが・・・？」

「私は・・・行ってあげてもいいわ。」

優子はふいつとそっぽを向いた。

改めてみると、やっぱり可愛いな・・・

そして俺のことが好きだと知っているから、そのことはとても嬉しい。

「・・・何みてんの？」

けど、俺には優子の気持ちは受け取れない。

「・・・謙太？」

俺は優子が思ってるほどいい奴じゃない。

「ちよつと謙太？」

本当の俺は・・・

「謙太ってば!!!」

「んなつ!?!」

いきなり頭をどつかれた。

「どうしたのよ?ボーンとして。」

「いや、ちよつと考え事してた。」

言えない。

優子の事を考えてたなんて、絶対言えない。

俺は適当にごまかした。

「ふん」

優子も、それ以上は聞かなかった。

俺達は黙ったまま家に向かった。

「ねえ」

「ん？」

突然、優子が話しかけてきた。

「困ったことがあったら、何でもいってね？」

そして、唐突にそんなことを言われた。

「何の話だ？」

「なんでもない。」

俺は意味が分からなかった。

そして、優子は俺の横から、俺の歩く前に走って、おもいっきり笑顔になって、こういった。

「どんなときでも、私がついてるからね!!」

やっと分かった。この前俺が消えたときに、優子は俺に気持ちを伝えなかったといった。

これもその1つなのかもしれない。

「ああ、分かった。」

俺は、優子に返事をして家に帰った。

第二十一話（後書き）

またまたプロローグ的なアレになってしまった・・・

ってか告白のタイピングはどうする・・・？

まったく考えてない作者のために、コメント、アイデアお願いします！！

第二十二話（前書き）

如月ハイランド編 Part 3 です。

第二十二話

坂本たちのデートの当日。

「皆そろったか？」

俺たちは如月ハイランドの従業員室に着ていた。

「そろった・・・けどどうしてこんな時間に？」

明久が答えた。

ちなみに時刻は6:30。

「色々な準備があるから、こんくらいの時間にきとかないとダメだろ？」

「まあ、そうだね・・・」

流石にこの時間は眠いのか、みんなあくびをしている。

ちなみにメンバーは、俺、優子、愛子、明久、ムツツリーニ、姫路、美波の7人だ。

「それじゃ、さっさと準備を開始しよう」

俺は、今回のプランについて説明した。

「まずは、お化け屋敷のセッティングだ。これは・・・」

「私たちがやるわ。」

優子と愛子が、出てきていった。

「わかった。それじゃ、こんな感じで作ってくれ。」

俺は企画書と称したルーズリーフを手渡した。

「次は、あいつらの案内係だが、これは、明久・秀吉ペアで行ってもらう。」

「ほーい。けど、どんなことをすればいいの？」

「その名の通り、案内だ。たとえば・・・」

そう言っつて、ルーズリーフを渡した。

「漢字が読めないんだけど・・・？」

「ワシは大体分かったから、明久にはワシが説明しよう。」

そういつて、秀吉は明久を連れて行った。

「姫路と美波にも、案内をしてもらおうが、これを着てもらおう。」

そういつて。俺はフィー、ノイン、アインの着ぐるみを指差した。

「あっ、かわいいです〜」

「これを着ればいいのね？けど、ノインはどうするの？」
美波が聞いてきた。

「それは、お前らが選んで……」

「「アキ（明久君）がいい（です）！！」」

「そ、そうか……分かった。」

そういつて、俺は姫路たちにもルーズリーフを渡した。

「ムツツリは二人の写真を撮っていてくれ。」

「……略の仕方がおかしい。」

「まあ、別にいいから」

「……全然良くない。」

そういつて、俺は強引に、ムツツリ二にルーズリーフを渡した。

「そういえば、謙太は何するの？」

ルーズリーフを見ながら、美波が聞いてきた。

「俺は、総司令だ。」

「そうしれい？」

「そうだ。監視カメラの画像を見ながら、その場その場で細かい指示を出すのが、俺の役割だ。」

「へえ〜」

「例えるなら、エヴァ○ゲリオンの碇司令だ。」

「？」

「なんでもない。」

女子に言っても分かんないか……？

「それじゃ、各自用意を済ませてくれ。後、これを。」

俺は、全員にトランシーバーを渡した。

「これで俺が指示を出すから。」

「こんなに買ったんだ……」

「ババアに奢らせた。」

「……………すご!!!!」「……………」

「俺はババアの弱みを握ってるからな。」

まあ、確かにアレは弱みといえれば弱みだ。

生徒を死の危険にさらすなんて、正気の沙汰じゃない。

「ま、とにかくさっさと準備を始めてくれ。」

そういつて、俺たちは準備に取り掛かった。

俺は、優子、愛子と共に、お化け屋敷の改装(?)に取り掛かった。ここのお化け屋敷は、廃病院を改装したと言う設定になっている。

「取り敢えず、前半はこのままで良い。」

俺たちは、前半は普通のままにして、途中のスピーカーの部分に向かった。

俺は、ある道具を取り出していった。

「ここだ。ここに、これらを取り付ける。」

「……マジ?」

「わあ、結構危険だね。」

優子と愛子は、俺が出した道具に驚いていた。

「大丈夫。霧島に害はない。」

「坂本君は……?」

「どうでもいいかな。」

「いいんだ……」

「ちょっとボクも同情しちゃうね……」

そんな話をしながら、俺たちはその道具たちを設置した。

ちなみに、スイッチを入れると出て来る仕組みだ。

「これだけで十分だろ?」

「たぶんね……?」

「十分だと思う……」

「それじゃ、こつから先の仕掛けを全て取り払うぞ。」

「ええ・・・？」

「どうして？」

優子はメンドクサそうで、愛子は何故かがわからない様子だ。

「たぶん、こつから先は仕掛けにかまう暇がなくなると思う。」

十中八九そうなるな・・・

「へえ・・・」

「そうなんだ？」

俺たちが、仕掛けを済ませ、外に出たのは8：50分だった。

客が来るまであと10分。

「さて、戦闘開始だな・・・」

俺は、気合を入れて総司令部（仮）に向かった。

余談だが、明久が

「どうしよう・・・誰かから殺される・・・」

なんて事を言っていた。

どうやら、非通知発信で『お前を殺す』なんて事をいわれたらしい。

ヒイロじゃん・・・

第二十二話（後書き）

プロローグその3です。

次からは、本編に入ります。

お楽しみに！！！！

第二十三話（前書き）

ようやく如月ハイランド本編です。

第二十三話

（明久目線）

『来たぞ、坂本だ。正門に居る。』

謙太がトランシーバー越しにいった。

「分かった。秀吉！」

「うむ、正門じゃな？」

僕と秀吉は、正門に向かった。

「（いたよ、謙太！！）」

『マスクをつけて、あいつらのところに行け。』

「（うん。）」

僕たちは、マスクをつけて雄二に近づいた。

「あつ、バカ、止める！！」

「・・・恋人同士は、みんな腕を組む」

「逃がさないように関節を決めてるのはお前だけだ！！！！」

相変わらずラブラブだなあ・・・

「（それじゃいくよ？）」

「（うむ。）」

僕たちは、雄二の前に行った。

「「いらっしやいませ、如月グランドパークへようこそ！！！！」」

僕たちがそういうと、雄二は黙ったまま携帯を取り出した。

誰に掛けてるんだろう・・・

P r r r r r、P r r r r r

その時、僕の携帯がなった。

「こんなときに、誰から・・・？」

僕はしぶしぶ携帯をとった。

『ヨオ、明久。 teme 面白いことしてるじゃねえか・・・？』

着信は雄二からだった。

まさか・・・ばれた！？

「ダツシュ!!」

「なっ、待つんじゃ明久!!」

僕たちはダツシュした。

「ひっ、人違いですっ!!!!」

「どうしてお前がここに居るんだよ!!」

僕たちは逃げた。

けど、噴水の前で、僕たちは追い詰められた。

「お前までどういっつもりだ、秀吉!!」

雄二がそう言くと、秀吉はマスクと髪留めのピンをはずした。

「何のことでしょう? 私は如月グランドパークのスタッフでございます。」

さすが秀吉、持ち前の演技力を生かして、動揺を完全に隠している。

「お客様の知人とは、えんもゆかりもございません!!」

秀吉は、そ言い切った。

すごい、僕まで秀吉が秀吉じゃないような気がしてきた。

「あくまでもしらを切るといっなら!!」

雄二はまたもや携帯を取り出した。

「マズイ、携帯を鳴らすつもりだ!!」

『携帯を捨てる!!!!』

謙太の声が、トランシーバー越しに響いた。

「チイツ、その声、謙太か!?!」

秀吉は、携帯を懐から取り出すと、

「おおっと、手が滑りました!!!!」

噴水に向かって投げた。

「そこまでするか・・・?」

『ナイス!!!!』

秀吉の行動に、雄二は呆れて、謙太は喜んでいた。

秀吉は、平静を保ったまま、二人に近づいた。

「招待チケットはお持ちですか?」

「・・・はい」

霧島さんが、この前の大会の賞品だったチケットを渡した。

「おお、これは特別企画のプレミアムチケット!!」

秀吉はそういうと、トランシーバーを取り出した。

「《アルファ》よりb、^{フラボ}ターゲット確認。コードの生のウエディングソフトをしくぞ。確実に仕留めるのじゃ!!」

「・・・了解」

「おい、こら、何だ!!その不穏当な会話は!？」

雄二が秀吉に突っ込む。

それより、ふおんとうって・・・?

「お気になさらずに。こちらの話です。」

「明らか俺たちのことだろ!!」

雄二の言葉をことごとくかわす秀吉。

「秀吉、次は作戦Bだ。」

謙太からの連絡が入る。

「それでは、特別サービスの記念写真を撮影いたしましょう」
パチン

秀吉が指を鳴らすと、ムッツリーニが来た。

「・・・おまたせ」

「・・・」

雄二の頭に青筋が立っている。

次の瞬間!!

「翔子、悪い!!」

そういつて、なんと雄二は霧島さんのスカートをめくった!!

「・・・!!」

ムッツリーニは反射的に撮影体制に入る。

しかし、その前に雄二が立ち塞がって、勝利を確信したような顔で言った。

「染み付いた習性は隠せない様だな!!ムッツリーニ!!」

「・・・ツ!!」

しかし、そこは霧島さんが助けてくれた。

霧島さんは、雄二に詰め寄った。

「・・・雄二、えっち。」

雄二はばつが悪そうに顔を背けている。

「も、もうしないから許せ。」

「・・・うん。続きはベッドで。」

わっ・・・

霧島さん大胆だなあ・・・

「もうしないって言ってんだろ！！俺はお前の下着なんかに微塵も興味はねえ！！」

「・・・！！」

霧島さんは、雄二に掴みかかった。

雄二は文字どおり頭を掴まれている。

「・・・それは許さない！！！！」

「うあああああ！！！！」

メキメキという効果音が聞こえてきそうだ。

「・・・チーズ」

そんな二人を、ムツツリーニが撮った。

第二十三話（後書き）

どうでしたか？

今回は全編明久目線と、謙太目線を作るつもりです。

第二十四話（前書き）

如月ハイランド編です。

第二十四話

「何だこの写真は・・・？」
雄二が言った。

「サービスの特殊加工でございます。」

その写真は、ハートマークの中に雄二に霧島さんがアイアンクロ・・・
もとい掴まつてる写真があつて、その上には
「私たち、結婚します。」

という文字が書いてあつた。

「この写真は、記念としてパークの写真館に飾られまゝです。」
僕がそういつたら、

「貴様正気か!？」

「・・・雄二、照れてる?」

「この写真の何処に照れる要素は見当たらない。」
なんて夫婦漫才が繰り広げられたけど、シラナイ、シラナイ。

「あゝ、見てみて竜太!!アタシらも写真とつてもらおうよ!!」

「そうだな。その兄ちゃん、俺らも写つてやんよ。」

そこに、少しヤンキーっぽい、カッブルのお客さんがやってきた。
どうやら、誰でも撮ってもらえると勘違いしたみたい。

「どうする?謙太。」

僕は謙太に聞いた。

『よくある勘違いだな・・・明久、秀吉、マニュアルどつりにやれ。』

謙太の声が聞こえた。

マニュアルとは、さっき渡されたルーズリーフのことである。

「分かつた!!」

僕はそう答えると、お客さんのほうに向き直った。

「まことに申し訳ありません。こちらは、プレミアムチケットの特
別企画でございます。……」

秀吉が答えた。

しかし相手は納得していないみたいで、

「いいじゃねえか、一枚くらい！俺らお客様だぞ、ゴラァー！」

相手は、秀吉にメンチを切りながら詰め寄った。

それより、変な顔だな……ププツ

「んなつまんねえガキより、俺ら取ったほうが宣伝的によくな？ア
アン？」

その時、ヤンキー（男）のほうで雄二たちを指差しながら言った。
むっ、この人たちは、雄二と霧島さんをバカにしてやがる。

「そうそう。こんな高坊より、竜太のほうが百倍カッコよくない？」

ヤンキー（女）も続ける。

どっちもムカつくなあ……

「……！！」

「やめる。何処行くんだ？」

流石に、霧島さんも怒って詰め寄ろうとしたけど、雄二が止めた。

「……あの二人、雄二の事を悪く言った。」

「んな事にすんな」

「……雄二がそういうなら」

霧島さんは、雄二の説得に応じたけど、なんか納得いかないな……

「いいからさっさと同じの撮れやー！」

ヤンキーはまだ秀吉に詰め寄っている。

「（何かやり返したいんだけど……？）」

僕は謙太に助けを求めた。

『そうだな……同じ格好で写真を撮ってもらえばいいんじゃない
か？』

「（同じ格好……？そうか……！）」

僕は、二人に言った。

「わっかりました〜そこまでおっしゃるなら、どうぞこちらへ」

二人を噴水の前まで誘導して、

「はい、では、手をこちらに置いて」

ヤンキー（女）の手でヤンキー（男）の頭をに握らせ、

「はい、おもいつきり力をいれて」

「イテテテ!!!」

「・・・チーズ。」

パシヤッ

完成しました!!

やり返し成功!!

「（作戦成功）」

『お疲れ。俺も頭に来そうだったから、その前に報復サンキュな。』

「（もし謙太が切れてたら・・・？）」

『相手によるが、チンピラくらいなら、軽く病院送りになるだろう』

な。』

「（へえ・・・）」

こ、怖い・・・

第二十四話（後書き）

今回はかなり短めですが、どうでしたか？
ちなみに今回も明久目線です。

第二十五話（前書き）

如月グランドパーク編です

第二十五話

「なにしやがんだテメエ!!!」

僕たちがまったく同じ写真を撮ると、予想どおりキレイなヤンキーカ
ツプル。

「だって今、同じの撮れって・・・」

「シ・メ・ル・ゾ・ゴラア!!!!」

「やっべ!!!ハンバーガーがキレイなあ!!!」

もの凄く不細工な形相で追っかけてくるヤンキー（男）。

「ナメてんのかクソガキ!!!!」

「だってどっからどう見ても・・・」

「誰がハンバーガーだ!!!待てこの野郎!!!」

ひたすら逃げる僕たちと必死に追いかけるヤンキー（男）。

そのとき雄二が、

「ハア、なんかめんどくさい事になりそうだな・・・」

なんて抜かしやがった。

誰のためにやってると思ってるんだ・・・

何とか逃げ切った僕たちは、従業員室にいた。

「そういえば明久よ、そろそろノインに着替えなくてよいのか?」

「あっ!!!すっかり忘れてたよ・・・」

そうだった・・・

僕は雄二を誘導した後、ノインに着替えてお化け屋敷の前で雄二を
待たなきゃいけないんだった・・・

秀吉に言われたときには、もう時間の2分前だった。

「急がなきゃ!!!」

僕は、従業員の格好のまま、上からノインのきぐるみを着た。

「じゃ、行つてくるね!!」

「待つんじゃ明久、頭が・・・」

秀吉が何か言おうとしたけど、時間がなかったので無視した。

にしても前が見えないなあ・・・

何故か周りからひそひそ言われながら、何とか直感でお化け屋敷の前に着いた。

そのころお化け屋敷の前では、姫路さん・・・もといキツネのフィーと雄二が言い争っている声が聞こえた。

「・・・キツネのフィーがとっても面白いアトラクションを紹介してあげるよ」

まだあつたばかり見たいだ。

「・・・シラを切るといふならいいだろう。お前のお勧めを教えてくださいませんか？」

雄二が意味深な台詞を言った。

雄二は、もしかしたらフィーの正体に気づいているのかもしれない。ということとはまさか・・・

「うん!!フィーのお勧めはね、向こうに見えるお化け屋敷だよ。」
雄二にだまされているとは知らず、素直に教えてしまうフィー。

「そうか。翔子、お化け屋敷以外に行くぞ。」

「ふえ?わつ、待つてください!!どうしてですか!??」

「どうせお前らが余計な仕掛けをしているんだろ?」

「お願いです、お願いです、お化け屋敷に行ってください・・・」
「断る!!」

フィーの悲痛な叫びを一刀両断する雄二を見て、僕はいてもたってもいられなくなった。

「そこまでだ雄二!!」

僕は雄二の前に出て行った。

「フィーを困らせると、このノインが許さないぞ!!」

「何だ明久その頭の悪い格好は・・・」

何故か呆れる雄二。

「失礼な！！何処が頭が悪いって言うんだよ！！」

僕はともかく、ノインの頭は悪くないぞ！！

「・・・雄二、ノインちゃんはうっかりさんだから」

僕にフォローを入れる霧島さん。

つてそのフォローおかしくない？

「うっかりで頭が逆になるキツネはいない！！」

「吉井君！！頭を逆にかぶっています！！」

「しまった！！どつりで前が見えないし、いろんな人にコソコソ言われると思った！！」

子供が気味悪がっていたのも、これが原因だな！！

「早く直さないと、坂本君にばれちゃいまあйтツ！！」

「ぐおっ！！」

姫路さんは僕の顔を直そうとコツチに駆け寄ってきたみたいだけど、途中でこけたらしく、僕に飛びついてきた。

これがぬいぐるみじゃなければよかったのに・・・

「まだ誤魔化せると思ってるのか？こいつら・・・」

「一応言っておくが、既にばれてると思うぞ・・・」

雄二と謙太の呆れた声が聞こえた。

『しょうがない。秀吉、プランCだ。』

謙太は、プランCを発動した。

プランCとは、こうなることを見据えていた謙太が、先に言っていた作戦だ。

これで僕たちの出番は終わりかな・・・

顔を直しながら、そう思って引き返そうとしたとき、雄二に呼び止められた。

「そういえば明久、女子大生とのデートはもう良いのか？」

「え？」

僕には何のことかさっぱり分からなかった。

その時、後ろから物凄い殺気を感じて振り返ると、

「吉井君……？大事な作戦の最中に、他の女の人とデートしてたそうですね……？」

怒髪天を突いた姫路さん……フィーが僕を睨んでいた。

「な、何のこと？姫路さん？」

本当に心当たりがないのに、身震いしてしまう僕。

どうしよう、フィーがマスコットに見えないよ……

「美波ちゃんも来てくれるそうです。ゆっくりお話聞かせてくださいね？」

「だ、ダメだよそんな！！楽しい遊園地で争いごとなんて……」
姫路さん……もといフィーの目が怖い。

その時、謙太から通信が入った。

『明久、かなりの高エネルギー物質が猛スピードでそちらに向かって
いる、注意しろ！！』

高エネルギー物質？

そんなものはアニメの世界……

「こらあ！！どういことなのよアキ！！」
じゃなかった。

高エネルギー物質（美波……もといアイン）が僕に向かって突撃
してきた。

「ぐおおおお！！！！」

吹っ飛ばされた僕はゴミ箱に直撃した。

倒れている僕の目の前に、フィーとアインが立ってこちらを睨んで
いた。

「詳しく聞かせてもらわよ……」

「正直に話してもらいますね……」

「ご、誤解だよ……」

『吉井明久が戦死した。各自、黙祷をささげてくれ。』
試召戦争以外で戦死するとは思わなかった。

けど、僕たちの当初の目的は果たされた。

「いまのうちだ翔子！！お化け屋敷以外のアトラクションにいくぞ・

「……って翔子？」

霧島さんは、秀吉からある事を囁かれている。

これが、プランだ。

話が終わると、霧島さんは雄二のところへ行き、雄二と腕を組んだ。

「……お化け屋敷に行く！！」

僕たちの目論みどおりだ。

つてあれ？

初めからこれをしておけば、僕は死なずに済んだんじゃないかな……？

「……いつつ……秀吉に何吹き込まれやがった！！」

雄二はもう成す術がない。

秀吉が囁いたこと、これはとても簡単なことだった。

「……お化け屋敷は、抱きつき放題。」

……霧島さんって純情だなあ

そのころ僕は、二人に説教を受けていた。

しかも、ちょうど人通りが多いメインストリートだったし、僕たちはマスコットのままだったので、注目の的になった。

周りの視線が痛いよ……

第二十五話（後書き）

どうでしたか？

今回は、優子と愛子を何処に出そうか・・・？
希望がある人はお願いします。

第二十六話（前書き）

如月グランドパーク編です。

第二十六話

僕たちは、嫌がる雄二を連れてお化け屋敷に来た。

このお化け屋敷は、

『恐怖ノ廃病院 お化け屋敷』

という名前の通り、廃病院をイメージした建物になっていた。

『ムツツリー二、例のものを。』

「・・・分かった。入場前にサイン。」

謙太の指示を受けたムツツリー二が、書類を挟んだバインダーを雄

二に渡した。

「サイン？」

「誓約書でございます。」

機微をかしげる雄二に、秀吉が答えた。

「危険なアトラクションでは、万が一の事があつたときのために、

誓約書を書くものなのです。」

「ほお。ここはそんなに危険なのか。それはそれで面白そうだな。」

「

雄二は、感心したように頷き、誓約書を読んだ。

「なになに？」

そこには、こんなことが書いてあつた。

誓約書。

私、坂本雄二は

霧島翔子を妻として生涯愛し、

苦楽を共にすることを

誓います。

平成 三年〇月 六日

住所 文月学園
氏名 ?

「……」

誓約書を読み終わった雄二は、無言で青筋を立てている。

「ペンはこちらです。」

「……雄二の実印。」

「朱肉はこちらだよ。」

そんな雄二に、僕、霧島さん、姫路さんが順番に言った。

「俺だけか！！この状況をおかしいと思っっているのは俺だけなのか！！！」

雄二が切れた。

まったく、照れなくても良いのに……

「二枚目はカーボンで、婚姻届になっています。」

「……気が利いている。」

「利いてねえ！！！」

僕たちの気配りに、霧島さんは感謝して、雄二は怒りをあらわにした。

そして入場前。

「どうぞこちらへ。」

秀吉が先導してる間に、僕たちは従業員室へ戻った。

「雄二たちが中に入ってる間に、急いで準備をしなきゃ。」

僕は着替えを済ませ、昼食会場へと向かった。

昼食会場では、謙太、木下さん、工藤さん、ムッツリー二のほかに、本物の従業員さんも走り回っていて、とても慌ただしかった。

「謙太、僕は何をすれば良い？」

「そうだな・・・じゃあ優子と一緒に、テーブルとかのセッティングをしておいてくれ。」

「了解！」

僕は、木下さんと一緒に、テーブルクロスを掛けたり、テーブルを拭いたりしていた。

その途中、僕は優子さんに話しかけられた。

「ねえ、吉井君？」

「どうしたの？木下さん？」

「あかさ・・・謙太、かなり大変そうだよね？」

「確かにねえ・・・」

謙太は責任感からか、本物の従業員と一緒に働く合間に、僕たちに指示を出したりしていた。

「あのぶんだと、休憩する暇がないんじゃないかな・・・」

「そうだね・・・」

木下さんは、謙太の体の心配をしているみたいだ。

かなり必死に働いている謙太を見て、僕は何か出来ることがないかと考えた。

「それじゃ、僕が謙太のお昼ご飯を作るよ！！」

「え？吉井君って、料理できたんだ？」

「料理だけはね、自信あるんだ！！」

「それじゃ、お願いできるかな？」

「任せてよ！！で、何処で作れば良い？」

「従業員室の横の、給湯室で出来ると思うわ。」

「それじゃ、行って来ます。」

僕は近くのスーパーまで走り、なけなしの金（今月の食費）で材料を買い集めた。

「謙太は中華が好きだと言ってたな・・・」

僕は、麻婆豆腐を作ることにした。

「謙太、喜んでくれると良いな・・・」

僕は、料理を作り始めた。

「謙太!!」

僕は、謙太を呼んだ。

「どうした?」

「謙太、僕がしばらく代わるから、少し休んできなよ!!」

「えっ?」

「さっきから忙しそうだしさ。」

「そうか。ありがとう。」

僕は、麻婆豆腐を作ったことは内緒にして、謙太を従業員室に行かせた。

「さてと、それじゃあ僕も働きますか!!」

僕は、健太の代わりに昼食会への準備を始めた。

第二十六話（後書き）

どうでしたか？

今回はなかなかオリ展開になっていたと思います。
感想お願いします。

第二十七話（前書き）

まだまだ、如月ハイランド編です。

第二十七話

「メインディッシュ×3上がりました!!」

「これ、早く運んで!!」

「はい!」

「まだサラダ来てないんですけど」

「はい、すみません!!」

「こつち、フォークが足りないんですけど」

「すみません!!今もっていきます。」

ただ今、12:30分

僕たちは大忙しだった。

何をしているかというと、

「こちらでございます。」

昼食会の手伝いである。

予想以上に人数が多く、僕たちも手伝いをすることにした。

「ハア、つかれた」

仕事が一番落し、僕は伸びをした。

「席は全部埋まったな」

「そうだね。」

そこに仕事を終えた謙太がきた。

謙太の仕事は、主に準備やセッティングなどの裏方なので、こつち言う仕事はしなくて良い。

「・・・準備もセッティングも一緒だぞ?」

「そうなんだ・・・つて人の心を読むな!!」

「声に出てたぞ・・・?」

「え?あ、あはは・・・」

そんなことはおいといて。

今回の昼食会は、基本限定チケットの人たちだけなので、席はある程度限定されている。

しかし、一般の人も先着順に入ることができるので、実際は結構な人数が居て、とても大変だった。

「そういえば明久」

「ん？」

「え〜つと・・・麻婆豆腐、旨かったぞ。」

「ホント？」

「ああ。インスタントよりは旨かった。」

「インスタントと比べるなっ！！！！」

「落ち着け！！冗談だつて！！」

気がつくと、僕は何故か謙太を殴ろうとしていた。

どうやら仕事の疲れとストレスがピークにきてたらしい。

「ごめん・・・」

何とか昼食会が終わった。

「そろそろ俺たちの出番だな？」

「そうだね。」

僕たちは、自分の位置へと着いた。

「それじゃ、電灯を落とすぞ？」

謙太が電気を落とし、前に木下さんと工藤さんが出て行った。

「みなさま、本日はスペシャルランチショーにお越しいただき、まことにありがとうございます」

木下さんがマイクを持っていった。

謙太がスポットライトを操作して、上手く木下さんと工藤さんに光を当てる。

「実は、この会場には結婚を前提にお付き合いしている高校生のカップルがいらつしゃいます」

今度は工藤さんが言った。

「何い！！」

工藤さんの言葉に、雄二が反応して席を立った。

「ここで、そんなお二人を応援する催しを開催します。題して、『如月グランドパーク ウエディング体験 プレゼントクイズ』！！」
「いえ〜い！！」

木下さんがそう言ったあと、僕は再びノインの格好をして、下でサクラをやった。

それと同時に、唯一の出入り口であるドアが自動（謙太の指示）で閉ざされ、雄二の退路を断った。

「しまった！！退路を断られた！！」

雄二がそれに気づいたが、もう遅い。

木下さんと工藤さんが司会を続ける。

「出題されるクイズ全5問に見事正解すると、なんと最高級ウエディングプランを体験できます！！」

工藤さんが言い、その後を木下さんが言った。

「希望によっては、そのまま御入籍なされても構いません。」

「大問題だろ！！」

雄二がまた反応した。

結局は自分たちって認めてるんだね・・・

「それでは坂本雄二さんと翔子さん。前方のステージへどうぞ！！」

姫路さんがフィーの格好で雄二たちを案内しようとした。

「誰が行くか！！」

雄二は断ろうとしたが、

「・・・ウエディング体験、クイズがんばる！！」

霧島さんが今までにないやる気を見せ、雄二の腕を掴んで連れて行った。

第二十七話（後書き）

謙太編は、明久目線を全て書き終わったら書くつもりです。

お楽しみに！！

あと、今日から「けいおん！」の二次創作を書くつもりなので、毎日更新が難しくなりそうです。

僕の身勝手で、ごめんなさい・・・

第二十八話（前書き）

まさかの肉離れ・・・
イテエ・・・

第二十八話

「それでは、クイズを始めます!!!」

木下さんの言葉で、クイズ大会が始まった。

何故か、雄二が開き直ったようにクイズに集中し始めたのは何故だろうか……

『明久、』

謙太が僕に話しかけてきた。

『取り敢えず……もうサクラは止める』

その時僕は、いまだにドンドン太鼓を叩いていた。

『はつきり言つて迷惑だという声が、あちこちで聞こえる。』

「ごめん……」

『分かればいい。』

僕は、舞台袖に引つ込んだ。

そうしている間に、クイズは進みだす。

「それでは第一問」

工藤さんがそういつたとき、雄二の目がさらに鋭くなった。

やっぱり、ウエディング体験をしたいんだね……

「坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょうか？」

「……はい。」

雄二は、何故か脂汗を流している。

その間に、霧島さんがボタンを押した。

「……毎日が記念日。」

「「正解です!!!」」

「があゝ!!!止める!!!恥ずかしくて死んでしまふ!!!」

明らかに照れてる雄二。

素直じゃないなあ……

「では第二問」

騒ぐ雄二を無視し、優子さんが続ける。

「お二人の結婚式は何処で挙げられるのでしょうか？」

木下さんが問題を読み終わると同時に、雄二がボタンを押した。
はっ！！

「鯖の煮込み！！」

「正解です！！」

「何！？」

雄二が驚くのも無理はない。

雄二たちがウエディング体験を出来るように、全ての答えを正解にするようにしている。

「お二人の挙式は、如月グランドパーク『鳳凰の間』、別名『鯖の煮込み』で行われる予定です。」

「待て、その名前、絶対今付けただろ！！！」

雄二が何か言ってるけど、キニシナイ、キニシナイ。

「では第三問。」

雄二の顔が怖い・・・

「お二人の出会いは何処でしょうか？」

「もらったあ！！！」

「・・・」

シュツ。

バスツ。

「グアアアアアア！！！」

「・・・小学校。」

「正解です。」

木下さんが言った。

あれ？

今何が起きたんだろう・・・

僕が見えたのは、ボタンを押そうとする雄二と、静止したまま手だけが消えた霧島さん。

その次のタイミングには、雄二は目を抑えて悶えていて、霧島さんは平然とボタンを押していた。

その後の雄二の目には、炎と涙が移っていた。

「では第四問。おふたり・・・」

「わかりま・・・」

「正解です!!」

木下さんは、雄二の回答を無視して正解をつげた。

奇襲をして間違えるつもりだった雄二はもう燃え尽きている。

このままウエディング体験までいけるかな・・・？

「ちよつと、おかしくない？」

そうは行かなかった。

甲を上げたのは、さっきのヤンキーカップルだった。

『あいつら、先着順の列を無視して入ってきたみたいだな・・・』

謙太の声が聞こえた。

なんて奴らだ・・・

「アタシらも結婚する予定なのに、何でそいつらだけ特別扱いなワケ？」

「ケ？」

「おう、俺らにもやらせるや。」

ヤンキー（男）がステージに上がってきた。

「ハンバー・・・お客様!!まだイベントの最中で・・・」

「うっせえんだよ、このたらこ!!俺も、お・きや・く・さ・ま・

だぞゴラァ!!!」

僕が止めたが、ヤンキーはそれでも上がるうとした。

「アタシもウエディング体験やってみたいんですけど」

ヤンキー（女）が続ける。

「ですけど・・・」

「グダグダ言っでんじゃねえ、ボケ!!参加してやるって言っでん

だろ?聞けや!!」

「そしたら、アタシら問題出すから答えられたらあの二人の勝

ちで間違ったらアタシらの勝ちって事で」

「そんな勝手な!!」

僕を無視して、ヤンキーカップルは理不尽な要求を続けている。

そして、ヤンキー（男）が僕からマイクを奪い、

「じゃあ問題だ。聞けやコラ！！」

勝手に始めてしまった・・・

しかし、事態は簡単にカタがついた。

なぜなら・・・

「ヨーロッパの首都は何処だあ！！」

「・・・は？」

このヤンキーが僕以上のバカだったからだ。

「え〜つと・・・問題が間違っていたので、坂本雄二さん、翔子さんの勝ちです。」

木下さんが場をまとめ、

「そして、お二人に『如月グランドパークウエディング体験』をプレゼント！！」

工藤さんが場を盛り上げた。

僕以上のバカ、いたんだ・・・

第二十八話（後書き）

どうでしたか？

謙太編も入れると、この話が一番長くなりそうだな・・・

第二十九話（前書き）

如月グランドパーク編、何話目だ？
とにかくまだまだ続きます。

第二十九話

「それではいよいよ本日のメインイベント、ウエディング体験です。」
木下さんがそういい、メインイベント、ウエディング体験が始まった。

「まずは、新郎の入場を拍手でお迎えください。」
工藤さんがそういうと、暗闇から謙太のスポットライトに照らされた、白いスーツ姿の雄二が現れた。

「（お前ら後で絶対シバくからな！！）」
雄二が、僕の横を通ったとき、そんな声が聞こえたけど、シラナイ、シラナイ。

「それでは、新郎のプロフィール紹介ですが、体験版ですので（後めんどくさいので）カットさせていただきます。」

「おい！！今めんどくさいって言っただろ！！」
前方のディスプレイには、『以下、略』という文字が映し出されていた。

「それでは、いよいよ新婦の入場です！！」
木下さんが、少し興奮気味で言った。

霧島さんは美人だから、ウエディングドレスが似合うんだろうなあ。
ガチャ

後方のドアが開き、ウエディングドレスを着た霧島さんが歩いてきた。

そのあまりの美しさに、観客の方も自然に拍手をしている。
あの雄二でさえも、思わず見とれている。

「綺麗・・・」
美波がそう漏らした。

確かに、今の霧島さんには、綺麗という言葉が一番似合うと思う。

霧島さんは雄二の前に歩いていった。

「・・・雄二」

「ウツ!？」

ポーンとしていた雄二は、霧島さんに声を掛けられ、驚いている。

「・・・私、お嫁さんに見えるかな？」

霧島さんは、照れたようにそういった。

「あ、ああ。大丈夫だ。少なくとも花婿には見えない。」

思わず顔を背ける雄二。

その顔は耳まで赤くなっていた。

「・・・雄二!」

「何だ？」

少し言葉を強くした霧島さん。

その言葉に、雄二は、顔を背けながら答えた。

「・・・嬉しい。」

そういった霧島さんの頬には、一筋の涙が伝っていた。

「お、おい!どうした!？」

雄二は、いきなり泣き出してしまった霧島さんに驚いた。

けど、霧島さんが泣いた理由は僕にも分かる。

「・・・ずっと、夢だったから」

「夢？」

「・・・小さな頃から、ずっと夢だった。私と雄二、二人で結婚式を挙げること。私が、雄二のお嫁さんになること。」

口下手な霧島さんが、必死で雄二に伝えようとする。

ずっと憧れていた人と、こうして一緒にいることがどんなに大きな夢だったかを・・・

「・・・私一人じゃ、絶対に叶わない、小さな頃からの、私の夢。」

どれだけこの夢を諦めかけていたかを・・・

「だから、本当に嬉しい。他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが・・・」

そして、こうして一緒にいられることが、どれだけ幸せかを・・・

そして雄二も、自分の気持ちを伝えようとする。

「翔子、俺は・・・」

「あゝあ、つまんな〜い。」

しかし、無粋にもそれを邪魔しようとする、一組のカップル。

さっきのヤンキーカップルだ。

その場にいた、雄二たちの知り合い全員が、奴らを睨む。

「マジつままないって感じ。のろけ話はどうでもいいから、早く進めて欲しいんですけど〜」

そんなことに気づかない奴らは、さらに騒ぎ立てる。

「忙しいのに来てんだからヨオ、余計なのは良いから、見せるもん見せてくれよな。」

そして、ヤンキー達が衝撃的な台詞を口にする。

「ってゆうか〜お嫁さんが夢ですってお前いくつって感じ。ぶつちやけキモくな〜い?」

「もしかして、ギャグでやってんじゃねえの?」

「あははははははは!!!!!」

許せない。雄二や霧島さんをバカにするなんて・・・

「何だと!?!」

僕は、思わず飛び出した。

「テメエら!!!よくも霧島さんに!!!お前ら、表出やがれ!!!」

僕は、奴らを外に連れ出そうとしたが、姫路さんがそれを止めた。

「ダメです、吉井君!!!ステージが台無しになっちゃいます!!!」

「で、でも・・・」

そして、いつの間にか霧島さんが消えていた。

怒りが頂点に達し、僕は奴らに殴りかかろうとした。

その時、

ピンポンパーンピン

「竜太さん、理子さん、如月グランドパーク、朱雀の間にお越しください。」

「...謙太!?!」

「おう、俺らにもやらせてくれるみたいだな!!」

「ホント、さっきの坊ちゃん達より、私達のほうが結婚式らしくなるよね」

「そうだな。アハハハハ!!」

ヤンキーカップルは、笑いながら出て行った。

「雄二、霧島さんを探さない!!」

僕が雄二にいうと、雄二からは驚きの返答が帰ってきた。

「悪いが俺はパスだ。便所に行くてくる。」

「……え?」「」

僕達が驚くのを尻目に、雄二は一人式場を出て行った。

「と、とにかく、霧島さんを探そう!!」

僕達は、霧島さんを探し回った。

第二十九話（後書き）

どうでしたか？

おかしいところにはどんどん感想ください。

第三十話（前書き）

クライマックスきた

第三十話

「霧島さん、何処にもいないよ!!」

僕達は、パークの中を全て探したけど、何処にも居なかった。

「こんなときに何をやってるのよ、坂本は!!」

「謙太も何処にも居ないなんて、いったい何があったの?」

本来なら、一番頼りになるはずの雄二と謙太がいなくて、何処を探せば良いかの見当さえたっていないかった。

「何処に言ったんだよ、雄二、謙太・・・」

坂本目線

ハア、ハア、ハア・・・

「ここが、朱雀の間か・・・」

俺は、朱雀の間の前で立っていた。

「翔子、」

俺は、柄にも無い事を一人で言った。

「俺は、お前の夢を笑った奴らを許さない・・・」

俺は、決意を声に出して、俺は朱雀の間に入ってしまった。

「何だ?俺たちの式の観客は、さっきの餓鬼一人か?」

「ホント、誰も来ないなんてありえないんですけどお」

「黙れ!!」

俺は、ギヤーギヤーと騒ぎ立てるバカ二人を黙らせ、

「俺は今、虫の居所が悪いんだ。少しばかりストレス発散の相手にさせてもらっぜ?」

そういつて、俺は男に殴りかかった。

バキッ!!

男の鳩尾に、俺のパンチが当たる。

「グオツ・・・」

悶絶する男に、さらに蹴りを見舞う。

「テメエら・・・翔子の夢を笑ったことを後悔しながら死んでいくんだな・・・!!」

俺は、マウントポジションを取り、男を殴り続ける。

しかし、俺はまだまだ詰めが甘かった。

ガンツ!!

「アタシの竜太に何してくれちゃってるわけ？死んでくれる!？」

「ツツ・・・」

女は、椅子を持って俺をにらんでいた。

突然女に殴られた俺は、目眩を起こしてふらついた。

そこに、男の蹴りが来る。

「さつきはよくもやってくれたなあ・・・さつさと死ねや!!」

2発、3発と蹴りが鳩尾に当たる。

「グツ・・・」

マズイ・・・

このままじゃ、マジで死んでしまう・・・

何とか体勢を立て直し、反撃に出ようとしますが、脚が思うように動かない。

「止めだ!!」

男が、パンチを構えた瞬間・・・

「ちよつと待つてくれるか？」

聞き覚えのある声が、入り口のほうから聞こえた。

「なっ・・・け、謙太？」

「ヨオ、なかなかいい格好じゃねえか？雄二」

「何だテメエ・・・？」

「うっさい馬鹿共。」

「なんだとお・・・!？」

ヤンキーがいきり立って襲い掛かってきた。

「見え見えだつての。」

謙太は、ヤンキーの攻撃を避け、

「ちよつと寝ていてくれ。」

首裏に手刀を浴びせた。

「ウグツ!？」

ヤンキーは悶絶して倒れる。

「おい、雄二?」

「な、何だ・・・?」

「早く霧島を迎えに行つてやれ」

「な、何故俺が・・・!?」

「いい加減、俺には隠すなよ。」

謙太は全てを見据えたように言った。

「お前は、自分の気持ちを素直に霧島に伝えればいい。」

「自分の気持ち、だと・・・?」

俺は、翔子をどう思っているのかが、自分でも分からなかった。

「そろそろ素直になれ。お前は、霧島を遠ざけ過ぎている。」

「お前に何が分かる・・・?」

気づいてはいたが、それを認めたくはなかった。

「はあ、はつきり言おう。お前は、霧島のが好きなんだ。」

「・・・!?」

分かつていた。

分かつていたが、否定し続けていた。

翔子の事を遠ざけてでも、否定してきた、自分の思い。

それを見事に謙太に当てられ、返す言葉もなかった。

「しかし、お前は何かの理由で霧島を遠ざけている。」

そして、その裏にあるあの事件のことまで、謙太は見透かしていた。

「これ以上は野暮つてものか。さっさと行け。『クイーン』を救う

のは、『ナイト』だろ?」

謙太は、それ以上何も言わず、外に出て行った。

「・・・」

俺は、無言で立ち上がり、翔子が居るであろう『あの場所』へ向か

った。

翔子を避けることは、本当に必要だったのか・・・？

今こそ、翔子に本当の気持ちを伝えるべきなのか・・・？

しかし、翔子の俺に対する気持ちは、完全に『勘違いだ』。

アレは、俺の所為で翔子を巻き込み、その罪悪感から翔子を助けた。それだけ、それだけなんだ。

けど、翔子が俺を想っていてくれるのは、本当に嬉しい。

そのことを、伝えるべきなんじゃないか？

俺が、自分の気持ちに整理をつけたときには、もう目の前に翔子がいた。

よし。女々しいところなんて見せたら、あいつ等に笑われる。

ここは、男らしいところを見せてみるか！！

俺は、翔子に声を掛けた。

第三十話（後書き）

雄二編でした。

雄一の心境は、あくまでオリジナルですので、お願いします。

第三十一話（前書き）

これで最後です。
長かった・・・

第三十一話

「よ。」

俺は、翔子に声を掛けた。

「遅かったな。翔子。」

「・・・どうして？」

翔子は、突然現れた俺に驚いていた。

「ここだと思っただ。」

そういつて、俺たちは無言で歩き始めた。

「・・・雄二」

「何だ？」

翔子が、突然話しかけてきた。

「・・・私の夢、変？」

翔子は、蚊が鳴くような声で言った。

翔子は、あいつ等の心無い一言に、深く傷ついているみたいだった。俺は立ち止まって、さっき決めたことを話し始めた。

「翔子、この際だから言っておく。お前の俺に対する気持ちは、勘違いだ。」

「・・・ッ!？」

翔子は、かなり驚いた。

好きな人に、お前の気持ちは勘違いだと言われたのだから、無理もないが・・・

「七年前、俺がバカで、お前を巻き込んだしまった。あのときの俺は、その責任を取ろうとしたに過ぎない。」

「・・・」

「俺のせいで、お前はこんなろくでなしに何年も時間を費やしてしまった。」

翔子は首を振った。

「本当に、すまなかった・・・」

「・・・ゆう、じ・・・」

翔子は、俯いて泣こうとしている。

そんな翔子に、俺は言った。

「俺は、お前の夢を、笑わない!!」

「・・・?!」

翔子は、驚いたように顔を上げた。

「想う相手こそ間違ったが、一人の人をずっと想い続けるのは、誇らしいことだと思う。だから、お前の夢は、大きく胸をはれる、誰にも負けない立派なものだ。」

そういって、俺は翔子にベールを掛けた。

「ただし、相手を間違えなければ、だけどな!!」

そういって、俺は翔子に笑いかけた。

「ま、折角の体験だったんだ記念品くらい持って帰っても良いだろ？」

「・・・雄二？」

「そうだ。それと・・・」

俺は、翔子にバックをみせ、

「弁当、美味かった。」

そう言った。

実は翔子がいなくなった後、翔子のバックを持っていこうとしたら、中に弁当が入っていた。

そのままにしておくにはもったいないくらい美味そうだったので、全て食べてしまった。

「帰るぞ。遅くなると誤解されっからな・・・」

そういって、俺は歩き出そうとした。

「・・・雄二!!」

翔子が、元気な声で俺を呼んだ。
もう立ち直ってくれたみたいだ。

「何だ？」

俺が振り返ると、満面の笑みの翔子が立っていた。
そして翔子は、

「やっぱり何も間違っていなかった！！！」
と、笑顔で俺に言った。

第三十一話（後書き）

どうでしたか？

次は謙太編か・・・しんどいぜ・・・

まあがんばりますので、感想お願いします。

第三十二話 如月グランドパークの裏話（前書き）

如月グランドパークの裏話。

要するに今度は謙太がデートします。

これは2〜3話で済ませるつもりなので、お願いします・・・

第三十二話 如月グランドパークの裏話

謙太目線

午前八時五十五分。

俺は、ある場所に向かって走っていた。

「謙太、遅いわよ!!」

目的地・・・如月グランドパークの前には、優子が立っていた。

「悪かったな・・・ってまだ後五分あるぞ?」

「女を待たせたら負けよ!!」

「はいはい・・・」

ん?なんかデジャヴ・・・

「取り敢えず、中に入る?」

「そうだな。」

俺たちは、如月グランドパークに入った。

「いらつしやいませ!!如月グランドパークにようこそ・・・って謙太!?!」

「・・・お前ら、まだバイトしてたのか?」

俺は、目の前に居る二人のスタッフ、明久と秀吉を見ていった。

バイトの期間は、一日だけと言っておいた筈だ。

「いや、ちよつとね・・・そ、そんなことより、謙太は何してるの?木下さんと腕なんか組んじゃって?」

言葉を濁す明久。そして二人は、腕を組んでいる俺と優子を見ていった。

「これは命令だ。」

「めいれい・・・?誰からの?」

何の命令かというのと、この前オーナーと交した、あの約束の1つだった。

「いや、ちよつとね……」

優子が言葉を濁した。

「なるほど……」

そういつて、明久はどっかから出したトランシーバーと、

「目標発見。これより、ウエディングシフトをしき、対象を捕らえる。どうぞ?」

『了解。へますんなよ?』

「分かつてるつて。」

なんて会話をしていた。

はっは〜ん。

この声は雄二か……?

俺は、トランシーバーをぶんどり、雄二に言った。

「おう、雄二。霧島とはどうだ?相変わらずいちゃついてるか?」

『何だと!?俺がそんなことするわけ……つて翔子?』

『……謙太、今、夫婦の営み中だから』

「そうか。それは邪魔したな……つてムツツリ!」

どうやら、夫婦の営みという言葉で妄想しすぎたらしいムツツリが、木から落ちてきた。

「ほお〜、そのウエディングシフトを練った俺らに対してウエディングシフトをしこうとするとは、なかなか挑戦的だな……」

「そ、そんなつもりは……ねえ秀吉?」

「返事がない。ただの屍のようだ……」

「秀吉!」

俺たちが気づいたときには、秀吉は間接技で締められ、三途の川を渡る寸前だった。

勿論、締めたのは優子である。

「ねえ、大丈夫!?秀吉!」

「大丈夫じゃ、明久。」

「よかった・・・」
「あの川を渡ればよいのじゃろう?」
「その川は渡っちゃダメ!!」
明久たちが、軽いショートコントをしていたので、
「・・・行くか。」
「・・・そうね。」
俺たちはパークのアトラクションに向かって歩き出した。

パークに来て約二時間。
時刻はちょうど十二時。

俺たちは、オーナーから貰ったチケットのおかげで、全ての乗り物がタダになっていたから、結構楽しい時間が過ごせた。
もともと、横に優子が居るだけで、十分楽しいのだが・・・

「そろそろ飯にするか?」
そろそろ歩き疲れたので、優子に食事をとる事を提案した。

「そうね。久々に遊園地なんてきたから、おなかすいちゃった。」
優子もその意見に賛同したので、俺たちは、パーク内の軽食屋に向かった。

「いらっしやいませ!」
そこは、洋風な感じの店だった。
店員の愛想も良い。

「とりあえず・・・ナポリタンと、コーラで。」
「私は、オムライスとサラダで。」
俺たちは、食事を頼んだあと、改めて店内を見回した。
「にしても、客が少ないな・・・」
正確に言えば、ゼロである。

俺たち以外の席は、全て空席だった。

「こちら、コーラになります。」

店員がコーラを持ってきた。

「ま、貸し切りも悪くないかな・・・」

俺はコーラを飲んだ。

その時、強烈なめまいが俺を襲った。

「なっ・・・睡眠薬か?!」

それもかなり強力な奴だ。

「けっ、謙太?! どうしたの!?!」

優子が、あわてて駆け寄ってきた。

明久たち・・・じゃないな。

明久や雄二がこれを手に入れるのは不可能だろう。

「優子、取り敢えず逃げろ・・・」

そこで、俺の意識はブラックアウトした。

優子目線。

「けっ、謙太!?! どうしたの!?!」

私は、あわてて駆け寄った。

どうやら、睡眠薬で眠らせられてしまったらしい。

「そんな・・・いったい誰が!?!」

私は、謙太の言葉の通り、逃げようとした。

けど、謙太だけを置いていくことは出来ない。

「さっ、邪魔者は眠ってくれたな。」

その時、聞き覚えがある声が出て、私は振り返った。

「さっ、坂本君?! どうしてこんな事を!?!」

後ろには、坂本が立っていた。

「まあ待て、俺は、お前の恋愛に協力してやるつもりなんだ。」
え?

私は、事態がさっぱり飲み込めなかった。

「どういうこと・・・？」

「お前は、謙太が好きだろ？」

「え？ま、まあ、嫌いじゃないわね。」

ここで好きなんていってしまつと、謙太にいつ知れ渡るか分かつたもんじゃない。

「素直じゃないな・・・？」

「う、うるさい！！」

私は、思わず真っ赤になつて反論した。

「まあ、いい。とにかく、俺たちはお前に協力してやる。」

「へえ？じゃ、遠慮なく・・・」

私は、断る理由がなかったなので、坂本たちに協力してもらつことにした。

「よし。交渉成立だな。」

坂本は、私に笑いかけた。

第三十二話 如月グランドパークの裏話（後書き）

どうでしたか？

薬の入手ルートは次回・・・

それではまた明日！！

第三十二話 如月グランドパークの裏話 そのに（前書き）

オリ話その2です。

第三十二話 如月グランドパークの裏話 その二

優子目線

「で、何するの？」

私は、横を歩く坂本に行った。

「それはだな・・・」

坂本は、お化け屋敷の前に止まり、こういった。

「ちよつとした召喚戦争をやるうと思つ。」

「試召戦争？」

私は、オウム返しをした。

「ああ。幸いここには、黒金の腕輪が二つある。これで、このお化け屋敷の全域にフィールドを展開するんだ。」

「へえ、そしてどうするの？」

吉井君が、坂本に聞いた。

「どうやら、坂本君以外は内容を知らないみたい。

「重要なのはこつからだ。この後、これを使う。」

「そういつて坂本が出したのは、五つの腕輪だった。

「これは、新型の代理召喚型の腕輪だ。ちなみにこれは、使い捨ての試作タイプだ。」

「代理召喚？」

「ああ。詳しくは、説明するより、使ってみたほうが早いだろう。

木下、明久、フィールドを頼む。」

「わかった。アウェイクン!!」

「えっと・・・アウェイクン。」

吉井君と私の合言葉で、フィールドが展開される。

「準備はいいか？キーワードは、『代理召喚』だ。」

坂本が合言葉を言つと、腕輪が光つて、一匹の召喚獣が出てきた。

「あれ？これ、雄二の召喚獣じゃないよ？」

吉井君が言つた。

「そうだ。これは、自分の点数のまま、別の召喚獣を呼び出せる。要するに『代理人』だ。」

「代理人？それを出してどうするの？」

「そうか！！ワシは何をするか分かったぞ。」

秀吉が、楽しそうに言った。

この子、Fクラスのメンバーの近くに居ると、こんなに楽しそうに笑うのね・・・

「秀吉、何がわかったの？」

「これで、ワシらが悪人をするんじや。そのために、これを使って、謙太に正体がばれないようにするのじや。」

「なるほど！！そしたら、僕たちが報復を受ける心配がないね。」

この子達にとつて、謙太の印象って・・・

「じゃ、それぞれ端に隠れて、召喚獣を出したまま謙太が来るのを待ってくれ。」

「え？もしここに来なかつたらどうするの？」

「大丈夫。細工は流々・・・」

坂本が、薄気味悪い笑いを浮かべた。

「それじゃ、これを皆に配るから、早く隠れて、待っておいてくれ。」

「
そういつて、坂本は全員に配った。そう、全員に・・・

「どうして私も?!」

「そりゃ、ここに居るメンバーだけじゃ点数が足りないからな。」

「まったく・・・」

そっぴいっつ、私は腕輪を手首につけた。

「私は何処にいればいいの？」

私は、坂本に聞いた。

「そうだな・・・」

坂本はニヤツと笑い、そして牢屋を指差した。

「あそこに居てくれ。」

「ええ!?!」

「見えるところに居ないと、謙太が探せねえだろ？」

「そうだけど・・・」

私は、しょうがなく牢屋に入った。

牢屋は薄暗く、何かが出てきそうな不気味な感じだった。

何で廃病院に牢屋があるか不思議だったが、そんなことはどうでも

いいくらい怖かった。

「謙太・・・早くきて・・・」

私は、そう思わずにはいられなかった。

第三十二話 如月グランドパークの裏話 そのに（後書き）

どうでしたか？

最近感想が少ない・・・

ちゃんと返すので、感想&評価お願いします・・・

第三十二話 如月グランドパークの裏話 そのさん（前書き）

謙太編その3です。

第三十二話 如月グランドパークの裏話 そのさん

謙太目線

「んっ・・・何で寝てんだ俺は？」

俺は、さっきの軽食屋で目を覚ました。

「ああ、俺、睡眠薬で眠らされて・・・」

俺は、記憶を取り戻した後、周りを見た。

さつき頼んだ、ジュースの氷が解けている。

そして、俺の横に居たはずの優子はいない。

「あいつ、ちゃんと逃げ切れたかな・・・」

そんな時、俺はあるメモに気が付いた。

そこには、

「女は預かった。返して欲しければ、お化け屋敷に一人で来い。」

と走り書きされていた。

「なっ・・・」

冷静に考えてみれば、矛盾点がいくつもあつたが、今はそれどころ

じゃ無かつた。

「・・・優子ッ!!」

俺は、優子を助けるために、お化け屋敷に急いだ。

「ハア、ハア、ここか・・・」

俺は、この前色々あつたお化け屋敷に来た。

「ん？召喚獣フィールド？」

お化け屋敷には、何故か召喚獣フィールドが展開してあつた。

「・・・文月学園の関係者か？」

そんな考えが頭をよぎつたが、そんなことはどうでもよかつた。

俺は、『関係者以外立ち入り禁止』と書かれたお化け屋敷の入り口

を蹴飛ばし、中に入った。

俺は、屋敷内を走り回ったが、優子は何処にもいなかった。

「何処だよっ・・・優子!!」

俺が、闇雲に走り回っていると、階段を見つけた。

「この屋敷に、二階なんてあったか?」

俺が、二階に上がると、明らかに雰囲気が変わった。

「なっ・・・ここは?」

どうやら、ここが召喚獣フィールドのメインらしい。

ここからは、敵と戦う羽目になりそうだな・・・

俺は、気を取り直し、先へと進もうとした。

ヒュン!!

「うおっ!!これは・・・手裏剣?」

俺は、ある変態^{ムツリ}の事を考えた。

しかし、俺の前に出てきた召喚獣は、ムツリのものではなかった。

「何だ、あいつ・・・?まあ、いい。サモン、シンクロ!!」

俺は、謎の相手に対して、召喚獣を呼び出し、応戦した。

ちなみに、俺の能力は・・・

総合科目、4559点

だった。

しかし、あたりが暗く、相手の点数が分からない。

「てやああああ!!!!」

俺は、渾身の一撃を相手にぶつけた。

すると、相手の召喚獣は元から居なかったかのように消えてしまった。

「なんだっただんだ?」

俺は、少し違和感を感じながら、先に向かった。

しばらくすると、二体目がやってきた。

さっきと同じ風貌だが、武器が木刀である。

「・・・明久？」

いや、明久の召喚獣にしては強そうだ。

俺は、先制攻撃を仕掛けるべく、奴に特攻して行った。

すると、相手は当たったフリをして、俺に足払いを掛けた。

「いった・・・」

こけた俺に、相手は追い討ちを掛けた。

「グッ・・・！！！」

俺の点数は見る間に消耗し、4000点を切った。

しかし、俺の攻撃がかすただけで、相手の召喚獣は消え去った。

「イタタ・・・あぶなかつた・・・」

俺は、刺された腹をさすりながら、先へ進んだ。

三人目は、薙刀を持っていた。

「秀吉・・・？」

さっきから、同じ召喚獣の武器が見覚えのあるものになっている。

「もしかして・・・COM召喚獣のテストか？」

そう考えれば納得できる。

明久を初めとした、Fクラスのメンバーは、召喚獣の戦闘回数が他のクラスの追隨を許さないほど多い。

「だとしたら、俺とも戦うのか・・・？」

俺は、少しの不安を覚えながら、三番目の召喚獣を倒し、先へ進ん

だ。

「その動きは、雄二の召喚獣だな!!」

俺は、四番目の敵と戦っていた。

相手は、軽いフットワークで周りを走り回り、隙を見て攻撃を仕掛けてきた。

「甘いんだよっ!!」

俺は、槍を振り回し、ソニックブームを起こした。

「これなら近付けないだろ!!」

しかし、俺の目的は別にあった。

奴は予想どおり、俺の真上から攻撃してきた。

「一丁上がり。」

奴は、俺があらかじめ突き出していた槍に、自ら突き刺さり、消滅した。

「待ってるよ・・・優子!!」

俺は、先を急いだ。

第三十二話 如月グランドパークの裏話 そのさん（後書き）

なんと言うか・・・

軽いスランプです・・・

誰か脱出策をお教えください・・・

第三十二話 如月グランドパークの裏話 そのよん（前書き）

これがラストです。

第三十二話 如月グランドパークの裏話 そのよん

「優子ッ・・・」

俺は、何とか優子の所までたどり着いた。

優子は、牢屋のようなところに入れられていた。

そして、どうやら眠らされているらしく、優子はすうすうと寝息を立てていた。

「今出してやるからな・・・」

俺は、優子を救い出すために、牢に手を掛けた・・・

ガサッ・・・

「誰だ!!」

俺は、何かが動く音を聞きつけ、振り向いた。

そこには、さっきの召喚獣が、優子のランスを持って立っていた。

「優子のランス・・・って事は、相当強力だな・・・」

今戦うには、分が悪すぎる相手だった。

優子なら、総合科目は3500オーバーだろう。

しかし俺は、後2600点ほどしか残っていなかった。

「ッたく、面倒くさすぎるだろ・・・」

俺は、シンクロした状態で、さっきから召喚獣を出しっぱなしだから、相当疲労がたまっていた。

「こつなつたら、試してみるか・・・」

俺は、本来優子がいうべき言葉を言った。

「チエンジ」

そのとたん、一瞬俺の意識が飛び、次におきたときには、召喚獣の目線になっていた。

「よし、それじゃ、行くか!!」

俺は、槍を構えなおし、突撃した。

相手は、迎撃の態勢を取っている。

「甘いなっ!!」

俺は、槍を投げ、相手の裏に飛んだ。

「たあっ!!」

俺は、正拳突きを繰り出し、相手を吹っ飛ばした。

そして、俺は槍を拾い、追撃を掛けた。

しかし、俺が槍で止めを刺そうとしたが、逆に相手に鳩尾をけられ、吹っ飛んだ。

「ぐうっ……」

俺は、フィードバックに苦しみながら、槍をすてた。

格闘戦なら、召喚獣を完璧に操れるこちらに分があるはずだ……

俺は、気を入れなおし、相手の目の前に飛んだ。

相手は、俺にランスを突き出した。

ランスを、少し掠りつつギリギリで避けた俺は、相手を突き飛ばし、マウントポジションで相手の顔を連打した。

そのうち、相手の点数がゼロになったのか、相手は消滅した。

「長かった……」

俺は、力尽きて倒れた。

「んっ……」

俺は、目を覚ました。

といても、俺はまだ召喚獣の状態だ。

目の前には、優子の顔があった。

優子は、少し驚きながら、俺の目を潰しにきた。

「いってえ……」

「謙太!？」

俺たちは、如月グランドパーク、従業員室にいた。

俺は、状況を理解するのに苦しんだが、何とか理解できた。

「えっと、何とか助かったんだな？」

「え?あ、ああ、うん……」

優子は、何故か言いづらそうだ。

「どうした？何かあったのか？」

「いや、なんでも・・・（ノノノ）」

俺は、何故か顔を赤くしている優子に疑問を覚えつつ、

「じゃ、帰るか？」

取り敢えず家に帰ることにした。

優子目線。

うつ・・・

惜しかったな・・・

私は、帰り道に謙太と帰りながら、ひとつの事を考えていた。

「あそこで目を覚まさなければ・・・」

「なんか言ったか？」

「え？い。いや、なんでもない!!」

思わず口に出してしまった自分を恨みつつ、私は30分前の事を思い出していた。

30分前・・・

「・・・あれ？」

私は、いつの間にか寝ていてしまった。

そして、オートに設定しておいた召喚獣が消えていて、代わりに見覚えがある召喚獣が倒れている。

あれ？あの召喚獣って・・・

「謙太?!」

私は、あわてて謙太の召喚獣を抱き寄せた。

牢の鍵は、本当は元から開いていたから、出たければいつでも出れた。

けど、私は謙太に助けてもらったのを期待してたんだ・・・

「謙太のバカ・・・」

私は、召喚獣を従業員室に連れて行って、召喚獣を見つめた。召喚獣は、すやすや眠っている。

よく見ると、かなり謙太の面影あるな・・・

謙太（召喚獣）の寝顔を見ていると、私の思考回路が麻痺して来た。

「しよ、召喚獣なら、キスしても大丈夫なんじゃないかな・・・？」

思わず口に出してしまい、私はドキツとしてあたりを見渡す。

よかった・・・誰にも聞かれてないみたい・・・

そ、それなら・・・

私は、謙太の唇にゆっくり顔を近付けた・・・

「んっ・・・」

謙太が目覚ましてしまった。

何でこんなタイミングに目を覚ますのよ！！

私は思わず目を潰してしまった。

けど、なんだかんだで、私を助けに来てくれたよね・・・

私は、少し嬉しかった。

「やっと着いたな。それじゃあな。」

「え？ああ、うん・・・」

色々考えていたら、もう家についてしまった。

「どうした？」

「そ、そういえば、お化け屋敷のアレは、如月グランドパークの企画なんだってさ。」

「へえ・・・」

私は、もう少し話をしたくて、適当に話を作った。

「それなら、睡眠薬の件も納得できるな・・・」

謙太は、何かを一人合点して、私を見た。

「な、何よ・・・」

「今日は、すまなかつたな・・・」

「え？」

私は、なぜ謝られたか分からなかった。

「今日は、いくら強制とはいえ、折角のデートを無駄にしちまったな・・・」

「え！？そんな、全然・・・」

「これは、そのお詫びだ。」

謙太は、私のほっぺにキスをして、

「じゃあな！！」

走って帰って行った・・・

「・・・」

私は、あまりに突然すぎて、何が何だかさっぱり分からなかった。ただ、私のほっぺに、謙太の唇の感触が、心地よく残っていた。

第三十二話 如月グランドパークの裏話 そのよん（後書き）

どうでしたか？

これにて、如月ハイランド編終わりです。

お疲れ様でした！

第三十三話（前書き）

ようやく本編に帰ってきました
今回は、召喚獣メインなので、書くのが楽しみですww

第三十三話

いつもと変わらぬ朝。

俺は、いつも通りに学校へ歩いていった。

しかし、学校はいつもと様子が違った。

ドドドドドドドド!!

「なっ!?なんだアレは・・・」

俺が見たのは、学校の窓という窓から何かが流れ出ていた。

俺は、その中のひとつを手にとった。

「・・・明久の召喚獣か?」

俺の手の中に居たのは、幾分かサイズが小さくなった、明久の召喚獣だった。

召喚獣システムが故障したのか?

俺はいやな予感を感じつつ、教室へと向かった。

「あゝあ。こんなところまで・・・」

教室では、明久が召喚獣を掃除(?)していた。

「いったいどうしたんだ?」

俺は、明久に尋ねた。

「なんだかよくわかんないけど、僕の召喚獣の様子がおかしいんだ。」

「・・・お前、召喚獣で悪さしたんじゃないか?」

「するわけないじゃないか!!」

明久が全力で否定していると、鉄人が入ってきた。

「吉井!!お前また何か悪さしたのか?!」

「プツ・・・」

俺は、鉄人の顔を見て思わず笑ってしまった。

鉄人の両鼻、両耳から、明久の召喚獣が顔を覗かせていたからである。

「何で一番に僕を疑うんですか!!」

明久は、不愉快だといわんばかりに否定した。

「何やったんだ、明久?」

「早く白状したほうがよいぞ。」

「・・・誰も責めないから。」

そこに、Fクラスの仲間からの追撃が入る。

「みんなまで・・・」

明久は、みんなから責められ落ち込んでいる。

ここは、フォローするべきか・・・?

「落ち着けみんな。」

俺は、みんなに言い聞かせた。

「明久に、召喚システムをいじる様な真似が出来るワケないだろ?」
こんなバカ

「・・・確かに。」

「謙太、ありがたいけど、僕の心はズタズタだよ・・・」

あれ?

フォローを間違えたか・・・

「ケド、様子がおかしいのアキの召喚獣だけでしょ?」

美波が言った。

確かに、美波や、その他にも何人が召喚しているが、変わった様子は見られない。

シユウウウ

その時、全ての召喚獣が消えてしまった。

「あれ?」

美波は、さっきまで頭に乗っていた召喚獣が、消えてしまったことに驚いている。

「システムが不安定になっておるのかのう?」

秀吉が、考えられる可能性を言った。

「私も召喚してみます。サモン!!」

「……おお……」

姫路が出した召喚獣は、明らかに様子が違っていた。

「大人バージョンじゃの……」

秀吉が言ったとおり、そこにはバニースーツのような服を着た、大人っぽい姫路が立っていた。

明久とムツツリが、鼻血を流しながらそれを見ている。

「姫路さんも、こんな風に成長するのかな……」

「……部分的に特に成長!!」

「……バカだ。」

「へえ……」

雄二も、ちらちらと横目で見ていたが……

ゴスツ!!

「アガガガガガ!!」

「……雄二は見ちゃダメ。」

霧島に制裁を受けていた。

「……ウチだって!サモン!!」

美波も、姫路の召喚獣を見て、何かを思ったようで、召喚した。

しかし、思った通りにならないのが世の中である。

「……まったいら……」

「アアン!？」

「何でもありません……」

俺は、美波の眼力に屈した。

しかし明久は、

「へえ、本人に似て、美波のは成長に無駄がアルンケンシュタイナ

ー?!」

やっぱりバカだ。

第三十三話（後書き）

どうでしたか？

謙太のイレギュラー召喚獣お披露目は次回です。

第三十四話（前書き）

試召システム故障編、第二話です

第三十四話

「……!!」

美波のプロレス技を撮っていたムツツリが、何かに閃いた。

「……も、もしや!!」

そういったムツツリは、姫路の胸にカメラを近付け、少し貫通させた。

「……こ、こうすれば、服の下が!!」

「ええっ!?だ、ダメです!!」

「おい、流石にそれはダメだろ……」

姫路は必死に、俺は、呆れながら、撮影を止めさせようとする。

まあ、どうせ失敗するとは思いが……

「さすがムツツリー二!!」

そうとは知らない明久は、ムツツリー二を激励している。

「撮っちゃだめえええええ!!」

「……やれ!!」「……」

いつの間にかFFF団も周りをとりまいている。

「……お前ら、そんなんだからもてないんだと思っぞ?」

俺は、そういつて、相手にするのを止めた。

「謙太、止めて良いのか?」

秀吉が、心配そうに聞いてきた。

「ま、どうせ失敗するからさ」

俺は、この騒動が終わるまで、横で観察しておくことにした。

「やゝめゝてええええええ!!……!!」

パシヤッ!!

「……骸骨。」

やっぱりな。

「ホッ……」

姫路は安堵し、

「うおおおおお・・・」
FFF団撃沈。

「発想は良かったんだけどねえ・・・」
「明久は残念そうにしている。」

「・・・もう少し、手前なら!!」
ムツツリは諦めない。

その情熱を勉強に傾ける。
あ、保健体育に傾けてるか。

「それにしても、なにやら面白そうじゃのう。」
秀吉が、興味有りげにしている。

「ワシも召喚してみようかの。サモン!!」
秀吉の声と共に、結構おかしな秀吉が現れた。

『やめてよ、おおかみさくん』
「赤ずきんちゃん?てか、何でしゃべってるんだ?」

秀吉の召喚獣は、何故かしゃべっていたが、周りはそんな事どうでも良いらしい。

「び、美少女・・・」

「思ったとおりだよ、秀吉!!僕は何も間違ってたんだ!!」
バカがはしゃいでいる。

「明らかに間違いじゃ!!システムが故障しておる!!」
秀吉は、全力で否定しているが、その顔は微妙ににやついている。

「秀吉、お前、顔がにやついてウグツ?!」
俺が言おうとしたとき、突然秀吉が飛び掛ってきて、俺の口をふさいだ。

「ツてんめえ、何すんだ!」

「どうしたのじゃ?謙太よ、お主、熱があるのではないか?」

「そんな、あるわけがなグハツ!!」

「ちょっと端で寝ておくが良いぞ。」
秀吉に鳩尾を殴られ、俺は沈黙した。

「じゃ、俺も試してみるか。サモン」

騒ぎが落ち着いたところで、雄二が召喚した。

・・・

なんと言うか、コメントし辛いな・・・

「・・・素敵!!!」

霧島だけが、雄二の召喚獣に魅入っている。

「・・・私も、サモン」

霧島が、つられて召喚した。

「・・・おお!!!」

FFF団は、霧島の召喚獣に魅入っている。

なぜなら、裸エプロンというヤバイ格好をしていたからである。

霧島の召喚獣は、雄二の召喚獣に近づき、腕を組んだ。

「・・・お似合い!」

霧島は、その光景にご満悦のご様子だ。

「ムツツリーニのほうは、どうだ?」

雄二が聞いた。

「・・・サモン。」

ムツツリが召喚した召喚獣は、幾分かイケメンになったムツツリが、
新撰組の衣装をしていた。

すると、雄二の召喚獣が、おもむろに近づき、

・・・スッ

「・・・!?!?」

ムツツリの召喚獣の服の中に手を入れた。

『・・・ちよ、ちよっと』

『好きなくせに』

『・・・や、止めッ』

男同士の気味が悪い光景が繰り広げられた後は、

「・・・」

ゴゴゴゴゴゴゴ！

「ま、待て、翔子。これは召喚獣が勝手に、止め・・・」

「・・・裏切り者」

怒髪天を突いた霧島が、坂本をスタンガンで刺した。

「「^{アキ}吉井君の召喚獣は、どうなっているんですか（どうなってるの）？」

雄二が殺されかけている横で、姫路と美波は明久の召喚獣が見たいとせがんでいた。

「試してみよう。サモン！！」

ドドドドドドドドド！！

あ、なんかデジャヴ・・・

「おつかしいなあ・・・どうして僕だけみんなと違うんだろう・・・」

「・・・」

明久が、少し落ち込んでいる。

「俺も、召喚してみるかな・・・サモン」

俺が、召喚すると、なぜか意識が途切れた。

「いってて・・・」

「あ、おきました！！」

俺が、目を覚ますと例にもよって召喚獣視点になっていた。

「そう言えば、ババアのところデストしたとき、そのままだったんだ・・・」

理由が分かった俺は、とりあえず・・・

「チエンジー!!」

自分の意識を戻した。

しかし、やはり俺も人とは違っていた。

「あれ？召喚獣が居ませんか？」

「まさか、俺自身が召喚獣とか・・・」

俺は、状況を確認するべく、ドラゴンを呼び出した。

『がお〜』

「・・・え・・・?」「」

確かに、俺の目の前に何かが現れた。

しかしそれはドラゴンではなく・・・

「ゆ、優子?」

そこには首輪がついた優子がいた。

第三十四話（後書き）

どうでしたか？

感想お願いします。

優子がサブ召喚獣に?!

第三十五話（前書き）

試召システム故障編、第二話です

第三十五話

おい、これはどういう事だ？

俺は、自分の状況を確認するべく、とりあえず優子と愛子を呼んだ。

「どうしたの謙太・・・って私!？」

「うわあ、謙太君、なかなか大胆なことをするねえ・・・」

優子は、鎖に繋がれた自分を見て、驚いている。

「これは、どういうことかしら？」

優子は、般若のオーラを出しながら、俺に詰め寄ってきた。

「俺だつてわかつてねえんだよ!!」

俺は、必死に弁明したが・・・

『がお』

もう一人の優子が、俺に寄って来て、俺の脚に抱きついた。

「・・・ツ?!」

優子が、顔から火を噴いた。

その時、雄二が何かを思いついたらしく、いやらしい笑みを浮かべた。

「そつえば、これは自分の潜在的な意識を具現化したものらしいな？」

「んなつ?!」

「じゃ、じゃあ、謙太は心の中で、優子をこつしたいと思つてるつて事!？」

「え!？け、謙太・・・?」

雄二が言った言葉に、美波が驚きを隠せないといった表情で言い、優子が俺に泣きそうな目を向けながら言った。

「こ、誤解だ!俺はこんな事をしようなんてこれっぽっちも・・・」

「……うらやましい。私も雄二にされたい。」

「霧島！？ここでそんな誤解を招きそうなマゾ発言は止めてくれ！」

そこにさらに霧島のマゾ発言が加わり、收拾のつかない事態へと発展していく……

「け、謙太君！！不純です！！そんなことしちゃ……」

「……（カシャ、カシャ）」

「謙太、なんてうらやましい……じゃなかった。なんて事をしてるんだよ！！」

『『『異端者に、死を！！！！』』』

なんかもう、俺がこんな事をしてしまった前提になっている。

「だから！！俺はこんなことしてな……」

「まったく、往生際の悪いやつじやのう。素直に罪を認めるのじゃ

！！」

「あらら……こんな変態プレイは流石にいただけないねえ……」
秀吉や愛子までが、俺を咎める。

「あゝもう！！だから……って優子！？」

優子は、何を思ったか、近くにあったロープを、俺に渡していった。

「これ、好きにしているよ？」

「だあああああ！！！！」

俺は、全員の誤解を解くのを諦め、優子を連れて廊下に出た。

「これは召喚システムの事故だ。俺はお前を奴隷にしたいだなんて、これっぽっちも思っていない。」

「……ホント？」

優子は、本当に俺がこんな事をしたかと思っていたらしく、心配そうに俺に言った。

「ああ。神に誓ってホントだ。俺は、お前を傷つける気なんてないよ。」

そういつて、俺は優子を抱きしめた。

「……アリガト」

優子の誤解が解けたことを確認できた俺は、優子を放し、クラス内に入ってしまった。

「なぐんだ。これは、自分が思っていることと反対のことを出すシテムだったんだ。」

明久が、納得したようにいった。

「確かに、よく考えてみれば、謙太君がこんな事をしようとするはず無いよね。」

優子が、僕を庇うような発言をしてくれたおかげで、みんなの誤解も解けたみたいで

「それにしても驚いたわ・・・。」と美波

「吉井君は、そんな事しませんよね？」と姫路。

「そんなことはしないよ!!」と明久。

「・・・私は雄二にして欲しい。」と霧島。

「バカ!!翔子、何を言ってるやがる!!」と雄二。

「・・・残念。」とムツツリ。

「姉上に、余計なことをしてはならぬぞ?」と秀吉。
が各自で納得して、何とか騒動が終わった。

「優子と優子の召喚獣は、どんな感じなんだ?」
俺は、二人に言った。

「そうだねえ。まずは僕から、サモン!!」

『『『おお!!』』』

優子が召喚した召喚獣を見て、男共が沸き立った。

なぜなら、優子の召喚獣は、タオル一枚の超セクシーな召喚獣だったからだ。

「え？ちよつと、流石にやりすぎじゃ……」
優子が、呆れたように言う。

「けど、私も気になるかも、サモン」

優子も、召喚した。

「……」

「さすが秀吉のお姉さん……」

「負けた……」

俺は思わず絶句した。

優子の召喚獣は、女王？のような格好で、かなり綺麗だった。

「ねえ謙太？」

「ん？」

「とりあえず、もう一人の私を消して？」

そうだった。

もう一人の優子は、相変わらず俺の足元で

『がお〜』

と言っていた。

第三十五話（後書き）

どうでしたか？

愛子さん、久しぶりの登場です

フレイルムさん、スミマセンでした・・・

第三十六話（前書き）

試召システム故障編です。

第三十六話

「それにしても、何があっただらうな？」

俺は、自分の状態を確かめながら言った。

召喚獣になった感じが全く無いのが面白い。

「さっぱり分らないな・・・」

雄二が、倒れたまま言った。

シューウン

その時、召喚システムが、通常に戻ったのか、召喚獣たちが元のサイズに戻った。

「あ、直った。よかつ・・・」

明久がそういおうとしたが、

バツ！！

突然、召喚獣たちが暴れだした。

「どうしたのじゃ!？」

「コントロールが利かねエツ!!」

召喚獣たちは、窓から外に出て、何処かへ消えていった。

「なんだっただ!？」

俺は、状況が飲み込めずに、ポカーンとしていた。

なぜなら・・・

「あれ?ここに一匹残ってるよ?」

「これは・・・謙太じゃない!？」

俺が召喚獣になっていたからだ。

「どういうことだ?」

雄二が、首を竦めている。

「あはは、このサイズだと、なかなか可愛いねえ」

愛子は、俺のミニ召喚獣Verを初めて見て、感想を言っている。

「たぶん、俺は自分の意識があつたから、暴走しなかったんだと思う。」

俺は、自分が考えうる最大の可能性を言った。

そこに、鉄人が入ってきた。

鉄人は、俺たちの前に来て、こういった。

「えー吉井、佐藤、とりあえず、俺についてきてくれ」

鉄人は、俺と明久を呼び出した。

「何するんですか？」

俺は、鉄人の後ろを歩きながら言った。

「俺も知らんが、お前らを呼んでこいと学園長の命令が来たんだ。」

「へえ？」

俺たちは、『試験召喚システム暴走対策本部』と書かれた部屋につれてこられた。

ちなみにメンバーは、俺、優子、愛子、明久、雄二、姫路、美波、ムツツリ、霧島の九人だった。

「何で呼ばれたんだ？」

俺は、学園長に聞いた。

「今まともに召喚獣を使えるのは、あんた達だけだろう？」

「そのことなんですけど、どうして使えるんですか？」

明久が聞いた。

「観察処分者の召喚獣は、システムの別領域で働いているし、アンタは、召喚獣と同調できるだろう？暴走は、ごく低レベルだから、他の生徒と違って、暴走の影響を受けないんだよ。」

「へえ……」

「なるほど……それで、明久と謙太の召喚獣だけ、様子が違ったのじゃな？」

秀吉が、納得したようにいった。

「けど、謙太はともかく、僕はちゃんと召喚できなかつたですよ？」

明久が、疑問を口にした。

確かに、明久の召喚獣は、大量に出てくるだけだった。

「不具合のある、教師用のフィールドで召喚したからだよ。けど、オマエさんたちは自前のフィールドを持っているだろ？」

学園長は、俺たちを見ていった。

「そつか。黒金の腕輪なら・・・」

明久が、腕輪を出した。

「私の腕輪のほうが、範囲広いわよ？」

優子がそれを遮って言った。

「召喚獣でサーバルームに入って、ケーブルをつないでおくれ。

そしたらアタシが、端末から防犯システムを切って扉を開ける。」

「物理干渉が出来る、観察処分者の召喚獣や、黄金の腕輪ならではの作戦だな。」

雄二が、納得したように言った。

「けど、俺の召喚獣は常にシンクロしておかなきゃいけないし、明久の召喚獣は物理干渉がデフォルトだから、壁をすり抜けられないぞ？」

俺が、疑問を言った。

「システムを冷却するための通気口がある。召喚獣の大きさなら、通れるよ。」

「召喚獣の視点を、アキは確認できないんじゃない？」

「・・・これ。」

ムツツリが出したのは、ビデオカメラと送信機。

「これを召喚獣につければ、中が見えますね？」

「よくそんなものを持っておったな？」

「・・・」

「ムツツリー二を攻めないで！！」

「まだ何も言っておらんじゃろ・・・」

「明久はお得意様だからな・・・」

なんかバカなコントが繰り広げられていたが、スルーした。

「それじゃ、作戦開始だ！！」

「・・・おう！！」

こうして、俺たちの作戦は始まった。

第三十六話（後書き）

どうでしたか？

かんそうおねです！！

第三十七話（前書き）

すみません!!

昨日、書いてたんですけど、パソコンブツチで原稿ペアです・・・
なので更新できませんでした・・・
本当にすみません!!

第三十七話

「あれが排気ダクトか・・・」

俺たちは、サーバルームの入り口のところにいた。

「じゃあいくわよ？アウェイクン！！」

優子が、黒金の腕輪でフィールドを展開する。

流石に、黒金の腕輪には影響がなかったらしい。

「サモン！！」

俺たちは、それぞれ召喚獣を出し、排気ダクトに入った。

「召喚獣、通機構に侵入しました！！」

「二名とも無事です」

「進路クリア！」

姫路、愛子、美波の順で言った。

この三人に、秀吉、雄二を足した5人がオペレーターだ。

「そのまま直進だ。」

「了解！」

俺が、いくらか甲高くなった声で答えた。

「3M先を右に曲がって、次の十字路を左じゃ。」

「ややっこしいな・・・まるで迷路じゃないか？」

さつきから、右に曲がったり左に曲がったりを繰り返している。

「何でこんなに複雑なの？」

明久の問いに、学園長が答えた。

「セキュリティの一種さね。」

「へえ・・・」

俺たちは、まるで迷路のような道を進んでいく。

不意に、足に猛烈な痺れを感じて、下を見た。

「何だこれ！？紫の池！？」

そこには、ドラ○エで目にするような、毒ですよと言わんばかりに紫色の池があった。

「毒の沼地である。」

何処からか聞き覚えのある声が聞こえたが、スルーする。

「何でこんなにあんだよ?!」

明久が切れる。

「一応言っておくが、間違いなく俺のほう痛いぞ?」

一応冷静にしているが、足が溶けそうに痛い。

「危険地帯を迂回する。次の角を右だ。」

「ああ・・・」

毒の沼地のせいで、返事する元気が8割方奪われていた。

「そついえば、俺の召喚獣のデザイン変更はいつになったら行われるんだ?」

俺は、デスマッチ大会の景品が、まだ届いていないことが、少しだけ不満だった。

「まあ待ちな、アンタが大幅に変更したから、プログラミングに手間取ってるのさ。」

学園長が、メンドクサそうに答えた。

「あと一週間位で形になるから、それまで待つときな。」

「あ、明かりが見えたよ!!」

「もうすぐだ。そのまままっすぐ・・・」

「ちよつと待て、なんか様子が変わだ!!」

俺は、前に何かがある事に気が付いた。

「アレは・・・優子と愛子!？」

俺たちの前に、優子と愛子の召喚獣が立ち塞がった。

「暴走召喚獣出現!!」

「攻撃、来ます!!」

その言葉と同時に、愛子の召喚獣が斧をぶん投げてきた。

「危ないッ!!」

俺に直撃しようとしたが、明久が俺をこかした事で難を逃れた。

「・・・わりイ」

俺は、明久に礼を言った後、目の前の敵に向き直った。

「・・・まずいな、こりゃ」

相手は、優子と愛子、それにムツツリと雄二の4人に増えていた。

「おい、どうにかならないのか!？」

「止めさせてよ!!みんな!!」

「無理だ・・・コントロール出来ねエツ!!」

「ゴメン、謙太くん。僕、何にも出来ないよ・・・」

「・・・無念ッ!!」

「謙太っ!!そこから逃げて!!」

どうやら、完全にコントロールできないらしい。

「無理だ・・・この人数相手に、勝てるわけがない・・・」

「そんな、やだよ、こんなのヤダよ!!止めてよ!!ねえ・・・」

「明久、ここは、一回負けて、態勢を整えよう。」

俺たちは、戦死した・・・

第三十七話（後書き）

どうでしたか？

第三十八話（前書き）

試召システム故障編、まだまだ行きます。

第三十八話

「大丈夫ですか？吉井君？」

「大丈夫・・・じゃないみたいね。」

俺達は、鉄人の鬼の補習を受け、満身創痍になっていた。

「ふっ、地獄を見たぜ。」

「アレは教育なのか・・・？」

「どういう補習だったのじゃ？」

「作戦を続けます。回復試験を受けて、点数を補充してください。」
口から魂が出かけている俺たちを無視して、高橋女史は作戦続行を告げた。

「ケド・・・」

そこに美波が口を挟んだ。

「謙太はともかく、アキはよほど高得点を取らないと、敵と遭遇したらアウトよ？」

確かに、俺が優子と愛子を足止めするとしたら、明久は雄二、ムツツリの2人を相手にしなければならぬ。

ムツツリはともかく、雄二は明久の1.5倍ほどの点数がある。

「吉井君？もしよかつたら、私がお勉強お手伝いしましょうか？」

姫路がいった。

「姫路さんが、僕と個人レッスンを？！」

「何を勘違いしてるか知らんが、絶対に違うと思うぞ？」

「そういう脳内変換だけは、頭の回転速いのう。」

吉井が妄想で興奮しているのを、俺と秀吉で突っ込んだ。

「・・・それに、すぐに効果が出る方法じゃないと無理。」

霧島が、俺たちに言った。

今から勉強をする暇がないのは確かだった。

「それなら、良い方法があるぞ？」

そこに、雄二がとんでもないアイデアを出した。

補給試験。

俺と明久の前に配られた問題には、

$$8 + 1 \parallel$$

$$12 + 2 \parallel$$

$$9 + 2 \parallel$$

・

・

・

という、小学生波の問題が並んでいた。

「なるほどね。アキでも解ける簡単な問題ばかりなら、点が取れるわけね？」

「ちよつとチートくさいかな？」

雄二は、得意げに言った。

それにしても、まさか明久が解ける限界の問題がこのレベルなワケ無いよな・・・？

明久の隣では高橋女史が、俺の横では鉄人がテストの採点をしている。

「おおっ！！明久が、今までにないレベルになっていくぞ！！！」

いや、当たり前だから・・・

「凄いです、吉井君！！！」

いや、普通だから・・・

「ガンバレ、アキ」

がんばらなくても出来るだろ・・・？

俺は、テストを受けているせいで口を挟めないのが残念でしょうがなかった。

ブーッ

その時、明久が間違えたことを知らせる音が鳴った。

この問題の何処に間違える要素が？！

「ハア・・・」

学園長は、呆れてため息を吐いている。

「何を間違えたんだ、明久？」

いや、正確に言えば、この場にいた全ての人がため息を吐いている。
明久が間違えた問題は・・・

大化の改新は何年に起こったか？ A・625

「大化の改新は645年だ！！」

雄二が言った。

そういえば、大化の改新って雄二に縁があったよな・・・

「あれだけの事があったのに、覚えてねえのかよ！！」

「あれだけの事があったからどっちか分からなくなっただよ！

逆ギレかよ・・・

「じゃが、だいぶレベルが上がったのではないか？」

秀吉が言った。

「よっし、これなら、敵が出てもどうにかなるだろ？」

「・・・作戦開始。」

俺たちの修理大作戦、二回目が始まった。

第三十八話（後書き）

どうでしたか？

感想をお願いします。

第三十九話（前書き）

試召システム故障編、もうすぐ終わります。

第三十九話

「サモン!!」

俺たちは、二度目の修理作戦を開始した。

「今度こそ、クリアしてみせる!!」

明久は、相当張り切っていた。

「ま、流石にもう負けないだろ・・・」

俺は、通気口を歩きながら言った。

「よし、その十字路を左だ。」

「了解・・・ってイダダダダ!!」

雄二の指示に従って、左に曲がると再び・・・

「毒の沼地である。」

あんのヤロオ・・・

「強くなってもしびれるんだな？」

「試すな!!」

「あつ・・・アレは?!」

俺たちの前に、雄二、ムツツリ、秀吉の召喚獣が現れた。

「つてか秀吉まで!？」

「ま、今の俺らなら問題ないだろ？」

途中にはさまざまなたらップがあり、若干点数が削られたが、それでもまだ余裕がある。

「そうだね!!よし、今度は負けないぞ!!」

明久が、先陣を切ってきた秀吉&雄二の召喚獣を一蹴した。

「油断しないでください!!」

「土屋が来るわよ!!」

「問題ない。」

ムツツリの召喚獣は、既に俺が始末していた。

「保健体育を使えないこいつなど、ただの屑だ!!」

「早く先に進もう。」

俺たちが先に進もうとすると・・・

『『『ニヤア〜!!』『』『』』』

まだ点数が残っていたらしい三匹が、俺らにおそいかかってきたが・

・

「邪魔。」

俺がふつとばし、毒の沼地送りにした。

「これで片がついたな。」

改めて、俺たちが、先へ進んでいると、通信機から、

「戦死者は補習!!」

「なっ・・・り、理不尽じゃ!!」

「召喚獣が勝手に負けたんだぞ!!」

「問答無用!!」

「・・・不条理!!」

なんて通信が聞こえてきたが、シラナイ、シラナイ・・・

「出口が見えた!!」

「ああ、だが油断するなよ?」

俺たちは、ようやく見えた明かりにホッとしながら、出口へ向かった。

ヒュン!!

「明久、危ない!!」

飛んできたのは、巨大な斧。

つて事は、愛子か!?

俺たちの目の前には、3人の召喚獣が立ち塞がっていた。

「オイオイ、こりゃあヤベエな・・・」

俺たちの前には、優子、愛子、それにプラス、雄二をやられてキレた霧島が立っていた。

まずいな・・・

ここで疲労すると、後で何か出てきたときに、対応できない。

・・・俺が、囷になるしかないか。

「明久、お前は先に行け。俺がこいつらを食い止める。」

俺は、横で武器を構えた明久に言った。

「どうして！？二人でやれば勝てるよ！！」

明久は、やる気満々で、聞く耳を持たない。

「ここで力を使い果たして、後で他の召喚獣が出てきたらどうするつもりだ？」

「ウツ、それは・・・」

「俺たちは勝つのが目的じゃない。最低限一人、制御室に行かなきゃ行けないんだ。」

俺は、明久に諭すように言った。

「・・・分かった。」

明久も、俺の言い分に納得して、突破を始めた。

「明久！！援護する！！」

そういつて、俺は槍を力いっぱい振るい、巨大な衝撃波を起こした。召喚獣たちには避けられたが、おかげで大きな通り道が出来た。

「行け！！」

「うん！！」

明久は、出来た通り道を全力で走った。

「・・・ニヤアツ！！」

霧島の召喚獣が飛びかかるうとするのを、俺が抑えた。

「この先は行かせんぜ？お三方」

「ハアツ、ハアツ・・・」

あれから、かれこれ30分以上戦っている。

「流石に三人相手はキツイか・・・」

優子と愛子の点数はだいぶ減らせたが、霧島はまだまだ余裕そうだ。
ヒュン！！

「当たるかつ！！」

俺は、飛んできた斧を避け、丸腰の愛子に斬りかかった。
スバツ！！

『ンニヤツ?!』

「しばらく寝といてくれ！！」

何とか愛子の召喚獣を倒し、後2匹。

「次は優子だツ！！」

俺は、優子に突きを仕掛けた。

しかし、相手のランスに阻まれ、有効打を浴びせられない。

「ぐうツ！！」

俺の背中に攻撃を浴びせる霧島。

こうなったら、四の五の言ってる場合じゃない。

「優子、悪い！！」

俺は、霧島の二発目の攻撃を、優子をタテにして防いだ。

霧島の攻撃をもろに受けた優子の召喚獣が、音も無く消滅した。

「後は、お前だけだ・・・霧島！！」

俺は、武器を構えなおし、霧島を見た。

霧島は、うつすらと微笑を浮かべ、俺に攻撃を仕掛けた。

「1対1なら負けはしないツ！！」

俺は、霧島の攻撃をかわし、カウンターに出ようとしたが・・・

「イツツ・・・」

さつき受けた傷が痛み、体制を崩した。

その隙に、霧島の召喚獣が袈裟切りで俺を切り伏せた。

「明久、上手くやれよ・・・」

霧島が、俺に止めを刺そうとしたそのとき・・・
シユウウウウ。

突然、霧島の召喚獣が消滅した。

「何故……？」

それと同時に、俺の意識も途切れた。

第三十九話（後書き）

どうでしたか？

次で最後かな・・・

第四十話（前書き）

試召システム故障編、完結です。
ちなみに原作とはラストが代わっています。

第四十話

明久目線。

「着いた!!」

僕は、何とかサーバールームに着いた。

「外れているケーブルがあるはずだよ。それをつないでおくれ。」

「了解!!」

僕は、外れているケーブルを探した。

そして、一本のケーブルを見つけた。

「おっ、あった。」

僕が、ケーブルを直そうと手を伸ばした。

キーン!!

「わっ!!」

突然、僕の手の前に剣が刺さった。

刺したのは、

「み、美波!?!」

美波の召喚獣だった。

「アキ!!」

「逃げてください!!」

そこに、美波と姫路さんから通信が入った。

「で、でも・・・」

僕は、茂るかどうか迷った。

なぜなら、僕が逃げると、謙太が危ないから。

謙太には、カメラがなくて、通信が入らないから、この状況が分からない。

僕がどうにかしないと、謙太はむざむざ戦死することになる。

「早く!!でないよ、私が・・・」

姫路さんのその言葉が終わらないうちに、姫路さんの召喚獣が現れた。

「姫路……さん……?」

僕が啞然としていると、背後に巨大な木馬が現れ、僕は、美波の口
ープに縛られたまま、その木馬に乗せられた。

そして、その僕を、姫路さんの召喚獣がハリセンのようなもので連
叩した。

僕の点数が、見る見るうちに減っていく。

「よ、吉井君!!」

「アキ!!」

「ツ……クツソオオオオ!!」

僕は、二度目の戦死をした……かに思えた。

ウウ、ウウ

「何か来ます!! 移送シンクロ!! 召喚獣、出現します!!」

そこに現れたのは、

「おねえさまああああ!!」

「み、美春!？」

そこに現れたのは、Dクラスの、清水美春さんだった。

清水さんは、美波の召喚獣に抱きついた。

「たとえ召喚獣同士といえど、豚に抱きつくなんて許せません!!
抱くなら、私の召喚獣を抱いてください!!」

ともかく、美波がそっちに気を取られたおかげで、隙が出来た。

「今だツ!!」

僕は、口につけられた猿ぐつわを、姫路さんの召喚獣に向かって吹
いた。

猿ぐつわが当たった姫路さんは、あわてて持っていたハリセンを振
った。

僕がそれを避けると、そのハリセンが、美波と清水さんに当たり、
二人はノックアウトされた。

「戦死者は補習!!」

「いゝやゝ!!」

「イヤン」

ゴメンね、美波、清水さん。

「ゴメンツ姫路さん!!」

僕は、姫路さんの召喚獣を吹っ飛ばした。

今なら、点数では負けていても1対1だから、何とか勝機がある。

「よし、今のうちに・・・」

僕がコードをつなぎに行こうとしたとき、

ゴゴゴゴゴゴゴ!!

姫路さんの召喚獣から禍々しいオーラが出て、姫路さんの召喚獣が大幅にパワーアップした。

姫路さんは腕輪の能力である熱線を、胸部から発射した。

「何で!? 点数は足りないはずなのに・・・」

「私の召喚獣は、300点あれば腕輪が使えるんです!!」

「何だつて?!」

「吉井君、これ以上は無理です!! 逃げてください!!」

「でも、ここまで来て、そんな事・・・」

後一步、後一步なんだ・・・

少しでも時間を作れば、その間にコードをつなげるのに・・・
そんなことを考えている間にも、容赦なく攻撃が襲う。

「吉井君!!」

僕はもう、立つのもやっとの状態だった。

「あと、少しなのに・・・」

僕は不甲斐無い気持ちでいっぱいだった。

「もう止めましょう!! これ以上はもう無理です!! 止めさせましょ
う。」

高橋先生の声が聞こえた。

「生徒に無益な苦痛を強いるのは、教育者として……」
無益？

無益なんかじゃない。

謙太も、みんなも、一生懸命やっているんだ。

僕がこんなところで負けちゃいけない。

「まだだ!!」

僕は、そう叫んだ。

「まだ点数は残っている!!」

「その点数差では勝ち目がありません!! 実力が違いすぎます!!」

「僕は、勝つのが目的じゃない。」

僕は、さっき謙太が言った言葉を思い出した。

「僕は勝つ必要なんてないんだ。」

そういつて、僕は姫路さんの召喚獣を見た。

「ただ、コードをつなげれば……それでいいんだ!!」

僕は、姫路さんに向かって突進した。

すると、不思議なことに、相手は動けず、直撃を受けた。

「……え？」

最初の点数では、僕が勝っていたから、攻撃力は十分だった。
だから、今の直撃で、姫路さんの召喚獣は消滅した。

「何が起こったの……？」

「明久君が勝ったんです。」

が言った。

「凄いです、明久君!!」

どうやら、姫路さんの召喚獣は、僕の気迫に押され、動けなかったらしい。

「……やった。ヤッターアアアアアア!!!!」

僕は、大きく手を上げ、万歳した、

「吉井君、コードつなぐの、忘れないくださいよ？」

「あ、そうだった……」

高橋先生の注意で、ようやく自分の仕事を思い出した僕は、コードをつないだ。

謙太目線

俺が目を覚めたのは、見慣れない部屋だった。

「・・・補習室？」

「おつ、目を覚ましたか、佐藤。」

「鉄人・・・？」

俺は、補習室の端にある、ベッドに寝ていたみたいだ。

「謙太!!!」

優子が、俺の横に来た。

「優子・・・作戦は？」

「大成功!!!」

優子は、手でVサインを作って、ニコツと笑った。

「謙太!!!」

明久も駆け寄ってきた。

というか、よく見ると、作戦に関わった全員が補習を受けている。

俺は、明久にどんなねぎらいの言葉を掛けてもらえるか期待したが・

・

「早く補習に参加してよ!!! 謙太が入らないと、僕たちも終わらないじゃないか!!!」

「・・・は？」

予想とはまったく違う答えに啞然した。

「ッたく・・・しょうがないな・・・」

俺は、とりあえず考えるのはおいといて、補習に参加した。

第四十話（後書き）

どうでしたか？

最後がグダグダすぎたぜ・・・

次は、またまたオリ話です。

第四十一話 その巻(前書き)

オリ話です。

内容は、見てのお楽しみ

第四十一話 その巻

「邪魔するぞ。」

「ちよつと謙太！あ、失礼します。」

「相変わらず仲いいね。失礼します。」

「・・・失礼します。」

「失礼します。」

俺、優子、愛子、翔子、姫路は、学園長室に来ていた。

「遅かったじゃないか・・・まあいいさね。」

学園長が、パソコンを起動した。

俺たちはこの前の大会の賞品を受け取りに来ていた。

「さて、それじゃあ始めるさね。」

「え〜つと・・・」

「あ、木下です。木下優子です。」

「ああ、じゃあ木下、召喚フィールドを展開してくれ。」

「分かりました。アウェイクン！」

優子の言葉で、召喚フィールドが展開された。

「それじゃ、各自で召喚獣を出してくれ。」

「・・・サモン！！」「・・・」

俺たちは、各々で召喚獣を召喚した。

俺以外の4人は、少ししか変わっていなかった。

たとえば、優子はランスのデザインが違うことくらいだし、姫路に

いたっては、頭のピンのデザイン・・・ってか表情(?)が変わっ

ていたくらいだった。

そんな中で俺は・・・

「お、悪くないな・・・」

召喚獣は、見覚えのない姿になっていた。

俺の召喚獣は、大きく変わっていた。

その姿は、ドラゴンマスターではあるが、鎧の代わりに、狩人のよ

うな服を着ていて、武器は槍がパルチザン（刀のように斬ること
できる槍）に変わり、そのほかに背中にはバスターソード（重さで
叩き潰す剣）、腰にはブーメランが掛けられていた。

「武器が大きく変わったね。」

優子が、俺の召喚獣を見ていった。

ちなみに愛子の召喚獣は、斧のデザインが若干変わっていた。

「ああ。槍だけじゃ足りないからな。」

槍だけでなく、剣も使えるようになれば、強い相手と戦うとき戦
略の幅が広がるはずだ。

「けど、重くないの？」

優子が、心配そうに言った。

「ああ。鎧をはずしたぶんをバスターソードにまわしてるから、問
題ない。」

「じゃあ、僕たちと戦ってみてよ!!」

愛子が、楽しそうに言った。

愛子の腕輪はどんな能力になったんだ・・・

「そうだな・・・」

俺は、いろいろ試したいことがあったし、他の人のももっと見てみ
たかったから、その戦いを了承した。

「じゃあ私から・・・」

最初は姫路だった。

「科目は・・・?」

「じゃ、古典で。」

俺は、古典を希望した。

「OK!」

優子は、古典のフィールドに変更した。

古典、姫路 / 343

古典、俺 / 422

「シンクロー!!」

「それでは、行きます!!」

俺の準備が整ったのを見て、姫路が、挨拶代わりに熱線を撃った。

「チイツ・・・ピーツ!!」

俺は、横に飛びながら、口笛を吹いた。

特別に、ドラゴンの呼び方も変更してもらい、口笛を吹くだけで呼べるようにした。

しかし、その代わりに、ドラゴンを呼び出すのにかかる点数が、少し上がってしまった。

『グルルル!!』

俺は、やって来たドラゴンに飛び乗り、姫路に槍を投げた。

「キヤアツ!!」

姫路は、上手く避けられず、足に直撃した。

「チャンスツ!!」

俺は、バスターソードを抜き、ドラゴンを飛び降りた。

「たあっ!!」

超高地点からの唐竹割りが、姫路の召喚獣を一刀両断した。

「残念です・・・」

「相変わらず強いね・・・次は僕だよ?」

次は、愛子が相手らしい。

「そんじゃ、保健体育で。」

俺は、敢えて保健体育を選んだ。

「え？謙太、あんなに嫌いだったのに、勉強したの?!」

「いや、対鉄人戦をイメージして、ちょっとやってみる。」

保健体育、俺 / 201

保健体育、愛子 / 455

「そっか。じゃ、本気で行くよ?」

愛子が、召喚獣を突進させた。

「甘いっ!!」

俺は、ドラゴンに迎撃させようとしたが・・・

「加速う!!」

「なっ!?!」

俺は、あわてて上に飛んだ。

ドラゴンは、真っ二つにされ、消滅した。

やっぱり、ムツツリの能力か・・・

「流石だ!!けど、頭部がから空きだぜ?」

俺は槍で愛子を串刺しにしようとした・・・

「・・・ッ!?!」

しかし、何故か俺の槍が真っ二つになっていた。

「どう?なかなかでしょ!!」

愛子が、加速して俺の槍を切っていたのだ。

「なかなかやるね・・・けど!!」

俺は、腰にあったブーメランを投げた。

「え・・・?」

愛子は、意表を付かれたみたいで、直撃した。

「とどめだっ!!」

俺は、バスターソードを抜き、思いっきり振り下ろした。

優子の召喚獣は、音もなく倒れた。

第四十一話 その巻（後書き）

どうでしたか？

そういえば、質問なんですけど・・・

この後、もう1つオリ話するのと、原作に戻るの、どっちがいいですか？

感想お願いします・・・

第四十一話 その弐(前書き)

オリ話そのにです。

第四十一話 その式

「次は霧島か？」

俺は、戦闘準備をしている霧島に言った。

「・・・そう。」

霧島は、謎のオーラを纏いながら言った。

「オイオイ、俺、何にもしてないだろ？」

「・・・違う。」

霧島は、俺を見て、珍しく笑った。

「・・・少しだけ、楽しみ！」

「そっか！思いつきり楽しもうぜ！..！」

「・・・（コクッ）」

「教科はどうするの？」

「じゃ、化学で。」

俺は二番目に得意な化学を指定した。

化学、霧島 / 443

化学、俺 / 562

「アンタって、相変わらず凄いわね・・・」
優子が言った。

「まあな。勉強したし」

「・・・負けない。」

霧島が、なにやら不穏な動きを見せた。

「チツ・・・」

俺が気づいたときには、もう遅かった。

俺の体は、完全に自由を奪われ、身動きがまったく出来なかった。

「これが霧島の腕輪……？」

「……違う。」

霧島は、俺を一刀両断したかに見えた……

しかし、背中から切りつけたため、バスターソードに弾かれ、わずかな点数しか削られなかった。

「……！？」

「あつぶな！！」

俺は、何とか動けるようになって、バスターソードを構えた。

「霧島、何をしたんだ？」

「……催眠術。」

「……オーケー。何処で知ったかは聞かないぜ。」

結構苦戦しそうだな……

ピーー！！

「グルウウウー！！」

俺は、ドラゴンを呼んだ。

「くらえっ、ファイヤーブレ……」

「ちよっと待ちな！！」

俺は、学園長に呼ばれたせいで、攻撃を止めてしまった。

「……隙あり！」

「グアッ！！」

俺は、霧島の攻撃に吹っ飛ばされた。

「いてて……おい、どういうつもりだ！！」

「アンタ、この部屋を火の海にするつもりかい？」

「あ……」

そういえば、俺はシンクロしっぱなしだったから、物体干渉能力がある。

「危なかった・・・」

「しつかりしてよね!!」

「すまん・・・」

俺は、戦いながら落ち込んでいた。

「じゃ、この技なら大丈夫でしょ!!」

俺は、ブーメランを投げた。

それを避けた霧島を、上段で思いつきり・・・

「おらあああああ!!!!」

叩き潰した。

「・・・残念。けど、楽しかった。」

霧島は、満足そうにまた笑った。

雄二は、こんな美人の何処が気に食わないんだ？

そう思ってしまうような笑顔だった。

第四十一話 その弐（後書き）

こんかいはきりし・・・坂本翔子さんとの一騎打ちでした。

雄二「おい！！何だその不穏な響きは！！」
ほっときます。

次回は優子さんです。

お楽しみに！！

雄二「無視するな！！」

謙太「黙れ・・・」

第四十一話 その参(前書き)

オリ話、その参です

第四十一話 その参

「やっと優子か・・・」

慣れない装備での4連戦で、俺はつかれきっていた。

「それが・・・」

優子が後ろを指差した。

そこには、

「おお佐藤、また強くなったらしいな。」

「・・・鉄人かよ」

鉄人がいた。

「何だ？俺がいたら何かまずいのか？」

「いや・・・それより、何の用ですか？」

俺は、ため息を吐きながら聞いた。

「佐藤、俺と戦わないか？」

「え？」

俺は、ワケがわからなかった。

「どついう事だ？」

「この前の雪辱を晴らそうと思ってな！」

「よりもよつて今かよ・・・」

正直言つて止めてえが、ここで逃げたら負けだよな・・・

俺は、しょうがなくこの化け物と戦うことにした。

「教科は・・・数学よね？」

「・・・ああ。」

「じゃあいくぞー！！サモンー！！」

鉄人は、召喚獣を出した。

「あれ？それって・・・」

鉄人が出した召喚獣は、如月グランドパークで戦った召喚獣だった。

「これはハンデだ。」

「負けたでしょ・・・」

そして、鉄人は、何故か武器をつけておらず、素手だった。

・・・バカにしてんの？

そう思わずにはいられなかった。

しかし、点数を見たとき、俺は絶句した。

数学、俺 / 732

数学、鉄人 / 1123

「冗談じゃねえ・・・」

これは・・・チートか？

鉄人の点数は4ヶ台に達していて、明久の総合科目をゆうに超えていた。

「どうした？怖気づいたか？」

「・・・世迷言を!!!」

俺は、パルチザンを構えた。

この戦いなら、リーチのある槍のほうが有利だ。

鉄人が、コツチに向かって走ってきた。

「はやっ!!!」

鉄人は、マツハを超えるくらいのスピードで俺に突撃してきた。

俺はそれを何とか避けた。

鉄人は、既に普通の召喚獣の域を突破している。

ピィッ

ここは、空中戦に持ち込むしかない・・・

俺は、ドラゴンに乗ろうとした。

「甘い!!」

しかし、俺が気づいたときにはもうドラゴンが消滅していた。

「ホントに化け物かよ・・・」

下手したら、ムツツリの加速より早い・・・

勝てるか・・・?

俺は、パルチザンを構え直し、鉄人に向かっていった。

「ハアツ!!」

俺は、連続で突きを繰り出した。

「そんな攻撃、当たらん!!」

鉄人は、その全てをかわし、俺の鳩尾に掌低を打った。

「グハツ!!」

俺は、部屋の中央から、壁に向かって吹っ飛んだ。

肋骨や、いくつかの内臓が碎けた感じだった。

「・・・イテエ」

俺は、腹をさすりながら立ち上がった。

とっさに体をくねらせたおかげで、直撃を防げたらしい。

しかし、点数は思った異常に削られていた。

数学、俺 / 244

数学、鉄人 / 1033

「・・・2発目はないな。」

俺は、鉄人の恐ろしさを再確認しながら立ち上がり、パルチザンを捨てた。

「そんな重い剣で戦うのか？」

鉄人は、余裕の表情で俺を見ていた。

今に見てやがれ・・・

「巨大化ッ！！」

俺が腕輪を使うと、剣がさらに大きくなった。そして、俺はそれを思いつき振り下ろした。

「何?!」

俺の攻撃は、鉄人に直撃した。

鉄人の点数が見る間に減っていく。

「いけるか・・・?」

俺は、わずかながらの希望を見出していた。

しかし、

シユン！！

ガスッ！！

「グッ・・・」

ドサッ。

俺は、なすすべなく瞬殺された。

第四十一話 その参（後書き）

明久「最近僕の出番少くない？」

雄二「俺もだ。」

秀吉「ワシもじゃぞ!!」

ムッツリ「・・・同じく!!」

作者「大丈夫!! 次のオリ話はキミたちメインだから!!」

「「「ホント?!」「「「

作者「ああ。だから、安心して待っていてくれ!!」

まだ続きます。

第四十一話 エピローグ（前書き）

エピローグです。

第四十一話 エピローグ

何か最近このパターン多いよな・・・

俺が目覚ますと、そこには優子がいた。

「あ！目、覚めたんだ！！」

「またここか・・・」

俺が目覚ましたのは職員の仮眠室。

ここに来たのは二回目か・・・

「そういえば俺、負けたんだったな・・・」

いくら点数の差があつて、慣れてない装備とはいえ、あそこまでボロ負けするのは気が食わないな・・・

「ま、しょうがないよ！！」

優子が、俺の横に座って言った。

「いくらなんでも、あの点数は卑怯だよ・・・」

「そりゃ、一応教員だからな・・・」

俺は、鉄人を舐めていた。

一回勝っただけで、もう天狗になっていた。

次はこうはいかない。

やらせるわけにはいかない。

「次は絶対勝つ・・・」

「頑張つて！！」

優子は、俺の背中を押してくれた。

「じゃ、さつさと外に出るか？」

「うん！！」

俺達は、自分の教室に帰った。

俺が帰ったあとのFクラスは、なんだか殺伐としていた。

そして明久が一言。

「謙太？秀吉のお姉さんと、何をしていたのかな？」

「おまえ、今更何を言う・・・？」

「今回は今までとは少し違うんだ。」

「違うって何が・・・？」

俺には、何も心当たりがなかった。

「…そこからは俺が。」

ムツリが話に入ってきた。

「…お前は、職員の休憩室で、木下優子にキスをされていた。」

「・・・え？」

言っている意味が分からない。

「なんの話だ!？」

「まだとぼけるか!??とぼけるといふのなら・・・」

「」「処刑!」「」「」

「はあ!？」

FFF団に追われた俺は、とりあえず逃げた。

目標はAクラス。

優子に真実を問い詰めないと・・・

「優子!！」

「謙太!??どうしたの?」

優子は、突然の俺の訪問に、少し驚いていた。

「単刀直入に聞く。おまえ、俺にキスしたか?」

「え?」

優子の表情が変わった。

確実に焦っている。

「そ、そんな、そんなわけないでしょ?」

やりやがった・・・

「怒らないから、正直に言おうか・・・？」

「謙太つ、目が怖い！！」

え？怒ってないよ？全然・・・

「ほっぺたにただけですっ！！申し訳ありません！！」

「全く・・・寝込みを襲うような真似をするな！！」

「はひいっ！！」

あんまりいじめるとかわいそうなので、このくらいにしておっじ。

「もう、やりたいなら堂々と・・・」

「え？」

「なんでもない。じゃあな。」

危ない。

思わずヤバいことを口走ってしまつた・・・

俺は、さっさとＡクラスを出て、Ｆクラスへと向かった。

第四十一話 エピローグ（後書き）

謙太「全く・・・次回をお楽しみに」

作者「あとがき雑すぎ!!」

謙太「俺がやるものじゃないし・・・」

作者「まったく・・・」

第四十二話 その？（前書き）

オリ話その2です。

今回はFクラスネタで行きます。

第四十二話 その？

そろそろ夏が本格化してきたある日・・・

「あちい・・・」

俺達は、クーラーがないFクラスの教室で授業を受けていた。

「こんなんじゃないや授業を受ける気にならないよ・・・」

「そうじゃのお、さすがにこの暑さは酷じゃ」

明久と秀吉が言った。

「そうですね・・・」

「確かに、この暑さはきついわね・・・」

姫路と美波も賛成した。

「全く、困ったもんだな？」

「・・・暑い(ブーツ)」

「むっ、ムツツリーニが、何もしてないのに鼻血を！！」

「どうやら、これは、鼻の毛細血管を破るほど血圧が上がる暑さらしい。」

「何をしているんだお前たち！！」

授業をしていた鉄人がコツチを向いた。

その額には、玉のような汗

「ムツツリが鼻血出して意識不明になった。」

「なんだと？！また覗きでもしたのか・・・？」

俺が説明すると、鉄人は何か勘違いしたまま、ムツツリを担ぎ、

「俺が戻ってくるまで、自習をしているんだ。いいな？」

保健室へと向かった。

「はあく・・・」

明久がため息をついた。

「扇風機でもあればいいんだが・・・」

雄二が言った。

「たしかにね・・・」

扇風機・・・

値段はそんなに高くないよな？

俺は、あるひとつの作戦を思いついた。

「なあみんな、面白いことを考えた。ちょっと耳を貸してくれ」

俺は、教卓に立ち、みんなの方を向いた。

「扇風機はそんなに高くないだろ？」

「5〜6000円位じゃない？」

美波が言った。

「だったら、鉄人に奢ってもらわないか？」

「・・・ええ?!」「・・・」

俺は、ニヤつと笑った。

「どうやって・・・?」

明久が、おずおずと聞いてきた。

俺は、自分が考えついた作戦の全容を言った。

「方法は簡単だ。まず、鉄人に交渉する。そして、鉄人の召喚獣を

倒すんだ。」

「え？交渉って・・・?」

明久が、首を傾げた。

俺は、交渉内容について説明した。

交渉内容は、実に簡単なものだった。

「俺たち全員と召喚獣バトルをして、俺たちが買ったら扇風機を買

う。という約束をな。」

「でも、もし負けたらどうなるんですか？」

姫路が聞いた。

「全員で補習だ。」

「・・・ええ・・・」「・・・」

そりゃ、鉄人と勝負じゃ渋るよな・・・

しかし、俺には最強の切り札ハッタリがあった。

「その代わりに、倒したやつは、学校中から注目されるぞ？もしかしたら彼女が……」

「……すぐやるう！！」「」「」

「よし、交渉成立だな！！」

士気は万端。これで準備は万端だ。

「でもよお、その条件、鉄人が飲むと思うか？」

その時、雄二が言った。

確かに、その内容には、鉄人のメリットがなかった。

そこで、俺は我が身を削ることにした。

「そうだな……じゃあもう一つ条件をつけよう。」

「……どんな？」「」「」

「俺を観察処分者にして、好きにこき使えっていう条件だ。」

「……え！？」「」「」

さすがに、それには全員が驚いた。

「大丈夫。俺はお前らを信じてる。さあ、目に物を見せてやるうぜ

！！」

「……おお！！！！」「」「」

みんなも乗って、次こそ準備が完了した。

かくして、俺たちVS鉄人の勝負が始まった。

第四十二話 その？（後書き）

謙太「よく考えたら、観察処分者になっても、なんのメリットもねえな・・・」

作者「ま、頑張つて、逝つてらっしゃい」
謙太「字が違うっ！！」

第四十二話 その？（前書き）

オリ話その2です

台風がいつの間にか消えててびっくり・・・

第四十二話 その？

「よーしお前ら。授業を再開する・・・ってどうした？」

鉄人は、俺たちのただならぬ気配を感じとったのか、一步後ずさりした。

「ああ、これを見てくれ。」

俺は、鉄人に紙を一枚渡した。

「なんだこれは・・・？」

俺たちが渡した紙には、こんなことが書かれていた。

嘆願書

私たちFクラスは、西村教諭に対して、試験召喚戦争を仕掛けたいと思います。

この試験召喚戦争の意図、そして私たちが勝利した暁の賞品は、この教室に扇風機をつけていただくことです。

もしも私たちが敗北した場合、Fクラス、佐藤健太を觀察処分者に任命し、自由にこき使うことを認めます。

Fクラス一同

という文だった。

「ほう・・・」

もちろん、この文は姫路が書いたものだから、誤字や脱字があるはずがない。

・・・最後の表現は酷いかな。

「面白い。許可しよう。」

「・・・やった！！」「」

鉄人は、俺たちが書いた嘆願書を受け入れた。

「ただし、もう一つ条件を追加させてもらう。」

「……え?」

俺達は、一斉に鉄人を見た。

「もし貴様らが負けた場合、全員一週間鬼の補習だ!!」

「……ええ!?」

なんだ、そんなことか・・・

「いいよ。」

俺は、快く快諾した。

「いいの、謙太!？」

明久が、焦って駆け寄ってきた。

「勝ちや良いんだから、問題ないだろ?」

「けど……」

明久は、まだ渋っている。

「そんなことは、負けてから考えるんだよ。さっさと始めるぞ?」

「……うん!」

どうやら吹っ切れたみたいだ。

「さくて、そんじゃあ始めますか!?!」

「……おう!?!」

俺達は、早速戦闘を開始した。

教室内は大混乱だった。

「……喰らえっ!?!」

「甘い!!!(ブン!!)」

「……ぐあっ!?!」

今の教科は数学。

鉄人はやはり4桁台で、3〜4人が束になっても歯が立たなかった。

「次はどいつだ?」

鉄人は、次の獲物はどいつかと目を光らせている。

さすがに一度引くか・・・

「総員、戦略的撤退だ!!!」

「『『おう!!!』』」

「なつ・・・待たんか!!!」

これは、事前に伝えてあったことだから、みんなはさっさと逃げ出した。

鉄人は、予想外の行動に、一瞬呆気にとられたが、すぐに行動を開始した。

「ムツツリ、被害状況は？」

迫り来る鉄人から逃げながら、俺は、いつの間にか復活していたムツツリに、被害を聞いた。

「：今のところ4人戦死、2人は補給が必要。」

「思ったより少なくて済んだな。」

今のところは、ほぼ作戦通りだった。

「A部隊はほかの逃亡を手助けしつつ後退。BとCはさっさと所定の位置に撤退しろ。」

俺は、指示をだしつつ屋上へ退避した。

実は、鉄人がいない間に、あらかじめ部隊を作っていた。

A、B、Cは、主に陽動で、FFF団の連中たち。

Dはさっきの突撃部隊で、やはりFFF団のメンバー。

そしてEが、俺、姫路、雄二、明久、美波、秀吉、ムツツリのいわゆる『主力メンバー』だった。

A部隊の生き残りとして、俺たちE部隊は、屋上に来ていた。

「須川。被害状況は？」

「だいたい4〜5人は削られたな。」

「そうか・・・ま、なんとかなるか。ムツツリ!」

俺は、情報担当のムツツリを呼んだ。

「・・・何？」

「今、鉄人はどこだ？」

「・・・二階の廊下。」

「OK。Bを当てるか。」

俺は、この前使ったトランシーバーを出して、次の指示をだした。

「鉄人は、Bの近くにいます。奇襲をかける。」

「了解。」

B部隊隊長の近藤が言った。

ちなみに、鉄人は今、常に召喚獣を出しているため、いつでも奇襲をかけられる。

「喰らえ、鉄人!!！」

トランシーバーから、戦闘の様子が聞こえてきた。

「グツ・・・何のこれしき!!！」

「ぐあっ!!！」

「まだまだ、一気にたたみかけろ!!！」

「めざせ、ハーレム!!！」

そこは扇風機だろ・・・

「ぬん!!！」

「がはっ!!！」

「B部隊、5人を切った!!！」

「こんだだけやれば十分。戦略的撤退だ!!！」

「おう!!！」

どうやら、上手くいったらしい。

A、B、Cのすべての部隊の役割は、鉄人の点数を減らすこと。

そして、鉄人を倒せたものは、学園の人気ものということもあって、志気も高い。

「次は・・・C部隊、準備だ!!！」

「了解!!！」

C部隊隊長の横溝が言った。

そういえば、こいつは秀吉の熱烈なファンの人だっけ？

「もしうまくやれば、秀吉も見直すかもな・・・？」

「みんな、殺るぞ！！！」

「オオ！！！」

バカは、扱いやすくいいな。

第四十二話 その？（後書き）

謙太「俺の出番はまだ先か？」

作者「ま、頑張ってくれよ。」

謙太「分かっているさ。」

作者「それじゃ、次回をお楽しみに!!！」

第四十二話 その？（前書き）

時間があるのでもう一個書きます。

第四十二話 その？

「なっ……大変だ！！全滅してしまう！！」

「しまった……調子に乗らせすぎた……
全く、バカはこれだから困る。」

「しょうがない。今いるメンバーだけで撤退しろ。」

「それが……あとは俺だけなんだ……って鉄人……（バキッ
！！）ウグツ！！」

「よお佐藤。ずいぶん余裕だな。」

「鉄人、あんまし気合入れる必要ねえぞ？」

「そんなことより、そろそろ来ないか？」

鉄人は、雑魚との戦いに飽きたらしい。

「そんなこと言わずに、もうちょい遊んでこいや。」

「……お前には一度、年上への敬い方を教えたほうがいいのかもし
れんな。」

「それはご心配なく。」

俺は、無線を強引に切って、明久たちの方を向いた。

「それじゃ、ここで包囲網を作る。」

「包囲網？」

「ああ。鉄人が逃げられないようにな。」

そこに、B部隊の生き残りが戻ってきた。

「突撃隊が全滅した！！」

「そうか……Cも全滅したぞ？」

「なんだと!？」

ま、横溝のせいだな。

「それじゃ、さっき説明した通りに、包囲網を作ってくれ。」

俺は、E部隊以外には説明してあった、包囲網作りを進めた。

「なんで包囲網なんか作ってるの？」

美波が聞いてきた。

「ああ、包囲網で逃がさないようにして、あとは俺たちが……つてわけさ。」

「なるほど。けど、なんで言わなかったの？」

俺は、Eのメンバーにだけ説明した。

なぜ言わなかったかというのと、FFF団の士気をくじくようなことは言いたくなかったからだ。

この作戦では、確実にE部隊の誰かが鉄人を倒すことになる。

つまり、AとCには、全く見せ場がない。

「……というわけなんだ。」

「……なるほど……」

ほかの奴らも、すぐに理解できたらしい。

ま、当然だな……

「佐藤!!!」

鉄人が現れた。

「作戦通りに行くぞ!!!」

「……おう!!!」

俺達は、作戦を開始した。

「サモン!!!」

俺たちは、召喚獣を召喚した。

「さて、どの教科かな？」

保健体育、佐藤健太 / 209

保健体育、西村宗一 / 766

「やっぱ!？」

俺は焦ったフリをした。

これも作戦の内。

「フツフツフ・・・先にくたばれ!!」

鉄人は、全く気付いてないらしい。

鉄人の刀が、俺を一刀両断しようとした。

「なんてな。今だ、ムツツリ!!」

「・・・加速」

スパン!!

ムツツリの召喚獣は、腕輪の能力を最大限使い、鉄人の召喚獣を切り裂いた。

「グッ・・・」

思わず膝を付く鉄人。

どうやら、今回はフィードバックがあるらしい。

保健体育、佐藤健太 / 209、土屋康太 / 512

保健体育、西村宗一 / 231

「これで、ほぼ同じ点数だな？」

「クッ・・・まだまだ!!教科変更!!」

鉄人は、教科を変えた。

日本史、佐藤健太 / 466、土屋康太 / 65

日本史、西村宗一 / 652

「ムツツリ、下がれ。」

「・・・了解。」

「次は僕だね？サモン！！」

日本史、吉井明久 / 144

「なっ・・・おまえ、本当に吉井か？」

「僕だつて勉強しているんです！！」

「・・・と、言うわけだ。」

俺は、槍を構えた。

「じゃ、いくよ、謙太？」

明久も、木刀を構える。そして・・・

「いつでもいいぜ？」

俺達は、一斉に攻撃を仕掛けた。

まず明久が、お得意の足払いをかけ、それを受けた鉄人が倒れる。

そこに、

「チエストオオオ！！」

明久の木刀と、俺の飛び蹴りによる攻撃が決まる。

「グッ・・・」

再び膝を付く鉄人。

日本史、佐藤健太 / 435、吉井明久 / 132

日本史、西村宗一 / 133

「教科変更……」

力のない声でそう言つと、再びフィールドが変わつた。

世界史、佐藤健太 / 344、吉井明久 / 75

世界史、西村宗一 / 563

「世界史は少し勉強が足りないんじゃないか？」

「……お互いな。」

俺は、明久の前に立ち、明久を守つた。

「お前は下がね。」

「うん。」

明久が下がり、かわりに出てきたのは……

「次はわしの出番じゃな。」

「頼むぜ？秀吉。」

「任せるのじゃ。サモン！！」

世界史、木下秀吉 / 144

「な……」

「ワシだってちゃんと勉強しておるからのお。」

「頼りにしてるぜ？」

秀吉は、薙刀を構えた。

「調子に乗るなど・・・グッ!?」

鉄人は、思った以上にダメージを受けているらしい。

「今だ、秀吉!!!」

「うむ!!!」

俺達は、一斉に飛びかかった。

秀吉が右脇を薙刀で、俺が左脇をパルチザンで一斉に斬る。

見事に直撃し、鉄人の点数が見る間に減っていく。

世界史、佐藤健太 / 322、木下秀吉 / 132

世界史、西村宗一 / 122

「グッ・・・教科変更。」

次の教科は、鉄人お得意の数学だった。

数学、佐藤健太 / 721、木下秀吉 / 101

数学、西村宗一 / 1011

しかし鉄人は、さっきの作戦で、思った以上にダメージを負っていた。

「美波!!!」

「任せて!!!サモン!!!」

秀吉とバトンタッチして、美波が来た。

「お前ら・・・」

「行くぞ!!」

「うん!」

俺は、槍を投げ捨て、バスターソードを抜いた。それと同時に、鉄人が俺に攻撃を仕掛けてきた。それをなんとか受け、

「美波!」

「うん!」

美波が、背後から攻撃を加えた。

「ぐぬう・・・」

鉄人がひるんだ隙に、俺が袈裟斬りを放った。

「クツ・・・教科変更・・・」

鉄人は大分ダメージを受けている。

そろそろ大詰めだ!!

第四十二話 その？（後書き）

謙太「なかなかスゲエな・・・」

作者「でしょ？」

謙太「明久も強くなったな・・・」

作者「雄二と姫路さんの点数が、一番驚くと思うよ？」

謙太「それは楽しみだ！」

作者「それでは・・・」

賢太「次回作をお楽しみに!!」

作者「違う違う!!次回をお楽しみに!!」

第四十二話 その？（前書き）

クライマックスです。

第四十二話 その？

「教科変更。」

鉄人が次に指定した教科は、古典だった。

古典、佐藤謙太 / 511、島田美波 / 13

古典、西村宗一 / 822

「やっぱり古典は相変わらずだな。」

「しょうが無いでしょ!!！」

「大丈夫だ。美波、いったん下げれ。」

「うん。」

美波が下がり、次に出てきたのは、

「次は、俺の出番だな。サモン!!！」

雄二だった。

古典、坂本雄二 / 265

「お前まで……」

「さして、鉄人。今までの借りを返させてもらっせ？」

雄二は、そういうや否や、鉄人に飛びかかった。

「クッ……」

鉄人は、体力が限界に近いのか、よけるので精一杯だ。

「そこだっ!!！」

俺は、鉄人の着地の瞬間をねらって、ブーメランを投げた。
「ぐっ……」

上手く直撃し、鉄人の動きが止まる。

「終わりだっ!!」

そこに更に、雄二が追い打ちをかける。

「ぐあっ……」

古典、佐藤謙太 / 521、坂本雄二 / 243

古典、西村宗一 / 210

「教科変更だ……」

満身創痍になりつつも、なんとか教科を変える鉄人。

化学、佐藤謙太 / 577、坂本雄二 / 122

化学、西村宗一 / 1080

「まだ4ケタを隠していたか……」

これも、おそらく俺の得意分野を勉強した結果だろう。

「これで臆したか？」

「まさか。姫路!!」

「はい、サモン!!」

俺は、最後の切り札、姫路を出した。

「さすがにまずいな…」

鉄人は、苦そうな顔をした。

「もう終わりだ。すでに、チェックメイトだろ？」

俺は、鉄人の前に立って、剣を向けた。

「・・・分かった。俺の負けだ。」

鉄人は、素直に負けを認めた。

「じゃあせめて、ひと思いに楽にしてやる。」

俺と姫路は、同時に唐竹割りを出し、この戦いに終止符を打った。

次の日。

「ずずしいねえ。」

俺たちは、このクラスにやってきた扇風機の前に居た。

さすがに、このクラスにもコンセントはあったから、扇風機を設置する事が出来た。

「良かったな。これでちったあ涼しくなるだろ？」

俺は、下敷きで自分を仰ぎながら言った。

さすがに、男が山のように集まっている扇風機の前なんて、行く気もしない。

「それにしても…」

俺は、E部隊のメンバー、もとい明久達を見た。

あそこまで勉強していたとは、正直驚いた。

「これなら、次の試召戦争は荒れるな…」

「ん？謙太、なんか言った？」

明久が、俺が言った言葉が聞こえたのか、近寄ってきた。

「いや、なんでもない。」

俺は、明久にそう言った。

開戦まであと少し・・・

次の試召戦争が楽しみだ。

第四十二話 その？（後書き）

謙太「俺たちの勝利だっ！！」

作者「おめでと〜」

謙太「次からやつと原作か？」

作者「うむ。けどだいぶネタが減ってきた。」

謙太「なんとか頑張ってくれ。」

作者「そうだね。それじゃ」

「次回をお楽しみに！！」

第四十三話（前書き）

こんかいは、オリ話風味です。

第四十三話

夏の暑さが本格化し、いよいよセミがけたたましく鳴き出すんじゃないかという今日この頃。

俺は、何の当てもなくフラフラと駅前を歩いていた。すると、

「すみません。」

「ん？どちら様・・・」

不意に背後から声をかけられ、振り返り、そして絶句した。

そこには、周りとは少し浮いた、美人な女性が立っていた。え？落ち着け、俺。

まず、間違いなく俺の知り合いじゃないな・・・

「文月学園の方ですよね？」

「え？ああ、はい。」

声をかけられ、思わず返事をする。

「ところで、あなたは・・・？」

「吉井玲と申します。うちの弟が粗相を働いておられないでしょうか？」

バスローブの女性は、丁寧におじぎをしてきた。

「待てよ・・・吉井って、まさか、明久の!？」

「はい。お知り合いの方ですか？」

まさか明久に、こんな美人な姉がいたなんて・・・

「あ、はい。俺、佐藤といいます」

俺は、ひとまず自己紹介をして、

「とりあえず・・・ひとつ聞いてもいいですか？」

俺は疑問を口にした。

「なんでしよう？」

「なんでバスローブなんですか？」

玲さんは、バスローブ姿だった。

「そういえば、海外留学はどうしたんですか？」

俺達は、明久の家に向かいながら、玲さんから事情を聞いていた。

明久から、一通り聞いてはいたが、それでもまだ事情を飲み込めなかった。

「ああ、一応、向こうの大学の教育課程は終了しましたので。」

「向こうって確か、ハーバードでしたっけ？」

「はい。」

すごいな……

本当に明久と兄弟か？

「そんなことより、アキ君は、元気かしら？」

「ええ、そりゃあもう……」

毎日、塩と水が主食だけど……

「やつとついた……」

俺達は、ようやく明久が住んでいるアパートについた。

「すみませんね。」

「いいえ……」

俺は、途中のスーパーで玲さんが買った大量の食材を持ってきていたため、満身創痍だった。

ピンポン

「はい」

チャイムを鳴らすと、明久が出てきた。

「あれ、謙太と……」

「お久しぶりですね、アキ君」

「ねえ、さん……？」

明久は、慌ててドアをとじようとしたが、横で死にかけてる俺を見て、

「あ、ああ、上がって……」

玲さん、これが目的か……？

第四十三話（後書き）

作者「どうでしたか？」

謙太「ほほオリ話だな・・・」

作者「ほっとけ・・・」

第四十四話（前書き）

玲さん編です

第四十四話

「ふう……」

俺は、明久の家に来ていた。

荷物運びを手伝わされたわけだが、それには理由がある。

それは……

「アキ君」

明久の姉、吉井玲さんが帰国したからである。

「ねえ謙太……」

明久が、絶望的な表情でこっちに来た。

「おい、明久。ブサイ……お世辞にも整っているとは言えない顔でどうした？」

「酷いっ！！謙太まで僕を貶めるの？」

「貶めるって……」

全く、どこで知ったやらそんな言葉……

「だって、姉さんが来てるんだよ……？」

そう言つて、明久は力無さそうに玲さんを指さした。

「そういえば、お前の姉さん、なかなか奇抜なセンスをお持ちだな。」

そのせいで、俺は明久の家までの道のりの間に、近隣住民からとても白い目で見られた。

言つておくが、俺はこの人に童貞を捧げたわけじゃないからな！！

「もしかして、あの格好のままここに……？」

「まあな。実はな……」

「ええ！？」

俺の説明に、明久はよほど驚いたのか、かなりの大声を出した。

「なんですか？いきなり大声を出して。非常識ですよ？」

「バスローブで外を歩く人に……」

「人の話は最後まで聞くものですよ？ねえ、謙太くん？」

「え？一応最後まで話はしたけど・・・」

「ダメじゃないですか。アキ君は1を10回説明しないと理解できませんよ？」

ああ、なるほど。

「そこまではな・・・」

「すまなかった。」

「謙太!？」

俺の認識違いだった。

それにしても、実の姉からこんなこと言われるなんて・・・

「この格好には、きちんとした理由があるのです。」

「それはもう聞いたよ・・・」

「それなら、きちんと理解できたでしょう?」

「なんで吸水性が高いからという理由で、しかも外でバスローブを着るんだよ!!」

「まあ、そこは確かにおかしいな・・・」

この人、本当にハーバード出か?

いや、天才は少し抜けてるらしいし・・・

「アキ君?私は、ここに遊びに来たものではありません。大事な用事があるのです。」

「ふえ?」

明久は、なんのことだか分からずボケっとしている。

俺は知っていたが、ここでいうのは野暮だと思い、黙っていた。

「これより、アキ君がどんな生活を送っているか調査し、このまま一人暮らしを続けさせてよいか判断します。」

「ええ?!」

意外にマトモな理由ではあるが、もしそうなった場合、むしろ明久の成績は上がるんじゃないか?

俺の中では、

明久の成績が上がる＝試召戦争が楽になる。

という方程式が瞬時に導き出された。

「玲さん、俺も協力します!!」

「謙太まで!？」

「あら、それは頼もしいですね。是非お願いします。」

「任せてくれ。」

「そんな・・・」

明久は、俺の参戦を知って、明らかに落胆している。

「ところでアキ君。姉さんはアキ君が一人暮らしをするに当たって、

二つの条件を出しました。まさか忘れてはいませんか?」

「・・・忘れてるっていつたら、怒る?」

「いいえ?怒りませんよ?」

へえ、意外だな・・・

ルールには厳しそうだと思ったのだが、案外優しい人だな・・・

「よかった。すっかり・・・」

「怒らない代わりに、チューをします!!」

「すっかり覚えてますっ!!」

前言撤回。

怖・・・

姉からチューとか・・・

「しかも、お嫁にいけなくらい、激しいチューをします!!」

「おいおい!!実の弟になんて事する気だよ!？」

なんて恐ろしい姉なんだ・・・

これは、どんな脅しより効くな・・・

「安心してください。」

「何を・・・?」

「お嫁に行けなくなるのは、女である私・・・」

「どうでもいいわっ!!」

おそらく、これが友達の姉にキレる最初で最後の機会だろう。

どんな姉だよ・・・

第四十四話（後書き）

どうでしたか？

何かスッキリしないところで終わってしまっ、至極残念です。

時間の都合ってやつで・・・

とりあえず、次回をお楽しみに！！

第四十五話（前書き）

お詫び。

フレイルムさん、OVAは、アニメ1期分を終わらせないと書けませ
ん……

申し訳ございません。

というわけで、玲さん編、まだまだ続きます。

第四十五話

「ところで、アキ君は本当に約束を覚えていますか？」

「え？ええつと・・・」

明久は、相変わらず思い出せないようだ。

「アキ君・・・目を閉じて」

「自分で言うのもなんだが、客の前で何をやっている!？」

「謙太君？これは我が家流のスキンシップなのです。人様の家の事情に首を突っ込むものではありませんよ？」

「そ、それは・・・」

いきなり正論を言われ、俺は、思わず口ごもってしまった。

「それではアキ君、改めて・・・」

「うわあ！1つ、ゲームは一日30分！！二つ、不純異性交友の禁止！！」

「・・・残念です。正解だとチュウできません・・・」

何とか思い出せたらしい。

俺はため息をつき、

「とりあえず、俺は邪魔者みたいだし、帰るわ。」

帰路に着いた。

「え？ちよつと!？僕を見殺しにする気?!」

明久が何か言っていたが、キコエナイ、キコエナイ。

次の日・・・

俺が学校に着くと、いきなり優子に捕まった。

「ねえ、謙太？」

「どうした？」

そのこと自体は、別に特殊なことでも何でも無かったから、普通に

応答した。

「謙太さ、この前、また鉄人を倒したんでしょ？」

「まあな。」

「一人ではないから、俺が倒したとは言えないが・・・」

「それってもしかして、Aクラスと戦うための布石？」

「いや、熱かったから・・・」

俺は、否定した。

あの戦いは、ただ単に憂さ晴らしたのだが、どうやら、優子に要らぬ世話を掛けてしまったみたいだ。

「そう。それならよかったわ。」

優子は、判っていたかのように言った。

「安心しろ。俺たちには・・・」

「けど」

優子は、俺の言葉を遮った。

「もし向かってくるっていうなら、私たちは全力で謙太たちを叩き潰すから。Bクラスくらいは取っておいたほうが良いんじゃない？」

それは、逆に考えると、Bクラスの設備はとっておいてと言う暗喩に聞こえた。

まあ、口には出さないが。

「・・・ああ。」

俺は「じゃあな。」といい優子と別れた。

確かに、あいつらにFクラスは可哀想か・・・

改めて考えると、FクラスとAクラスには接点が多すぎる。

これは、雄二に相談して、Aクラスをとらないようにするか？
朝から、色々と頭を使ってしまった。

教室には、雄二がいた。

「おお、雄二。実は話が・・・」
聞ける状態じゃないな。

「それは・・・流行りのクールビズか？」

「下半身だけのクールビズがあるか!!」
なるほど。

「野暮なことを聞いて悪かった。アレだろ？」

「そつだ。翔子の・・・」

「流行の露出狂だろ？」

「今流行ってるのか!？」

「ダメじゃないか。どうせならパンツまで・・・」

「脱ぐか!!」

「え?じゃあ・・・」

「考えなくて良い!!」

ああ、朝から雄二をからかうのは愉快だったな。

「で?話って何だ？」

「ああ、いや、狂はいいや。」

「漢字おかしくないか?!」

「悪い。お前と話していると、コツチまでへんた・・・痛い奴と思
われるから」

「お前、本当に酷いな!!」

「めんどくさいし、無駄な時間なので、そこで会話を打ち切ること
にした。」

「凄く酷いモノログが声に出てるぞ・・・」

おお、気づかなかつた。

ま、雄二だしいいか。

第四十五話（後書き）

謙太「あんな雄^{ゴリラ}二との絡みで終わるなんて……。次回をお楽しみに」

雄二「おまえ、イツカコロス」

謙太「えい（ボン）」

雄二「ぐあっ！！懐かしい武器を・・・」

謙太「次回をお楽しみに」

第四十六話（前書き）

そろそろ、オリ話が書きたくなくなってきた。
けれどもまだまだ終わらない。
という訳で、玲さん編です。

第四十六話

「おはよ〜」

「おはよ〜なのじゃ。」

俺が雄二との会話をやめようとしたとき、明久たちが入ってきた。

「・・・プール水？」

「カルキが多そうだな。」

「間違えた。クールビズ？」

「下半身だけのクールビズがあるか!？」

律儀だな。

「さすが神童。俺にしたのと一字一句違わないツツコミだ。まさか言われるために・・・？」

「んなワケあるか!！それもこれも、明久が変なメールを送ってくるからだ!！」

「へえ?どんなメールだ？」

そんな理由があつたのか。

俺はてつきり、本当に露出狂だと・・・

「そんなわけあるか!！」

あ、また聞こえてた。

「別に変じゃないよ？」

「じゃあ声に出して読んでみる!」

そう言つて、明久にケータイを手渡す雄二。

それにしても・・・

「雄二。」

「なんだ？」

「お前案外・・・」

俺は、雄二のパンツを指さした。

「いい趣味してるな。」

「それだけは言わないでくれ!！」

雄二のパンツの柄は、ハートマークだった。

「お主、意外に可愛い趣味をしておるな。」

「うああああアアア！！穴があつたら入りたい！！」

「・・・穴があつたら入れたい？」

「翔子！！その言い方は絶対におかしい！！」

いつの間にか、霧島合流。

「じゃあ読むよ？」雄二の家に、止めてくれないかな？今夜はちょっと、帰りたくないんだ・・・」
なるほど。誤解されそうなメールだな。

現に、

「ウチにはアキの本心がわからない！！」

「そういうことは、もっと大人になってからです！！」

「不潔だよ！！吉井君！！」

バカ×3

「雄二？まさか吉井の穴に・・・」

「翔子！！それはものすごい勘違いだ！！」

鬼×1、奴隷×1

この学校、絶対おかしいだろ・・・

一時間目。化学。

「・・・」

布施先生は、絶句していた。

その理由は・・・

カリカリカリ・・・

明久がとても真面目に勉強をしていたからだ。
いつもなら・・・

「・・・吉井君」

Z Z Z

「・・・吉井君」

Z Z Z

「・・・美人な女の人が会いに来ていますよ？」

「え?!どこ!？」

こんな感じである。

明久の奇行は、二時間も続く。

カリカリカリ・・・

「あゝ吉井。保健室に行つてきなさい。」

「僕が勉強してたらおかしいんですか!？」

「「「おかしい!!」「」」

だろうな。

昼休み・・・

「どうしたんだ?明久。」

「そうよアキ、急に勉強なんて・・・」

「今日は様子がお菓子ですよ?」

「・・・美味しそうだな。」

「間違えました。おかしいですよ?」

「そこだけを切り取らないで!!」

まあ、明久が勉強するなら、おかしいも間違いじゃないが。

「なんでもないよ?」

そう言つて明久が取り出した弁当箱には・・・

砂糖と水、そして64分の1のカップ麺以外のものが入っていた。

そこには、米、ウインナー、卵焼きなどのオカズが、所狭しと並んでいた。

「なんとということだ・・・」

明日は大魔王が降ってくるぞ。

「おお、今日はぜひぐんとしっかりとした弁当じゃのう。」

「うん。たまにはね・・・」

そういえば、心無しか、朝から明久の表情が暗い。

「もしかして・・・」

俺は明久の横へ行き、耳打ちした。

「（もしかして、あのお姉さんの影響か？）」

「（そうなんだ。一人暮らしをさせていいか、チェックされているんだ。）」
なるほど。」

これで全て繋がった。

勉強面、生活面の両方できちんとしたところを見せれば、明久の姉（玲さん、だったか？）は満足してアメリカに帰っていくだろう。

大変だな・・・明久。

「それにしても、それ誰がつくったの？」

そういえば、明久は料理なんてできたのか？

「え？僕だよ？」

「うそね。」

「嘘じゃないって！！」

おお、なかなか信用されてないな。

「この器用さだと、坂本君か土屋君ですか？」

「幼児期に言いなさい。」

「過去に戻るのか？」

「間違えたわ。正直に言いなさい。」

「誰に作ってもらったんですか・・・？」

明久、つくづく信用がないな・・・

「もう、想像にお任せするよ・・・」

「妄想?!」

「そこまでは言っていないけど・・・」

・・・

「アキってそんなに汚れちゃってるの!?!」

「信じたくないです!」

「嫌いだよ、吉井君!」

「一体何を想像したの!?!というか、なんで久保君がいるんだよ!」

「えっと、愛を届け・・・グボアツ!」

美波は、右ストレートを放った。

痛恨の一撃。

「鮎を届けに来たのよね?」

「まだ匂じゃないからな?」

「・・・そういう問題じゃない。」

久保、撃沈。

「・・・(ノノノ)」

「ところで優子?」

「えっ!?!」

「何でいるかなんて野暮な質問はしないけど、なんでそんなに頬が真っ赤なんだ?」

「え?それは、えっと・・・」

「ボーイズラ・・・ぶはっ!」

「それ以上言ったら、首が飛ぶわよ。」

「怖いよ!」

俺、撃沈・・・?

第四十六話（後書き）

謙太「久しぶりに、優子の腐女子ぶりを見・・・ごあっ!!！」

優子「私は、その単語が一番嫌いな。次行ったら、ブ○ツケンマ
ンの二の舞になるわよ？」

謙太「あれはお前が殺ったのか?!！」

優子「次回をお楽しみに？」

第四十七話（前書き）

ああ嫌だ。

バカテスは好きだけど、テストは大嫌いだ。
うちの学校にも試召システムが欲しい・・・

第四十七話

「それはそうと、」

騒ぎが一段落したところで、雄二が切り出した。

「どうしてうちに泊まりたがっているんだ？」

「どうやら、何かを疑っているらしい。」

まあ、当然と言えば当然か。

「それは「嘘付け」急に学問に目覚めて……って早いよ……！」

流石雄二。

明久の言い訳はお見通しってわけか。

「まあ、いいだろう。中間テストも近いしな。勉強会も悪くないだ
ろ。」

「へえ、案外簡単に折れるんだな。」

「ホント?!」

「ただし、明久の家でだ。」

おお、見事な裏切り。

「!?!」

「明久、動揺が顔に出てる。」

「ただただ、ダメだよ、僕んちは……ちょっと符号が悪くて……！」

「へえ、ー（マイナス）なのか？」

「間違えた。都合が悪いんだよっ……！」

「何を隠しておるのじゃ？」

「確認に行ってみるか。」

「……家宅捜査。」

あーあ、これはもう逃げ切るのは無理だな。

「今日とはにかくダメなんだよ！えっと、すごく散らかってて……」

「お片付け、お手伝いします……！」

「でも……」

明久は、言い訳にかなり頭を働かせていることだろう。

ま、明久の頭だし、言い訳もたかが知れてるか。

「ひどいよ、謙太・・・」

「あ、聞こえてた？」

「そうだ!!」

俺との会話で何をつかんだんだ？

「散らかっているのは、二千冊のエロ本なんだ!!」

「おい、俺とエロ本にどういつながらりが!？」

つてか、この言い訳も無駄だろ・・・

「みる、明久。姫路と島田、ついでにムツツリが臨戦態勢だ。」

「片付けます!!」

「全部処分するから!!」

「・・・任せておけ。」

「ものすごい逆効果!？」

ドンマイ、明久。

「じゃ、俺はパスの方向で。」

ガシッ

俺が、そこから離れようとすると、肩をものすごい力でつかまれた。

「逃がさないよ、謙太？」

・・・明久が切れてる。

「ワリいな、明久。今日はちょっと用事があるんだ。」

実際は何もないが、正直言つて、あの姉さんのツツコミ役はゴメンだ。

「でも、謙太がいないと、勉強キツくない？」

美波が、余計なことを言った。

「たしかにな。明久、捕獲しろ。」

チッ、雄二にはバレたか。

「捕まるか・・・つてゴハッ!!」

左脇腹に凄まじい痛みがつ!!

「ごめんね、謙太？」

俺の脇腹にあたったのは、明久の召喚獣だった。

「ッ……テメエ……」

俺は、意識を失った。

「んっ……」

俺が目を覚ましたのは、教室だった。

もう日が結構沈んでいる。

授業はもう終わったのか……

……ってことは、午後の授業、ずっと寝てたのか？

「いてえ……」

なんか、脇腹だけでなく、頭とか、首とか、足とか、色んなところがいてえ……

「目を覚ましたか。」

「……秀吉？」

教室には、秀吉しかいなかった。

「ワシだけ、部活があったからのお。一緒に行こうではないか。」

「……そうだな。」

俺達は、明久の家へ向かうために、教室から出た。

「それにしても謙太よ。」

「なんだ？」

「姉上とは、まだ付き合い合わぬのか？」

「……は？」

「あれだけ堂々と見せつけておきながら、とぼけるのは無理があるぞ。」

「……ただの友達だ。」

「姉上はそう思ってないと思うがお。」

「……俺にはわからねえよ。」

そう言つて、俺は少しだけ歩くのを早めた。

それは、おそらく赤面していたであろう自分の顔を見せないためだ。

「謙太。」

真面目な声で秀吉に呼ばれ、思わず振り返った。

「・・・どうした？」

「ひとつ、言つておきたいことがあるのでな。」

「・・・？」

秀吉は、俺に深々と頭を下げた。

「おい、一体何を・・・」

「あんな姉ではあるが、わしの姉だ。姉上を、よろしく頼む。」

それは、おそらく、秀吉の紛れもない気持ちだろう。

全く、姉思いの弟だ。

「・・・分かつたよ。」

そう言つと、俺は秀吉の頭を撫でた。

「・・・あいつは、俺が」

『異端者には死を！！』

物陰から、大量にFクラスメンバーが出てきた。

なつ、このタイミングでか！？

「秀吉、走るぞ！！」

「なつ、お、おい、待つのじゃ！！」

俺は、秀吉の手を掴んで、明久の家へと走り出した。

・・・優子。俺は、お前を・・・

第四十七話（後書き）

謙太「ふう・・・」

秀吉「あいつらは、そろそろわしを男として認めてくれぬかのお？」

謙太「全くだ。優子の方が百倍魅力的・・・いや、なんでもない」

秀吉「・・・どっちもどっちじゃのお。それでは、次回をお楽しみに、なのじゃ。」

第四十八話（前書き）

まだ×4、玲さん編です。

第四十八話

「ふう、なんとか逃げ切ったか・・・」

俺たちは、FFF団の追撃から、なんとか逃げ切り、明久のマンションまで来た。

「あれ？まだ入ってないのか・・・」

明久の部屋の前では、明久が、ドアを開けたくないと駄々をこねていた。

「売る気！？僕の純情を売る気?!」

なんの話だ・・・

「土屋君？ワイシャツのボタンは、上二つを開けてもらってください。」

「姫路さん、オーダー細かいよ!!」

姫路・・・

もう完全にFクラスに毒されたな・・・

話の内容は全くわからなかったが、姫路がぶっ飛んだお願いをしているのは、確かなようだ。

「何をしておるのじゃ？」

秀吉が、明久たちのところに行き、事情を尋ねた。

「ああ、今、明久の裸ワイシャツについて論議していたところだ。」

「なぜにそんな話に発展したんだ・・・？」

推測だが、最初は鍵を開ける、開けないの言い合いをしていたはずだ。

「あれ？謙太、来たんだ？」

「・・・誰かさんに気絶させられなきゃ来なかった。」

まあ、気絶させられたから来るつても、おかしな話ではあるが。

「さあ、ごたくはいいから、早く脱げ!!」

「早く!!」

オイオイ、部屋を見に来たんじゃなかったのか？

「分かったよ、開けるよ!!」

明久、ついに折れたみたいだ。

「ボタンを？」

「鍵を!!」

「・・・チツ。」

・・・アホだ。

ガチャ

「「「「」」」」

「う〜お〜!!いきなりフオローできないものが!!」

そこには、おそらく玲さんのものと思われる下着とバスローブが・

・

「これ以上ない物的証拠ね!!」

「・・・殺したいほど妬ましい!!」

まあ、事情を知らない奴ならこんな感じだよな。

「・・・ダメじゃないですか吉井君。」

怖いつ!!姫路が怖いつ!!

「コノブラ、ヨシイクンニハサイズガアツテマセンヨ・・・？」

「「「認めない気だ・・・」」」

姫路コエエ・・・

学力だけでなく、盤若のオーラまで霧島に追いついたか・・・？

劇抗する姫路を抑えつつ、室内に入っていく。

「あ!!」

リビングで、美波が何かを見つけた。

「これって・・・」

「化粧用の、コットンパフじゃのお。」

物的証拠その二。

さすがに姫路も・・・

「ウチの純情返して!!」

ていうか、とりあえず感想の前に挨拶だろ。

「お邪魔してます。」

「あら、お久しぶりですね。」

「・・・昨日会いましたよ?」

「あら、そうでしたか。」

「・・・なんか抜けてるんだよな。」

「謙太よ、知り合いか?」

「ああ、実は、明久の姉ちゃんなんだ。」

「「「え?」」」

「そういうことか。」

姫路、美波、雄二は、驚いたように声を上げた。

秀吉は、納得したような、少しほっとしたような表情になった。

「こんにちは、吉井玲と申します。皆さん、こんな出来の悪い弟と仲良くしていただいて、ありがとうございます。今後とも、よろしくお願いします。」

あれ?

なんか違和感を感じるぞ?

俺が来た時(昨日)は、俺のことはお構いなしで、明久にベツタリだったんだが・・・

第四十八話（後書き）

謙太「玲さん、俺とほかの奴らとの違いはなんなんだ・・・」

玲「ええと・・・第一印象、ですかね？」

謙太「それはいい意味ですかね？」

玲「次回をお楽しみに。」

謙太「スルーですか・・・」

第四十九話（前書き）

祝、10000ユニーク突破！！（いまさらとか言わないで・・・）
ようやくというか、なんとというか・・・
嬉しい限りですっ！！
これからも頑張ります。

第四十九話

玲さんが、片付けを済ませたあと、俺たちは自己紹介を始めた。

「……と言つても、俺は昨日したから、ほかのやつのを聞くだけ。

「俺は、坂本雄二。」

「……土屋康太。」

自己紹介は、滞りもなく進んでいく。

当然といえば当然だが、玲さんだからな……

「ワシは木下秀吉。よく間違われるのじゃが、ワシは……」

「男の娘ですよね？」

「なっ!?!」

秀吉の性別を見破つたのか?!

玲さん、予想以上にすごい人なのかもしれない。

「ワシをひと目で男と分かつてくれたのは、ぬしさまだけじゃ!?!」

秀吉は、よほど嬉しいのか、玲さんに、尊敬の眼差しを送っている。

「はい。うちのバカで甲斐性なしの弟に、女の子の友達が出来るは

ずありませんから。」

「うわぁ……」

ひどい言われよう。

「ですから、そちらの二人も男の娘……」

「いきなりなんて失礼なこと言うの!!!三人とも女の子!!!」

いや、一人違うから。

「女の子……?」

その言葉を聞くや否や、穏やかだった玲さんの顔が、一気に暗くなつた。

「……アキ君はいつから女の子を家に連れ込むようになったのですか?」

「ギクッ!?!」

明久、墓穴を掘つたか……

これも立派な、不純異性交遊だもんな。

「不純異性交遊の現行犯で、1200点です。」

「いやあああ!!!」

200点?

ああ、明久の一人暮らしを許可するかどうかの点数か・・・

「明久。」

雄二が、明久の肩に手を置いた。

「お前も苦労してたんだな・・・」

「雄二・・・」

お互い、女性での苦労が一致するってことか。

お前ら、大変だな・・・

「不純な同性との交友は認めます。10点プラスしてあげます!」

「認めちゃダメだろつ!!!」

・・・なんか、この人といると、リズムが狂う。

「明久、いきなり押しかけたんだ。晩飯作るのくらい手伝っぞ?」

「じゃあ頼むよ!!!」

「あ、ウチも」

「私も手伝いま・・・」

「「女子はここにいてくれ!!!」」

「え?でも・・・」

「男三人で作れるから!!!」

「謙太はやらないんだ・・・」

「当然つ!!!」

だって、カツラーメンしか作れねえし・・・

「じゃあ謙太、姉さんと一緒に、女子の相手しておいて!!!」

「オツケー!!!」

「じゃあ姉さん、よろしくね。」

「はい。よろしければ、アキ君の恥ずかしい写真でも見ますか？」

「それはやめて!!!」

「命拾い……」

……危なかった。

第四十九話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに!!」

第五十話（前書き）

まだまだ玲さん編です。

第五十話

「そういえば謙太よ、お主、料理は出来なかったのか？」

「ああ。」

俺は、勉強会をするために、明久の部屋を片付けながら言った。

女子の和に入る気はしないしな・・・

「まあ、調味料で間違えて薬品を使うほどじゃないがな。」

「あはは・・・」

俺の言葉に、苦笑する秀吉。

「わっ！！」

「おっと・・・」

秀吉が机を運んでいたら、突然つまずいた、

俺は危険を顧みずそれを受け止める・・・なんて危険なことはず、

秀吉をよけた。

ドシーン！！

「イタタ・・・なんで受け止めてくれないのじゃ！！」

怒りながら、立ち上がる秀吉。

「机が直撃しそうだったからな。」

もし受け止めていたら、俺の額に大きなアザが出来ていただろう。

「全くお主は・・・いたっ！！」

「悪かった。どこか、怪我してないか？」

俺は、ふらつく秀吉を抱きかかえていった。

「・・・どうやら、足をくじいてしまったみたいじゃ。じゃが、大

したことはない。」

「そうか。」

「何か大きい音が鳴ったけど、どうした・・・って秀吉と謙太？

！人の家で何をやってるのさ！！」

「大丈夫か・・・ってお前、ついに姉弟両方に手を出したか・・・」

どうやら、机の音を聞きつけたらしい明久と雄二が、明久の部屋に

やってきて絶句した。

「なっ、っ」、誤解だ!!」

「そうじゃ!!机を運んでいただけじゃ!!」

「だったら、なぜこうなる?」

「「うっ・・・」」

今の俺たちの状態は、俺が秀吉を抱きしめている形だ。

はたから見れば、確実に危ないシーンだろう。

「いや、これはただ・・・」

「もういい。何も言わない。それより・・・飯、出来たぞ?」

「謙太?優子さんを悲しませるようなことしちゃダメだよ?」

「誤解だああああ!!」

話を聞いてくれ・・・

「それにしても、美味そうに出来たのお・・・」

俺たちの前には、店が出てくると変わりないほどの完成度のパエリアが出てきた。

「おや?パエリアにしたのですか?」

「あれ?そのつもりで材料買ってきたんじゃないの?」

それにしても・・・

「よくこんなに材料があつたな?」

俺は、出てきたパエリアの量を見ていった。

パエリアの材料は知らないが、この量は、確実に家に買い置きしてある量の限界を超えている。

「ああ、姉さんが間違えて大量に買って来たから。」

「へえ・・・」

俺は、玲さんを見た。

玲さんは、心なしか、残念そうな表情をしている。

「お、美味しそうね、アキ・・・」

「ほ、ほんとにお料理できたんですね、吉井君・・・ポツ」

「わあああ！！見たんだ！！みんなで見ただ！！僕・・・」

「全く、アキ君は落ち着きがないですね。ー10点です。」

「姉さんのせいでしょう！？嫌がらせばかりして・・・姉さんは僕のこと嫌いなんだろ?!」

「いいえ？私はアキ君のことが好きですよ？」

「え？」

あれ？

何か嫌な予感してきた・・・

「一人の女として。」

「最悪だああああ!!」

「だからそのネタ止めるっつーの!!!!」

「日本の諺にこうあります。『馬鹿な子ほど可愛い』と。」

「諦める明久。この人はお前を世界で一番愛しているぞ?」

そんなの、見ればわかるだろ?

「そ、それって、僕が世界一バカだって思われてるってこと・・・

?」

「どっちも・・・じゃないか？」

俺は、茶化すように言った。

「酷いよ・・・」

「う、ウチだって!!」

その時、横で聞いていた美波が言った。

「うちだってアキのこと、世界で一番バカだって思ってるから!!」

「私だって!!世界に吉井君以上にバカな子はいないと、確信しています!!」

おいおい・・・

このタイミングでアプローチかよ・・・

ま、明久は全く気付かないだろうな・・・

「やめて!!みんな僕を傷つけないで!!」

ほらな。

「確かに、明久は馬鹿じゃのう。」

「!?!」

「いやあああ!!」

ちやつかり秀吉が、爆弾発言をした。

「おい、秀吉？」

「あつ・・・い、今のは違うぞ!!決してそう意味では・・・」

「何も言つてねえだろ・・・」

まったく・・・

皆ば・・・アホだな。

「それじゃ、たべよつか？」

「・・・いただきます!!」

俺は、明久、雄二、ムツツリ合作のパエリアをほおばった。

「おつ・・・予想以上に美味しいな・・・」

「見た目以上じゃな。」

「誰かさんたちがイチャついてる間に、僕たちは頑張ったからね・・・」

「」

「だから誤解だ!!」

「!?!」

事情を知らない姫路と美波は、首をかしげている。

「秀吉はむしろ・・・ムグツ!!」

「わー!!なんでもないのでじゃろう?」

秀吉が、俺の口をそこらへんにあったビニールでふさいできた。

ヤバツ・・・死ぬ・・・

「ちよつと秀吉!?謙太が死んじゃうよ!!」

「あつ・・・」

俺は、見事に窒息した。

こんなことしてると死ぬぞ・・・

第五十話（後書き）

秀吉「だだだだだ、大丈夫か!？」

謙太「大丈夫・・・じゃねえよアホ!！」

秀吉「すまぬ・・・」

謙太「全く・・・死ぬかと思つたぜ・・・」

秀吉「本当に悪かった。じゃが、あのことは・・・」

謙太「わあつてるよ。」

秀吉「良かった・・・それじゃ、次回をお楽しみに、なのじゃ。」

第五十一話（前書き）

玲さん編です。

第五十一話

「さてと。」

食事を終えた俺たちは、明久の部屋に集まっていた。

「腹も一杯になったことだし、勉強するか。」

ようやく、テスト対策の勉強会が始まった。

「よろしければ、私が勉強を見て差し上げましょうか？」

「いいんですか？」

玲さんが、指導をかって出た。

「向こうの大学で、教育課程を終了しましたので、お力になれるかと……。」

「向こうって……？」

「アメリカのボストン。よーするにハーバード。」

「ハーバードだと!？」

「……ええ!？」

俺が説明すると、みんなが大声を出した。

そして、

「……出がらしか……」

「その言葉の真意は!？」

その見解も一致したらしい。

「では、参考書をどうぞ。」

そう言って、玲さんは、本を手にとった。

「そ、それって……」

「ベットの時から、六冊見つけました。」

「おい!!女子に見せるんじゃないっ!!」

明さんが持っていたのは、明久のトップシークレット、よーするに・

・
「『『エロ本……』』」

「アキ君には、160点を課します。」

1冊10点。さすがにこれは明久が悪いな。

「それって、一冊10点ってこと？」

「いいえ。」

「あれ？違うのか？」

「姉萌え本がなかったからです。」

「理不尽すぎるううううう！！」

前言撤回。明久、ドンマイ。

「ってか、よく気づいたな。」

俺達は、軽く片付けただけだが、そんなものは全く見つからなかった。

「アキ君のことなら何でもわかりますから。」

「でも、掃除していた俺たちでも気がつかなかったのに。なあ、ひでよ……」

秀吉は、エロ本に向けて殺気を放っていた。

まあ、殺気で言えば、姫路と美波の方が数段上だが……

「……秀吉？」

「んむ？あ、ああ、そうじゃな……」

コイツ、思考が女性化してきてないか？

「それでは、保体の参考書としてどうぞ。」

「やめて！！僕の趣味が白日のもとに！！」

明久は、椅子に縄で縛られ、抵抗できない。

「どうやらアキ君は、バストサイズが大きく、ポニーテールの女子という範囲を、重点的に学習する傾向がありますね。」

「！！？」

「解説いらさないから！！」

玲さんの言葉に、姫路と美波はお互いに顔を見合わせた。

こうして見ると、ちょうど明久の趣味が半々に分けられているな。

「そ、それじゃあ、お勉強を始めましょう。」

そう言いながら、姫路は髪を纏め始めた。

「何髪を纏め上げてるのよ、瑞希!!」

「お勉強の邪魔になるかと思って。」

美波はどうしようもないため、姫路に食ってかかる。

「ウチがやってあげるわよ!!」

「わああ!!美波ちゃん、意地悪です!!」

美波は、強引に姫路の髪を二つのボールのようにまとめた。

「さすがにやりす・・・」

「どうして?そのほうが邪魔にならないんじゃない?」

コイツ・・・

今の争いのことを全く分かっていないのか・・・

バカだろ・・・

「アキ君、1100点」

玲さんが、呆れたように言った。

「ええ!?!どうして!?!」

「理由は今後の人生の中で学びなさい。」

玲さん、案外わかってるんだな。

姫路と美波は、お互いに顔を見合わせ、笑った。

「やっぱり、明久より明さんの方が大人だな。」

「ええ!?!どうして!?!」

「理由はそのうちわかる。」

「そんな・・・」

なんだかんだで、いい姉弟なのかもな。

姉が持っていないものを弟がフォローし、弟がもっていないものを

姉がフォローする。

これが、正しい兄弟の在り方じゃないか?

「それより・・・」

俺は、雄二とムツツリを見た。

雄二も、ムツツリも、とてもソワソワしている。

「お前ら、どうしたんだ？」

「い、いや、明久の本を見てから、寒気が止まらなくてな……」
ああ、こっちは問題なさそうだな。

「で、ムツツリは？」

「……あと、1994冊!!」

「……」

俺達は、ムツツリのセリフに絶句した。

「ほんとに、信じてたんだ……」

こいつ、案外騙され易いな……

そして、勉強会。

勉強会は、とても集中して行っていた。

俺は秀吉、ムツツリ、雄二、に教え、玲さんが明久、姫路、美波に
教えていた。

「……それにしても、玲さんすごいな。」

玲さんの教え方は、とても分かりやすく、あの姫路でさえも遙かに
圧倒している。

ハーバードは伊達じゃないってことか。

俺は、そんなことを考えながら時計を見た。

時刻は10時。姫路と美波はそろそろ帰らなくてはならないはずだ。

「一旦、休憩入れないか？」

俺がそう言うと、その場に張り詰めていた緊張が、一気に解けた。

「あ、もうこんな時間!!」

美波が、時計を見ていった。

「ウチ、そろそろ帰らないと。」

「あ、私も……」

そう言って、姫路と美波は片付けを始めた。

「じゃ、今日はお開きにするか？」

俺は、解散を勧めた。

「そうだね。今日はいっぱい勉強したし。」

「これ以上は集中が持ちそうにないのお・・・」

「じゃ、解散するか。」

「・・・(コクツ)」

みんな解散に同意したから、勉強会は、そこでお開きになった。

「じゃ、お邪魔しました。」

「・・・お邪魔しました。」

俺達は、明久と別れ、夜道を歩いていった。

「それにしても、こんなに集中して勉強をしたのは久しぶりだな・・・」

「確かに。普段以上に勉強が頭に入った気がするしな。」

「とても充実した勉強会になったのお・・・」

「そうですね。」

「玲さん、とつても分かりやすく教えてくれたわ。」

俺達は、感想を言いながら家に向かう。

みんなと別れ、俺は、一人空を見上げた。

「・・・綺麗だな」

俺は、柄にも無くそんなことを思いながら、家へと向かった。

こうやって、優子と一緒に歩いてみたいな・・・

そんな思いが頭をよぎる。

「全く、何考えてるんだ俺は・・・？」

その考えを、必死で消そうと思ったが、なかなか消えなかった。

・・・そろそろ、告白するかな？

第五十一話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第五十二話（前書き）

玲さん編、まだまだ行きます。

第五十二話

勉強会の次の日。

「よ、明久、秀吉。」

「あ、謙太。」

「おはようなのじゃ。」

俺は、いつもの通りに学校に来た。

「テストは明後日だな。」

俺は、カレンダーを見ながら言った。

「そうだね。今回こそはちょっといい点を取って、みんなに自慢したいよ。」

明久は、笑いながら言った。

「わしも、少しは姉上を見返したいもんじゃ。」

秀吉は、意気込んでいる。

でも、今の二人なら、下手すりゃCかDくらいの学力がありそうだ。

「おはよう、アキ」

「おはようございます、吉井君。」

「おはよう二人とも。」

そこに、姫路と美波が来た。

「ああ、おはよ・・・」

俺は、挨拶を仕掛けて、言葉に詰まった。

「姫路さん、髪型変えたの？」

「あ、はい。気分転換に変えてみました。」

ポニテの姫路はいいとして・・・

「美波は、胸型変えたの？」

「そんなんあるかッ！」

と言いつつも、美波の胸が大きくなっているのは確かだった。

「朝起きたら、こうなってたのよ！」

「ええ!？」

「せ、成長期だから・・・」

パンー!!

「キャッー!!」

突然、美波の胸が縮んだ。

「・・・第二次性徴を冒瀆するのは許さない。」

その後ろには、針を持ったムツツリが・・・ってそういうことか。

「なるほど。この前のプールの時みたいに、胸になんか入れてたのか。」

「・・・一瞬でも美波の言い分を信じた自分が恥ずかしい。」

ダダダダダダダ!!!

バンー!!

「ハア、ハア、ハア、」

突然、雄二が、猛ダツシユで教室に入ってきた。

「何してるんだ?」

「謙太!!!、翔子を説得してくれ!!!」

「ああ、昨日のことか。」

俺は、ドアを破らんばかりにノックする霧島に、こういった。

「霧島。雄二は昨日、お前を呼ぼうとしてたんだぞ?」

「・・・本当?」

「ああ。だから、この埋め合わせはちゃんとするそつだ。」

「んなつ・・・」

「・・・それなら良かった。」

「全然良くねえ!!!」

「まあまあ、これが最善策だろ。」

「俺がノイローゼになってもいいのか!? 牛が殺されるところで起きるのは嫌だぞ!!!」

「今死ぬよりはマシだろ？」
「うっ・・・ああ、そうだな。」
ふう、なんとかあったか。

「けど、昨日は楽しかったですね。」
「だな。」

「勉強も進んだしのお。」

俺達は、改めて昨日の勉強会の成果を語り合った。

「けど、明久の一人暮らしが禁止になるかもな・・・」

工口本は見つかるとし、女を家に連れ込んだと勘違いされるし・・・

「そうなんだよ・・・あゝあ、姉さん、アメリカに帰らないかな・・・」

明久が、残念そうに言った。

「家族にそんなこと言っちゃいけないわよ。」

美波が言った。

「明久。お前がどういっても、お前の姉さんはあの人だけだ。それに・・・」

「いい姉さんじゃないか。」

俺のあとを、雄二が続けた。

「良くなんかないよ。チューしようとしてたり、減点したり・・・僕をいじめるのが楽しいんだ・・・」

「いいえ、そんなことはありませんよ？」

姫路が、玲さんをかばった。

「お姉さんは、吉井君のことが好きですよ？」

「それって、バカって思ってるってこと・・・？」

「そうじゃなくって、お姉さんは、吉井君や、吉井君の周りのこと

を、すごくよく見てますよ。」

姫路の言葉に、美波も微笑を漏らした。

この二人も、玲さんに何か思うところがあったのだろう。

まあ、それは俺もだが・・・

「だから、それってやっぱり、吉井君を大事に思ってるってことなんだと思います。」

「・・・」

思わず黙り込む明久。

「明久。」

俺は、明久を見た。

「俺には兄弟がない。だから、正直言って、お前の悩みは贅沢だと思う。」

「謙太・・・」

「だからどうしろとは言わない。ただ、姉さんがいるってことを誇りには思っても、恥じたり、要らないと思ったりするのはお門違いだと思うぞ。」

柄にもなく説教をしてしまったことに気づいた俺は、照れ隠しに笑った。

「悪かったな。俺が言うのも、それこそお門違いって話だ。この話は止めにしよう。」

「・・・」

俺は、そこで話を打ち切り、他愛もない話を始めた。

そして次の日。

「よお。あきひ・・・。」

「ブツブツブツブツ・・・。」

俺は、明久に声をかけようとして、それを止めた。

明久は、暗記カードを熱心、というか執念で読み続けていた、
・・・そつとしておこう。

そして放課後。

「どうだった、明久。」

明久は、放心状態になっていた。

「・・・その様子だと、重大なミスでも犯したか？」

「・・・」

放っておこう。

その後、俺は優子と一緒に帰った。

「テストどうだった？」

「まあ、ぼちぼちだな。」

「へえ。」

「優子は？」

「私も、まあまあかな。」

「そうか。」

優子と、他愛もない会話をしながら帰る。

・・・なぜか、こうしてるだけで幸せだったりするんだよな。

「そういえば、この前吉井君の家で勉強会をしたの？」

「ああ。まあな。優子も来たかったか？」

「え？いや、ただ聞いてみただけ。」

「そっか。」

いっそ、このままのほうがいいのか・・・？

「あ、家についたね。それじゃ。」

「ああ。じゃあな。」

できない。

いくら相手の気持ちを知っていても、もしこの関係が壊れたらと思うと、とてもじゃねえけどできない。

しよつとは思っても、なんだかんだで、躊躇してしまうな・・・

なあ、優子。

お前はまだ待って居てくれているのか？

第五十二話（後書き）

謙太「ノーコメント。」

明久「意味わかんないけど、代読。次回をお楽しみに！！」

第五十三話 Part・one(前書き)

後味悪い終わり方したけど、一応こっからオリ話です。
内容は・・・読んでたらわかります。

第五十三話 Part, one

六月末日。

テストも終わり、あとは夏休みまっしぐらという生徒が大半な中、

「ハア・・・」

俺は憂鬱だった。

「どうしたの謙太？浮かない顔して。」

俺の横を歩くのは優子。

「あ、ああ。ちよつとな・・・」

俺は言葉を濁した。

「何よ、水臭いわね。悩み事なら、話してよ。」

優子が、俺に詰め寄ってくる。

・・・話しても大丈夫か。

「あ、ああ。実はな、今度の土日に、実家に帰省するんだ・・・」

「へえ、それがどうしたの？」

「で、実は俺は、小中学校共に虐められていたんだ。」

「そうなんだ。それで、どんな繋がりが・・・？」

「だから、俺の親父が、家に友達を二人連れてこいって言うてるん

だ。」

「なるほど。けど、あんたなら2人くらい余裕じゃない？」

「それが、今週に限って、みんな用事があるらしいんだ。」

明久は、姫路と美波にデートに連れてかれるらしいし、雄二もこの前の霧島の誤解の件で、お詫びのデート。

秀吉は演劇らしいし、ムツツリは何か大事な用事があるらしい。

そしてその他Fクラスは、

「・・・悪いが、異端者に死を与えなければならぬのでな。」

異端審問会により不可能。

「・・・と、いうわけなんだ。」

「それじゃ、連れてかなかつたらどうなるの?」

「まあ、軽くゲンコツされて、学校を変えられるな。」

「ええ?!結構やばくない・・・?」

「だからこんなに憂鬱なんだ・・・」

俺は、もう一度大きな溜息をついた。

「そっか・・・」

優子は、少し考え、

「ねえ、お金は要らないのよね?」

「ん?ああ、切符はある。」

「それじゃ、私と愛子で行くわ。」

「んなつ?!」

おいおい、冗談だろ・・・?

「何か問題でも・・・?」

「大有りだ!!」

「男じゃないとダメとか・・・?」

「そんなんじゃないけど、常識的におかしいだろ!!」

「え?全然おかしくないと思うけど・・・」

「・・・まあ、いいか。」

今は真にでも縫りたい、猫の手も借りたい状況だしな。

「ほんと?やった!!」

優子は、小躍りして喜んでいた。

「けど、愛子は大丈夫なのか？」

優子が大丈夫だとしても、愛子が無理なら意味がない。

「僕は大丈夫だよ？」

突然後ろから声がして、振り向くと愛子がいた。

「愛子、居たのか？」

「うん。僕が話しかけようとしたら、ちょうど僕の話題になったから。」

愛子は、笑いながら言った。

「そうか。けど、本当にいいのか？」

「大丈夫！謙太くんはそんなことしない人だしね！」

「そうそう。謙太にはそんな勇気ないし！！！」

「・・・否定できない。」

けど、結構傷つくぞ、それ・・・

「それじゃ、決定ね。」

優子が、半ば強引に決定した。

まあ、これでどうにかなるわけだし、いいか。

「集合時間とかは、追って知らせるから。」

「「りょうかい」」

そう言っつて、俺は優子たちと別れた。

第五十三話 Part、one（後書き）

愛子「久しぶりの登場……ってかひどいよユーゴ君!」
作者「面目ない……」

謙太「つたく、適当に書くからこういうことになるんだ。」

作者「返す言葉もございません……」

優子「全く……計画性ゼロね。」

作者「生まれてきてすみません……」

謙太「という訳で、久しぶりに愛子がレギュラー出演するので、次回をお楽しみに。」

第五十三話 Part two (前書き)

オリ話その2です。
やっぱオリ話は楽だ

第五十三話 Part , t w o

「お待たせ」

「遅れてゴメンね」

土曜日。

俺達は、帰省のために駅に来ていた。

「いや、俺も来たところだから・・・はい。」

というベタなセリフを言いつつ、優子たちに切符を渡す。

「おつ、ありがと。」

「ああ、アリガト。」

優子は元気そうに、優子はあくびをしながら、切符を受け取る。

「それにしても、なんでこんな時間なの？」

優子は、時計を見ながらもう一度あくびをした。

ちなみに時刻は朝8時。

遅くはないが、そこまで早くはないはずだ。

「家まで結構距離あるし、時間かかるから。」

「謙太くんの家がどこにあるかは知らないけど、まあ妥当な時間だ

よ。」

「まあそうだけど・・・」

よく見ると、優子の目の下には、クマができていた。

「優子、お前もしかして、昨日眠れなかったとか・・・？」

「あはは、まっさか」。優子がそんな小学生の遠足前日みたいなの

・・・

優子が何気なく言った言葉が刺さったのか、優子は泣きそうな顔をしていた。

その顔を見た優子は、「やっちゃった」って顔をしながら俺を見た。そこを俺に頼られてもな・・・

「あ、実は、昨日は・・・新しい本の販売日で、えっと、それを読んだら、あの、頭が冴えて眠れなくなっただけよ。」

優子が、しどろもどろに説明した。

「そ、そうなんだ〜。それは、しょうがないね〜」

愛子がいそいでフォローする。

「・・・そろそろ行くぞ。」

俺は、それをスルーして、駅構内へと向かった。

「あつ、ま、待って!!」

「謙太くん、そこはフォローしようよ!!」

優子と愛子も、俺が無視したことに気づき、慌ててついてきた。

電車内

俺達は、二人分の椅子が向かい合わせになっている所に座った。

愛子と優子が横に並び、俺が一人で。

「電車に乗るの、久しぶりだな〜・・・」

「僕もだよ。確か・・・最後は中学校の修学旅行じゃないかな。」

優子と愛子が、懐かしそうにいった。

「あんまり良いもんじゃねえぞ。揺れるし、ヒマだし。」

「あはは。」

「そんなことないわよ。」

愛子は、苦笑いし、優子は少し不機嫌そうに言った。

優子は、乗り物が好きなのか・・・?

いや、多分寝不足のせいだろう。

「で、謙太くんの実家ってどの辺にあるの?」

愛子が駅で買ったジュースを飲みながら聞いた。

「ん? ああ、電車で1時間半つてところだ。」

「へえ、そんなにかかるの?」

「ああ。でも、駅からは歩いていける距離だからな。」

「そっか、楽しみだね〜、優子。」

「え？あ・・・そ、そうね。」

「なぜ口ごもる。」

「えっ？あ、それは・・・」

「本当は楽しみじゃない・・・とか？」

「違うわよ！むしろ・・・なんでもない。」

愛子がからかうのを流し、優子は、大きくあくびをした。

普段なら、絶対に人前であくびなんてしないだろう。

・・・相当寝てないな。

「優子、昨日は何時に寝た？」

「・・・4時」

「・・・起きたのは？」

「・・・6時」

おいおい・・・

結構やばいな

この調子だと、うちの両親にあつたときに、一瞬で死んでしまう。

「優子、多分、寝とかないと辛いぞ。」

「？」

「うちの親は・・・ちょっと変わってるんだ。」

「そうなんだ。」

「愛子も、一応寝といてくれ。」

「あ、うん。分かったよ。」

こうして、俺たちは到着まで、しばしの休息をとった。

『まもなく、 駅です。 出入口は右側です。・・・』

「やっと着いたか・・・」

よじやく、目的地までたどり着いた。

「謙太、さっさと行こ？」

「謙太くん、早く早く!!」

優子と愛子が、俺を急かす。

優子は、睡眠をとったおかげでいくらか元気になったようだ。

「わかってる。」

俺は、駅を出て、家へと歩き出した。

「ここらへん、結構都会ね。」

優子が言った。

「一応この辺には、スーパーやスポーツショップ、楽器屋などが一通り揃っている。」

「俺がいた頃からずっとこんな感じだったから、そうは思わないな。」

この街は俺の生まれ故郷だから、俺にとってはここが基準だ。

「けど、あんなところにラ○ホ……」

「それは言っちゃダメ!!」

愛子が、ピンク色の建物を指差し、俺たちがそれを遮る。

「あはは……冗談だよ。」

「全く、どうしてそういうものばかり見つけるんだよ……」

まあ、だからムツツリとは気が合うんだと思うが……

「癖……かな?」

「……その癖、早く直したほうがいいわよ。」

俺たちは、そんな他愛もない(?)話をしながら歩いた。

「……ついたぞ。」

「へえ……ここかぁ。普通だね。」

「ホント、案外普通ね。」

「お前達は俺の家は何を求めていたんだ……」

優子と愛子は、少し残念そうに言った。

「言っとくけど、家族以外は普通だからな?」

「……やっぱり家族は普通じゃないんだ。」

「……なんか不安ね。」

「じゃ、先に入るぞ？」

俺は、優子たちを待たせて、家に入った。

「ただいま」

「あら、おかえりなさい。」

母さんが出てきた。

「ひさしぶりね、ちょっと見ない間に、大きくなったんじゃない？」

「別に。」

「そういえば、お友達は連れてきたの？」

「ああ、けど、もう少し待ってもらってから、リビングに父さん連れてきていて。」

「分かったわ。」

そう言つて、俺は一度外に出た。

「優子、愛子、入ってくれ。」

「「お邪魔します。」」

俺は、二人をリビングに招待した。

リビングには、父さんと母さんが座っていた。

「久しぶり。」

「そうだな。」

「紹介する、俺の友達の・・・」

「木下優子です。」

「工藤愛子です。」

二人は、緊張していた。

それはそうだろう。

父さんは、常に目付きが悪く、よくそつち方面の人と間違えられる。緊張というより、ビビってるな。

「よく来てくれた。まあ、座ってくれ。」

父さんは、二人に座るように促した。

「し、失礼します……」

二人は、ビクビクしながら座った。

「謙太くんとは、一年生の時の同級生で……」

「いつも仲良くさせてもらっています。」

「あらあら、お二人とも可愛いわね。この子には勿体ないくらいだわ。不束者の息子ですが、どうぞよろしくお願いします。」

あれ？

何かこのセリフに違和感を覚えるんだが……

「ちよっと待とうか。言っとくけど、付き合っていないからな？」

「わかつてます。片思いでしょう？」

「全然ちが……くない。」

優子とはもかく、優子は、否定したらしばらく話せそうもないからな。

「やっぱり。すみませんねえ、この子、優柔不断で。」

「いつどこでそのスキルを発動したか、覚えがないんだけど……」

「スキルじゃありません。特性です」

「ポケオンじゃねエよツ！！」

なんか、帰るたびに思うけど、全く話がかみ合わないな……
ちなみに優子たちは、父さんにビビって、何も話をできないみたいだ。

「謙太。お前、学校はどうなんだ？」

「……そこは空気読もうぜ？父さん。まあ、ぼちぼちです。」

「この子ね、中学校を卒業するまで、一緒にお風呂に入るって言ってたんですよ。甘えん坊でしょう？」

「へえ……」

「中学校どころか、小学校入ってから一回もそんなこと言ってねえよ……」

何か話が進まない……

「母さん、ちよっとお茶を入れてきてくれ。すっごく丁寧に。」

「分かったわ。ちょっと待っててね。」
「やれやれ。やっと話ができる。」

「父さん。もう大丈夫だから。」

「・・・なんの話だ。」

父さんは、あえて何も覚えていないふりをする。

「ま、いつものことだが・・・」

「イジメの話だよ。ほら、二人友達も連れてこれたし。」

俺は、優子たちを指さしていった。

「・・・」

父さんは、黙ったまま俺の話を聞いている。

「高校に入るときに言っただろう？もう心配は要らないって。」

「・・・木下さんと工藤さんだったかな？」

「は、はい。」

優子と愛子は、突然話しかけられ、少し戸惑っている。

「正直に言ってくれて構わない。この子は、誰かからイジメを受けているようなことはないか？」

「・・・」

「話せないのか・・・ならしょうがない。」

「いや、ただビビってるだけだから。」

「お父さん。」

優子が言った。

「私は、ここに来るまで、謙太くんがイジめられていたことを知りませんでした。」

「僕・・・私もです。」

愛子が続けた。

「謙太くんは、学校ではとっても楽しそうだし、とても周りから気にかけていると思います。」

「その通りよ。お父さん。」

いつの間にか来ていた母さんが、父さんに何かを耳打ちした。

「そうか。」

それを聞いた父さんは、珍しく笑った。

「今朝、お前の友達から電話があったそうだ。『今日は行けなくてすまない』とな。」

「へえ。」

「その数、およそ50らしい。」

「50!?!」

「だから、もう俺が言うことはない。いい友達を持ったな。」
俺は、絶句した。

50って・・・Fクラスのほぼ全員じゃねえか。

あいつら・・・

帰りにお土産でも買ってやらないとな。

第五十三話 Part two (後書き)

謙太「次回をお楽しみに！」

第五十三話 Part, three (前書き)

けいおんの二次創作の方を断念しました・・・
本当に残念です。

しかし、最近のこの作品の適当さを見ていただければ、しょうがない
と思っただけかと・・・
という訳で、オリ話です。

第五十三話 Part , three

父さんへの報告を済ませ、すっかり暇になってしまった。

と言つても、『今日は家に泊まりなさい』という強制の命令を母さんから受けているため、今日一日は何かをしていなければならぬ。」「とりあえず、お昼ご飯でも食べにいかない?」

母さんが言った。

「確かに、もう11時だしな。どうする、二人とも?」

「私はどっちでもいいです・・・」

「ボクも・・・」

「・・・いい加減ビビるの止めるよ。父さん、こう見えてナイーブなんだからな?」

「コブツ!!」

俺の言葉で、優子と愛子は笑い出してしまった。

俺は至つて真面目に言ったんだが、まあしょうがないな。

「・・・君たち、何がおかしいのかな?」

「すみません!!」

怖いよ、父さん・・・

「それはいいとして、どこに行く?」

俺は、湯呑をじーっと見ている母さんを見た。

「うーんと・・・優ちゃんどこでいいんじゃない?」

母さんは、適当に言った。

なぜ適当かというと、さつきから・・・

「茶柱が立ったよ!!」

なんてことではしゃいでいて、未だに茶柱を眺めているからである。

「優希か・・・」

「誰?それ。」

「ああ、俺の従姉弟。最後にあつたのが一昨年・・・かな?」

「へえ・・・」

俺は、従姉弟について説明した。

「えっと・・・年は同じで、身長は150前後。体重は・・・教え
てくれないけど。」

「つてことは、女の子?」

「ん?ああ。そうだぞ?」

「フェツ!」

「へえ?」

俺の従姉弟が女と知った優子は、オタオタと焦り始めた。
そして愛子が、なにやら不敵な笑みを見せた。

「・・・言つとくけど、そーゆー関係じゃないからな?」

「・・・ホツ」

「残念だな・・・」

「本気でがっかりするな!!」

優子は、安堵の表情を見せたが、愛子はとても残念だというような
顔をしていた。

「それじゃ行くか?」

騒ぎがひと段落したところで、俺たちは優希の家『レストラン ハ
ニ―ブレッド』へと向かった。

「なかなか遠いのね。」

優子が、外を眺めながら言った。

「まあな。優希とは学校も違ったし。」

もしあいつと同じ学校なら、間違い無く虐められていなかっただろ
うな・・・

「優希ちゃんってスリーサイズどのくらい??」

「俺が知ってるわけでもないだろう・・・あ、でも」

俺は、二人の胸部を見た。

「な、何よ・・・」

「どうしたの？謙太くんらしくないな・・・」

二人は、思わず顔を赤くする。

「お前らよりは胸でかいぞ？」

俺は、笑いながら言った。

次の瞬間・・・

バキッ！！

「んがっ！！」

俺は、腕十字ひしぎと、四の地固めを食らわされていた。

「イダダダダダダダ！！」

「その言葉は聞き捨てならないね。」

「さあ、自分の罪を悔いなさい！！」

この狭い車内で、どうやってたらこの技を掛けられるんだ・・・？

「ああああ、仲が良いのね。」

「・・・母さん、あえて否定はしないよ。」

けど、普通親はこの状況見たらいじめと思うんじゃないだろうか・・・

・・・？

「今のはあんたが悪いわ。」

「心を読むなっ！！」

分かっているんだよ、そんなことは・・・

「さて、トドメね。」

「刺す必要な・・・優子っ、その関節はそっちに・・・」

バキッ

「ぐああああああ！！」

けんたはしにました・・・

そうしている間に、車は『レストラン ハニーブレッド』に到着した。

なんとか天国からの帰還を果たした俺が店に入ると、

「け〜ん〜ちゃ〜んつ〜んつ〜んつ!!!」

「お、おい、優希?」

優希が一目散に走ってきて、俺に抱きついた。

「お久しぶりでございますね〜」

「あ、ああ。そうだな。」

優希は、久しぶりに俺に会えて嬉しいのか、とてもはしゃいでいる。その気持ちは嬉しいんだが、俺としては、さっさと離れてくれないと困る。

なぜなら……

「……………」

後ろの二人が絶句しているから。

「あら、優ちゃん。お久しぶりね。」

「こんにちはっ!!!お久しぶりです、お母さん!!!」

後から来た母さんにも、元気のいい挨拶をする優希。

しかし、

ギョツ!!!

一向に俺を離そうとしない。

「なあ、優希?」

「なんですか?」

「とりあえず……友達見てるから、離れてくれ。」

「……………分かったです。」

残念そうに離れる優希。

「せっかく久しぶりなのに……………」

「いや、それとこれとは話が違うから……………」

ようやく開放された俺は、とりあえず優子たちに弁明をした。

「これは、俺たち流のスキンシップってやつなんだ。」

「……………へえ?」

優子さん、目が怖いよ・・・

「やっぱり、僕の目に狂いはなかったね。」

優子は、とつても暗い目で、愛子は好奇心の塊のような目で、俺を見てきた。

「・・・否定できない。」

俺は、ため息をつきながら言った。

「あの・・・」

優希が、俺たちの会話に入ってきた。

「・・・何？」

「ふひゃあっ！！怖いです！！」

・・・だろうな。

今の優子の目は、あの霧島と張り合っくらいだからな。

「まあまあ。で、どうしたの？」

愛子がフォローに入る。

「・・・言っておくが、同い年だからな？」

完全にあやし言葉の愛子に、俺がツツコミを入れる。

「ああ、ゴメン、ゴメン。」

全く、大丈夫か？

第五十三話 Part , three (後書き)

謙太「新キャラ紹介。」

優希「よろしくお願いしますでございます!!」

謙太「このオリ話だけの特別出演・・・かは見てのお楽しみだ。」

優希「よろしくお願いしますでございます!!」

謙太「2回言うな。」

優希「ヒドイデスツ!!」

謙太「次回をお楽しみに」

第五十三話 Part four (前書き)

帰省編その4、オリキャラ優希メインの話です。

第五十三話 Part four

「こつちが、木下優子で、こつちが工藤愛子。どっちとも」

「よろしく。」

「よろしくね。」

二人とも、同級生ということを知っているから、楽そうだな。

「あ、よろしくです。」

「敬語は使わなくていいわよ？」

「こいつの敬語はデフォルトなんだ。」

「へえ。」

なんか、葉月みたいな言葉遣いだけだな。

「えっと、お二人は、謙ちゃんと付き合っているのだから？」

「？」

「こっへん？」

優希が、いきなり核心を付いた質問をし、俺ら三人は固まった。

と言っても、愛子はあまり関係なさそうだが。

「い、いや。そんなはずじゃない！！ただの友達よ。」

優子が、すごい勢いで反論する。

しかし、そうはつきり言われると、なんだか傷つくな……

「よかつた。」

「何が良かったんだ……？」

優子の言葉を聞いて、安堵した優希に、思わず突っ込む。

「だって、謙ちゃんは私のい・い・な・ず・けでございませうから！」

「！」

「え……？」

優子と愛子が絶句し、こつちを見た。

俺は、やれやれと頭を振って、

「お前が勝手に言ってるだけだろ……」

優希の頭を軽く小突いた。

「痛い!!」

「嘘付け。」

明らかにオーバーリアクションをする優希。

「大丈夫です!! 従姉弟は結婚できますから!!」

「そういうことじゃない。もう諦めたんじゃないのか?」

優希は昔、俺が好きだと公言していた。

しかし、中学二年の時にあったある出来事で、完全に・・・愛想をつかされてしまった。

その様子は、

「私はもう謙ちゃんなんて嫌いですっ!!」

と言ったきり、しばらく口を聞かないほどだった。

なんとか仲は回復したが、まだまだ気まずいままとばかり思っていた俺は、今の優希の態度に結構驚いていた。

「昔は昔、今は今です!!」

「はア・・・」

これはもう、どうしようもないな。

「・・・」

二人とも、あまりのスピードで動く展開に、ついていけないようだ。

「あれ? お二人とも、狙ってたんですか? ダメじゃないでございませうか? 謙ちゃんは私のものなんですからね?」

「あはは・・・」

「・・・」

優希の淀みない言葉に、愛子は苦笑い、優子は、すっかり無口になっっていた。

「言うておくが、俺は誰のものでもないからな?」

「はっ・・・謙ちゃん、いつからそんなモテてる人のセリフを吐くようになったのですか!?!」

「今のは結構なナルシスト発言だね・・・」

「・・・」

「いや、い、今のはコトバのアヤだ。」

思わぬ失言をしてしまい、俺は自分の顔が真っ赤になっていくのを感じた。

「謙ちゃん、文月学園に行ってから、変わっちゃったんですね。」

「違うって言うてんだろ!!」

「ひゃっ!! 謙ちゃん怖いです!! 昔はもっと優しくかったです!! やっぱり変わっちゃったです!!」

「あのなあ・・・」

話しづらいのは相変わらずか・・・

「・・・でも、お二人みたいな可愛い人がいると、謙ちゃんが取られかねません!!」

一人で勝手にブツブツ呟く優希。

でも、これってまさか・・・?

「私も文月学園に行くです!!」

「は?お、おい!!」

優希は、厨房にいる親の所に行ってしまった。

「・・・どうやって通学するんだよ」

俺は、大きいため息をついた。

食事を終えた俺たちは、海へ向かっていた。

水着は、一応持つてくるように言っておいたから、二人とも持つてきている。

そして、

「海ですか?今年初めてですね。うん、海開きです!!」

「・・・とつくに海開き終わってるから。」

なぜか優希もついてきた。

優希は、両親に文月行きを断られ、その腹いせに仕事を投げ出してきた。

「仕事は大丈夫なの？」

ようやく復活した優子が尋ねた。

「いいんですつ、あんな店。潰れてしまえばいいんです!!」

「それは言い過ぎだと思っよ・・・」

愛子が、苦笑いで反論する。

「たしかにそうね。優ちゃん、あんまり親に反抗しちゃダメよ？」

「・・・ごめんなさい。」

母さんまで優希を責め、優希は泣きそうだ。

「まあまあ。優希だって、本心で言ってるはずがないだろ？」

俺が、そこに仲裁に入った。

「優希も、これからは注意しろよ？」

「分かったです。やっぱり謙ちゃんは優しいです。」

優希は、少し笑顔を取り戻した。

「・・・」

ちらつと優子を見ると、優子は、その光景を羨ましそうに見ていた気がする。

「優子・・・」

「ついたわよ？」

ものすごく運が悪いっ!!

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。」

「？」

「ほら二人とも、さっさと泳ぎに行こうよ!!」

愛子が、俺たちを急かす。

「謙ちゃん、さっさと泳ぐです!!」

「分かったよ。」

「分かったわ。」

俺達は、車の外に出た。

海水浴場の更衣室で着替えを済ませた俺たちは、海で泳いでいた。

「結構人がいるわね。」

「そうだね。」

最高気温が30度を超えたからか、海水浴場には結構な数の人が来ていた。

「しかし、高校にもなって、この海で泳ぐとは思わなかったな。」「というか、小学校以来、ここでは全く泳いだ記憶がなかった。」

「ほんとです。私も全然来てないです。」

「へえ。何時以来なの?」

「高校一年生以来です。」

「それって去年じゃねえか……。」

「えへへ……。」

「そういうのは、全然って言わないと思うよ?」

「そうなんですか!?!」

「……日本語勉強し直せ。」

「ヒドイデスッ!!!」

プカプカと浮かんでいただけだったが、なんだかんだで、結構楽しい時間を過ごした。

「母さん、そろそろあそこに連れてってくれ。」

海から上がった俺は着替えを済ませ、母さんにある指示をだした。

「分かったわ。」

海に入らなかつた母さんは、暑さを和らげるためのアイスのゴミを、山のように抱えていた。

……どんだけ食ってんだよ。

「どこに行くの？」

目的地に向かう優子が、不思議そうな顔で聞いてきた。

「それは、見てのお楽しみだ。」

「へえ〜？もしかして、駅前から・・・」

「黙れっ！！」

「あらら・・・」

愛子が、放送禁止用語を言おうとしたのを、いそいで止めた。

「謙ちゃん、あそこつてもしかして・・・」

口に出しそうになった優希の口を塞ぎ、小声で言った。

「友達に、サプライズをしてやりたいんだ。」

「そうなんですか。わかりました。」

素直に応じた優希は、おとなしく椅子に座った。

「着いたわ。」

「「早っ！！」」

「実際、結構近かったから、歩いても良かったんだけどな。」

けど、そんなことをしては、ネタバレしてしまう。

「さ、早く降りて？」

「はい。」

愛子が、先に車から降りた。

「あつ、私も・・・」

優子も、車から降りた。

「・・・」

そして、二人は同時に絶句した。

そこには、美しい夕焼けと、沈んでいく夕日があった。

「どうだ？」

「綺麗・・・」

「愛子は、こんなのに興味はないかな？」

「そんなことないよ・・・とっても綺麗。」

「そうか。それなら良かった。」

「相変わらず、謙ちゃんが来る時が一番綺麗な夕日になるでござい

ますよね。」

優希が、車から降りてきた。

「ここは、俺が見つけた場所だからな……。」

俺たちは、沈んでいく夕日を、ずっと眺めていた。

第五十三話 Part four (後書き)

謙太「なかなかロマンチックだろ？」

「ホント、凄い・・・」

優希「謙ちゃん、惚れ直しました!!」

優子「!？」

謙太「おいおい、頼むからやめてくれ・・・」

愛子「あはは、次回をお楽しみに!!」

第五十三話 Part five (前書き)

クライマックス・・・というか、エピソードです

第五十三話 Part / five

その夜。

俺達は、母さんが作った夕食^{ハンバーグ}を食べ、リビングで話をしていた。

「今日は楽しかったわね。」

「そうだな。たまには帰省も悪くないもんだ。」

「そうだね、海も綺麗だったしね。」

「ホントホント!!」

二人は、今日の思い出を楽しそうに話している。

「あの場所を、二人とも気に入ってくれたようで良かった。」

「気に入らないわけないでしょ？あんな綺麗なところ！」

「そうだよ！ボク、謙太くんのことを見直したよ!!」

「それは良かった。」

俺は、二人が喜んでくれたことに内心大喜びしつつ、机の上にあった煎餅をつまんだ。

「いいところね。この辺り。離れちゃうなんてもつたいないわ。」

「・・・まあな。これでいじめがなけりゃ、最高なんだがな」

「あはは・・・謙太くん、過ぎたことは忘れようよ！」

優子が俺の爆弾を踏み、愛子が、フォローする。

「そうだな。俺らしくないしな。」

俺は、気を取り直した。

「それじゃ、そろそろ寝るか？」

「そうね。」

「今日は楽しかったしね。」

二人とも、それに賛成した。

「そういえば、謙太くん。明日はいつ出るの？」

「え〜つと・・・十一時くらいかな？」

「そっか。それじゃ、おやすみなさい。」

「おやすみ、謙太。」

「ああ、お休み。」
俺は、優子たちと別れ、部屋に帰ろうとした。
その時、母さんが俺を呼び止め、
「謙太、ちよつと来て？」
リビングへと連れていった。

優子目線

あゝ、今日は楽しかったな。
私は、謙太に連れてこられた部屋で、なかなか寝付けずにいた。
それにしても、今日寝るのが謙太の家なんて・・・
「なんか、夢みたいだな・・・」
「どうしたの、優子？」
「へっ!?もしかして、声に出ってた？」
「どうしよう!!すっごく恥ずかしい!!」
私は、顔が上気していくのを感じた。
「あ、うん。夢がどうのこうのって・・・」
「忘れて!!すぐ忘れて!!」
「あ、うん・・・」
・・・私としたことが、浮かれすぎてたわ。

反省、反省。

「そっいえば、優子はこの子のことどう思う?」
「え?あの子って?」
「あの子だよ。確か、優希ちゃん?」
「ああ、あの子か・・・」
私は、あの優希ちゃんのことを考えた。
正直言って、あの子には勝てる気がしない。
顔も秀吉より全然可愛いし、身長はちっちゃかったけど、男の子っ

てそのくらいが好きみたいだし、

それに、何より・・・私より胸が大きかったし・・・

「Cカップ・・・」

「え？何？」

「え？もしかして、また口に出しちゃった!？」

ダメ！やっぱり同様してコントロール出来ない!!

「確かに、あの子は大きかったね・・・」

同じ悩みを抱えている愛子は、賛成してくれてよかったけど・・・

私にも、あれくらいあればなあ・・・

「はあ・・・」

私は、大きいため息をついた。

もしあの子が文月学園に来たら、私はどうなっちゃうのかな・・・
友達が増えるのは嬉しいけど、それ以上に、謙太が取られるのは絶対嫌だ。

取られるっていつても、私のものじゃないけど・・・

「いったい、私はどうしたらいいんだろ・・・」

謙太目線

「どうしたんだ？母さん。話って。」

俺は、リビングのソファに座った。

母さんが、こうやって改まった話をするのは、決まって重要な話だ。

「ちよつと、謙太に決めて欲しいことがあるのよ。私なりに考えた結果なんだけど、怒らないでね？」

「心配いらない。話してくれ。」

「実は、優ちゃんを文月学園に編入させようと思うの。」

「・・・は？どうして？」

俺はついキレそうになってしまった自分を抑え、話を聞いた。

「実はね、アンタには黙っててって言われてたことなんだけど、優

ちゃん、いじめられてるらしいの。」

「・・・マジ？」

「うん。アンタの時ほど酷くはないけど、無視されたり、のけ者にされてるみたい。」

「何でだ！？アイツに限って、そんなことをされるような・・・」

「あの子だからよ。」

母さんは、キツパリといった。

「どういうことだ？」

「あの子って、何でもこなすでしょう？」

「ああ。文字どおり、何でもだな」

優希は、勉強もできるし、運動もできる。料理や裁縫などもお手の物で、本当に万能だ。

「それがいけない・・・いけない訳がないけど、いけなかったのよ。」

母さんは、重い口調で続けた。

「なんでも出来ることが、三年生のリーダー格の女の子のしゃくにさわったみたいだね。それ以来、クラスの子はもちろん、同じ学園の子から、完全に無視されてるらしいの。」

「・・・そいつは誰だ。」

俺は、怒りを隠せなかった。

「落ち着きなさい。」

「この状態で落ち着けるか・・・」

「落ち着きなさいと言ってるの。」

母さんが、いつもの口調からは考えられないほどの厳しい言葉で言った。

「優ちゃんは、事を大きくしたくない、あなたに心配をかけたくなーいと思って黙ってたの。その意思を無駄にするつもり？」

「・・・」

俺は、思わず口を閉じた。

「私たちが、優ちゃん家には話をつけておいたから、あとは本人の

「意思だけよ。」

「それなら問題いらねえだろ。あんなに行きたいって言ってたんだし。」

俺の言葉に、母さんはやれやれと頭を振った。

「あれは、あんたと遊びたいっていう意思でしょう？バイトを抜ける口実を作るために、わざとそんなことを言ったに決まってるじゃない。」

「そうなのか・・・？」

「だから、あなたが説得するの。」

母さんは、まっすぐ俺を見てきた。

「・・・そうだな。」

俺はケータイを取り出し、電話帳から『黒崎優希』を探し出し、発信した。

優子目線

私は、ふと愛子を見た。

薄暗くてよく見えなかったけど、どうやらもう眠っているみたい。

私は、ちよっと前に、愛子とこんな話をしたことを思い出した。

「そういえば、愛子は、土屋君・・・だっけ？」

「いやいや、ムツツリー二君とは、そんなんじゃないよ。」

「そうなの？」

「・・・まあでも、わた、僕が好きなのは確かかな。ただ、気持ちをセーブしている、っていったらいいのかな？」

「そうなんだ・・・」

「あはは、だって、過度の愛情は、相手を苦しめるものなんだよ？その時の愛子が、少し悲しそうな表情をしたのが、とっても印象に残っている。」

でもそれ以来、愛子は、土屋君を好きとか、そんな様子を全く見せない。

「過度の愛情は、相手を苦しめる・・・か。」
そうやって自分の気持ちをセーブできるなんて、愛子は大人なんだな。

とても、私にはそんな事出来ないや。

「・・・よし！」

私は、両頬をペチペチと軽く叩いて、ベッドに入った。

・・・私は、私のいいところを謙太にアピールしてみせる。

優希ちゃんとは、良きライバルとして戦おう。

もし文月に来たときは、一緒に謙太を見守ろう。

そして何より・・・

「私は私を信じる！」

そう言つて、私は眠りに落ちた。

謙太目線

『もしもし、どちら様ですか？』

「夜遅くにすまない。謙太だ。」

『おおー！！謙ちゃん！！わざわざ電話をかけてくださったのですか？』

優希は、俺から電話が掛かってきたことが、とても嬉しいようだ。

「ああ。ちよつと用事があつてな。」

『今日久しぶりにあつたおかげで、冤罪感情に目覚めたのですか？』
「嫌な感情だな。」

『失礼、間違えました。えーと・・・戦隊感情？』

「どこの小学生だ。」

『間違えました。えーと・・・』

「もういい。」

『そうですねか・・・ごめんなさいです・・・』

「気にするな。」

『ありがとうございます。ところで、要件ってなんですか？』

「ああ、ええっと・・・」

俺は、少し躊躇って、こういった。

「お前、俺と一緒に文月に行かないか？」

『・・・へ？』

優希はよほど驚いたのか、ケータイを落としたみたいだ。ガタンガタン！！

スピーカーから盛大な落下音が聞こえ、思わず耳を塞ぐ。

『すっ、すつれいしました！』

「噛んでるぞ・・・」

『失礼・・・でも、嫌じゃないんですか？』

スピーカーから、不安そうな優希の声が聞こえた。

「嫌な理由がどこにある・・・？」

『えっと・・・』

「お前が嫌なら強制はしない。ただ・・・」

俺は、一呼吸おいてこう言った。

「俺は、お前と一緒に学校に行きたいけどな・・・」

『行きますっ！！！すぐにお父さんに頼みますっ！！！』

ガチャ

これで、俺の仕事は終わったな。

「よくやったわ。すごいハッター師ね。」

「ハッター言うな。九割本心を言ったただけだ。」

そう言っつて、俺は部屋に向かった。

翌日。

母さんは、俺たちを駅まで見送りに来た。

「いろいろなお世話になりました。」

電車の中から、優子と愛子は、母さんに挨拶をした。

父さんは、まだ寝ている。

「気を付けていきなさいね。」

母さんが、手を振る。

「はいです!!」

優希が答えた。

「じゃ、色々世話になった。ありがとう。」

俺がその言葉を言うと同時に、電車のドアが締まり、出発した。

ちなみに優希は、早速今日から俺の家に住むらしい。

なぜ俺の家かという・・・

「あんた、絶対に手を出さないわよね・・・?」

「あ、ああ。」

そんな感じで、母さんに無理やり丸め込まれた。

これから、家が騒がしくなりそうだ。

第五十三話 Part / five (後書き)

優希「と、言うわけで、レギュラー入りしました!!」
パチパチパチ!!

謙太「という訳で、次回をお楽しみに!!」

第五十四話（前書き）

番外編、優希のクラス分けです。
果たして、優希のクラスは一体・・・？

第五十四話

月曜日。

俺は優希を連れて、学園へと来ていた。

「わぁ・・・」

そして優希は、Aクラスを食い入るように見ていた。

「このクラスがいいですっ!!!」

「じゃあ、テストを頑張ることだな。」

実際言えば、こいつの実力ならAクラスは余裕だな。

「テスト?」

「ああ、言ってなかったか?」

俺は、文月学園のシステムについて、一通り説明した。

「そうなんですか」。戦争、面白そうです!!」

話を聞いた優希は、とても興奮している。

「そりゃよかった。それじゃ、職員室に行くぞ。」

「はいですっ!!!」

俺達は、職員室に向かった。

「あー、佐藤。」

俺は、鉄人に呼び止められた。

「どうしたんだ? 学校外の生徒なんて連れてきて。」

「・・・ああ、やっぱり話を通ってなかったんですね。」

俺は、優希の転校の理由と、俺との関係について、かいつまんで話した。

「そうか。お前たちも、苦労していたみたいだな。」

鉄人は、俺たちに同情の眼差しを送ってきた。

「まぁ・・・」

俺は、曖昧に返事をした。

「・・・はつきり言つて、イジメの場合、他人の同情ほど鬱陶しいものはない。」

「それじゃ、こいつの振り分け試験をお願いします。」

「ん？ああ、分かった。」

「それじゃあな。優希。」

「はいですッ！！」

優希は、笑顔で手を振った。

俺はそれに応え、Fクラスへと歩き出した。

Fクラスにて。

「謙太？お父さんの件はどうなった？」

明久が、心配そうに聞いてきた。

「あ、ああ・・・。」

俺は、あえて言葉を濁した。

「え？もしかして・・・。」

「大・・・成功だ！！」

「ほんと！？」

明久は、両手を振って喜んでいた。

「よかったのお。わしも行ければ行きたかったのじゃが・・・。」

秀吉が、申し訳なさそうに言った。

「しょうがねえよ。演劇があつたんだろ？」

「すまないのお。とにかく、謙太が引つ越さなくて何よりじゃ。」

「迷惑かけた。ありがとよ。」

「うむ！」

秀吉は、満面の笑みで頷いた。

「そっか、謙太、なんとかなったんだ。」

「私たちも、謙太くんの家に電話させていただきました。」

美波と姫路も、喜んでいるみたいだった。

「そうか。ありがとな。」

「いいえ。謙太くんがいなくなったら、寂しいですから。」

「そ、そうか・・・」

ヤバイツ、照れる・・・

優子も可愛いけど、やっぱり姫路も可愛いな・・・

「ウチだって心配したのよ？」

「わかってる。ありがとな。」

美波も、心配してくれたみたいだ。

「・・・売れ筋写真がなくなるのは困る。」

「その心配の仕方はおかしいと思うが、ありがとな。」

ムツツリも、なんだかんだで心配してくれたらしい。

「よかったな。電話した甲斐があったってものだ。」

教室に、有事が入ってきていった。

どうやら、雄二も電話をしてくれたらしい。

「ありがとよ。助かった。」

「な・・・？ま、まあ、うちの主戦力に抜けられたら困るからな。」

雄二が、若干顔を赤らめる。

「・・・雄二、私も電話した。」

いつの間にか、霧島が優子と愛子連れで来ていた。

「しょ、翔子?!何時の間に!?!」

「・・・今来た。」

「ああ、悪かったな。」

俺は、霧島に頭を下げた。

「・・・別にいい。謙太には、いろいろお世話になったから。」

「そうか、こっちこそ、世話になった。」

それにしても、霧島もでんわしてくれていたのか・・・

「オネエサマ〜!」

「美春!?!」

いきなり、美春が、勢い良く入ってきた。

「あ、佐藤健太！！私も電話してあげたんですからね！！」
美春まで・・・？

そういうことを絶対に言わないような奴まで、電話してるのか！？
「美春？謙太は男よ？それに、どこで聞いたの？」

「みんなが噂をしているのを聞きました。それに、あなたは、鉄人を倒したっていう偉業を成し遂げたから、特別です。」

美春にも、きちんと理由があつたのか。

「僕だつて、電話したよ？」

声が出た方向に居たのは、久保・・・

「君がいなくなると、この学校の偏差値が著しく減少するからね。それに・・・」

久保は、俺の近くで、小声で言った。

「吉井君が悲しむのは、見たくないからね。」

ガクガクガクガク・・・

やべえ、寒気フィーバーだ。

けど、電話してくれたことには変わりねえか。

「「俺たちだつて電話したぞ！！」「」」

Fクラスのメンバーが、大きな歓声を上げた。

「お前ら・・・」

やっぱり、電話してきてくれたんだな・・・

「「佐藤が居なくなると、試召戦争に勝てないからな！！」「」」

そんな理由か・・・

でも、結局は、みんなに助けられてるんだな。

「ありがとよ。」

そう言つて、俺はカバンを開け、ある包みを取り出した。

「これは俺からのほんの気持ちだ。受け取れ。」

「「「よっしや！！」「」」

俺が買ってきたのは、クッキーなどのお土産用のお菓子の詰め合わせ。

まあ、どこにでもある、無難なものではあるが。

「それじゃ、俺たちは屋上で食べようぜ？それに・・・話したいこともあるしな。」
Fクラスメンバーが、お菓子を奪い合ってる間に、俺は主要メンバーを連れて、屋上上がった。

「謙太、話したいこととはなんじゃ？」

お菓子を配り終わったあと、秀吉が、俺に質問した。

「ああ、実はな・・・。」

俺は、優子と愛子を見た。

二人は、『いけいけ！』と促してくる。

「俺の従姉弟が、転校してきたんだ。」

「・・・へ？」

俺と優子、愛子以外の全員が、絶句した。

「・・・それって、男の子？女の子？」

美波が、最初に口を開いた。

「・・・女だ。」

「・・・ええっ！？」「」

姫路、美波、秀吉が同時に声を上げた。

「ど、どうしよう・・・。」

「恋のライバルが・・・。」

そこか・・・

まあ、そこなら心配ないがな。

しかし、男たちはちよつと問題があったようだ。

「女の子か・・・。」

「・・・アキ？なんの妄想してるの？」

「え？ええつと・・・って痛い！！まだ何も言ってないよ！！」

「いおうとただけで十分重罪よ！！」

「汚らしい豚が、オネエサマから離れなさい！！」

「や、やめろ、翔子！！俺が何をした！？」
「・・・女つて聞いた途端、少し嬉しそうな表情をした。」
「そんなのがアガっ！！！」
明久は美波と美春に技をかけられ、雄二は、霧島に技をかけられて
いる。
そして、その二人を交互に撮影するムツツリ。
・・・なんかカオス。

P r r r r P r r r r
おっと、優希からのメールだ。

件名：やりました！！

本文：祝、Aクラスです！！あの設備で勉強ができます！

予想通りだな。

あとは、あいつらがいるから、どうにかなるだろ。

「優子、愛子。優希はAクラスだ。」

「任せて！！」

「了解！！」

二人は、優希を迎えに行った。

「霧島、従姉弟はAクラスだ。よろしくな。」

「・・・わかった。」

霧島は、了承してくれた。

「それじゃ、教室に戻ろうぜ。」

「うん。」

「そうじゃな。」

「そうするか。」

「そうね。」

「そうですね。」

「・・・(コクン)」

俺達は、Fクラスに戻った。

その途中、

「Aクラスに超美人な転校生が来たらしいぞ？」

「ホント、すごい美人だった。羨ましい・・・」

なんて会話が聞こえた。

昼休み。

「・・・残念です。」

俺達は、屋上で弁当を食べていた。

「謙ちゃんと一緒にのクラスになれなかったなんて、面白くないです。」

「

「そんなこと言うな。」

優希は俺と一緒にのクラスになれなくて、とても残念そうだった。

「Aクラスはかなりいい設備だし、優子と愛子がいるだろ？」

「そうですね・・・それもそうです!!」

優希は、明るさを取り戻し、笑った。

俺は、そんな優希の頭にポンと手を置き、ナデナデした。

「んにゃあ・・・って、何するんですか!!」

「あはは、悪い、悪い。」

「やるならやるでいってくださいです。」

「突っ込みどころ、そっち・・・？」

俺は、少し呆れながら、弁当を見た。

これは、優希が作ったものだ。

優希が、ここに入るか・・・。

すこしだけ、この学校が賑やかになるかな。

そんなことを考えながら、俺は弁当を食べた。

第五十四話（後書き）

優希「というわけで、Aクラスですっ!!」

雄二「Aクラス攻略が難しくなりそうだな。」

謙太「ま、原作に戻った感じだろ。俺と優希でつりあい取れるし。」

優希「Fクラス代表さんや、謙ちゃんには負けません!!」

雄二「ああ。望むところだ。」

謙太「それじゃ、次回をお楽しみに!!」

第五十五話（前書き）

ようやく、アニメ十話分です。

第五十五話

朝。

「謙ちゃん!!起きるですっ!!」

優希が、俺を揺すりまくって起こそうとする。

「ん・・・今何時だ?」

重いまぶたを開け、時計を見ようとする。

「もう七時ですよ!」

「へえ・・・」

なんだ、あと三十分は眠れるじゃねえか・・・

時間を聞き、再びベッドに入る俺。

「何やってるんですかあ!!学校に行かないと・・・」

そういつた優希は、俺に馬乗りになった。

「・・・何する気だ?」

優希が不敵な笑みを浮かべているのを危惧した俺は、顔を上げた。

「起きないというのなら・・・朝っぱらからイケナイコトしちゃいます!!」

「起きた、起きたからっ!!」

あ、危ねエ・・・。

貞操の危機にあるのは、むしろ俺なんじゃないか?

「む・・・や、やっと起きたですね!!ミッシェンコンプリートです!!」

あれが演技だったとでも言うように、ガッツポーズする優希。

演技にしては、やけにリアルだったな・・・

「それじゃ、朝ご飯を食べるです。」

「・・・はいはい。」

俺は、キッチンの机に座り、優希が作ったと思われるベーコンエッグとトーストを食べた。

「どうですか?」

「どうですか?」

「どうですか?」

「どうですか?」

「・・・相変わらずうまい。」
こいつの料理は、小さい頃によく食べていたが、やっぱりうまい。
「えへへ・・・ありがとです!」
優希は、少し顔を赤くし、照れ笑いを浮かべながら、自分のトーストをかじった。

「ご馳走様。」

「ご馳走様です。」

食事を済ませた俺たちは、準備を済ませ、学校に向かった。

「いい天気ですね。」

優希は、空を見上げながら行った。

「・・・もう夏だな。」

七月に入り、日差しが一段と強くなってきた。

「あ、学校が見えたです。」

「そうだな・・・おっ、美波?」

美波が、前を歩いていたので見つけ、駆け寄った。

「ああ、謙太・・・その子が例の子?」

美波が、優希を見ていった。

「ああ。」

「黒崎優希です。謙ちゃんの許嫁です!」

「・・・自称な。」

「へ、へえ・・・」

全く、要らねえ誤解を増やさないでくれ。

「ウチは、島田美波。一応帰国子女なのよ?」

「へえ、凄いです!」

美波の挨拶に目を輝かせる優希。

帰国子女。

普通は秀才のイメージだけだな・・・

「謙太？今、何か想像した？」

「・・・気のせいだ。」

俺が、学校に歩き出そうとした途端・・・

キラーン！！

ダッダッダッダッ！！

美波が、無言+ものすごいスピードで走っていった。

「なんか・・・この学校の人はすごいですね・・・」

優希は、若干啞然としていた。

優希と別れ教室に来ると・・・

「まつ平にも人権はあるのよ！！」

「イタタタタ！！」

技をかけられる明久、技をかける美波に、

「・・・も、もう少し上！」

何かを要求しているムツツリ。

「イつてええええええええええ！！！！！！」

「・・・雄二は見ちゃダメ。」

謎のチヨキをしている霧島、目潰しをされて倒れている雄二などがいた。

「・・・お前ら、なにやってるんだ？」

俺は、呆れながら尋ねた。

「ちよつと、定期計測を・・・」

「計測・・・？」

「ちよつと制裁をね・・・」

「制裁・・・？」

「・・・雄二が妄想をしてたから。」

「霧島、妄想くらいは許してやるっぜ？」

「・・・分かった。」

全く理解できなかったから、とりあえずこいつらは放っておいて・

「秀吉、お前は一体何がしたいんだ？色仕掛けか？」

「う、誤解じゃ！！これは、演劇のためなのじゃ！」

秀吉は、ナース服を着ていた。

お前は一応男なんじゃないのか・・・？

「僕を癒してくれるんだね！」

「誤解だと言っておろう。それに、これは女物のように見えるのじやが、一応これは看護師のれっきとした衣装なのじゃ。」

「・・・それは看護師じゃなくて看護師。」

ムツツリがツツコミを入れる。

「なんと・・・ワシは台本を読み間違えておったのか・・・」

秀吉は、バツが悪そうに台本を取り出し、「本当じゃ。」と、いって、落胆していた。

「どつりで下着の前があかないはずじゃ。」

「・・・ま、前？」

「上は前が開くタイプだったのじやが・・・」

「おい秀吉！お前、なんてことしてやがる！！！」

「何？わしは何も・・・」

秀吉は、はたから見ると自分の胸を揉みしだいているようにしか見えなかった。

「ブツ！！！！」

明久、ムツツリは秀吉のその姿を見て、鼻血をまき散らした。

「全く、何やってんだか・・・」

美波が、呆れながら言った。

「代表、つてなにこの状態・・・？」

優子が、霧島を探しに来た。

ああ、もうHRの時間か・・・

「ああ、気にするな。」

「秀吉も、なんなのよその格好は。」

まあ、当然の反応だろうな。

「姉上、これは演劇の衣装で……」

「全く……少しは男としての自覚を持ちなさいよね。」

「面目ない。」

秀吉が、申し訳なさそうに言った。

「何だいこの惨状は。」

俺は、突然声が出た方向を振り返ると、そこには学園長がいた。

「ガキども、ちよつとは勉強してるのかね？」

「ええ、まあ……」

明久以下Fクラスは、声を濁した。

「全く……こんなだから、アンタたちはいつまでたってもこの

学園の底辺なのさ。」

学園長は、鼻で笑った。

「それはおかしいと思います。」

優子が即座に反論した。

「確かに、クラスで言えば最下位ですが、彼らが私たちを追い詰めたのは事実です。」

「優子……」

俺は、改めて優子を見直した。

こうやって理にかなった説明を、淀みなくできるのは、素晴らしい才能だ。

「ふうん？Aクラスが肩を持つのかい……まあいい。そのことを証明したいんなら、結果を見せるんだね。」

そう言い残して、学園長は、教室を後にした。

第五十五話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに!!」

第五十六話（前書き）

ラブレター & 模試編です

第五十六話

「あのクソババア・・・」

学園長がいなくなったあと、明久が悪態をついた。

「Fクラスのこと、あんなに悪く言う必要もないのに・・・」

「確かに、あれは教育者としてどうなのじゃ？」

秀吉と姫路も賛同する。

「先生たちに文句言わない？」

美波が、職員室の方に行こうとした。

「まあ待て、原因は、これじゃないか？」

俺がそれを止め、あるプリントを取り出した。

「それは？」

「これは、Fクラスのこの前のテストの結果と、成績の推移だ。」

このプリントは、次の試召戦争のため、俺が学園長に頼んで手に入れたプリントだ。

「これを見てくれ。」

俺がプリントを渡すと、明久たちが集まった。

「全体的に、結構落ちてるな・・・」

「ホントですね。振り分け試験よりさらに低い。」

「これじゃ、学園長が怒るのも無理ないわね。」

「僕は、名前さえ書いてればいい線だったんだけど・・・」

「・・・無念。」

皆が、口々に言った。

「そんなにひどかったの・・・？」

優子たちが、成績を見て、絶句した。

「これって・・・冗談でしょ？」

「いや、いたってマジだ。」

俺と姫路はともかく、そのほかのメンバーの点数は散々だった。

「・・・ひと桁？」

秀吉と、美波の数学、ムツツリの保体以外は五十すら行っていない。霧島は、どうしたらそんな点数が取れるかがわからないといった顔をしている。

「……いや、調子が悪くて」

「悪すぎだな……」

しかし、Fクラスメンバーはあまり問題視していないらしい。

「ねえアンタたち……?」

優子が、怒りのオーラをまとった。

「こんな雑魚クラスに、私たちが苦戦したなんて思われるのは屈辱よ!」

「ゆ、優子……」

久々に、プライドの高さを見せつけた優子。

「良い? 次の模試では絶対にいい点取って、私たちと戦うに相応な点数を取れることを証明してよね!」

「……え、ええ……?」

「返事は!」

「……はいつ!」

そう言い残すと、優子は霧島を連れてAクラスへと帰っていった。

「……」

その場には、気まずい雰囲気だけが残った。

昼休み。

今日は、(優子の命令で) 皆が久々に真面目に勉強したからか、知恵熱(?) を出す生徒が続出し、かえって授業にならなかった。

「はあ……」

明久も、そのうちの一人だった。

「明久よ、今日はよく勉強しておったのお。」

「ホント、ほかの生徒も、みんな頑張ってたし。」
いつものFクラスメンバーで弁当を食べながら、今日の授業について話をしていた。

「勉強は頭に入ってたんだけど、なんだか熱っぽいよ……」
明久が、おでこを触りながら言った。

「知恵熱じゃないか？」

「この年で知恵熱って、バカだろ……」

俺は、思ったことを口にした。

「そんな直球にバカってひどくない？」

明久が、不服そうな顔で見ってくる。

「しょうがないだろ？本当のバカなんだから。」

「いやあ！！2対1でイジメないで！！」

雄二も加勢し、二人で明久に、軽く暴言の嵐を浴びせる。

「そういえば、姫路さんは？」

明久が、話をそらすように辺りを見回しながら言った。

「さあな？」

俺は首を振ったが、二人ばかりがギクツとした。

「知らない、俺は何も知らないっ！！」

「雄二……？」

「う、ウチも何にも知らないわ？」

「美波……？」

あからさますぎるだろ……

美波は顔を赤くしながら、雄二は顔を青くしながら言った。

「何かあったんだな……？」

「何も無い！！」

「そんな、別に隠すようなことなんてないだろ？」

美波は女同士だし、雄二は所持持ちだし。

「ほつといてよ……」

「ほつといてくれ……」

なんかテンション下がった二人。

まあいいか。

第五十六話（後書き）

謙太「中途半端ですみません・・・」

優希「てゆーか、私の出番はないのですか？」

謙太「ああ、無いね。」

優希「酷いです!!」

謙太「次回をお楽しみに」

第五十七話（前書き）

ラブレター & 模試編、まだまだ続きます。

第五十七話

夕方。

「謙ちゃん？優子ちゃんから聞いたんですけど、Fクラスの成績って、そんなに酷かったんですか？」

家に帰ったあと、優希が夕食を作りながら言った。

「ああ。確かに酷かったな。」

俺は、優希の横に行き、鍋を覗く。

・・・ビーフシチュー。

「そうなんですか。一度、見てみたいです。」

優希は、ビーフシチューの仕上げに取り掛かった。

「残念だが、学校に置いてきた。」

「そうですね・・・。じゃあ、明日見るです。」

優希は、少し残念そうにいい、俺に小皿に入れたビーフシチューを差し出した。

「これ味見用です。どうですか？」

俺は、優希が作ったビーフシチューを味見した。

「・・・美味しい。」

やっぱり万能だな。

「そうですね！よかったです。」

優希は、満足そうな顔で、料理作りに戻った。

そして夕食時。

「「いただきます！」」

俺達は、向かい合って座り、夕食を食べ始めた。

「やっぱり美味しい。」

「えへへ・・・ありがとです！」

優希は、満足そうに自分のビーフシチューをほおばる。

「Aクラスには慣れたか？」

「はい。とてもいい設備なので、勉強がはかどります!!」

優希は、俺に向かってVサインをした。

「そりゃよかった。」

ひとまず、うまくやっていけてるみたいだ。

「謙ちゃんがないのが、少し寂しいですけど・・・」

「それはしょうがないだろ。俺が望んだ結果だ。」

優希は、少し不満そうに

「それにしても、霧島さんってすごいでございますよね。どつちっ

たらあんなに勉強ができるのでございますか・・・」

突然、優希は霧島の話始めた。

霧島に何か思うところがあったのだろう。

「・・・努力と才能だろうな。」

「そうですね・・・。む、私も負けませんっ!!」

優希は、霧島に負けまいと意気込んでいる。

まあ、優希なら頑張れば霧島と並ぶくらいはできるだろう。

「・・・そうか。頑張れよ。」

「はいですッ！」

・・・こうして、今日の夕食はほのぼのと終わった。

「あれ？おっかしいな・・・」
朝。

俺はいつも通り学校に来て、机（みかん箱）に座った。

優希に例のプリントを見せようと、みかん箱を開けたが、見つからない。

「どこにいった・・・？」

俺は様々なみかん箱の中をくまなく探したが、どれもハズレだった。マズいな・・・

あれは（一応）個人情報だから、もし流出したらマズイ。

「どうした？そんなに焦って？」

「・・・根本？」

俺に話しかけたのは、Bクラス代表、根本恭二だった。

「一体何の用だ？」

俺は、軽く睨みながら言った。

・・・コイツは卑怯、卑劣で有名。

全く信用ならないからな。

「もしかして、コイツを探してるのか？」

「なっ、それは・・・」

根本がもっているのは、例のFクラスのテスト結果。

「おいおい、こんなのを代表でもないお前がもってていいのか？」

チツ、やつぱり持って帰るべきだったか・・・。

さすがに学校内に盗賊がいるなど、考えもしなかった。

根本は、不敵な笑いを浮かべた。

「・・・返せ。」

「おいおい、怖いなあ。そんなに睨まれると・・・バラ撒きたくな

るじゃないか？」

根本はニヤけながら、そう言った。

「まあいい。俺の信頼など元からあってないような物だからな。そ

れは既にコピー済みか・・・？」

俺は、余裕の表情で根本を見た。

「いや？手に入れたのはついさっきだからな。まあ、しかし・・・

こいつをばら撒いたところで、意味ないようだな。」

根本は動じない。

根本は、考える素振りをして、こう言った。

「こいつをばら撒かなくとも、お前を貶める方法はいくらでもある

からなあ・・・？」

「・・・何？」

「例えば・・・これとかな？」

そう言っ取り出したのは、優子と優希の
な写真だった。

「なっ・・・それをどうする気だ？」

「こいつをばら撒くだけで、お前の恋人と従姉弟は学校にこなくなるかもな？」

確かに正論だ。

優希は、イジメを極度に恐れているし、優子は常に完璧であろうと努力している故に、もしこんな写真をばらまかれ、学園中の晒し者となったら、絶対に学校にこないだろう。

「・・・何が目的だ？」

俺は、根本を見た。

「そうだなあ・・・ちょっと協力して欲しいことがあるんだ？」

「・・・言ってみる。」

こうして、渋々根本の作戦に協力する羽目になってしまった。

第五十七話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第五十八話（前書き）

ラブレター & 模試編。

ってかあんましラブレター関係ないな・・・

第五十八話

廊下にて。

俺は、根本から俺がやることの指示を受けていた。

「やって欲しいことは簡単だ。お前が召喚獣になって、コレであるものを撮ってもらう。」

そう言っただけに差し出したのは、デジカメ。

「……あるもの？」

「この学校の金庫のパスワードだ。」

パスワードを撮る……？

「……どうということだ？」

「どういうって、そのままさ。今日は鉄人が金庫の当番だから、必ず開けに来る。その時に、パスワードを入れるはずだから、そのパスワードを撮ってもらう。」

根本は、不敵に笑った。

「……それを何に使う？」

「フン。それをお前に答える義理はない。」

……チツ。

全く目的がつかめない。

「……分かった。だが一つ聞かせろ。」

「なんだ？」

「……そんなマネをしてまで、なぜ俺を使う？」

「理由は簡単だ。召喚獣なら、バレる心配もないだろ？」

「……」

俺は、無言でその場から離れようとした。

「……いいか？俺たちは協力関係じゃない、服従関係だ。妙な真似するなよ？」

「……」

俺は、無視してその場を離れた。

昼休み。

P r r r r P r r r r

「もしもし、謙ちゃん。一緒におべんと食べるです！」
優希が電話してきた。

FFF団にバレないように、電話で連絡を取っている。

「悪い。今日は都合が悪いんだ。」

「都合・・・？」

「ちよつと先生たちに呼ばれててな・・・」

俺は、適当にごまかした。

「そうですか。残念ですけど、しょうがないですね。」

優希が、残念そうに言う。

「すまない。また明日な。」

「はいです！」

そう言つて、俺は電話を切った。

次に、優子に電話をかける。

「優子？ちよつとFクラスまで来てくれないか？」

「いいけど、どうして？」

優子は、いきなりの呼び出しに戸惑っている。

「いいから早く。」

「わ、分かった。すぐ行く。」

俺が、少し切れると、優子はそう言つて電話を切った。

五分後。

「ハア、ハア・・・」

「悪いな。」

優子は、息を切らして走ってきた。

「それじゃ、フィールドを展開してくれ。」

「え？なんで・・・」

「早く。」

「分かった。アウェイクン！」

召喚フィールドが展開される。

「そんじゃ、シンクロ、そしてチェンジ。」

俺は、召喚獣と同調し、意識を入れ替える。

「よし、フィールドを消してくれ。」

「分かった。」

優子が召喚フィールドを切ると、俺の实体は消えた。

「あれ！？またなの！？」

優子は、相変わらずテンパっている。

・・・今のうちに行くか。

俺は、優子に悪いと思いつつ、金庫に走った。

なんとか誰にも見られずに、金庫前についた。

「さて、鉄人は・・・」

どうやら、まだ来ていないようだ。

根本が言うには、昼休みの途中らしいから、少し時間があるか。

隠れとくか。

俺は、階段の裏に隠れ、鉄人が来るのを待った。

十分後。

鉄人がきた。

俺は、階段の裏から出て、階段の手すりに乗った。

ピッ

俺がボタンを押すと、RECボタンがディスプレイに表示された。鉄人が、鍵を開け、ボタンを押す。

俺は、それを逃さないように撮った。

バシユウウウウ。

鉄人が扉を開いたのを見て、俺は停止ボタンを押した。

その後、俺はすぐに根本に渡しに行った。

「おお、ご苦労だったな。ほらよ。」

根本は、俺にあの写真を投げつけた。

「・・・」

「まだコピーはしていない。よかったな。」

俺は無視し、その場を後にした。

第五十八話（後書き）

優希「根本さんって、ひどいんですね。」

謙太「ああ。この学園のごみだからな。というわけで、次回をお楽しみに。」

第五十九話（前書き）

ラブレター & 模試編。

こっから先はほぼ原作かな？

第五十九話

明くる日。

俺は、不機嫌だった。

風のうわさ（明久）によつて、根本の答案用紙入手が成功したということを知り、俺の怒りは募る一方だった。

「あの野郎……。」

俺は、不機嫌面で着席し、机に突つ伏した。

「弱み握られてなかつたら、ぜつてえ復讐してやるんだけど……。」

「復讐？朝から何を口走つておるのじゃ？」

秀吉が、俺の言葉を聞きつけ、俺の隣に座った。

「ああ、大したことじゃねえ。」

「……復讐などという言葉を使つておる時点で、十分異常だと思ふがお。」

「そうか？」

俺は、ごまかそうとしたが、そうはいかなかった。

「何があつたんじゃ？」

しつこく聞いてくる秀吉に根負けし、俺は昨日の件を話し始めた。

「なるほど、あれはそういうことだったのじゃな……。」

俺の説明が終わると、秀吉が腕を組み、意味深な言葉を口にした。

「あれ？あれつてなんだ？」

俺は、その言葉に反応し、秀吉に尋ねた。

「実はのお、ワシらもあの根本に協力してしもうたのじゃ。」

「ああ、それは明久から聞いた。」

「そうじゃったか、なら話が早い。その時、こういつておつたのじ

「や。」

秀吉は、得意の声真似で、あの気味悪い根本の声を演じ、こういつた。

『それにしても、Fクラスはお人好しとのバカばかりだな？特にバカは、成績優秀者まで毒するほどだからな。』
成績優秀者……

「姫路のみなら、『姫路まで』というのが普通ではないかと思って、お主も協力したのかと一瞬思ったのじゃが、まさかお主が、あの根本なんか協力するはずないのお。」

「……悪かつたな。」

「い、いや、そういつつもりではないのじゃ。」

我ながら、なんである奴に協力してしまったのか、悔やんでも悔やみきれない。

「だとすると、ますます許せないな……。」

「なぜじゃ？」

「お前らのことをバカにしたんだろ？これを許していたら、次に何されるか、わかったもんじゃない。」

「たしかにのお……。」

けど、優子と優希の写真の件も、まだ片付いたわけじゃない。

もしまだ持っていたら……

「その話、乗ったぜ？」

突然背後から声が聞こえ、振り返るとそこには雄二、明久がいた。

「あれは許せないよ。」

明久が、少し不機嫌そうに言う。

「確かに、あれは許せねえな。何が一連托生だ。」

雄二も、若干キレてる。

「だから、僕たちも復讐しようと思うんだ。」

「それも、とびつきりのな。」

二人は、ニヤッと笑った。

「……詳しく聞かせろ。」

俺は、二人の作戦の概要を聞くために、身を乗り出した。

第五十九話（後書き）

謙太「今日は時間がないのでここまでです。次回をお楽しみに。」

第六十話（前書き）

ラブレター & 模試編、ラストです。

第六十話

模試前日。

俺たちは金庫の前にいた。

「手筈通りに・・・だぞ？」

「ああ。」

「わかってるよ。」

俺たちは頷き合い、

「アウェイクンー!!」

「サモンー!!」

召喚獣を呼び出した。

雄二が考えた作戦はこうだ。

金庫の前に行く。

金庫を召喚獣でぶち壊す。

答案用紙を盗み出す。

「・・・シンプルだな。」

「このくらいの方が、明久にも理解できるからな。」

「うん、はやくやろうー!!」

「まて、根本への報復はどうする？」

「姫路さんのクッキーをもらってくるよー!!」

「おし、それじゃ、作戦開始だっ!!」

「おおー!!」

・・・そして現在に至る。

「さて、こつからが面倒だぞ？」

「任せる。シンクロ！」

俺が、召喚獣と同調し、思いっきりバスターソードを振り上げた。

「最強の衝撃 ファイナルインパルス つー！」

俺がそういうと同時に、バスターソードは金庫に突き刺さった。

「明久！！」

「うん！！」

明久は、刺さったバスターソードを足場に、さらに高く飛ぶ。

「はあああああ！！」

バキン！！

金庫にヒビが入る。

「止めだつ！！」

俺は槍、明久は木刀を構え、同時に突き刺した。

ドオン！！

金庫に、大きな穴があく。

「よし、さっさと運び出すぞ？」

俺達は、手分けをしてダンボールを運び出した。

「これ、どうする？」

俺たちは教室で、手に入れた答案用紙をどうするかについて、思案を巡らせていた。

「捨てるか？」

「こんだけ無くなれば、テストは出来なくなるだろう。」

「そんなことするハズがないだろ？」

雄二が不敵に笑った。

「じゃあ何するの？」

「決まってるだろ？ばら撒くのさ！！」

「はあ!？」

バカだろ・・・

「そんなことしたら、停学じゃすまねえぞ!？」

俺が止めようとする。

しかし、雄二は聞かなかった。

「・・・男には、やらねばならないときがある。そつだろ?」

雄二は、明久を見た。

「うん。退学は怖いけど、あいつは許せない。」

「けど、あんな奴のために今後の人生を棒に振るのか？」

俺は、なんとか止めようとした。

「こうしないと、復讐にならないだろ?」

二人は聞く耳を持たない。

「ったく、しょうがねえな・・・」

渋々、俺も手伝うことにした。

優子目線。

放課後。

私はAクラスのみんなどかえろうとしていた。

「あれ??なんかあつちの方が騒がしいよ?」

愛子が言ったのを聞いて、そつちを向くと、そこには・・・

「Fクラスの群れ・・・」

「あはは・・・」

見慣れたFクラスの人たちが、ぎゃあぎゃああと騒いでいた。

また、異端審問会とかいう組織が何かやってるのかしら・・・

ヒラッ

「ん?なんですか、これ?」

優希が、その群れから飛んできた紙を拾った。

「模試の答案用紙・・・ですか？」

それは、明日行われる予定の模試の答案用紙だった。屋上から、たくさん落ちてきている。

これの奪い合いをしたのかな・・・？

「これさえあれば満点だあっ!!！」

「満点をとれば、優子さんとおっ・・・」

ハア・・・

どうやらそうみたい。

「一応いっておくけど、公開された問題は、試験には出ないわよ？」

「・・・えっ・・・？」

私の言葉を聞いたFクラスの人たちは、絶句した。

けど、こんなことするので・・・もしかして!？」

「・・・行こう。優子。」

「ちょ、ちよつと待って。ちよつと用事ができたから、代表たちは先に帰ってて。」

「・・・？」

「霧島さん、行きましょう？」

「・・・分かった。」

私は、代表たちと別れて、屋上に向かった。

謙太目線。

俺たちは、屋上からプリントをばらまいた。

「おし、全部くばりお・・・」

「こオオオオオオオオオオオオオオオオ!!！」

鉄人がやって来た。

「吉井、坂本、佐藤、何をやっておるか!!！」

「・・・すみませんでした!!！」

「おおぅ!?」

俺達は、鉄人が何か言おうとする前に、頭を下げた。

「なんのつもりだ!!」

俺たちの予想外の行動に、驚く鉄人。

「イタズラのつもりでした!」

「チヨ―シ乗ってました!!」

「反省してます!!」

「嘘つけエ!!」

即座に反論・・・

ちったあ信用しろや・・・

「何を企んでいた・・・」

「「「本当に、申し訳ありませんでした!!」」」

鉄人はまたも絶句した。

それは、俺たちが土下座をしたからだ。

「・・・言えない理由でもあるのか?」

「これはいたずらですっ!!」

明久が、頑なにそう言い続ける。

「お前らが、素直に頭を下げたことなんてないだろう・・・」

「「「・・・」」」

鉄人は、ふと考え、そして・・・

「いいだろう。三人とも、朝まで鬼の補習だっ!!」

「「なんだとお!?!」」

「くっそ、戦略的撤退・・・」

「させるかあ!!」

鉄人が、逃げようとした俺の片腕に、縄をかける。

「しまった!!」

「さて、いつも以上にみつちりしごいてやるから、カ・ク・ゴ・シ・

口・ヨ?」

「「「ギヤアア!!」」」

俺達は、鉄人の恐ろしい顔を見て、絶叫した。

「叫ぶな！！イタズラの罰だ！！」

「……イタズラ……」

俺達は、顔を見合わせた。

鉄人は、何だかんだでオレらの意思を汲んでくれるらしい。

「……ういっす！！」

俺達は、拳を合わせた。

根本目線。

チツ、アイツら……

次あったときは、必ず絶望のどん底にたたき落としてやる。

俺は、そう思いながら靴箱を開けた。

「ん？」

そこには、見覚えのないバスケットがあった。

女子からのプレゼントか！？

「俺もスミにおけないなあ」

そう言いながら、入っていたクッキーを食べた。

その瞬間、俺の意識は消え去った。

第六十話（後書き）

謙太「一件落着し！」

優希「おめでとです。でも……」

謙太「どうした？」

優希「出番がないです……」

謙太「シラネ」

優希「酷いっし！」

謙太「次回をお楽しみに！」

第六十一話 その？（前書き）

ラブレター & 模試編の延長オリ話です。

第六十一話 その？

「今日はここまで。」

「「「「「ありがとうございます。……」」」」
ようやく鬼の補習から開放されたのは、朝4時。

「普通、ホントに朝までするか……？」

「た、確かに……」

「とりあえず、寝れるだけ寝ようぜ……」

俺達は、その足で職員の仮眠室に向かい、暫しの休息をとろうとした。

P r r r r P r r r r

突然、マナーモードを切った俺のケータイが鳴った。

「こんな時間に……？」

俺がケータイを見ると、新着メールが……

「25件……」

なんて量だ……

送り主は、優子が5件、霧島、愛子、姫路、美波が1件、秀吉が2件、そして優希が……14件。

「送りすぎだろ……」

俺は、眠い目をこすりながらメールを確認する。

横では、明久たちが気持ちよさそうに寝息を立てている。

優子と優希のメールは、「こんな時間まで、学校で何をしてるの？」というメール。

霧島、愛子、秀吉の一件目のメールは、「優子が心配している」という内容のメール。

姫路、美波のメールは、「優希が心配している。」という内容。そして秀吉のもう一通は……

「明久に手を出したら許さんぞ？」

「……」

ちなみにこのメールが送られたのは3時。
・・・テンションがおかしくなってるのか？

「フワァ〜・・・」

俺は、仮眠室のベッドで目を覚ました。

すべてのメールを確認し、眠りについたのは、午前5時。

そして起床は、午前8時。

睡眠時間、3時間か・・・

・・・今日は睡眠学習だな。

重いまぶたをこじ開けながら、俺は、部屋を見渡した。

雄二や明久の姿がない。

・・・どうやら、もうこの部屋には、俺しかいないようだ。

「さてと、教室に行くか・・・」

俺は、部屋に置いておいたカバンを取り、教室へと向かった。

Fクラスにて。

「そんなことがあつたんですか〜・・・」

「大変だったのね。」

俺達は、昨日の壮絶な体験を語っていた。

「まあね。けど、根本君に仕返ししないと、気が済まかったし。」

「だな。」

明久たちは、笑いながら言った。

「そついえば昨日、根本が玄関でうずくまっておつたのじゃが、何があつたのじゃ？」

「「「え・・・い、いや、なにも?」」」
・・・姫路のクッキー、大当り。

「謙ちゃん!!」

「つと・・・優希!？」

あの話も終わり、他愛もない話をしていたとき、突然優希がFクラスにきた。

「誰だあの美少女?!」

「Aクラスの黒崎じゃないか!？」

「ああ、例の謎の美少女転校生か!？」

「佐藤謙太め・・・許すまじ!!」

Fクラス生徒が殺気立つ。

「お前、Fクラスには来るなっっていつたる?」

「だって・・・寂しかったです・・・」

優希の涙混じりの上目遣いに、Fクラス全員が興奮する。

「「「ウオオオ!!」」」

「そんな美少女に抱きつかれるなんて、うらやま・・・羨ましいぞ!!」

「言い直せてない!？」

明久が、最近身に付けたツッコミススキルを使用する。

「く、黒崎さん!!すぐにその化け物から助け出します!!」

「誰が化け物だ・・・優希、逃げるぞ。」

俺は、優希の手を引いた。

「ええっ?け、謙ちゃん、ちょっと・・・」

「さ、佐藤め・・・黒崎さんと手をつなぐとは、許せねえ!!野郎ども、異端審問会の鉄の掟は?」

「「「異端者には死を!!」」」

やば、かえって火に油を注いじまった。

「よおし、野郎ども、俺に続け!!」
「ウオオオオオオ!!」
なんか、面倒なことになったな・・・
俺は、優希を連れて、Aクラスまで走った。

「はあ、はあ・・・」
なんとかAクラスにたどり着いたか・・・。

「助かった・・・」
アイツらFFF団は、なぜかAクラスに入れないという特性を持っている。
だから、ここまでくればもう安全だ。

「謙太に優希、どうしたの？」
優子が、俺たちのところに来た。

「ああ、異端審問会 あのバカども に追われてな・・・」
「へえ・・・ご苦労様。」

俺は、優子が淹れてくれたお茶で、一息ついた。
「そういえば、昨日は何してたの？」

優子のお茶を飲んでみると、愛子が、話に入ってきた。

「ああ、そういえば、まだ話してなかったな。」
俺は、昨日のことについて、かいつまんで話した。

「謙太、大変だったのね・・・」
「根本って人、倒れたんですか」。まあ、しょうがないですね。
「そうそう、とーぜんの報いだよ。」

優子と愛子、そして優希は、誰も根本を擁護しなかった。
当然だろうな。

「そういえば、もうすぐ試召戦争が始まるな。」

話が一段落したところで、俺は別の話題を切り出した。

「3ヶ月・・・あつという間だったわね。」

「そうだね。この3ヶ月、いろいろあつたねえ・・・」

優子と愛子が、懐かしそうに振り返る。

「さて、お前たちがAクラスにいれるのも、あと少しだな。」

俺は、二人を茶化した。

「むうっ、僕たちが勝つかもわからないじゃん！」

「そうよ。私たちが負けるはずないじゃない。新戦力も入ったしね。」

「

優子は、そう言って優希を見た。

「私、ガンバルです!!!」

優希が、ガッツポーズで気合を入れている。

はじめての試召戦争だもんな・・・。

「そうか。けどお前、召喚獣を召喚したことあるのか？」

「え？それは・・・」

俺の突然の質問に、優希は、オロオロしている。

・・・したこと無いな。

「・・・だろつとおもった。」

俺は、そう言ってシステムデスクを動かし始めた。

「何を始める気？」

優子が、不思議そうに聞いてきた。

「何って、それはもちろん・・・」

俺は、少し間を空け、こう言った。

「優希の特訓だ。」

第六十一話 その？（後書き）

謙太「という訳で、いよいよ次回、優希の召喚獣が姿を現します。」

優希「いえ〜い!！」

謙太「さてどんなデザインにしようかと、作者は悩んでおります。」

優希「決めてないんですか・・・」

謙太「という訳で、アイデアをよろしくお願いします!！」

優希「それでは、次回をお楽しみに!！」

第六十一話 その？（前書き）

オリ話その2です。

優希の召喚獣は、いったいどんな姿なのでしょう……

第六十一話 その？

「優希の特訓？」

優子は、「謙太が言ったことの意味が分からない」と言いたそうな顔をしている。

「ああ。召喚獣をまともに使えなかったら、試召戦争で役に立たないだろう？」

「うん。けど、どうして・・・？」

戦う相手の戦力を強化しようとするなどということは、普通に考えればおかしいだろう。

「全力でぶつかりてえからな。お互い、全員の力を出し切って、その上で勝ちてえんだ。」

「そう・・・謙太らしいわね。」

優子は、ふふつと笑って、俺を見た。

「・・・そこがカツコイイのよね。」

「何か言ったか？」

「いや、なにも・・・？」

何か聞こえた気がしたが・・・気のせいかな。

「それじゃ、召喚フィールドを頼む。」

「うん。アウェイクン！」

優子が、召喚フィールドを出す。

「ほえ・・・これが召喚フィールドでございませうか。」

優希は、初めて見た召喚フィールドに、目を奪われている。

「おし。優希。」

「・・・」

「優希？」

「・・・は、はい！なんですか？」

優希は、召喚フィールドを見て、すっかり舞い上がっている。
・・・昔の俺もこうだったか？

「俺と同じようにしてくれ。」

俺はそう言つて、手を前に突き出した。

「サモン！」

その言葉と同時に、俺の召喚獣が出てくる。

「ほわあ〜！！可愛いでございますね！！」

「まあな。さ、早くお前も・・・」

「可愛いです〜！！！」

優希は、俺の召喚獣に抱きつこうとした。
バチッ！

「イタ！あれっ!？」

優希は、召喚獣の周りの電磁波に阻まれ、触れなかった。

「・・・どういふことですか？」

「ああ、これは敵前逃亡防止システムだ。」

このシステムは、相手を倒さないと先には進めないようにする、いわばバリケードのようなものだ。

「へえ、そうなんですか。難しいですが、勉強になりますね。」

優希は、感心したように言った。

「最初は難しいが、慣れれば簡単だ。」

「頑張ります！」

「ほら、優希も早く呼び出せ。」

「わかりました。さ・・・」

「サモンだ。」

「えっと・・・しゃもん！」

「噛んでるぞ・・・」

優希は、緊張しているのか、普段はあまりやらないミスをしている。

「しゅみましえん・・・」

「大丈夫だから、ほら。」

「はい。サモン！」

シユウン

優希がそう唱えると、召喚獣が現れた。

「わ〜！！やっぱり可愛いです！！」

「へえ・・・。いいじゃないか。」

「綺麗ね・・・」

俺達は、口々に感想を漏らした。

「天使、ですか・・・。」

その姿は、まさしく天使だった。

手には弓、頭にはリング、そして背には翼が生えていた。

「これは・・・天使アフロディテがデザインなのか？」

「アフロディテ・・・ですか？」

「ああ。美の女神として有名だが、戦の神としても有名らしい。」

「ちなみに、春の女神としても有名だよ？」

愛子が、話に入ってきた。

「春・・・？」

「そう。生殖こう・・・」

「ストップ！！」

愛子が放送禁止用語を使おうとし、俺たちがそれを止めた。

「たく・・・それにはあえて触れなかつたんだよ！！」

「ゴメンゴメン。」

愛子は笑いながら謝る。

「けど、天使アフロディテには翼はないはずだよ？」

「そういえばそうだな・・・」

俺は、愛子の指摘を受け、召喚獣、そして優希を見た。

優希は、「どうしたんですか？早くしましょーよ！」「とブーブー言っている。

「そんな細かいことはほっといていいんじゃない？」

優子もそう言ったので、俺は考えることをやめた。

「そうだな。訓練を再開しよう。」

そう言って、俺はシンクロし、自分の召喚獣と一体化した。

第六十一話 その？（後書き）

謙太「アフロディテ、謎ですなあ・・・」

優希「なんなんですか？」

謙太「さあな。」

優希「まあいいです。次回をお楽しみに」

第六十一話 その？（前書き）

オリ話ラストです。

第六十一話 その？

「それじゃあ、早速動かしてみよう。」

召喚獣レックスが始まった。

「どうやるんですか？」

「えっと、心の中で念じるんだ。「前へ進め。」とか

「わかりました。やってみます。」

優希は、目を閉じた。

てくてくてく・・・

「う、動いてますか？」

「・・・目を開けるよ。」

「えへへ・・・」

優希は、バツが悪そうに頭をかきながら、目を開けた。

「おおー！！」

優希は、自分の召喚獣が動いているのを見て、興奮している。

「好きに動かしてみな。」

俺がそう言つと、優希は、召喚獣を適当に動かした。

「すごいですね〜、ってイタツ！」

調子に乗りすぎて、優希の召喚獣が、壁にぶつかった。

「痛くねえだろ・・・」

「リアクションです！」

「・・・あつそ。」

「もっと関心をもってください！」

優希は、ぶうぶう言っている。

「でも、点数減りましたね。」

優希は、召喚獣の上に表示された点数を見ながら言った。

ちなみに優希の点数は・・・

だった。

一通りの操作を教え、実戦を行うことにした。

優希の対戦相手は、俺・・・ではなく、

「よろしくね。優希さん。」

「よろしくです！」

実戦経験に長け、攻撃力が低い明久だ。

「それじゃ、サモン！」

明久が召喚獣を呼び出し、実戦訓練が始まった。

シューウウウ

優希が、手のひらに光の矢を形成する。

「ハアッ！！！」

明久が木刀を振り下ろす。

「甘いです！」

それを優希がよけ、宙に舞う。

「空！？」

明久が、パニックになっている。

そつえばこいつ、空中戦の経験なかったな。

ヒュン！！

優希が、連続で矢を放つ。

明久は、それらを全てよけ、木刀を投げた。

「キヤッ！」

その木刀が、優希の翼に当たり、優希は下に落ちた。

「そこだ!!」

そこに、明久が追撃をかける。

明久の突きが直撃した優希は、壁に打ち付けられた。

「止め!!」

「そこまでだ。」

明久の渾身の唐竹割りを、俺が受け止めた。

「明久、これは訓練だ。」

「あつ・・・ごめん。」

俺にたしなめられて、明久は、召喚獣を消した。

「明久、今日初めて召喚獣を出したやつに本気ってどういう事だよ・・・」

「ごめん・・・」

訓練を終えて、俺は明久を説教していた。

「優希の点数が高かったから良かったものの、もし戦死したらどうするつもりだったんだ。」

「ごめんなさい・・・」

明久は、シヨボンとしている。

「いいんですよ。明久さん、ありがとうございました。」

優希は、俺をたしなめ、明久におじぎをした。

「あ、本当にごめんね?」

明久は、優希に何度も謝った。

「けどこれで、もう大丈夫だね。」

「そうだな。」

しかし、ひとまず試召戦争を戦えるほどには成長したので、特訓を終了した。

第六十一話 その？（後書き）

謙太「という訳で、次回は試召戦争編です！」

優希「ちなみに、試召戦争編、そしてOVAが終わったら、しばらくお休みします。」

謙太「今から原作に戻るのも、ちょっと厳しいので・・・」

優希「それでは、次回をお楽しみに！」

第六十二話（前書き）

試召戦争編です。

第六十二話

優希の特訓を終え、次の週。

時刻は三時四十七分。

「それじゃ、ジャンケンで負けたやつが、Dクラスに宣戦布告に行くってことで、いいね？」

明久が、俺と雄二に言った。

「異論なしだ。」

俺は、そう答えた。

「いや、ただのジャンケンじゃつまらない。心理戦ありでいこう。」
雄二がそう言うと、明久がフツと笑った。

「それじゃ、僕はグーを出す！」

「そうか、じゃあ俺はもし明久がグーを出さなかったら、ぶち殺す。」

「それじゃあ俺は、もし明久がグーを出さなかったら、お前の召喚獣を叩きのめす。」

「え？」

俺達は、明久に死刑勧告をした。

「ジャンケンポン！！！」

俺達は、パーを出した。

「え、ああ、えつと・・・」

明久は、グーを出した。

「じゃ、逝ってこい。」

「絶対嫌だ！！ってゆうか、行ってこいの発音がおかしいよ！？」

「大丈夫だ明久。」

俺は、雄二にキレている明久の肩に手を置いた。

「Dクラスは美少年好きが多いから、ひどい目には合わないだろう。」

「そっか、それなら大丈夫だね。」

俺の言葉に、明久は頷いた。

「けど大丈夫か？明久は不細工だろ？」

「ああ、そういえばそうだな。すまない、明久。」

雄二の言葉を聞いて、俺は明久に謝った。

明久には関係ない話をするなんて、悪いことをした。

「失敬な！！365度、どこからどう見ても美少年じゃないか！！」

・・・数字がおかしい気がするが、一年と勘違いしてるのか？

「5度多いぞ。」

「・・・実質5度じゃないか？」

「二人とも嫌いだ！！」

明久は、そう言いながら教室を出ていった。

「それじゃ、頼んだぞ。」

「逝ってらっしゃい」

俺達は、それを笑顔で見送った。

その10分後。

「もうお嫁にいけない・・・」

明久が、ボロボロになって帰ってきた。

「・・・お嫁にはいかないだろ。」

「そうだけど・・・」

とにかく、これで開戦だ。

翌日、2時35分。

「邪魔になるものは、全て片付けておけ。」

雄二の号令で、俺達は、教室の整理をしていた。

「ふう・・・」

俺は、片付けをしながら辺りを見渡した。

「もし勝ったら、Dクラスの机と交換できるのよね。」

「この箱とも、オサラバじゃのお。」

美波と秀吉は、箱を片付けながら新しい設備に想いをはせている。

「やつと人並みの設備になれるんだ。頑張ろうね、姫路さん。」

「はい！頑張りましょう、吉井君。」

明久と姫路は、Dクラス戦に意気込んでいる。

「みんな静かにしてくれ。これから、作戦会議に移る。」

雄二が、そう言つと、みんなはシンとなった。

「けど雄二、作戦だなんて大げさじゃない？こつちには姫路さんがいるんだし。」

「そうじゃ。姫路はAクラス並みじゃからのお・・・」

明久と秀吉が、姫路を見ながら言った。

「そんな、恐縮です・・・」

姫路は、顔を赤くしてうつむいている。

・・・というか、

「・・・相変わらず忘れられてるのな。」

俺もAクラス並みなんだが・・・

「いや、甘いな。」

雄二は、黒板に書いてある地図を指差しながら言った。

「今回の戦闘は、戦域が広い。必然的に、兵力が分散する羽目になる。」

「だから、姫路一人を突入させても、敵代表にたどり着く前にアウト・・・というわけだな。」

「ああ。謙太を加えれば、代表までたどり着けなくもないだろうが、それでも、決定打を与えられる可能性は高くない。」

「それじゃあ、どうするの？」

「今回は、電撃戦で行く。威力偵察部隊を敵陣に突撃させ、突破口を開く。そこに、姫路を突撃させる。」

「わかりました。」

「謙太は全部隊のバックアップ・・・というより、姫路が平賀を殺れなかったとき、平賀の首を取るのはお前だ。任せたぞ。」

「ああ。当たり前だ。」

「戦力を小出しにしてたら勝てない。持てる力は全て出す。守りは捨てて、攻撃に徹する。そして、負ける前に勝つんだ!!」
「「「おお!!」」」

打倒Dクラス。

Fクラスの士気は最高になった。

そして3時半。

「開戦だ!!」

「「「おお!!」」」

戦いの火蓋が切って落とされた。

「それじゃ、前線は明久が指揮してくれ。」

「え？僕が？」

明久は、雄二に指名され、キョトンとしている。

「ああ。Fクラスならではの作戦がある。そいつで攪乱してくれ。」

「分かったよ!」

雄二の言葉に、明久は頷いた。

「・・・なあ、雄二。」

「なんだ？」

「・・・捨て駒だろ？」

俺は、ダンボールをかぶって、意気揚々と出ていく明久を指さしながら言った。

「当たり前だ。」

「即答か・・・。まあ、そうだろうな。」

5分後。

「やられちゃたよ!!」

「なんだ、戻ってきたのか。」

「死んだかと思った。」

「二人とも何言ってるんだよ!! 5人も補習室送りになったんだぞ!!」

「ムツツリーニ、敵軍のリストを。」

雄二に言葉を受け、ムツツリが出てきた。

「敵の布陣は？」

「えっと、この人と、この人と・・・」

「・・・おいムツツリ、なんで女子しかいねえんだ。」

「そんなもの必要ない。」

「・・・だろうな。」

雄二は、リストを見ながら、腕を組んだ。

「なるほど、数学が苦手な奴が多いな。」

「それじゃ、ウチが突入する？」

美波が、姫路と共に出てきた。

「そのつもりだ。既に、長谷川先生も確保してある。」

「初めから決めてたのかよ!! それじゃ、僕の犠牲は!？」

「・・・無駄だ。」

「酷い!!」

ギヤーギヤー騒ぐ明久を、俺が一言で切り捨てる。

「須川、特別任務の用意だ。」

「・・・了解。」

須川は、そういうと出ていった。

さて、第二戦・・・いや、本戦の開始だ。

「トイレに伏兵！！長谷川先生が捕まった！！」

「それじゃ、一働きしてくる。」

美波が出撃して五分。

ムツツリー二からの通信を受け、俺が出撃した。

俺が戦場についたときには、古典の竹中先生が現れ、召喚フィールドを出していた。

「危ねエ、美波！！」

俺は、美波の目の前の敵3人を撃破し、敵の前に立ちふさがった。

「戦死者は補習！！」

「嫌だああああ！！」

「マズイ！佐藤が来たぞ！！」

「クツソオ、島田を倒すまであと一歩だったのに・・・」

「ごめん、助かったわ。」

「ああ、問題ない。」

俺は、バスターソードを構えた。

「さて、来るなら来やがれ。」

「クツ・・・」

俺の気迫に押され、敵が後退する。

ピーン、ポーン、パーン、ポーン

『お知らせします。数学の船越先生、連絡があります。』

「須川、間に合ったか。」

校内放送から、須川の声が聞こえた。

『吉井明久君が、Dクラス前で待っています。』

「へ？」

明久は、何の事かが分からないようで、ポカンとしている。

『吉井君が、生徒と教師の垣根を越えた、男と女の話があるそうです。至急、Dクラス前へ・・・って鉄人！？』

『須川！何をしておるか！！』

『これも作戦の一部で・・・ぐあっ！！』

『お前も補習だ！覚悟しろ！』

『いやだああああ・・・』

須川、死亡決定。

そして、

ドドドドドドドドドド！！

「見て、船越先生よ！！」

「ヤバツ！！」

明久、死亡決定。

「吉井隊長、アンタはすごいよ！！」

「クラスのために犠牲になるなんて！！」

「みんな、吉井隊長の死を無駄にするな！！」

「「「おお！！」」」

ま、指揮も上がったし、良いか。

「それじゃあもう一仕事・・・」

俺は、竹中先生のところに行き、耳元でこう囁いた。

「先生。ズラ、危ないですよ？」

「！？・・・先生は、急用で一旦職員室へ戻ります！！」

「今だ！！」

「船越先生、数学のフィールドを！！」

ギユウウウン！！

再び数学の召喚フィールドが展開され、俺たちが有利になった。

「もう負けないわよ！！」

美波が、前にいたDクラスを蹴散らし、突破口が開いた。

「よし、突破口が開いたぜ？」

タッタッタッタツ・・・

姫路が、戦闘をすり抜け、Dクラス教室に突入した。

「周りの雑魚は任せな。」

俺が、久しぶりに呼び出したドラゴンで、親衛隊を消し飛ばした。

「さあ、止めだ！！」

「はい！！」

姫路が、平賀の方を向いた。

「フツ・・・」

しかし、平賀は余裕の表情をしている。

「・・・何がおかしい？」

「残念だが、オレらの勝ちだ。」

平賀は、笑いながら言う。

「今頃、お前らの代表は、俺が潜ませていた伏兵にやられているだろうな。」

「本当ですか!？」

姫路が、大声を出した。

「残念だったな？」

「そんな・・・」

平賀は、オレらに不敵な笑いを向けた。

「・・・馬鹿じゃねえの？」

「なんだと・・・？」

俺は、そんな平賀を一蹴した。

「言っておくが、今の雄二は、Aクラス並みだ。」

「なんだと!？」

「代表!!伏兵が全滅させられた!!」

「そんな馬鹿な!!」

平賀は、意表を突かれたような顔になっている。

「・・・当然と言えば当然か。」

「残念ながらデータが古かったらしいな。まあ、あいつも伊達に神童なんて呼ばれてないってことだ。それじゃ・・・」

俺は、剣を構え、

「サヨナラだ。」

思いつき振り下ろした。

シューウウ

平賀の召喚獣が消滅し、俺たちの勝利が決定した。

第六十二話（後書き）

謙太「いよっしゃアアア!!」

明久「ヤッタネ！」

雄二「次回は戦後会談だな。」

謙太「次回をお楽しみに！」

第六十三話（前書き）

試召戦争編です

第六十三話

「やりましたね！吉井君！」

「試召戦争が終わり、俺達は喜びをかみしめていた。」

「完勝だな。」

「全くじゃ。」

俺達は、（捨て駒以外）ほとんど被害を受けてない。

その点から見ても、圧勝というしかなかった。

「まさか雄二が勉強してたなんてねえ・・・」

明久が、雄二を見る。

「それなりにできるようになったな。」

「いや、まだまだこんなもんじゃねえ。」

俺の言葉に、雄二は首を振った。

「俺たちの本当の目標は、Aクラスだ！」

「「「おお！！」」」

雄二の言葉に、Fクラスが沸き立った。

「そのために、次はBクラスを落とす。」

雄二がそう言うと、明久、姫路などのFクラス主要メンバーは苦い

顔をした。

「・・・Bクラスって、あの根本君の？」

「ああ。補給試験が終わり次第、Bクラスに宣戦布告をする。そこ

でだ、明久・・・」

「俺に行かせてくれ。」

俺は、雄二の言葉を遮った。

「なぜだ？」

「ちよつと、根本 ゴミに伝えたいことがあるからな。」

俺はそう言うと、明久を見た。

「お前もついてきてくれ。」

「え？僕？」

「召喚獣を使う羽目になるかもしれない。」

「・・・そっか。わかったよ。」

明久は了承した。

「それじゃ、行ってくる。」

そう言っつて、俺は教室を出た。

明久には外で待機してもらい、俺だけが中に入った。

ガラガラガラ・・・

「おい根本。」

俺は、Bクラスに入るや否や、根本を呼んだ。

「おやおや？誰かと思えば、Fクラスのおバカさんたちじゃないか。」

根本は、コツチをむき、意地の悪い笑みを浮かべた。

「ほざいてる。FからBへの宣戦布告だ。」

俺は、根本を睨みつけ、言った。

「ああ、受けて立とうじゃないか。」

根本は、余裕の表情で俺を見返す。

「・・・この前の借りは返す。」

「それはお互い様だろう？俺だって、あの屈辱は忘れない。」
互いに睨み合う俺と根本。

「・・・チツ。」

俺は、踵を返し、歩きだした。

「ちよつと待て。恒例の下位勢力使者虐めだ。歓迎してやれ。」

「・・・」

根本の号令で、黙って座っていた奴らが動き出した。

「・・・明久。」

「アウエイクン！！！」

「サモン。」

俺は、明久に召喚獣フィールドを出させ、召喚獣を召喚した。

「さて、俺に殺られたい奴は何奴だ？」

「クッ……」

俺の点数を見て、しりごむBクラス。

「どうした、怖気付いたか？」

まあ無理もない。

今の俺は……

総合科目 / 5664

……化け物だからな。

「それじゃ、また明日。」

俺は、Bクラスを後にした。

「……以上が作戦だ。各自、全力で戦ってくれ。そうすれば勝てる！！」

「おお！！」

俺が教室へ帰ると、ちょうど作戦会議が終わっていた。

ちなみに、作戦会議は入手したDクラスにて行われている。

「それじゃ、解散。」

「お邪魔しましたあ」

雄二の号令で、俺達はDクラスを後にした。

「なんだよコレ・・・」

Fクラスに帰ると、Fクラスは荒れていた。

みかん箱はズタズタにされ、筆記具は折られていた。

「Bクラスの奴らか・・・」

「おそらく、そうだろうな。」

雄二が、折られた鉛筆を拾いながら言った。

「回復試験の妨害が目的じゃろうか・・・」

「やることが小せエな・・・」

「・・・地味」

俺達は、口々にBクラスの悪口を言い合う。

ムツツリや美波に至っては、

「・・・よくも根本!!」

「絶対に許さないんだから!!」

般若のオーラをまとっている。

・・・大事なものでもあったのか？

「落ち着け!!ここで冷静さを失ったら、それこそ敵の思いつつぼだ

! 試召戦争に勝てば、十分な仕返しになる!!」

「「「・・・」」」

雄二の一喝で、なんとか混乱は避けられた。

そして帰り道。

「本当にDクラスと設備を交換しなくて良かったの？」

明久が言った。

雄二は、Dクラスとの設備交換を断った。

「ああ、後のための種まきだ。」

「種まき・・・？」

「芽が出るのを楽しみにしとけ。」

雄二は、ニヤッと笑った。

「そっか、じゃあまたね。」

明久は、それを聞いて理解したのか、小走りで帰った。

「それじゃ、俺たちも帰るか。」

「・・・ちよつと待て、雄二。」

俺は、帰ろうとする雄二を呼び止めた。

「どうした？」

「お前、Bクラスの設備も入れ替えない気だろ・・・？」

「当たり前だろ？ そうしないと勝てないからな。」

俺は、少し機嫌悪そうに言ったが、雄二は、特に気にする様子も無く言った。

「・・・どうしても、Bクラスと設備を入れ替えれないのか？」

「・・・何が目的だ？」

雄二は、しつこい俺を警戒し始めたようだ。

「・・・もし、もし俺たちがAクラスに勝つなら、AクラスはFクラスの設備に行くんだろ？」

「ああ・・・そっか。」

雄二は、俺が言いたいことに気づいたようだ。

「つまり、従姉弟や恋人をFクラスの設備で勉強させたくないという事か。」

「・・・そっかということだ。」

雄二は、ため息をつきながら言った。

「・・・残念ながら、無理だ。」

「何故だ？」

俺は、できるだけ感情を押し殺しながら言った。

「それは、お前にも言えない。情報漏えいは防ぎたい。」

「そっか・・・」

俺は、どうしてもアイツらに嫌な思いをさせたくなかった。

「雄二、Bクラスをとって、なおかつAクラスに勝てる作戦はないのか？Bを取れるのなら、俺はなんだってする。」

俺は、雄二に言った。

「・・・つけあがるな。」

雄二は俺を睨みつけながら、冷たく突き放した。

「なっ・・・」

「お前一人が全力を出したところで、たかが知れてる。あまり思い上がるな。」

「・・・ああ、分かった。」

俺は頷き、こう言った。

「なら、俺は今回の戦争に参加しない。」

「なっ・・・!?!?」

俺のストライキ発言に、さすがの雄二も予想外だったようで、驚きながら俺を見る。

「俺が参加しなければ、Bクラス勝利は困難だろ・・・?」

こういった脅しは好きじゃねえが、アイツらのためだ・・・

しかし、雄二は変わらぬ口調で言った。

「そこまで言うなら、参加しなくてもいい。」

「・・・」

「正直惜しいのは惜しいが、お前一人の力より、Bクラスの力のほうが必要だ。それに・・・」

雄二は、俺に背を向けた。

「クラスと共に戦えない奴は、必要ない。」

雄二はそう言うと、外へと歩いていった。

「・・・クソッ。」

雄二がいなくなったあと、俺は壁に拳を打ち付けた。

ワガママなのは分かっている。

理不尽なのも分かっている。

だけど、けど・・・

「俺は、あいつらが辛い目に合うのは嫌だ・・・」

俺は、その場に立ち尽くした。

第六十三話（後書き）

謙太「・・・」

優希「次回をお楽しみに・・・」

第六十三話（前書き）

Bクラス戦、謙太なしでお送りします。

第六十三話

午後二時五十分。

「おお〜!!!」

どこからか歓声が聞こえた。

どうやら、試召戦争が始まったらしい。

「さて、アイツらはどうやって戦うんだ・・・?」

俺は、とりあえず優子のところに向かった。

「あれ? 謙太??」

「謙ちゃん? どうしたのですか?」

優子は、Aクラスに居た。

「謙太くん、試召戦争どうしたの?」

優子が言った。

「ああ、ちよつと抜けてきた。」

「ええ!? 謙太がいなくて、Fクラス大丈夫なの?」

優子が、俺の痛いところを突いた。

「え? あ、ああ。ちよつとしたら戻るから、大丈夫なんじゃないか?」

「そつだといいけど・・・」

優子は、不安そうに言った。

「それより優子、召喚フィールドを展開してくれ。」

「え? いいけど・・・?」

優子が、召喚フィールドを展開する。

「そついえば、私が召喚フィールドを消すとすぐに消えちゃうけど、どうして?」

「そついえばまだ教えてなかったか?」

・・・一回召喚獣のまま介抱された気がするんだが？

「サモン、シンクロ、チェンジ。」

俺は、立て続けに三つの合言葉を言った。

「それじゃ、優子。」

俺は、チェンジ時特有の、ハモった声で優子に言う。

「召喚フィールドを消すとき、俺の足元を見ていてくれ。」

「へ？」

「いいから。」

「え？あ、うん・・・」

優子が召喚フィールドを消したとき、激しい頭痛に襲われた。

「クツ・・・」

そういえば、これって死の危険があるんだったな・・・

「どうしたの・・・ってあれ？」

「謙太くんが、召喚獣？」

「やっぱり可愛いです〜!!」

優子と優子は驚いたように、優希は今にも抱きつきそうな勢いで俺を見た。

「ああ、つてか、優子は一回見たことあるだろ？」

「え？ああ、そういえばそうだったわね・・・」

優子は、どうやらあの介抱のことを思い出したらしい。

「それじゃ、戻る・・・」

「ちよつと待って？（ちよつと待つです!!）」

優子と優希に呼ばれ、俺は振り返った。

「結果、楽しみにしてるから！」

「絶対勝ってください!!!」

「・・・」

俺は、無言のまま走り去った。

明久目線

「総員、突撃!!」

「うおおおお!!」

僕の号令で、みんなは突撃した。

「ぐあああ!!」

先頭の3人がやられ、僕たちは後ずさりする。

こんな時に謙太がいれば・・・

僕は、ふと謙太のことを考えた。

謙太は、試召戦争が始まる直前に、どこかへ行ってしまった。

「やばい、もたないぞ!!」

幸いというか、今の教科は日本史だ。

ここは僕が出るしか・・・

「吉井明久、受けます!!」

僕は、召喚獣を召喚した。

吉井明久、日本史/187

Bクラス平井、斎藤：日本史/208、195

「あいつ、Fクラスのくせにつ!!」

敵の一人が、僕に向かってきた。

「甘い!!」

僕はそれをかわし、足払いからのたたき落としのコンボを食らわせ

た。

「シュウウー!!」

「戦死者は補習!!」

「嫌だああああ!!」

鉄人がやってきて、相手を連れていく。

なんとか一人は殺れたらしい。

「クソっ、大人数で困め!!」

相手の号令で、周りにBクラスの生徒が集まってくる。

「吉井君っ!!」

突然名前を呼ばれ、後ろを向くと、姫路さんがいた。

「姫路さん？出番はまだじゃ・・・」

「坂本くんが、ピンチの時に使って下さいって!!」

「雄二が？」

僕は、姫路さんに渡された一枚の紙を見た。

「これは・・・!!」

僕は、後ろのみんなの方を向いた。

「みんな、よく聞け!! Bクラス代表根本には、彼女がいるぞ!!」

「・・・何い!!」

僕の言葉に、Fクラスのみんなは驚いた。

「相手はCクラス代表、小山優香さんだ!!」

「・・・何い!!」

みんなの怒りのボルテージが上がっていくのがわかる。

そこに、僕が止めのセリフを放つ。

「しかも、手作りのお弁当を作ってもらっているそうだ!!」

「何、イイイ!!」

みんなが、異端審問会のマントを被る。

「・・・ゆううるううさああああん!!」

鎌を構えるみんな・・・っていつか、どこで手に入れたんだよ？

「こ、こいつら危険だ!!」

Bクラスの生徒が防御体制を取ろうとしたとき、須川君の召喚獣が

自爆し、巻き添えを食らったBクラスの生徒が倒れた。
・・・いまだ!!

「戦局は傾いたぞ!!突っ込め!!!」
僕の号令と同時に、あちこちで自爆テロが起こった。
っていうか・・・

「召喚獣って、自爆できたんだ・・・」

ヤケになった自爆で双方に大ダメージを残した。

そして、戦局が落ち着いた頃に鉄人が・・・

「せ、戦死者は補習・・・」

たくさん生徒を担いで、補習室に消えていった。

「須川君、君の犠牲は無駄にはしないよ。ちゃんと、僕の怒りを沈めるのに、役立ったから」

「船越先生のこと、まだ根に持っておったのじゃのお・・・」

秀吉が、呆れたように言った。

「敵もだいぶ減ったけど、こっちの人数も減ったわ。体制を立て直すわよ!」

「・・・おお!」

「消耗したものは、回復試験に行くのじゃ!!」

「・・・おお!!」

みんなそれぞれの場所に行き、廊下は、少し静かになった。

「それじゃ、一旦教室に帰ろっかな・・・」

「・・・!!」

「ん?なんか声がする・・・」

声が出したのは階段だった。

階段に行くと、そこには姫路さんがいた。

「あ、姫路さ・・・」

僕は姫路さんと呼ばうとして、思わず口をつぐんだ。

それは、

「・・・根本くん！」

そこに、根本がいたから。

「どうして、私たちの教室を荒らしたりしたんですか？」

姫路さんは、昨日のことについて根本君に問い詰めているらしい。

「俺たちがやった証拠でもあるのか？」

「そ、それは・・・」

「フッフフ・・・やったのは俺たちだ。証拠だってある。」

姫路さんが黙ると、突然、根本君が笑いだし、自分の罪を暴露した。

「許しません、サモ・・・」

根本君の言葉に怒った姫路さんが、召喚獣を呼び出そうとした。

スツ・・・

「おっと？危ない危ない・・・」

「・・・！！」

根本君が、ある物を取り出し、姫路さんがひるんだ。

「犯人の方から証拠を出すなんて、気が利いてるだろう？」

根本君が取り出したのは、あの『不幸の手紙』だった。

根本君が笑いながら手紙をヒラヒラさせる。

「そんな・・・」

姫路さんは、どうしたらいいか分からず、ただ根本君を睨みつけている。

「思いがけない収穫だったよ。今どきラブレターなんて、可愛いじゃないか？」

「返してくださいっ！！」

「一体なんて書いてあるんだろうなあ・・・？」
ビリビリ・・・

姫路さんを無視して、根本君がラブレターを開ける。

「おおっと、これはあとのお楽しみにしよう。」

「あ、あなたという人は・・・」

姫路さんは、今にも泣きそうな顔をしている。

「こんなことしなくても勝てるんだがな。保険代わりだ。試召戦争が終わったら返してやるよ。」

「・・・」

「もし気が変わらなかつたら、だけどな。アハハハ・・・」
根本君は、そういうと去っていった。

ギリっ・・・

僕は、歯を思いつ切り食いしばり、Fクラスに向かった。

「雄二!!!」

僕は、教室にいた雄二を呼んだ。

「どうした明久、脱走か？だったらチヨキでしばくぞ。」

「・・・話がある。」

「なんだ？」

僕のただならぬ気配を察したのか、雄二も真面目な顔になった。

「姫路産を戦線から外して欲しい。」

「・・・何かあったのか？」

雄二は、何かあったことに気づいたらしい。

「理由は言えない。」

僕は、まっすぐ雄二を見た。

「・・・お前がそこまで言っなら、いいだろう。」

雄二は、了承してくれた。

「ただし、条件が二つある。」

「何？」

雄二は、僕を見ながら言った。

「一つ目は、姫路がやる予定だった任務を、お前がやれ。方法は任せる。」

「分かった。やってみる。」

「一つ目は、なんとか僕にもできそうだった。」

「もう一つ、謙太をやる気にさせ、戦線に加える。」

「え？」

「謙太は、この試召戦争に参加しないつもりだ。」

「どうして・・・？」

僕がそう聞くと、雄二は顔をそらした。

「・・・意見の相違だ。」

「え・・・？何かあったの？」

「ちよつとした仲違いだ。お前ならなんとかできるだろう。」

「・・・分かった、やってやる！！」

「いい返事だ。頼んだぞ。」

雄二は、そう言うのと座り込んだ。

はあ、はあ、はあ・・・

「謙太、どこだよ・・・」

僕は、謙太を探し回っていた。

「どこにもいない・・・」

しかし謙太は、その姿さえ見せない。

「ちよつと休もう・・・」

僕は、一旦立ち止まった。

その時、

「サモン！！」「」

「何っ！？」

突然、Bクラスに囲まれた。

運悪く僕が一旦休憩したのは、Bクラス前だった。

「さっきはよくも平井をやってくれたな。覚悟しろ！！」

相手が、一斉に飛びかかってきた。
そして、対戦科目は数学。
やられる・・・

僕がそう覚悟した時、

ビュン！

シュウウ！

「なんだ！？」

突然、真上にブーメランが飛んできた。

「明久、お前、頑張ってるじゃねえか。」

「・・・謙太！？」

そこには、召喚獣の謙太がいた。

そう、僕を助けたのは、謙太だった。

謙太目線

Aクラスを後にしたあと、俺はドラゴンに乗り、戦況を眺めていた。

一通り戦闘が終わり、静かになった頃。

「あっちが騒がしいな・・・」

俺は、声がる方に向かった。

「・・・！！覚悟しろ！」

そこでは、今まさに明久が消されようとしていた。

「チツ・・・喰らえ！」

俺は、ブーメランを投げた。

ビュン！

シュウウ！

「なんだ！？」

俺の攻撃で、敵の召喚獣が消える。

俺は、明久のところに行った。

「明久、お前、頑張ってるじゃねえか。」

「・・・謙太!?!」

明久は、俺の突然の登場に驚いている。

「クツ、佐藤だ!」

「馬鹿な、あいつは今回不参加だたんじゃないのか?」

「坂本に騙されたんだ!」

「一旦撤退だ!」

Bクラスの奴らは、口々にそう言うと、撤退していった。

「謙太、どうして今まで参加してくれなかったんだよ!」

「悪いな。でも、こつから先も参加する気はない。」

「どうして!?!」

明久は、俺に詰め寄ってきた。

「・・・雄二と意見が噛み合わなかったんだ。」

俺はそう言うと、その場を後にしようとした。

「待って、謙太!」

そこを明久に呼び止められた。

「どうした?」

「・・・戦線に参加してください!」

明久は、神妙な顔つきで俺を見てくる。

「・・・無理なんだ。すまない。」

しかし、俺はそれを断った。

「どうしても??」

「・・・」

明久がさらに詰め寄ってくる。

「姫路さんも、戦線に参加できないんだよ?」

「・・・知っている。」

実は、明久が見ていた上で、俺もあのやりとりを見ていた。

「だったらどうして!?!」

「・・・」

俺は、答えに詰まった。

・・・今の俺は、わがままを言っているだけだ。それは分かっている。

けど、俺は優子達をFクラスの汚い設備で勉強させたくない。

「・・・謙太？」

俺は、迷っていた。

今の俺の行動は間違っている。

しかし、絶対に優子たちに嫌な思いをさせたくない。

「謙太!!!」

「うわっ!!!」

突然明久が大声を出した。

「謙太、いい加減にしてよ!!!」

明久は、俺に平手打ちをした。

俺の点数が2→3点減る。

「つつ、テメエ・・・」

「何を悩んでるのかわかんないけど、こんなの、全然謙太らしくないよ!!!」

「・・・!!!」

「Aクラスと戦うには、Bクラスを倒さなくちゃいけないんだよ!!!」

「!!!」

そうか、そうだった・・・

「クツクツク・・・ハハハハ!!!」

「どうしたの謙太!？」

まさかこんなことを、明久に気付かされるなんて・・・

「確かに、いまAクラスのことを考えるなんて、ただの無駄だな。」

「謙太・・・？」

「ありがとよ、おかげで目が覚めた。」

「それじゃ・・・」

「俺も戦列に加わる。俺はどこに行けばいい?」

「よかった！！これ、雄二からの命令書。」

明久は、俺に一枚の紙を手渡し、

「それじゃ、僕は作戦に戻るから！！」
颯爽と去っていった。

「・・・全く。」

俺は大馬鹿だ。

Aクラスのことを考えてBクラスに負けるなんて、それこそ本末転倒じゃねえか。

それに、あの根本には絶対負けたくねえ。

そんなことを考えつつ、俺は紙を見た。

作戦 佐藤謙太用

明久、姫路などの突撃部隊が奇襲をかける時、根本もクラス代表の首を狙いに来ることが予想される。

そこで、貴君は親衛隊として、代表を守って欲しい。

我がクラスが奇襲をかける時間は、午後四時半。

それでは、貴君の健闘を祈る。

PS：勝利の暁には、貴君の意見も再検討したいと思う。

Fクラス代表坂本雄二

フフツ・・・

雄二、どう話しかければいいかわからなかったんだな。

時間は4時20分。

「急ぐか・・・」
俺は、Fクラスへと向かった。

雄二目線

「そろそろ、突撃の時間だな。」

時間は4時半。

Fクラス内には俺一人。

「明久は間に合わなかったか・・・」

俺一人でどこまで殺れるかは知らねえが、少しでも耐えてみせる。

そして、あの馬鹿野郎 謙太 の目を覚ましてやる。

「・・・まもなく突入！！」

ムツツリーニからの連絡が入ると同時に、学校に大きな地響きがあった。

「・・・明久、やってるな。」

さてと、俺もそろそろ準備しますか。

「Bクラスの馬鹿ども、出てこいよ。」

俺がそう言うと、何処からともなくBクラスの奴らが現れた。

「やっぱり居やがったか。」

「・・・坂本、覚悟！サモン！！」

敵の数は五人。

・・・殺れるか？

「それじゃ、Bクラス藤岡、坂本雄二に・・・」

「佐藤健太が受けてやる。」

「・・・何い！？」

「・・・謙太？」

教室のドアには、謙太の召喚獣が立っていた。

「それじゃ、死んでくれ!!」

5匹の召喚獣は、音も無く消え去った。

「戦死者は補習!」

「『鬼の補習は嫌だ!!』」

Bクラスのバカどもが居なくなつたとき、

「根元の首を取つた!!」

ムツリーニからの連絡が入った。

・・・俺たちの勝利だ。

第六十三話（後書き）

謙太「次回は根本へのオシオキ&Aクラス戦・・・まで行けたらいいなあ。お楽しみに。」

第六十四話（前書き）

戦後会談です

第六十四話

「雄二、すまなかった。」

今回のBクラス戦勝利を知り、俺は雄二に頭を下げた。

ちなみに、まだ召喚獣のままだ。

「気にするな。お前がいなくても勝っていたからな。」

雄二は、平坦な口調で言った。

「でも、俺用の作戦を立てていただける？」

「あれは保険だ。Bクラスの生徒くらい、相手にできるからな。」

俺の言葉に、雄二はどうでもよさそうに言った。

「そうか・・・」

もう、設備の件でチャンスはないな。

俺は、その場から立ち去ろうとした。

「待て、どこへ行く。」

雄二が、俺をつかんだ。

「・・・優子のところに行つて、元に戻ってくる。」

「その前に、ちょっと付き合え。」

雄二は、そう言つと俺をつかみあげた。

「!?!」

「暴れるな。」

雄二に連れられ、俺はある場所へ向かった。

雄二が向かった先は、Bクラス。

「残念だったな、根本。」

「クツ、坂本・・・。」

雄二は、根本を目で一蹴すると、Bクラスの教卓に向かった。

「ここで、Bクラスのみんなに提案がある。」
やはりか・・・

俺は、優子たちへの申し訳なさを感じながら、黙って雄二につかま
れていた。

「本来なら、Bクラスの設備と俺たちの設備を交換してやるんだが、
条件によつては、考え直してやつてもいい。」

考え直す・・・？

EやDの時は、免除つて言つてたよな？

「条件？」

根本が、訝しげに聞く。

「なに、いたつて簡単だ。根本、お前が俺の指示に従つなら、チャ
ンスをやる。」

「チャンス？」

チャンス・・・もしかして。

「もし俺たちがAクラスにまけたら、その設備はいらない。そのか
わり、もし俺たちが勝つたら、その設備はAクラスに譲り渡しても
らう。」

・・・雄二。

俺は、感謝の気持ちでいつぱいだつた。

「分かつた。条件を飲もう。指示をいえ。」

根本は、俺たちがAクラスに勝つのは無理と察して、条件を飲んだ。

「そうかそうか。」

雄二は、笑いながら言った。

「それじゃ、これを着てAクラスに宣戦布告をしてこい。」

そう言つて坂本が取り出したのは制服。

それも女子用の制服だつた。

「なんだと・・・！？馬鹿なことを言つな！俺がそんなふざけたこ
とを・・・」

「Bクラス全員で実行しよう！！」

「約束しよう、任せてくれ！」

「全力で着せてみせる!!」

根本の意見は、Bクラス全員によってかき消された。

「おいコラ！俺はそんなものを・・・」

ドスッ

Bクラス生徒が、根本にボディーパーを食らわせ、沈黙する。

「これでいいか？二人とも。」

「・・・ああ。」

俺は、1も2もなく同意した。

そして明久は、根本の制服のポケットから手紙を取り出し、

「・・・うん。」

ニッコリと笑った。

その日の帰り道。

「Bクラス戦勝利、おめでとう！」

優子が、俺の前を歩きながら行った。

「謙ちゃんは本当にスゴイです！」

優希が、俺の腕を握りながら言う。

「ああ、次はAクラス戦だな。」

「私も勉強したんだし、負けないわよ！」

「はじめての試召戦争が謙ちゃん達なんて、楽しみですね。」

俺は、ニコニコと笑っている優子と優希を見て、

「ぜってえ負けねえからな？」

ニコツと笑った。

第六十四話（後書き）

謙太「今回は時間の都合で、戦後会談だけです。それでは、次回をお楽しみに！」

第六十五話（前書き）

Aクラス、前哨戦です！

第六十五話

Bクラス戦も勝利を収め、俺達はAクラス戦に向けて準備をしていた。

その準備とは、

「アウェイクン！」

召喚獣を上手く操作するための特訓。

「『サモン！』」

特訓をしているのは、Fクラス主要メンバー。

その特訓内容は、

「さて、かかってこいよ。」

「いくよ、謙太！」

俺とのスパーリングだった。

「ハアツ！」

ヒュン！

「甘いな。」

明久以下Fクラス一同の攻撃を、俺がかわし、たまに攻撃をするのみ。

俺はシンクロにより操作は完璧であるため、俺は特訓の手伝いに徹している。

「はあ、はあ・・・」

「次はワシじゃな。」

明久がバテて、秀吉が出てくる。

「とおっ！！」

「甘いっつうのー！！」

俺のパンチが、秀吉に当たる。

「うわっ！！あ、危なかつたのじゃ・・・」

秀吉は、残り2〜3点で持ちこたえた。

「わ、悪い・・・」

「うむ、別に構わんのじゃ。」

「そうか……」

俺達は、順調に特訓をしていった。

「今日はこちらまでしておくか。」

「はあ、はあ……異議なし、だな。」

「そうだね。」

雄二の言葉で、俺たちは特訓をお開きにした。
ピッ。

明久が、黒金の腕輪を操作して、召喚フィールドを……

「あれ？」

「どうしたんですか？明久君？」

消せなかった。

「うーん、何かこの間の中間テストの頃から、調子が悪いんだよね
くっ!!」

明久は、そう言って黒金の腕輪をブンブンと回している。
すると、

ビューン

召喚フィールドが消えた。

「ん……」

「使い方、よくわかってないんじゃない？」

「使用説明書は読んだのか？」

美波が言つと、秀吉がマニュアルを持ってきた。

「えつと……」

明久は、使用説明を読んだ。

「濡れた手で触らないでください。」

・・・風呂で使うのはセーフなのか？

「上に乗らないでください。」

上には乗ってないだろうが、関節技で壊れてるんじゃないのか？

「吊革にしないでください。」

・・・これはないな。

「彼女に貢がないでください」

・・・これもないな。

「質に入れないでください。」

・・・その発想はなかったな。けど、明久ならやりかねん。

「子供の手の届かない所に保管してください。って、大したことは書いてないよ？」

三つぐらい危ない気がしたけどな。

「・・・こ、これは!!！」

ムツツリがある、注意書きを見つけ、みんながそれを見た。

「・・・対象年齢13歳以上？」

「・・・それだ!!！」

明久以外の全員の意見が揃った。

なるほど、こついうことか・・・

「僕は13歳以上だよ!!！」

「・・・精神年齢以外はな。」

「ウグツ!!！」

明久は必死に否定するが、雄二に確信をつかれ、思わず後退りをする。

「そ、そんなことないよ!!！」

明久は、なおも否定する。

「18歳以上の本だつてたくさん・・・」

「・・・巨乳のポニーテール？」

「そうだよ・・・ってヤバツ!!！」

明久が気づいたときには、時すでに遅し。

「明久君、その話、じっくり聞かせてくださいね？」

「・・・ことと次第によつては!!」

「いやああああ!!」

明久は、姫路、美波、ついでに秀吉からの事情聴取に応じさせられた。

「・・・きよ、巨乳のポニーテール・・・」

ムツツリは、妄想で鼻血を出しまくっている。
馬鹿ばかりだな。

「・・・キジも鳴かすは撃たねまい。」

「何か言つたか？」

「いや・・・」

第六十五話（後書き）

謙太「ちなみにこれは、原作約一分間分です。」

優希「結構伸ばしましたね・・・」

謙太「次回をお楽しみに」

第六十五、五話 その？（前書き）

またまたパソコンブツで投稿できませんでした・・・
すみません！

オリ話というか、間話です。

第六十五、五話 その？

次の日。

「やったな。」

日が明けて、俺達は、昨日の喜びを噛み締めていた。

「そういえば、根本はどうするんだ、雄二？」

俺は、あのクズの処遇を聞いた。

「宣戦布告だけじゃ、全然気が晴れねえぞ？」

「それもそうだな・・・」

雄二は少し考え、俺を見ながら言った。

「考えがある。ちよっと協力してくれ。」

「わかった。」

俺は、一も二もなく了承した。

放送室前。

ちよつと昼の放送が始まる直前。

「さて、まずは女装趣味の外道呼び出そう。」

「どうするんだ？」

「まあ見てろ。」

雄二はそう言つと、俺を放送室にぶち込んだ。

「おい、てめえ何を・・・」

雄二は、俺を放送室の閉じ込めた。

「あつ、あなたはまさか、佐藤さん・・・？」

名前を呼ばれ、思わず振り返ると、そこには見知らぬ少女がいた。

「誰？」

「あ。私、放送委員で、佐藤さんファンクラブの新野すみれです。」

「へ、へえ・・・」

雄二、これが判つてて入れやがったな？

「で、何の用ですか？」

「あ、そうだったな。」

俺は、用事を思い出すと、新野に行った。

「悪いが、Bクラスの腐れ外道を思いつきり罵倒しつつ、ここに呼んで欲しいんだけどいいか？」

「ああ、根本ですね？」

新野はそう言うと、放送器具の準備をした。

「ほんとは校内放送は私用できないんだけど、他ならぬ佐藤さんの頼みですから。」

「ああ、済まないな。」

「いえ・・・」

新野は赤くなりながら、放送を流した。

『Bクラスの変態、腐れ外道、女装趣味・・・間違えました。根本君、先生が呼びです。至急放送室まで来てください。』

新野ナイス！

「このくらいでいいですか？」

「ああ。ありがとよ。」

俺は、新野に礼を言った。

「そ、それじゃ、私と写真を撮ってくれませんか？」

「いいけど・・・」

「やった！！！」

俺が了承すると、新野は飛んで喜んだ。

「それじゃ・・・」

スッ・・・

「何やってるんだ！？」

なぜか、新野は俺のシャツのボタンを開けようとした。

「え？二人で裸で写りたかったんですけど、嫌でしたか？」

「嫌以前に、危ないだろ！！！」

放送室で二人きりだぞ!?

「そうですか・・・」

「なんでそんなに残念そうなんだ!？」

「どうやら新野は露出狂らしい。」

「はあ・・・」

この学校、つくづく変なのしか居ねえな。

カシャツ!

「ありがとうございます!!」

「あ、ああ。こちらこそ・・・」

俺は、そう言っただけで放送室から出た。

外では、雄二とゴミが何かを話していた。

「分かったな？」

「バカをいえ!そんなの聞けるか!」

「聞かないなら、設備は頂くぜ？」

「なんだと?卑怯な!!」

「卑怯なのはどっちかな？」

「クツ・・・卑怯者め。」

根本は、悪態を付きながら去っていった。

「なんの話をしていたんだ？」

「ああ、ちよつとした、写真集の専属契約だ。」

「？」

「後でわかるさ。」

雄二はそう言うと、Bクラスに歩きだした。

「そっか、雄二？」

俺は、笑顔で雄二を捕まえた。

「なんだ？」

「新野に俺をぶつけたのは、何か意味があるのか？」

「ああ、ファンらしいからな。」

「それだけか・・・？」

「他に何かあるのか？」

「コイツ、なんにも知らないのか？」

「ああいや、なんでもない。」

「そういえば、新野はちよつとしたへんた・・・イダダダダダダ！
！」

「・・・やっぱり知ってたのか。」

俺は、雄二にアイアンクローを食らわせた。

「ちよつと待て、話せばわか・・・。」

雄二は気絶した。

さて、Bクラスに行くか。

第六十五、五話 その？（後書き）

「次回をお楽しみに！」

第六十五、五話 その？（前書き）

根本にオシオキ編、完結です

第六十五、五話 その？

俺たちがBクラスについたときには、既にクズの着替えは完了していた。

・・・キモツ！！

「なぜ水着なんだ！？しかも女子の・・・」

クズは、意味が分からないといった顔をしている。

・・・俺も意味が分からない。

「おい佐藤！」

「名前を呼ぶな！汚れる！！」

俺はクズにそう言い捨て、雄二を起こした

「おーい雄二？」

「いつてててて・・・」

俺は、気絶している雄二を起こした。

「あの汚らしい野郎に何をさせるんだ？」

「ああ、そういえば言ってなかったな。」

雄二は目を覚ますと、根本の方を見ていった。

・・・よく見えるな。

「それじゃ、お前今から鉄人のところに行って、鉄人に告白してこい。」

「うわあ・・・」

なかなかエグイわあ・・・

「バカをいえ！！無理に決まってるだろ！！」

「じゃあ船越先生がいいか？」

「それは・・・」

どっちもかなり嫌だな。

「うわああああ！！」

「それじゃ、頑張ってこいよ」

「逝ってらっしゃい。」

・・・根本、死んだな。

30分後

「・・・」

ボロボロのクズが帰ってきた。

・・・首から、（私は先生をバカにしました）というプラカードを
かけて。

「どうだった？」

「・・・フラれたよ。」

「鉄人に振られたか。残念だったな。」

まあ、こいつの顔なら当然だが・・・。

「ちげえ、優香にだ!!!」

「優香？」

クズが、泣きそうになりながら喚いた。

「優香って、Cクラス代表の小山優香か？」

「そうだ!!俺の彼女だったんだよ!!!」

「へえ・・・」

こいつに彼女がいたんだな・・・

「なんでフラれたんだ？」

「この格好を見ればわかるだろ!!!」

「まあな・・・」

俺が彼女でも、確実に逃げるな。

「お前らのせいだ・・・」

「・・・自業自得だ。」

負けたのが悪いんだろ？

「これでやっと自由・・・」

「まだ終わってねえぞ？」

「え？」

雄二が、クズに言った。

「次は宣戦布告だ。さっさとAクラスに行つてこい。」

「この格好でか?!」

「ああ。当たり前だろ？」

「無理だ!!」

「鉄人に告白にいけたんだ。余裕だろ？」

「たしかにそうだが・・・」

クズは、少し考え、Aクラスに向かった。

・・・あいつも馬鹿じゃねえか？

十分後

「・・・」

かなり気落ちした根本が帰ってきた。

「時間は？」

「・・・明日の一時限目だ。」

「そうか。それじゃ帰るか。」

「そうだな。」

「待て、また優香に会つてだな・・・」

俺達は、根本を無視し、教室に帰った。

第六十五、五話 その？（後書き）

謙太「こんなもんでいいですか？」

優希「いいんじゃない？」

謙太「それじゃ、次回はいよいよAクラス戦です。お楽しみに！」

第六十六話（前書き）

ついにAクラス戦です！

第六十六話

・・・決戦の朝。

AM / 5 : 00

「んん〜・・・」

俺は、珍しく目覚まし時計がなる前に目を覚ました。

「時間は・・・まだ5時か。」

俺は、いつもより2時間も早く目覚めた。

やはり、気分が高揚しているのか？

「・・・勉強するか。」

俺は、机に向かい、勉強を始めた。

AM / 6 : 50

「謙ちゃん、もう朝ですよ〜」

優希が、機嫌よさそうに入ってきた。

「ああ、もう起きてるよ。」

「朝早くから勉強ですか。精が出ますなあ。」

「・・・喋り方がオッサン臭いな。」

「ヒドイ!!!」

軽く会話を交わし、俺たちはダイニングへと向かった。

ダイニングには、優希が用意したと思われる朝食が並んでいた。

「相変わらず、朝からよくこんなに作れるな。」

「えへへ、恐縮です。」

優希は、頭をかきながら喜んでいる。

「キツくないのか？」

「大丈夫です!だって、愛する謙ちゃんのためですから!!!」

「そ、そうか……。」

優希は、普通従姉弟なら有り得ないことを、さらりと笑顔で言った。
「・・・バツサリ切り捨てられないから困るな。」

「それじゃ、食べるか。」

「はいっ!」

「いただきます!」

こうして、朝のひとときはゆっくりと過ぎていった。

登校中。

「優希」

「はい?」

「召喚獣の扱いには慣れたか?」

「バツチリです!」

俺がそう聞くと、優希は笑顔で親指を立てた。

「そうか。そりゃよかった。」

これで、全力で向かえるな。

「今日の試召戦争、絶対負けませんからね!」

「それはこっちのセリフだ。」

そんな他愛もない話をしていると、学校についた。

「それじゃ、また後でな。」

「はいです!」

俺は優希と別れ、教室に向かった。

朝のHR

「さて、今日の作戦は頭に入っているな？」

「「「おお！」「」」」

雄二の言葉に、Fクラスが大きく沸き立った。

「それじゃ、午前中の回復試験で、少しでもいい点を取ってくれ！」

「！」

「「「もちろんだ！」「」」」

今日の午前中の授業は、すべて補給テスト。

・・・こうしてどんどんと授業が潰れていくんだな。

一時限目。

テストは古典。

・・・今頃、BクラスがAクラスと戦ってるんだろうな。

「ちよつとはいい点を取るか。」

俺は、いつもの倍以上集中して、テストに臨んだ。

二時限目は保健体育。

今は・・・Cだな。

さつき秀吉が挑発に行ったから、間違いないだろう。

俺は、配られた問題用紙を見た。

目の前にあるのは性の問題。

・・・いつもなら「書きたくありません」と書くところだが、

「今回はそうもいかねえな・・・」

俺は、分かるところは全て埋めた。

三時限目は化学。

今は、Dクラスか。

・・・そろそろ本番だな。

俺は、朝の勉強を思い出しながら問題を解く。
特に、得意科目は徹底的に説いたから、。いつも以上に解った。
そして、俺は化学の中では自己ベストの量の問題を解いた。

そして四時限目。

Eクラスが戦っている時間だ。

そして、最後のテストは数学。

「さて、ここが正念場だ。」

俺は、フルにエンジンをかけてテストを解いた。

ちょうど四時限目が終わった頃、
ガラガラ

「はあ、はあ、はあ・・・」

息を切らした優子が教室に来た。

「なかなかやるわね・・・」

「いいだろ？Aクラス相手なんだし、こんぐらいのアドバンテージ
はくれよ。」

雄二が、飄々といった。

「いいわ。どうせ今までは小手調べ。次は全力で行くから。」

優子も負けじと返す。

「謙太、手を抜いたら承知しないわよ！！」
ピシャン！！

・・・望むところだ。

俺は、気持ちを戦闘用に入れ直した。

第六十六話（後書き）

謙太「次が本戦です！」

優希「引つ張ってごめんなさい！」

謙太「次回をお楽しみに！」

第六十七話（前書き）

Aクラス戦です。
二つに分けます。

第六十七話

そして午後。

試召戦争まであと10分と迫った時間。

「さて、作戦開始だ！」

「おお！！！」

雄二の号令で、俺達は歓声を上げた。

「まずは、Aクラスにバレないようにここを出るぞ。」

「了解。」

雄二の指示で、俺達は教室から出た。

その十分後。

「居ないぞ！！！」

「どういうことだ！？」

Fクラスの教室から、たくさんの声が聞こえてきた。

「教室が騒がしいな。」

「よし、作戦の第二段階だ。明久。」

「うん。」

雄二の指示で、明久がFクラスの教室の方を見る。

「みんな、こつちだよ。」

「あそこか！！！」

「たまには外に出ねえと、カビが生えちまうぞ？」

雄二が、明久に続いて相手を挑発する。

「クソっ！！！」

Aクラスの奴らは、悔しそくに窓から離れた。

「明久。道案内だ。」

「OK、任せて！！！」

明久は、そう言うと召喚獣を出し、昇降口まで向かった。

「須川、部隊を率いて後に続け。」

「分かった。」

須川が、Fクラス5〜6人を連れて明久を追う。

「これで、4〜5人殺ればいいが・・・」

雄二はそう言うと、明久たちのところを観戦に行った。

そして・・・

「にがさない、ぞ・・・」

「・・・いらっしや〜い。」

机の隙間から出てきたAクラス生徒の召喚獣が、

ドカ!!!

バキ!!!

ボコ!!!

ぼこられて消滅していた。

「なるほど、一箇所に集めてボコれば、俺たちでもやれるってわけか。」

「分散していた敵が、一箇所に集まる、いい作戦ですね。」

俺と姫路が、雄二を賞賛する。

さすがは神童、といったところか。

「いや、そうでもないさ。にしても、靴まで履いてくるなんて真面目だな!!!」

雄二が笑った。

「そこはAクラスじゃからのお・・・。しかし、たとえAクラスでも、頭を使えばやれるんじゃないな。」

秀吉も、雄二の知能に感心する。

「ありがとよ。それじゃ、次の作戦だ。明久!」

「了解!」

再び、明久が召喚獣を連れてどこかへ消えた。

「・・・うらあ!!!」

そのとき、Aクラスが積んであった机を吹き飛ばした。

「そろそろ潮時だな。須川。」

「ああ。総員、撤退!!!」

ドドドド!!!

さすが、引き際が素晴らしいな。

「逃がすか!」

敵の生徒が、須川たちを追いかけようとした。

そして、自分のズボンで足を絡ませ、いきなりこけた。

「・・・何、ズボン下げてんだ・・・ってイヤン!」

横の生徒が、その生徒にツッコミを入れるが、その生徒も、すぐに餌食となった。

この事件の犯人は明久。

明久の召喚獣が、Aクラス生徒たちのベルトを抜いたからだ。

「・・・いや〜ん!!!」

ズボンのベルトを抜かれた男たちが、股間を抑えてたじろいでいる。

「いまだ、ズボンに気を取られているすきに倒すんだ!!!」

「・・・おお!!!」

ドドドド!!!

今まで逃げていた生徒たちが、踵を返して攻め始めた。

「・・・オラオラ!!!」

ドコ!!!

ドコ!!!

ドコ!!!

あっという間に5人ほどが戦死した。

「さすが明久の召喚獣、スピードなら無敵だな。」

雄二が、珍しく明久を褒める。

「・・・そうだ!!!」

そのとき、ムツツリが何かをひらめいたようだ。

「・・・明久、頼みがある!」

「どつたの、ムツツリー二?」

ムツツリが、土下座しながら明久に言った。

何か嫌な予感が・・・

「今度は女の子のブラで!!」

「「言うと思った・・・」」

ムツツリの切実な願いに、俺達は呆れた。

そのとき、

「よくもやってくれたね。今度は僕が相手だよ?」

「・・・ムツ!!」

ムツツリが、警戒態勢を取る。

「よし!!ムツツリーニ、僕に任せろ!!」

ヒュン!!

明久の召喚獣が、愛子に近寄る。

ヒュヒュヒュヒュヒュヒュ!!

「あれ??」

なんの手応えもなかったのか、明久が首をかしげる。

まあ、だいたい予想はつくがな。

どうせ・・・

「そんなことしても無駄だよ。だって僕、今日はノーブラだから。」

「「!!」」

「だろうと思った・・・」

まあ、愛子だからな。

俺たちが呆れている横では、明久とムツツリが血まみれで倒れていた。

「ま、まだ・・・」

ムツツリが立ち上がる。

「ついに僕と雌雄を決するときが来たね。ムツツリーニくん!!」

「・・・しゆう、漢字で書くと、雄と雌・・・ブラッ!!」

馬鹿が、自殺しやがった。

「い、今のはそんなつもりじゃ・・・」

愛子が、少し顔を赤くする。

「ムツツリーニ!大丈夫?」

「・・・大丈夫。奴は俺がこの手で倒す!!」

ムツツリが、いつになく意気込んでいる。

・・・まあいいか。

「吉井君、君は僕が相手するよ。」

「久保君!!」

あゝあ、何かあらゆる意味で面倒なのが来たな・・・

「よし、勝負だ!!」

明久が、召喚獣を突撃させる。

「・・・甘いよ、吉井君。」

「馬鹿、突撃したら死ぬぞ!!」

明久の召喚獣は完全に久保の真正面。

・・・明久、死んだな。

「ハアツ!!」

久保が明久をノックアウトする・・・と思ったが、

スルツ!

なぜかズボンを脱いだ。

「やべえ、本物の変態だ。」

ムツツリ以上に危険だぞ、こいつ!!

「君が望むなら、僕はどんな姿でも恥はしない!!」

「明久、逃げるぞ。」

「え?でも・・・」

「いいから!!」

俺は、無理やり明久を引っ張り、屋上へと連れていった。

第六十七話（後書き）

前半戦終了です。

後半、ついに優希の召喚獣の腕輪の効果が・・・！？

第六十八話（前書き）

試召戦争編、クライマックスです。

第六十八話

「みんな!!」

「明久君と謙太くん」

「アキ、謙太。」

久保の相手を秀吉に任せ、俺と明久は屋上へ来た。

そこでは、雄二、姫路、美波が戦況を観察していた。

「順調みたいだな。」

「ああ。」

雄二が、余裕の笑みを見せた。

「予想外の攪乱は、真面目な奴らには有効だ。」

「それってつまり、Aクラスみたいな真面目な人は型にはまった戦い方が得意だから、不意打ちとかに弱いってことだね。」

「そのとおりだ。明久も賢くなったじゃねえか。」

明久が上手くまとめたのを、雄二が素直に感心する。

「……やっぱり、ここにいた。」

そのとき、どこかから聞き覚えのある声があった。

「……霧島、久保、優子、優希。よくここがわかったな。」

「あれ、秀吉は!?!」

Aクラスのトップ5のうちの4人が揃った。

ここが最後の戦場だな。

「秀吉君は、おそらく佐藤さんと戦っているよ。」

久保が、メガネを直しながら言う。

「ここでしたら戦況がよく見渡せますし、謙ちゃんならここにいる

と思いましたが!」

優希が、得意げにVサインをする。

「それにしても、良くこんな手に手の込んだ作戦を考えられるわね。

正直言って感心するわ。」

優子が、俺たちを見ながら言った。

「正直言って感心するわ。」

「うちの代表は、腐っても神童だからな。」

「・・・おい、それどういう意味だ？」

雄二のガンをさらりと受け流し、俺は身構えた。

「さて、ここが正念場だな。」

「そうだね。」

明久も、俺の横に並ぶ。

「ウチだって、やるときはやるんだから！」

「Fクラスがおバカさんの集まりじゃないことを、証明してみせませす！」

美波、姫路も構える。

「ここが最後の戦いよ、謙太。」

「絶対に負けません！」

「吉井君。全力で相手するよ。」

「雄二、私が倒してあげる。」

相手も、準備万端だ。

「これで最後だ。勝負！！」

「承認します！」

高橋先生が、総合科目のフィールドを展開する。

「・・・試験召喚獣、サモン！！」「」

同時に召喚獣が姿を現す。

「すごい点数。D、C、Bと変わらないんじゃない？」
優子が感心する。

ちなみに点数は・・・

Fクラス、総合科目 吉井明久 / 1776、姫路瑞希 / 4553、
島田美波 / 2245、坂本雄二 / 3654

Aクラス、総合科目 霧島翔子 / 4724、木下優子 / 3887、
黒崎優希 / 4422、久保利光 / 4468

「あれ？謙太は？」

俺の召喚獣がいないことに、明久がハテナを浮かべる。

「もうすぐ来る。」

キユウウウン！！

俺の目の前に、光速で何かが降りてきた。

ドオオオン！！

「なにこの登場方法・・・」

「ああ、最後だしな。ちよつと変えてみた。」

俺の召喚獣の戦闘アニメのような登場方法に、優子が若干呆れた。

「んじゃ、シンクロつと。」

俺が、砂煙で見えない召喚獣とシンクロする。

シュウウ。

「なにこの点数・・・」

「有り得ない・・・」

砂煙が消え、ようやく見えた俺の召喚獣の点数に、辺りは固まった。

Fクラス、総合科目、佐藤謙太 / 6214

「・・・六千点オーバー・・・」

「ワリいな。今回はマジで本気だ。」

今回は、本気でテストを解いた。

特に、今までであえて解かなかった保健体育は、朝早く勉強をしたりして、500を超えた。

「さて、これからが本番だ。」

俺は優子、優希を見た。

「お前ら二人は、俺の相手だ。」

「OK、初めからそのつもりよ。」

「容赦しませんからね!!」

俺達は、明久たちから少し離れたところで、戦闘に入った。

「喰らえっ、衝撃波!!」
インパルス

俺が、先制攻撃を放つ。

「甘いわ!!」

優子が、それをかわしつつ、距離を詰めてくる。

「後ろがら空きです!」

そう言われて振り返ると、優希が放った無数の光の矢が飛んできた。

「まだまだ!!」

俺は、剣で全てを弾き落とすし、二人を正面に置いた。

「流石に、2対1は厳しいか・・・?」

「当たり前よ! 私たちも練習したんだから!!」

「それじゃ、2対2にさせてもらう!」

俺は、優子たちから離れ、口笛を吹いた。

「なっ・・・謙太、なんのつもりなの!??」

「点数が一気に2000点も減りましたよ!??」

二人は、俺の点数が大幅に減ったことに驚いている。

「まあ見てな。」

口笛で、ドラゴンが現れた。

しかし、出てきたのはいつものちびドラゴンとは全く雰囲気の違い、本物のドラゴンだった。

シュッ!

俺は持っていた槍、剣を捨て、ドラゴンに飛び乗り、額に手を乗せ

た。

「何をやる気・・・？」

「とりあえず、スキありです！！」

優希が、光の矢を放つ。

「・・・シンク口率150%、開放！！」

俺は、自分の持てる力を全開にした。

そして、優希が放った光の矢を受け止める。

「なんですと?!」

優希は、突然の出来事にたじろいでいる。

「さて、こつからは本気も本気、超本気だ！」

俺はそう言って、優子に突撃した。

「返り討ちよ!!」

優子が、ランスを俺に向かって突き出す。

しかし、優子のランスは空を切り、そして優子にパンチの連撃があ
たった。

「早い・・・」

優子は、俺のスピードに驚いている。

「優希、援護お願い!!!」

「無理です!!」

優希は、今やBクラス並みのドラゴンに苦戦をしている。

「優子、よそ見は禁物だ!!」

俺は、優子の一瞬のスキを付き、優子の槍を弾いた。

「あつ!!」

俺は、手にバスターソードを形成し、優子に突きつけた。

「・・・チエックメイトだ。」

「まだです!!」

優希が、スキを付いてドラゴンを倒し、俺に矢を放った。

「クッ!!」

俺の肩を、光の矢がかすり、俺の意識が飛びかける。

やべえ、フィードバックが尋常じゃねえ・・・

「まだまだここからよ!!」
優子が槍を、優希が弓を構え直す。

Fクラス、総合科目、佐藤謙太 / 4082

Aクラス、総合科目、木下優子 / 2209、黒崎優希 / 3004

「それじゃ、第2Rと行くか。」

俺も剣を構え直した。

ドオオオン!!

「タアツ!!」

そのとき、Aクラスの増援を抑えていた明久の召喚獣が消え、一気に敵がなだれ込んできた。

それと同時に、それまで道をふさいでいた鐘が、一気にこっちに転がってきた。

「ヤバイツ!!」

・・・ここらへんは危険地帯。

あんな鐘が転がってきたら・・・

ドドドドドドド!!

予想通り、壁が崩れた。

「キヤアツ!!」

優子と優希が、鐘に巻き込まれ、下に落ちた。

「優子、優希!!」

俺は、二人の手を掴んだ。

「謙太……!!」

「謙ちゃん……」

クツ……

さすがに二人はキツイ……

「チェンジ!!」

俺は、召喚獣と入れ替わった。

ズキン!!

「ウウツ……」

この前よりもさらに酷い頭痛が来た。

「ピーー!!」

頭痛……そんなのはあとだ!!

笛を吹き、ドラゴンを呼び出す。

「巨大化!!」

ドラゴンが巨大化し、俺がそれにまたがる。

ガシツ!!

二人をつかみ、引き上げる。

……さすがは召喚獣だな。

俺は、二人を安全なところに上げた。

「大丈夫か、ふたりとも……」

俺は、召喚を解除し、二人に近寄った。

「うん、大丈夫です。」

優希は、元気そうに手を振った。

「優子も、だいじょう……」

「怖かったあ!!!」

俺が優子を見ると、優子は、涙や鼻水をいっぱい垂らして泣いていた。

そこには、優等生の殻をかぶった優子ではなく、家にいるときの、腐女子でズボラで怖がりな優子がいた。

「優子……」

俺は優子に近づき・・・

スッ

「!?!」

優子にキスをした。

「怖かったんだな、もう大丈夫だ。」

俺は顔を離し、優子の頭に手を置いた。

「グスッ、け、謙太あ、ありがどあ・・・」

優子は、涙目のまま俺を見る。

「うっっ・・・」

優希は、少し不服そうだが、まあ状況は理解できているらしく、何も言わなかった。

「優子、おれは・・・」

「Aクラスの勝利です。」

「え？」

俺が明久たちを見ると、Aクラスの・・・佐藤(?)が雄二に止めを指していた。

「やった・・・」

Aの方の佐藤は、相当空気が読めないらしく、小躍りして喜んでる。

「「「・・・」」」

こうして、A対Fの試召戦争は、Aクラスの勝利で幕を閉じた。

第六十八話（後書き）

謙太「この決着の付き方、何かいまいちだよな・・・」

優希「そんなことより、謙ちゃん、私にもキスするです!!」

謙太「なんの脈絡もなく要求するのはやめろ!!」

優希「じゃ、優子ちゃんだけキスするのはずるいですから私にも!!」

謙太「意味わからねえ!!」

愛子「あはは、收拾つかないみたいだね、ムツツリー二君。」

康太「・・・しょうがない。」

愛子「それじゃ、僕たちが終わらせようか?」

康太「・・・良い案。」

愛子「それじゃ、」

「・・・次回をお楽しみに。（）」

第六十九話 七夕編（前書き）

一日遅れの七夕編です。

第六十九話 七夕編

「・・・全く。」

俺は、ため息をつきながら帰宅道を歩いていた。

横には優希が並んで歩いている。

「とんだKYもいたもんだ。」

「・・・ホントですね。」

優希は、口を尖らせながら言った。

「優子ちゃんの次は私のハズだったのに。」

「・・・そのつもりはなかった。」

「なんですと?!」

優希が、驚いたように言う。

「・・・そういえば、今日は七夕だな。」

俺は、これ以上の言及を気だるく思い、強引に話題を変えた。

「・・・そうですね。」

優希は、キスを諦めたのか、空を見上げていった。

「七夕・・・4年前か。」

「確かに、こうやって一緒に空を見るのは、あの時以来ですね。」

俺は、4年前、中二の時の七夕を思い出した。

4年前

「・・・」

俺は、痛む脇腹をさすりながら、家近くの川原に座っていた。

「なに黄昏てるんですか?」

そこに、偶然通ったらしい優希が、声をかけてきた。

「いや、星が綺麗だと思ってな。」

俺は、適当にごまかしつつ空を見た。

「おお、なかなかロマンチストですな。」

優希は俺の言葉を聞き、空を見上げた。

「そういえば、今日は七夕でしたね。」

「そうだったな・・・ツツ！」

俺が上を向こうとしたとき、さつき食らった蹴りの痛みが首に響いた

「・・・大丈夫ですか、謙ちゃん？」

「大丈夫、大したことはねえ。」

「・・・またいつもの奴らですか。」

優希が、怖い顔をしながら言った。

「まあな。こうなったら、織姫と彦星に願い事でもするか・・・？」

俺は、茶化すように言い、空を見上げた。

「・・・謙ちゃんは、なんで反撃しないんですか？」

反撃すれば勝てるのに・・・

優希はそう続けた。

「あんな奴らに手をだして、俺が面倒な目に合うのは嫌だからな。」

・・・そんなのはただの言い訳、いや、これが俺の心を表す正しい

答えなのか？

俺は、優希から目を逸らした。

優希は、俺を正面から見つめているのだろう。

刺すような視線を感じる。

俺は、無言でふらりと立ち上がった。

・・・俺が喧嘩を避ける理由、それは実に簡単だった。

目立つ奴になりたくない。

そういう面倒な立場になりたくない。

他人に干渉したくないし、されたくない。

要するに、地味に生きてえだけなんだ。

「嘘です、だったら謙ちゃんは、いつも私のことを助けてくれるはずありません。」

優希は、俺の心を見透かしたのか、そう言った。

・・・余談ではあるが、優希はなぜか、よく男たちからかわれる。

その度に俺がボコボコにしている、それがいじめられる原因の一つになっている。

「・・・お前を助けたのはまた別、あれは俺のストレス発散がわりだ。」

これは嘘だ。

ストレスなんて、もともとあつてないようなもの。

さらに言えば、俺にとって、イジメなどストレスですらない。

「じゃあなんで反撃しないんですか。」

優希は、顔をずいと近づけてきた。

「・・・」

答えられなかった。

優希の時は、反射的に体が動くと言ったらしいのか。

それは防衛本能であり、そこに俺の思想その他は存在しなかった。しかし、俺の時は違う。

どうせ殺されないのだし、身を守る必要もなかった。

痛みはあるが、そのうち飽きる。

ただそれを待てばいいだけだ。

「もういいです。」

優希は、呆れたように吐き捨て、さっと立ち上がった。

「これからは、自分の力で全てどうにかします。」

「・・・優希？」

「だから、もうこれからは手を出す必要はありません。」

「おい、ちょっと待て。」

優希は、キレ気味に続ける。

「これ以上私に言わせる気ですか？」

「俺はただ・・・」

「謙ちゃんなんて、大嫌いです！」

パチン

「!？」

優希はそう言うと、走って家に帰った。

追いかければ追いついただろうが、俺は追わなかった。

「・・・」

俺は、平手打ちされた頬を、たださすっていた。

「そういえば、あのあとはめつきりいじめは減りましたよね。」

「その代わり、友達も全部いなくなっただけだな。」

あの頃俺にとって友達と呼べたのは、優希の取り巻きの女子だけだった。

「あの時の話は、結構意味不明でしたよね。」

「ああ、思い出すだけで恥ずかしい。」

恥ずかしいのはむしろ、俺の考えていたことだが。

あのころはホントにテキトーだったな。

「それじゃ、とりあえずお願いしましょうよ。」

「そうだな。」

俺と優希は、空を見ながら祈った。

「何をお願いしましたか？」

優希が、興味深そうに聞いてきた。

「ん？内緒だ。願い事は、他人に言ったら効果薄れるしな。」

「そうなんですか。」

優希は、さほど残念でもなさそうに言った。

ちなみに、俺の願いは・・・

『文月学園にいる間、優希、優子、明久たちと仲良く過ごせますように。』

第六十九話 七夕編（後書き）

優希「過去が明らかになりましたね。」

謙太「そういえば、雄二と翔子の過去が見てえな。」

優希「たしかにそうです。」

謙太「まあ、それはまたの機会にするとして、それじゃあ恒例の・・・」

「次回をお楽しみに！！」

第七十話 Mission impossible bak a 編(前書き)

ここからは、DVD特典編となります。

第七十話 mission impossible bak a 編

ミッションインポッシブルバカ。

実行不可能な指令を受け、頭脳と体力の限りを尽くしてこれを遂行する、プロフェッショナルたちの秘密機関である。

これは、そのエージェントの中でもぴかーの実力を持つあるエージェントの物語である。

・・・

俺はいつもの通りに学食へ来ていた。

「・・・」

ポチ。

食券を買うために、券売機へと行き、ボタンを押す。

ガコン！

「・・・おお！」

食券が落ちてきたとは思えない鈍い音がした。

・・・指令だ。

俺は、指令の入ったバッグを隠しながら、屋上へと向かった。

バッグには、いつものようにテープレコーダー、それにターゲットの写真が入っていた。

・・・俺は、ターゲットを確認しつつテープを流す。

「おはよう、ムツツリー二君。」

テープから、福原先・・・司令の音が聞こえてくる。

「その人物は、文月学園2-Fクラス、木下秀吉。」
俺は、写真を確認する。

そこには、間違いなく俺の友人、木下秀吉が写っていた。

「校内人気ランキングにおいて、男性部門、総合部門、共に1位に輝いたばかりか、新設された秀吉部門においてまで一位を獲得した超絶的な人気を誇る人物である。」

・・・秀吉部門って、秀吉以外誰がいるんだ？

・・・まあ、福原・・・司令がないからツツコミようもない。

「とあるルートの情報によると、組織票まで含めれば、女性部門においても一位を獲得したと言われる要注意人物である。」

・・・男が女性部門で一位を取るとは、世も末だな。

・・・あれ？末？

「そこで今回は、この木下秀吉のお、お宝映像を、入手して欲しい。」

司令の声が興奮気味になる。

・・・秀吉は友人だが、当局の命令ならしょうがない。

「例によって、君、もしくは君のメンバーが捕らえられ、シバキ倒されても当局は一切感知しないのでそのつもりで。」

・・・

そんなの、いつものことだ。

「なお、このテープはお約束通り自動的に消滅する。」

・・・成功を祈る。

その言葉を最後に、テープは光を発しながら消滅した。

ドオオン！！

屋上に、盛大な爆発音が響きわたる。

「任務了解。」

俺は、煙にまぎれ、隠密スーツへと着替えを済ませ、出撃した。

昼休み。

「・・・いい写真を撮るには、まずは対象の観察。」

「・・・」

俺は、無言で秀吉を追跡する。

そのとき、

どん!!!

「「「キヤアツ!!」「」」

秀吉は、それぞれ曲がり角から出てきた島田、姫路にぶつかつた。

その時に運悪く・・・いや、運良く持っていた牛乳などが体中に掛かり、びしょびしょになつた。

・・・なかなかエロい。

思わず鼻血を垂らしたが、そんなことはどうでもいい。

「・・・チャンス到来。」

俺は、その場を後にした。

俺が潜んだのは、女子更衣室。

「ここで待ち伏せていれば、必ず着替えに現れる。」

俺は、息を殺して対象を待った。

ガチャ!

「・・・きた!!」

入ってきたのは、姫路と島田だつた。

「・・・チツ!!」

思わず舌打ちした。

ターゲットは秀吉のみ、雑魚に用はな・・・

「・・・なっ!?!」

突然、俺のセンサーが反応した。

「着替え、どうしましょう……」

「体操服でいいんじゃない？」

センサーが反応したのには訳があった。

外で二人が着替え出していたからだ。

……こんな時、ムツツリ商会の掟は非情だ。

掟第一条、作戦実行のためには情けを捨て、どんな苦難も乗り越えなくてはならない。

俺は、流れ出る鼻血を必死で抑えながら、二人がいなくなるのを待った。

「……!!」

ここで声を出しては全ての苦労が水の泡だ。

「しかし、瑞希ってほんと胸が大きいわよね。」

「そ、そんなことないですよ。普通です。」

島田の問いに、姫路が困ったように言う。

「それじゃあ私は普通じゃないっていうの？そんなに大きなもの自慢げに下げてて、どこが普通よ。」

「自慢げ……!!」

俺は、ロッカーの小さい通気口から見える景色に、目を奪われていた。

「自慢じゃありませんよ！これ、結構面倒なんですよ！！大きいとブラの種類もないし……」

「ブラが入らない……!!」

俺はもう、あふれる鼻血を抑えることができなかった。

「小さいのだってないわよ!!」

島田が必死で反論する。

……島田、お前には興味ない。

「お互い大変ですね。」

「うちのは大変小さいっていうの!？」

島田が、姫路のブラを外した。

「キャツ!!」

「・・・!!」

俺は、ただただ驚愕しながらその光景を眺める。
鼻からは、鼻血がとめどなく流れる。

「み、美波ちゃんだつて!!」

姫路も、島田のブラを取るといふ反撃に出る。

「・・・なんだこの空間。」

下手したら百合が見えるぞ。

しかし、二人の生お○ぱいを目にしたせいで、俺の鼻のダムは、既に決壊していた。

どどどどど!!

「・・・鼻血で、外に押し出されるっ!!」

バン!!

「「きゃあ!!」」

俺は、二人に見つかり、しばき倒された。

「・・・ごちさうさまです。」

次の日。

再び指令が下りた。

「おはようムツツリー二君。昨日は残念だったね。今回のターゲットは、なぞの転校生、黒崎優希だ。」

「・・・(ブーツ!)」

俺は、ターゲットの写真を見て卒倒しかけた。

「・・・そういえば、まともに見たことなかった。」

「彼女はまだ学校に入って間もないというのに、既に女性部門第三位という快拳を成し遂げている。」

ちなみに、二位が霧島、一位が秀吉だ。

「「そこで、今回は彼女の衝撃的な写真を撮って欲しい。」

確かに、まだターゲットの品揃えは多くない。

ここがチャンスだと、俺は意気込んだ。

「なお、彼女には護衛がついているらしい。その点を考慮しながらやってくれ。それでは、健闘を祈る。」

ドオオン！！

「・・・任務了解」

俺は、いつものように着替え、出撃した。

タッタッタッタッタ・・・

俺は、更衣室に向けて急いでいた。

昨日のことで反省した俺は、作戦を変えた。

あらかじめカメラを仕掛けることにしたのだ。

・・・Aクラスの水泳はあと15分後。

それまでにカメラを仕掛けなければ！！

「よオ、ムツツリ。」

そのとき、俺のいく手を遮る奴がいた。

「・・・その声、謙太か！！」

「ワリイな。今回の俺は、どうやら優希の護衛役らしい。という訳で、優希の写真は取らせねえ。」

そう言つて、謙太は身構える。

・・・形勢は不利か。

俺は、撤退を考えた。

「ムツツリー二！！」

そのとき、明久が俺のもとに走ってきた。

「・・・どうした？」

「僕も手伝うよ。アウェイクン!!」

・・・フィールドは出ない。

「あ、あれ?!」

明久は、起動ワードを繰り返している。

「・・・お前、腕輪壊した。」

「そうだった!!」

明久は、絶望にうなだれている。

「・・・邪魔だて無用。これは俺の戦い。」

俺は明久にそう言い、謙太に向かって突撃した。

「勝てると思うのか？」

謙太が、足払いで俺の足を狩りに来る。

俺を傷つけるつもりはないようだ。

・・・そこだ。

タン!

「なっ!!」

俺は、謙太の足を飛び越え、そのまま更衣室へ向かった。

「チツ、待て!!」

「謙太の相手は、この僕だ!!」

「・・・ツ!!明久!!テメエ!!」

明久が、謙太の足止めを請け負った。

すまない、明久。

俺は、振り返らずに走り抜けた。

プールの開始には間に合わなかったが、更衣室に到着した。

俺は、明久が犠牲になっている間にカメラを仕掛け終え、その場を後にした。

そして昼休み。

俺は、カメラを回収するために女子更衣室に向かった。

「……まさか、謙太が張っているなんてことは……」

俺は、少しの不安を覚えながら、更衣室に到着した。

「……よし。」

俺は、カメラを回収し終え、教室に撤退しようとした。

「そうは問屋が下ろさねえ。」

そのとき、再び謙太が現れた。

「次はさつきみたいにかかない。」

「……また逃げればいいだけ。」

俺は、猛スピードで駆け出した。

「残念ながら、それは無駄だ。」

そう言つて、謙太が何かを取り出した。

「!!!」

謙太がもっていたのはSDカードだった。

「こいつが無くて逃げれるのか？」

「……」

これで、戦うしかなかった。

「さて、鉄人。」

謙太は、なぜか鉄人を呼んだ。

「鉄人じゃない、西村先生と呼べ。」

「保健体育のフィールド、お願いします。」

「全く……承認!!!」

鉄人の一言で、フィールドが展開される。

「……何故保健体育を？」

「お前との保健体育勝負では、黒星しかついてねえからな。」

俺が聞くと、謙太は笑って返した。

「……サモン」

「サモン!!!」

お互いに、召喚獣を出す。

Fクラス、保健体育、土屋康太 / 613

Fクラス、保健体育、佐藤健太 / 482

「・・・負けない。」

「こっちのセリフだ。」

俺は、いきなり腕輪を使った。

「・・・加速。」

ヒュン！

「させねえ。トルネイヴスピン!!」

謙太が、回転して竜巻をつくる。

・・・これでは近づけない。

「スキあり!!」

健太の召喚獣の竜巻から、小型の竜巻が分離し、俺に直撃した。

「・・・クツ」

俺の点数が減少する。

「止めだ!!」

謙太が、竜巻に巻き込まれている俺に槍を投げた。

俺は、ギリギリのところまでそれをかわす。

「しぶといな。」

「・・・当たり前。」

俺は、なんとか距離を取り直した。

ヒュンヒュンヒュン!!!

俺が無数の手裏剣を投げる。

「甘い！」

謙太は、それを全てはじく。

「・・・そんな重そうなブレードで、よく弾けるな。」
しかし、スキありだ。

ビュン！

「なっ!？」

謙太の召喚獣が硬直した一瞬を狙って、俺はケンタに小太刀での斬撃を浴びせた。

「がはッ!！」

謙太の点数がゼロになる。

「・・・俺の勝ちだ。」

俺はそう言って、謙太からSDカードを奪った。

・・・ミッション、コンプリート。

俺は、鉄人を一瞥し、教室へ帰った。

・・・ちなみに、謙太は、フィードバックで気絶していた。

第七十話 mission impossible bak a 編(後書き)

謙太「完敗だ・・・」

明久「こうして、ムツツリ商会に新たな商品が追加されたのでした。めでたしめで・・・」

優希「全然めでたくないですよ!!」

明久「え? まあいいや。次回をお楽しみに!!」

優希「この言葉まで取られた!？」

明久「ところで、それ幾ら？」

康太「動画だから、このくらい。」

明久「高い!! けど買った!!」

優希「やめてください!!」

優子「全く、頭が良くなったのに相変わらずね。」

愛子「あはは・・・改めまして次回をお楽しみに。」

第七十一話 女装コンテスト編（前書き）

今日は余力が残ったのでもう一個・・・
その名の通り、女装コンテスト編です。

というか、こんなのが1記念すべき100話目でいいのか・・・？

第七十一話 女装コンテスト編

優子目線。

「文月学園主催、女装コンテスト！」

ワー、ワー

何故か突然始まったこの企画。

会場は、かなり盛り上がっている。

「さて始まりました、文月学園らしいこの企画。時期はいつなのか、目的はなんなのか、場所はどこののか、そういった細かいところは全て無視して進めていきましょう。」

司会の新野さんが言う。

謙太曰く、「新野は危ない」らしいけど、どこが危ないのかわからない。

「解説を務めますのは、私新野すみれと、」

「学年主任の高橋洋子です。」

「よろしく願います。」

司会席の新野さんと、高橋先生が礼をする。

高橋先生、ノリいいからな・・・

「早速行ってみましょう。」

新野さんの言葉で、正面のディスプレイに姫路さん・・・の男装が映されていた。

・・・マジ？

この前とった写真って、このための物だったの？

「それでは、エントリーNo?。」

新野さんの言葉で、私は我を取り戻す。

そうだ、私は・・・

審査員だったんだ。

私は、ステージに集中した。

「卑怯、変態、女装趣味と、三拍子揃った外道、2 - B代表根本恭司さんです！」

ブー、ブー

会場の全員が拒絶反応を起こす。

もちろん、私も。

「いや、これは思った以上に汚い絵ですね。しよっぱなから、誰得？な企画になってきました。」

「そんなこと言っではいけませんよ、新野さん。彼の変態としてのプライドを傷つけたらかわいそうです。」

「変態としてのプライドなんてものは、むしろズタズタにされるべきだと思いますが、気にしないでいきましょう。」

いや、あなたは正しいわ、新野さん。
まったくもってその通り。

こんな女装趣味の変態、プライドズタズタにした挙句、体もズタズタにしてこの世から消したいわ。

消せないならせめて・・・

ポチ

ガコン！！

これ以上の出演機会をなくしてあげる。

私は、思いつきりあいつをにらんだ。

「ちなみに、審査員は点数をつける代わりに、出演者を強制的に退去させる権限を持ちます。」

「審査員が、これ以上見るに耐えないと思ったら、ボタンを押すんですね。」

「はい、そうなります。」

司会の二人が、私たちについて説明をする。

私たちというのは、私と久保君だ。

・・・共通点は何？

「それでは気を取り直して、次いきましょう。」
新野さんがそう言った。

ちなみにディスプレイには島田さん……の男装。

「エントリーNo?。Fクラス代表、坂本雄二さんです。」
ええ、なんか気持ち悪い。

これは、どうしたら……

私は代表を見た。

代表は、ものすごい形相で私をにらんでいる。

押さないほうがいい……

ガタン!!

「ええ?!」

気づいたときには、久保君がスイッチを押していた。

「馬鹿、空気読みなさいよ!!」

代表は、とても残念そうに下をむいた。

「え?君はあんなのが好きなのかい?」

「そういうわけじゃないけど、代表!!」

「ああ、そういえばそうだったね。失念していたよ。」

久保君は、平然としている。

……まあ、私と同じ立場なら落とすけど。

「まあ、しょうがないわ。」

私は、ステージを見た。

ちなみに司会の皆さんは、

「……平均点以下、赤点ということは、補習の必要がありそうですね。」

「いえ、そんなものは必要ないと思います。」

「後で彼に、あの格好のまま職員室に来るように伝えてください。」

一緒にどこが悪かったか考えましょう」「
「こ、これほど余計なお世話という言葉が体現しているセリフを、
私は聞いたことありません!」
なんて、バカ丸出しの会話をしていた。
高橋先生、やっぱりノリがいいな・・・

「さて、そろそろ次に行きましょう。」
新野さんの言葉で、ディスプレイの画像が切り替わる。
ちなみに次は・・・代表?!

代表、なんか丸くなったな・・・
「エントリーN0?、本日は撮る側ではなく撮られる側。ムツツリ
商会の若き経営者、土屋康太ことムツツリー二さんです!」
いや、ムツツリー二こと土屋康太さんでしょ・・・
「・・・」

オオ〜!!

客席から、初めて歓声上がる。

「これはレベルが高い、普通に可愛いです。」

「土屋君は小柄で無口ですからね、雰囲気も出ているのでしょう。」
確かに、普通に可愛い。

これならまともかな。

「歩きましたね〜」

「審査員も、これなら見ていられると思ったのでしょね。」
先生が、私たちの分析をしている。
・・・何か恥ずかしい。

まあ、可愛かったのは本当だけど。

「・・・」

カチヤ

久保君が、メガネを直した。

・・・それにしても、久保君が少し照れてる気がするの・・・気のせいかな？

「それでは次に行きましょう。」

またディスプレイの画像が変わった。

次の男装は愛子だった。

・・・普通に似合っている。

「エントリーNo?、文月学園を代表するバカ、吉井明久さんです

!!!」

おお〜!

またもや歓声上がる。

確かに似合ってる。似合ってるのは確かだけど・・・

「・・・!!!」

久保君のその態度、ってか姿勢が気に入らない。

・・・何食い入るように見てるのよこいつ。

不愉快極まりないわ。

BLは美少年同士しか許されないの!!!

それに、そんなことしたらAクラスのイメージが崩れるじゃない。

ポチ

私はいろいろ考えた結果、ボタンを押すことにした。

ガタン!!!

吉井君と同時に、久保君のテンションも著しく下がった。

まあ、しょうがないわよ。

「意外です。結構可愛かったのに落とされました。」

流石に、これは無理があったのかな・・・

「審査員席の久保君が、震えながら下唇を噛んでいますね。」
「ヤバッ。気づかれた?!」

「何故でしょう。今の久保君からは、学年次席の貫禄が微塵も感じられません。」

「……まあそうでしょうね。」

「木下優子さんは、Aクラスの威厳を保つためにボタンを押したのかもしれないね。」

先生が、私をフォローしてくれた。

まあ、半分は自分の趣味なんだけど。

「では、次に行きましょう。」

ディスプレイの画像が変わる。

そこに写っていたのは……優希?

男物のシャツのサイズがあっていない。

……まあ小柄だしね。

けど、胸だけパンパンなのが無性に腹立つ。

「エントリーナンバー?、元学年主席にして今はFクラスに居るといふ、特異な経歴の持ち主。佐藤健太さんです」

オオッ!!!!!!

今日一番の、大きな歓声が上がった。

「なんか、女として負けた気分ですね。すごく可愛いです。」

新野さんが、うつむきながら言う。

そつえばこの人、謙太ファンだっけ……?

「確かに、謙太くんは女顔ですからね、とても女装が似合うと思います。」

高橋先生も賛同した。

てか、ものすごく可愛い。

何か普通に女の子だ・・・

謙太は、シックなドレスに身を包み、苦笑いを浮かべながら歩いている。

「・・・!!」

そのとき、久保君がさっきの腹いせに、ボタンを押そうとした。

「・・・久保、何やってるの？」

「・・・」

私は、久保君を人ならみして、再びステージを見た。

・・・私が男なら惚れてる。

「いや、見事でしたねぇ。」

「男女ともに魅了されていましたね。」

司会の二人が、嬉しいことを言ってくれた。

「それでは、最後のお一人です。」

また、ディスプレイの画像が切り替わった。

そこに写っていたのは私の男装・・・てか秀吉じゃね、これ？

「エントリーN.O?、本命中の本命と呼ばれる・・・」

バン!!!

私は、気づいたときにはボタンを叩き壊すほどの勢いで押していた。
秀吉の女装。私。

そんなのを見せてたまるかっ!!

「・・・はい、それでは、これで文月学園主催女装コンテストを終わります。」

「ありがとうございます。」

こうして、このコンテストは終わった。

第七十一話 女装コンテスト編（後書き）

謙太「俺の女装・・・？」

優希「すっごく可愛かったですよ！」

優子「確かに、思わず見とれちゃった。」

謙太「お、おう。ありがとう・・・」

愛子「あれ？珍しくてれてる？」

謙太「当たり前だ！！女装だぞ！！？」

優子「というかあんたの顔、女装するために生まれてきたような顔ね。」

謙太「そんな顔いらねえよ・・・」

愛子「あはは。そんなことないよ。それじゃそろそろ終わろうか。

せーの！」

「次回をお楽しみに！！」

第七十二話 キャラ相性診断(前書き)

100話記念。

ちょっとやってみました。

第七十二話 キャラ相性診断

貴雅さんの活動報告みて知ったキャラ相性診断をやってみました。
ベスト5、ワースト5と主要キャラだけ載せてます
結果は次のとおりです。

- 1位 霧島 翔子 > A < 相性：100 % (俺の嫁)
第一印象「すばしっこい」
- 2位 布施 文博 > 教師 < 相性：89 % (ツンデレ)
第一印象「苦勞人」
- 3位 木下 優子 > A < 相性：88 % (趣味友達)
第一印象「がんばりや」
- 4位 姫路 瑞希 > F < 相性：82 % (お笑いコンビ)
第一印象「清潔」
- 5位 小山 友香 > C < 相性：78 % (あなたが後継者)
第一印象「高貴な人」
- 13位 工藤 愛子 > A < 相性：61 % (禁断の関係)
第一印象「遊び人」
- 16位 坂本 雄二 > F < 相性：51 % (あなたが弟子)
第一印象「わがまま」
- 18位 西村 宗一 > 生活教師 < 相性：41 % (いじられてる)
第一印象「ネタな人」
- 19位 島田 葉月 > 妹 < 相性：40 % (相談相手)
第一印象「貧乏くさい」
- 20位 吉井 明久 > F < 相性：38 % (相棒)
第一印象「らんぼうもの」
- 21位 土屋 康太 > F < 相性：38 % (相棒)
第一印象「インパクトが強い人」

23位 吉井 玲>姉<……………相性：37 %（あなたが師匠）
 ……第一印象「おとぼけ」
 25位 須川 亮>F<……………相性：33 %（趣味友達）
 ……第一印象「気品のある人」
 26位 根本 恭二>B<……………相性：30 %（いじめられて
 いる）……………第一印象「へたれ」
 28位 清水 美春>D<……………相性：28 %（あなたがポケ
 役）……………第一印象「クールな人」
 33位 島田 美波>F<……………相性：11 %（宿命のライバ
 ル）……………第一印象「インテリ」
 34位 木下 秀吉>F<……………相性：7 %（あなたが_サS）
 ……第一印象「社交的」
 35位 久保 利光>A<……………相性：5 %（実験台にされて
 る）……………第一印象「寂しがり屋」
 36位 藤堂 カヲル>学園長<……………相性：2 %（いじめら
 れている）……………第一印象「テクニシャン」
 37位 中林 宏美>E<……………相性：0 %（対立関係）
 ……第一印象「カジュアルな人」

…意外に正確な気がする。

霧島さんが嫁か…羨ましいな。

秀吉と美波は残念だけど、久保君は当然かな。

ちなみに、努力次第で上がるキャラは…

工藤 愛子……………相性：61	77	%（禁断の関係）
坂本 雄二……………相性：51	56	%（あなたが弟子）
島田 葉月……………相性：40	45	%（相談相手）
吉井 明久……………相性：38	59	%（相棒）

吉井 玲……………相性：37 51%（あなたが師匠）
 久保 利光……………相性：5 16%（実験台にされてる）

・・・こんな感じですよ。

愛子と雄二と明久が上がったのは嬉しいですね。
 という訳で、ついでに優希もやってみると・・・

1位 小山 友香 > C <……………相性：86 %（幼馴染）……………第
 一印象「地味な人」

2位 吉井 玲 > 姉 <……………相性：85 %（あなたが後継者）

……………第一印象「ウソつき」

3位 須川 亮 > F <……………相性：84 %（相談相手）……………

第一印象「シャープな人」

4位 布施 文博 > 教師 <……………相性：84 %（救世主）……………

……………第一印象「気品のある人」

5位 古河 あゆみ > E <……………相性：82 %（相談相手）……………

……………第一印象「ひっこみじあん」

6位 姫路 瑞希 > F <……………相性：81 %（趣味友達）……………

……………第一印象「頭脳明晰」

7位 工藤 愛子 > A <……………相性：80 %（あなたがツッコ

ミ役）……………第一印象「レトロな人」

9位 久保 利光 > A <……………相性：74 %（あなたが弟子）

……………第一印象「元気はつらつな人」

12位 坂本 雄二 > F <……………相性：63 %（尊敬）……………

第一印象「エスニック風」

19位 島田 葉月 > 妹 <……………相性：45 %（相棒）……………

第一印象「ネタな人」

20位 西村 宗一 > 生活教師 <……………相性：43 %（あなた

が師匠）……………第一印象「泣き虫」

21位 藤堂 カヲル > 学園長 <……………相性：41 %（相談相

- 手) …… 第一印象「紳士的」
- 24位 土屋 康太 > F < …… 相性：35 % (憧れの関係)
- …… 第一印象「うるさい人」
- 25位 清水 美春 > D < …… 相性：35 % (あなたがパシリ役)
- …… 第一印象「さわやか」
- 28位 吉井 明久 > F < …… 相性：29 % (あなたがパシリ役)
- …… 第一印象「ブラジャーハンター」
- 29位 霧島 翔子 > A < …… 相性：29 % (あなたがボケ役)
- …… 第一印象「電光石火」
- 30位 根本 恭二 > B < …… 相性：28 % (微妙な関係)
- …… 第一印象「ブラジャーハンター」
- 31位 島田 美波 > F < …… 相性：25 % (嫉妬) ……
- 第一印象「おてんば」
- 33位 高橋 洋子 > 学年主任 < …… 相性：22 % (微妙な関係)
- …… 第一印象「古風」
- 34位 小暮 葵 > 3年 < …… 相性：17 % (微妙な関係)
- …… 第一印象「紳士的」
- 35位 木下 秀吉 > F < …… 相性：13 % (実験台にされてる)
- …… 第一印象「寂しがり屋」
- 36位 木下 優子 > A < …… 相性：13 % (サバイバルな関係)
- …… 第一印象「崖っぷち」
- 37位 福原 慎 > 社会教師 < …… 相性：4 % (対立関係)
- …… 第一印象「寂しがり屋」

……なんかビミョーだ。

全体的に、割とAクラスは上位ですね。

ライバルの優子は残念ですが。

共通点で言えば、布施先生はどちらベスト5で、秀吉はワースト5

ですね。

・・・残念。

ちなみに、努力しだいで上がるのは・・・

1 2位	坂本 雄二	相性：6 3	9 3	% (尊敬)
2 0位	西村 宗一	相性：4 3	7 0	% (あなたが師匠)
2 4位	土屋 康太	相性：3 5	9 7	% (憧れの関係)
ダーリン)				
3 0位	根本 恭二	相性：2 8	3 8	% (微妙な関係)
3 1位	島田 美波	相性：2 5	5 1	% (嫉妬)

こんな感じですか。

・・・つまり、努力次第で雄二から尊敬され、ムツツリと結婚なんですね。

そして鉄人が弟子になる。

・・・素晴らしい!!

なんかテンション上がったところで自分をやってみると・・・

1位	霧島 翔子	A <	相性：9 6	% (俺の嫁)
第一印象「みえつぱり」				
2位	三上 美子	E <	相性：9 3	% (癒しの関係)
第一印象「可愛らしい人」				
3位	小暮 葵	> 3年 <	相性：8 5	% (憧れの関係)
第一印象「珍回答が多い人」				
4位	佐藤 美穂	> A <	相性：8 4	% (救世主)
第一印象「チャランポラン」				
5位	玉野 美紀	相性：8 4	% (禁断の関係)	第

- 印象「ねつけつかん」
- 6位 工藤 愛子>A<……………相性：82%（禁断の関係）
……………第一印象「古風」
- 10位 藤堂 カヲル>学園長<……………相性：74%（いじら
れている）……………第一印象「さわやか」
- 11位 吉井 玲>姉<……………相性：71%（趣味友達）
……………第一印象「ネタな人」
- 12位 久保 利光>A<……………相性：69%（相談相手）
……………第一印象「へこたれない人」
- 13位 姫路 瑞希>F<……………相性：67%（ツンデレ）
……………第一印象「ツンデレ」
- 15位 木下 優子>A<……………相性：63%（尊敬）
……………第一印象「エスニック風」
- 19位 清水 美春>D<……………相性：48%（あなたが師匠）
……………第一印象「むつつりスケベ」
- 20位 島田 葉月>妹<……………相性：45%（あなたが弟子）
……………第一印象「寂しがり屋」
- 24位 島田 美波>F<……………相性：35%（家が近所）
……………第一印象「寂しがり屋」
- 28位 坂本 雄二>F<……………相性：28%（相談相手）
……………第一印象「チャランポラン」
- 30位 土屋 康太>F<……………相性：25%（嫉妬）
……………第一印象「やさしい人」
- 33位 根本 恭二>B<……………相性：22%（対立関係）
……………第一印象「野蛮人」
- 34位 高橋 洋子>学年主任<……………相性：20%（対立関
係）……………第一印象「ウソつき」
- 35位 吉井 明久>F<……………相性：18%（いじめられて
いる）……………第一印象「能天気」
- 36位 西村 宗一>生活教師<……………相性：13%（微妙な

関係)……………第一印象「過去の人」

37位 木下 秀吉 > F < ………………相性：10 % (あなたがM^{マッ})

……………第一印象「うるさい人」

・・・謙太に似ている。

なんか微妙です。

秀吉に至っては五月蠅い人扱いなんて・・・

まあ、へこたれずにやっていきます。

それでは本編に戻りましょう・・・

第七十三話（前書き）

アニメ一期ラスト、13話です。

そういえば、アニメ二期始まりましたね！！

主題歌が麻生さんじゃなかったとの残念ですが・・・

これで、僕も休む理由がなくなったかな？

そんなこんなでスタートです

第七十三話

試召戦争が終結した次の日。

「・・・」

俺は教室に入るなり絶句した。

「おはよう、謙太。」

「おはようございます。」

「・・・おはよう」

「おはようなのじゃ。」

明久や、姫路たちが、当たり前のように挨拶してくる。

「・・・なあ、一つ疑問があるんだが。」

「なんだ？」

雄二が、何かあったのかと言いたそうな目をする。

「・・・おかしいだろ、この状況!!」

俺は思わず怒鳴ってしまった。

「おいおい、どうした？熱でもあるのか？」

「・・・これが熱による幻覚であって欲しいと願うばかりだ。」

てか、他の奴らは驚かないのか!?

「謙太、一回落ち着くのじゃ。」

「ん？ああ、そうだな・・・」

スー、ハー・・・

俺は、深呼吸をして落ち着き、疑問を口にした。

「・・・なんで机がないんだ？」

みんなが座っているところには、机や椅子らしきものは存在しなかった。

かわりにゴザと、謎の木の板が置いてあったが、なんだこれは・・・

「なあ、もしかして、これが机・・・？」

俺は、謎の板を指さして言った。

「机とは違うが、まあその役割を果たす代用品のようなものだ。」

「こんなんで勉強できるかつ!!」
誰が授業で画板なんて使うんだ？
どう考えても間違っているだろ!!
「・・・まあ、負けちまったもんはしょうがない。」
俺は自分に言い聞かせて、いつもの場所に座った。

「・・・そういえば、美波は？」
俺は、いつも明久にべったり(?)しているはずの美波の姿を探した。

「ああ、美波なら・・・」
そのとき、テンション最低の美波が教室に入ってきた。

「おう美波、何があった？」
「・・・深くは聞かないで。」
ヤバイ、これは重症だ。

「明久、励ましてやれ。」
「え？ああ、分かった。」

明久は、美波の前に行き親指を立てながら言った。

「大丈夫だよ!!」

「アキ・・・」

「美波なら胸が邪魔にならないし、似合ってるからだいじょうぼあつ!!」

「それどういう意味よ!？」

明久の励ましに、美波はレッグスプレッドで答える。

・・・美波つて、つくづく胸の話に敏感だよな。

胸以外は良い線行ってるだけに、残念ではあるが・・・

「・・・み、見え!」

美波の技(スカートの中)を熱心に観察するムツツリーニ。

・・・ムツツリ、いろいろ突っ込みどころはあるんだがとりあえず、
「・・・鼻血を流しながら言うセリフじゃねえ。」

俺は、ムツツリの鼻血を一瞥していった。

「体は正直じゃのお。」

「土屋君、血液量は大丈夫ですか？」

ムツツリの発言と行動が伴わないスキルに、秀吉と明久も呆れてい
た。

・・・ただひとり、優希だけはムツツリの出血を心配していたが。

「大丈夫、わかってるよムツツリニ！アウエイクン！！」

ムツツリの依頼を思い出したらしい明久が、召喚フィールドを出そ
うとする。

「あ、あれ？」

「腕輪もないのに出るわけないだろ・・・。」

俺が、腕輪もつけずにフィールドを出そうとする明久にツツコミを
入れる。

「そうだった、ゴメン、ムツツリニ。腕輪は壊れちゃったんだ。」

「！！！！！！！！！！」

ムツツリは、この世のものとは思えないような、悲愴な顔になった。

「！！！！」

「な、何？！！」

そして、ムツツリは優子に土下座をした。

「お願いします。召喚フィールドを出してください。」

「ダメよ！愛子のブラ取るのが目的なんですよ？」

「そこを何とか・・・。」

「ダメ！」

「ダメです！そんなことしたら、本当に死んじゃいますよ！！！！」

「・・・うわあああ！！！！！！」

「ムツツリニ！！！！」

「土屋！！！！」

「土屋君！！！！」

優子と優希に拒否されたムツツリは、自暴自棄のまま壁を突き破って廊下へと出ていった。

・・・これは比喻でもなんでもない。

まあ、どうせ先生にでも頼みに行っただろうが、無理だな。

「・・・結局、これがワシらの実力だったのかのお。」

秀吉が、設備を見ながらふとつぶやいた。

「ま、そういうことだな。」

雄二が、興味なさそうに言った。

「でも、あの負け方は納得できないよ。」

「いや、負けは負けだろ。」

明久の反論に、雄二が言った。

「俺たちはテストの点数よりも、実戦の強さで戦った。お互い同じ条件だ。そして、状況に流されずに戦ったAクラスが勝った。油断した俺たちが悪いってことだ。」

「で、でも・・・」

「クドイ。」

なおも食い下がる明久に、俺は吐き捨てた

「勘違いするな。これは競争じゃない、戦争だ。」

「けど、みんなが危険だったってときに、あんなことするなんて・・・」

「お前だって知っているだろ？戦争は、卑怯や愚劣なんて言葉が通用する戦いじゃない。」

「だけど、そんなのって・・・」

「逆に言えば、だから俺たちはEとDに勝てたんだろ？」

「それはそうだけど・・・」

明久がひるむ。

「これが現実だ。結果が全てだからな。」
最後に雄二がそう言うと、それっきり明久は反論しなかった。
・・・明久、あと3ヶ月待つんだ。

第七十三話（後書き）

謙太「久しぶりの原作ネタだな。」

優希「出番が少ないです・・・」

謙太「しょうがねえだろ？」

優希「まあいいですけど・・・」

謙太「それじゃ、次回をお楽しみに。」

第七十四話（前書き）

ああ、早く2期がみたい・・・
1期の復習は済ませたから、準備万端だぜ！！
そんなテンションで書く、13話分その二です。

第七十四話

次の日。

コン、コン

「入んな。」

ノックをすると、ババアの相変わらず不機嫌そうな声が聞こえた。
「・・・やっぱババアの方がしつくりくるな。」

「邪魔するぞ。」

俺は学園長室に入った。

「おや、アンタかい、なんの用だい？」

ババアは、驚いたように言った。

「特に驚くことでもねエだろ。」

俺は、ババアの前まで行って、ある紙束を机に置いた。

「データを渡しに来た。」

「なんだい、そんなことかい。」

ババアは、めんどくさそうにその紙を受け取り、じつくりと読み始めた。

「・・・それじゃ、俺は帰るぞ。」

俺はそう言つと、学園長室を後にしようとした。

「待ちな、ちよつと面倒なことになっている。」

「？」

俺は、何の事かと思い、ババアの前に戻った。

「ちよつと腕輪を見せてみな。」

「ああ、分かった。」

俺は、イヤな予感がした。

この前の試召戦争の時の頭痛は、明らかにヤバかった。

「・・・全く、無茶な使い方をしてるさね。」

パソコンでデータの解析をしていたババアが、呆れながら言った。

「無茶？特に誤った使い方はしてねえつもりだが・・・」

俺には心当たりがなかった。

・・・ある一つを除いて。

「なあ、もしかしてこの前、戦闘中にシンクロ率を上げすぎたからか？」

確かにこの前のシンクロでは、限界である150%開放は行なった。しかし、それを耐えられないようなら、こいつは完全に欠陥品だ。

「いや、そのことじゃない。もっと問題なのは・・・アンタ自身さ。」

「俺・・・？」

ああ、なるほど。

「・・・出力オーバーか。」

「そういうことさ。」

「チツ・・・」

そればかりはどうしようもねえな。

「こいつは、改修のため一旦こっちで預かる。それでいいさね。」

「ああ、構わない。」

ババアが俺の腕輪を机にしまった。

「ところで・・・」

ガチャ。

俺が、本題に移ろうとしたとき、ある二人が入ってきた。

「あら、珍しい顔ですね。」

「なぜここにいる、佐藤。」

「・・・なんだ、高橋女史と鉄人か。」

鉄人と高橋女史は、この件を（多少）知っているから、あまり気兼ねする必要はない。

「鉄人じゃない、西村先生と呼べ。」

「ああ、まあそれはどうでもいい。先にこっちをかたづけたいか？」

「好きにしる。こちらもお前にいられると迷惑だ。」

「迷惑って・・・生徒に言うセリフじゃねえだろ。」

そう言いつつも、鉄人は許可を出した。

「そんじゃ、本題なんだが・・・」

コン、コン

「誰だい？」

つたく、訪問客が多過ぎる。

・・・俺もそのひとりだが。

ガチャ

無言で入ってきたのは、

「なんだ吉井、こんなところに。」

「・・・明久？」

そこに居たのは明久だった。

明久がここに来る理由・・・なるほどな。

「ああ、謙太も何か用事が？」

明久が、俺に気づいて近寄ってくる。

「いや、先にやってくれて構わない。」

「分かった。」

俺は、明久に道を開けた。

そして明久は俺の横を通り過ぎ、ババアの前に立った。

「学園長、お願いがあります。」

いつになく真剣な明久に、鉄人も何かを悟ったらしい。

黙って明久を見ている。

「なんだい？」

「もう一度、試召戦争をやらせてください。」

明久は、真剣そのものの顔で行った。

やはり説得は無意味だったか。

・・・そんなことだろうと思った。

「そいつは無理な相談だね。」

ババアは、それを切って捨てた。

「宣戦布告したけりや、三ヶ月待つんだね。」

「そこまで待てません!!」

ババアの言葉に、明久が食い下がる。

「それがこの学園のルールだ。曲げることはできないよ。」

「お願いします!!」

明久は頭を下げた。

こうして見ると、いかに明久が熱意を持って行動しているかがわかる。

・・・しかし、ババアの言うことは正しい。

・・・ババアの言う通り、この世界にはルールがある。

ルールは、簡単にねじ曲げることも、特例を許すこともできない。

例えばだが、もしここで明久の主張が通ったらどうなると思う？

・・・答えは目に見えているはずだ。

今宣戦布告ができないE、Bも、即座に俺たち、もしくはAクラスに戦争を仕掛けてくるはずだ。

そして、ババア以下教師人が拒否したら、「なぜ俺たちができなくてFクラスだけ出来るんだ!？」という矛盾が生じるはずだ。

そして、その一つの例外を盾に、

もしそうなったら、『負けたクラスは三ヶ月間宣戦布告禁止』というルールは崩れ去る。

たったひとつの例外で、一つのルールがなくなるのだ。

極端な例かもしれないが、つまりはこういうことだ。

頭を下げれば何もかもが解決するような、そんな甘い世の中など存在しない。

「明久、それは・・・」

「私からもお願いします。」

そのとき、新たに学園長室に入ってきた奴が、声を上げた。

「・・・優子？」

それは、紛れも無く優子だった。

後ろには霧島の姿もある。

「あの勝ち方は、私たちも納得できません。結果で言えば私たちが勝ちましたが、戦いでは完全に押されていました。」

「木下さん、霧島さんも・・・？」

明久が、目を丸くして二人を見た。

「あれは学園を代表するAクラスの勝ち方ではありません。ほかのクラスも、あの勝ち方では納得しないと思います。」

「お願いします、と。」

優子はそういった。

「・・・私からも、お願いします。」

霧島も、優子の後に続いていった。

「・・・ハア〜。」

ババアは、大きくため息を言った。

「お前さんたち、どうしてこの学園が試験召喚戦争なんてシステムを取り入れてるか分かるかい？」

明久たちが、首をかしげる姿に、ババアは、もう一度ため息とつき諭すように言った。

「何度も言うが、ルールは曲げられない。だが・・・」

ババアは、明久を見た。

「お前さんには、召喚システムが暴走したときに世話になったし、お前さんのデータはまだ実験中だった黒金の腕輪の改善点をくつき

りと映し出したしねえ。おかげで、そこには完成品がある。」

ババアはそう言って、優子を見た。

「それもこれも、お前さんのおかげだ。したがって、お前さんには借りがある。そこまで言うなら、ちよいと特例を認めてやるうじやないか。」

「ホントですか!？」

・・・珍しいな、ババアが折れるなんて。

「あのFクラス代表はともかく、お前さんの望みは、AクラスとFクラスの設備を入れ替えることじゃないだろう。」

「!？」

ババアの的を付いた質問に、明久は凍りついた。

「もし違うなら、やり方はいくらでもあるってことさね。」

ババアは、いやらしい笑みを浮かべた。

・・・何をする気だ？

第七十四話（後書き）

謙太「ああ、眠い。」

優希「筆者は、今日の授業ぶつ続けでテストでした。」

謙太「・・・軽く死ぬる。」

優希「筆者は死んでいいですが、謙ちゃんは死なないでね？」

勇吾「ヒデえな優希、俺はそんなキャラに育てた覚えはない!!！」

優希「・・・ところで、今バカテスのサイトでは壁紙を配布しているみたいですね。」

謙太「みたいだな。」

優希「是非集めてみてください!!！」

謙太「それでは、次回をお楽しみに」

勇吾「スルーかよ・・・」

第七十五話（前書き）

13話編、その三です

第七十五話

「……Aクラスと再戦!?」「」

明久の報告に、教室が沸き立った。

「もう一度戦ってよいのか?!」

秀吉が、興奮気味に言う。

「あのババアがよくそんなことを許したな?」

雄二は、ババアの本性を知っているためか、どこか警戒したような口ぶりで聞く。

「すごいです、明久君!」

「う、うん。」

姫路が明久を褒めるが、明久は有耶無耶な返事をする。

……あの勝負法なら当然か。

「おっしや、今度こそぶちのめしてやる!!新しい作戦でも立てるか!!」

「いや、雄二。それが、ちょっと事情が……」

雄二に、明久がおずおずと切り出す。

「なんだ?」

明久は、小さな声で言った。

「実は、次の戦争は……っていうか戦争じゃないんだけど、とにかく次の戦いは僕が一騎打ちすることになったんだ。」

「……ええ〜!?」「」

これには、みんなはさっきよりも驚いた。

「お前が一騎打ちだと?!」

作戦を考えていた雄二が、目を丸くしながら聞く。

「うん。」

明久が、もう一度説明した。

「Aクラス代表と僕が、テストで戦うことになったんだ。」

「Aクラス代表って……翔子とか。」

雄二が、苦い顔をしながら言う。

まあ、コイツが一番霧島の怖さを知っているからな。

「そして、勝ったほうが小さなお願いを聞いてもらうってことだ。

まあ、設備の交換は無理だが。」

そこで、俺が補足した。

「相手は学年主席じゃぞ!？」

「アキ、勝てるの?」

「大丈夫なんですか、明久君?」

女子(?)三人が、明久の心配をする。

「大丈夫だよ。みんなには迷惑をかけないから。」

明久は、力なく笑った。

「明久、お前が負けたらどうなるんだ?」

雄二が、とある疑問を口にした。

「相手の代表の言うことを聞く。まあつまり……」

「……勝ったら私の婚姻届を返してもらおう。」

「ということだ。」

俺の説明中に、霧島が入ってきた。

「あれはもともとお前のもんじゃないやねえぞ、翔子!」

雄二は、思わず後ずさりをした。

「てめえ、何が迷惑をかけないだ!!俺の人生が掛かってるじゃね

えか!!」

雄二は、明久の胸ぐらを掴んだ。

「……そんなの大したものじゃない!!」

明久は、そんな雄二を一蹴した。

「……雄二。」

「なんだ翔子。」

雄二が、怪訝そうな顔つきで言う。

「……勝負が終わったら、すぐハネムーン。」

「行く訳あるか!」

雄二が、必死の形相で否定する。

「・・・子供は何人ほしい？」

「霧島、それをここで話すな。二人きりの時に聴かねえと。」

「・・・わかった。」

俺は、霧島を落ち着かせ、雄二を見た。

「明久テメエ、何があっても勝て。絶対に負けるな！！」

雄二は、明久の胸ぐらをつかみ、ブンブンと振り回している。

「それに翔子！お前も少しは手加減をしろ！！」

「・・・それは出来ない。だって、雄二が手を抜くなっていったのを覚えてるから。」

霧島が、真剣そのものといったような目で言った。

「・・・雄二、墓穴を掘ったな。」

「謙太！！明久のかわりにお前がやれ！！」

雄二は、なおも食い下がろうとする。

「無理だ。これはババアが明久に借りを作っていたのを返すためだ

からな。俺には無理だ。」

「ちつくしよあ！！俺の人生があ！！！！」

雄二が頭を抱える姿を見て、明久がため息をついた。

「・・・僕が負けるの決定なんだ。」

そして夕方。

俺は、一人で家に帰っていた。

・・・明久、勝てるか？

今のままじゃ、十中八九無理だろうな。

「さて、どうするか・・・」

そんなことを口に出してみたが、俺がやることは既に決めていた。

・・・俺には、これくらいしかできないからな。

「・・・俺にできることは少ない。なら、出来ることをやるだけだ。」

「俺は、いそいで家に帰り、教科書類をまとめると、明久の家に向かった。」

第七十五話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに!!」

第七十六話（前書き）

今夜がバカテスだぁ！！

見たいけど学校なんで、明日の朝・・・

そんなわけで一期最終話分です

第七十六話

明久目線

「ふう……」

僕は、葉月ちゃんと別れたあと、一人で歩いていた。

「よし、気合を入れ直さないと……」

早く帰って勉強しようかと奮起しながら家に帰る。

「……あれ？」

僕が家についたとき、家の前に人影があった。

「おっ、明久。」

「謙太？」

よく見ると、それは謙太だった。

謙太は、

「なんでいるの？」

「その聞き方は酷いぜ……」

謙太は、やれやれと首を振った。

「とりあえず、上がっていいよ。」

僕は、謙太を家に招き入れた。

「で、どうしたの？」

僕は、謙太を自分の部屋にいれ、事情を聞いた。

「お前に勉強を教えに来た。」

「へえ、そうなんだ。ありがとう。」

「気にするな。友達だろ？」

謙太はそう言いながら、教科書を持ち出した。

……謙太、優しいな。

「なんで教科書を？」

「お前も持つてると思ったけど、一応持つてきた。」

「ふうん・・・ってええ?!」

僕は、謙太の日本史の教科書を見て、驚愕した。

謙太の教科書には、所狭しと語句の説明やら年号の覚え方やらが書き込まれていた。

「お前、そのくらいで驚くのか?」

「・・・まあね。」

「勉強の前に教科書纏めるだけで、大分違うからな。やったほうがいいぞ?」

「なるほど・・・」

「・・・そもそも僕は、教科書なんて見ない。

僕は、改めて謙太の教科書を見た。

なるほど確かに、こんだけ書いてあるのに全然見づらくない。

「・・・謙太のあの点数の理由が分かった気がする。

「まあ今日は、そんな時間がないからいいとして・・・」

謙太は、教科書をすべて取り出し、僕を見た。

「・・・今から地獄の特訓だ。覚悟はいいな?」

謙太が、僕を見ながら言った。

「・・・うん。」

僕は頷き、準備に取り掛かる。

「それじゃ、はじめよう!」

すこしして、僕が、謙太に言った。

そして、準備を済ませた僕たちは、向かい合った。

「先ずは古典だ。お前、いつもひと桁だしな。」

「違うよ!!!」

この前のテストの12点は、一応二桁だし・・・

「12点なんて、一桁みてえなもんだろ・・・」

「心を読まないで!!!」

くそお、これじゃあ迂闊に姫路さんのことも考えられないじゃないか・・・

「それはいいから、勉強に集中しろ。その姫路のためだろ？」
「だからやめてっつて!!」
けど、その通りだよな。
「分かったよ。それじゃやろう!!」
こうして、僕の特訓は深夜まで行われた。

次の日。

「ふわぁ・・・」

僕は、机の上で目を覚ました。

寝惚け眼で時計を見る。

・・・八時。

登校時間ギリギリだ。

「ヤバイ、遅刻だ、謙太!!」

「ZZZ・・・」

僕は、慌てて謙太を起こそうとする。

そのとき、僕の目の前に置かれた単語帳に気がついた。

「これって、謙太が・・・？」

僕は、それを手に取り、めくる。

「凄い・・・」

僕は、思わず言葉を漏らした。

それは、教科ごとに分けられていて、簡単な問題から徐々に難しくなるという学園のテストのタイプと同じになっている。

「僕が寝たあとも、こんなものを・・・？」

僕は、死んだように寝ている謙太を見た。

「・・・ありがとう、謙太。僕だってやってみるよ!!」

僕は、謙太に置き手紙をして、学校に向かった。

謙太目線

「んっ・・・」

俺は、明久の部屋で目を覚ました。

「明久は・・・もういねえな。」

俺は、昨日作った単語帳の在処を確認した。

・・・無い。

「・・・明久がもっていったか。」

そりゃよかった。

朝の六時まで作ってたからな。

「・・・とつくに遅刻か。」

俺は、一応ケータイを確認した。

・・・9:32。

こりゃ鉄人にシバかれるな。

「さてと、それじゃあ行くか。」

いっそ鉄人に連絡して休むという手もありだが、正直休む気もしなかった。

・・・明久の勇姿、見届けてやらねえとな。

「さてと・・・ってなんだこれ？」

学校に行こうとバッグを取ろうとしたら、ふと机の上にある紙に目が行った。

・・・昨日はなかったよな。

ちよっと気になった俺は、拾い上げて読んでみる。

謙太へ。

昨日と今日はありがとう。

もし謙太に教えてもらってなかったら、こんなにやる気は出なかったと思う。

これなら、もし負けても悔いはないよ。

・・・まあ、勝つかまけるかなら勝ったほうがいいけどね。

とにかく、やっと同じ土俵に上がった気分だよ。

これならいい戦いができると思う。

もちろん、霧島さんが強いことは分かってるよ。

勝ち負けの問題以前に、ただ僕はベストを尽くす。

だから、謙太は僕を見守っておいてください。

明久

「・・・バカ。」

俺は、その手紙をポケットに突っ込んだ。

明久、お前なら勝てる。

不思議とそんな気がするんだ。

俺の全財産をかけてもいい。

・・・かける相手がいねえけどな。

「明久、頑張れ。」

俺は、そうつぶやき、学校へ向かった。

第七十六話（後書き）

優希「どうでしたか？これは、間話のようなものです。」

謙太「こいつら勉強会好きだな・・・。」

優希「それには謙ちゃんも入ってるんですけどねえ。」

謙太「五月蠅い。」

優希「シドい!!。」

謙太「お前が悪い。次回をお楽しみに。」

第七十七話（前書き）

最終話分です。

何だかんだでグダグダと長引いてしまっている・・・
早くOVAが書きてえよ！！

第七十七話

「これより、特例によりAクラス霧島翔子と、Fクラス吉井明久との一騎打ちを行います。」

俺が学校についたとき、丁度明久と霧島の一騎打ちが始まっていた。

「試合は、サドンデスルールで行います。」

「サドンデスカ・・・。」

「つまり、間違えたほうが負けってことですね。」

「文月学園のテストは、問題数無制限だが、次第に問題が難しくなる。」

「・・・つまり、序盤で勝敗が決まる。」

ムツツリの言葉に、みんなは息をのんだ。

「・・・そういえば、俺が日本史を受けたときに出た問題で、『ペリ』が浦賀に來航した時の階級を答えよ』なんてトンチンカンな問題が出たな。」

「・・・ちなみに答えは『大佐』だったっけな。」

おお、シヤア大佐!!!

「それでは、始めます!!!」

高橋先生の言葉で、本当の決戦が始まった。

「頑張れ、明久!!!」

そのとき、俺の横に座っていた雄二が、明久を応援した。

「・・・雄二。」

明久は、雄二の声援を嬉しく思っただらしい。

確実に裏があると気がつかねえのか・・・?

「俺はお前なら勝てると思ってる!!! だからお前も自分を信じてベストを尽くせ!!! ファイトだ、明久!!!」

「・・・自分のことになると思直に応援するんじゃないの。」

「全く、心にもないことを・・・。」

俺と秀吉は、呆れながら明久を見た。

・・・けど、

「明久、昨日あれだけの努力をしたお前ならやれる。ベストを尽くせ！」

「そうじゃ明久。お主ならやれると信じておるぞ。」

「明久君、頑張ってください！」

「ファイトよ、アキ！」

「・・・ファイト。」

雄二の応援に感化され、俺たちも口々に声援を送った。

「代表、ファイト!!！」

「翔子ちゃん、ガンバレです！」

「頑張つて、代表！」

Aクラスからも、霧島を応援する声が聞こえた。

その声は、この戦いがどれだけ白熱したものを思い知らせるのに十分だった。

・・・さて、特訓の成果を見せてやれ、明久。

「それでは始めます・・・」

布施先生の声で、いよいよ始まった。

「第一問、得意なことでも失敗してしまうことをなんとか答えなさい。」

「この問題なら簡単ね。」

「明久がよほどのバカでない限り、最初でつまずくことはないはずだ。」

雄二が言った。

確かに、これなららくしょ・・・

「もつつまりずいとるぞー!!！」

「何!?!？」

やべえ、簡単すぎる問題を教えてなかった。
こいつの目線で考えてなかった・・・

答 吉井明久／猿も木から落ちる。

霧島翔子／弘法も筆の誤り

「両者正解です。」

「やった!!」

「・・・これくらいで喜ぶな。」

小学生でも解けるぞ？

「脅かすな明久!!」

雄二は自分の生活がかかっているからか、やたらと明久に食ってかかる。

「緊張してるんだよ!!」

明久が言い返す。

・・・はあ。

「まだまだ先は長いな。」

俺は一人でそうつぶやいた。

「だ、第三十二問。」

問題数を重ねるごとに、問題も難しくなってきたが、ここまで、両者全てを正解している。

俺は、ステージの明久を見た。

「・・・」

・・・大丈夫。集中は切れてねえ。

「日本最初の年号である『大化』。その大化の改新が行われたのは西暦何年か答えなさい。」

「・・・!!」

俺達は、ここでこんな問題が出たことに驚いた。

「こ、この問題は・・・」

「・・・サービス問題。」

俺たちの緊張が切れた。

「流石に、これは両者正解だな。」

「・・・一旦休憩だな。」

「勝負は次に持ち越しね。」

俺達は一息ついた。

さて、明久はどうだ・・・？

「うっ・・・」

し明久は固まっている。

「どうした、明久？」

「待つのダルイからさっさと書け。」

俺達は、明久を急かした。

「ねえ、大化の改新って・・・どっちだっけ!？」

「・・・はあ!？」

「テメエ、アレだけのことがあって忘れたのか!？」

「お前の記憶力を疑うぞ!!」

「アレだけの事があったから混ざっちゃったんだよ!!」

「ふざけるな、このバカ!!」

雄二が、凄い剣幕でまくし立てる。

かく言う俺も、流石にここで引っかかるとは思っておらず、思わず大声を出した。

「・・・」

明久は、迷っている。

「・・・」

俺たちも、固唾を呑んで見守った。

「クツソおおおおお!!」

バン!!

突然、明久が鉛筆を置いた。

「アキ!？」

「明久!？」

「何やってるんだ!」

俺達は、明久の思わぬ行動に、声を上げた。

「あの野郎、勝負を投げやがった・・・」

雄二が、涙目で拳を握り締めている。

そんなに嫌なのか・・・?

「いいえ、それは違います!」

姫路が指さした先には、ある鉛筆が・・・

「あ、あれは、ストライカーシグマ?!」

「おいっ、ここで使うものじゃねえだろ!!」

明久は、ストライカーシグマ?を握り締め、

「行っけエエエ!!」

思いつきり投げた。

「止めるオオオオオ!!」

雄二の制止は一步遅く、明久は投げてしまった。

その結果・・・

答 / 625

「答えが違っわ!!」

「なんじゃと!？」

後ろの画面に出ている答は625。

「お、終わった、俺の人生・・・」

雄二は肩を落としている。

「・・・バカ、よく見る。」

「「「え?」」」

答 吉井明久 / 645

霧島翔子 / 625

「勝者、Fクラス、吉井明久。」

「何!?!」

肩を落としていた雄二が、先生の言葉に驚いている。

「「ウオオオオオオオ!!」」

俺達は、歓喜に湧いた。

「やったね、アキ!!」

「よくやったぞ、明久!!」

「凄いです、明久君!!」

女性陣（笑）が明久に駆け寄る。

「・・・」

女性陣に囲まれている明久の横で、霧島は無言で立ち上がり、教室を後にした。

「チツ・・・」

雄二が、それを追った。

・・・素直になればいいじゃねえか。

第七十七話（後書き）

謙太「今回役目なしか。」

明久「なんかごめんね・・・？」

謙太「気にするな。もともとお前の物語だ。」

明久「あはは・・・」

謙太「それじゃ、次回をお楽しみに。」

第七十八話（前書き）

ようやく一期が終わります・・・

そういえば、今更なんですがバカテス小説まとめ買いしました（7
5話まで）

今回の夏休みは読書の夏です。

第七十八話

「まさか勝つとはね。」

「学園長！」

しばらくして、ババアがAクラス教室に来た。

「負けると思ったからこの戦いを承認したんだけどねえ……」

「明久を甘く見てたな、ババア。」

「謙太、学園長をババアなどと言うな。」

俺は、何故か楽しそうなババアに言い、鉄人がそれを咎める。

……まあ、ババアはバカが勉強してくれて嬉しいんだろうな。

「それじゃ、望み通りお前さんのお願いとやらを聞いてやるうかね。」

ババアはそういうと、後ろに控えていた鉄人に何かを言った。

「そういえば何を頼んだのですか、明久君？」

「そういえば、俺も聞いてなかったな。」

まあ、あえて聞くことでもなかったし、だいたい予想がつくからな。

「ああ、それは……」

「……わかりました。それでは姫路、佐藤。お前らにもう一度振り分け試験を行う。」

「そんなことだろうな……ってええ!？」

俺は、まさか自分の名前が呼ばれると思っておらず、大声を上げてしまった。

「明久君、これってまさか……」

姫路が、悲痛な顔をする。

「もともと僕が試召戦争をはじめようと思ったのは、姫路さんのためなんだ。」

「それは知ってるが……なぜ俺まで？」

「今回の試召戦争で思ったんだ。僕たちは、謙太に頼りすぎていたんじゃないか……って。それに、全員が無理ならせめて、二人に

は相応の学力の設備に移って欲しいんだ。」

明久は、力なく笑った。

その顔が、これが苦肉の策であることを物語っていた。

「そ、それじゃ・・・」

「あんたに相応しい設備にいけるんだよ。」

「えっ・・・」

「よかつたね、姫路さん。」

困惑の表情をしている姫路に、明久が声をかける。

その声はともも明るいものだったが、それは勤めて出しているような声だった。

「あつ、明久君！」

「何、姫路さん？」

「明久君は・・・明久君はそれでいいんですか？」

姫路が、泣きそうになりながら明久に問う。

「うん。」

明久が、笑って返す。

「・・・後悔しねえのか？」

俺が、釘を刺すと、明久は少し考える素振りを見せた。しかし、

「二人がいなくなると少し寂しくなるし、試召戦争も厳しくなるけど・・・二人のためになるなら、それが一番だよ。」

明久は、笑顔で俺たちに言った。

「・・・コイツ、優すぎるだろ。」

「そうですね・・・」

姫路が、諦めたように顔を伏せる。

「・・・バカ。」

俺は、明久の鈍感さに呆れ、顔を背けた。

・・・決して照れていたわけではない。

「ありがとうございます、明久君！」

「うん！」

ようやく顔を上げた姫路が、明久に精一杯の笑顔に向け、明久もそ

れに応えた。

「・・・明久、来世では親友でいよう。」

「え、なにその死亡フラグ。それにそれって、現世では親友じゃないってこと・・・？」

「・・・姫路、行くぞ。」

「最後の最後にドスルー!?」

おそらく最後となる明久のツッコミをスルーし、俺は姫路を連れて振り分け試験会場に向かった。
・・・色々ありがとう、明久。

「では、始め!!」

鉄人の合図で、俺たちはテストを始めた。
簡単な。

これなら、俺も姫路も確実にAに行けるだろう。

「・・・本当はまだFクラスにいてえんだけだな。」

俺はボソリとつぶやいた。

確かに、あの設備や、優子、優希たちと同じクラスになれるというのは魅力だが・・・
それを差し引いても、Fクラスの馬鹿と一緒に学園生活を過ごしたい。

できればこんなテストなんてすっぱかして、明久たちとバカやって楽しみたい。けど・・・

「明久のあんな顔を見たら、真面目に受けるしかねえだろ・・・」
俺は、いつも以上に真面目にテストを受けた。

「・・・そこまで!!」

鉄人の合図で、回答を回収された。

「・・・フム。これなら二人とも、間違いなくAクラスに入れるな。」

「はい・・・」

「・・・」

鉄人からの合格通知を、少し複雑な気分で聞いていた俺。

・・・これでよかったのか？

そんな不安が俺の脳裏を過ぎる。

「・・・あ、あの!!」

そのとき、姫路が鉄人を呼んだ。

「なんだ？」

鉄人が振り返る。

「一箇所、大きな間違いをしてみました。訂正させてください
!!」

姫路が、力を込めて言う。

「もう試験は終わった。訂正は認められん。」

「でも・・・」

「大丈夫。これだけ答えられれば十分だ。」

鉄人は、その願いを一蹴する。

「・・・鉄人、俺もミスった。」

その光景を見ていた俺も、姫路の援護に加わった。

「お前もか!!」

鉄人が、呆れたように言う。

「訂正させてください。」

俺が、できる限り丁寧と言う。

「ダメだ。規則は規則、例外は認められん。」

しかし、鉄人は聞き入れない。

「……お願いします！」

気づいたときには、俺と姫路は、頭を下げていた。

「どうしても、どうしてもそれだけは直さないといけないんです！」

「！」

「本当に大きな間違いなんです、頼みます！！」

「……」

それを見た鉄人は、しばし考えた後、俺たちに答案を渡した。

「訂正はひとつだけだぞ？」

「分かっていきます。」

俺と姫路は笑顔を交わし、同時に答案用紙の名前を消した。

そして次の日。

「オッス。」

「おはようございます、明久君。」

Fクラスの扉の前であった俺達は、いつものように教室に入った。

「あれ？二人とも、忘れ物？」

「んなわけねえだろ。」

「ここが私たちの教室ですから。」

俺と姫路はそう言うと、いつもの席に座る。

「二人とも、Aクラス入り確定だったんじゃないの!？」

「じつは、名前を書き忘れちゃって……」

「……俺も。」

俺たちはそう言って、答案用紙を出した。

「という訳で、俺たちは本当のFクラス生徒ってわけだ。」

2回続けて0点なんて、本物のバカにしか取れない。

「というわけですから、これからも、よろしくお願いしますね、明

「久君!!」

「……」

明久は、姫路の言葉を聞いたきり、黙り込んでしまった。

「どうしたの、アキ？」

「……嬉し泣きか？」

「一件落着じやお。」

「……ハッピーエンド。」

雄二たちが、口々に感想を言い合う。

「あ……」

「あ？」

「あのクソババア!!!」

明久は、突然キレて学園長室に走り出した。

「……」

俺達は明久が走り去ったあと、お互いに顔を見合わせ……

「……プツ」

「……アハハ!!!」

笑いの渦に包まれた。

「……アイツ、本物だな。」

「そうだな。」

「そうじゃのお。」

「……その通り。」

「そうね。」

「ええ。明久君は本物の……」

「……バカだ!!!」

一期、
E
N
D

第七十八話（後書き）

ご愛読ありがとうございました！！

次はOVAです！

頑張ります！！

第七十九話 バカテスト、其の？（前書き）

その名の通り、バカテストです。

今回は1〜6話です。

休憩がてらに見てください。

第七十九話 バカテスト、其の？

第一問

問 次の（ ）に当てはまる言葉を記入しなさい。

私は（ ）を望みます。

吉井明久の答え

私は（今月の食費）を望みます。

秀吉「わびしいやつじゃのお……。」

吉井明久の答え（その2）

私は（秀吉とデート）を望みます。

秀吉「違うわ！」

明久「じゃあ、チャイナ服の秀吉とデート？」

秀吉「なんじゃ、それは……。」

明久「じゃあ、水着の秀吉とプールでデート？」

秀吉「どうしてそうなるのじゃ！」

明久「じゃあ、セーラー服の秀吉とデート……！」

秀吉「ワシは男じゃぞ……！」

明久「……なにいつてるの？ 秀吉の性別は、ひ・で・よ・し、に
決まってるじゃないか……！」

謙太「・・・つーか、この問題の正解はなんなんだよ。」
秀吉「それはもちろん・・・」『バカとテストと召喚獣』じゃ!!」
謙太「・・・へえ。」
秀吉「スルーするでない!!」
明久「デート~~~~!!」
秀吉「クドイのじゃ!」
謙太「それじゃ、次の問題・・・」

第二問

問 以下の問いに答えなさい。

時に食用できる地下茎を持つ、
英語で「lily」という名の植物を答えなさい。

佐藤謙太の答え

『ユリ』

教師のコメント

正解です。さすがAクラス候補だっただけはありますね。
地下茎は鱗茎と呼ばれ、養分を蓄えて厚くなつた葉で、
ネギやらっきょうなども鱗茎に含まれます。

吉井明久の答え

『山芋！ ジャガイモ！ サツマイモ！』

教師のコメント

『食用』以外にも注意を向けて下さい。

謙太「・・・」

秀吉「本当に残念な脳みそじゃのお。」

明久「なんか凄くヒドイ罵倒が聞こえるんだけど・・・」

謙太、雄二「しょうがないだろ。本当のバカなんだから。」

明久「ハモらないでよ。・・・」

雄二「これがお前に対する評価だ。」

謙太「・・・次行くか。」

第三問

問 以下の問いに答えなさい。

家計の消費支出の中で、

食費が占める割合を何と呼ぶでしょう。

佐藤謙太の答え

『エンゲル係数』

教師のコメント

正解です。

一般に、エンゲル係数が高いほど、生活水準は低いとされています。

吉井明久の答え

『今週は塩と水だけです！』

教師のコメント

食事の内訳は聞いていません。

姫路「相変わらず大変ですね・・・」

謙太「しょうがねえだろ。」

秀吉「自業自得じゃからのお。」

明久「しょうがないだろ！！趣味はお金がかかるんだよ！！」

美波「そんなんじゃない、いつか死んじゃうわよ？」

姫路「そうだ！！私がお弁当を・・・」

明久「気持ちだけでもらっておくよ！！」

姫路「そうですか・・・」

謙太「それじゃ次。」

第四問

問 以下の問いに答えなさい。

マザーグースの歌の中で

『スパイスと素敵なもので作られている』と
表現されているのは何でしょう。

姫路瑞希の答え

『女の子』

教師のコメント

正解です。さすがですね、姫路さん。

女の子の材料は、砂糖とスパイスと素敵なもの、
男の子の材料はカエルとカタツムリと仔犬のしっぽと
歌われています。

吉井明久の答え

『カレーライス』

教師のコメント

女の子は食べ物ではありません。

謙太「明久にしてはまとも・・・ではないか。」

雄二「どうせ、スパイスって部分しか見てなかったんだろ？」

明久「失礼な！！カレーの食材は素敵なものじゃないか！」

秀吉「確かに、塩と水に比べたら素敵なものかもしれないが・・・」

謙太「秀吉。この溝は埋めようがない。諦める。」

秀吉「・・・そうじゃな。」

明久「それってどういう・・・」

雄二「お前が馬鹿ってことだ。」

明久「ヒドイって!!」

姫路「明久君、私がかレーを・・・」

謙太「つ、次行くぞ!!」

明久、雄二、秀吉「・・・おお!!!!」

姫路「どうしたのですか、皆さん？」

第5問

問 以下の問いに答えなさい。

地図と方位磁石を頼りにチェックポイントを
辿るスポーツを、何と呼ぶでしょう。

姫路瑞希の答え

『オリエンテーリング』

教師のコメント

正解です。さすがですね、姫路さん。
長い距離を歩くスポーツで、
上り下りのある山道で行われる事もあります。
体の弱い姫路さんには大変かもしれませんが、
体力作りのためにも頑張って参加して下さい。

吉井明久の答え

『ロールプレイングゲーム!』

教師のコメント

そう答えると思っていました…。

謙太「RPGか・・・」

秀吉「どうしたのじゃ、謙太よ?」

謙太「いや、RPG最近やってないな」と思って。」

秀吉「それではどんなものをやっておるのじゃ?」

謙太「ええっと・・・」

明久「少しは突っ込んでよ!!!」

謙太「ああ五月蠅い……。」
明久「せっかくわざと間違えてるっていうのに……。」
謙太「突っ込む気も失せる答えだったからな。」
秀吉「全くじゃ。」
謙太「そんじゃ、次行こう。」

第六話

問 以下の問いに答えなさい。

水泳の個人メドレーの種目を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『 1 ・ バタフライ 2 ・ 背泳ぎ 3 ・ 平泳ぎ 4 ・ 自由形 』

教師のコメント

正解です。さすがですね、姫路さん。

解答は合っていますが、

姫路さんは実際に泳ぐのが苦手なようですね。

水泳は全身運動で

心肺機能を鍛えることにも役立ちます。

苦手だからと言って尻込みせず、

積極的に水泳に参加しましょう。

吉井明久の答え

『アニソンメドレー、ナツメロメドレー、鳩サブレール!』

教師のコメント

鳩サブレールは先生も好きです…。

謙太「・・・明久、ひとつ言っていていいか？」

明久「何？」

謙太「・・・ボケが雑だっ!!!」

明久「ええっ・・・」

謙太「見る。福原先生のコメントがやばいことになってるだろ？」

秀吉「というより、もう投げやりじゃな。」

明久「そんな、福原先生!!!」

謙太「諦める。もうお前は見限られた。」

明久「そんな!!!」

謙太「・・・次。」

第七問

問 以下の問いに答えなさい。

日本の民法における結婚適齢は何歳か答えなさい。

姫路瑞希の答え

「男性は18歳、女性は16歳」

教師のコメント

正解です。さすがですね、姫路さん。

2009年の法制審議会で、男女共に18歳に統一すべきとの最終答申が報告されており、政府方針として改正する方向のようです。改正されると、姫路さんの結婚できる日が先延ばしになってしまうかもしれませんね。

吉井明久の答え

『愛があれば歳の差は関係ありませんよ』

教師のコメント

夢と希望をありがとうございます。

明久」というわけで、愛があれば性別なんて関係ないよ、秀吉!」

秀吉「何が『というわけ』じゃ！！落ち着くのじゃ明久！！」

明久「大丈夫！！僕が必ず幸せにするよ！！」

謙太「・・・全く。二期のネタバレすんな。」

明久「大丈夫！大したことないから！！」

秀吉「ワシにとっては大問題じゃ！！！！」

久保「吉井君！愛があれば性別なんて関係ないのかい！？」

明久「なんでいきなり現れたかわからないけど、その通りだよ、久

保君！！愛があれば、性別なんて取るに足らない些細な問題さ！！」

久保「そうかい、それじゃ・・・」

謙太「はいストップ。レッドカード、退場。」

久保「何をするんだ、佐藤君！！やめてく・・・」

ガコン！！

(終)

第七十九話 バカテスト、其の？（後書き）

明久「なんで落としたの？」

謙太「知らないほうが幸せなこともあるさ。じゃ、終わるか。」

秀吉「そうじゃな。それでは、」

「「「次回をお楽しみに。」」」

第七十九話 バカテスト、其の？（前書き）

バカテストです。

今度は8〜13の次回予告・・・？

第七十九話 バカテスト、其の？

第八問

問 以下の問いに答えなさい。

『コンピュータ』の事を日本語で何と呼ぶか答えなさい。

姫路瑞希の答え

『電子式汎用計算機』

教師のコメント

正解です。さすがですね、姫路さん。

簡単に、電子計算機とも呼ばれています。

昔は、歯車で出来た機械式計算機というものもあり、高価で重く、人間が手でハンドルを回して

計算をしていました。

今では簡単な計算機ならコンビ二でも買えるようになり、技術の進歩はすさまじいものがあります。

吉井明久の答え

『超電子頭脳！』

教師のコメント

強そうですね

謙太「お前、アニメとかゲームに影響されすぎてないか？」

明久「そうかな？」

秀吉「これは一度、明久のゲーム等々についての処遇を考えるべきじゃな。」

明久「そんな！！何物にも代え難い、優秀な作品の数々を・・・」

雄二「・・・全く、ちよつと我慢すれば、島田や姫路とデートし放題だろうに。」

明久「いいじゃん、雄二は霧島さんとデートし放題ゴパツ・・・」

雄二「ふう、馬鹿野郎が。そんなこと言って翔子に感づかれたら・・・」

霧島「・・・何、雄二？」

雄二「翔子！？なんでここに！？」

謙太「自分が呼んだんだろ、自業自得だ。」

雄二「呼んでねえ！！！」

翔子「・・・雄二、デートがどうとかって・・・」

雄二「気のせいだ。翔子、あっち行ってる。」

翔子「・・・雄二、酷い。」

謙太「おい明久、次行くぞ。」

明久「ん・・・？」

雄二「やめる、なんでスタンガンなんかアバババ・・・！？」

翔子「・・・雄二は連れて帰るから。」

謙太「お、おう。分かった。」

明久「それじゃ次。」

第九問

女性のバストのサイズを現す単位に『カップ』があります。基準となるAカップの大きさを説明しなさい

吉井明久の答え

『島田美波』

教師のコメント

コメントは控えます

姫路瑞希の答え

『トップバストと、アンダーバストの差が10センチメートル』

教師のコメント

正解です。

さすがですね、姫路さん。

女性は思春期を迎えると、第二性徴の発達により胸が膨らみ・・・
以下省略

佐藤健太の答え

「・・・手のひらサイズ？」

教師からの回答

そんなことは聞いてません。

島田美波 & 工藤愛子 & 木下優子の答え

「私^{ウチ}だって、寄せて上げればBくらい・・・」

教師のコメント

そんなことも聞いていません。

優希「おお。今回は、珍回答連発回ですね。」

謙太「クソツ、Aカップの大きさなんて知るか！」

明久「そうだよね。あと美波、なんで僕は頭蓋骨が陥没しそうなくらいアイアンクローをされてるのかな？」

美波「・・・心当たりがないなら体で教えてあげる！！」

明久「ウワアアアアアア！頭蓋骨が砕ける！」

愛子「ムツツリーニ君は珍しく回答してないね。」

土屋「・・・こんなの基礎知識。」

愛子「あはは、そうだね。」

優子「謙太」

謙太「ん？」

優子「えっと・・・なんでもない。」

秀吉「さては、胸の大きさを気にして・・・」

優子「秀吉？生きていたくないの？」

秀吉「止めるのじゃ姉上、その関節はそっちには・・・」

謙太「つたく、次行くぞ」

優子&愛子&優希&美波「はい。」

秀吉&明久「・・・」

第十問

問 以下の問いに答えなさい。

『少年探偵団』や『怪人二十面相』を世に送り出した、日本の小説家の名前を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『江戸川乱歩』

教師のコメント

正解です。さすがですね、姫路さん。

江戸川乱歩は、大正から昭和にかけて活躍した、推理小説を得意とした小説家で、アメリカの文豪、

エドガー・アラン・ポーの名にちなんだペンネームです。
日本推理作家協会初代理事長であることを有名です。

吉井明久の答え

『犯人はこの中にいる!』

教師のコメント

先生ではありません

謙太「・・・明久、ベタなセリフを吐くな。」

明久「これ、言ってみたかったんだよね。」

謙太「やっぱり、お前はテレビに影響されすぎているな。」

雄二「金がねエならばらく自重しろ。」

明久「やだね。僕は情報化社会で戦う戦士なんだ!!」

秀吉「要するに、情報化社会の被害者と言っことじゃな。」

謙太「・・・自殺だろ?」

明久「それって結構ひどくない?」

謙太「次行こう。」

明久「ドスルー!?!」

問 以下の問いに答えなさい。

第二次世界大戦でドイツ軍が得意とした、爆撃と機甲師団の連携による戦術は何でしょう。

姫路瑞希の答え

『電撃戦』

教師のコメント

正解です。さすがですね、姫路さん。航空機部隊と機甲師団が連携をとって、敵陣の弱い所を素早く攻めることで、少ない兵力で効率良く攻め入る戦い方です。突破した防衛線を敵が修復する暇を与えず、迅速に攻め続ける戦法は、ガソリンエンジンによる機動力と、無線機による通信技術の発達が不可欠でした。

吉井明久の答え

『ガンガンいこうぜ！』

教師のコメント

『命を大事にしよう』

明久「僕って、ドクエでは全部『ガンガンいこうぜ』にしちゃうんだ。」

謙太「・・・もう手遅れだな。」

秀吉「・・・そうじゃな。」

明久「どうしたの、二人とも？」

謙太「お前、ついに現実と二次元の区別がつかなくなったか。」

明久「何を馬鹿なことを言うんだ!!」

秀吉「・・・現実に友人がいないから、どうしようもないじゃろうが。」

謙太「言いすぎだ、秀吉・・・っておい明久!!」

明久「僕はもう、死んだほうがいい存在だ。」

秀吉「すまぬ明久!! 軽い冗談なのじゃ!!」

謙太「悪い、明久・・・」
ベシッ!

明久「あぐっ!!」

秀吉「・・・見事な手刀じゃな。」

謙太「起きたときには忘れてるだろ。」

秀吉「・・・そうであると願わずにはおれんの。」

謙太「じゃ、次。」

問 以下の問いに答えなさい。

小説や劇などの物語で、めでたく解決を迎える最後の場面を何と呼ぶでしょう。

姫路瑞希の答え

『大団円』

教師のコメント

正解です。さすがですね、姫路さん。

物語はハッピーエンドばかりではなく、悲劇的な結末の場合は、カラストロフィーと呼んだりします。姫路さんは、どんな物語が好きでしょうか？世界には、一人の人間が生きてる間だけでは読み切れないほど沢山の、素晴らしい物語が存在します。より多くの物語に触れ、見聞を広めて下さい。

吉井明久の答え

『ラスボス戦』

教師のコメント

『経験値が足りません』

謙太「もうなんというか……」

秀吉「呆れるばかりじゃのお。」

謙太「これが終わったら、明久の家のゲームソフトを没収するか。」

秀吉「……そうするかの。」

謙太「それじゃ、次行くか。」

明久「んっ……なんかすごく嫌な夢を見ていたような……。」

秀吉「どんな夢なのじゃ？」

明久「謙太と秀吉が、ものすごく暴言を吐いてくるんだ。」

謙太&秀吉「……。」

明久「どうしたの？まるで本当にあったことのような……。」

謙太「そんなわけあるか！そう、それは逆夢だ！！」

秀吉「そ、そうじゃ！！すべて夢だったのじゃ！！」

明久「どうしたの、二人とも？そんなに焦って……。」

謙太「そ、そんなことより明久、次が最後だぞ？」

明久「そうなんだ。それじゃ、行ってみよう。」

第十三問

問 以下の問いに答えなさい。

文月学園において採用されている、

試験を用いて行う戦いを何と呼ぶか答えなさい。

2年の生徒（明久以外）の答え

『試験召喚戦争』

教師のコメント

正解です。この学校にいるのなら、常識ですね。試験を用いて勝敗を決めるのであれば、教師が認める限り、戦いの方法は問いませんが、主に召喚獣を用いた勝負によって争われます。試験召喚獣は、科学と超科学の最先端技術が融合し生み出された、奇跡のシステムです。まだ実験的な側面もありますが、斬新な試みとして各方面より注目されています。

吉井明久の答え

『お受験戦争』

教師のコメント

この作品の根幹を間違えないでください。

謙太「これを間違えたらもう終わりだろ・・・？」
明久「・・・面目ありません。」

秀吉「まあまあ、これで振り返りは完了したじゃろっ？」

謙太「振り返れてないけどな。」

明久「それじゃ、とりあえず……」

「……一期愛読、ありがとっございました！……」「」「」

第七十九話 バカテスト、其の？（後書き）

これで本当に完結です。

今更ですが、読んでくださってるみなさんに感謝です！
これからも、拙い文をよろしく願いますm（――）m

第八十話 (前書き)

それではOVAに入ります。

ちなみに、OVAは原作風にしたいと思っています。

・・・あっちの方がちよつとシリアスで好きなんですよね。

それでは、うまく書けるかはわかりませんが、お願いします。

第八十話

夏休みまで、あと一ヶ月と迫った今日この日。

明久の一騎打ちが徒勞に終わって直ぐ、この学園の大きなイベント『清涼祭』が近づいてきた。

清涼祭とは、要するに学園祭だ。

しかし、試験召喚システムや試召戦争など話題性たっぷりのこの学校の学園祭ということもあり、例年沢山の来場者が訪れる。

そして、生徒である俺たちもそれに応えるべく、各クラス工夫を凝らした出し物の準備に追われている。

そんな中、俺たちFクラスはというと・・・

「さあ来い、吉井!!！」

「勝負だ、須川君!!！」

野球をしていた。

キャッチャーの雄二が明久に指示を出す。

『次の球は・・・』

セカンドを守っている俺にも、それは見える。

『カーブを・・・』

カーブか。

明久カーブなんて使えたっけ？

・・・まあいい。

『ピッチャーの頭に』

「それ反則でしょ!!！」

明久が首を振る。

「遠慮するな、思いつきり来い!!！」

雄二がキャッチャーミットを須川の頭の後ろに移動する。

・・・須川、気づけ。

「貴様ら!!」学園祭の準備をサボって何をしているか!!」

「ヤバツ、鉄人・・・」

いつの間にか、雄二の後ろには鉄人が立っていた。

「戦略的撤退だ、バラバラに逃げろ!!」

「了解!!」

雄二の指示を受け、Fクラスが散り散りになる。

「明久、謙太、逃げるぞ。」

「うん!!」

「了解つと。」

俺達は、三人でグラウンドを横断する。

「吉井、貴様が主犯だな!？」

鉄人は、そんな中での確に明久を狙う。

「今指示をだしてたのは雄二じゃないですか!!」

明久が、走りながら弁明する。

「お前が指示を出させたんだらう!!」

「どうしてそう僕を目の敵にするんですか!!」

鉄人はさらにスピードを上げる。

俺一人逃げることはできるが、そうなることいつらを見捨てることになる。

・・・問題無いな。

「そんじゃ、さらば!!」

「あつ、謙太!!」

俺は、二人を振り切り一気にスピードを上げた。

「逃がすかつ!!」

雄二の声が聞こえるが、アイツに追いつかれはしない。

よし、逃げ切れ・・・

ゴン!!

後頭部を、激しい痛みが襲った。

「んなつ!？」

目の前で星が瞬き、俺は倒れた。

「よし、当たった！」

どうやら当てたのは雄二らしい。

・・・雄二のガッツポーズが目には浮かぶ。

「さて、主犯格は全て捕まえたな。」

鉄人の声。

ああ、あいつら既に捕まってたんだ。

・・・だったら逃がしてくれよ。

「さつさと全員を集めてこい！！我がFクラスだけが出し物が決まっ
つていないんだぞ！？」

「・・・は、はい・・・」

俺達は、鉄人に一発ずつ殴られたあと、クラスの奴らを集めて回っ
た。

「さて、そろそろ清涼祭の出し物を決めなければならぬわけだが、
・・・」

全員を教室に連れ戻し、俺達は学園祭の出し物を決め始めた。

「とりあえず、議事進行及び実行委員として誰かを選出する。そい
つに全権を委ねるから、あとはそいつに任せな。」

雄二が、教卓で気だるそうに言った。

まあ、コイツは戦争にしか興味なさそうだな。

・・・それを言ったら俺もか。

「ケホッ、ケホッ・・・」

そんなことを考えていると、明久と何かを話していた姫路が小さな
咳をした。

姫路、結構無理してるよな。

もともと体はそんなに強くねえし・・・

「どうしたのじゃ？謙太よ。」

秀吉が、俺の顔をのぞき込む。

「ああいや、なんでもない。それより、美波が実行委員になるみたいだな。」

俺は、指名されている美波を指さし、適当にごまかした。

姫路を見ていたなんて言えるわけない。

「確かに、島田ならうまく纏められるかも知れぬのお。」

「そうか・・・？」

こんなにアクの強い奴らを纏めるのは、一筋縄じゃ行かねえと思うけどな。

「それじゃ、代表は島田でいいか？」

「え？ウチがやるの？うん・・・」

雄二に話を振られた美波は、困ったように腕を組む。

「ウチは召喚大会に出るから、ちよつと困るかな・・・」

召喚大会？

そういえば、そんなものもあつたな。

「ねえ雄二。実行委員なら、姫路さんのほうがいいんじゃない？」

「ほえ？私ですか？」

明久が姫路を指名し、姫路はいきなり話を振られて驚いていた。

「姫路は無理だろ。少数意見なんかも全部採用しかねないからな。」

「ああ。全員の意見を丁寧聞いているうちに、タイムアップだ。」

俺のあとを雄二が続けた。

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ？」

「え？そうなの？」

美波の言葉に、気が抜けたような返事をする明久。

「はい、美波ちゃんと組んで出場するつもりです。」

姫路が、小さくガッツポーズをする。

「あんな試験召喚システムのための晒し者にされるような大会に、よく出る気になったな。」

召喚大会には、召喚獣どうしの戦いのデモンストレーションという

要素が強いらしい。

したがって、多くのギャラリーに自分の点数をさらけ出す羽目になる。

・・・Fクラスは恥さらし以外の何物でもないだろう。

「うちは瑞希に誘われたんだけどね。瑞希ったら、『お父さんを見返す』って意気込んで聞かないのよ。」

「お父さんを見返す？」

明久がオウム返しをする。

「うん、家で色々言われたみたいなの。『Fクラスのことを馬鹿にされたんです！許せません！』って怒ってるの。」

「へえ、姫路さんが怒るなんて、珍しいね。」

・・・いや、結構頻繁にキレてる気がするぞ？特にお前に。

「だって、みんなのことを何にも知らないのに、Fクラスってだけで馬鹿にするんですよ？許せません！」

「・・・」

姫路、お前のお父さんは正しい・・・とは口に出せなかった。

「だから、Fクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻を明かそうってわけなの。」

なるほど、確かにいい案だ。

そうすれば、Fクラスはクズばかりのクラスじゃないということを実証できそうだ。

・・・まあクズもいるけど。

「おい、こつちを進めていいか？」

「ああ、ゴメン。で、なんの話だった？」

・・・もう忘れたのか。

「島田が実行委員をするって話じゃろ。」

「ああ、そうだった。」

秀吉の説明で、ポンと手を打つ明久。

「やっぱりウチは無理かな。召喚大会に出るし。」

やはり、美波は難しいらしい。

「雄二、実行委員に補佐を付けるってのはどうだ？」

俺は、明久を目で示しながら言った。

「なるほど、いい案かもしれないな。」

雄二も、明久を見る。

「島田、副実行委員を付けるならいいか？」

「うーんと、その副実行委員次第でやってもいいけど。」

「よし、それではまず候補を上げる。そしてその中から島田が二人選んで、その二人で決選投票をしてもらおう。」

てきばきと事を進める雄二。

「・・・どんだけサボりてえんだよ、こいつ。」

「わしは明久が適任じゃと思うがの。」

俺がそんなことを思案していると、横の秀吉が声を上げた。

「ええ、僕？僕もそういう面倒なことはパスしたいんだけど・・・」

「それは皆とて同意見じゃ。それなら親しい者がやるほうがよいじやろう。島田は召喚大会に出たりして大変じやろうからの。」

「むう、それはたしかにそうだけど・・・」

どうやら明久は納得いかないようで、不満げに頬を膨らました。

「・・・まあ、どうせこいつがなるとは思うがな。」

俺は、さっきからチラチラと明久を見ている美波を見ながらそんなことを思っていた。

「それじゃ、二人候補を上げてくれ。」

しばらくしたあと、雄二に促されチヨークを持つ美波。

そんな美波が書いたのは・・・

候補？吉井

候補？明久

「・・・予想の範疇だ。」

というより、予想通りといったほうがいいだろう。

「さて、この中から選んでくれ。」

「ねえ雄二、この候補の挙げ方はおかしくない？」

雄二の言葉と同時にざわめき出す教室。

明久が何か言っているがスルーの方向で。

「どうする？どっちがいい？」

「うーん、どっちもクズだしな・・・」

酷い言葉よう。

「こらあつ！！真面目に悩んでるふりをするな！それと、クラスメイトを平然とクズ呼ばわりする君たちの方がクズだ！！」

「自分がクズということは認めるんだな。」

「ぐっ、ぬう・・・」

俺が明久の揚げ足をとってやると、明久は黙り込んだ。

「ほらほら、ウチとあんたでやることになったんだから、早く前に出ないと。」

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされてる気がするよ・・・」

美波に促され、明久は渋々前に出た。

「それじゃ、あとは頼んだ。ふああ・・・」

欠伸をしながら明久の方に手を置く雄二。

コイツ、確実に寝る気だ。

・・・まあ、俺に何か害があるわけじゃねえし、気にしねえけど。

「それじゃ、チャツチャと決めるわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれば拳手してくれる？」

驚いたことに、美波の言葉を受け数人が拳手した。

やる気がある奴もいたのか・・・

「それじゃ、土屋。」

美波に指名され、ムツツリが立ち上がる。

「・・・」

「却下」

「・・・写真館。言う前に否定するな。」

気づいたときには、俺はムツツリの意見を却下していた。

「お前が言う写真館は社会的に見て違法なんだよ！」

思わず語気が荒くなる。

「アンタ、本当にうぶね。」

「んなつ!？」

美波に痛いところを突かれ、思わず黙り込む。

顔が真っ赤になっているのがわかる。

「それじゃアキ、とりあえず意見だし黒板に書いてもらえる？」

「あいよ！」

明久が、二つ返事で承諾する。

候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』

・・・ものすごく怪しくないか？

「次は・・・横溝ね。」

美波が明久が書いた文を無視する。

おかしいと思ってるのは俺だけか!？

「次は・・・横溝ね。」

横溝が立ち上がる。

「俺は、メイド喫茶・・・は使い古されてるので、ここは斬新に」

ウエディング喫茶』を提案します。」

「ウエディング喫茶？それってどういうの？」

何だそれは。聞いたこともないな。

「普通の喫茶店だが、ウエイトレスがウエディングドレスを着ているんだ。」

「へえ、斬新だな。」

けど、初期投資が結構かかりそうだな。

「憧れる女子也多そうだ。」

「でも、ウエディングドレスって動きづらくないのか？」

「調達も大変そうだ。」

「それに、男は嫌がると思うぞ？結婚は人生の墓場とも言うし。」

クラスがざわめきながらも話し合う。

意外にまとまっているな。

「アキ、今の意見を黒板に書いて？」

「あ、うん。」

美波に促され、明久が黒板に書き込む。

候補？ ウエディング喫茶『人生の墓場』

・・・思いつきり否定意見に見えるんだが？

「他に意見は・・・はい、須川。」

美波に指名され、須川が立ち上がる。

「俺は中華喫茶を提案する。」

こいつにしては普通だな。

まあ、須川はわりと常識人らしいしな。

・・・異端審問会会長だけだ。

「中華喫茶って、チャイナドレスでも着せる気？」

美波が、訝しそくに聞く。

まあ、チャイナドレスは露出が多いし、女子が嫌がるのも無理ない。「いや、そんなイロモノ的な格好で稼ごうと思うわけじゃない。俺

が提案するのは、本格的なウーロン茶と、簡単な飲茶を出す店だ。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉から分かるように・・・

「おいおい、須川が何か語り始めたぞ？」

「近年、ヨーロッパ文化による中華料理の淘汰が世間で見られるが、そもそも食というのは・・・」

須川が熱く語っている。

もうどうでもいいから俺も寝ようかな・・・

俺は、ふと前の黒板を見た。

そこには、明久が今の意見を既に書いていた。

候補？ 中華喫茶『ヨーロッパアン』

・・・須川、何かいろいろカットされてるぞ。
ドンマイ。

第八十話（後書き）

謙太「小説風だやっぱり時間がかかるな・・・」

優希「そうですね。」

謙太「まあいいか。次回を楽しみに！」

第八十一話（前書き）

学園祭編その2です

・・・とても長くなりそうだ。

第八十一話

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

明久がひと通り書き終えたところで、鉄人が入ってきた。

「今、候補は黒板にある三つです。」

明久が、黒板に書いてある候補を見せる。

候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』

候補？ ウエディング喫茶『人生の墓場』

候補？ 中華喫茶『ヨーロッパ』

「……補習の時間を倍にしたほうがよさそうだな。」

黒板を見た鉄人は、呆れたため息をついた。

「……まあ、当然の反応だな。」

一方、補習を増やすと言われて焦ったFクラスの皆は……

「せ、先生！それは違うんです！」

「それは吉井が勝手に書いたんです！！」

「僕らが馬鹿なわけじゃありません！！」

……明久を売った。

「馬鹿者！！みつともない言い訳をするな！」

鉄人が、そんな言い訳を一蹴する。

その言葉で、思わずみんなの背筋が伸びる。

そして明久は、自分を救ってくれた鉄人に、珍しく尊敬の眼差しを向けている。

しかし、その直後……

「先生はバカな吉井を選んだこと自体がバカな行為だと言っているんだ。」

明久は、震えながら拳を握りしめた。

「・・・よく考える明久、鉄人がお前を助けるはずがないだろう。」

「全くお前たちは・・・少しは真面目にやったらどうだ？学園祭の売上で設備を向上させようとか、そんなことも思わないのか？」

「・・・そうか、その手があったか！！」「・・・」

鉄人が発した言葉に、クラスが急に活気づく。

「その手があったのお。それならこのみかん箱ともオサラバできそうじゃ。」

秀吉も、嬉しそうにみかん箱を見る。

「・・・多分無理だぞ？」

俺は、周りに聞こえないように秀吉に言った。

「どういうことじゃ？」

秀吉は、何の事かが分からないといった顔をしている。

まあ、このことに気がつくのは雄二くらいだろう。

「この学校の目的を思い出せ。なんのためにこんな制度を導入しているかを。」

「それは・・・学習意欲の向上じゃろう？」

秀吉が、上目遣いで俺を見てきて、俺は思わず顔を背ける。

「・・・本人にその気がなくとも、かなり優子にそっくりだ。」

「ああ。そして、学園祭には勉強の要素がないだろ？」

「そうじゃな。」

俺は顔をそらしたまま答える。

「あとは簡単だ。勉強もせずに設備を上げようなんて行為、あのババアが許すはずがない。」

「なるほどのお。」

秀吉が、納得したように頷く。

「まあ、鉄人は俺たちを活気づかせようと嘘をついたようだし、周りには黙っていたほうがいいだろう。」

「そうじゃな。設備がそのままなのはちと残念じゃが。」

秀吉が、残念そうにうつむく。

「今回はそういうの抜きで、とりあえず楽しもうぜ？」

「・・・そうじゃな。」

秀吉も納得したように頷いた。

「そこ、ちゃんと聴いてる？」

南に注意されたところで話をやめ、俺達は前をむいた。

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するように！

！」

美波が、無理やり意見をまとめる。

「・・・結構強引な決め方じゃな。」

「このクラスならしょうがないだろ。」

というより、むしろまとまったことが奇跡だ。

さすがは美波、といったところか。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ。」

「・・・」

そう言つて立ち上がる須川と、無言で立ち上がるムツツリ。

「あれ？ムツツリ二、料理なんて出来るの？」

「・・・紳士のたしなみ。」

ムツツリはそう言い切つたが、中華料理が真摯のたしなみだという話は聞いたことがない。

大方、チャイナドレス目当てで中華料理屋に通つた結果だろう。

・・・まあそんなことはどうでもいいか。

「まずは厨房とホール班に分かれてもらうからね。ホール班はアキのところ、厨房は須川のところを集まって！」

俺は厨房は無理だから・・・ホール班か。

「私は厨房に・・・」

「バカ、数少ない女子である姫路はこつちだ！！」

俺が、殺人を行おうとする姫路を必死で止める。

「そうだよ姫路さん！君はホール班じゃないと！！」

明久も、俺の意を察して姫路を止める。

「明久、謙太、グッジョブじゃ！」

「・・・」
秀吉とムツツリが、俺たちの行動に気づいたのかアイコンタクトを送ってくる。

そして教室の端の雄二は、寝ているはずなのに震えている。

・・・コイツ、姫路の料理という言葉で目を覚ましたな。

これは相当なトラウマだ。

「明久君、謙太君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

どうやら姫路は納得いかないようで、頬を膨らませている。

まだ気づいていないのか・・・？

「えっと・・・姫路さんは可愛いから、ホールの方が店の売上が・・・って美波！！僕の背骨はサンドバックじゃないよ！！」

事情を知らない美波が、客の命を救ったはずの明久にさながらボクサーのようなパンチを繰り出している。

「か、可愛いなんてそんな・・・それじゃ、ホールでも頑張りますね？」

いや、ホールだけに専念してくれ。

「えっと、アキ。うちは厨房にしよう・・・かな？」

「うん、適任だと思う。」

「・・・」

オイオイ、さすがに鈍感すぎるだろ・・・
いい加減気づけよ。

「それじゃ、ワシも厨房にしよう・・・」

「秀吉！！何をバカなことを言い出すのさ！！そんなに可愛いんだから、ホールに・・・イヤアツ！！美波様、腰骨が折れます！！命にかかわる大事な骨が！！」

・・・墓穴を掘ったな。

「・・・うちもホールにするわ。」

「そ、それがいいと思います・・・」

結局、秀吉、姫路、美波のFクラス三大美女(?)はホールに回る

ことになった。

その頃、俺の横にいる秀吉は、何故か複雑な顔で何かを思案していた。

「……ワシが可愛いとは、何か複雑じゃのお。」
「……忘れよう。」

その日の帰り。

「久しぶりに一緒に帰るわね。」

「そうだな。」

俺は、久しぶりに優子と一緒に帰っていた。

「もうすぐ学園祭ね。」

「そうだな。」

優子が、俺の横を歩きながら行った

ちなみに俺は、学園祭が結構楽しみだったりする。

「私たち、召喚大会に出るんだ。」

「へえ？」

召喚大会……姫路たちも出るらしいから、教科によっては結構接戦になるな。

「けど、あんな大会に出ようなんて、変わってるな。」

召喚大会には、あまりメリットがないと思うんだが？

「実は、代表に誘われちゃって……」

「霧島が？」

これもまた意外だ。

「優勝商品の、プレミアムチケットが欲しいからって。」

「……霧島らしいな。」

おそらく、霧島はガチで来るだろうというのが安易に予想できた。

「応援にきてね？」

「ああ。分かった。」

「ありがと！」

俺が頷くと、優子がニコツと笑った。

・・・可愛い。

そのあとも、とりとめのない話が続く。

「そういえば、どうして又Fクラスになっちゃったの？」

「ああ、話してなかったっけ？」

「うん。」

「聞きたいか？」

「聞きたい。」

俺の問いに、優子は即答した。

少し考えた俺は、ありのままを話すことにした。

「まあ、正直言うとFクラスのほうが面白いからってことかな。あ

あいや、別にAクラスが嫌ってわけじゃないんだ。」

「そんなのわかってるわよ。」

優子は、俺の言葉に気分を害した様子もなく、俺の話聞いている。

「Fクラスって、結構落ち着きがないだろ？」

「ああ、たしかに。異端審問会とかなんとかをやってるしね。」

「俺も結構から、とても気が合うんだ。」

まあ、異端審問会には苦労してるんだけどな、と続けると、優子が

ふふつと笑った。

「Fクラスって、結構いいクラスだよ。私も思うもん。」

「そうか？」

「少なくとも根本よりはね。」

「比較対照がおかしい。」

「あはは、たしかにそうだよな。」

そんな雑談をしていると、いつの間にか優子の家付近にいた。

「それじゃ、また明日。」

「ああ、また明日。」

「あ、言い忘れてたけど・・・。」

優子が、俺の横に戻ってくる。

「どうした？」

「私たち、メイド喫茶をやるんだ。」

「メイド喫茶!？」

俺は、思わず大声で聞き返す。

「うん。だから、もし余裕があつたら見に来てくれない？」

「言われなくても行くつもりだ。」

「そう、それは良かったわ。それじゃ、また明日」

優子は、笑顔でそう言つと、家まで小走りでかけていった。

メイド喫茶、か・・・

俺は、少しウキウキしながら家に向かって歩き出した。

P r r r r P r r r r

メールの着信音が鳴り、俺はケータイを開く。

T O . 明久

大事な話がある。ごめんけど、すぐに学校に戻ってきて。

珍しいな。明久が放課後に俺を呼び出すなんて。

「・・・了解つと。」

返信を済ませた俺は、来た道をダッシュで戻った。

「ああ、謙太。」

「どうした？何かマズイ事でもあったか？」

俺は、メンバーを見渡していった。

メンバーは秀吉、美波、明久、雄二の4人。

「ああ、実は・・・」

明久が、言いづらそうにモジモジする。

「姫路が転校するかもしれない。」

雄二が、明久のかわりに言った。

ああ、姫路が転校ね、それは確かに問題・・・

「・・・は？」

冗談だろ？

「瑞希、両親に転校を勧められてるんですって。」

美波が、俺に気を遣うように言った。

「転校って、なんでそんな急に・・・」

俺は、頭をフル回転させて考えた。

こんな中途半端な時期に、姫路の親が転勤するとは考えられない。

「・・・もしかして、この設備のせいかな？」

「実は・・・そうなんだ。」

明久が、沈痛な面持ちで言った。

「この設備も含め、姫路が転校を勧められた理由はおそらく3つじや。」

秀吉が三本指を出す。

「一つ目はござとみかん箱だけというこの設備。二つ目はこの老朽化した教室。三つ目はレベルの低いクラスメイトだと考えられる。」

「成程・・・」

雄二の説明に、俺は、腕を組んだ。

「一つ目は学園祭の売上でどうにかなるし、二つ目はババアに言えば何とかなるかもしれないとして・・・三つ目が厄介だな。」

俺は、思わず俯く。

さすがに厳しいな・・・。

「何故だ？姫路と島田が出るから、優勝する可能性は十分だと思う」

が・・・？」

「優子と霧島がでる。」

「なんだと、あの二人が！？」

俺が言った言葉に、雄二は驚いたように目を丸くしている。

やれやれ、ちゃんと妻の行動を見ておけよ。

「どうやら、優勝賞品が目当てらしい。」

「優勝賞品・・・？」

「如月グランドパークのペアチケットだ。」

「そうか・・・」

「あれ？雄二、嫌じゃないの？」

雄二が拒絶反応を示さないことに驚く明久。

「もう一回経験済みだから、特に何も思わない。」

雄二は、淡々とそう言うと、教室から出ようとした。

「雄二、どこ行くの？」

明久が、それを追いかけながら聞く。

「決まっているだろ？それはもちろん、学園長室だ。」

雄二は、当然といったふう言い、教室を後にした。

「ま、待って！！」

明久も、その後続いた。

第八十一話（後書き）

優希「お久しぶりの優子ちゃん!!」

優子「どうも」

謙太「最近、全然出なかつたな。」

明久「Fクラス重視だったからね。」

優希「私も全然出ないです、ぶう」

謙太「悪い、明日は絶対出れるから。」

優希「そうですか」

謙太「それじゃ、次回をお楽しみに!!」

第八十二話（前書き）

夏休みだ！！キャッホーイ！！
うれしいな
そんな感じで学園祭。

第八十二話

「そういえば謙太よ、設備は替えられないのではなかったのか？」
あいつらが学園長室に向かったあと、秀吉がそんなことを聞いてきた。

「大方大丈夫だろ。雄二ができるってんだから、何か考えがあるはずだ。」

おそらく、アイツも鉄人の嘘には気づいているだろう。

「ちよつと謙太？設備が変えられないってどういう・・・？」

「ああ、それはだな・・・」

事情を知らない美波に、一通りの説明をした。

「それって、結構まずくないの？もし、坂本が何も考えていなかったら・・・」

美波が、不安そうな顔をする。

ここまで思いつめているのは姫路の転校がかかっているからだろうし、その気持ちは十分わかる。

「俺たちにできることは少ないからな。あいつらに任せよう。」

「そうね。アキたちがうまくやってくれるわよね。」

美波も気を取り直したようで、少し安心。

「俺も、姫路の転校を阻止するために召喚大会に出てみるかな。」

なんだかんだで、初恋の相手だし。

「んむ？謙太よ、お主出るのか？」

「ん？ああ。俺が優希とかと組んで出れば、ちよつとは良いところまで行けそうだしな。」

「・・・そんなことしたら余裕で優勝じゃない。」

美波が、呆れるように言った。

「それが一番だろ？ムツツリとか愛子が出ないんなら、十分勝ち目はある。」

保健体育以外は良い線いってるし。

「それは頼もしい限りじゃが、さっき配られた要項を見ておらぬか？」

「・・・そんなもの知らない。」

言うておくが、決してなくしたり、落としたり、破れたりしたわけではない。

というより、そもそもそんなものもらった覚えがない。

「全く、さつき紙飛行機にして遊んでおったから、てっきり読んだものと思ひ込んでおったわ。」

「ああ、あれか。」

「全く・・・近頃Fクラスに毒されておるのではないか？」

そう続けた秀吉は、ため息をつきながら俺にワラ半紙を渡した。

「悪いな。え〜っと・・・参加希望者は二人揃って担当である西村のところへ来ること。なお、例外として佐藤謙太は個人での参加とする・・・ってオイ!!」

俺の立ち位置はそういう感じになっているのか!?

「お主は数学や化学ならどうにでもなると思うのじゃが、世界史や保健体育はAクラスの平均並みじゃからのお。」

「・・・保健体育は最近更に落ちた。」

この前勉強しすぎたせいで、保健体育の教科書も見れなくなってしまった。

「・・・我ながら、俺はウブ過ぎると思う。」

「まあ、しょうがないじゃろう。」

「大丈夫よ。数学と化学は教師並みだし。」

秀吉と美波が俺を励ましてくる。

「あ、ああ。ありがとう・・・」
「あ、ああ。ありがとう・・・」

・・・なぜだろう、急に泣きたくなってきた。

「それじゃあ今日はもう遅いし、帰るとするかの。」
秀吉が、下校の準備を始める。

「え？アキたちを待たなくていいの？」

「もう遅いからのお。あやつらはともかく、女子である島田が遅いのも危険じゃろう？」

不思議がる美波に秀吉が言った。

「・・・そうね。それじゃあ今日は帰るとするわ。じゃあね、謙太。」

「また明日なのじゃ。」

「ああ、また明日。」

美波も納得し、二人は教室を出ていった。

・・・さてと。

せめて俺は、アイツらを待っておくとするか。

俺は、おもむろに教科書を取り出し、軽く勉強を始めた。

三十分後

ガラガラ・・・

「あ、謙太。まだいたんだ。」

明久が、入ってくるなり失礼な言葉を言った。

「・・・お前らを待ってたんだが。」

「ああ、そうだったんだ。」

明久は、特に変わった様子もなく自分のバッグを取った。

「首尾は？」

「えつと・・・上々だよな？」

「ああ。設備の向上も特例として認めさせたし、なかなかだろう。」
少し遅れて入ってきた雄二が、満足そうに言った。

「へえ、よくあのババアが首を縦に振ったな。」

「まあ、年に一度の学園祭だしね。それに、謙太の腕輪のデータもかなり参考になったらしいし。」

「ああ、あれか・・・」

なるほど、あのババアが頷くのもわかる。

あのババア、システム開発には本当に力をいれているから、データも立派な資産なんだろう。

「大方、売上で設備向上は、そのデータの対価ってどこか？」

「え？あ、ああ、うん。」

明久が、歯切れの悪い返事をする。

・・・何かおかしい。

「まあそんな話はいいだろう。それより、今日はさっさと帰るぞ？」

「そうだね。早く帰ろう。」

「え？突然何を・・・？」

「いいから！！」

雄二の明らかすぎる話題の換え方や、明久の同意の仕方に若干の違和感を感じつつ、俺たちは家に帰った。

そして当日。

俺は、Fクラス・・・ではなくAクラスに居た。

「謙太、ここよろしく。」

「OK。」

俺は、優子が指さす所のシステムデスクを外の空き教室に運ぶ。

「謙太くん。次は僕の方を手伝ってくれるかな？」

「分かった。」

そして優子の支持で、さながら喫茶店のようなテーブルを並べる。

俺は、優子や優子に指示されたところで雑用をこなしていた。

なぜこんなことをしているかという・・・

「私たちのクラス、まともにも机を運べる人がいないのよね〜・・・」
という今朝の優子の一言が原因。

「確かに、ちよつと男の子が頼りないです。謙ちゃん、手伝ってくれますか？」

優希も、それに乗って俺に目線を送る。

・・・そう言われると協力しないわけにもいかず、俺は承諾した。

「やった！！よかったです！一緒に準備しましょう！」

「これで、結構時間短縮になるわね。アリガト！」

喜ぶ優希と優子に多少強引につれてこられ・・・今に至る。

・・・確かに勉強ばかりで運動をしていないというのはわかるが、二、三人いれば運べるんじゃないか？

そんな疑問もあったが、ひとまず俺は協力することにした。

ちなみに雄二は、

「俺がAクラスをちよつと手伝えば、霧島がオシオキをひとつ免除してくれるらしいぞ？」

「よし、行ってこい。」

「了解。」

既に了承済みだ。

「・・・次はこれ。」

「はいはいつと。」

俺は、Aクラスで1時間ほど手伝いをしてから、Fクラスに向かった。

そしてFクラス。

少し遅れて教室についた俺は、教室の予想以上の変わりように驚いた。

「あ、謙太。」

明久が、俺に気づいて俺のところに来た。

「・・・なぜか足元がふらついているが、朝食抜いてきたのか？」

「設備、なかなか凄いな。」

「でしょ？机とかも、秀吉がササッとやってくれたんだ・・・」

明らかにテンションの低い明久が、秀吉を見ながら言う。

室内にいる秀吉、ムツツリが少し冷や汗を流しているところを見ると、何かあったのだろう。

「そうか。そういえば、その胡麻団子、食べていいの？」

俺は、明久がもっている皿に入った胡麻団子を指さした。

「え？あ、うん！いいよ！！」

「・・・じ、自信作。」

「と、とても美味しかったのじゃ！！」

「・・・怪しい奴らだ。」

「まあいい。腹も減ってたし・・・」

俺は、胡麻団子をつかみ、口に入れた。

バタン・・・

「ここはどこだ？」

見覚えのない場所で目を覚ます俺。

あれ？さっきまでFクラスにいた気がするんだが・・・

俺は、直前の行動を思い出そうとした。

「ええっと、確か胡麻団子を食べて・・・」

俺がそんなことを悩んでいると、前方に川が見えた。

「・・・それにしても汚い川だ。」

「誰もいないな・・・ってあれ？」

俺は、川岸に人影を見つけ、小走りに近づいた。

「あの、ここはどこ・・・って雄二か？なんだその格好。」

雄二が来ていたのは死装束。

何かいつもと少し違う。

「それはお互い様だろ、謙太。俺は今からこの川を渡るところだが、一緒にどうだ？」

「いや、こんなきたねエ川なんて渡らねえよ。」

「そうか、なら一緒に連れてってやる。」

「おいっ、やめろ！！」

雄二が、強引に川の中に引きずり込もうとする。

『おいおいそこのお二人さんや。ワシが送ってやるぞい？』

そのとき、どこからともなく声が出て、船と共に渡し守が現れた。

「おう、済まないな。いくらだ？」

雄二が、普通に財布を取り出す。

「六万じゃ。」

「六万だと？バカをいえ。渡し賃の相場は六文と決まって……」

雄二がそこまで言ったところで、突然俺の意識は途切れた。

「はっ！？」

俺と雄二は、同時に目を覚ました。

なんだろう、すごく嫌な夢を見ていた気が……

「二人とも、足が攣ったんだよね？」

明久が、笑顔で駆け寄ってくる。

……目が笑っていないのが気になるが。

というか、あれは謎の胡麻団子のせいだ。

決して足など攣っていない。

「バカをいえ。あれは団子のせい……」

「……もうひとつ食わせるぞ。」

「足が攣ったんだ。」

俺たちの主張を遮り、明久がさりげなく死刑勧告をしゃがった。

・・・この野郎。

「（・・・明久、いつかお前を殺す。）」

「（・・・直ぐにでもこの苦しみを味あわせてやる。）」

「（・・・上等だ。殺られる前に殺ってやる。）」

小声で始まる俺たちの戦い。

「ふーん。謙太はともかく、坂本ってよく足が攣るのね。」

美波が、疑いの眼差しで言う。

まあ、雄二は二度目だからな。

「ほら、二人とも余計な脂肪がついていないでしょ？そういう体って攣りやすいんだ。美波もよく胸が攣るからわかるドベグハツ！」

「俺たちが手を下すまでもなかったな。」

俺達は、自滅した明久に憐れみの目線を送る。

今回だけは、同情する気はないな。

第八十二話（後書き）

謙太「また一人で大会に出るのか。メンドクセエ・・・」
優希「まあしょうがないですよ。謙ちゃん強いですし。」
謙太「そんなもんかねえ・・・」
優希「あはは。それでは、次回をお楽しみに！」

第八十三話（前書き）

夏休み初日！！

友達と遊んだり面白かった。

さて、これ書いたら宿題宿題・・・

第八十三話

「ところで、雄二はどこへ行っておったのじゃ？」

秀吉が、なんとか意識を取り戻した雄二に尋ねる。

「ああ、ちよつと話し合いにな。」

雄二が、言葉を濁す。

コイツ、いつもならハッキリと答えるはずなのに、おかしいな。

「そうですか、それはお疲れ様でした。」

姫路が、なんの疑いも持たずに雄二に笑いかける。

「いやいや、大したことじゃない。」

雄二もいつも通りに戻ったから、わざわざ聞くほどのことでもないか。

「それより、喫茶店はいつでもいけるな？」

「バツチリじゃ！」

「・・・お茶と飲茶も大丈夫。」

秀吉とムツツリが、OKサインを出す。

・・・俺たちが食ったようなものが混ざってなかったらいいんだが。

「よし、少しの間、喫茶店は秀吉、ムツツリーニ、謙太に任せる。」

俺と明久は召喚大会の一回戦を済ませてくる。」

「あれ？アンタたちも召喚大会出るの？」

「お前ら、結構嫌がつてたんじゃないのか？」

俺は、突然出場表明をした明久たちに、今までで一番大きな違和感を持った。

明久も雄二も、こんなことに進んで参加するようなできた人間ではないはずだ。

「え？あ、うん。色々あつてね。」

明久が誤魔化す。

・・・おかしい。

「もしかして、賞品が目的とか・・・？」

美波が、探るように明久を見る。

「うーん、一応そういうことになるかな。」

明久も、悩みながら答える。

賞品……？

「秀吉、賞品ってなんだっけ？」

俺は横にいる秀吉に尋ねる。

「んむ？そんなことも知らぬのか？確か……腕輪とチケットじゃろっ。」

チケット……？

ああ、如月グランドパークのチケットか。

すっかり忘れてた。

それなら、いろいろと説明ができる。

雄二が召喚大会に出た理由や、いいごもる理由、そして……

「誰と行くつもり？」

「明久君、私も知りたいです。誰と行こうと思っていたのですか……？」

「ワシも気になるの……？」

美波、姫路、秀吉が攻撃色を出していることなど……

……秀吉はおかしいだろうが。

「誰と行ってく……？」

「俺と明久で行くつもりだ。」

「……ええ……？」

「アキ、坂本とペアチケットで『幸せになりに』いくの……？」

雄二の突然の宣言に驚く女性陣。

「ちなみに俺は何度も断っているんだがな。」

雄二のダメ押しで、一気に明久から離れる一同。

「アキ、やっぱり木下より坂本の方が……。」

美波が、残念そうに明久を見る。

「美波、その『やっぱり』って言葉はすごく引っかかる！それに秀吉、少しでも残念そうにするのはやめて！」

ふと秀吉を見ると、秀吉は少し涙目で明久を見ながら「どうしてワシじゃなくて坂本なのじゃ・・・」なんてつぶやいていた。

・・・聞き間違いであって欲しい。

「明久、俺は誤解していた。お前は本物だったんだな。」

「謙太、それはとんでもない誤解だからねっ?!」

俺は、少し引き気味に明久を見た。

「あ、明久君。明久君は男の子なんですから、女の子に興味を持つべきですよ・・・?」

「明久も、それができれば苦労しないさ。」

「雄二、もつともらしくそんなこと言わないで!?全然フォローになつてないから!!」

姫路の疑問に雄二が答え、さらに溝が深まっていく。

「という訳で、三人とも頼んだぞ?」

雄二が、俺たちの方を叩く。

「あゝ、俺は無理だな。俺も召喚大会出るから。」

「なんだと!?!」

「いや、少しでも優勝の可能性を上げたいからな。」

少なくともこいつらよりは優勝の可能性がある。

「そうか、分かった。それじゃいくぞ、明久。」

「・・・くっ!とにかく、みんな誤解だからね!!」

明久が、昭和の悪党のようなセリフを吐きながら、雄二と共に出ていった。

「それじゃ、俺も行くかな。」

「・・・頑張れ。」

俺は、ムツツリに見送られながら会場に向かった。

・・・ちなみに姫路、美波、秀吉は、まだショックを受けていた。

「アキ、坂本と行くななんて・・・」

「坂本君はズルいです・・・」

「明久、ワシが嫌いなのかのお・・・」

・・・忘れよう。

「それでは一回戦を開始します。」

「サモン！」

担当である数学の長谷川先生の合図で、召喚獣を呼び出す。横の会場では明久と雄二、Bクラスコンビが登場していた。アイツら、勝てるか・・・？

「佐藤君、召喚してください。」

「え？ああ、はい。サモン。」

俺は、召喚獣を召喚し、正面を見た。

俺の一回戦は、Eクラスコンビか。

教科は数学だし、楽勝だな。

「あら？そつちは一人？」

Eクラス代表の中林が、不思議そうに聞いてきた。

「・・・クラスメイトが腹痛で倒れた。」

「あら、それはお気の毒ね。」

もう一人のEクラスである三上が小馬鹿にしたように言う。

「そんなことは、点数を見てから言うんだな。」

俺は、自分の召喚獣を指さしながら言った。

「なにこれ！？」

二人の声が八モる。

まあ当然だな。

ちなみに点数は・・・

Eクラス、三上美子 / 87、中林宏美 / 94

Fクラス、佐藤謙太 / 714

「教科担当以上なんて・・・」
「バ、バケモノじゃない!!」
二人は、恐れ戦くように行った。
「それでは、試合開始!」
「それじゃ、さよなら。」
先生の合図と同時に、二人に詰め寄り、一刀両断にした。
「あれ?しょ、勝者。Fクラス佐藤健太。」
長谷川先生は、あまりのスピードに驚きながらも、俺の勝利を告げた。
・・・まあ、楽勝だな。

「ただいま」
「あれ?謙太よ。もう帰ってきたのか?」
試合を終えて帰ってきたFクラスには、秀吉、ムッツリの二人しかいなかった。
「ああ。一瞬でケリが付いたからな。」
「・・・早い。」
まああの点数差だし。
「それじゃ、なにを手伝えばいい?」
「そうじゃのお。とりあえずホールを見てくれぬかの。」
「分かった。」
秀吉の指示で、俺はオーダーを取りに走った。
『おうおうおう、キッタネエ店だなあ?』
『こんな店に、まともに食えるものあるのか?』
突然、二つの下品な声が響いた。

チツ、営業妨害？厄介な。

「お客様、店内ではできるだけお静かにお願いします。」
俺が、騒いでいる二人組に声をかける。

「なんだお前？」

「女みてえな顔だな？男装趣味かあ？」

「アツハツハツハ！！！！」

うゝん・・・

俺は、笑っている二人を見ながら考えた。

片方は坊主、片方はモヒカンで、どちらも・・・

「とても不細工ですね。」

「なんだとてめえ！？」「」

あ、口に出ちまった。

「すみません、訂正します。とても汚らしい顔ですね。」

「シバくぞゴリアー！！」「」

よし、ひとまず注意がこちらにむいたようだ。

「お客様、店内ではお静かに。」

「てめえのせいだろうが！！」「」

激昂する二人。

制服から見ると、こいつらは三年らしい。

「チツ、もういい。胡麻団子持ってこ・・・おっ？」

モヒカンが、何かに気がついたように、クロスをめくった。

「なんだよコレ！！キツタネエ箱だな！！」

「こんな物の上に料理を載せていたのかよ！！食中毒でも起こさなければいいがなあ？」

げっ、バレたか・・・

「す、すみません。これは・・・」

慌てて謝るが、時すでに遅し。

『うわ、確かにひどいな・・・』

『クロスで誤魔化していたみたいだね。』

『学園祭と入っても、一応食べ物のお店なのに・・・』

客が一人、また一人と席を立つ。

・・・マズイな。

こんな奴ら一捻りだが、ぶん殴って済む問題じゃねえし・・・
とりあえず今は、雄二を待とう。

「まったく、責任者はいないのか！？このクラスの代ひよゴベツ！
！」

そのとき、文句を言っていた坊主が吹っ飛んだ。

おっ、雄二だ。

「ワタスが代表の坂本雄二です。何かご不満な点でも御座いましたか？」

雄二が、恭しく頭を下げる。

・・・殴り飛ばされただけで十分不満だと思っけどな。

「いや、不満も何も、連れが殴り飛ばされたんだが？」

「それは私の、『パンチから始まる交渉術』に対する冒涇ですか？」

・・・もしこんな交渉術があれば、とつくに世界は争いの絶えない世界へと様変わりしているだろう。

「ふ、ふざけんなよこの野郎！！何が交渉フギヤアア！！！」

「そして、『キックでつなく交渉術』です。最後に、『プロレス技で締める交渉術』が待っていますか？」

交渉術と言いながら、一度も交渉していないのが凄い。

「分かった。こちらは交渉に夏川を出す。俺は何もしないから交渉は不要だ。」

モヒカンが、坊主を指さしながら後退した。

「オイ、ちよつと待てや常村！！お前、俺を売る気か！？」

夏川と呼ばれた坊主は、常村と呼ばれたモヒカンにキレている。

「それで常夏コンビとやら、まだ交渉を続けるのか？」

雄二が、ポキポキと腕を鳴らしながら二人に詰め寄る。

「い、いや、もう十分だ。」

そう言った坊主は、教室から出ようとした。

「そうか、それなら・・・」

雄二は、そんな坊主を抱え上げ・・・

「おい、俺は何もしてないよな?! どうしてそんな大技をげふつ!」

「・・・これにて交渉終了だ。」

バックドロップを決めて、立ち上がった雄二。

「クソっ、覚えてろ!!」

モヒカンが、捨て台詞を吐いて逃げていく。

とりあえず、最大の危機は去った。しかし・・・

「さすがにこれじゃ、食って行く気はしないな。」

「美味しそうだったんだけど・・・」

「腹こわしそうだしな・・・」

客が次々と席を立つ。

さて、どうするか・・・

第八十三話（後書き）

謙太「全く、営業妨害なんて、邪魔だな。」

明久「どうしてだろう？」

謙太「明日分かるだろ。」

明久「そうだね。」

謙太「それじゃ・・・」

「次回をお楽しみに！！」

第八十四話（前書き）

夏休みに入ってから、なんとなく内容が充実している気がして嬉しいです。

執筆にかかる時間は一緒なんですけどね。
それでは、学園祭編です。

第八十四話

「皆様、大変失礼しました。」

ざわざわとし始めた店内に、雄二の声が響いた。

「こちらの手違いでテーブルの到着が遅れていたもので、暫定的にこのようなものを使ってしまうました。ですが、たった今本物のテーブルが到着したのでご安心ください。」

雄二がさした教室の入口には、テーブルを運ぶFクラスの生徒。

どうやら、演劇部の使っている大道具のようだな。

なるほど確かに、設備の改善が目の前で行われたなら、おいそれと出ていくわけにもいかないだろう。

神童の面目躍如、といったところか。

「あれ？テーブル入れ替えてるの？」

そこに、一回戦を済ませたらしい姫路と島田が入ってきた。

「お疲れ。」

「おかえり、美波に姫路さん。一回戦はどうだった？」

「はいっ、なんとか勝てました！」

俺たち・・・というか明久にVサインをする姫路。

姫路は、勝ったことを申し訳なく思うタイプだったと思ったが・・・まあ事情が事情だしな。

「それでは、残りのテーブルも届き次第順次入れ替えさせていただきますので、ご利用中のお客様はひとまずこちらのテーブルにお移りの上、ごゆっくりとおくつろぎ下さい。」

俺たちがそんな話をしている間に、雄二が説明を済ませて帰ってきた。

「ふう、こんなところか。」

どうやら、なれない敬語を使ったせいで疲れているらしい。

「ねえ坂本、テーブルを入れ替えちゃっていいの？演劇部のテーブルなんて、そんなに多くないでしょ？」

戻ってきた雄二に、美波が少し不安げに聞いた。

確かに、いくら演劇部と言っても、せいぜい2〜3つ位だろう。

「確かに。演劇部のテーブルだけで足りるのか？」

「このままじゃ足りないな・・・っと明久、俺たちの次の試合までどれくらいある？」

雄二が、思い出したように明久に聞く。

「えっと・・・小一時間つてとこかな。」

「そうか、あまり時間がないな・・・」

雄二は少し考え、次に俺を見た。

「お前はどうか、謙太？」

「俺か？ああ俺は・・・お前らの30分後だ。」

「そうか、丁度いいな・・・」

俺が答えると、雄二は何かをつぶやき、

「ちやつちやと行くぞ。二人とも、ついてこい。」

雄二が、出口を指さした。

「ウチらは手伝わなくていいの？」

美波が、気遣うように言う。

美波も、姫路の転校を避けようと必死のようだ。

「お前らは、ウエイトレスをやってくれ。落ちた評判を取り戻せる

ように愛想良く、な。」

「はい！頑張りますっ！！」

雄二の言葉を受け、張り切る姫路。

これなら心配いらなそうだな。

「それじゃ行くぞ、二人とも。」

「・・・了解つと。」

俺は承諾して後に行く。

「そういえばどこに行くの？」

明久が、雄二を追いながら言う。

明久の質問に、雄二は不敵な笑いを浮かべ、

「テーブル調達だ。」

そう言い切った。

「吉井君、佐藤君、坂本くん！今日という今日は許しませんよ！！」
後ろを追ってくる布施先生の怒声を聞きながら、俺達はテーブルを担ぎ走っていた。

このテーブルは、学園の応接室からパクってきたもので、当然無許可。

したがって・・・

「明久、謙太、走れ！捕まったら生活指導室だぞ！！」

「鉄人の根城！？冗談じゃない！！」

「死にたくなければ死ぬ気で走ってことか。飛ばすぞ！！」
このような状態になる。

「それにしても、どうして、テーブルを背負って、そんなに早く、走れるんですか・・・」

さっきの大会でお世話になった長谷川先生が、息も絶え絶えに追ってくる。

・・・無理しなければいいのに。

「しかし、俺たち既に、顔が割れてるぞ？どうするんだ？」

「喫茶店に使つちまえばこっちのもんだ！一般客が使用中テーブルを回収するなんて真似は、いくら教師でもできないからな！」

「俺が聞いているのはそういうことじゃなくて・・・」

「それに、今は放送で生徒を呼び出すこともできないからな。せっかく賑わっているときに呼び出すなんて真似もできないだろうからな。」

「そういうことか。」

全く、こいつには脱帽だ。

「くそつ、こうなつたら西村先生に応援を・・・」

布施先生が、走りながらケータイを取り出す。

「マズいつ、鉄人がくるぞ!!!」

「任せろ。明久!」

「あいよっ!」

雄二の掛け声で、明久が上靴を片方脱ぎ、雄二に蹴り上げる。

「オラ、喰らえっ!」

雄二が、それにボレーで合わせ、布施先生の手当てる。

「うわっ!!!」

その衝撃で、布施先生はケータイを落とした。

「それではごきげんよう、先生方!」

雄二が皮肉を言い、俺たちはスピードを上げた。

姿が見えなくなったところで、テーブルを手頃な場所に隠し、明久が秀吉に場所をメール。そして俺たちはまた取りに行くということを繰り返し、なんとか目的の数を集めることに成功した。

「それじゃ、僕たちは二回戦があるから。」

「ああ。頑張れよ、二人とも。」

二人を見送り、手持ち無沙汰になった俺。

あと30分、どうやって過ごそ・・・

『くおらああああ!!!』

・・・鬼ごっこにしよう。

俺が見た先にはすごい剣幕で走ってくる鉄人。さて、どうやって逃げよう。

「・・・なんにも持ってねえな。」

ウェイターの服に着替えたせいで、武器・・・というより逃走用具は何ももってないな・・・

体力勝負も嫌だし・・・おっ、いいこと考えた。

「貴様、今日こそは許さんぞ。」

なんてことを考えているうちに、いつの間にか目の前に立っていた鉄人。

「そうそう鉄人、ちょうど良かった。」

「西村先生と呼べー!!」

「どうせだから、30分くらい召喚獣の相手してくれませんか？」

「ハア？」

鉄人が、訝しげな目で俺を見る。

「ちょうどデモンストレーションになるでしょう?」『試召戦争はこういう感じですよ』って」

「そうだな・・・」

鉄人が腕を組む。

「ほら、丁度周りに観客もいらしたことですし」

「・・・お前の敬語が気に食わんが、いいだろう。」

鉄人はそう言うと、フィールドを展開した。

「そここなくっちゃ、サモン!」

俺は、召喚獣を召喚する。

「サモン!」

鉄人も、召喚獣を出す。

「それじゃ、死ねやアアアア!」

「なんだと!？」

鉄人が呼び出すと同時に、俺は鉄人（本人）に切りかかった。

「クツ、卑怯な!」

鉄人が、慌てて防御をする。

・・・掛かった。

スカッ!

「何!？」

鉄人は、俺の召喚獣が透けたこと驚いていた。

「残念だったな、俺、今腕輪ないんだ」

俺はそう言い残して、ギャラリーの間をぬって逃げた。

「こら、待て、待たんかアアアアアアアアアア!!!」

客であるギャラリーを無下に扱うこともできず、鉄人はギャラリーが散っていくまでそこに立ち尽くす羽目になった。

・・・いい気味だ。

俺は、着くと同時に会場に引つ張り出された。

多少の遠回りをして会場に来たため、時間ギリギリになってしまったらしい。

「それでは、二回戦を開始します。」

英語の教師が、フィールドを展開する。

俺の相手は・・・げっ、久保と美春?!

「佐藤君?君は一人なのかい?」

久保が、メガネを押し上げながら聞いてくる。

「・・・腹痛で病院に行った。」

俺は、一回戦と同じ説明をした。

・・・てか、毎回これ説明するの?

メンドクセエ・・・

「へえ、それなら辞退しないのかい?」

俺の嘘に、久保は、特に疑う様子もなく俺に問いかける。

理由?鉄人の嫌がらせですが何か?

まあそんなこと言うのもアレだし・・・

「辞退なんてするのは、かっこわりいしメンドクセエからな。それじゃ、サモンっと。」

俺は適当な理由を付け、話を打ち切るように召喚獣を出した。

「そうかい。だからといって、手加減はしないから。サモン」

「・・・上等。」

久保も、そこで話をやめ、例の死神のような召喚獣を出した。

「美春。」

「へっ？は、はい。なんですか？？」

「さっさと出せよ。」

「あ、はい。すみません・・・サモン」

美春が、謝りながら自分の召喚獣を出す。

あれ？

いつになくおとなしいな。

普通なら『美春に命令しないでください！この薄汚い豚が！！』なんてことを言ってきそうだが・・・。

「清水さん、一旦離れてください。様子を・・・」

「黙りなさい、この薄汚い豚の分際で、命令しないでください！！」
あ、言った。

「全く、一回戦からずっとこの調子で困る。」

「そうか、まあ頑張れ。」

俺はそう言つと、武器を構えた。

「それじゃ、戦闘開始と行くか。先生。」

「あ、はい。試合開始！！」

先生の合図で、試合が始まった。

「せいっ！！」

「たあっ！！」

久保の鎌と俺の剣が交差し、火花が散る。

「数学なら一瞬でケリが付いたんだけどな。」

「・・・十分強いじゃないか。」

両者一步も引かない攻防が続く。

ちなみに点数は・・・

英語 W Fクラス佐藤健太 / 427

英語 W Aクラス久保利光 / 391、Dクラス清水美春 / 115

点数がほぼ互角であるため、召喚獣の扱いに慣れた俺が圧倒的に有利だ。

「清水さん、援護を・・・」

「話しかけないでください!!」

「・・・」

美春に救援を求めた久保は一蹴され、俺に向き直った。

「さて、そろそろ止めを刺すぞ?」

「ただでやられはしない、愛する吉井君のために!!」

「・・・気持ちは悪いからやめてくれ。」

「スキあり!タアツ!!」

久保が、俺のスキを突き鎌で俺の首を狩りに来た。

「させるかっ!!」

俺は、剣を盾にする。

「なにっ!?!」

久保の鎌が、俺の剣に刺さる。

・・・あぶねえ。

「形勢逆転だ。」

俺は、必死で鎌を抜こうとする久保の後ろに回り込み、槍で突き刺した。

「クソっ・・・」

久保の召喚獣が戦死し、消滅する。

「よし、これでケリが付いたな。美春、まだやるか?」

「・・・いいえ。もう結構です。」

・・・馬鹿に素直だな。

まあ、このくらいのほうが可愛いかな。

「という訳で先生、もういいだろう?」
「え? あ、はい。勝者、Fクラス佐藤。」
こうして、2回戦も順調に勝った。

「……………」

試合が終わり、無言で去っていく二人。

そんな二人を目で追っていると、美春が何かを落とした。

「おい、美春。何か落としたぞ?」

「あつ、ありがとうございます……………つてみちゃダメです!!」

美春が落としたカードのようなものを拾い、何気なく見てみると……

謙ちゃんファンクラブ? 会員番号 No. 000004 清水美春

「……………は?」

「……………ごめんなさい!!」

美春は、俺からカードを奪い取り、逃げていった。

……………俺のファンクラブ、きちんと活動しているんだな。

「……………久保、あいつはもうお前の仲間じゃないみたいだぞ?」

「そ、そんな馬鹿な!!」

……………馬鹿ばかり。

第八十四話（後書き）

謙太「美春が俺のファンクラブに・・・？」

美波「よかったわ。これでやっとウチも開放されるし。」

優子「・・・また一人ライバルが増えたわね。」

優希「・・・負けてられないですこうなったら、」

「寝込みを襲うしか・・・」

謙太「おい！！なにげに恐ろしいこと言うな！！」

美波「あんたも大変ねえ・・・それでは、次回をお楽しみに！」

第八十五話（前書き）

宿題をする気がしない・・・

まあいいや。

まだまだ夏は長いんだし。

それじゃあ行ってみよう。

第八十五話

試合後の一騒動を終え、俺はクラスに帰っていると、前方に見慣れた赤髪を見かけた。

あれは・・・雄二か。

「おい、雄二。試合道だった？」

「ああ謙太か。もちろん勝ったぞ。」

俺が声をかけると、雄二が振り返った。

その雄二の横には、見慣れたツインテールの小学生がいた。

「おつ、葉月。来たのか。」

「はい！えつと・・・」

葉月は困ったように俺の顔を見る。

おつと、そういえばまだ自己紹介してなかったっけな？

「ああ、俺の名前は・・・」

「そうでした、逃げ腰のお兄ちゃんです！！」

・・・小学生にこの扱って、泣きたくなってきた。

「葉月、それってどういう・・・」

「えつと、いつつも逃げてるって聞いたから、逃げ腰のお兄ちゃんです。」

逃げ腰・・・

「えつと葉月？それは結構傷つくからやめたほうが・・・」

確かに、得意技が脱走だとは言ったが、決して逃げ腰なわけではない。

「そうですか・・・じゃあ、可愛いお兄ちゃん！」

「・・・もうそれでいいよ。」

秀吉とかぶる気がするが、今回はもう見逃そう。

「それはそうとして雄二、どうして葉月を連れてるんだ？」

俺は顔を上げ、雄二を見た。

「ああ、Fクラスに行く途中に迷子になっていたのを見つけたから

な。」

なるほど。

今日は人が多いし、迷うのもムリ無いな。

そんな話をしている間にFクラスについた。

「バカのお兄ちゃん！」

葉月が、明久にダイブし、

「はうっ……!!!」

明久に直撃。

「よ、よくきたね、葉月ちゃん……」

明久は悶えながら、葉月に声をかける。

「だって、将来のお嬢さんのお店ですから。」

「……あはは……」

葉月の純粹な発言に思わず苦笑いする姫路と美波と秀吉。

「それに、馬鹿なおにいちゃんとはファーストキスを……」

ゴスツ（×2）

美波と姫路の音速を超える攻撃に、なすすべなく倒れる明久。

「土屋、フォークを持ってきて。5本もあれば足りると思う。」

「……私の分もいるから10本です」

「……!!!（コクコク）」

美波と姫路が鬼の形相で、ムツツリに命令をする。

……明久、生きては帰れないな。

「うわアアアアアア！」

美波たちが準備をしている間に、明久はFFF団に取り囲まれ、吊るし上げられた。

「とつとと死刑!!!」

「いやアアアアア!!!ストップ、ストーーーーーップ!!!!!!!」

……ご臨終です。

「それにしても……この客の少なさはどういうことだ？ 殆どいないじゃないか？」

雄二が、教室内を見渡しながら言う。

「確かにな。ちょうど昼時のはずなのに。」

俺もつられて見渡すが……ほとんどいない。

「そうなの。さっきからずっとこの調子で……」

美波が、不安そうに言う。

ここ最近美波の不安げな顔を見る機会が多くなっている気がする。

……あまり嬉しいとは言い難いな。

「おかしいなあ……テーブルは直したから、衛生面も大丈夫なのに……」

「来た客も皆満足しておったようじゃが……」

明久や秀吉も、思わず黙り込む。

「いや、ある二人は別だ。そうだろ？」

雄二の言葉で、俺もようやく思い出した。

「……常夏コンビか。」

「ああ。おそらくアイツらが、外で何かをやっているんだろう。」

雄二が言うことはもっともだった。

たしかにアイツらなら、そんなことをしていてもおかしくない。

「葉月、ここに来る途中に何か聞かなかったか？」

俺が葉月に尋ねると、葉月は思い出したように言った。

「そつえば、葉月はここに来る途中にいろいな話を聞いたよ？」

「話？ どんな話だ？」

「えっとね、中華喫茶は汚いからいかないほうがいいって。」

「……?!」「……」

葉月の情報に一同は驚いた。

……アイツらならやりかねえな。

「ふむ、零の奴らの妨害が続いている考えるのが妥当だな。探し出してシバき倒すか。」

雄二が、腕をポキポキと鳴らした。

「そうだな・・・なあ葉月、その噂を聞いたのは何処だ？」

「えっと・・・短いスカート穿いた可愛いお姉さんがたくさんいるところですよ。」

それはろっほ・・・じゃなかった、丁度いい情報だ。

「そうか、一旦様子を見に行く必要があるそうだな。」

雄二が何かを考えながら言った

「そうだな、噂がどこまで広まっているのかも気になるところだ。」

それに、ミニスカートも気になるし・・・

「・・・エロはやめたほうがいい。」

「・・・さっきまで一心不乱にカメラ磨いていたやつに言われたかねえよ。」

「・・・！！（ブンブンブン）」

「いや、バレバレだから。」

なおも首を振るムツツリに構うのをやめ、俺は葉月たちを見た。明久は、足にしがみついて駄々をこねている葉月に困っている。

「バカなお兄ちゃん、葉月と遊びに行こっ！！」

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させないといけないから、あんまり一緒に遊べないんだ。」

葉月の誘いを、申し訳なさそうに断る明久。

「むう・・・折角会いに来たのに。」

葉月は、不満げに明久を見る。

「そのちびっ子も一緒に連れていけばいいだろう。ほかの飲食店の偵察がてらに、一緒に昼飯でも食べばいい。」

不満げな葉月の誘いを断りきれずに困り果てている明久を、雄二がフォローした。

「そっか。それじゃ、一緒に食べに行く？」

「うんっ！！」

一気に表情が明るくなる葉月。

今泣いたカラスがもう笑うっっていう言葉があるが、まったくもって

その通りだな。

「それじゃ、俺も行くかな。」

どうやら次の相手は明久たちらしいから、なるべく早くに昼食を済ませておきたい。

「可愛いお兄ちゃんも一緒に行くですか？」

「可愛いお兄ちゃんって？」

葉月の言葉に、明久が食いついた。

「・・・俺のことだ。」

「なるほど、たしかにその通りだね。」

「納得すな！！」

最近は何に間違えられることが少なくなっただけで、密かに喜んでいただけに・・・

「どうせなら、みんなでいこうぜ？客が少ないうちに昼食を摂るつても悪くない。」

「そうじゃな。店の番はワシとムツツリーニしておくから、召喚大会がある雄二たちは行ってくるの良いじゃろう。」

「そうか、悪いな、秀吉。」

「ありがとうございます、木下君。」

「お安い御用じゃ。」

こうして、俺達は六人で食事に繰り出した。

「噂が流れていたのはここですよ。」

葉月が指した方向にあったのはAクラス。

看板には『メイド喫茶 ご主人様とお呼び！！』と書かれていた。
・・・意味わかんねえ。

多分、この感じは優子の指示だな。

「あ、明久。ここはやめよう。」

「ここまで来て何を言ってるのさ、早く入ろう!!」

「頼むからAクラスだけはやめてくれ!!」

雄二が目標を目前にごねていて、それを明久が無理やり連れ込もうとしていた。

「そっか、ここって坂本の大好きな霧島さんがいるところだもんね。」

「別に好きじゃねえ!!」

「坂本くん、女の子から逃げちゃダメです!!」

「うっ……」

姫路と美波が口撃によって雄二を苦しめる。

「さっさと入ろうぜ？腹が減った。」

「そうだね。さっさと……ってムツツリーニ？」

明久が指差す先には、熱心にカメラで撮影する小柄な少年……つてかムツツリがいた。

「……人違い。」

必死で否定するムツツリ。

エロのためにここまで必死になっている姿が哀れを誘う。

「どこからどう見ても土屋でしょうが。アンタ何してるの？」

「……敵情視察。」

こいつには、敵情視察が何かをきちんと教えるべきな気がする。

そんなムツツリに、明久が歩み寄った。

「ダメじゃないかムツツリーニ。盗撮とか、そんなことをしたら取られている女の子がかわいそう……」

「……一枚百円」

「ニダースもらおう……。かわいそうだと思わないのかい？」

「アキ、普通に注文してるわよ。」

「はっ!!」

普通に美波に突っ込まれる明久。

その手には既に財布が用意されていた。

……そんなことしてるから食費が底をつくんだ。

「やれやれ・・・そういえばお前、秀吉と一緒に店番だろ？」

「・・・そんなこと知らない。」

「あの時お前もいたよな？・・・まあいい。さっさと戻れ。」

「・・・分かった。」

そう言つて、明久に写真を押しつけ逃げていくムツツリ。

写真を渡された明久は、

「全く、ムツツリ二には困つたもんだね。」

なんて適当な話をしながら写真を懐にしまおうとして・・・

「明久君、その写真をどうするつもりですか？」

姫路にバレていた。

「やだな、もちろん処分するに決まつてるじゃないか。そんなこ

とよりそろそろお店に入ろっ？ものすごくお腹が減つちやつたよ。」

明久が、適当に話をそらす。

「そうですね。入りましょうか。」

姫路は、話をそらされたことに気づかず店に入ろうとする。

・・・純粹すぎるだろ。

「うんうん、早く敵情視察を済ませないと・・・って写ってるのは

男の足ばかりじゃないか畜生！」

「やっぱり見てるじゃないですか!!！」

「ご、ごめんなひゃい。くひをひっはらないれ!!！」

そしてなぜかバレた明久。

・・・ムツツリの小さな復讐か。

「全く・・・さっさと入るぞ。」

俺は、一番に店に入った。

「・・・お帰りなさいませ、ご主人様。」

出迎えたのは、メイド服に身を包んだ霧島。

・・・綺麗だ。

やはり雄二が避ける理由が分からない。

「お邪魔します。」

俺の後に続き、明久たちが続々と入ってくる。

「お帰りなさいませ、ご主人様にお嬢様。」

その全員を、霧島は丁寧に出迎えていた。

「わあ、綺麗・・・」

「ほんとに綺麗だね、霧島さん。」

「・・・ありがとう。」

そして、みんなが霧島に目を奪われていた。

「チツ・・・」

最後に、雄二が顔をそらしながら入ってきた。

そんな雄二も丁寧に迎える霧島。

「・・・おかえりなさいませ、今夜は帰しません、ダーリン。」

若干セリフが変わっていたが、そこはご愛嬌ってところだろう。

「ご愛嬌で済むか!!」

「あ、聞こえてた？」

「当たり前だ！」

「ああ五月蠅い・・・六人だ。」

「・・・かしこまりました。優希、お客さん」

霧島は、優希を呼んで案内をさせた。

・・・助かった。優子が来ていたら軽く血を吹いていた気がする。

「わかりました〜って謙ちゃんじゃないですか!!」

優希がトコトコと近づいてくる。

「おう。似合ってるじゃないか。」

「ありがとうございます それじゃ、此方どうぞ〜」

俺達は少し大きめのテーブル席に案内された。

「六人ですよね？」

「ああ。」

「それじゃあもう一つ椅子を持ってきます。」

優希は手近な机から椅子を持ってきて、俺たちの机の横に置いた。

「・・・では、メニューをどうぞ。」

俺たちが全員座ったところで、霧島が、丁寧に装丁されたメニューを持ってきた。

なるほど、メニュー自体もさることながら、商品もとても凝ったものばかりだ。

どんなことにも手を抜かない・・・さすがだな。

「ウチは、『ふわふわシフォンケーキ』で。」

「私もそれがいいです。」

「葉月も!!」

女性陣は、店の自慢らしいシフォンケーキを頼んだ。

「俺は・・・この『ホットケーキセット』ってやつ、飲み物は紅茶で。」

俺は、当たり前障りのないホットケーキを頼む。

まあ、どれもおいしそうで、目移りしてしまったのが原因だが。

「僕は『水』で、付け合わせに『塩』もあると嬉しい。」

明久は、メニューには存在しないハズのものを頼んだ。

確かにタダだとは思うが・・・

「そうだな、俺は・・・」

「・・・ご注文を繰り返させていただきます。」

雄二の言葉を遮るように、霧島が言った。

「・・・『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『ホットケーキセット』を一つ、『水』を一つ。『メイドとの婚姻届』を一つ、以上でよろしかったでしょうか。」

「ああ、問題ない。」

「大有りだっ!!」

そんな雄二を無視して、霧島は去っていった。

・・・なかなか面白い光景だな。

「そ、それでは、食器をご用意いたしまひゆ！」

霧島と入れ替わり入ってきたのは、ガツチガチに緊張した優子。

「優子、リラックス。」

「そ、そうね。すう〜、はあく〜・・・」

優子が、俺の言葉で深呼吸を始める。

・・・たまにはちよつとからかうか。

「優子、似合ってるじゃないか。かわいいぞ？」

「ふえっ！？そそそそそそうかしら？」

顔を真っ赤にする優子。

まあ、これはただの本心なんだが。

「ああ。霧島にも優希にも負けてない。」

「そう、あ、ありがとう。」

あれ？おかしいな・・・

本心しか出てこない。

「それでは、食器を用意します。」

そう言つて、俺たちの前に食器を並べる優子。

ちなみに、明久の前には塩、雄二の前には婚姻届だ。

「・・・なあ木下さん、これはどんな冗談なんだ？」

「冗談じゃないですよ。ご注文のとおりです。」

「俺はこんなもの注文した覚えはない！！」

雄二が、顔を真っ赤にしている。

コイツ、さうとう照れてるな。

「優子ちゃん、忘れ物だよ？」

優希が、もう一枚婚姻届を持ってきた。

「ああ、ありがとう。」

優子はそれを受け取ると、おもむろに俺の机に置いた。

「・・・Do you know the law of this country, Yukko？」

「なんで英語なのよ・・・知ってるわよ、男は18歳以上じゃないと結婚できないんでしょ？」

「じゃあこんなものを持ってくるな。」

俺は、名前だけを書き込んで優子に渡した。

「え？これって・・・」

「・・・いいから、早く処分してこい。」

「そう・・・分かった。ありがとね！」

優子が満足げに去っていくのを見届けていると、周りから視線を感じた。

「こんなところでプロポーズなんて、謙太くんも優子さんも大胆ですわ・・・。」

「ウチも見習わないと・・・」

・・・否定できない。

そんなこんなで楽しい昼食(?)をおえ、店から出ようとしたとき

・

『二人だ、中央の席は空いてるか？』

入口から、聞きなれた汚い声がした。

・・・アイツらだ。

第八十五話（後書き）

優子「これさえあれば、来年には・・・ブツブツブツ・・・」

優希「それを寄越すです！」

優子「そんなもつたいたいなことはいわ、サモン！」

謙太「・・・やれやれ。次回をお楽しみに！」

第八十六話（前書き）

今日はいろいろ立て込んでいたので短めです。
変なところで切れてるんですけど、どうかご容赦を・・・

第八十六話

Aクラスの生徒に案内され、中央付近の席に座る常夏コンビ。

そして、テーブルに着くと同時に注文もせず騒ぎ出した。

『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな!!』

『そうだな。さっき行った2-Fの喫茶店はひどかったからな!』

『テーブルは腐った箱だったし、虫も湧いていたもんな!!』

中央付近で、ひたすら俺たちの悪口をまくし立てる常夏コンビ。

あんな事されたら誰もFクラスに寄り付かなくなるのも当然か。

・・・スツ。

そのとき、常夏コンビの会話を聞いていた明久が、無言で立ち上がった。

そして、常夏コンビに向けて歩き出そうとする。

「・・・待て、明久。」

雄二が、そんな明久の手を掴んだ。

「雄二、どうして止めるのさ!!あの連中を早く止めないと・・・」

「落ち着け。こんなところで殴り飛ばせば、悪評は広まる一方だぞ。」

「

雄二が、明久を落ち着かせようとする。

「で、でも・・・」

「明久、状況を見る。」

未だに納得しない明久に、俺が周りを見させた。

Aクラスに来ていた客は、みんな常夏コンビを見ている。

「客の注目が集まっている今のあいづらには手を出せない。下手に

手をだしても、こっちの悪評が広まるだけだ。」

「けど、だからってこのまま指をくわえているだけなんて・・・」

明久は、まだ納得しない。

・・・姫路の転校が懸かっているんだから当然か。

「おいおい、俺は何も手を出さなくていいたわけじゃないんだぞ?」

「え？」

何もできなくて落ち込んでいる明久に、雄二が呆れたように言う。

「殺るなら頭を使えってことだ・・・翔子。」

「・・・何？」

雄二が霧島を呼んだ時には既に、真後ろに霧島がいた。

「・・・コイツ、テレポートでも使えるんじゃないか？」

「あの連中、ここに来たのは初めてか？」

「・・・さっき出て行ってまた入ってきた。話の内容もさっきと変わらない。ずっと同じようなことを言っている。」

雄二の問いに、霧島は不愉快そうに首を振った。

まわりにいた優子たちも嫌悪感を露わにしている。

まあ、これはもうAクラスにとっても営業妨害以外の何物でもないだろう。

「そうか・・・よし、とりあえずメイド服を貸してくれ。」

「・・・分かった。」

霧島は、雄二の無茶なお願いに健気に答え、メイド服を脱ぎだした。
・・・っておい！！

「代表！？何やってるの！？」

「翔子ちゃん！流石にやりすぎですよっ！！」

「き、霧島さん！こんなところで脱ぎ始めちゃダメです！！」

「そうよ！ここにはケダモノが沢山いるのよ！？」

「わあ、お姉さん、胸おつきいです」

女性陣が、慌てて霧島を止める。

「つてか、ケダモノ扱って・・・」

「・・・雄二が欲しいっていったから。」

「着替えるならせめて、誰も居ないところでやらないとダメだよ！」

「・・・だつて、雄二たち、急いでだから・・・」

遅れてやって来た愛子のセリフに、霧島は少し不満そうに口を尖らせる。

「ば、バカ！俺がいつお前が来ているメイド服を欲しいと言った？

予備があつたら持つてきてくれつてことだ!!」

雄二が、真つ赤になりながらそつぽを向く。

・・・なんだかんだでれてるじゃねえか。

「・・・今持つてくる。」

雄二の細かい指示を受け、立ち去つていく霧島。

「・・・今の見た？」

「ああ、あんなサービスもあるんだな。」

「俺も頼んでみようかな。」

気が付けば、俺たちのテーブルはすっかり注目的になっていた。

しかし、常夏コンビより目立てば発見される恐れがあるため、俺達は何事もなかったかのように振舞つた。

「あの店、出してる食べ物もヤバイんじゃないか？」

「言えてるな。食中毒でも起こさなければいいけどな！」

「2・Fには気をつけるつてことだな。」

どうやら常夏コンビは俺たちに気づいていないようで、未だにデマを流している。

「雄二！なんでもいいからアイツ等を!!」

明久は、もう待ちきれなさそうだ。

・・・この様子だと、そのうち暴動でも起こしかねない。

「いいからもう少し待つてろ。姫路に島田、櫛を持つているか？」

「持つてますけど・・・」

雄二は明久を落ち着かせながら、姫路と島田から女性の身だしなみ用品を集めていた。

「悪いな。あとで返す」

雄二は、そう言いながら受け取り、机の上に並べた。

・・・なるほど、だいたい何をするかの見当が付いた。

「・・・雄二、これ。」

少しして、メイド服を抱えた霧島が帰ってきた。

「おう、済まないな。」

雄二は、霧島に礼を言いながらそれを受け取った。

「・・・貸し一つ。」

「だ、そつだ、謙太。」

雄二は、霧島が言ったセリフを俺に流した。

「全く・・・お礼にしてはつまらないものだが、今度雄二を好きに
していいぞ。」

俺は、肩を竦めながら霧島に言った。

「おいっ！！俺の生命をつまらないもの呼ばわりするな！！」

「おつと危ない。」

雄二が俺につかみかかろうとしたが、俺はそれをひらりとかわした。

「・・・ありがとう、佐藤はいい人。」

「ちよつと待て！どうして俺が・・・」

雄二のセリフを無視し、満面の笑みでスキップしながら去っていく
霧島。

コイツ、二年になってから随分と表情が明るくなったな。

「さて霧島・・・」

「俺を勝手に婿養子にするな！！」

俺は雄二を茶化した。

あゝ面白い。

「こいつを誰が着るんだ？」

俺は、メイド服を指さしながら言った。

「明久に着せるつもりだったが、事情が変わった。」

雄二が、せめてもの反撃というふうに行った。

・・・フツ、俺がそれを読んでいないとも思っていたのか？

「あー、俺は無理だぞ？」

「何故?!」

俺が否定をすると、雄二が大仰に驚きながら言った。

・・・どうしたんだこいつ。

「だって、さつき店でアイツらを注意したときに顔割れてるし。」

「くっ・・・じゃあ明久だ!!」

「ええ!?!」

雄二は、苦肉の策といったふうに明久を指さした。

明久はまさか自分が指名されるとは思っていなかったらしい。

普通に分かるだろ・・・

第八十六話（後書き）

謙太「着付けは次回か。」

秀吉「ワシに任せておけ!!!」

謙太「だな。それじゃ、次回をお楽しみに。」

第八十七話（前書き）

学園祭編、まだまだ続きます。

そういえば、アニメは秀吉と優子入れ替わり編でしたね。

あれを早く書きたい・・・

第八十七話

「それじゃ、始めるのじゃ。」

Aクラスの横にある空き教室で、明久の着付けを始めた。

この空き教室には、普段演劇部が着替えに使う教室だからか鏡が置いてあり、俺たちはそれを使って着付けをした。

着付けに参加したのは秀吉、俺、ムツツリーニの三人だ。

・・・と言っても、俺は傍から見ただけだったが。

「・・・明久、立って。」

「あ、うん。」

ムツツリの指示で立ち上がる明久。

ムツツリは、主に服の方を手伝っている。

「えっと・・・どうやって着るの？」

「・・・うん。」

明久を立たせたあと、ムツツリはやたら慣れた手つきでメイド服を着せる。

「ああ、ありがとう・・・ってなにこの姿!!」

明久は、鏡に映った自分を見て目を剥いている。

・・・それにしても早過ぎる。

もしかして・・・

「ムツツリ、家で練習してただろ？」

「・・・!! (ブンブン)」

ムツツリが、すごい勢いで否定するが、かえってその姿はやっていきますと言っているようなものだった。

「ムツツリーニ、そんな人だとは思わなかったよ・・・」

「・・・!!」

「ムツツリーニのエロさには困ったものじゃのお・・・」

「・・・!!」

ムツツリの思わぬ日常が発覚し、明久と秀吉も若干引いている。

「・・・完成ッ！！」

ムツツリが、俺を睨みつけながら着付けを終えた。

「お疲れじゃ、ムツツリーニ。先に教室に戻っておくのじゃ。」

「・・・了解。」

ムツツリは、もう一度俺を睨むと、空き教室から出ていった。

「次はワシじゃな。」

秀吉が、さつき姫路と美波から借りた化粧グッズで、メイクを始める。

「こんなことするなら、秀吉がやればいいじゃないかあ・・・」

「しょうがないであろう。ワシじゃ喧嘩は出来ぬ。」

「だって・・・」

「無理なものは無理じゃ・・・ほれ、完成したぞ。」

明久が文句を言っているほんの数分間に、メイクは完了した。

「こ、この上ない屈辱だ・・・」

明久は、鏡に映る自分の変貌ぶりに軽く凹んでいた。

「それでもないぞ明久よ、存外似合っておるぞ。」

「ああ、どこからどう見ても不細工なウエイトレスだ。」

「・・・不細工はいらないんじゃないかな？」

明久が、俺の言葉で余計に凹む。

全く、せつかく褒めてやってるのに・・・

「謙太よ、それは褒めてるとは言わぬぞ。」

「あれ？そうか？」

「・・・そんなことはどうでもいいとして。」

「そろそろ行くぞ、明久。」

そろそろ行かないと、アイツらがどんなデマを流し出すか分かったもんじゃない。

「そうじゃな、ワシはそろそろ戻るから、存分に悪党をのしってくるが良い。」

「りょーかい。」

俺達は秀吉と別れ、Aクラスに戻った。

「雄二、準備完了だ。」

「分かった。それじゃ、さっさと鬼退治するか。」
「了解。」

俺たちは雄二のところに行き、準備完了を告げた。

「それにしても・・・似合ってるじゃないか。明久。」

雄二が、珍しく明久を褒める。

「雄二・・・」

「ホント、どこからどう見てもものすごく不細工なウェイトレスだな。」

「酷いっ!!」

・・・明久よ、雄二がお前をタダで褒めたことがあるか？

「奇遇だな。俺もそう思っていたところだ。」

「謙太!？」

どうせなら、俺も乗っかろう。

・・・さっき言ったけど。

「謙太、今日は珍しく話が合うな。」

「そうだな。」

「アツハツハ・・・」

なんだこのノリ。

「二人とも嫌いだ!」

明久は、若干涙目で俺たちを睨みつけた。

「さて、それじゃ行くか。」

「・・・そうだな。」

さっきの意味不明なノリから一段落した俺たちは、常夏コンビに近づいた。

「明久、ここからはお前の仕事だ。」

「うん!任せてよ!」

女装した明久が、常夏コンビの坊主頭に近づく。

「お客様」

明久が、裏声で話しかける。

「なんだ・・・へえ？こんな子もいたんだな。」

「結構かわいいな。」

明久を見て口笛を吹く常夏コンビ。

・・・アイツら、目が腐ってるんじゃないか？

「足元を掃除するので、少々よろしいでしょうか？」

明久が、笑顔を崩さずに言う。

「掃除？さつさと済ませてくれよ？」

坊主が、めんどくさそうに椅子から離れる・・・チャンスだ。

「ありがとうございます。それでは・・・」

明久が、坊主に抱きついた。

「え？もしかして俺に惚れ・・・」

「くつたばれエー!!」

「グヘエツ!!」

明久が、坊主にバックドロップを決めた。

しかし、まだ浅い。

「き、キサマはFクラスの吉井!？」

どうやらカツラが取れて、意識があつた坊主にバレたらしい。

「まさか女装趣味が・・・」

「キヤーツ!!この人今私の胸触りました!!」

明久が、坊主の言葉を遮るように大声を出した。

「ちよつと待て!バックドロップをするために当ててきたのはそつ

ちだし、それ以前にまずお前はおとゴハツ!!」

俺が、立ち上がって文句を言おうとした坊主の鳩尾を蹴り、雄二が

顔を殴り吹っ飛ばした。

さて、これなら正当防衛だよな？

「公衆の面前で痴漢行為とは・・・このゲス野郎が!!」

「さつきからの営業妨害も含め、これは盛大な裁きが必要だよな？」

俺たちが、正義づらでまくし立てる。

「何を見ていたんだ！明らかに被害者はこつちだろ！」

モヒカンが、坊主のかわりに弁明するが、そんなものは無駄だ。

「黙れ！！コイツは今ウエイトレスの胸を揉みしだいていただろ！

俺の目は節穴じゃないぞ！」

・・・節穴だけだな。

「ウエイトレス、そいつの始末は任せた。」

口喧嘩をしている雄二にかわり、俺があき・・・ウエイトレスに指示をだした。

「え？あ、はい。わかりました。」

明久は、返事をするとおもむろに女物のブラを取り出し、坊主の頭につけた。

・・・瞬間接着剤で。

「さて、痴漢行為の取り調べのため、ちょっと来てもらおうか。」

雄二が、腕をポキポキと鳴らす。

「テメエ、なめやが・・・」

『先生、こつちです！』

『営業妨害？どこのどいつだ！』

モヒカンが殴りかかろうとしたとき、鉄人の声が聞こえた。
どうやら優子が連れてきてくれたらしい。

「くっ・・・退くぞ、夏川。」

「なっ、これ取れねえじゃねえか！！畜生、覚えてる変態め！！」
モヒカンが、頭にブラをつけた坊主を連れて逃げた。

・・・頭にブラをつけたやつに変態呼ばわりされるなんて、世も末
だな。

「チツ、逃がすか！！」

「さて、行くぞ、アキちゃん！！」

「分かった！けどその呼び方はやめて！」

雄二が後を追い、俺と明久・・・もといアキちゃんが後に続く。

・・・Aクラスから出るときに、ふとレジを見ると、

「お会計は、野口英世を二枚か、坂本雄二と佐藤謙太を一名ずつですが・・・」

「坂本雄二と佐藤謙太でお願いします。」

「・・・ありがとうございます。」

あれ？俺、千円で売られた気がするが・・・気のせいだよな？

「明久！こつちだ！」

「4階に逃げたぞ、明久！」

「・・・やっぱアキちゃんって呼んで！！みんなの視線が刺さるんだ！」

明久が、周りの視線に耐えられず、そう叫んだ

・・・あえて明久って呼んでただけどな。

「分かった！吉井明久・・・もといメイドのアキちゃん！！」

「貴様！絶対わざとだな！」

雄二が、周りに分かりやすく説明する。

・・・その手があつたな。

「3-Aに入つていつたのが見えた！こつちだ！」

少し先を走っていた雄二が、3-Aに向けて走り出した。

顔パスで入ったところを見ると、常夏コンビはAクラスらしい。

・・・意外だな。

ちなみに3-Aは、お化け屋敷だった。

「いらつしやいませ！3名様ですか？」

急いで駆け込もうとすると、入口で店員に止められた。

チツ、面倒だな。

「いや、5人だ。金は後ろの2人が払う。」

雄二が、何の躊躇いもなく赤の他人に支払いを押し付ける雄二・・・凄いな。

「そうですね。では、恐怖の世界をお楽しみください。」
受付は特に疑問も持たずに俺たちを通した。
・・・帰りが面倒そうですね。

内部は真つ暗とまではいかなくとも、かなり薄暗い感じだった。
照らしているのはペンライトほどの小さなブラックライトだけ。

「雄二、辺りは暗エから慎重に動かねえと・・・」

「そうだな。奴らはAクラスらしいし、どんな罠を仕掛けているかわからない」

奴らがこのクラスだというのは大きなハンデだ。

俺達はこのお化け屋敷のことをよく知らないから、下手すりゃ閉じ込められる恐れがある。

・・・一旦諦めるか？

「気をつけるよ、女装趣味の偽メイド。」

「う、うん。気を付けないと気を付けないと・・・」

そのとき、常夏コンビの片割れ、ブラ坊主が目の前に現れた。

「変態だつ！！」

「どつちもな・・・」

しかし運がいい。

この暗い中で見つけるのは絶望的だと踏んでいたが、まさかこんなところで見つかるとは・・・

できれば両方捕まえたかったが、今回は目をつぶろう。

「こんなところまで追ってくるなんて、しつこい連中だぜ！」

ブラ坊主が奥へと走り出す。

「チツ、メンドクセエ・・・」

「どけ、謙太！」

俺が追いかけてようとしたが、雄二が止めた。

「何故!？」

「いいから見てろ。喰らえ、アキちゃんバクダ・・・」

「やめよう雄二！その技の一番の被害者は僕だと思っ！」

雄二が、明久を投げようとしたが、明久がそれを拒否した。

そんなことをしている間にどんだんブラ坊主が見えなくなってくる。

「二人とも、さつさと追っ・・・」

『今だ！壁を倒して閉じ込めろ！』

俺達が追いかけてようとしたとき、モヒカンの声が響いた。

「・・・こんなところでもたついたせいでっ！！」

「しょうがねえ・・・二人とも、脱出するぞ！！」

「それしかないね！」

入口へと引き返す俺たち。

しかし・・・

「あ、あれ？壁が倒れてこないね。」

明久の声で気づき、後ろを振り返る。

「・・・ハツタリか！！」

「あのモヒカン野郎・・・」

雄二が、再び踵を返し、追いかけてようとした。

「雄二！時間切れだ。」

俺が雄二を呼び止める。

「何？・・・そういえばもうすぐ次の試合だな。」

雄二も、気づいたように入口に向かう。

「ええつと・・・次は、謙太とだよね？」

「ああ。」

三回戦は現代社会。明久は相手にならないだろう。

「負けねえからな？」

「・・・こっちこそ。」

俺達は、そう言っておばけやしきを出た・・・

「あつ、さつきの無銭入場客！！」

「・・・走るぞ！！」

休む暇もなく再び走り出す俺たち。

全く、いくら学園祭といえど、バタバタしすぎだ。

第八十七話（後書き）

謙太「明久！そのまま出場するのか！？」

明久「あつ！着替えるの忘れてた！！」

雄二「おい！俺たちが馬鹿と思われるだろ！！」

明久「ちよつと着替えてくる！！」

謙太「着替え持ってねえだろ！！」

明久「そうだった！どうしよう・・・」

雄二「さっさと取ってこい！！」

謙太「全く・・・次回をお楽しみに！」

第八十八話（前書き）

学園祭へんです

今回はなんと、明久&雄二VS謙太スペシャルです！

それではご覧あれ・・・

第八十八話

俺達は、三回戦開始寸前に会場に到着した。

「さあ、いそいで！」

司会の先生に促され、入場する俺たち。

「失礼しまーす・・・つてすごー!!」

『ワアアアア!!』

明久が、会場を埋め尽くすほどの観客に目を丸くする。

・・・埋め尽くすは言いすぎか。

「そういえば、三回戦から客が入るんだったな。」

「・・・それにしても、すごい盛況だ。」

会場はかなりの熱気に包まれていた。

まあ、これがはじめての公開試合なのは確かだが・・・

・・・やり辛え。

「対戦するのはどちらもFクラス所属の生徒です。学力は最低なFクラスですが、少しはできるようですね。」

司会の先生が、俺たちを紹介する。

『ガンバレー!!』

『いい試合を見せてくれ!!』

そして、それを聞いた観客が俺たちに声援を送ってくれる。

・・・何か照れくさいな。

「・・・会場の熱気も十分のようですね。それでは召喚してください。」

「・・・サモン!!」

先生の合図で、俺たちは同時に召喚する。

『おおー!!』

そして、出てきた召喚獣を見た観客から、再び声援が送られる。召喚獣を始めてみたのだから、無理はないか。

・・・少し遅れて、ディスプレイに点数が表示される。

三回戦ともなれば、こんな設備を用意するのか。
さすがは金持ち高校。

現代社会、Fクラス、坂本雄二 / 231、吉井明久 / 77

現代社会、Fクラス、佐藤謙太 / 409

・・・雄二はともかく、明久は危ないな。

明久の召喚獣の点数は、+100点と考えたほうがいい。

・・・そう考えると互角か。

「ギリギリ400に食い込んできたか・・・」

雄二が、絶望したように溜め息をつき、ボクシングの構えをとる。

恐らく真っ向勝負のつもりだったのだろう。

こいつらも、さすがに俺に策を講じることはできないだろうからな。

「さて、こつからはお互い手加減なしだ。」

俺が、剣を構えさせて明久たちを見た。

「・・・少しは手加減して欲しいんだけど。」

フィードバックが痛いし、と明久は苦笑いを浮かべ、得物を構えた。

「それでは、試合開始！！」

先生が、試合開始を告げ、俺たちの死闘は始まった。

俺は、開始と同時に召喚獣を突っ込ませた。

・・・今日は痛みがないから楽だな。

「ハアッ！！」

俺は、大上段から明久を斬りつけた。

「甘いよ！」

明久は、それを悠々とかわし、俺から距離をとる。

「……やはりこいつを先に消すべきだな。」

「後ろがから空きだっ！！！」

雄二が、俺の後ろからパンチの連撃を繰り出す……

しかし、いまいち距離感がつかめていないのか、全て空振りに終わった。

「チツ、やっぱり慣れてねえぜ……」

雄二が、舌打ちをしながら一度引く。

「さてと、これでだいたい分かった。次は俺のターンだ。」

二人から距離をとった俺は、口笛を吹きドラゴンを呼んだ。

ちなみに、今回使った点数は150点。

「雄二、お前の相手はこいつだ！」

俺は、ドラゴンを雄二に向ける。

「……なめやがって！！！」

雄二が応戦するが、やはり慣れていない。

「さて、邪魔者はいなくなったな。」

「……クツ。」

俺は、明久を見据えて武器を構えなおす。

「さて、こっからが本番だ。」

俺は槍を構え、明久に接近する。

「なぜわざわざ槍を！？」

明久は、俺が敢えて小回りのきかない槍を選んだことに驚きながらも、なんとか回避をする。

「……明久、お前の強みはなんだ？」

「ハア、何って、ハア、実践経験だけど？」

明久が、回避による体力のフィードバックで息を切らしながら答える。

「剣って、この学園の装備では結構ポピュラーだろ？」

「う、うん。それが？」

「要するに、お前は対槍での戦いに慣れてないから、俺は槍を使っただ。」

「ああ、なるほどね。」

俺はそこで会話を打ち切り、槍を遮二無二振り回す。

明久は、その軌道を読むのに必死でなかなか攻撃できないでいる。

そして雄二は、未だにドラゴンに苦戦していて、明久に救援を出せそうでもない。

・・・この勝負、勝てる！

俺は槍を放り投げ、素早い打撃を繰り返した。

「なっ！！」

明久はこの攻撃をよけ切ることができず、数発がかかる。

「クッ・・・」

幾ら打撃とはいえ、三倍の点数差の打撃は重みが違う。

思わず膝を付く明久。

・・・これで決まりだな。

行動を停止した明久の召喚獣に止めをさそうとしたその刹那。

ヒュン！

「なっ！？」

遠くから何かが飛んできて、俺の召喚獣に直撃する・・・雄二か！

「随分と手間をかけさせてくれたな。」

雄二の傍らには、倒れふすドラゴン。

・・・面倒なことになった。

「チツ、先にお前から・・・明久?!」

気がついたときには、俺の召喚獣を明久の召喚獣が羽交い締めにしていて。

・・・これじゃ動けねえ。

「さすがにお前を一撃で倒すほどの点数はねえが、しばらくサンドバックになつてもらつぜ!？」

「・・・チツ」

雄二は、俺に向かって飛び蹴りを食らわせた。

俺の召喚獣は、飛び蹴りの衝撃でふつとぼつとするが、明久に抑えられる。

「まだまだア!!」

雄二が、パンチの連撃を食らわせてくる。

なんとか振りほどいた右手で攻撃を受け止めるが、何発かが鳩尾や顔面などにあたる。

「・・・防御に手一杯で攻撃ができねえ!!」

「あれ酷くない?」

「2対1だぞ?」

「かわいそう・・・」

観客から、俺に同情するような声上がる。

「・・・余計なお世話だ。」

「オラオラオラオラオラ!!」

「クツソ・・・」

為す術なくパンチの連撃を受ける俺。

召喚獣に感覚がないのが仇となるとは・・・

「雄二、このまま・・・ウグツ!」

「クソつ、邪魔だ!」

「イタツ!!」

俺が、若干羽交い締めが緩んだ明久を肘鉄で吹き飛ばし、明久の点数がゼロになる。

しかし、俺の点数も大きく減っていた。

「ハア、ハア、ハア・・・」

「さて、第二Rと行こうか。」

雄二が、召喚獣と共に仁王立ちをして、余裕の表情で俺を見てくる。

「・・・当然だっ!!」

俺も精一杯の虚勢を張り、バスターソードを構え直した。

「そうこなくつちな!」

雄二が、俺に飛びかかってくる。

「・・・あぶねえ!」

俺は紙一重でそれをよける。

「・・・予想以上に召喚獣の動きが遅い。

「おらどうした?動きが重いぜえ?」

雄二が俺の周りをステップで回りながら言う。

「・・・バスターソードがこんなに重いなんて、感じたこともなかった。」

「クソっ!」

俺は精一杯の力を振り絞り、雄二の進行方向とは逆向きに回転切りを放った。

「・・・しかし遅い。

「オラアッ!」

思いっきり空振った俺に、雄二がアッパーカットを決め、勝敗が決した。

「勝者！Fクラス、吉井・坂本ペア！」

「「イヨツシヤア！！」」

明久と雄二が、拳をぶつけて喜び合った。

「・・・俺の負けだ。」

俺は、無言でその場から立ち去った。

「ナイスファイト！」

「いい試合だったですよ！！！」

「・・・謙太、よく頑張った」

会場をでると、後ろから聞きなれた声が聞こえ、思わず振り返った。

「・・・優子、優希、霧島？」

そこに居たのは、優子と優希、そして霧島だった。

「霧島、雄二を応援しにきたんじゃないのか。」

「・・・雄二を応援に来た。」

「だよな。」

どう考えてもそうだろう。

「・・・ただ、雄二も謙太もかつこよかったから。」

「かつこいい・・・？」

想定外の相手から思わぬ言葉を言われ、思わず赤くなる。

「謙太、なに代表の言葉で赤くなってるのよ！」

「謙ちゃん！私もかつこよかったと思ってますから！！！」

その光景を見た優子が少し怒り、優希は自己主張してきた。

「悪かった。二人とも、わざわざ見に来てくれてありがとな。」

まあ負けちまつたけど、と俺は二人に笑いかけた。

「ま、まあ今回だけは見逃してあげるけど。」

優子が若干赤くなりながらも答える。

「・・・俺たちって、まだ付き合っていないよな？」

「謙太、そろそろ戻らないと・・・」

「ああ、そうだな。」

少し遅れて会場から出てきた明久の言葉で、俺は役割を思い出した。

「それじゃあな、三人とも。」

「あ、うん。」

「バイバイです！」

「・・・また」

俺達は三人と別れ、喫茶店へ向かった。

・・・さて、ここからは死ぬ気で頑張らないとな。

第八十八話（後書き）

謙太「負けたか・・・」

雄二「いい勝負だったよな？」

明久「うん！勝てるかどうか微妙だったし。」

謙太「あとは任せたぞ？」

明久「うん！絶対優勝してみせるよ！」

雄二「その意気だ明久。それじゃ、次回をお楽しみに・・・だな。」

第八十九話（前書き）

眠い・・・

なんかものすごく眠い。

多分、文がめちゃくちゃになってると思うので、校正お願いしま・・・
フワア・・・

第八十九話

「ただいま。」

「ただいま。」

「やってるか？」

三回戦を終えた

「おお、おかえりなのじゃ。」

「・・・お疲れ。」

俺たちがFクラスに帰ってくると、秀吉とムツツリが俺たちを出迎えた。

「どうじゃったか？」

秀吉が、俺たちに結果を聞いてくる。

「明久たちの勝ちだ。」

「そうか。謙太を倒すとは、お主らスゴイのお。」

俺が結果を答えると、それを聞いた秀吉が明久たちを褒め称えた。

「ま、まあ2対1だったし。」

「現代社会だったしな。」

それに応える明久と雄二が、いつになく謙虚だ。

・・・同じクラスだし、素直に喜びにくいんだろうな。

「そういえば、姫路さんたちはまだ？」

明久が、クラスを見渡しながら行った。

「確かに、まだ姫路と島田は戻ってきていないな。」

試合に結構時間が掛かったから、もう戻ってきていると思ったが・・・

「アホ。」

雄二が、俺たちを軽く小突きながら言った。

「三回戦からは1組ずつしか試合がないんだから、戻ってきていないのは当たり前だろ。」

「「そうなんだ。」」

要項まともに読んでないからな・・・
知ってるわけねえか。

「全く・・・明久はともかく、謙太までFクラスに毒されてきてるんじゃねえのか？」

悪い意味で、と雄二が続けた。

「確かに・・・。」

雄二の言葉に心当たりがあった。

最近の俺は、成績は上がっているが人間的にダメになってきてる気がする。

どうにかしないとな・・・

「そうだよな。謙太は最近ダメ人間になってきてるよね。」

「お前が言うな。」

「え??？」

確かにダメになってきているのは認めるが、明久ほどではない。

「僕が言うなって?」

「明久、お前ほどのダメ人間はいないだろ?」

「将来ニート確定だろ?」

「ひどいよ、二人とも!!!!」

いや、正しいから。

「まあそれはいいとして・・・なんだこの客の少なさは?」

俺はそこで会話を打ち切り、喫茶店の話に変えた。

喫茶店には、相変わらず空席が目立つ。

このままでは設備の買い替えが許可されても買い換える資金がない。

「おかしいなあ、悪評の元は絶つたのに・・・。」

明久は今の現状に首をかしげている。

「明久、よく考える。悪評のもとを絶つただけで、根本的な解決は

していないだろ？」

残念だが、広まった悪評はそのままだ。

「そうだな。一度失った客を取り戻すために、何かインパクトのあることをする必要がありそうだ。」

雄二が、腕を組んで何かを考え始めた。

「どうやら、雄二には何か考えがありそうだ。」

「雄二、何か考えがあるのか？」

「ああ。ウエイトレスに、これを着させる。」

「そう言つて、雄二が取り出したのは・・・」

「なるほど、チャイナドレスか。」

「ああ。安直すぎる案だが、効果は絶大なはず。」

雄二が取り出したのは、見事な刺繍も付いている水色と白のチャイナドレスだった。

おそらく、このような事態を見越して、あらかじめムツツリに縫わせていたのだろう。

「ほう、なるほどのお。若干裾が短いような気もするが、これなら大きなインパクトを与えられるじゃろうな。」

秀吉も賛成する。

「ああ。これを・・・明久が着る。」

「なるほど、良い案だ。」

雄二の案に、一も二もなく賛成する。

それなら、少なくともインパクトは絶大なはずだ。

「ちよつ・・・お願い、許して！！メイド服の次にチャイナなんて着たら、きつと僕はホンモノだって皆に認識されちゃう！」

「・・・ホンモノだろ。」

「違うよ！」

明久が、必死の形相で否定する。

「冗談だ。これは姫路と島田、秀吉に着てもらう。」

「なんだ、よかった。」

「ワシが着るのは冗談ではないがのう・・・」

「頼むよ秀吉。」

「お、お主がそこまで言うなら・・・」
チャイナを渡された秀吉が、渋い顔をするが、明久に頼まれ渋々引き受ける。

・・・コイツ、最近思考が女性化してきてないか？

まあ、Fクラスで散々女性扱いされてるから当然か。

「けど、三人じゃチャイナドレスが余るよ？」

本当だ。よく見ると四着ある。

「ああ。本当は明久に着せるつもりだったが、明久が着れないなら・

・・・

「嫌だ。」

「謙太が・・・って早いな。」

俺は、雄二が言い終わる前に否定した

・・・ってかコイツ、ハナっから俺に着せる気だったな

「誰が着るか馬鹿野郎。」

「そういうな。木下優子からも了解を得ている。」

「優子が?!」

クソっ、なんて準備のいいやつなんだ。

それなら着るしかねえじゃねえか・・・

「という訳で、頑張れよ？」

「・・・」

こうして、俺は秀吉にメイクをされ、チャイナを切る羽目になった。

着替えは空き教室で行なった。

「クソっ、なんでこんな目に・・・」

「お主、かなり似合っておるのぉ。」

着替えが終わり、迎えに来た秀吉が女装した俺を見て驚いていた。

確かに俺は足も太くないし、なぜかスネ毛も生えていないから足を
出しても問題ないのだが・・・

・・・自分の顔が恨めしいっ!!

「さて、さっさと出るかのお。」

「出たくねえ・・・」

「ダダをこねるでない。さっさと出るのじゃ。」

俺は、秀吉に引きずられるようにして更衣室を出た。

『なにあの二人組。すごく可愛くない?』

『どこのクラスだ?』

『秀吉君はわかるけど、もう一人は誰?』

周りの視線が痛い。

「さてと、急ぐかのお。」

「・・・」

俺は、無言で秀吉に続いた。

・・・もう帰りたい。

教室では、雄二と明久が戻ってきた姫路と美波を説得していた。

「明久、お前はチャイナドレスが好きだよな?」

・・・どんな説得の仕方だ。

「だいす・・・愛してる。」

明久が、真顔で言い切った。

おそらくは適当に誤魔化すつもりだったのだろうが、逆に直球にな
っている。

・・・言葉のセレクトを勉強し直せ。

「し、仕方がないわね。お店の売上のために、仕方なく着てあげる
わ。」

「そ、そうですね!お店のためですしね!」

そしてそれに引っ掛かる二人。

・・・まあ当たり前か。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？葉月ちゃんもお手伝いしてくれるの？」

・・・小学生に手伝わせるな。

「お手伝い・・・？あ、うん！お手伝いをするから、葉月にもあの服頂戴！」

葉月は、一瞬首をかしげたが、すぐに手伝いを進言した。しかし、葉月の分のチャイナはない。

てか、葉月が着るなら俺着なくてよかつたんじゃないか？

・・・今更渡せねえけど。

「けど、ごめんね。葉月ちゃんの分は数が・・・」

「・・・！！（チクチクチクチク）」

明久が断ろうとしたその時、教室でチャイナを縫う人影が・・・

「ムツツリーニ！？」

もちろんムツツリだ。

「・・・俺の嗅覚を舐めるな。」

ムツツリが、チャイナドレスを縫いながら決め顔をするが・・・全然カッコ良くねえ。

「ただいまなのじゃ。」

「・・・」

秀吉が、会話が途切れたところを見計らって教室に入り、俺も後に続く。

「あら木下、もう着替え・・・って誰その美人！？」

「どどどどちら様ですか？」

「わあ〜！！お姉さんすつごく美人です！」

姫路たちは、なぜか俺を見てテンパった。

・・・そんなに変わったか？

「姫路さん。実はこの人・・・」

「明久君の彼女なんですか!？」

「アキ、いつのまにこんな娘を・・・!?!？」

姫路たちは、明久が俺を紹介しようとしたのを何かと勘違いしたらしい。

あーあ、もう收拾つかねえな。

「落ち着け二人とも、コイツは謙太だ。」

「なんだ、謙太(君)か。(ですか)・・・ってええ!?!？」

雄二の説明に、余計驚く二人。

「謙太、あんた女装癖が・・・」

「あるわけねえだろ!!無理やり着せられたんだよ!」

女装癖なんて、とんだ勘違いだ!

「それにしても、普通に可愛いわね。」

「とつても似合ってます。」

「・・・やめろ、悲しくなる。」

姫路たちが普通に褒めるから、余計に悲しくなってくる。

秀吉の気持ちがよくわかる・・・

「けど・・・ウチ(私)も負けてられない(ません)!!！」

俺の女装を見て何故か活気づいた二人が、いそいで着替えに行く。

・・・4回戦、このまま出るつもりなのか?

「・・・(パシャ、パシャ!)」

そして俺を執拗にとつてくるムッツリ。

・・・鼻から垂れる鼻血が気に食わねえ。

余りにもムカムカ来た俺はとりあえず・・・

ガシッ!

バキッ!

ポイツ。

「・・・!!！」

ムッツリのカメラを叩き割った。

カメラを叩き割られたムッツリは、血の涙を流している。

第八十九話（後書き）

謙太「まさか女装するなんて・・・」
明久「あはは、次回をお楽しみに」

第九十話（前書き）

学園祭編です。

今回は謙太くんの女装がメインですが・・・

ものすごく書きづらい！！

支離滅裂の危険がありますが、温かく見守ってください。

第九十話

姫路たちが着替えに行ったあと、俺は嫌々ながらホールを手伝った。

「つたく、なんで俺が・・・」

「まあそういうでない。・・・ワシの苦しみがわかるじゃろう?」

ふてくされる俺を、秀吉が励ます。

・・・最後の言葉は秀吉の本心を表していたな。

「明久にさせればいいじゃねえか・・・」

つたく、いつそ死にてえよ・・・

「すみませ〜ん、オーダーお願いします。」

「ほら、お客じゃぞ。」

「・・・わかりました。」

俺は、注文を書くための伝票を持って呼ばれたところに向かう。

さつきから、俺と秀吉が廊下を歩いたおかげ(?)で少しずつ客足が戻ってきた。

・・・もう開き直るか。

「胡麻団子三つと肉まん一つ、本格ウーロン茶四つでお願いします。」

┌

四人組の女子生徒が注文をする。

「わかりました。ご注文を繰り返します。ゴマ団子三つと、肉まんをお一つ、本格ウーロン茶を・・・」

カチャツ!

メニューを確認しているとき、ふと目の前で注文をしている女子の顔を見て、思わず伝票を落としてしまった。

・・・優子!?

「しっ、失礼しました。」

「えつと・・・大丈夫ですか?」

「ええ、はい・・・」

そのテーブルには、優子、優希、愛子、霧島が座っていた。

・・・俺が女装していることに、誰も気づかないのか？

「そういえば、あなたはどちら様ですか？」

俺が思案していると、優希が聞いてきた。

・・・さすがに本当のことは明かせないな。

「えっと・・・外部の者なんですけど、ちょっと知り合いに頼まれます。」

「そうなんですか？」

「まあ、島田さんの妹さんもお手伝いしてるからね」

俺が適当にごまかすと、四人は納得したようだ。

・・・バレなくて何よりだ。

「・・・雄二はどこですか？」

「雄二って・・・このクラスの代表ですか？」

霧島が、雄二のことを聞いてきたが、一応知らないふりをする。

「・・・はい。」

「代表なら、あちらにおりますが。」

俺は、雄二の方を指した。

雄二は、明久と何かを話し込んでいる。

「連れてまいりますでしょうか？」

「・・・お願いします。」

俺は、取り敢えずここを離れる口実がわりに、雄二たちを連れてくることを進言した。

・・・俺のことを口止めする必要があるし。

「あ、じゃあついでに佐藤謙太もつれてきてくれませんか？」

「佐藤・・・？」

俺は、初めて自分が最もよく知る名前・・・自分の名前を知らないふりした。

・・・自分の名前にとぼける機会なんて、人生に1度か2度だろう。

「佐藤謙太です。坂本くんたちに聞けばわかると思います。」

「・・・そうですか。わかりました。」

俺は、そう言うついでに優子たちから離れ、雄二たちのところへ行った。

「・・・坂本さん、お客様がお呼びですよ？」
俺は、雄二に話しかける。

「・・・一応客がいるので、女キヤラのままです。」

「・・・お前、開き直ったな。」

「・・・こうするしかねえんだよ！！」

「・・・坂本さん、謙太くんはちよつと学園長室に向かったとお伝えください。」

「分かったよ。それじゃ、これからも頑張れよ・・・えっと？」

雄二は、俺の呼び方に困っているようだ。

「好きにお呼びください。」

呼び方を考えている雄二に俺は言った。

けど好きにお呼びくださいって・・・

「じゃあ・・・優でいいか。」

雄二が、思いついたように言った。

「ゆう・・・ですか？」

「ああ。優希と優子・・・お前の友達の共通点だ。」

「・・・いい名前ですね。」

「・・・悪くないな。」

俺は雄二に笑いかけた

「お、おう。」

雄二が、若干顔を赤くしながら言う。

「・・・俺ってそんなに女っぽいかな？」

「お店の様子はどう？」

「おかえりなさい、吉井さん。お店は順調ですよ。」

他の店の偵察に行っていた明久が、店に戻ってきた。

「吉井・・・さん？」

「ええ。吉井さんですよ。」

明久が、俺を見て驚いている。

もしかして・・・俺が誰かわからなくなったとか？

「あれ？僕の知り合いじゃないのかな？」

・・・予想通りだ。

「知り合いじゃないですか。私は佐藤謙太の双子の妹、優です。」

俺は、明久にご丁寧な自己紹介をした。

「え？謙太に妹は・・・あ、そうだったね。」

明久が、ようやく気付いたかのように頭をかいた。

「吉井さん、ウェイターが足りてないので、早くお店に入ってください。」

俺は、明久に店に入るよう促した。

「そうだね。それより、ちょっとお願いがあるんだけど・・・」

「なんででしょう？」

・・・嫌な予感がするんだが。

「僕に、『お帰りなさいませ、ご主人様』って・・・」

「お断りします!!」

言ってたまるか!!

「ケチ・・・」

明久が、頬をふくらませる。

・・・なんだこいつは。

「早くお店に戻ってください!!」

「分かったよ。」

明久が、俺に睨まれ渋々教室に戻る。

そして明久の後少しして、着替えを終えた姫路たちが戻って来た。

「えっと・・・どちら様ですか？」

「うちのクラスの子・・・じゃないよね？」

・・・さつき会っただろ!!

「あはは・・・それより早く教室に入ってください。」

「そうね。」

「そうですね。」

二人は、特に疑問も持たずに教室に入った。
・・・えっと、俺ってそんなに変わったかな？？

第九十話（後書き）

優「もう今回はこのキャラでいいですよ。」

優希「そのキャラじゃ私とかぶるじゃないですか！」

優子「そうね。ところでどちら様ですか・・・？」

優「・・・通りすがりのチャイニーズです。」

優希「なんだか胡散臭いですが・・・次回をお楽しみに！」

第九十一話（前書き）

学園祭編ですが・・・

明久目線じゃないとほとんどがオリ話ですね。

・・・気にせず行きましょう。

第九十一話

その後、何事も無く二時間が過ぎて、四回戦。

「明・・・吉井さん、そろそろ4回戦ではないですか？」

俺は、せかせかとホールを回っている明久に言った。

本来なら明久は厨房だが、ホール班だけでは人数が足りないほどに客が来ているから明久も手伝いをしている。

「え？もうそんな時間なの？」

明久は、自分の時計を見て驚いていた。

よほど喫茶店に集中していたのだろう。

「早く準備しろ。」

厨房ををしていた雄二が出てきて、明久に準備を促した。

「アキたちもそろそろなの？」

「実は私たちもそろそろ出番なんですよ。」

姫路と美波も、持っていたトレイや伝票をほかの人に渡した。

「そうなんですか？」

それじゃ、三回戦は明久&雄二ペアVS姫路、島田ペアになるのか・・・どうせなら、決勝で当たって欲しかったな。

「それじゃ、会場へ・・・」

「お兄ちゃん。葉月を置いてどこかに行っちゃうの？」

会場に向かおうとした明久のシャツの裾を持つ葉月。

「ちびっ子、バカなお兄ちゃんは今から大切な用事があるんだ。だから、おとなしく待っていないとダメだ。」

「む・・・」

雄二が、葉月の頭を撫でる。

・・・雄二つて、案外子煩悩なのかもな。

「そうですね、葉月ちゃん。少しの間いなくなるだけですから、頑張って我慢できませんか？」

「可愛いお姉ちゃんまで・・・。」

俺も葉月を諭そうとするが、葉月はなかなか頷かない。

「じゃあこうしよう。」

雄二が、葉月の頭を撫でながら言った。

「もしちびっ子がいい子にしてたら、バカなお兄ちゃんから大人のデートを教えてもらうのはどうだ？」

「えっ、雄二!？」

突然の提案に、明久はぎよっとしている。

「葉月、お手伝いしてくるですっ!!!」

そして葉月は、羽が生えたんじゃないかという位、軽やかな足取りで店の手伝いに行った。

「ち、違うんだよ葉月ちゃん!僕には君が期待するような財力はないんだ!ねえ、聴いてる!？」

明久が必死に弁明するも、時すでに遅し。

これで、明久の今月の食費も吹っ飛んだ。

そしてさらに・・・

「アキ、ちよつと校舎裏に来て？」

般若のオーラを纏った美波が、明久の方を掴みながら言った。

ここにさらに姫路が・・・

「美波ちゃん、ちよつと待ってください。」

あれ?おかしいな・・・

普通なら、姫路も突っ込んでいくと思うんだけど・・・

「次の対戦相手は、明久くんたちみたいですから。召喚獣でオシオキしたほうが、遠慮なくできますよ?」

「・・・?!」

明久が観察処分者であることを逆手にとった、まさかの死刑勧告・・・

・・・怖え、怖えよ姫路!!

「ちよつと待って!僕の召喚獣は、フィードバック付きなんだよ!」

明久が必死で反論する。

・・・確かに、今の状況は文字通り必死（必ず死ぬ）。

「姫路さんの点数で攻撃されたら、痛みでショック死・・・。」

「いいだろう、望むところだ。」

「雄二！勝手に僕の命を左右しないで！？」

雄二が、明久の発言を遮り、喧嘩を買った。

・・・まあ、召喚獣で殴られる痛みを知らないのなら当然か。

「上等よ。早く会場に向かいますようか。アキがどんな声で啼くのが楽しみだわ。」

「そこまで言うのなら、明久にどれだけ大きな悲鳴を上げさせることができるのか、じっくりと見せてもらおうか。」

雄二と美波は、そう言っつて不敵に笑った。

・・・明久、死亡決定。

「・・・吉井さん。来世また、会いましょう。」

「・・・明久、今まで楽しかった。」

「明久よ、生きて、生きてまた会おうぞ。」

俺達は、死地に（引きづられて）赴く明久にエールを送った。

「いやだ、死にたくないよ！！！」

・・・もう手遅れだ。

「・・・吉井さんや姫路さんたちがいないしばらくの間、人手が足りず忙しくなると思います。皆さん、無理せず頑張ってください。」

「・・・おお！！！！」

とりあえず臨時で指揮官になった俺は、店の士気を上げるべく軽くスピーチした。

・・・スカートのにりに目線が集中しているのが気になるけど。

「けん・・・優よ。お主、なかなかの人気じゃのう。」

「・・・やめてください。」

人気なんていらねえよ!!

「お主とムツツリー二は、しばらく休憩するのじゃ。」

「え?これからが一番忙しくなるんじゃないですか?」

秀吉の思わぬ言葉に、俺とムツツリー二は驚きを隠せなかった。

「そうは言っても、お主らはさつきから全く休んでおらぬじゃろう?」

「まあそうですね。」

確かにここ二時間ちよつとは全く休んでないわけだが、それでも今休むのは無謀だろう。

「あまり無理をするのも良くないし、二十分ほど休んでくるのじゃ。」

「

「……そうですね。お気遣い、感謝します。」

「……恩に着る。」

俺とムツツリは、秀吉の計らいにより、少し休むことになった。

「それじゃあ……ってどこに連れてくつもりですか!?」

俺たちが教室から出た途端、ムツツリが力強く俺を引っ張った。

「……」

「痛い、痛いです!!」

ムツツリが、すごい力で俺を引っ張る。

端から見ると、チャイナを着た女子が男に連れ去られている場面だろう。

「……まさか両方男とは思っまい。」

「……着いた。」

俺がムツツリに連れてこられたのは、空き教室。

「……何をするんです……するんだ?」

人目に触れないところに来たのに、敬語&女声がデフォルトになりかけている。

「……危険だ。」

「……カメラの弁償。」

ムツツリが取り出したのは、さつき俺が叩き割ったカメラ。

・・・確かに高級品だから、このままってわけにはいかないな。

「・・・わかりました。何をすればいいですか？」

何か変えるのも面倒になったし、この服装の間は女声で行くことにした。

「・・・指定したポーズをとって」

ムツツリは、そう言ってもう一台のカメラを取り出す。

「わかりました。」

俺は、おとなしくそれに従い、休憩時間の間写真を撮られ続けた。

第九十一話（後書き）

優「ちなみに、この写真はいくらくらいですか？」

康太「・・・一枚五百円。」

優「わあゝ・・・見事なボツタクリですね。」

康太「・・・必要経費」

優「あはは・・・次回をお楽しみに!」

第九十二話（前書き）

学園祭編、全然進まねえ・・・

まあいいけど・・・

という訳で、どうぞよろしく・・・

第九十二話

「ほう、なかなか盛況じゃないか。」

撮影会（？）が終わり、喫茶店を再び手伝い始めると、雄二の声を聞いた。

「・・・もう終わったのか？」

「そうだね、結構いい感じだね。」

「良かった。宣伝の効果がありましたね。」

明久と姫路の声もしたし、試合は終わったのだらう。

「そうでなきゃ、こんなに恥ずかしい格好で出た意味がないものね。」

美波が、自分のチャイナを見ながら言う。

「みなさん、お疲れ様です。」

俺は、四人のところへ行った。

「あ、うん・・・」

「お、おう・・・」

二人は、顔を赤くしながら応えた。

「・・・この反応ムカツク。」

「・・・はつきり言って負けてますね。」

「木下といい謙太といい、どうしてうちの邪魔ばかりするの・・・」

姫路と美波は、俺を恨みがましい目で見ていた。

「・・・居心地悪い。」

「あ！バカなお兄ちゃん！お客さんいっぱい来てくれたよ！！」
店の手伝いをしていた葉月が、明久に気づいて走ってきた。

「そうだね。葉月ちゃん、お手伝いありがとうね。」
「んにゃ〜」

明久に撫でられた葉月は、嬉しそうに猫撫で声を出した。
本当に明久に懐いているな。

『おっ、あの子達だ!』

『近くで見ると一層可愛いな!』

『手伝いの子も教室内にいる子達も可愛いし、レベル高いな!』
姫路たちに気づいた客から、歓声上がる。

・・・教室内にいる子達の中に、俺が入っていないと願いたい。

「明久、戻ってきたのじゃな。」

秀吉が、客の声で明久たちに気づいたのか、こっちに来た。

・・・姫路と美波が恨みがましい目で見ているが、気にしないでおこう。

「そういえば、試合どうでした?」

「そうじゃな。どちらが勝ったのじゃ?」

俺たちが、試合のことを聞くと、雄二以外の三人が言いづらそうに顔をしかめる。

「・・・雄二、かな。」

「・・・坂本ね。」

「そうですね。」

三人は、口々にそういった。

「え?」

「明久は同じチームなのに負けじゃったのか?」

秀吉と俺が首をかしげる。

ええっと、雄二の一人勝ちって・・・ああ、そういうことか。

「そんなことよりも、数少ないウエイトレスが固まってたら客が落胆するぞ。今は喫茶店に集中してくれ。」

確かに、さつきから客の視線がこちらに集まっている。

まあ、ウエイトレスが全てここにいるのだからしょうがないか。

「そうですね、喫茶店のお手伝いをしないとイケませんよね。」

「そうね。ちよつと視線が気になるけど……お店の売上のために頑張りますか！」

姫路と美波が、やる気を見せる。

「……できれば、そのやる気はホールだけで見せて欲しい。」

「ワシは一応男なのじゃが……」

「売上のため、売上のため、売上のため……」

秀吉は、困ったように自分のチャイナをみて、俺は自分に女装の正当性を言い聞かせた。

「二人とも、絶対に性別はバラしちゃダメだからね。」

明久が、俺たちに釘を刺す。

「やれやれ、しかたないのお……」

「これも売上のためだからしょうがないです……」

俺と秀吉は渋々頷き、

『しつれいします……』

「「いらつしやいませ!!中華喫茶ヨーロッパアン入ようこそ!!」」
最大級の笑顔で客を迎えた。

そして一時間後。

「それじゃ、準決勝へ行ってくるね」

「はい!頑張ってください!」

「アキ、負けたら承知しないからね?」

「わかってるって」

明久と雄二が四回戦へ向かうのを見計らって、

「秀吉さん、少し休憩をいただきますね。」

「んむ?ああ。姉上の応援じゃな?行ってきたよいぞ。」

「ありがとうございます。」

俺も優子たちの応援に向かう……

「・・・おっと、まずは着替える必要がありますね」
前にまずはメイクを落とし、着替えをしてから応援に向かった。

「スゲー人ばかり・・・」

会場は、ほぼ満員で熱気に包まれていた。

「まだ座れるか・・・？」

俺は、一抹の不安を抱いたが、それは杞憂に終わった。

「・・・生徒専用か。そんな席があつたんだな。」

生徒専用席は、そこそこすいていた。

・・・まだ店とかやつてる奴らが多いからな。

俺は、生徒専用席に座り、開始を待った。

五分後、司会の先生が出てきた。

「お待ちせいたしました。これより準決勝を開始したいと思います
！」

「ワアアアアア！！！」

司会の大島先生の言葉で、会場の熱気は一気に上がった。

・・・こんなに注目されてるのか。

「それでは、出場選手の入場です！」

大島先生の言葉を受け、左から明久&雄二ペア、右から優子&霧島
ペアが出てきた。

「！！！」

優子が、キョロキョロしながら俺を見つけ、大きく手を振った。

・・・嬉しいけど止めてくれ。

ものすごく恥ずかしい・・・

「しかし、あの様子だと調子はよさそうだな。」

うん・・・

明久たち、どうやって勝つつもりだ？

「~~~~~！！！」

『……』

会場では、雄二と霧島が何かを言い争っている。

……客の歓声がうるさくて聞こえない。

『……』

そして、雄二がおもむろに優子を指さした。

優子は、不敵に笑ってステージ脇を指す。

「……秀吉？」

そこには、チャイナ姿で腕を縛られ正座させられた秀吉と、それを撮影しているムツツリがいた。

もしかして、雄二は秀吉と優子を入れ替えようとしたのか？

……その作戦が失敗した今、雄二たちに勝ち目はないな。

『ムツツリーニ！その写真あとで売って欲しい！！』

不意に、明久の心が聞こえた。

……何がしてえんだ。

『……』

優子が、明久たちに対して何かを言った。

恐らく降伏勧告だろう。

……勝負あったな。

『……！！』

しかし、二人は諦めていないようだ。

明久が、雄二の後ろに回った。

そして、先生のマイクをふんだくり、マイク越しに……

『翔子、俺の話を聞いてくれ！』

……まさかの説得？！

『お前の気持ちは嬉しいが、俺には俺の考えがあるんだ。』

『早く召喚獣勝負をしてくれ』という観客の白い目をよそに、二人は続ける。

『俺は自分の力でペアチケットを手に入れたい。そして胸を張って幸せになりたい……ってちょっと待て！！』

雄二が拒否反応を示した。

・・・惜しい。

『誰がそんなことを言うガペツ!!』

激しく抵抗した雄二は、明久に締められグッタリした。

『だからここは譲ってくれ。そして、優勝したら結婚しよう。愛してる、翔子!!』

軽く痙攣している雄二の真後ろで、秀吉が言った。

・・・客にはバレバレなんですけど。

「・・・しかし、これで霧島は落ちたな。」

これで分からなくなってきた・・・訳でもないか。

明久が一人で優子に勝てるとは思わない。

『フハハハハ!!これで最強の敵は落ちた。残るは君だけだ、木下優子さん!!』

『くつ、卑怯な!!けど、私一人でも負けないはずっ、サモン!!』
客がシラケ出したから、アイツらの声はつきり聞こえるようになってきた。

『ふふふっ、この教科が保健体育だったことを恨むんだね!』

え?明久って、保健体育得意だっけ?

よく見ると、明久の後ろにはムツツリが・・・まさか!!

『いくよ、新巻鮭!!』^{サモン}

明久がそう言っ出て出したのは・・・案の定ムツツリの召喚獣。

『え?それ土屋君の召喚獣!君って本当に卑怯・・・キャツ!!』

あつという間に、優子の召喚獣は真つ二つになっていた。

『えゝ、只今の勝負ですが・・・吉井、坂本ペアの勝利です。』

『ええゝ!?!』

観客からブーイングが上がる。

・・・おそらく、霧島が棄権したのだろう。

「さすがに強引すぎるだろ・・・」

まあしかし、これでなんとか決勝に上がったか。

「優子」

俺は、試合が終わって会場から出てきた優子に話しかけた。

「あ、謙太……」

「どうした？そんなに悔しかったか？」

「え？あ、うん……」

いつになく元気がない優子。

「代表がね、今回もし優勝したら、チケットは私にくれるっていつてくれたんだ。」

「へえ、あの霧島がね……」

なるほど、優子が落ち込んでいるのもわかる。

「だから……この前はあんまり楽しめなかったし、あーゆーの抜きで謙太と楽しめたらなって。」

まあ、負けちゃったからしょうがないけどね、と。

優子は寂しそうに言った。

「……行きたいならいいじゃないか。」

「え？」

優子は俺が行った言葉にキョトンとした。

「行きたいならいきたいって言うてくれれば、俺だって都合付けるしよ。」

「謙太……」

普通に考えて、キスするような相手と行きたくないハズがないだろう？

「だから、そんなに落ち込むな！」

俺は、優子の頭を撫でた。

「……そうね。私らしくないわね。」

俺に頭を撫でられ、優子が笑顔で言った。

「どうやら、元気を取り戻してくれたようだ。」

「それじゃ。俺は喫茶店に戻るから、そっちも頑張れよ？」

「うん！」

そう言っつて、俺は優子と別れた。

さて、秀吉を呼んでさっさと着替えるか。

・・・少しは違和感を持ったほうがいいのか？

第九十二話（後書き）

謙太「全く・・・卑怯という言葉が一番合う二人だな。」

明久「雄二、これって褒められてる？」

雄二「いや、すごい勢いで貶されてる。」

明久「この野郎!!！」

雄二、謙太「自分で気づけっ!!！」

優子「はぁ・・・という訳で、次回をお楽しみに」

優希「私の出番は・・・？」

第九十三話（前書き）

全く進まない。

ま、いつか

という訳で学園祭へんです

第九十三話

P r r r r P r r r r

「・・・出ねえな」

俺は優子と別れ、空き教室に来ていた。

それはもちろん着替えのため。

その着替えのために秀吉を呼ぼうとしたのだが・・・さっきから電
話にでない。

そんなに忙しいのか？

「しょうがない。このまま店に行くか。」

俺は電話を諦め、秀吉が仕事をしているFクラスに向かった。

「おっ、あれは・・・明久たちか。」

Fクラス前には明久、雄二、ムツツリがいた。

「おい、さつさと仕事・・・」

俺はそう言いかけて気づいた。

明らかに三人の様子がおかしい。

三人とも・・・いや、正確に言えば明久とムツツリの顔が引き攣っ
ている。

「どうした。」

「・・・謙太か。」

俺は三人に駆け寄った。

「じ、実は・・・」

「ウエイトレスが攫われた。」

「・・・は!?!?」

雄二の言葉に、思わず耳を疑った。

ウエイトレス・・・姫路たちが攫われた？

「攫われたって・・・どういうことだ？」

「俺たちが出払っている間に、何者かが4人を連れ去った。」

雄二が、事実だけを淡々と説明した。

・・・コイツ、大方予想してたな？

「・・・場所は？」

「・・・分かっている。」

俺の問いに答えたのはムツツリ。

「・・・これ。」

そう言っつてムツツリが取り出したのは、トランシーバーのようなもの。

「・・・盗聴の受信機。」

「・・・今回だけは目をつぶろう。」

こんなことをしている場合じゃない。

さっさと助けにいかないと、店の経営云々以前に、アイツらの貞操が危険だ。

「さて、さっさとクイーンを助け出しますか。」

「うん。早く行こう!!」

俺達は、ムツツリの盗聴器「・・・受信機」を頼りに誘拐犯の足取りを追った。

『さてどうする？坂本と・・・吉井だったか？そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？』

『待て、吉井つてのは知らないが、坂本は下手に手を出すとまずい。今はあまり聞かないが、中学時代はかなり鳴らしていたらしいからな。』

『坂本つて、まさかあの悪鬼羅刹か？』

『ああ。それに、あいつらとよくつるんでいる佐藤つて奴は、この前どっかの遊園地でチンピラを意識不明にまでしたらしい。タイミングが悪ければそいつまで相手にする羽目になるぞ？』

『どちらも危険だな。できれば事を構えたくはないが・・・』

『そうもいかないだろう。依頼は吉井と坂本を動けなくすることなんだから。』

ムッツリの受信機から、ノイズ混じりに会話が聞こえてくる。如月グランドパークのチンピラ、死んでなかったんだ・・・そんな会話を聞いていると、いつの間にか目的地に到着した。

目的地・・・誘拐犯の根城は文月学園にほど近いカラオケボックスだった。

そのパーティールームに監禁されているらしい。

無理やり連れてこられたとしたら、カウンターで止められなかったのか？

・・・それも無理な話か。

『お、お姉ちゃん・・・』

『アンタたち、葉月を離しなさいよ!!』

目的地の前に来たところで、盗聴器から葉月と美波の音が聞こえた。

『お姉ちゃん、だつてさく!! かつわい!!』

『ギャはははは!!』

男たちの汚い笑い声が聞こえてきた。

相手は恐らく七人前後。

・・・余裕だな。

「・・・!!」

明久が、拳を握り締め歩き始めた。

「待て、明久。」

雄二がそれを制する。

「気持ちはわかるが、先ずは人質の救出が先決だ。ムッツリーニが

うまくやるのを待て。」

「・・・分かったよ。」

明久は、どうにか思いとどまりその場で待機した。

『灰皿をお取り替え致します。』

盗聴器から、ムッツリの声がする。

潜入には成功か。あとは・・・

『おう。で、このオネーチャンたちどうする？ヤっちゃっていいの？』

『だったら俺はコッチの巨乳チャンがいいな。』

『あつ、ズリー！それなら俺二番ね。』

室内から、反吐が出るような声が聞こえる。

・・・我慢我慢。

『あ、あのっ、葉月ちゃんを離して、私たちを帰らせてください！
姫路が、蚊が鳴くような声で言った。

『それは、オネーチャンたちの頑張り次第だな。』

『やつ！さ、触らないで！！』

・・・

『ちよつと、やめなさいよ！！』

『あーもう、うっせえ女だな！！』

『ドンツ！』

『キャアツ！！』

『ガツシャアン！！』

・・・

ツカツカツカ・・・

『おい、明久！』

気づいたときには、明久がパーティールームの扉に手をかけていた。

『さすがにこりゃ、堪忍袋のおが切れたな。』

俺も、明久の後に続こうとした。

ガシッ！！

「・・・雄二？」

気づいたときには、雄二が俺の肩をつかんでいた。

「明久はともかく、お前はダメだ。身元がバレている今、意識不明になるほどの大怪我をさせたら、お前は学校に来れなくなるぞ。」

「・・・」

「ここは俺に任せとけ。この前の借りは返す。」

雄二はそう言うと、パーティールームに入っていく・・・一人の頭

を壁に打ち付けた。

・・・あれって、意識不明にならないの？

なんとか姫路たちを救出し、Fクラスに戻った俺たち。

「こ、怖かったです・・・」

「ウチもどうなるかと思っただわ。」

「でも、葉月ちゃんが無事でよかったです・・・」

「そうじゃのお・・・」

女性陣が、口々に感想を行った。

「大変だったのですね。」

メイクを済ませ、優に変わった俺は教室を見渡しながら言った。

・・・大分客が減ったな。

「さて、ここからちよつと頑張らないと・・・」

「四人はちよつと休んでて？」

美波がやる気を出そうとしたところで、明久が言った。

「どうしてですか？私たちが頑張らないと、お店が・・・」

「たしかに休むべきだな。」

雄二も言った。

こいつらの思惑は大体わかるし、代弁するか。

「おそろくですが、四人とも予想以上に心にダメージを負っているはずですよ。今無理をすると倒れる恐れがありますし、少し休んで英気を養うべきですよ。」

俺は四人に笑いかけた。

「そう・・・ですね。」

「無理は禁物よね。」

二人は、納得したように言った。

「ワシは大丈夫・・・」

「秀吉さんもです。」

「しかし、わしは男じゃから・・・」

「男でも女でも関係ありません。人の心というのは、自分が思っている以上に脆くて弱いのです。」

「・・・そうじゃな。」

秀吉も、渋々頷いた。

「さあ代表、吉井さん。4人の分も頑張りましょう!!」

「そうだな。」

「そうだね。」

俺達は頷き合つと、新たな客が入ってきたカウンターへと向かった。

そして一時間後・・・

「「おつかれさまでした〜!!」」

営業妨害や誘拐騒動などを乗り越え、なんとか一日目が終了した。

「それじゃ、私たちも帰りますね?」

姫路と美波が、帰る支度を始めた。

「いや待て。ムツツリー二は島田姉妹を、謙太は秀吉と姫路を送っていつてくれ。」

「え?もう大丈夫よ。」

美波が元気そうに振舞う。

かなり無理をしているのだろう。

「お前らが大丈夫でも、あっちが放っておかない可能性がある。」

「それは・・・」

雄二に痛いところを指摘され、美波が黙り込む。

そんなことがあって欲しくないがな。

「対策を打つに越したことはないだろう。頼んだぞ、二人とも。」

「・・・了解」

「任せろ。」
俺は、二人を連れて帰った。

「大丈夫か？」

秀吉を送ったあと、俺は帰りながら姫路に聞いた。

「ええ。」

よかった。

大丈夫だろう。

「落ち着いているんです。不思議なくらい。」

「え？」

なんの前触れも無く、突然姫路が言った。

「もし何かあっても、明久君が助けてくれますから。」

「そう・・・だな。」

姫路は、笑顔でいった。

その言葉で、姫路が明久を信頼していることを感じた。
全く、明久には敵わねえよ。

「あ、送ってくださってありがとうございます。」
いつの間にか、姫路の家についていた。

「・・・ああ。」

俺は姫路と別れ、一人で家に帰った。

第九十三話（後書き）

謙太「ようやく終わった・・・」

優希「まだ一日目ですけど。」

謙太「次回をお楽しみに！」

第九十四話（前書き）

今回はオリ話・・・というか真相究明編です。

まあ学園祭編の中の一こまと考えていただければ・・・

それではどうぞ、

第九十四話

学園祭二日目・・・

「おつす。」

「おはようございます。」

俺は優希と共に、いつもより一時間早く登校した。

「ああ、おはよう謙太・・・と黒崎さん。」

机（みかん箱）で勉強をしていた明久が、俺と優希に挨拶を返した。

・・・まだ七時だぞ？

「やけに早いな。」

「そういう謙太だって十分早いけど・・・どうしたの？」

明久が、疑問の眼差しをぶつけてくる。

「俺？ただの雑用だけ。」

昨日の夜、優子と優希に半強制的に雑用を押し付けられた俺。

・・・どうやらAクラスの準備は、俺の仕事になったようだ。

「吉井さんはどうしたのですか？」

「ああ僕は・・・召喚大会のための補給試験かな。」

明久が、若干優希に照れながら言った。

なるほど、確かに目の下のクマがやばい。

「そうか・・・頑張れ。」

「そちらこそ（？）」

俺は明久と別れ、Aクラスに向かった。

『メイド喫茶、ご主人様とお呼び！！』にて。

ガヤガヤガヤ・・・

「・・・朝っぱらからよく来れるな。」

教室では、既に三十人くらいが準備を始めていた。すごい念の入れようだ。

「あ、謙太！」

優子が、俺のところにとコトコと歩いてきた。

「おつす。俺は何をすればいい？」

挨拶を返しながら教室を見渡す。

見たところ、力仕事はいらなそうだが・・・

「ああ、それがね・・・」

優子が、俺に一枚の紙を渡しながら言った。

「脅迫状が来てるの。」

「は？」

優子が渡した紙には、こう書かれていた。

『今日も邪魔してやるから覚悟しとけよ？

このことをもし先公たちに言いつけても無駄だぜ？

先公たちはオレらの味方だ。』

「これ。どう思う？」

優子は、不安そうに俺に言った。

「・・・おそらく、これは常夏コンビの仕業だろう。」

だが妙だ。最初の文は、昨日の営業妨害報告に逆切れしたのだから・・・

「『先公たちはオレらの味方？』この文にはどんな意味が・・・？」

「ただのハツタリじゃないんですか？」

優希が、訝しげにその紙を見ていった。

「・・・その可能性は低いと思う。」

霧島が優希の発言を否定する。

「どづいっことだ？」

「・・・今朝、この文を見つけたあと先生に言ったら、『ツマラナイ悪戯に惑わされるな。』って一蹴された。」

霧島は、残念そうな顔をしていった。

「そうか・・・」

おそらく、先生たちの中で昨日の営業妨害を知っているのは、鉄人だけだからな・・・

「それなら、犯人を捕まえて尋問したほうがいいな。」

幸い、アイツらも早く来てくれていることだし。

「お願いできるかな？」

「・・・私からもお願い。」

「お願いします。」

優子たちが、俺を見る。

・・・やれやれ、こんな美女三人から頼まれたら、鉄人との決闘だつて出来る気がするぜ。

「言われなくてもそうするつもりだ。」

俺は、三人と分かれ、目標がいる場所・・・点数補強用の教室に向かった。

二年と三年ではテストが違うから、恐らく常夏コンビがテストを受けているのは三階。

「・・・着いた。」

俺は、ご丁寧に『召喚大会用テスト会場』と書かれた場所にたどり着いた。

「まだテスト中か・・・」

流石に、先生の目の前で暴行はマズイ。

「ここは待ちゲーだ。メルギア並みに耐久してやる・・・」

ああ、なんか朝でテンションがおかしくなってる・・・
自分で自分が言ってる事が理解できない・・・

・・・三十分後

ガラガラ・・・

「!!!」

やっと来た。

空き教室に身をひそめる俺の前を通るのは、三年の学年主任。

「さて、突撃と行きますか。」

俺は先生が階段を下りきつたのを見計らい、テスト用の教室に突入した。

「な、なんだてめえ！」

「お前二年だろ!!!どうしてここに!?!」

常夏コンビは、思わぬ来客に驚いた様子だった。

まあ関係ない。とりあえずは・・・

「死ねやっ!!!」

「グベアっ!!!」

話を通じなさそうな坊主の鳩尾を蹴り、吹き飛ばした。

坊主は壁に打ち付けられ、意識を失う。

「お、おい!お前一体!?!」

相方を吹き飛ばされ、驚いているモヒカン。

「さて、お前もこうなりたくなければ、俺の質問に答えるんだな。」

俺は指を鳴らしながらモヒカンを睨んだ。

「ツテメエ・・・図に乗るな!!!」

モヒカンが俺の方に走ってくる。

やれやれ、面倒だな・・・

「ウオラッ!!!」

モヒカンが俺を殴る。

しかしそれを・・・

ガッ！ 合気道の要領でつかみ、

グリッ！ その腕を捻り、一本背負いの要領で投げ

ヒュン！ 途中で手を離し、

ドン！ 教室の黒板に直撃させた。

「ガハツ・・・」

悶絶するモヒカン。

しかし意識は飛ばさせない。

「さて、こいつは何だ？」

モヒカンのマウントを取り、俺は例の脅迫状を見せる。

「そ、それは冗談だ！」

「冗談？にしちゃ手が込んでるな？」

俺は一番下の行を指さした。

「こいつはなんだ？」

「そ、それは・・・」

モヒカンが言葉に詰まる。

・・・怪しい。

「言わねえのか？それなら・・・」

俺は、殴る素振りを見せる。

「わ、分かった！」

モヒカンは、おとなしく言うことを聞き、話し始めた。

「・・・俺はよお、ある先生に頼まれたんだ。」

「何を？」

「『召喚大会で、白金の腕輪を暴走させる』ってな。」

「暴走・・・」

そういえば、アレは故障品だったな・・・

色を白に変えて、デザインを綺麗にするだけだったはずなのに、何

故か点数のエラーが発生してしまったっけ。

まあそれでも、黒金の『初期型』よりはマシらしいけど。

「もし暴走をさせることができたら、高校への推薦状を書いてくれ

ると言われて、俺達は1も2もなく飛びついたさ。」

「・・・それで？」

「参加する奴らの中で、腕輪で暴走しない奴と言えば・・・吉井ペアだったんだ。」

・・・なるほど。」

これで全てつじつまが合う。」

「つまり・・・明久たちを邪魔することが、お前らの役目だったわけか。」

「まあ、そういうことだ。」

モヒカンは、顔をそらしながら言った。

「最初は、ちよつと集中力を切らせばすぐ負けると思ったが・・・オレらだけではどうしようも無いくらい奴らは強かった。」

そうつぶやくモヒカンの顔には、悔しさがにじみ出ていた。

「・・・そうか。それはご苦労なこつた。」

俺は、モヒカンのマウントを解いた。

「夏川は多分まだ大丈夫と思っっているらしいが・・・俺的には多分、もう無理だと思う。」

「そりゃそうだろ。お前、明久の日本史の点数しってるだろ？」

「ああ。オレらと変わらない、Bクラス並みだ。」

そして、観察処分者でもある。

こいつらに勝機はないだろう。」

「わかつた。もう十分だ。」

俺は、教室を後にしようとして、最後に一つ言った。

「・・・言っておくが、Aクラス及びFクラスに手をだした場合、お前らの命はないと思え。」

教員の前だろうがどこだろうがお前らをぶつ殺す、と。

俺はそれだけ言ってこの場を後にした。

第九十四話（後書き）

謙太「・・・次回をお楽しみに。」

第九十五話（前書き）

オリ話風味です。

今回は少しAクラスを出してみました。

それではどうぞ・・・

第九十五話

「そうだったの・・・」

俺はあのあと常夏コンビの下から去り、Aクラスにて優子に説明を終えた。

その説明を聞いた優子、優希、霧島、そして遅れてきて事情を聞いた優子はなにやら思案顔になった。

「これって・・・学校の存亡に関わる自体じゃない？」

優子が説明を聞いた感想を口にする。

さすがはAクラス、飲み込みが早くて助かる。

「ああ。腕輪の欠陥だけでも十分信用は落ちるが、万が一腕輪の暴走で使用者、もしくは観客なんかケガでも負えば最悪だ。」

「そうですね。この学校は何かと有名ですし、逆にこういう問題も予想以上に周りが早いと考えていいでしょう。」

「・・・そして学校内で不正な推薦が回っていることも問題。霧島が、新たな問題点を指摘する。」

「そっちはこの学校の学生たちに問題が出るわね。これじゃ、まともな推薦を受けなくなっちゃう。」

「ああ。もしこの事が明るみになれば、大学側も入学をさせかねるだろう。」

「・・・複雑だね。」

問題点が山のように出てくる。

この学校・・・否、教育の歪みを直に感じている気分だ。

「取り敢えず、お前らが直接的、ないし間接的な妨害を受けることはないと思うから安心していい筈だ。」

「ああ、うん。それは良かったんだけど・・・」

「・・・逆に、もっと大きな問題点が見つかった。」

優子たち4人は、一様に顔をしかめる。

「それについての対策は、学園祭が終わってから学園長にでも聞き

に行けばいいだろう。常夏コンビもこれ以上の手出しはできないだろうし。」

奴らが召喚大会に出て明久たちを妨害するのが最終手段だと思うが、それについては問題ないだろう。

・・・科目も日本史だし。

「取り敢えず今は・・・」

「学園祭を楽しむ、よね！」

「え？あ、ああ。」

優子が笑顔で言った。

「・・・それについて反対はない。」

「二年生で、気兼ねなく楽しめるのは最後ですからね！」

「出来ることがないなら、一旦忘れて楽しまないと！」

ほかの三人も顔を明るくさせた。

「今はそれが一番だろう。とにかくたくさん思い出を作ろうぜ？」

「・・・うん！」

四人（珍しく霧島も）は元気に頷いた。

「それじゃ、俺はFクラスに帰るから。」

「バイバイ」

「またお店にも顔を出して欲しいです！」

「・・・雄二と一緒に。」

「私たちもそつちに行くからね！」

・・・来ないで欲しい。

四人に見送られ、俺はクラスに帰った。

Fクラスに向かう途中の廊下で、明久と雄二を見かけた。

「おう、二人とも。」

「謙太か。」

「お疲れ様。」

二人は、心無しかかなり眠そうだった。

「どこ行くんだ？喫茶店の準備はまだか？」

「えっと、準備はだいたい終わったから、召喚大会までひと眠りしようと思つて。」

「昨日は徹夜だったからなー、フワァ・・・」

雄二が、あくびを堪える様子も無く言つた。

まあ、決勝相手は小技の通じない相手だ。

それに奴らは曲がりなりにもAクラスなんだし、気を引き締めるのも当然か。

「それなら存分に寝てこい。・・・お互いの腕枕でな。」

「「違うつ!!」」

明久と雄二がお互いに腕枕・・・ウエツ、考えただけで吐き気がする。

「・・・雄二、浮気は許さない。」

「翔子!?!どこから湧いた!?!」

夫の身を案じて出てきた霧島に、雄二が驚く。

・・・湧いたつて、ひどい扱いだな。

「・・・これは冗談。」

「お、お前の冗談は、冗談に聞こえねえんだよ!」

霧島が、雄二を見ていたずらっぽく笑う。

雄二は、その表情に若干顔を赤らめながらそっぽをむいた。

「ま、ゆつくり休んでこい。」

「・・・二人とも、応援してる。」

俺達は二人を見送つた。

「それじゃ、また後で。」

「お前らの無念は晴らしてやるから、安心しとけ。」

二人もそれに応え、恐らく屋上へと向かつた。

「おーっす……って相変わらずすごいな。」

俺が入ったFクラスは、もう昔のFクラスとは変わっていた。

「おっ、謙太。おはようなのじゃ。」

「……おはよう。」

秀吉とムツツリが俺に気づき、俺のところへ来た。

「手伝いは済ませたのかのう?」

「ああ。こっちはどうだ?」

「……既に完了している。」

俺の言葉に、ムツツリが親指を立てた。

「それは良かった。秀吉、着替えに行くぞ。」

「分かったのじゃ。」

俺は、秀吉を連れて例の空き教室に行った。

少々お待ち下さい……

「それでは行きますか。」

「そうじゃな。」

優に変わった俺は、秀吉を促して空き教室から出た。

「一般客が入るまで、あと十分程度ですか。少し時間がありますが、まあ問題ないでしょう。」

「……お主の変わり身には脱帽するぞい。」

秀吉が何かを言っているが気にしない方向で。

「皆さん、集まってくだ……」

Fクラスに戻り、臨時代表としてFクラス員を集めようとしたところ、男子に囲まれた。

『どちら様ですか？』

『彼氏はいますか？』

『僕のこと叩いてくださいっ!!』

『す、スリーサイズを・・・』

『はぁ・・・』

馬鹿ばっかし。

「あんたたち！忘れたの？」

実行委員である美波が、アホどもに説明する。

「アレは優。このクラスに臨時で手伝いに来ているニューハーフよ
！」

「ちょっと待ってください！それ、いろいろ間違ってます！」

ニューハーフじゃねえ、男だ！！

「冗談。これは（一応）謙太よ。」

「一応は要らないんじゃないんですかね・・・」

美波が笑いながら言う。

・・・まあいいか。

「それじゃ、もう客が来るから。みんな、設備のために頑張るわよ
！！」

『『『おう!!!!』』』』

何だかんだで一体となったFクラス。

これで今日の売上はそこそこ大丈夫だろう。

「それじゃ、私も頑張りますよか。」

俺も、カウンターに入って準備をした。

優子たちにバレないようにしていたら、いつの間にか時間は流れて

十二時。

「そろそろ明久さんたちを起こしましょうか。」

「分かった。」

俺がそう言っていると、横溝が立ち上がり明久たちがいる屋上に行った。

「誰が明久たちを起こしに行ったのじゃ？」

秀吉が俺に聞いてくる。

「横溝さんです。」

「そうなのか。・・・ワシが行きたかったのじゃが。」

俺が答えると、秀吉がなにやら意味深なセリフを吐いた。

秀吉？その言葉に、他意はないよな？

「しょうがないですよ。秀吉さんは大人気ですし。」

「・・・お主ほどではないがのう。」

それを言うな！！

「美波ちゃん。どうして私たちは男の子に負けてるのですか・・・

？」

「それは違うわ、瑞希。あの子達は『男の娘』なのよ。例外なのよ。

・・・」

・・・秀吉と一緒にしないで欲しい。

「優よ、今なにやら無礼なことを考えなかったか？」

「い、いや？気のせいですよ・・・」

秀吉が、ジト目で俺を見る。

カンが鋭いな・・・

そして明久たちの試合開始時間。

「そろそろ明久くんたちの試合ですね。」

姫路が、時計を見ながらふとつぶやいた。

「そうね。アキたち、勝てるかしら・・・」

美波も気にしている様子だ。

その試合は、姫路の転校がかかっている大事な試合だ。気になるのも無理はない。

「姫路さん、美波さん、ちょっと休憩していいですよ？」

俺は、二人に笑顔で言った。

「え？でも・・・」

「さっきからばーっとしてますし、ケガでもしたら大変ですからね。」

「そうじゃな。島田、姫路よ、二人とも明久を見てくるがよい。」

「べ、別にアキ（明久君）が見たいわけじゃないわよ（ありません）！！！！」

二人が、顔を真っ赤にして否定する。

「ま、まあそこまで言うなら結果を確認してきてあげるわよ！」

「そ、そうですね！せっかく決勝戦に出れたのですしね！」

二人は、意気揚々と更衣室に向かった。

「行ってらっしゃい。」

「行ってくるのじゃ。」

二人に手を振ったあと、再び店の業務に戻る俺たち。

「・・・」

そのとき、ほんの少しだけ寂しそうな秀吉の表情を見てしまった俺。

「えっと・・・秀吉、さん？」

「お、おお。早く接客をせねばな。」

秀吉は、いつものように接客に戻ったが・・・

「・・・あんなに愛想笑いが見え見えな秀吉さん、見たことありません。」

いつもの演技魂が出ないのか、確実に笑顔がひきつっていた。

本当なら秀吉も行かせたいが・・・

秀吉に言っても・・・

「ワシは大丈夫じゃし、ウェイトレスがへりすぎると客足にも影響が出るじゃろっ？」

なんて言って聞かねえし。

「……(チヨンチヨン)」

そのとき、ムツツリが俺の肩を叩いた。

「康太さん、どうしました？」

「……(ヒョイ)」

ムツツリは、教室の入口を指さした。

そこには……

「あ、う……」

葉月が、キョロキョロと当たりを見渡していた。

……チャーンズ！

「あの、葉月ちゃん？」

「あ！可愛いお姉さん！」

おおっ……

やっぱり『可愛い』っていう認識は変わらないのか？

「どうしましたか？」

「葉月、お店のお手伝いに来たんですけど……」

葉月は、相変わらずキョロキョロと辺りを見渡している。

「お姉ちゃんとか、バカなお兄ちゃんとか、可愛いお兄ちゃんとかはどこですか？」

……最後のはここにいるけどな。

「そうですか、みなさんは召喚大会の会場にいるのですが……」
さて、ここからが説得だ。

俺は、秀吉を見た。

「秀吉さん、この子を葉月さんの所へ連れてってくださいませんか？」

「うむ、もちろん行くぞ！」

説得完了。

……早っ！！

「その代わり、変えるのがちと遅くなると思うが、良いかのお？」
秀吉が、

よし、自ら見てくることを宣言した。

「構いませんよ?」

「そうか。済まないのお。」

秀吉は(目を輝かせて)そう言つと、葉月を連れて一目散に教室を出ていった。

「・・・それでは、もうひと働きと行きますかね。」

俺は、喫茶店の業務に戻つた。

第九十五話（後書き）

優「ちよつとグダグダでしたね。」

優希「久々に出れてよかったです。」

優「次回をお楽しみに！」

優希「ところで、そろそろ正体を・・・？」

第九十六話（前書き）

これでひとまずメインの学園祭は終わりですが・・・
今回、とっても長いです。
頑張ってお読みください。

第九十六話

三十分後

「たっだいま〜!!」

明久が意気揚々と帰ってきた。

「おかえりなさい、皆さん。」

俺は、笑顔でみんなを迎えた。

笑顔がデフォルトになりつつあるな。

・・・習性つて恐ろしい。

「おお、相変わらずすごい盛況ぶりだな。」

「私たちが出て行く前より多いじゃないですか!」

「ワシらが居らぬというのに、どうやって店を営業しておったんじや!？」

あまりの店の盛況ぶりに、続々と教室に入ってきたみんなが口々に驚いた。

「Fクラスのみんながウェイターとして死力を尽くしてくれているので、なんとか店はうまく回っていますよ。」

「へえ、それにしてもすごい人気ね〜。」

ちょうど五分前くらいから、明久たちの試合を観ていた観客が続々とこの店になだれ込んできていた。

ムツツリも失踪していたせいで、一時は順番待ちが必要になるかと思っただが・・・

須川が一人で厨房を盛り立て、凄まじいスピードで料理を作っていたおかげで何とかやってこれた。

「・・・という訳で、皆さんにはこれから『死ぬ気』で働いてもらいますので、よろしくお願いします。」

「うん。今まで手伝えなかった分も頑張るよ!」

俺が笑顔で言うと、明久がやる気を出した。

「やれやれ、かつたるいな・・・」

「坂本は文句言わないの!!」

「わかつてる。これも姫路のためだよな?」

雄二が何か言いたげに俺と明久を見ていたが、スルーの方向で。

「そういえば土屋さん。」

「・・・何?」

「ちよつとこつちへ来てください。」

厨房で料理に取り掛かろうとしたムツツリを呼び止め、人気や食材がない場所へ連れていった。

「貴方、厨房をほったらかしてどこへ行っていたのですか?」

「・・・!!」

・・・この反応から見て、おそらく他店の女子、もしくはミニスカートの客でも盗撮していたのだろう。

こいつには軽くオシオキが必要だな。

「・・・チラッ」

ブシャアアアアアアアア!!

俺が軽くスカートを翻すと、ムツツリは（鼻）血の海に沈んだ。

「どうですか?男の下着に欲情してしまう自分の体に絶望しましたか?」

「・・・貴様、図つたな!!」

放置したムツツリの罵声を浴びながら、俺は教室に戻った。

「あれ?ムツツリーニは?」

「さあ?またどこかで油を売ってるんじゃないでしょうか。」

「そつか。又どこかで女の子を撮影してるよね。」

明久がムツツリの事情を尋ねるが、俺が知らないふりをした。

『只今の時刻を持って、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒

は速やかに撤収作業を行なってください。』

「・・・これにて終了です!!」

「あゝ、終わったあ・・・」

ようやく、長かった清涼祭がおわりを告げた。

「さすがに疲れたのお・・・」

「・・・(コクコク)」

流石に、この二日間でみんな満身創痍の様子だ。

「じゃ、こちらは着替えてくるわね。」

美波が、そう言って教室を出ようとした。

「ええっ、どうして!？」

「どうしてって、恥ずかしいからに決まっているでしょ!？」

明久がアホな質問で美波を困らせる。

まあ、せめて目の疲れを癒したいという気持ちも分からなくはない

が・・・

「すみません、すぐ戻りますので。」

「待って!二人とも考え直すんだ!カムバーク!!」

明久の願いもむなく、二人は教室を出ていった。

「ふむ、ならばワシらも・・・」

「はい。チャイナはもううんざり・・・」

「させるかっ!!せめて二人だけでも逃がさない!!」

「・・・(フルフル)」

「よ、吉井さん!何するんですか!」

「ムツツリー二よ、何がしたいのじゃ!」

明久が俺の足に、ムツツリが秀吉の足にしがみついた。

・・・お願いだから、もうこれ以上俺たちを辱めないでくれ。

「明久、遊んでないで学園長室に行くぞ。」

雄二が、明久を止める。

「学園長室じゃと?二人とも学園長に何か用でもあるのか?」

「ちよっとした取引の精算だ。喫茶店が忙しくていけなかったからな。遅くなっただが、今から行こうと思う。」

こいつらも学園長と取引してたのか？

あ、そういうことか・・・

「もしかして、何かの条件と引換えに、設備の買い替えが許可されたのですか？」

「察しがいいな。その通りだ。」

雄二が頷く。

そうか、これで全てが繋がった。

？学園としては、白金の腕輪を暴走させたくはなかっただろうが、今更賞品を無くしたとなれば内外からバッシングを受けるだろうと考えていた。

？そして白金の腕輪を出すか出さまいか悩んでいたちようどいいタイミングで、明久たちが設備の買い替えの許可を取りに来た。

？その明久たちに、設備の買い替えの許可を条件に頼んだ。

・・・という流れか。

「という訳で、行くぞ明久。」

まあなんにせよ、助かつ・・・

「優と秀吉も連れていく！」

「よ、吉井さん、何を！？」

「あ、ムツリーニも来る？」

「・・・(コクコク)」

明久とムツリは、完全に俺たちを逃がさない体制だ。

「わ、私は着替えてから・・・」

「ワシも・・・」

「時間がない。もうそのまま来い。」

「「そ、そんな・・・」」

こうして、俺と秀吉は女装のまま学園長室に向かうことになった。

「失礼しまーす。」

「邪魔するぞ」

さきを歩く明久と雄二は、一応ノックして学園長室に入った。

「お主ら、全く敬意を払っておらぬ気がするのじゃが・・・」

「同感です。人のことは言えませんが・・・」

俺、秀吉、ムツツリがそれに続く。

「私は返事を待つように言っただけですけどねえ。」

奥からババアの声が聞こえる。

「あ、学園長、優勝の報告に来ました。」

「言われなくても分かってるよ。アンタたちに賞状を渡したのは誰だと思ってるんだい」

ババアが呆れたように言う。

「それにしても、随分と仲間を引き連れてきたもんだねえ。そつちの女の子は学園の部外者じゃないか。」

ババアが俺を見ながら言う。

「ああ、えっとこれは・・・」

「いいだろう別に。こいつらもババアのせいで迷惑を被ったからな。元凶の顔ぐらい拝んでもばちは当たらないはずだ。」

「ふん、そうかい。そいつは悪かったね。」

ババアは、悪びれる様子も無く言う。

「それで、白金の腕輪は返却したほうがいいですか？」

明久が、白金の腕輪を出して言う。

いつ見ても派手なデザインだ。

・・・このデザイン変更さえなければ、少なくとも立会人用の腕輪は正常だったんだけどな。

「ああ。そいつは一旦返してくれ。不具合の修理を含めた改修を行う必要があるしね。」

ババアは、そう言っただけで明久から腕輪を受け取った。

「・・・そういえば、なんであいつらは俺たちがババアとつながっていることを知っていたんだ？」

「・・・代表？」

ふと雄二を見ると、雄二は何かを小さい声でつぶやいていた。わからない奴だ。

「学園長、優勝の交換条件である教室の改修はいつから・・・」

「明久！ここでその話はマズイ！」

「ふえ？」

雄二が、鬼気迫る表情で明久を止める。

「・・・盗聴の気配。」

「え・・・まさか盗聴！？」

「やられたっ！！」

雄二が、ムツツリの言葉を受け学園長室から飛び出す。

「アイツら・・・追っぞ！」

「え？雄二、どういうこと！？」

明久は全く状況を飲み込めてない。

「・・・こういう時にバカは困る。」

「盗聴されてたんだ！あの連中、この部屋に盗聴器を仕掛けてやがったんだ！！」

「なんだって！？」

「もしあの会話が録音されていたのなら、大変なことになります！」

「録音！？冗談じゃない！」

俺たちは走りながら会話を続ける。

「秀吉たちも手伝ってくれ。」

「うむ！」

「・・・(コクッ)」

「もちろんです！」

俺達は1も2もなくうなづく。

「あつちは例の常夏コンビだ。秀吉とムツツリーニは二人で固まって行動してくれ！」

「けん・・・優はどうするのじゃ!?!」

「私なら大丈夫です！」

俺が力強くうなづくくと、秀吉も納得した。

「それでは、ワシらに常夏コンビとやらの特徴を教えるのじゃ！」

「髪型でわかる!坊主とモヒカンだ！」

「了解じゃ!ワシらは外を探す！」

「私は旧校舎を!！」

俺はみんなにそう告げると、一足先に旧校舎に走り出した。

俺は、周りの視線を気にしながら走った。

しよっちゆうスカートが翻るため、集中して走れない。

・・・チャイナじゃなければもつと速く走れるのにつ!!

「ど、どこ・・・?」

俺は(人目を気にしながら)あちこちを探し回った。

旧校舎一階にて・・・

タッタッタッタッタ...

「わっ!!」

俺は、突然目の前に現れたおじいさんに驚き躓きかけた。

「イタタ・・・おじいさん、もう一般公開は終わってますよ！」

俺がおじいさんに言うと、おじいさんは振り返りながら言った。

「そうか、すまぬのお。最近耳が遠くてな・・・」

おじいさんはそう言いながら、俺の目をのぞき込んだ。

「ふむ・・・男性のような荒々しさもあるが、女性のような繊細さ

も持っておる。お主はどつちなのじゃ？」

えっと、要するに男か女かってこと？」

ここで女装癖と思われたら嫌だし・・・

「私は女です。」

嘘をついた。

「そうかそうか、確かにべっぴんさんじゃのお。」

おじいさんは騙された。

・・・なんか罪悪感。

「えっと、いそいでるんで。」

「そうか。達者でな、お嬢ちゃん。」

俺は、謎のおじいさんと別れて二階に行った。

旧校舎二階にて・・・

『『『あ、優さんだ！！』』』

二階に上がるやいなや、Fクラスの連中に囲まれた。

ヤバイ、ここはFクラスの巣窟だったんだ・・・

「ちよつとごめんなさい、いそいでるので！」

俺は、とりあえず周りの二、三人を吹き飛ばして走った。

・・・ここにはいなさそうだな。

空き教室なども念入りに調査するが発見できず、俺はEクラスに行った。

「す、すみません、ここに三年生の方は来ていませんか？」

『『『・・・』』』

Eクラスは、俺が入ると同時に凍りついた。

・・・どこか変だったかな？

「えっと・・・あなたは？」

「私は、Fクラスで臨時の手伝いをしている優です。実は三年生が

無銭飲食を・・・」

『『『優さ〜ん！！』』』

・・・ここもか！！

「し、失礼しました!!」
俺は、すぐさまそこから離脱、三階へと向かった。

旧校舎三階にて・・・

「あの、3・Aの常村優作さん、夏川俊平さんはどちらにいらっしやるかご存知ですか？」

俺は、見知らぬ三年生に声をかけた。

「えっと、俺はCクラスだし、奴らはどこに行ったか知らないけど・・・どうして？」

どうしてって・・・

捕まえてボコるためとは言えないし・・・

「実は、私の友達に彼らを好きだっって人がいるんです。」
嘘をついた。

「本当か?!これは大ニユースだ!」

Cクラスの三年生は、俺の情報を聞くやいなやどこかへ飛んでいってしまった。

・・・しようがない。

「これで搜索完了ですか。」

あとの二ペアが捕まえていることを祈り・・・
ドオン!!!!

「何!?!」

突如、どこかから爆発音が聞こえた。

・・・まさかアイツら、この学園をそのままの意味で崩壊させる気か!?

俺は、音がした方を見る。

「・・・上、ですね。」

上ということは、すなわち屋上ということだ。

「・・・犯人確保に行きますか。」

俺は、屋上への階段を上がった。

ドオン！！

階段を上がるそれだけの間に、もう四発ほどなっている。

「さすがにやばいですよ……」

俺は更に足を早めた。

ガチャ！！

俺が屋上へのドアを開けると、そこは悲惨な状況になっていた。

後夜祭で使うはずの放送器具が燃えていて、その横でうずくまる二つの人影。

……常夏コンビだ。

「あの、大丈夫ですか？」

俺は、坊主に声をかけた。

「あ……おお、あなたは女神ですか？」

坊主頭は、泣きながら俺を拝んでいる。

……なんだこいつ。

その横を見ると、モヒカンも同様に俺を拝んでいる。

……殺りづれえ。

「それでは、貴方達が持っているものを全てここに出してください。」

ふと思いついたことを、俺がダメ元で言ってみると……

「はい、女神様！！」

見事に全て出した。

……こいつらアホだ。

えつと・・・あつた！盗聴器に録音器。

「なぜ貴方達はこんなものを持つているのですか？」

俺が盗聴器を二人の目の前に見せると、二人は縮み上がった。

「そ、それは社会の悪を暴くためです！」

坊主が縋るような目で俺を見てくる。

ぶつちやけキモイが、ここでそんな態度をとってはおしまいだ。

「・・・悪を正すためとはいえ、あなた自身が悪になっては意味ないでしょう？」

俺は、笑顔で二人を諭すように語りかける。

「女神様！どうかお慈悲を！」

二人は、祈るように俺を見る・・・てか祈ってる。

二人とも、本気で俺を女神と誤っているようだ。

・・・チャイナドレスの女神がどこにいる。

「誰もあなたたちを責めません。よく言うのではないですか。『罪を憎んで、人を憎まず』・・・と。」

「おお、女神様！！！」

俺のありがた〜いお話を聞いた二人は、土下座をした。

・・・なかなか気分がいいな。

「それでは、素直に自分の罪を認め、出頭できますね？」

「はい！！！」

俺がこう言うと、二人は感激のあまり泣きながら屋上を出ていった。

・・・その後、常夏コンビたちは泣きながら鉄人のところへ行き、すべての事情を説明し、この事件にカタが付いた。

「さてと、そろそろ着替えますかね。」

俺は、一人で例の空き教室に行った

こうして、二日間に及ぶ学園祭は幕を閉じた。

第九十六話（後書き）

謙太「次は後夜祭だな。」

優希「私は出番ないですけどね。」

謙太「まあまあ・・・次回をお楽しみに！」

第九十七話（前書き）

今日は余裕があるので二話投稿なのですが・・・
書いてる自分が恥ずかしい内容になってしまいました。

一応これで、学園祭編完結です。
それではどうぞ・・・

第九十七話

「おっす。やってるか？」

俺は、打ち上げをしている公園にやってきた。

ああ、なんか久しぶりに男の言葉を使った気がする・・・

「おお、謙太よ。先に始めておったぞ。」

「かまわねえよ。着替えてたんだし。」

俺は、近くのビニールシートに腰掛けた。

「おっ、明久、雄二。」

「謙太！！ありがとう！！」

「助かったぜ、謙太！！」

二人は、俺を見つめるなり俺の手を握った。

「な、なんだ、いきなり!？」

俺は、なんのことだか分からずキョトンとしていた。

・・・俺、こいつらを助けようとしたっけ？

「謙太、あの二人を説得してくれたでしょ？そのおかげで、鉄人がそっちに付きつきりになっちゃったから、僕たちは無罪放免ってわけさ。」

「それはおめでたいが・・・なんで知ってるんだ？」

あの時は優だったから、普通にやってればバレるはずがない。

「いや、常夏コンビが『チャイナドレスを着た女神様に懺悔してきた！俺はもう何も怖くない!!』なんてことを言ってたから。」

「ああ、なるほどな。」

全く、はた迷惑な奴らだ。

「ま、今回はあんなこと忘れて楽しもうぜ。」

そう言った俺はおもむろにケータイを取り出すと、ある番号に発信した。

P r r r r , P r r r r

「誰にかけてるの？」

明久が俺に尋ねる。

「ああ、それは・・・Aクラスの連中だ。」

「え？でもAクラスも打ち上げが・・・？」

「大丈夫だろ。・・・おっと。」

相手が電話にでて、俺は明久との会話を打ち切った。

『もしもし、謙太？』

「ああ。今暇か？」

『えっと、暇だけど？』

「そっか、だったら卯月公園までこれるか？」

『べつにいいけど、何やってるの？』

「Fクラスの打ち上げだ。」

『そっか。だったら代表とかも呼んで、みんなで行くから。』

「おう。先に始めてまってるからな。」

『わかった。じゃあね。』

「明久、俺もジュース。」

「ああ、うん。」

電話を終え、明久からジュースを受け取る。

「へえ、オレンジジュースか・・・ってなんだこれ？」

明久に渡されたのはオレンジジュースだったが、やけに苦い。

「ごめん、どうやら安物みたいで・・・」

「ったく・・・ま、飲めればいいか。」

せっかくの打ち上げを不機嫌なままだともったいないからな。

「・・・こんにちは」

『『『おお!』『』』』』

公園の入口付近から歓声が上がった。

「やつほー、謙太くん。」

「おっ、きたか。」

ここにきたのは愛子、優子、優希、霧島の四人だった。

「謙太。お疲れ様。」

「そちらこそ。」

俺はそう言いながら優子に持っていたジュースを渡す。

「ありがとう。」

優子は、それをちびちびと飲んだ。

「優希も飲むか?」

「もちろんです!」

優希にもジュースを渡す。

優希はそれを一気に飲んだ。

「そんじゃ、今日はパーっといこうぜ?」

「しょ、しょうね。」

「・・・ん?」

「優子?どうした?」

「い、いや、なんでもない・・・」

珍しく噛んだ優子に俺が尋ねると、急に黙り込んでしまった。

「優希、優子の様子が・・・」

そこまで言ったところで、俺は絶句した。

「オラ!さつさと脱げ!」

「そ、そんな、落ち着いてください、優希さん!」

「ああん?聞こえねえのか!?」

気づいたときには、優希は須川に脱衣を強要していた。

「・・・しかもかなり語気荒く。」

「ゆ、優希?」

「ああ、謙ちゃんに優子ちゃん。どうかしましたか?」

俺たちを見たたん元に戻る優希。

「・・・『どうした？』のレベルじゃないだろう。」

「にえ、ねえ謙太、あれ誰？」

「・・・俺の知り合いじゃないな。」

「つつつか、もしかしてこのジューズって・・・」

俺と優子は、近くに転がっていた空き缶を見る。

「・・・大人のオレンジジュース？」

「・・・酒だな。」

誰だ、酒なんて買ってきたやつは・・・

「まさかおさげだったにやんて・・・」

「だから苦かったのか。」

俺は、目の前で須川を踏み台にしている優希を見た。

「あれ、とめにやくていいの？」

「大丈夫だろう。須川もまんざらでも無さそうだし。」

「そう。それならいいけど・・・」

優子は、何か物思いに耽っている様子だった。

こいつはあまり酔ってないみたいだし、大丈夫か。

ふと明久たちを見ると、明久の召喚獣が姫路の召喚獣に消し炭にさ

れていた。

その一方では雄二が霧島に迫っており、どうやら酔っていないらしい

霧島は珍しく困った様子だった。

ムツツリは無条件で鼻血をだし、それを酔っていないであろう優子が

が看病している。

秀吉は、酒で顔を真っ赤にしながらも、なんとか理性を保とうとし

ているのか瞑想をしている。

そしてFクラスのメンバーは見事に優希の僕になっていた。

「なあ優子。」

「何、謙太。」

「・・・平和だな。」

「・・・そうね。」

・・・なんかもうどうでもよくなってきた。

さつきからあれしか飲んでないし、俺も酔ってるのか？

優子目線

どうしよう・・・

今なら、酒に酔った勢いで告白できるんじゃない・・・

「なあ優子」

「何、謙太」

突然、謙太が話しかけてきた。

「・・・平和だな。」

「・・・そうね。」

謙太は、顔を真っ赤にして言った。

謙太も多少酔ってるのかな？

それなら、もしかしたらOKしてくれるかも・・・！！

ちよつと卑怯かもしれないけど、これ以上待てない！！

「ねえ、謙太？」

「どうした？」

「あのね、私、実は、謙太のこと・・・」

「「うわアアアアア！！」」

「・・・何事だ？」

ちよつと言おうとしたとき、二つの悲鳴にかき消された。

ひとつは吉井君の悲鳴。

どうやら島田さんに関節技をかけられたみたい。

そしてもう一つは坂本くんの悲鳴。

さつきから代表に絡んでいたみたいけど・・・代表からスタンガ

ンの攻撃を受けて気絶したみたい。

全く、とんだ邪魔が入ったものね。

「あーあ、明久も雄二も落ちたか。これじゃお開きだな。」

「・・・そうね。」

「・・・結局言えなかつたじゃない。」

「おーし、みんな！今日はここで開きだから、みんな飲酒がバレないように帰ってくれ。寝てる奴は、近くの奴が適当に送っていつてやれ。そんじゃ解散！」

『『『お疲れした〜！』『』『』』』

こうして、打ち上げはそこでお開きとなった。

「優希、帰るぞ〜」

「はい。」

謙太が優希を呼びと、優希が何食わぬ顔でやってきた。

「・・・末恐ろしいわ。」

「そういえば優子、さっき何か言おうとしてなかつたか？」

「ううん？なんでも。」

私は、あえてごまかした。

「・・・この気持ちはまだ、心の中に秘めておこう。」

酔った勢いで言っちゃうなんてもつたいたい。

けど、この勢いも借りたいんだよね。

だからせめて・・・

「謙太。」

「ん？」

私は謙太を呼び止め、両手を前に出した。

「おんぶして。」

これが今の私にできる、精一杯のお願い。

「・・・全く、酒つてのは恐ろしいな。」

謙太はそういうと、私の願いを叶えてくれた。

「あつたかい。」

謙太の背中ほかほかして暖かかった。

「きもちいい・・・」

「・・・」

そこからは、私も謙太も無言だった。

私と謙太はお酒のせいで寝かけてる優希を連れて、夕暮れどきの道を帰る。

心なしか、謙太が歩くペースを遅くしてくれてる気がした。しばらくして、私の家についた。

「・・・優子、ついたぞ。」

謙太はそう言うと、ゆっくりと私を下ろした。

それはまるで、私を下ろすのを惜しんでるようだったけど、気のせいだよね。

「えっと、ありがとう。また明日。」

「・・・ああ。また明日。」

謙太はそう言うと、優希を連れて帰った。

私はその姿を見送ると、少し深呼吸をして家に入った。

・・・この気持ち、いつかは伝えられるかな？

ずっといいんだけど、ずっと我慢しているこの気持ち。

いつか、いつか言えたらいいな。

謙太、大好き。

第九十七話（後書き）

謙太「えー、この話はフィクションです、未成年の飲酒は固く禁じられていきますので、絶対におやめください。」

優希「何を言ってるのですか？」

謙太「決まり文句だ。まあ、未成年が吐くセリフじゃないことは分かっているがな。」

優希「そうですね。それでは、次回をお楽しみに！」

第九十八話（前書き）

今回は、さらに恥ずかしい内容です。

学園祭のあとがきでも思ってもらえれば・・・

第九十八話

色々なことがあった学園祭も終わり、次の日。

「ふわぁ・・・」

俺は、いつものように目を覚ました。

今日は学園祭の片付けがあり、午前中だけ学校がある。

・・・Fクラスは午後から補修があるのだが。

「今何時だ・・・？」

俺は、枕元の目覚まし時計を見た。

時計が指す時刻は七時。

「珍しく早く起きたな。」

まあ家に帰ったあと、シャワーも浴びず寝たから当然か。

しかし、そのせいでやけに体がベタベタする。

「さてと、シャワーでも浴びるかな・・・」

俺はベッドから出て、シャワーに向かった。

「んっ・・・」

ん？

ベッドから声がする？

「ま、まさかな・・・」

俺は、不吉な予感を感じながらベッドを見た。

「んっ・・・も、もう朝ですか？」

そこには、目を覚ました優希がいた。

「ああ、謙ちゃん。おはようございます。」

「あ、ああ。おはよう・・・」

・・・もしかして、一緒に寝てたのか？

「えっと、今日は学校ですね。今日も一日頑張りましょう。」

優希はそう言つと、特に疑問も持たずに出ていった。

・・・気分悪っ。

「優希、先にシャワー入るから。」

「いいですよ。私は時間が掛かりますし。」
優希に断ってシャワールームに入る。

「あゝあ、汗でべたべた・・・」

俺はふと、自分のからだに違和感を感じた。

「・・・えっと、これはなんだ？」

俺は、自分の胸を凝視した。

・・・でかくなってる。

「も、もしかして太ったかな・・・」

俺は、不吉な予感を感じながらシャツを脱ぐ。
確かに太っていた。

・・・胸だけ。

俺の脳裏に、一抹の不安がよぎる。

「ま、まさかね・・・」

俺は自分で自分に言い聞かせながら下を脱ぐ。

「・・・無い。」

えっと、これは夢だよな？

股間に付いているはずのものが付いていない。

「ど、どうしよう!？」

俺は、パニックで思わず大声を上げてしまった。

『謙ちゃん、どうしたんですか?』

「な、なんでもない!」

心配を呼びかけしてきた優希に応え、俺は現実に向き直る。

これは夢だよな？

俺はほつぺたを抓ってみる。

・・・痛い。

「夢じゃ、ないんだ・・・」

できれば夢であって欲しかった・・・。

「と、とりあえずシャワーを浴びよう。」

考えることが多すぎて、頭がパンクしかけた俺は、とりあえずシャワーを浴びた。

触れた感触がいつもと全然違う。

・・・体が自分のものじゃないように思う。

「どういうことだ・・・？」

俺は、シャワーをいそいで済ませ、再び脱衣所にこもった。

「まず今は、誰にもバレないようにしないと・・・」

俺はシャツに胸を押し込み、何食わぬ顔でシャワールームから出た。

・・・今が冬なら良かったのに。

「謙ちゃん、ご飯ができてますよ。」

「そ、そうか。ありがとう・・・」

優希がいつものように、俺の前に朝食を置いた。

「謙ちゃん、大丈夫ですか？顔色が悪いですよ？」

「あ、ああ。大丈夫だ。さっさと食べよう。」

「え？あ、はい。」

俺は急いで朝食を済ませ、家をでた。

「おはよう、謙太！」

Fクラスには明久、秀吉、ムツリが来ていた。

「あ、ああ。おっす。」

「どうしたのじゃ、謙太？顔色が悪いぞ。」

「・・・(コクコク)」

秀吉とムツリが、俺を心配して声をかける。

・・・できれば今日は構わないで欲しい。

「大丈夫。軽い二日酔いだ。」

俺は、そこで無理やり話を打ち切るようにいつもの場所についた。

昼休み。

「はあく、疲れた・・・」

俺達は片付けが終わったFクラスで休んでいた。

「謙太、ほんとに今日は調子悪そうだね。」

「え？ま、まあ二日酔いだからな・・・」

午前中、俺たちは（先生たちに怒られながら）テーブルを下の場所に戻したりしたが、やはり体の勝手が違う。

明久はそのことを心配したのだろう。

「保健室に行ったらどうじゃ？」

「秀吉。お前はFクラス全員を退学にする気か？」

「そ、そうじゃったな・・・」

秀吉も心配したように言うが、雄二に諭される。

・・・というかこいつらは二日酔いしてないのか？

まあ、しかし・・・

「流石に、誰かに相談したほうがいいよな・・・」
相談するとしたら誰だ？

俺は、相談相手を誰にするか考えた。

明久の場合

「あのさ、明久。」

「どうしたの？謙太」

「実は俺・・・女になっちゃったんだ。」

「女？まさか？」

「いや、本当なんだ。」

「ほ、ホント?!」

「だから、どうしたら・・・」

「ダメじゃないか！女子は女子の制服を着ないと！」
「それはいいから、どうしたら・・・」
「やった！このクラスに女子が4人になるのか！」
「・・・」
「これでクラスに華がでるよ。」
「・・・聞いてくれそうもないな。」

姫路&美波の場合

「二人とも、話があるんだ。」
「ほえ？なんですか？」
「どうしたの？らしくないわね。」
「実は・・・俺、女になってたんだ。」
「・・・へ？」
「女・・・ですか？」
「ああ。だから、どうしたらいいと思う？」
「・・・」
「どうした？」
「明久君^{アキ}をめぐるライバルがまた一人増えてしまうなんて・・・」
「い、いや、そんなつもりは・・・」
「私も（ウチも）、絶対負けませんから！！」
「・・・無理だな。」

秀吉の場合

「なあ秀吉」

「・・・なんじゃ?」
「実は・・・俺、女になってしまったんだが、どうしたらいい?」
「女、じゃと?」
「ああ。お前なら、たいさくがわかると・・・」
「ワシは女ではない!!」
「ああ、悪い。わかってる・・・」
「ワシは女ではないぞ、断じて違う!!」
「・・・」
「・・・無理だな。」

ムッツリの場合

「ムッツリ、折り入って頼みがある」
「・・・?」
「俺、実は女に・・・」
「・・・女!! (ブシャアアアアアアア)」
「・・・論外か。」

雄二の場合

「雄二、ちよつと話がある。」
「なんだ?」
「・・・俺、女になってしまったんだ。」
「女? そんな馬鹿な・・・」
「・・・雄二、浮気は許さない。」
「翔子!? これは浮気でもなんでも・・・ギャアアアアア!!」
「・・・無理ってか、雄二がかわいそうだな。」

愛子の場合

「なあ愛子。」

「ああ、謙太くん。どうしたの？」

「いや、実は・・・俺、女になっちまったんだ。」

「女に？」

「ああ。だから、どうしたら・・・ひゃん！」

「ふうん。どうやら本当みたいだね。」

「あッ、ちょッ、待って！」

「謙太くん、なかなかいい喘ぎ声を出すねえ」

「ひッ、い、イヤッ、止めっ・・・」

「ふっふっ、こんなにおつきなおっぱい、羨ましいよ。」

「うっ、い、いい加減に・・・ああっ!!」

「ふっふっふ、まだまだ終わらないよ？」

「お、覚えてるよ・・・キヤアッ!!」

・・・無理、っつか嫌だ。

・・・こう考えると、あの二人しかいなさそうだな。

俺はある番号に電話をかけた。

第九十八話（後書き）

謙太「あつ、愛子！」

愛子「まだまだこんなものじゃ済まさないよ？」

謙太「い、いい加減に・・・やあつ！！」

愛子「へえ？ここがいいのね？」

謙太「こ、これ以上は・・・限界だからっ！！」

愛子「ここから先は読者には見せられないかな？という訳で、次回を

お楽しみに！・・・R15指定をしておいてよかつた。」

謙太「ガールズラブがないじゃない・・・あんっ！！」

愛子「だって、謙太くんは一応男でしょ？」

謙太「うっ、うっ・・・」

第九十九話（前書き）

学園祭、その後のその二です。
これは次回で終わります。
お楽しみに・・・

第九十九話

俺は、電話を済ませ、屋上に向かった。

「どうしたの？」

「こんなところに呼ぶなんて、珍しいですね。」

俺がきた後すぐにやって来た二人は、不思議そうに言った。

「ああ、ちよつと相談があつてな……」

「相談？」

優子は、不思議そうに俺を見る。

まあ、あんまり相談とかやってないからな……

「えつと……もしかして、体調のことですか？」

優希が、心配そうに言う。

「ああ、まあそんなところだ……」

俺は、言葉を濁す。

……ここで誤魔化してどうする!!

「大丈夫？私があんとかできそうなことなら聞くけど。」

「私もお手伝いしますよ？」

「助かる。ありがとう、二人とも。」

まあ、ぶつちやけこいつらがどうにかできる問題じゃないよな……

「笑わないで聞いて欲しいんだけど……俺、女になってしまったんだ。」

「なんだ、そんなことですか……ええっ!？」

二人は腰を抜かすほど驚いた。

「本気で言ってるんですか？」

「それ、冗談じゃない……よね？」

二人は疑うような目線を俺の胸にぶつける。

まあ当然だよな。

「ああ。誓って本当だ。疑うんなら……」

俺は、おもむろに二人の手を取って自分の胸に当てた。

むにゅっ。

「「「「「」」」」」」

二人は、俺の胸を触ると無言になった。

「な、本当だろ？」

「「「「「」」」」」」

モミモミ……

二人は、無言で胸を揉む。

「これで疑いは晴れただろ？」

「「「「「」」」」」」

モミモミ……

「……なあ、もうイんじゃないか？」

「「「「「」」」」」」

モミモミ……

「さすがに長いと思うけど……」

「「「「「」」」」」」

モミモミ……

ヤバイ、感じてきた……

「はい、もうおしまい！！」

さすがにやばさを感じた俺は、強引に二人の手を解いた。

「あ、ああごめんなさいです。ちよっと現実逃避してたので……」

「

優希が我に帰ったように俺に謝った。

というか、人の胸で現実逃避しないでくれ。

「「「「「」」」」」」

「優子も信じてくれたか？」

優子を見る。

「……のよ。」

優子は何かをつぶやいている。

「どうした？」

「なんで私より大きいのよ!?!」

優子は涙目でそう言うと、俺に思いっきり関節技を決めた。

「や、止める！落ち着くんだ！」

「どうせ私のは秀吉のと変わらないわよ！！」

「いや、決してそんなことはないと思うぞ！！」

俺は、必死で説得する。

「そ、そうかな？」

優子が、関節を緩める。

・・・あと少しだ！

「ああ。秀吉は全くねえけど、お前は一応あいだだだだだだだ！」

「一応って何よ！」

・・・交渉決裂

さらに強まった関節技。

「や、止める！その関節はそっちには・・・ぎゃああああ！！！」

腕の関節を綺麗に外された。

・・・こんなことなら、ほかのやつに頼むんだった。

「・・・そうね、とりあえず学園長に聞いてみるべきじゃないかしらっ。」

「あのババアに？」

優子と優希に事のあらましを話すと、優子は腕を組みながら言った。

「そうですね。おそらくは何らかの形でこの学校のオカルトが関わったと考えるのが妥当でしょう。」

優希も頷きながら言う。

こいつらの頭の良さは、こつこつ時に本当に助かる。

「言われてみると、その可能性が一番高いな。それじゃ、さっさとこつこつせ。」

俺は二人を連れて学園長室に向かった。

「おいババア。」

「ババアじゃないでしょ!!」

「言葉遣いが悪いですよ!」

二人に注意される。

・・・ババアにババアと言って何が悪い。

「全く、随分なご挨拶だねえ。」

ババアが振り向きながら言う。

相変わらず不機嫌づらだ。

「腕輪ならもう直ってるよ。ほら。」

ババアが、黄金の腕輪を投げて寄越す。

「ああ。すまない・・・じゃなくて!!」

おお危ない。

思わずその話になるところだった。

「この学園について、この学園のぬしであるババアに聞きたいことがある。」

「ちよつと謙太!」

「・・・いや、構わないさね。続けな。」

俺の言葉遣いを優子が注意しようとするが、ババアがそれを止める。

「分かった。」

「謙ちゃん、少し言葉を抑えてください。」

優希が心配そうに俺を見る。

「分かった。それでは聞くが・・・この学園のオカルトってのは、人体に影響をもたらすものなのか?」

「・・・そうさ。観察処分者や、アンタの腕輪がいい例さね。」

ババアが苦虫を潰したような顔をする。

・・・もしかして、何か思うことがあるのか?

「そうか。じゃあ次は・・・この学校のオカルトの中に、性別を入れ替えるほどの影響を与える物質、もしくはそれに準ずる現象はあるか?」

「・・・何が言いたいのだ。」

ババアが、訝しげな目で俺を見る。
まあ、隠しておくのは良くないな。

「簡潔に言うが、俺はなぜか女になった。その理由が知りたい。」

「女かい！？そいつは驚いたねえ・・・」

ババアが、大仰に驚く仕草をする。

・・・嘘だな。

「・・・でだ。原因とか、解決法は分かるか？」

「わからないこともないさね。・・・ただし、かなり厳しいよ。」

ババアが真剣な顔で俺を見る。

「・・・解決法だけでも教えてくれ。頼む。」

俺は素直に頭を下げた。

するとババアは少し考え込み、そしてこういった。

「・・・分かったよ。ただし、教えられるのはもう少ししてからさ。」

「もう少し後？」

今は無理なのか！？

「なぜだ！？」

「なぜだ！？」

本当なら直ぐにでも直してえのに！！

「それは言えない。ただ、一ヶ月程は教えられないと言つことは確

かさ。それまで我慢してくれるかい？」

俺は返答に困った。

一ヶ月か・・・長いな。

その間精神が持つかもわからない。

・・・しかし、ババアの顔は真剣だし、恐らくこれは本当のことだ

ろう。

「・・・我慢するしかねえんだろ。じゃあな。」

「あつ、ちよつ謙太！！」

「待つてくださいです！」

俺はそのまま学園長室を出ていった。

「謙太！相手は学園長なんだから、ちょっとは敬わないと！」

「そうですね！相手はこの学園の長なんですから！」

「ああ、悪い。」

俺は屋上で二人に謝っていた。

「まあいいけど・・・」

「そうですね。」

キーンコーンカーンコーン

次の時限を知らずチャイムが鳴った。

「それじゃ、とりあえず頑張りなさいよ。」

「困ったら相談するです！」

二人はそう言っていると、自分のクラスに戻った。

・・・さて、このあとどうする？

第九十九話（後書き）

謙太「えーっと、ちょっと作者から報告があるようなので、話してもらおう。」

作者「実は、八月の十一日位からしばらくお休みさせていただきま

す。」

謙太「別に病気とかそういうわけじゃないのでご安心ください。」

作者「ご迷惑をおかけします。」

謙太「一週間ほどなので、それまで待つただければ幸いです。」

作者「それでは・・・」

「次回をお楽しみに！」

第百話（前書き）

祝百話！！

嬉しいですね。

いつのまにやら百話も続いちゃいましたよ。

これからも頑張りますので、応援お願いしますね！

第百話

俺は、化学の授業を受けながらこの先のことについて考えていた。
・・・取り敢えず、先生たちにはババアが伝えるとして、Fクラスの奴らをどうやってごまかす・・・？

「ったく、一筋縄じゃ行かねえな・・・」

俺は、女性化の影響で幾分か高くなった声でため息をついた。

「どうしたのじゃ？やけに思いつめておるようじゃが・・・」
隣の秀吉が、不安そうに俺を見る。

「ん、ああ。問題ない。」

俺は適当にごまかしたが、秀吉は納得していないようだった。

「何か悩んでおるのじゃろう？ワシで良ければ協力させてもらうぞ。」

「ありがとう。気持ちだけ受け取っておくよ。」

秀吉には・・・いや、誰に話してもどうしようもないからな。
逆に悪影響を及ぼしかねないし・・・

「そうか、それならよいのじゃが・・・」

秀吉も、渋々納得したようだ。

「そこ、静かにしてくだ・・・」
ガラガラ・・・

化学の布施先生が俺たちに注意を促そうとして教卓を叩くと、教卓はガラガラと崩れさった。

おお、そういうえば教卓を買うのを忘れてしまったな。

「・・・換えをとってきます。」

そう言っただけで教室を出ていく布施先生。
懐かしい件だな。

・・・布施先生が教卓を取りに行っている間は自習になった。

「ふう・・・」

「謙太、どうしたの？」

俺が教科書を仕舞おうとすると、明久が俺のところに来た。

「・・・明久か。どうしたって？」

「だって、謙太今日おかしくない？」

明久が、心配するように俺を見る。

「・・・マズイな、コイツは変なところでカンが良い。

「大丈夫だ。なんにも問題ない。」

「そっか、それならいいけど・・・」

明久は、心配するように俺を見る。

「ああ、無駄な心配をかけたな。すまん。」

俺はそこで強引に話を打ち切り、鞆の方に目をやった。

「・・・お前、何か隠してるな。」

「・・・怪しい。」

明久がいなくなったあと少しして、雄二とムツツリが俺のところに来た。

「・・・何も隠してねえよ。第一、俺がお前らに何を隠すんだ？」

「くっ、それを言われると・・・」

雄二が、苦い顔をする。

まあ、結構いろいろ隠してるけどな。

「・・・しかし、今日のお前は拳動不審。」

すると次は、雄二にかわりムツツリが俺を言及してきた。

「拳動不審？」

俺はしらばっくれる。

まあ、もしかしたら今朝は拳動不審だったかもしれないよな。

「・・・今日のお前は明らかに怪しい。」

「・・・気のせいだ。」

俺はそこで、二人との会話を打ち切った。

「そうか、そこまで否定するなら・・・」

雄二がそう言っていると、俺を羽交い締めにした。

「お、オイッ！！何を！？」

やばいつて！

この体勢じゃ、体のラインがモロに出ちまう。

「クラスの仲間たちに対して隠し事はいけないなあ？」

「・・・良くない。」

どうやら二人は、俺と優子との間に何か進展があったと見ているようだ。

・・・あのおんぶを見られたかつ！！

「さあ、洗いざらい吐いてもらおうか・・・やれ、ムツッリーニ！！」

「・・・了解。」

「な、何をする気だ！！」

ムツッリはそう言っていると、おもむろに俺の脇に手をやり・・・

「・・・こちょこちょ。」

「ひゃっ！！」

あるうことかこちょこちょをしだした。

・・・もつと他に尋問方法を知らないのか！？

「や、やめる！！」

俺は、なんとか羽交い締めされた手を離そうとするが、相手は悪鬼羅刹。

そう簡単にはいかない。

「さあ、もつとやれ！」

「・・・りょうか・・・これはっ！！」

マズイ！気づかれたか！？

「ウオラアアアア！！」

ゴスッ！

「ガフッ！！」

俺は渾身の力で雄二に肘鉄を食らわせた。

肘鉄をもろに受けた雄二は2〜3M吹っ飛び、気絶した。
・・・骨が折れてなきやいいけど。

「次はお前だ！死ぬ、ムッツ・・・」
俺がそう言って振り返ったときにはもう遅かった。
ブウウウウウウウツ！！

ムッツリは、（鼻血で）2〜3M吹っ飛び、同じく気絶した。
ひとまず、これで口止めの必要はなくなったが・・・

『あの悪鬼羅刹を吹っ飛ばすなんて、人間じゃねえ！！』
『恐ろしいな。喧嘩では勝てそうもない。』

『しかし、なんでムッツリー二は気絶したんだ？』

『アイツ、佐藤の胸の当たりを触ったとたん鼻血出したよな？』
『それに佐藤も、胸を触られたとたん本気になったな。』

『ということは、つまり・・・』

・・・

『『『優さーーーーーん！！』』』

バレてしまった。

「まったく、気持ち悪いんだよ・・・寄るな変態共！！」

俺はそう言うと、明久にガスマスクを投げ渡した。

女子は・・・女子は持つてるから大丈夫か。

「まったく、久しぶりに使うな・・・」

そして、久しぶりに取り出す例のアレ。

『『『結婚してくれ！！』』』

「気持ち悪いんだよ！黙って死にさらせつ！！」

ボン！

『『『ウギヤアアアアアアアア！！』』』

久しぶりのアレの効果で、Fクラスの雑魚共は為す術もなく倒れ伏

した。

「・・・つたく、明久、ついてこい。」

俺は、ガスマスクを付け無事だった明久を呼んだ。

「え？どこへ？」

「・・・屋上だ。」

俺はそう言つて、教室を後にした。

「謙太、どうしたの？」

明久が、フェンスにもたれながら言った。

「さっきの話なんだが・・・」

「ああ、謙太がおかしいって話？」

「そうだ。実はな・・・」

俺は、明久に事のあらましをかいつまんで話した。

「本当に?!」

「ああ。心配させたくなかったから、黙ってたんだけどな・・・」

「そっか、それは大変だね。」

「一人で抱えるのは辛かったんだ。」

ちなみに明久には、女性化の部分は適当にごまかして伝えてある。

この体は・・・

「まさか、たった一日で太っちゃうなんて、つらいよね・・・」

一気に太って、体型が変わっちゃまったということにした。

「ああ、学園に、そういった類の神様がいるらしい。」

「そっか。僕も気を付けないと・・・」

明久は、自分の腹を抑えながら言った。

こいつが馬鹿で助かった。

・・・まあ、女になったということよりはまだ信じられるか。

「それじゃ、謙太は行けないね。」

明久が、残念そうに言った。

「行けない？なんのことだ？」

「実は、みんなで海に行こうと思ってたんだ。だけど、それじゃ無理だね。」

海・・・？

海Ⅱ水着！！

「・・・行くに決まってるだろう！！」

「え？でも・・・」

「水着を見なけりゃ男じゃない！！」

水着は男の美学だろう！

「謙太、キアラ変わってない・・・？」

明久が、若干引き気味に言う。

「いや、水着はセーフだっ！！」

まあ、ぶつちやけると水着と下着の違いが分からねえけどな。

「そ、そっか。分かったよ。」

明久は苦笑いしながらそう言うと、屋上から去っていった。
楽しみだ・・・ってあれ？

そっいえば、人の水着ばかり考えていて、俺の水着を考えてなかった。

・・・どうしよう。

第百話（後書き）

謙太「水着を買いにいかなきゃな・・・次回をお楽しみに！」

百話記念(?) キャラ紹介! (前書き)

今回は、忘れていた優希のキャラ紹介 & amp・優のちょっとした設定です。

百話記念(?) キャラ紹介!

キャラ紹介

名前：黒崎優希

容姿

身長：163cm

顔：かなりの美人。例えるなら・・・あ にゃん

体型：小柄、スタイル。スリーサイズは・・・乙女秘密。

髪型：長い髪を纏め、垂らしている。

性格：真面目で素直。それ故に人に騙されることも・・・ないかな。

趣味：勉強、音楽鑑賞、謙太の観察。

特技：家事全般+勉強。運動も苦手ではない

成績：AクラスTOP3に入っている。総合科目4219（現在の時点）

得意科目：古典、現国、現社、日本史（平均440）450、最高、古典/477）

苦手科目：生物（生き物が苦手、294）保健体育（謙太の影響、330）

召喚獣：天使。空を飛び、持っている矢で敵を貫く後方支援型。

腕輪：美貌によりオスの召喚獣の動きを止める。回避は可能だが、可能性は低い。

弱点：生き物が苦手、謙太の為なら死ぬことも苦じゃないほど危ない思想。

人間関係：謙太のいとこ。謙太が転校してきた小、中学校の間のクラスメイト。

その他は・・・只今制作中

悩み：謙太が優子にゾッコンであること。

過去：自分が持つ高すぎる能力のせいで、小、中、高といじめられ続けた。

小、中の中には謙太が助けに来ていたが、高校に入りイジメがエスカレート。

悩んでいたところを謙太に助けられ、文月学園に編入した。

備考：謙太と同居している。

優

名前：佐藤優（偽名）

容姿

顔：美人。メイクをすると完全な女になる。

体型：それなりに良い。Bカップ。

髪型（喫茶店時）：ポニーテール & シュシュ（作者はA
Bファンではありません。）

悩み：男に告白される。スタイルの良さのせいで、女性の敵になる。

百話記念(?) キャラ紹介!(後書き)

謙太「ヨカッタナ優希、ヤット紹介シテモラエテ」

優希「そういう謙ちゃんも顔が笑っていませんよ?」

謙太「キノセイダロウ。」

優希「そうですね。それでは・・・次回をお楽しみに。」

第一百一話（前書き）

さて、キャラ紹介と同時にもう一話出しますか。
・・・これでストックがなくなった。

第一百一話

放課後。

俺は、明久たちと海に行くということで、水着を買いに来た。

・・・優希の私服を借りて。

「こんにちは、何をお探しですか？」

店員が、愛想笑いを浮かべながらやってきた。

女性用水着の店にいる俺、違和感ねえのか。

ホツとしたような、悲しいような・・・

「・・・えっと、パーカータイプの水着を。」

優希いわく、『これならなんとかバレずに済む・・・かもです』だ
そうだ。

「そうですね、それではこちらへどうぞ。」

店員は頷くと、まっすぐ俺を水着の所へ連れていった。

「当店では、このような品を取り扱っておりますが、どうですか？」

俺が連れていかれたのは、無地のパーカーが並んでいるコーナー。

なるほど、これならいいかも。

「あ、試着してみたいですか？」

「もちろん可能ですよ。ごゆっくりお決めください。」

店員はそう言ってお辞儀をすると、カウンターに戻っていった。

「・・・」

い、一応女性用の水着を買いべきだろうか・・・

「全く、どうしたらいいんだろ・・・」

俺は、ひとり大きなため息をついた。

結局、俺はパーカーを一枚と、女性用のシンプルな水着（白）を購入することにした。

・・・女性用水着は、男性用の水着の下に着るためであって、趣味で買ったのではない!!

「あとは、レジに持っていけば・・・」

そう思っただけを見ると、見慣れた人物と目が合った。

「・・・姫路？」

そこには、姫路瑞希その人がいた。

・・・取り敢えず、バレたらマズいっ!!

俺はすぐに目をそらし、無言でレジに並んだ。

どうやら、姫路は俺に気がつかなかったようだ。

・・・一安心。

「お客様？」

「ふえ？あ、はい。」

「お値段、11200円となります。」

うわぁ・・・

わざわざ一回のために、痛い出費だな。

「わかりました。」

俺は諭吉さんを一枚と、英世さんを二枚出した。

・・・つーかこの姿、親が見たら泣くな。

「ありがとうございます。」

俺は、笑顔の店員に見送られ店を出るまで、ずっと心が痛かった。

「・・・と、言うわけなんだ。」

「へえ、大変でしたね。」

夕食後。俺は家で優希にさっきまでのことを話した。

・・・ちなみに優子、優希の参加も決定している。

「で、水着はどこですか？」

優希が、辺りをキョロキョロしながら言った。

「え？ああ、ここだけ・・・」

俺が、紙袋を指さす。

「へえ、ちよつと待ってくださいね？」

優希はそう言つと、おもむろにケータイを出し、誰かに電話を始めた。

「……はい。……そうです。……来れますか？」

……嫌な予感がする。

「……なあ、優希？」

「なんですか？」

俺は、電話を終えた優希を問い詰めた。

「今の電話はなんだ？」

「なんでもないですよ。」

笑顔で答える優希。

……胡散臭え。

そして少し雑談をしているうちに……

ピンポン！

「どうぞ！」

『『『お邪魔しまーす！！』『』『』

『邪魔するのじゃ！』

何か聞き覚えのある声が出た。

「優希、これは一体……？」

「乙女の秘密です？」

優希が再び笑顔で答える。

……さつきから寒気が止まらねえんだけど。

ちなみにやってきたのは……

「謙太。こんばんは！」

明久と、

「謙太、可愛い服きてるじゃない。」

優子と、

「謙太く〜ん。なかなか思い切ったことやったねえ〜。」

愛子と、

「謙太よ、なんなのじゃその格好は。」

秀吉だった。

「・・・こいつら、こんな時間に外出して大丈夫なのか？」

「お前ら、一体何のために・・・？」

「それじゃ、謙ちゃん。これに着替えてきてください？」

俺の疑問を遮るように言った優希の手には・・・さっきの水着。

「・・・嫌だ。」

こいつらの前で着れる訳あるか！！

第一、秀吉と愛子は事情を知らないはずだろ！？

「優子の弟クンはともかく、僕は知ってるよ？」

「心を読むなっ！！！」

愛子が不敵に笑った。

・・・文月学園で流行している読心術をどうにかして欲しい。

「謙太、着替えてこないとダメだよ！」

「そうよ。私達は、わざわざそのために来たんだから。」

優子と明久が詰め寄ってくる。

「ぐっ・・・」

たしかにそうなのだが・・・

「謙ちゃん、潔く着てくるです！」

「・・・分かったよ。」

もう、助けてくれ。

俺は着替えながら再び自分の体を確認した。

・・・ほんとに女になっちゃったんだな。

「謙ちゃん、終わったですか？」

「え？あ、うん・・・」

着替えを済ませた俺は、風呂場に立てこもっていた。

一応パーカーを着てはいるが、下は完全な女物だし、出たくないよ・

「へ、変ですか？」

俺は不安になつてみんなに聞く。

「・・・有り得ない。」

「え？」

明久が、ポツリとそうつぶやいた。

「・・・ワシの負けじゃ。」

「・・・悔しいけど、勝てるわけないわ。」

「・・・僕じゃかなわないよ。」

「・・・私もかなうはずありませんよ。」

ほかの四人も、口々にそう言う。

「えっと、それってつまり？」

俺は一応聞いてみた。

「それはもちろん・・・」

明久が、少し溜めて・・・

「・・・とつても可愛い！！！！」「」「」

皆が、俺に羨望の眼差しを送りながら言った。

「・・・明久は性欲の眼差しだった気がするが。」

「そ、そうですか？ありがとうございます・・・」

なんでだろう。

満更ではないのが不思議だ。

「・・・素直に嬉しい。」

「今日はいいものがみれたよ！」

「本当。今度の海が楽しみね！」

「僕たちも負けはないから！」

「ワシも負け・・・ゴホン、今日は良いものが見れたのじゃ。」

みんなはそう言うのと、家に帰っていった。

・・・何がしたかつたんだ？

第一百一話（後書き）

優「」

優希「謙ちゃん、それを着てから機嫌がいいですね。」

優「そ、そうかな？」

優希「そうですよ。」

優「・・・みんなが褒めてくれたからかも。」

優希「何か言いましたか？」

優「い、いや！なんでもないよ！！！」

優希「そうですか。それでは、次回をお楽しみに！！！」

第一百二話（前書き）

ようやくアニメ二期に突入・・・
夏バテにも負けず頑張ります。

第二百二話

そんなこんなで当日。

「おつす。」

「こんにちは！」

俺は優希とともに、集合場所である明久の家の前に来ていた。

「こんにちは、二人とも！」

明久が笑顔で答える。

「全く、急な予定変更はやめてくれ。」

「・・・おかげさまで、朝から準備が大変でしたよ。」

俺達は、昨夜より少し大きくなったバッグをもって言った。

ちなみに、予定変更とは・・・

P r r r , P r r r

「どうした明久？」

『実は、明日は泊りがけになっちゃったんだ・・・』

「は？」

『だから、一日分の着替えを持ってきてくれないかな？』

「ちよつと待て、泊まりつてまさか・・・？」

『あはは、じゃあね〜!!』

「おい！ちよつと待て！！まだ話は・・・」

ブツッ

「・・・切りやがった。」

というわけである。

・・・その後、優希に怒られるわ優子にも怒鳴られるわという悲惨な夜を迎えたのは言うまでもない。

「・・・明久、命拾いしたな。俺が今女じゃなかったら、お前は死んでいた。」

俺は、明久を軽く睨みながら言った。

「へ？なんのことかなあ？」

明久が、わざとらしく恍ける。

・・・そうか、いいだろう。

ガッ！

「ちよつと謙ちゃん!!！」

優希の制止も聞かず、俺は明久にネックブリーカーをかける。

「痛い痛い痛い痛い!!・・・けど、ちよつと嬉しい感触が・・・」

「

死ねえっ!!!!」

「グペツ!!！」

俺は渾身の力で明久を締め、横に曲げた。

首を曲げられた明久は、その場に力なく倒れ付した。

「・・・全く、少しは考えろよ。」

「・・・謙ちゃんは言えないと思います。」

優希のツツコミを軽くスルーしつつ、他が来るのを待った。

十分後。

「おつす。」

「おはようです。」

「・・・おはよう。」

「・・・」

俺たちの次にきたのは、力なく横たわる夫を引きずる霧島だった。

「夫じゃねえ!!！」

「あ、起きた。」

雄二が、ブロックワードで目を覚ます。

チツ、そのまま寝てればよかったのに。

「翔子ちゃん、早いですね。」

「・・・二人も十分早い。」

霧島が、俺たちを見ながら・・・

「ひゃっ!!」

後ろから俺の胸を揉んだ。

「・・・胸がある!？」

霧島は、俺の胸に驚いた。

まあ、普通男にあつたら驚く・・・って、なんでバレたんだ!？

「代表、実はかくかくしかじか・・・」

「・・・なるほど。」

霧島は納得したように頷き、俺を見た。

「・・・な、なんだよ。」

霧島からのまつすぐな視線に、思わず目をそらす。

「・・・大きさでは勝ってる。」

「なんの話だ!!」

霧島は、ホツとしたように胸をなでおろした。

「どうしたんだ、三人とも？」

明久を（蹴って）起こしていた雄二が、俺たちのところに来た。

「ああ、実は・・・」

「・・・むっ!!」

「い、いや、なんでもない。」

霧島から睨まれ、俺は口を止めた。

「そうか？それより・・・こいつはどうする？」

蹴っても起きないんだが・・・と続けた雄二の足元には、泥だらけになった明久。

「・・・ちよつと待て。」

俺は、おもむろに明久の首を持ち・・・

「フン!!」

ゴキッ!!

強引に首を戻し・・・

「逆になっちまった・・・」

逆方向に曲げてしまった。

「うっ、ああ皆、久しぶりだね。」

「・・・」

そのとき、首を曲げた衝撃で、明久がヨダレを垂らしながら起き上がった。

ヨダレ+首が曲がっている+泥だらけ+目がうつろの明久は、さながらゾンビだった。

「あ、明久。とりあえず風呂に入ってこい。」

「そのあと、病院に行くといいぞ。」

俺と雄二は、取り返しのつかないことを殺ってしまった罪悪感に体を縮めながら、明久に的確(?)な指示をした。

「・・・あ、ホント、泥まみれ。」

明久は、自分の格好によくやく気づき、家に戻っていった。

「問題はそこですか・・・」

「・・・吉井、死にそう。」

女性陣二人が明久を見て引いていたのは言うまでもない。

その十分後

「やっほ。」

「皆、おはようなのじゃ。」

「こんにちは。」

優子、秀吉、愛子が来た。

「おっす。」

「・・・おはよう。」

「おはようです。」

「・・・」

俺たち三人＋死体一人が答える。

その理由は・・・俺の体にまつわるということだけ教えておこう。

「む？明久は居ないのなの？」

「風呂入って病院行った。」

「・・・一体何があつたのじゃ。」

秀吉が呆れたように言う。

・・・その顔が少し残念そうなのが引つかかる。

「それと、雄二はどうしたのじゃ？さつきから動かぬが・・・」

秀吉が雄二を指さした。

なるほど。

相変わらず霧島の膝の上でグッタリしたままだ。

「あ、蘇生忘れてた。」

「朝から蘇生とは、本当に何が起きたのじゃ・・・」

秀吉が再び呆れる。

しかし今度は別になんともなさそうだった。

・・・？

「あつと、早く蘇生しないと・・・」

「ねえねえ、謙太くん」

「ん？」

雄二の蘇生に行こうとしたところで、愛子に呼び止められた。

「謙太くん、今日もあの白い水着持ってきたんだよね？」

愛子が、朝から小っ恥ずかしいことを聞いてきた。

「へ？あ、ああ。一応あれしかないし。」

正確には、あれと上に着るパーカー&トランクスもだが。

「そうそう謙太、今日もパーカー脱ぐんだよね？」

「脱がねえよ！」

もしあれを脱いだら、雄二の目とムツツリの血液がなくなってしまう。

「「え〜？」」

二人は、ホツペを膨らませる。
「え〜っていつてもダメだ。」
俺は、二人にそっぽを向いた。
そっぽをむいた先では・・・
「・・・雄二、キス」
「するかっ!!」
あ、起きた。

その十分後

「おはよ〜。」
「おはようございます、皆さん。」
「・・・おはよう。」
姫路、美波、ムツリが来た。
「これで全員揃ったな。」
俺は、来た全員を見渡しながら言った。
「・・・メンバーは延べ11人。
玲さん、明久を合わせると13人だ。
「そういえば、明久君は・・・?」
姫路が、疑問符を浮かべた。
「・・・そ、そのうち来るだろ。」
「大丈夫、大丈夫ですよ。」
「ああ、あいつなら大丈夫・・・」
「・・・吉井なら大丈夫。」
俺達は、口をそろえて言った。
「・・・あいつなら大丈夫、きっと大丈夫だ。」

第百二話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに・・・ガクッ」

第百三話（前書き）

あの、本当に申し訳ないのですが、明日から休ませていただきます。
明日から約一週間ほど、待っていてください！！

第二百三話

「どうやら揃ったようですな。」

姫路たちが来てすぐ、玲さんと明久が部屋から出てきた。

「ああみんな、おはよう。」

明久が何食わぬ顔で出てきた。

「・・・さっきのことは忘れたようだな。」

「おはようございます。」

「おはよう。」

事情を知らない姫路と美波が挨拶をする。

「それでは行きましょうか。」

「」「よろしくお願いします!!」「」「」

玲さんの言葉で、俺たちは車に乗った。

車内にて。

「いい天気でよかったね。」

明久が、外を見ながら言う。

「そうだな、メンバーも全員集まれたし。」

明久の横にいる雄二がそれに答えた。

ちなみに座席は右から・・・

最後尾：明久・雄二・ムッツリ

中央（後）：姫路・美波・秀吉

中央（前）：霧島・愛子・俺

先頭：玲さん（運転）・優子・優希

だった。

なぜか俺が女性扱いなのが困るが、まあしょうがない。

「すごく楽しみで、あまり眠れませんでした。」

「瑞希ったら、小学生じゃないんだから。」

後ろから、ワイワイと話し声が聞こえる。

「みんな楽しそうだな。」

「謙太くんは、あの和に入らなくていいの？」

横の愛子が聞いてきた。

ちなみに前の二人は、早く起きすぎたのか既に眠っている。

・・・幸せそうだな。

「良いんだよ。今日は（一応）女だから。」

俺はそう言つて外を見た。

今日は優として生きるさ。

「謙太くん、もう吹っ切れたんだね。」

愛子が、俺をのぞき込むようにしていった。

それはすごい誤解だ。

「・・・あまり雄二の前で見せないで欲しい。」

俺の水着を既に見ている霧島が、不満そうに頬をふくらませる。

・・・そこまでなのか？

「悪い。けど俺も泳ぎたいから。」

下手にパーカーで泳いで溺れたくはないし。

「・・・謙太にはお世話になってるから我慢する。」

霧島も、渋々納得してくれたようだ。

「ありがとう。」

「・・・大したことはない。（／／／）」

俺がお礼を言うと、珍しく赤くなった霧島。

「あらあら？二人ともいい雰囲気じゃない？」

「い、いや、こいつには雄二が・・・」

「ちよつとだけですよ!!」

俺の言葉を遮るような、姫路の必死な声が聞こえた。

「ちよつとだけ?」

俺は思わず後ろを見た。

「そうです!ほんのちよつとだけ、ちよつとだけ、ぽつとりと・・・」

「

」どつちだよ・・・」

姫路の必死の言葉に、思わず苦笑いの一同。

「むう・・・ちがうんです!あれはきつと、髪が伸びた分重くな

っただけなんです!!」

姫路が開き直ったように言う。

「まったく、油断するからよ。ウチなんて夏バテで痩せたくらいな

んだから。」

美波が、笑顔で言う。

・・・笑顔がひきつっている気がするけど。

「ほえっ!??ず、ずるいです美波ちゃん!ひどい裏切りです!!」

それに気づかないほど必死の姫路が、美波に詰め寄る。

「ええ、痩せたわよ。胸からね・・・。」

姫路が、鬼の形相で言った。

「あはは・・・」

・・・そこはもう苦笑いしかない。

「姫路も島田も、気にしすぎではないかのお。」

話が一段落したあと、秀吉が呆れたように言った。

「そうそう、見た感じ全然変わらないと思うぞ?」

俺も秀吉に合わせる。

実際、見た感じで特に変化は見られない。

「悪かったわね、うちは謙太や木下より成長が遅くって。」
「うっ……」

美波に痛いところをつかれて、思わず引き下がった。

美波は知らないはずなのに……

「ワシの胸は成長などせんぞ。」

秀吉が何故か「は」を強調して突っ込む。

頼むから、せめて車内では隠しておいてくれ……

「気を遣わなくていいわよ！木下も謙太も、ウチを置いてたゆんだゆんになっちゃうんでしょ。」

「そうです！グラマーな二人には、私たちの悩みはわからないんですっ！！」

姫路も乗っかり、さらに俺にいたい言葉を浴びせてくる。

「ワシは男じゃぞ！」

……再び「は」を強調された。

「お、俺も……」

「あはは、確かに謙太くんはグラマーだよな」

そこで、愛子が茶々を入れてきた。

「そ、ソナコトハナイツ！！」

「……謙太、声が上ずってる。」

俺の失態を確実に突く霧島。

クソっ、心理攻撃が上手い奴らだ。

「そ、それにしても二人とも、今日はどうしたんだ？」

俺は、強引に話をそらした。

……横の愛子のニヤケ顔が困る。

「……だ、だって……」

そう言っつて二人が見たのは玲さん。

……なるほどな。

「……あの胸が羨ましい。」

「……あのクビレが羨ましいです。」

二人は、羨望の眼差しで玲さんを見る。

「・・・確かに、玲さんは危険。しっかり雄二を監視しないと。」

「ボン、キュッ、ボンって感じですよ！Hな本の、紐みたいな水着も着こなせそうだね。」

霧島と愛子も賛同する。

「・・・確かに、女性目線で見るとすごいな。」

「・・・(タラッ)」

「あれ？どつたの、ムツツリーニ。」

「どうやら、ムツツリは何かを妄想したらしい。」

「・・・車酔い。」

これを車酔いと言い切れる神経が凄い。

「姉さん、酔い止めつてある？」

明久も、特に疑問を持たずに玲さんに酔い止めを要求する。

「私の鞆に入っています。」

「そつか・・・姉さん、アウトオー!!」

明久が、突然大声を出した。

「なんだ明久！」

自分の眠りを邪魔されたのを怒っているのか、さっきまで寝ていた雄二が怒鳴った。

「どうしよう雄二、身内に度し難いレベルの変態が・・・」

「・・・スクール水着を握り締めてるお前の方が痛い奴と思うぞ。」

「・・・不思議だ。」

会話を聞くだけでその場の情景が簡単に浮かんでしまう。

「・・・明久の痛さがよくわかる。」

「ん？スクール水着？」

「どうやら、寝ていた優子まで起こしてしまったらしい。」

「優子、起きたか。」

「・・・おはよう。」

優子は、寝惚け眼で俺を見た。

「おはよう。」

とりあえず挨拶を返し、耳元で囁いた。

「・・・寝癖。」

「はっ!!!」

慌てて自分の頭を抑える。

「冗談・・・あいたたた!!」

俺が笑おうとすると、優子に思いっきり手の甲をつねられた。

「そついうのやめなさい!」

すごい剣幕でつねる優子。

・・・手の皮が剥げそうだ。

「わ、わかった。わかったから・・・」

俺がそう言つと、なんとか離してくれた優子。

い、痛い・・・

「・・・まったく、外では優等生キャラ続いてるんだからね!」

優子が小声で怒鳴るといふ曲芸を披露する。

「悪かったよ。ちょっとした遊びのつもりだったんだ・・・」

「・・・そうね。せつかくの海だし、怒るのももったいないわね。」

優子は、納得したように頷いた。

「えつと、それじゃ・・・」

「ムツツリーニ!!!」

俺の声をかき消すような明久の声。

「どうしたんだ・・・?」

思わず振り向くと、明久が鼻血まみれのムツツリを抱きかかえていた。

「・・・この車、レンタカーだぞ。」

レンタカーを鼻血で汚す奴を初めて見た。

「そ、そうなんだけど・・・」

明久が、手元のスクール水着を指差す。

・・・ああ、なるほどな。

どうせ、ムツツリがそれを見て欲情・・・

「これより露出が高い水着って何かなって話をしてただけど・・・

「そっちか!!」

全く、どうしようもない馬鹿だな。

「ムツツリの前ではそういう話はやめとけ。」

「そうだぞ、明久。」

俺に続けて雄二が言った。

「海水浴場に行ったら、ムツツリーニの血液がなくなるのは目に見えてるんだから、せめて寿命を延ばしてやるのが真の友人ってものだろ?」

「ゆ、雄二……」

……話の内容がつかめなくなってきた。

「それに、海水浴場には可愛い女の人がギャアアア!!!」

「……浮気は許さない!!!」

……何が起こった?

気づいたときには雄二が目を押さえ、霧島が例の名台詞を言っていた。

「しよ、翔子……」

雄二が悶えながら言う。

「……なに、雄二。」

「どつやったら前にいながら俺の目をつぶせるのか、教えてくれ……」

……もう收拾つかねえ。

第百三話（後書き）

謙太「本当にすみません・・・」

優希「ほんとに残念ですが・・・」

謙太「次回をお楽しみに！！！！」

第四百話（前書き）

ようやく復活です！

迷惑をかけました。

それではいってみよー！！

第四百話

そして十分後・・・

「やっと着いたわね。」

「そうですね。」

一行はようやく宿泊場所であるコテージに到着した。

「いい眺めだね。」

「・・・そうだな。」

明久が、景色を眺めながら言った。

コテージの真横には海があり、確かにいい眺めだった。

「風も気持ちいいな。」

「・・・絶好のロケーション。」

雄二とムツツリも、このロケーションが気に入ったようだ。もちろん俺も。

「よーっし、早く着替えて泳ぐわよー!!」

「はいっ!!」

姫路と美波も、この光景を見て泳ぐ気満々だ。

「俺はどうしようか・・・おっ?」

俺が何と無く辺りを見渡すと、みんなから少し離れたところでバツグを漁っている秀吉がいた。

その手にもっているのは・・・男用水着か。

明久たちは残念賞だな。

「イヤッホー!!車の中で着替えちゃった」

秀吉から車に視線を移すと、既に着替えを終えた愛子が出てきた。

「・・・!!」

条件反射でムツツリが身構える。

「水泳部の水着と、日焼け跡が違っただよね。こっついつのもセクシーでしょ、ムツツリー二君?」

水着姿でムツツリにアピールする愛子。

「……」

しかし、ムツツリは動じていないように、熱心にカメラの手入れをしている。

「……他の事に意識がいかないようにしているみたいだ。

「撮りたければ、いくらでも撮っていいよ？僕は気にしないから？」

そんなムツツリにさらに畳み掛ける愛子。

そろそろドバつと……

「……自惚れるな。工藤愛子！」

ドバつといかないだと！？

これは新記録じゃないか？

「ほえ？」

愛子も、さすがに少し驚いたようだ。

「……まあ、どうせ後で出すけどな。

驚く愛子を尻目に、ムツツリはおもむろに立ち上がる。

「……貴様の水着になど、微塵も興味は……」

ポタポタポタポタ……

ムツツリの鼻から鮮血が流れ出た。

「……これは日射病のせい。」

必死に弁明するムツツリ。

「……その言い訳は無理があると思う。

しかし……今回の我慢、こいつにしてはすごかったな。

「頑張ったな、ムツツリーニ。28秒だ。」

「すごいよ！鼻血我慢記録、更新だね。」

「次は30の大台を目指すんだな。」

俺達は、偉業を成し遂げたムツツリを褒め称えた。

こいつも成長してるんだな。

「大丈夫、ムツツリーニ君？」

愛子が、心配そうにムツツリに近寄る。

「あ、工藤さんが近づくと……」

明久が止めようとしたがもう遅い。

ブウウウウウウツ!!!!

「・・・日差しが・・・強くっ!!!!」

鮮血を撒き散らしながら倒れるムツリ。

・・・その言い訳はもつと無理があると思う。

「ムツツリー二君!!!!」

倒れたムツツリに慌てて駆け寄る愛子。

この姿だけ見れば、どこかの三流ドラマだな。

「・・・来世は、鳥に生まれてきますように。」

「そんな、縁起でもないこと言わないでよ!!!!」

白い目で眺める俺らを尻目に、三流ドラマは続く。

「・・・そして空から、女子更衣室を思う存分覗けますように・・・

」

ガクッ

ムツツリは倒れた。

「・・・なにあの三流ドラマ。」

「わかりません・・・。けど土屋君と工藤さんって、本当に仲がい

いのですね。」

姫路と美波が口々に感想を口にする。

「ムツツリー二!泳ぐ前に死んじゃダメだよ!!!!」

明久たちがムツツリに駆け寄る。

「そっだぞムツツリー二!このあとすぐにハーレムが・・・翔子!

?」

「・・・浮気、許さないっ!!!!」

「あばばばばば!!!!」

雄二が元気づけのために放った言葉が霧島の逆鱗に触れたようだ。

雄二はスタンガンの餌食になっていた。

・・・合掌。

「謙太、土屋君があのだムツツリー二なの?」

「謙ちゃん、土屋君があのだムツツリー二なんですか?」

そしてこっちでは、何故か優子と優希がムツツリに興味を示してい

た。

「?ああ、そうだけど・・・」

「なるほど。」

「?」

最近こいつらの考えが読めない。

「それでは、男女に分かれて着替えましょうか。」

「「はい!」」

俺達は、一旦コテージに入り着替えを始めた。

「そんじゃ、俺は別の部屋で・・・」

ガシツ!!

「何処行くの、謙太・・・?」

「逃がしませんよ・・・?」

両腕をつかまれた。

「な、なにをいつているんだふたりとも?」

必死で抜けようとするが抜けない。

どんな握力をしてるんだ!?

「ハア、秀吉のお姉さん、ハア、謙太はこつちですよ!」

明久が、何故か息を荒らげながら俺を呼んだ。

ああ、助かつ・・・

「さすがにこれ以上、ムツツリー二君を鼻血の海に沈めるわけには
いかないかな。」

愛子に左肩をつかまれ、

「・・・謙太?もし、雄二の前で脱いたら・・・」

「ぐっ・・・」

霧島に右肩をつかまれた。

「ってか、なんで霧島が知ってるんだ!？」

「・・・女のカン。」

当然のように言い張る霧島。

「・・・恐ろしいっ!!」

「というわけで、諦めてね吉井君。」

「ぐっ、ぬう・・・。いこう、雄二、ムッツリーニ。」

「・・・?」

「あ、ああ。」

「ワシを置いていくな!!」

優子の言葉に渋々居なくなる明久たち。

「ねえ謙太、知ってるってなんのこと?」

「謙太くん、隠し事は良くないですよ!!」

姫路たちからも詰め寄られ、渋々更衣室に引き込まれる俺。

「・・・要するに、こういうこと。」

「くく!!」

俺は、姫路たちに更衣室で脱いで見せた。

「・・・下着は付けてるよ?」

「まさか・・・」

「謙太くん、もしかして・・・」

絶句する二人。

まあ、普通のリアクションだな。

「・・・佐藤君には、少しオシオキが必要ですな。」

笑顔で死刑勧告をする玲さん。

「ってかこれは不純異性交遊に入るのか?」

「・・・一応男なんだけど。」

「玲さん!これには訳があるんです!」

「・・・懺悔の時間をあげましょう。」

ダメだ。説明すらも聞いてくれないようだ、

つつーか懺悔って・・・

「どうして、どうして・・・」

「こんなのおかしいです・・・」

その一方で、二人はまだ混乱しているらしい。

「二人とも、俺は大丈夫・・・」

「どうしてウチより胸が大きいの!？」

「どうして私よりくびれてるんですか!？」

俺が落ち着かせようとすると、二人はすごい剣幕で俺に詰め寄ってきた。

「ああ、混乱してたのそなんだ・・・」

別に俺が女になったことには誰も驚かないんだな。

・・・虚しい。

第四百四話（後書き）

謙太「はぁ・・・」

優希「その気を落とさずに！せっかく復活できたんですから。」

謙太「そう、だな！それじゃ次回をお楽しみに！」

第一百五話（前書き）

ああ、暑い・・・

ちよつと夏バテ気味です・・・

第二百五話

そんなこんなで着替えを終え・・・

俺、優子、優希は外に出てきた。

太陽がジリジリと暑い。

・・・俺に何の恨みがあるんだ。

「ふう、全くもっていい天気ね。」

「・・・そうだな。」

「海も綺麗ですね〜!!」

「・・・ああ。」

あまりの暑さに思わずヘタレそうになり、適当に返事を返す俺。

その一方で俺のリアクションなどお構いなしといったふうな二人は、嬉々として海に向かって走っていく。

どこにあんな元気があるのやら。

「おい、謙太!!」

「・・・明久か。」

俺がビーチにバッグを置いて座りこんだとき、後ろから明久と雄二が来た。

明久はムツツリを背負っていて、雄二はパラソルとシートを背負っていた。

「謙太・・・お前パーカーなんか着て、熱くないのか?」

事情を知らない雄二が、不思議そうな目で俺を見る。

「え?ま、まあ・・・」

俺は適当に言葉を濁す。

・・・ムツツリを殺すわけにはいかないし、説明は後にしよう。

「ふーん。取り敢えず、パラソル立てるの手伝ってくれねえか?」

雄二は深く問い詰めず、

「え?あ、うん。分かった。」

「!?!」

そう言つて立ち上がり、雄二のパラソルを開いた。

「俺が抑えとくから、お前が固定を・・・つてどうした？」
ふと雄二を見ると、雄二は目を丸くしていた。

「・・・なあ、謙太。人の趣味にケチを付けるつもりはねえけど、さすがに水着でコスプレはどうかと・・・」

雄二が、白い目で俺を見てくる。

「コスプレ？一体何のことだ？」

「ハア・・・それ、女物だろ？」

「バレた・・・!？」

「ああ、いや、これは・・・」

必死に弁明をしようとする、雄二に両肩をつかまれた。

「・・・女装趣味に目覚めるとは、お前も堕ちたな。」

「弁明させてくれええええええ!!」

その後、10分ほど説得をして、雄二が俺の胸を鷲掴みにして背後に忍び寄っていた霧島に殺されることで、ようやく決着が付いた。

「・・・でも、これが普通の反応なんだよな。」

「・・・つたく、酷い目にあつた。」

雄二が、アイアンクローを受けた頭をさすりながら言った。

ちなみに俺たちは、立てたパラソルの中でくつろいでいた。

「悪いな。しかし、さすがにムツツリを殺すのは気が引けたからな・・・」

「確かにあの状態で聞いていたら、確実に天に召されてたよね・・・」

俺の言葉に、明久が苦笑いで答える。

「・・・当の本人は、愛子の介護でまだ寝ているが。」

「・・・愛子、土屋はまだ起きない？」

霧島が、珍しくムツツリを心配している。

コイツ、ずいぶんこのメンバーに溶け込んだな。

「うん、あとちょっとは安静にしておいたほうがいいかも。」

愛子が、ムツツリを仰ぎながら言う。

献身的とはこういう事のことを言うのか・・・って言いすぎか。

「愛子、あんまりムツツリー二君を虐めないほうがいいわよ？」

そのうち本当に死んじゃうから・・・と優子は苦笑いで続けた。

「あはは・・・僕は何にもしてないんだけどねえ・・・」

優子の言葉に、愛子も苦笑いで返す。

「しょうがありませんよ。」

先にひと泳ぎして、休憩に戻ってきた優希が言った。

「愛子ちゃんの水着はとっても可愛いですから。」

「そうかなあ、あはは・・・」

優希に褒められた愛子が、まんざらでもなさそうに頭を掻いた。

「土屋君は、工藤さんの水着があまりに可愛いから、興奮しちゃったんですよ。」

姫路が、チラチラと明久を見ながら言った。

明久は少なからず興奮していると思うが、それを言うのも野暮な気がするしやめておこう。

「・・・そんな事実は確認されていない。」

「あはは・・・」

ムツツリが、一瞬体を起こして抗議した。

けど、愛子の介護を断らない時点で、認めてるような気がするんだが・・・

「・・・興奮？」

「はい、土屋君も男の子ですから。」

「・・・」

その一方で霧島は、姫路が言った言葉に過敏に反応していた。

「・・・く、工藤の水着なんかで、興奮なんてしない！」

「はいはい。ちよつと大人しくしてろ。」

「・・・ウグツッ!!」

そろそろめんどくさくなってきたし、未だに抗議しようとするムツツリを押さえつけた。

「それじゃ、俺もひと泳ぎ・・・」

「えいつ!!」

俺が泳ぎに行こうとすると、何故か腕をつかまれ鼻を殴られた。

「グハッ!!」

ムツツリのように鼻から盛大な鼻血を流し、砂浜に倒れふす俺。

犯人は、言うまでもなく優子と優希。

「どうして・・・あなたが・・・。何故・・・こんなことを・・・！」

「陛下は売国奴だ・・・つて何F 12の名シーン(?)をやつてるのよ。」

おお、優子が乗ってくれた・・・

「つてそうじゃなくて!!なんで俺は殴られたんだ!？」

そこが重要なところだ!

まあ、大体予想はつくんだが・・・

「それは、謙ちゃんが私たちの水着で興奮しないからですよ。」

優希が当然といったふう言う。

ああ、姫路の言葉を真に受けたんだ・・・

「優希はわかるが、優子はなんで・・・」

「へ?あ、えーつと・・・ノリ?」

ノリで顔を殴られた・・・

「アガガガガガ!!」

ふと声がした方を見ると、雄二も同じ目に遭っていた。

男って、無力だな・・・

第百五話（後書き）

謙太「あつっ・・・」

優希「まあまあ。海にでもはいつて体を冷やしてください。」

謙太「そうだな・・・」

愛子「あーあ、すっかりダウンしちゃってるね。」

第百六話(前書き)

ああ眠い・・・

夏休みもあと少しだ・・・

後悔・・・

第百六話

「おーい！お主ら！！待たせたのじゃ！」

優子&優希に強要された鼻血を抑えようと鼻にティッシュを詰めていると、秀吉がやって来た。

やけに晴れ晴れしい顔だな。

「あの子も、ようやく男物の水着を着てくれ・・・」
突然、秀吉の方を見た優子が固まった。

「どうしたのですか、優子ちゃ・・・」

優子の次に秀吉の方を見た優希も見事に固まった。

「どうしたんだ、二人と・・・」

そして、かく言う俺も固まってしまった。

俺たちが目にした光景とは・・・

「・・・無念っ！！」

「もう死んだほうがマシだ！！」

「・・・雄二、浮気は許さない！！」

「待て、別に俺は何も・・・」

ゴツ×3

男共が地面に頭を打ち付けていた。

・・・ひとりは打ち付けられていたが。

「こんなことを言うのはアレですが・・・馬鹿ですね。」

「ああ。お前ら、そんなに秀吉の水着が見てえのかよ・・・」

「・・・改めて言うけど、あの子は男の子だからね？」

改めて、文月学園の常識の歪み具合を思い知らされる・・・

俺達は大きなため息を吐いた。

その後。

秀吉はライフセーバーに連れ去られ（恐らく女子が上半身裸で歩いていると勘違いされた）、俺たちが唾然としてるところに玲さんが来た。

「どうしたのですか、美波さんに木下さん？」

そして、玲さんが来たと同時に二人は崩れ落ちた。

「……いいんですっ、どうせ一生勝てないんですっ……！」

「認めたくないものね……これがこの世の不条理ってやつなの！？」

いや、違うと思う。

「……玲さん、少しだけ失礼……！」

むにゅっ！

「……！！（ブウウウウウウツ……）」

霧島が、何を思ったか明さんの胸を揉み始めた。

「……凄いつ……！」

そして何かに驚く霧島。

凄いのは見ればわかるだろ。

「すみません！私も失礼します！」

そう言っつて玲さんに飛びつく姫路。

……別に胸は負けてくないか？

ぴとっ

「ああ、成程……」

姫路が触った……調べたのはクビレの部分。

そっういえばくびれがどうとか言っつてたな。

「……う、うう……、海っつて残酷です……」

そして泣き崩れる姫路。

そんなにすごいのかねえ……

「残酷なのは神様よ……」

「……二人とも、仲良くやりましょう。」

沈んだ雰囲気になる三人。

「み、皆さん！せつかくの海ですし、もっと楽しみましょうよー!!」
「そ、そうだよ！折角だし楽しまないと・・・」
優希と愛子がそういつた時にはすでに遅し。

「・・・」
屍となる三人の男共。

「うつつ・・・」

「なんて残酷なの・・・」

「これが、運命・・・」

泣き崩れる女子三人。

「あ、あの・・・霧島さん？」

「・・・も、もう少し!!」

玲さんの胸を揉みまくる霧島。

「あ、あはは・・・」

そしてその光景を呆然と見つめる俺たち。

・・・周りの視線が痛い。

「あー、暇だ。」

明久たちが撃沈したせいで海に行くわけにもいかず、しょうがなく
パラソルの下で寝転がってる俺たち。

「あ、そういえば・・・」

俺の言葉を聞いた優希が、おもむろに何かを取り出した。

「・・・金属バット？」

優希が飛び出したのは新品の金属バット。

・・・何をやらかす気だ。

「スイカ割りしましょう！」

「スイカ割りか・・・」

けど、肝心のスイカが見当たらない。

「・・・もしかして、人間の頭を粉々にくだいて「あー割れた！」とかいうのか？さすがにそんな趣味はねえよ・・・」
かなり恐ろしいが、こいつならやりそう・・・なわけないか。

「違います！！あらかじめ海水で冷やしてるんです！」

そう言つて優希が指を指した先には、氷を張った金ダライと、海水に浮かぶ緑と黒のコントラストが美しい物体があつた。

「へえ・・・それじゃ、さっさとアホどもを起こして準備するか。」

俺は、未だに地面に倒れ付していた三人と、その横で小さくなつていた秀吉を叩き起こし、スイカ割りのことを告げた。

「スイカ割りか。」

「へえ、面白そうだな。」

「・・・スイカ美味そう。」

「気晴らしにはちょうどよさそうじゃな・・・」

男性陣はそう言つて立ち上がり、準備（と言つても何も無いが）を行なつた。

「それでは始めましょう！！」

そう言つて、みんなを纏める優希。

よっぽど楽しみにしてたんだな。

「それじゃ、まずは俺から行くか。」

そう言つて雄二が進み出る。

「はい！それではこの手ぬぐいで目を隠してください。」

そう言つて、持っていたハチマキ（？）を渡す優希。

「・・・これでいいか？」

「はい。それでは十回回つて・・・はい、準備完了です！」

よし、雄二はうまい具合に違う方向をむいている。

なんとかかして霧島の所に・・・

「・・・雄二、そのまま真っ直ぐ。」

「こ、こつか？」

霧島に言われるがままに歩いていく雄二。

その先にめいっぱいの笑顔待ち受けているのは・・・もちろん霧島。

・・・何もする必要なさそうだな。

・・・

むぎゅっ。

「ん？この感触は・・・」

雄二が、霧島の胸を揉みしだく。

「・・・雄二、それは私の、ス・イ・カ？」

少し顔を赤くしながらこたえる霧島。

そして・・・

「うわあああああああ！！！」

絶叫する雄二。

・・・これ以上は続けられないな。

やれやれ、次は俺が殺るか。

第百六話（後書き）

雄二「しよ、翔子！離せ！」

霧島「・・・雄二、照れなくてもいい。」

雄二「うわアアアア！」

霧島「・・・次回をお楽しみに？」

第一百七話（前書き）

・・・

思いの外ツイッターが面白くなってしまって、文が短くなってしまいました。

宣伝のつもりだったのですが、これでは本末転倒だ。

というわけですみません・・・

第一百七話

「・・・次は俺。」

ムツツリが、霧島に捕まった雄二のハチマキ&バットを奪い取り、自分で巻いた。

「頑張れ、ムツツリーニ！」

ぐるぐると回ってふらついているムツツリに、明久が声援を送る。こつこつほのぼのした感じって、なんかいいよな。

「土屋君。右ですよ。」

「違うわよ、前よ。」

「・・・??？」

ムツツリが、見事に惑わされている。

「ムツツリ。左だ。」

「ムツツリーニ。後ろだよ。」

俺と明久が、見当違いな所を言う。

「・・・????？」

それによりさらに混乱するムツツリ。

そんな感じで、スイカ割りはほのぼのと進んでいた。

「ムツツリーニ君」

「・・・」

大分愛子がムツツリを呼ぶが、ムツツリは無視した。

「今、水着脱いでるんだけどな」

愛子が対ムツツリ用の爆弾を落とした。

「・・・!!!(ブハアッ!!)」

爆弾が直撃したムツツリは、血を噴きながら倒れた。妄想だけでここまで血を流せるとは・・・

「愛子、やりすぎよ!!」

さすがのちの量に驚いたのか、優子が愛子を叱る。

「・・・生体反応がなくなった。」

「それってほんとにやばくないですか!?!」

霧島が脈を測り、首を振る。

それを見た勇気が顔を真っ青にした。

・・・二人が近づいたときに、再びムツツリが鮮血を吐いた気がするんだが・・・?

「・・・う、ううつ・・・」

ムツツリが、必死の思いで意識を戻す。

あれ?いつもとなんか違う気が・・・

「・・・あ、明久」

「何、ムツツリ二!?!」

明久が、ムツツリを抱え起こす。

「・・・我が人生に、微塵も後悔はない。いい人生だった・・・ガク。」

ムツツリは最後の言葉を残して力尽きた。

力尽きた・・・っておい!!

「ムツツリーーーー二!?!」

懸命にムツツリの亡骸を揺さぶる明久。

やばい、マジでやばいぞ!!

「明久!!」

俺は明久に確認を取った。

「どうしよう、いつもみたいないなギャグじゃなく、本当に起きないよ!!」

明久が、涙目になりながら俺に詰め寄る。

ヤバイ、これはマジだ。

「大丈夫だ、今秀吉が輸血パックとAEDを取りに行っている。」

俺が、泣きじゃくる明久をなだめる。

・・・間に合えよ!!

「おーい!!」

秀吉が、大急ぎでAEDと輸血パックを持ってきた。

「よし、急ぐんだ!」

俺はムツツリの胸にパッドを貼り、AEDを起動した。

「300jかのう?」

「ああ。・・・チャージ完了!」

バン!

「・・・うつっ」

ムツツリがうめき声を上げる。

なんとか目を覚ましたようだな。

「よかった、一時はどうなるかと・・・」

明久が、胸をなでおろす。

ブーッ!!

「え、何!?!」

再び崩れ落ちるムツツリ。

その鼻からは大量の血が流れる。

「なぜだ!? 蘇生は完璧だった・・・」

「あ! 謙太! 胸寄せちゃダメ!!」

「お前はこんな時に何を・・・あつ・・・」

明久に注意されたところで、俺はようやく自分の性別を思い出した。

今の俺は、中腰で膝に手を置き、胸を腕で挟んでいた。

・・・俗に言うセクシーポーズじゃないかっ!!

「あわわ・・・」

「早くやめてよ!! じゃないと僕まで・・・」

危機を感じた俺は、慌てて正座で座り込む。

「ふう・・・」

「ふうじゃなくて! 早く蘇生を手伝ってよ!!」

明久が再びAEDをセットしながら怒鳴る。

そうだった、今はムツツリの命の危機だ。

「OK。」

俺はパッドをムツツリに貼る。

「3 / 2 / 1 . . . 」

バン！

「. . . 俺は一体 . . . ? 」

AEDのおかげで、ムツツリが目を覚ました。

よし、ミッシヨンコンプリート。

「よかった . . . 」

明久がほっと胸をなでおろす。

「. . . 俺は死んでいたのか。 」

ムツツリが、悪びれた様子で言った。

おそらく、明久の顔を見て責任を感じたのだろう。

「ああ。ま、助かったからいいだろ。 」

俺が、ムツツリを元気づける。

「. . . 半分は俺のせいだな。

「. . . 分かった。 」

元気を取り戻したムツツリが立ち上がった。

「よし、それではスイカ割り再開です!! 」

「「「おおー!! 」」」

こうして、なんとかスイカ割りを再開することができた。

ちなみに、雄二はまだ死んでいたが大丈夫だろう . . .

第一百七話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第百八話（前書き）

第二スランプ突入・・・

アイデアが浮かばない。

しかし、支離滅裂な文ですけど頑張ります。

・・・これが俺の本来の実力か。

第八話

「次は誰がやる？」

ムツツリが休んでいる間に、次の奴がやることにした。

「ワシが行こう。」

秀吉が、名乗りを上げた。

「……俺の分まで頼む。」

パラソルがつくる日陰で横になっているムツツリが、自らの思いを道具と共に秀吉に託した。

「……そんなに大げさなものか、これ？」

「任せるのじゃ！」

秀吉はそれを受け取り、満面の笑みを返した。

おい秀吉、お前がそんなことをすると……

「……任せたアガツ!!!!!!」

ブハッ!!

「ムツツリーニイ!?!」

顔を赤らめたムツツリから、再び鮮血が飛ぶ……ってあれ？
珍しく口から血を流すムツツリ。

「大丈夫!? 工藤さん、手伝って!!」

「アハハ……止めとくよ。」

その横には、懸命に介護する明久と、珍しく怒りの混じったの笑顔
を浮かべたまま何もしない愛子がいた。

「……なあ優子、一体何が起こった？」

俺は、俺の横で同じくその光景を見ていた優子に尋ねた。

「私は、愛子がムツツリー……土屋君の腹部に肘鉄を食らわせた
気がするけど……」

「奇遇だな。俺もだ。」

見解が一致したということは、多分それが目の前で起こった出来事なのだろう。

ムツツリの呼び方が少々引つかかったが・・・

・・・ぶつちやけると、秀吉のせいでムツツリは見えなかったが、愛子の動きは見えていた。

まあ、愛子は女だし、喧嘩慣れしている様子もないから、そういうのがあまり得意じゃなくて当然だ。

それにしても・・・座ったまま腹を思いつきりエルボーとは、愛子の常識人としての立場も揺らいできているな・・・

「けど、何故・・・？」

愛子が、有一の存在価値である・・・「それだけじゃないよ!!」・・・失礼。数少ない常識人としての立場を捨ててまで何にキレようとしたんだ・・・?

「秀吉が笑ったときにムツツ・・・土屋君が顔を赤くしたから、多分それよ。」

優子が、ムツツリを指さしながら言う。

・・・ムツツリは今真つ青だけだ。

「ああなるほど。あれか。俗に言う嫉妬というやつか。」
「違うよ!そんなんじゃないよ!」

俺たちの会話を聞いていたらしくご立腹の愛子が俺たちのところに来た。

「じゃあなんなのよ。」

優子が少し不機嫌な顔で言う。

まあ、さつきから愛子は殺人未遂を続けているからな・・・

「これは、えつと・・・そう、スキンシップだよ!・・・ごめんなさい。」

必死で弁明しようとしたが、優子の気迫に押された愛子。

「全く・・・そんなことしてたら、馬鹿のFクラスと同じになっちゃうわよ?」

「バカで悪かったな・・・」
優子が呆れたようにつぶやく。
・・・未だにバカが嫌いらしい。

「・・・それじゃ、再開するのでしょうか！」
しびれを切らした優希が、強引に秀吉を引っ張っていき、目隠しバ
ンダナを巻いた。

・・・子供か。

「全く前が見えぬぞ・・・」

秀吉が、困惑しながらも10回回る。

「よいい、スタート！」

「秀吉！前だよ、前！」

優希の合図とともに、ムツツリの蘇生を終えた明久が、懸命にスイ
カの位置を教える。

「秀吉、右だ右！」

・・・俺も普通にゲームに参加することにしよう。

「右、かのお？」

秀吉は、俺の言葉を信じたのか右を向こうとする。

・・・騙された！

「よし、いいぞー・・・つてどこへ行く？」

俺の誘導に従っていた秀吉が、なぜか突然走り出した。

・・・その先には雄二が居たってのに。

「そこじゃあああ！！！」

秀吉が、一人を叩き潰しにかかった。

「わあああ！！！」

秀吉がたたきつぶそうとしたのは・・・

「ひ、秀吉い・・・何するんだよ・・・」

明久だった。

「ああ間違えてしまった。大丈夫かの。えっと・・・誰じゃ？」

「アホそうな声でわかるだろうに・・・」

腰を抜かしている明久を見て、俺はため息をついた。

まあ、バンダナで耳が見事に隠れているから、聞こえづらいのかもな。

「失礼な！！僕だよ、あきひ・・・」

「誰かわからぬが、捕まるとよ・・・おっとすまぬ。つい足がもつれてしまった。じゃが、お主は男のようじゃし大丈夫じゃろう？」

明久の言葉を遮って、秀吉があからさまにこけたフリをして明久に抱きつく。

あからさまと言っても、そこはプロなので流石に周りにはバレていない。

「・・・？」

さつきから怪しいなこいつ・・・

俺はある疑問をもった。

「秀吉、離れてくれないと姫路さんたちが・・・」

「すまぬ、腰を抜かしてしまったようじゃ。お姫様抱っこをしてくれぬかのう？」

「ええっ！？そんな・・・僕は構わな・・・って姫路さん！？」

秀吉の無理なお願いのせいで、明久が姫路に殺られた。

・・・合掌。

しかし、明久の尊い犠牲のお陰でようやく判明した。

「・・・おい確信犯。」

・・・こいつは黒だ。

第一百八話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第百九話（前書き）

アイデアが浮かばない。

アイデアが浮かばない。

アイデアが浮かばないっ！！！！

絶賛第二次スランプ状態ですが、なんとか書きましたので出来れば
読んでください・・・

第百九話

「・・・確信犯？なんのことじゃ？」

秀吉が「何があつたのじゃ？」とでも言いたいような顔で俺を見る。・・・さすがは演劇部。全く動揺が顔に出ていない。

「とぼけるか・・・。お前、あえて明久のところへ行つただろ。」

流石にあんな危険行為を見逃すのはあれだよな・・・

「何を言つておるのじゃ。おかしな奴じゃのう。」
全く動揺を見せずに返す秀吉。

「じゃあ、何で誰も指示してない方に行つたんだ？」

「んむ？それはそつちにスイカがありそうな気がしたからじゃ。」

俺の有一の持ち駒（？）を放つが、当然といったような顔で秀吉が返す。

・・・なんか勘違いな気がしてきた。

「そもそも、なぜワシが明久のところへ行かなければならぬのじゃ。」

「そ、それは・・・」

マズイ、逆に俺が追い詰められた・・・

「勘違いじゃと言つておるじゃろつ。これでこの話は終わりじゃ。」

流石に、俺一人じゃあいつには勝てる気がしねえけど・・・

「・・・わざと明久君のところへ行つたつて本当ですか木下君？」

「・・・木下、どうということよ？」

・・・よし、援護が二人来た。

俺たちの会話を聞き、さすがに居ても立ってもいられなくなった姫路と美波が秀吉に詰め寄る。

・・・これで五分か？

「だから、わしはそんなつもりなど微塵も・・・」

「じゃあなんで行ったんですか!？」

「おかしいじゃない!」

「お、落ち着くのじゃお主ら!」

二人の押しの強さに少しづつ焦り出す秀吉。

・・・チャーンズ。

「・・・秀吉、お前、明久のこと好きか？」

「んむ?・・・まあ、嫌いではないが・・・っと姫路に島田よ!!
なぜそんな危険なものを持ち出しておるのじゃ!？」

姫路と美波が持っていたのは木馬と鞭。

・・・どっから出したんだ。

「ヒデオシクンニハ、スコシシドウガヒツヨウソウデスネ・・・」

「Nur Sie wer sind warum l???t A
ki sanft sind!! (どうしてあんなだけアキに優し
くしてもらえるのよ!!)」

意味不明な呪文のようなものを延々と唱える二人。

「お、落ち着くのじゃ二人とも!!」

「明久君に近寄る人は、皆灰にしてあげます!!明久君は私だけの
ものです!!」

「ウチからアキを奪い取るなんて許さないわ!アキはウチだけのも
のよ!!!」

最早キャラ崩壊している二人は、なぜか自分の思いを叫ぶ。

あーあ、こんなところで言うなんてもつたいねえ・・・

「明久、さすがにこれだけ言われたら気づくだろ・・・ってあれ?」

明久が固まっていることを懸念し話しかけた俺の横にいたのは、何
故か崩れ落ちていた明久と、息も絶え絶えに立っている坂本家夫「
誰が夫だ!!」だった。

こりゃよかった。

「・・・good, job! (グッ)」

「・・・こいつの幸せは許さねえ。(グッ)」

俺たちは頷き合い、親指を立てた。

俺たちの心は同じだったようだ。

まあ俺の場合は、一応あの二人のことを考えてのことだったが・・・
雄二もそうじゃねえかな？

「あ・・・えつと・・・一回休憩しますか？」

さすがに自分が飲み込めない優希が、おどおどしながら俺に尋ねてきた。

「そうだろうな。」

「・・・これ以上は危険。」

休憩していたムツツリが、俺に同調する。

「そうね。二人とも！やるなら関節技が素手よ。」

優子が、アウトかセーフかよくわからない指示をする。

・・・まあそのくらいなら死なないだろう。

「あら？飲み物が切れてしまいましたね。」

マイペースにジュースを飲んでた玲さんがふとそうつつぶやいた。

・・・明久をめぐる争いには参加しねえのか？

「それじゃあ、僕たちはちよつと買物にでも行くところか？」

愛子が苦笑いをしながら行った。

・・・流石に、ここにとどまるのは危険と感じたのだろう。

「そうだな。」

「そうしましょう。」

「・・・そうね。」

俺達はそそくさとその場を離れた。

第百九話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに・・・」

第一百十話（前書き）

さすがに最近ちょっと荒れてたので、完全オリ話展開のをひとつ書いてみました。

あと、これで一応二期の話分は終わりです。

・・・原作ブレイクに次ぐ原作ブレイクでごめんなさい・・・

第一百話

近くのコンビニで2Lのジュースを二本買い（代金はすべて俺が払う羽目になった。）明久たちのところへ戻る俺たち。

「そろそろ落ち着いた頃かしら？」

「だといいな・・・」

頭が冷えてる可能性とさらに激化している可能性が3：7なんだよな・・・

「おつ、どうやら事態は沈静化したみたいだね。」

愛子が、俺たちの陣地を指さしながら言う。

「へえ、さすがの彼奴らも頭を冷やしたか。」

俺が言うあいつらとは誰なのかは・・・ご想像にお任せする。

「そんじゃ、さつさと・・・」

「・・・ねえねえ。」

「何？」

突然肩を叩かれ、振り返ると見知らぬ・・・見知った二人組がいた。

「うひょー！やっぱり可愛い！」

「予想どーりじゃん？」

その二人組は・・・俺の負の遺産、そして転校の原因である、あのいじめっ子だった。

そういえば、あまりに学力低すぎてどっかに越していったと聞いたが、まさかこんなところで会うとはな・・・

「・・・なんですか？」

俺は、不機嫌面で返した。

俺の顔を見て驚かないのは、俺に胸があり、似ているだけと判断したからか、俺の存在を忘れたかのどちらかだろう。

・・・まあ都合か。

「どうしたの、謙・・・優？」

優子が俺を呼ぼうとして焦って口を塞ぐ。

まあ、普通に人前で本名呼んだら、ニューハーフとでも思われるだろう。

それに・・・こいつらの前で本名を呼ばれては困る。

「お嬢ちゃん、ちよつと俺たちと遊んでくれない？」

「ああ。ちよつとそこらを散歩しようぜ？」

じりじりと詰め寄ってくる二人。

「ちよつと止めなさい・・・」

「貧乳は引っ込んでろ！」

「んなつ・・・」

優子が止めに入ろうとしたが、二人の放ったセリフで心が折れたようだ。

「どうせ私は貧乳よ・・・」

うつむいたまま座り込み、動かなくなってしまった。

・・・プッチーン！

「ああ、大丈夫ですよ優子さん、すぐに戻りますから・・・」

俺はそう言うと、二人を人気のない所へ連れていった。

・・・昔の借りを返してやる。

「お嬢ちゃん、こんなに人気のないところに連れ込んで、俺たちをどうするつもりだい？」

いじめっ子の手下の方が、俺の体を舐めまわすような目で見ながら言った。

「それは勿論、貴方達を立てなくなるまで・・・」

「た、勃てなくなるまで・・・？」

俺の言葉に興奮する二人。

だが、こんな奴に貞操をくれてやるつもりはない。

「立てなくなるまでボコります？」

「……はあ？」

俺の言葉に啞然とする二人。

……まあ当然か。

「お嬢ちゃんに何ができるの？」

親分の方が笑いながら俺を茶化す。

「自慢のパンチを見せてみなよ、あつはつは……」

そして子分の方がこんなことを口走りやがったので……

「……では、行きます！」

ゴスっ！！

「ウボアっ！！」

一発KOを決めてやった。

まあ、こいつは雑魚だからいいとして、問題は……

「つてめえ、何者だ？！」

悪役の常套句のようなセリフを放つ親分の方だ。

……中学時代、コイツに勝ったことがねえ。

「昔の借りを返させていただきますっ！！」

俺は、相手が行動を起こす前に先手を打った。

「ハアッ！！」

中段の掌底突きを放つ。

「ぐうっ……」

その拳は相手の鳩尾を的確に捉えた。

「よし、もういっぱ……なっ！？」

もう一発突きを放とうと構えたとき、背後から羽交い締めにされた。

「……なんで!？」

俺を羽交い締めにしたのは、さっきKOしたはずの雑魚だった。

「甘いなお嬢ちゃん。幾ら先手を打ったって、その非力な拳じゃ誰

も倒せないよ。」

えっ……まさか!？」

俺は、自分の注意力の甘さを恨んだ。

数日前なら、あの雄二でさえも吹っ飛ばせた。

しかし今はこいつも倒せない。

「・・・ということは、女になってから、少しずつ体力が落ちてたということだ。」

「はっ。どこの誰かは知らねえが、手間をかけさせてくれたな・・・」

「そう言つて親分が取り出したのはナイフ。」

「・・・ッ!？」

恐怖で思わず顔が引き攣る。

「クツクツク・・・大丈夫、殺しはしねえよ。」

そう言つて、親分は俺の水着にナイフを当てた。

「・・・パーカー着とけばよかった。」

「や、やめてください・・・」

「ああん?聞こえねえなあ?」

俺の必死の抵抗もむなしく、上の水着が切られ、俺の胸があらわになる。

「おおおう、期待通りのバストだな?」

「・・・ッ!!離して!!」

力いっぱい抵抗するが、それでも離れない。

「・・・もう、終わり・・・?」

「うっ、ウウツ・・・」

俺は、悔しさで涙をこらえきれなくなった。

「今更泣いたつて無駄だぜ?」

子分の方がゲスな笑いを浮かべながら俺の耳元で囁く。

「さて、それじゃあ存分に楽しませてもらおうぜ?・・・勃てなくなるまでな!!」

そう言つて、俺の水着にナイフを近づける親分。

「ッ・・・助けて!!」

俺は、力の限り大声を出した。

「・・・誰も助けにこないことは分かっていた。」

しかし、叫ばずにはいられなかった。

「はっはっは、ここまで人気がないところでいくら叫んでも、誰も助けには・・・」

親分はそれだけ言って倒れた。

「・・・」

親分を倒したのはムツツリ。

「・・・土屋くん？」

俺はムツツリの名前を呼んで気づいた。

ヤバイ、俺今上半身マツパだ!!

「土屋君！逃げて！」

俺は、ムツツリに向けて叫んだ。

このままじゃ共倒れだ!!

「・・・」

しかし、ムツツリはそれを無視して俺に近づいてくる。

「ひいつ、く、来るな!!こいつがどうなってもいいのか？」

子分が俺の首に手をかけ、締める素振りをする。

「・・・ツ!!」

それを見て、動けなくなるムツツリ。

「はっ、動けねえだろ!!」

子分が、高らかに笑いながら叫ぶ。

「親分、先にこの男、殺っちまってくれ！」

「・・・わかつてる!!」

そう言つて、立ち上がった親分に殴り倒されるムツツリ。

「・・・クツ！」

口から血を流している。

「俺もやるぜ！」

そう言つて、俺を拘束していた子分も攻撃に加わる。

・・・俺に手錠をかけて。

「・・・ムツツリ！逃げろ！」

俺は叫んだ。

「頼む、頼むから逃げてくれ！全ては俺の身勝手が招いた自体なん

だ！俺なんかのために傷つく必要ねえんだよ！！」
頼むよ。頼むから！！

しかしムツツリは、一瞬俺に笑いかけ、こう言った。

「・・・友達を置いて逃げるような奴は、男じゃない。」

「・・・ツ！？」

俺は、泣いた。

いや、無条件に涙が溢れてきた。

・・・昔の優希も、こんな気持ちだったんだな。

「じゃあ、じゃあもうお前なんか友達じゃねえよ！」

これで愛想をつかせて逃げてくれ・・・

「・・・お前がどう思おうと勝手だ。」

しかし、なおも逃げようとしないうツツリ。

「ムツツ・・・土屋！おれはそんなの・・・」

「そろそろ死ねや！！」

俺の言葉を遮るように、そう言ってナイフを取り出す親分。

・・・マズイ！

「もう、いい加減に・・・」

『つたく、一人でいなくなっと思ったなら、こんなところで縛られてたか。』

『ムツツリーニもだよ。一人で勝手に行っちゃうなんて。』

そのとき、背後から声が出た。

・・・聴き違うはずがない。

「ゆ、雄二！明久！」

そう、声の主は、文月学園を代表するアホコンビだった。

・・・馬鹿だが、この場面でこれ以上頼り甲斐のあるやつは、他にいないだろう。

「さてと、さっさとかたずけるか！」

「そうだね！」

二人のおかげで、俺達は悪党どもを倒すことができた。

その日の帰り道。

「・・・」

「土屋君・・・」

ムツツリは、帰ったあとずっと無言だった。

「あのさ、助けてくれてありがとう。」

「・・・あれは助けたうちに入らない。」

ムツツリは、いつものように少ない口数で答えるが、その言葉がとても頼りがいのある言葉に聞こえた。

「けど、俺・・・いや私は、とっても嬉しかった。」

「・・・」

ムツツリは何も答えない。

けど、話を聞いてもらえるだけで十分だった。

そして、何かお礼がしたくなった。

「・・・土屋君。」

「・・・」

相変わらず無口なムツツリにたいして、俺は・・・

CHU?

「・・・!?!?」

「アリガト。」

せめてのお礼として、ほっぺにキスをした。

・・・女つてのも、案外悪くないかも。

第一百十話（後書き）

優「・・・（／／／）」

ムツリ「・・・（／／／）」

優「あ！えつと・・・次回をお楽しみに。（／／／）」

第百十一話 その後・・・（前書き）

今回は、アニメー話、その後の話です。

・・・オリジナル展開ですからその後もクソもないのですが・・・

第百十一話 その後・・・

明久目線・・・

「まったく、謙太には困ったもんだよね。」

悪党どもを片付けたあと、僕たちは皆がいる海岸に戻った。

「どこに行っておったのか？」

海で遊んでなかった秀吉が、戻ってきた僕たちに話しかけてくる。

・・・あんまり言わないほうがいいよね。

「え？ああ、ちよつとね・・・」

僕は適当に言葉を濁した。

「ふむ・・・で、謙太とムツツリーニはどうしたのじゃ？」

「ああ、奴らなら先に戻るらしい。」

秀吉の問いに雄二が答えた。

・・・ごめんね秀吉。多くは話せないんだ。

「そうじゃったか。なるほどのお・・・」

秀吉は、特に疑問も持たなかったようだ。

・・・一安心。

「そういえばアキ君、佐藤君はコテージに戻ったと言いましたね？」

姉さんがそんなことを聞いてきた。

「え？あ、うん。どうして？」

僕は頷いたけど・・・何かな？

「では、これを届けてくれますか？」

そういつた姉さんの手元にあったのは、謙太のパーカー。

・・・あれ？

「ね、ねえ、雄二？」

「な、なんだ明久？」

ふとあることを思い出し、雄二に訪ねてみる。

「もしかして今、謙太って上半身裸・・・」

ダッ！！

「雄二!？」

雄二が、僕のパーカーの裾をつかんでダッシュした。

「まずいぞ明久! ムツツリー二の命が危ない!」

そうだよな・・・

「せめて無事についてるといいけど・・・」

まあ、多分無理だろうな・・・

僕たちは全力ダッシュでコテージまで戻った。

「はあ、はあ、はあ・・・」

大急ぎでコテージに戻って確認した玄関には、ムツツリー二と謙太の靴があった。

「・・・どうやら家にはついてるようだな。」

「はあ、うん。はあ、よかったよ・・・」

取り敢えず、これでむつつりにが路上で倒れている危険性は回避できたかな・・・

「それじゃ、僕は謙太にこれを渡してくるよ。」

「そうか。俺はあつちで片付けの手伝いをしてくる。どうせそろそろ帰るだろうし。」

雄二は、そう言ってもと来た道を小走りで帰った。

・・・さすがは筋肉バカ。

「それじゃ、僕もさっさと渡して、あつちの手伝いにいかないと。」

僕はそんなことをつぶやきながらサンダルを脱ぎ、コテージに入った。

「・・・どこだろう。」

そういえば、ここまだ一回しか入ったことなかったから、間取りとかわかんないんだよな・・・

それに、ムツツリー二は今頃寝てるだろうし、大声出すのもなんか

な・・・

『・・・とっ』

『・・・あんなの・・・ない』

あ、リビングの方から声が聞こえる。

・・・会話の内容が気になる。

「ちよつと覗いてみようかな・・・。」

僕は、ちよつど引き戸になっていた部分からリビングを覗いた。そこには、いつも通りの二人（後ろ姿）がいた。

「けど、俺・・・いや私は、とつても嬉しかった。」

「・・・。」

あれ、何かいつもより謙太が女っぽい気がするんだけど・・・

「・・・土屋君。」

CHU?

「・・・!?!?」

「アリガト。」

えええええっ!?!?

謙太は、何を思ったかムツツリーニの頬にキスをした。

そしてムツツリーニを見つめる謙太の笑顔が眩しい!!

・・・羨ましい!!

「・・・な、なんの真似だ。」

ムツツリーニは、顔を真っ赤にしながら言った。

あれ？鼻血は出さないのかな？

「なにつて・・・お礼だけど?」

「・・・。」

ムツツリーニは、謙太からそつぽをむいた。

その拍子に・・・

「・・・明久。」

目が合ってしまった。

「や、やあムツツリーニ。」

「・・・明久、今の見てた?」

とか翔子の腕を外す。

「・・・雄二、私のよりの胸が見たいの？」

翔子が、ものすごく残念そうな顔で言う。

「なんのことだ？俺には何がなんだか・・・」

「・・・答えて。」

「うぎやアアアアア！！！」

クソっ、これじゃあ尋問じゃないか・・・！！

「落ち着くんだ、翔子！別に俺は謙太の胸など（メキヨツ）ヒギヤアアア！」

「・・・じゃあ何で、謙太の水着がどうのって話してたの？」

翔子が、アイアンクローをしながら問い詰めいてくる。

「・・・あのことは言わないほうがいいな。」

「そ、それは、ムツツリーニも男だし、謙太をほうっておくのは危険だっけ話をしただけで・・・」

「・・・嘘。最近の雄二は嘘をつくときに目が泳ぐ。」
クソオツ！！

俺もFクラスに毒されてきたのだったのか？

「・・・とにかく、雄二には少しオシオキが必要そう。」

「ひいっ！止めるっ！これには訳が・・・」

グシャッ・・・

俺は、自分の頭蓋骨が砕ける音を聞きながら倒れた。

「・・・少し事情聴取が必要そうだね、ムツツリーニ君っ！！」

「やめなさい！又ムツ・・・土屋君を殺す気なの！？」

薄れゆく意識の中で、工藤と木下姉のその言葉だけが、無性に耳に残った。

俺は・・・俺は殺されてもいいのか・・・

・・・閑話休題・・・

明久&雄二

「「こうして僕たち（俺たち）は、三途の川付近で再会することになった。」」

第百十一話 その後・・・（後書き）

明久「あれ、雄二？」

雄二「・・・お前も犠牲になったか。」

明久「しょうがないよ。」

雄二「・・・そうだな。」

「次回をお楽しみに。」

第一百二十一話（前書き）

昨日はすみませんでした・・・

第一百十二話

明久目線。

「……とりあえず僕たちは蘇生された。」

「つたく、ヒデえ目にあつた……」

「そうだね……」

僕と雄二は、顔を見合わせて無事を確認した。

「なあ明久、俺、どこかおかしくないか？」

「……見たところ、雄二はケガがなさそうだ。」

「顔、かな……」

「歯を食いしばれ。」

あれ？間違つてた？

「そういえば、謙太はどこに行つたのじゃ？」

秀吉が、ムツツリー二に尋ねた。

ああ……今ムツツリー二にその話をする……

「……知らない。」

ムツツリー二は、案の定僕を睨みながら言った。

僕は何も悪くないような気がするけど……

「彼奴なら、今頃姫路たちにつるし上げられてるんじゃないか？」

雄二が、あくびをしながら言った。

「そうかな……？」

姫路産たちがそんなことをするのは思えないけど……

「……じゃろうな。」

「……」

秀吉は雄二に肯定したけど、ムツツリー二は相変わらず無口だ。

「……やっぱり怒つてるのかな……？」

「……もつと、強くならなければ……」

「ん？どつたのムツツリー二??？」

「……なんでもない。」

むつつりーに何かを言った気がしたんだけど・・・
僕たちは、そんな話をしながら過ごした。

謙太目線

「どういうことよ？」

俺は今、正座で事情聴取を受けている。

事情聴取の相手は優子&愛子&霧島。

「・・・すみません。」

「すみませんじゃないわよ！」

謝ったら怒られた。

「・・・何があつた？」

そついった霧島が持っていたのは、切られた俺の水着。

「・・・どこで拾つたやら。」

「・・・別に何も。」

「何もじゃないよ。これは明らかにおかしいですよ。」

愛子が、珍しく厳しい口調で攻めてくる。

「別に何にもねえよ。それだって、たまたま壁に掛かってたカッターに引つ掛けただけだし。」

「・・・嘘。この切り口は故意のもの。」

即座に嘘が見抜かれた。

「・・・さすがの観察眼だ。」

「正直に言いなさい。」

優子に詰め寄られる。

「・・・あんまり心配かけたくないんだけどな。」

「正直に言わないと・・・」

「わあつた、分かつたから。」

さすがにこれ以上引つ張るのも面倒だし、事情を説明するまで返し

さすかにこれ以上引つ張るのも面倒だし、事情を説明するまで返し

てもらえなさそうだったから、いろいろかいつまんで説明した。

「・・・というわけなんだ。」

「「「!?!?!」」」

三人+後ろの姫路、島田は、目を丸くしていた。

「そんなことがあったの・・・!?!?」

「・・・ムツツリー二君を攻めようとしたさっきまでの僕が恥ずかしいよ。」

「・・・私も。少し反省している。」

「私事です・・・。明久君に悪いことをしました。」

「ウチもよ瑞希。まさかそんな事情があったなんて・・・」

五人は、思い思いの感想を・・・っつーかそのうち四人はさっきの自分の行動を後悔していた。

「あー、という訳で、あいつらのことは許してやってくれ。以上!」
よし、説明責任は果たしたし帰るか・・・

ギョツ!

「・・・って優子、どうして俺の腕を鷲掴みにしているんだ?」

優子がなぜか腕を離さない。

「鷲掴みにもするわよ・・・。どうしてそういうことを私に言ってくれないの!?!?」

すごい剣幕で怒鳴られた。

どうしてって言われても・・・

「・・・優子に心配かけたくなかったんだよ。」

俺は本心を言った。

下手なことを言っても許されそうにないしな。

「・・・そ、そうなの?でも、ちゃんとやってくれないと・・・」

優子は、若干赤くなりながら言った。

「・・・傍から見れば百合じゃね?」

「・・・優子、もう十分。」

「そつだよ。せっかくのお泊まりをこれ以上暗い雰囲気にはしたくないし!」

「ほら、愛子たちもこう言ってるし、この話は忘れようぜ。」
「……」

愛子たちもそろそろ許してくれるらしいが……

優子は腕を組み、何かを考えていた。

「……分かった。けどひとつ約束して！」

優子が、詰め寄ってきていった。

「……まあ、簡単なことなら罪滅ぼしがわりにいいだろ。

「なんだ？」

「えっと……私には何も隠し事しないでくれる？」

ああ、そんなことか……

「わかった。約束しよう。」

俺は快諾した。

「うん、それならよし！」

優子は満面の笑みで頷いた。

第一百十二話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第百十三話（前書き）

書いてる後ろで弟たちがスプリンターセル。

パソコン上にはツイッター&メール

そして手元にはPSP（パワプロ4）。

・・・集中できねえ。

第一百十三話

「それでは、浴衣に着替えましょうか。」

当然のように浴衣を持って現れる玲さん。

「浴衣？」

「そうでした。今日はお祭りがあつたんですね。」

ああ・・・

優希の言葉で思い出した。

「それでは、みなさん着替えてください。」

「・・・一着多くないか？」

玲さんが持っていた浴衣は7着。

女性は優子、優希、愛子、姫路、美波、玲さんと・・・ああ、秀吉か。

「それじゃ、俺は秀吉でも呼んでくる・・・愛子？なぜ俺を引き止める？」

愛子が俺の肩をつかむ。

そして空いた手にもっているのは・・・もちろん浴衣ヒソク

「あつはつは！まだ認めたくないみたいだね。」

クソっ・・・

体力が落ちてしまったせいで振りほどけない・・・

「それじゃ、優子、ちよつと借りてくよ。」

「わかった。任せたわよ。」

「ちよつ愛子！！俺を殺す気か！？それと優子！頼むから止めてくれよ！！」

「嫌よ。」

「即答！？」

さつきまでのあのやりとりは一体！？

そんなこんなで愛子に別部屋に連れ込まれる。

「・・・さて佐藤君。はじめようか。」

「それは一体どんなキャラだ!？」

愛子のキャラが変わったことにビビる俺。

「え?先生だけど……。」

「教師かよ!！」

「いや病院の。」

「さらに夕子悪いっ!?全国の医者に謝れ!！」

「……よし、全部脱げたね!！」

「何時の間に!？」

何かどうでもいい応答をしているうちに、いつの間にか俺は下着だけになっていた。

「うーん……いつ見ても凄いオツパイだよね……」

「……姫路の方がすごいだろ。」

「違うんだよ。なんかこう……キユツて?」

「そんなこと知るか!！」

つつーか話している間も手が止まらないってどんな集中力だよ……

「……完成!」

「おお……」

愛子の手際の速さに少し驚きながらも、鏡で自分の浴衣を見た。

「……別人じゃん。」

「すごいでしょ。」

俺が鏡を見る横で、愛子がブイサインをしている。

……手際くらいは認めよう。

「それじゃ、お披露目にいこっか。」

「ん?お前着替えは……」

俺が振り向いたときには、既に着替えを終えていた。

「なんつーか……」

「どうしたの?」

「……いや、なんでもない。」

愛子って、あらゆる面で器用だよな……

「それじゃいこっか。」

愛子が、外を指さした。

お披露目とやらに行くらしいが・・・

「・・・ヤダ。」

だが断る！

「あはは、嫌な気持ちも分からなくはないけどね。とにかく行くよ！」

「ちよつ、おい!!」

愛子に強引に引っ張られるようにして、俺は外に出た。

「謙太くん・・・か、可愛いですね・・・」

「謙太・・・に、似合ってるわね・・・」

ドアの外の廊下にいた二人が、なんだか微妙な反応をした。ちなみに二人とも着替えを済ませている。

「あれ？おかしかったかな・・・？」

愛子も困惑したように俺の浴衣を見る。

「・・・そりや変だろ。男なんだし。」

逆に、女物の浴衣が似合う男が見てみた・・・秀吉だ。

「い、いえ！変じゃないんですよ!!」

話を聞いていた姫路が全力で否定する。

「・・・遠慮しないでいいのに。」

「そうよ、別に変じゃないのよ。ただ・・・」

「アキ（明久君）が見たらどう思うんだろう・・・」

「？」

二人が小声で何か言ったが、うまく聞き取れなかった。

「そ、それよりウチらはどう？」

美波が、話をそらすように俺達に言った。

「うーん・・・いいんじゃないか？」

二人・・・いや、愛子も入れると三人だが、みんな元がいいからか浴衣を着ても似合っている。

何だかんだで文月の凄さを思い知るな・・・

「そ、そうですか！それなら良かったです!!」

ほっと胸をなでおろす姫路。

「それじゃ、さっさと優子たちに見せびらかそうよ！」

優子が、俺たちを引き連れてリビングへ向かった。

リビングには、優子、優希、玲さんがいた。

「ヤッホー！！着替え終わったよ！」

優子が勢い良く入る。

「あら、皆さんとてもよくお似合いですね。」

玲さんが、微笑みながら褒める。

「謙太、結構似合ってるじゃない。」

「そうですね！とてもよくお似合いです！」

優子と優希が俺を褒める。

・・・何か困る。

「ちよつと優子と優希！僕たちも見えてよ！」

優子が優子達に言った。

「え？ああ、うん。似合ってると思うわ。」

「そうですね。」

「うわぁー……。投げやりにも程があるでしょ。」

優子が少し不機嫌そうに言う。

まあ、あの返事はさすがにな・・・

「まあ、いいじゃないですか。」

「そうよ。木下さんと黒崎さんは、謙太にしか興味がないんだから。」

「んなつ！？そ、そんなこと・・・（ノノノ）」

姫路と美波の悪戯で真っ赤になってそっぽを向く優子。

・・・全否定、それはそれで・・・

「謙ちゃん、私の浴衣はどうですか？」

そんな優子を尻目に、優希が浴衣の感想を聞いてくる。

ちなみに優希の浴衣は淡いピンクに花柄。

「ん？ああ、いいんじゃないか。その浴衣、優希に合ってると思っ
ぜ。」

「そうですか！良かったです！」

俺が素直な感想を言うと、優希が笑顔になった。

「・・・（チラ）」

優子が、俺に素直に感想を聞けない手前、チラチラとこっちを見て
くる。

「優子、心配しなくてもお前も似合ってるぞ。」

「ほんと！？・・・別に嬉しくないけど！」

優子は一瞬顔を輝かせたが、姫路たちの視線が気になったのか、ま
たすぐにそっぽを向いた。

・・・ツンデレか。

第一百十三話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに！」

第百十四話（前書き）

今日も誘惑に負けながらのギリギリ配信です・・・

第一百四話

「みんな揃ったみたいですね。」

「そうね。それじゃ、さつさとアキ達を呼びに行くわよ!」
全員が揃ったのを見た美波が言った。

「・・・やだ。」

だが断る!(二回目)

・・・まあ断っても無駄なんだろうな。

「やだじゃないですよ。佐藤君!」

「そうだよ、謙太くん。」

案の定、断る俺を二人が男部屋へ引っ張っていった。

そして部屋の前。

「・・・さて、じゃさつさと入る・・・」

「ちよつと待ってください。」

はいろつとした俺を、姫路が止めた。

「・・・ンだよ。」

「ちよつと中の話を聞いてみましょうよ。」

姫路が、珍しくいたずらっぽい笑みを浮かべながら行った。
・・・可愛すぎて断れない。

「分かったよ。」

仕方なく、俺はドアから離れた。

明久目線

「それにしても・・・僕たち、よく生きてるね。」

僕はふと、思ったことをつぶやいた。

「まあ理由があつたとはいえ、姫路さんたちから見れば僕たちは「上半身裸の謙太を見にダッシュでコテージに戻って行った変態」なのだから。」

「確かに……事情を知らなかった翔子が、俺を生かしていることが不思議だ。」

「生かしている……というよりは、生き残つたと表すべきではないかのう?」

秀吉が、微妙に呆れながら言う。

「……秀吉、それは違つんだよ。」

「いや、いつものアイツなら確実に息の根を止めている。これは異常事態だ。」

「そうだよ、僕だつて生きてるのが不思議だよ。」
だつて、ロクな拷問も受けずに釈放だよ?

「……霧島や姫路たちは、本当にお主のことを好きなのか?」

「……嫌よ嫌よも好きのうち。」

「?秀吉、ムツツリーニ、何か言つた?」

何か霧島さんと姫路さんがなんとかつて言つてたけど……

「……お主の耳は、本当に都合が悪いのお……」

「……ここまでくるとわざとしか思えない。」

「?????」

一体何を言つてたんだろう???

「それはいいとして、だ。まさかあいつらがこの程度で済ませるとは到底思えない。まだ何かあるかもな……」

「だよ。どうする?逃げる?」

僕たちが何か行動を起こそうとしたその時……

『逃げるって何?』

「「ギクッ!!」」

殺気を感じた。

そつと振り返ると、そこには……

『ジャーン!!』

「・・・」

浴衣を着た女性陣がいた。

「みな浴衣に着替えたのじゃな。」

秀吉が、コンタクトを試みる。

ダメだよ秀吉、今この人たちはものすごく殺気を放って・・・

「はい、せつかくのお祭りですから。」

姉さんが笑顔で答えた。・・・あれ、笑顔？

「どうですか、明久君？」

姫路さんが、これまた笑顔で聞いてきた。

・・・下手なこと言うと殺されるっ!!

「う、うん。似合ってるよ。」

僕は、愛想笑いを浮かべながら行った。

まあ実際似合ってるんだけど・・・

「そっか、美波ちゃんは海外育ちですものね。」

二人のそんな会話を聴きながらも、僕はあるものに目を奪われてい

た。

それは・・・

それは・・・

「な、何よ、アキ・・・」

美波の浴衣だった。

美波が顔を赤くしているということは、相当ガン見していたらしい。

「い、いや、なんでも・・・」

僕は、いそいで顔をそらした。

・・・気づかれてないよね？

僕が顔をそらすと、工藤さんが近づいてきて、耳元でこういった。

「いま、美波ちゃんに見とれてたでしょ？浴衣だと特にかわいいよ

ね。」

・・・バレてた!?

「な、何をそんな・・・」

「着物つて、胸が小さくてもカツコつくから助かるんだよね」
工藤さんが僕の言葉を遮っていった。

「ぼ、僕には、なんのことかさっぱり・・・」
既にバテてそうだけど、一応とぼけてみる。

「もう、わからないなら教えてあげるよ。みてて・・・」
そういった工藤さんは・・・
・・・チラ。

「・・・!?(ブウッ!!)」
バタッ。

ムツツリーニに向けて浴衣の裾をずらして足を見せた。

それを見て倒れるムツツリーニ。

「ほら!いつもより反応が早いでしょ?」

どうだといったような顔をする工藤さん。

・・・ムツツリーニ・・・

「何事じゃ!?すっかりするのじゃ、ムツツリーニ!」

「・・・だが、これはこれで、まんざらでもない・・・ガク。」

・・・ムツツリーニ、本日三度目の死亡。

第一百四話（後書き）

謙太「最近後書きが寂しいな・・・」

優希「しょうがないじゃないですか。作者がぐーたらしてるんですから。」

謙太「・・・そうだな。それじゃ、次回をお楽しみに。」

優希「ちなみに作者は明日提出の課題にほとんど手を付けていませんッ！！」

第百十五話（前書き）

とりあえずすみません・・・

なぜ謝ったのかというと・・・スランプに陥ってしまったからです。

・・・ごめんなさい。

では、スランプに陥った支離滅裂な文をどうぞ。

第百十五話

雄二目線

いったいどうなってやがる・・・

明久が処刑を受けていないだと・・・!?

逃げるなんて言ってたんだから、今頃は骸になっていてもおかしくないというのに・・・

「・・・雄二」

かく言う俺も、今のところは無傷だった。

翔子も、今のところは臨戦態勢を見せない。

「・・・私の浴衣、どう？」

それどころか、普通に浴衣の感想を聞いてきた。

「・・・一体何があつたんだ!？」

「・・・まあ、似合ってるんじゃないか。」

俺は、無難なセリフを吐いた。

実際似合っていたことは否定しないが、あまりべた褒めして調子づかせるのも癪だ。

「・・・じゃあ、私と結婚したい？」

なぜそこでその質問が出てくるんだ・・・

「全っ然。」

それとこれとは別問題だ。

「・・・じゃあ、私と婚約結びたい？」

翔子は少し声のトーンを落としていった。

「・・・微塵も。」

言い方を変えてもノーはノーだ。

「・・・じゃあ、雄二・・・」

「まっぴらだ!」

つたく、クドイ奴だ。

俺は翔子が何かを言う前に否定した。

どうせ、「……私と付き合いたい？」なんて言つつもりなんだろ。

・

「……生きていたい？」

……ゾクッ!!

「アハハ！翔子は本当に可愛いな！」

思わず使った善後策。

これしかないんだよ……

「……雄二は本当に素直じゃない。」

「……今のは脅迫だろう。」

生存本能に駆られて思わず口に出してしまったただけだぞ……

「……恋愛は手段を選んじやいけないってお義母さんが言ってた。

」

「ッ……」

そういうのは、死とかが絡まない範囲内の話だぞ……

謙太目線

なんつーか……

明久と雄二の拒絶反応が思ったより少ないな。

……残念だ。

「それではみなさん、そろそろお祭りに行きましょう！」

玲さんのその一言で、美波が明久の手を取り、姫路が明久の肩を押し、霧島が雄二の手を取った。

「そうですね、玲さん。間に合わなくなったら困りますもんね。」

「日本のお祭りって、これでまだ二度目だから楽しみなのよね。」

「……遅れたらまずい。」

「そうね。せつかくのお祭りだものね。」

「わたあめ、かき氷、たこ焼き……楽しみですっ！」

「早く行こ！」

上機嫌で歩き出す女性陣。

「う、うん……」

そして女性陣に引つ張られるようにして付いてくる男性陣。

「ハア……」

「謙太よ、お主、存外似合っておるぞ？」

「……パシャパシャ」

俺がため息をついていると、秀吉たちが話しかけてきた。

「……嬉しくないし、カメラやめろ。」

秀吉は本心で褒めてるつもりなのだろうが、どうもお世辞に聞こえてならない。

……カメラは普通に困る。

「そうか、残念じゃ。」

「……残念。」

秀吉とムツツリが残念そうな顔をする。

……ムツツリはただ収入が減っただけだろ。

「……木下優子の秘蔵写真がある……」

「いくらでも撮れ。」

「……パシャパシャ！」

「……お主も残念じゃのう……」

……知ったことか!!

第百十五話（後書き）

謙太「・・・次回をお楽しみに！」

康太「パシヤパシヤ！」

秀吉「お主もFクラスに毒されてきたのう・・・」

第一百十六話（前書き）

全く、スランプというものは厄介ですね・・・

全然筆が進みません。

・・・まあ、スランプを言い訳にしているだけかもしれないんですが、
という訳で、おかしいところのダメ出しをお願いします。

第一百十六話

祭り会場は多くの客で賑わっていた。

・・・へえ。

祭りなんて久方振りに来たが、今どきこんなに賑わってる祭りがあるんだな。

小さい祭りには、露店も客も多いし。

「うわあ〜！賑やかですね！」

「ほんと楽しそう！」

姫路と美波が歓声を上げる。

「へえ、確かにすごい賑わいね。心無しかウキウキしてくるわ。」

「どれもおいしそうです〜！」

優子と優希も楽しそうでした。

「・・・おや？ドネル・ケバブですか。」

玲さんが、ある屋台を見つけて言った。

そこには大きく『ドネル・ケバブ』と書かれていた。

へえ、最近の露店では、ブラジルの民族料理なんて出すのか。

「美味しそうだよね。」

明久が当然のように返す。

コイツ、料理面ではそこそこのしりだよね。

・・・今時パエリアの作り方を知ってる男子高校生なんてレアだぞ。

「・・・これで馬鹿じゃなければな。」

「謙太、今さり気に酷いセリフが聞こえたんだけど、僕に向けてじゃないよね？」

ああ、思わず口に出しまった。

「それでは、食べてみましょうか？」

そう言つて財布を取り出す玲さん。

「・・・確かにうまそうだな。」

「アキ君も食べますよね？」

「はい・・・依存はありま・・・ってええ！？姉さんが買つてくれるの！？」

なぜか驚く明久。金がないお前に買わせるはずがないだろう。

まあ、女性に買いにいかせるのもアレだしな・・・

「玲さん、よかつたら買つてきましようか？」

買いに行こうとする玲さんに言った。

「・・・正直俺も食べたいし。」

「あら、ではお願いしますね。」

「了解。」

玲さんから野口英世を受け取り、ドネル・ケバブを二つ買う（もちろん片方は自費で）。

やつぱり美味そうだ。けど・・・

「最近、胃とかもちつちやくなってる気がするんだよな・・・」

なんてことを考えながら、明久たちのところへ戻る。

「玲さん。」

俺は、玲さんにドネル・ケバブとお釣りを渡す。

「ありがとうございます。ではアキ君、姉さんとはんぶんこしましよう。ほかのも食べてみたいですし。」

玲さんはそう言つて、明久にドネル・ケバブを差し出した。

「姉さんが先でいいよ。」

しかし、明久は玲さんに先を譲る。

「・・・やつぱり仲がいい姉弟だな。」

明久たちの仲睦まじい姿を見ながら、俺は（周りを気にしながら）ドネル・ケバブにかぶりつく。

「・・・美味しい。美味いけど・・・全部食べるか？」

「謙ちゃん！何食べてるですか？」

突然名前を呼ばれ、声が出た方を向くと優希が立っていた。

・・・右手にリングゴ飴、左手に綿飴を持って。

「ああこれか。ドネル・ケバブだけど・・・食べるか？」

「もちろんです！」

優希に差し出すやいなや、ドネル・ケバブにかじりついた。

おー、豪快。

「ほいひいでふね！」

「飲み込んでから話そうか。」

とりあえず口に物を詰め込んでいる優希を落ち着かせる。

「・・・ゴクン。謙ちゃんとの間接キスですね。」

「あ・・・」

忘れてた。

・・・まあ、祭りだしとこだしいか。

第一百十六話（後書き）

優希「えっへへ・・・」

謙太「・・・キモイ。」

優希「酷い！」

謙太「・・・冗談。次回をお楽しみに。」

優希「ホッ・・・」

第一百七話（前書き）

化物語読んでインスピレーション得ようとしたらなんかまんまにな
ってしまいました。

返す返すすみません・・・（誤用）

第一百十七話

それにしても、お祭り騒ぎとはこのことを言うんだな・・・

「明久君、あーん？」

「はむっ・・・うん、熱々でトロっとした中身に、タコの歯ごたえが・・・」

明久たちは夫婦みたいにはしゃいでいるし、

「・・・雄二、焼きそば食べる？」

「あ、ああ・・・」

雄二たちも夫婦みたいなことやってるし、

「ムツツリー二君！何女の人の浴衣ばかり見てるの？」

「・・・ぶんぶんぶん！」

ムツツリもなんか青春謳歌してるし、

「あ、姉上、どうしてワシが荷物持ちなのじゃ。二つう時こそ明久におごってやらぬと・・・ウギャッ！！」

「つべこべ言わないの。・・・ウギャなんて言うほど重くもないでしょ？」

「し、しかしこれでは・・・」

優子はすっかり姉貴閨白を出してるし。

・・・まあ、祭りだからな。

「祭りで許されてよいのか?!」

・・・秀吉が何か言ってるけどスルー。

悪いな、残念ながら俺は優子派なんだ。

そして俺たちは・・・

「はい、謙ちゃん、あーん？」

「・・・あーん。」

百合カップルを演出していた。

「・・・やめて欲しい。」

「はい、次は焼きそばですよ？」

「・・・語尾に？なんて付けるな。周りの視線が痛い。」

なんか周りから軽蔑の眼差しで見られてるんだよね。さっきから。

「別にいいじゃないですか！よそはよそ、うちはうちです！」

「この場合に使う言葉じゃないからな？」

「全く、つべこべうるさいですね・・・」

優希がいつの間にか左手に持っていた出来たてのたこ焼きを俺の口にぶち込む。

「アツツ！！」

普通に火傷した。

「つーかこいつ、普通につべこべうるさいとか言わなかったか！？」

「はい、あゝん？」

「痛い、痛いから！！」

そして、急いで焼きそばに持ち替え、無理やりアツアツの焼きそばを口にぶち込もうとする。

「コイツ、悪魔か！？」

「謙ちゃんが言うことを効かないから悪いんですよ！！」

「いつお前が命令をした！？」

まあ、仮に命令されてても無視するけど。

「そういうこと言うお口は・・・」

「熱い、熱い！」

まさに拷問と称するのが正しい攻撃だった。

「・・・いや、口撃・・・ちょっと違うか？」

「分かった、ハートとか周りの目線とか我慢するから！」

「わかればよろしいです。」

そう言っつて、優希が俺に飲み物を渡す。

「ふう、助かつ！？」

口の中で何かが破裂するような感覚を受けた。

・・・単三かつ!?

「電池じゃありません。ちなみに強炭酸です。」

「今日炭酸!?!じゃあ明日はなんなんだ!?!」

「・・・ボケがつまらないです。」

「ほつとけ!」

つつーか、口の中痛めてる奴に強炭酸のジュース渡すなんてどんなやつだ・・・

「えへへ、冗談ですよ。」

優希が、ごまかすように笑う。

もう爽快な笑顔で。

「・・・その微妙なノリが気になるがまあいい。」

ま、まあ祭りだし許すか。

別に、一瞬優希がメチャかわいく見えたわけではないからな!!

「ま、私は可愛くて当然ですよ。」

「地の文読み&そのナルシスト発言やめろ!」

思わず大声で注意をする俺。

・・・想定していたキャラと全く変わってしまったぞ。

第一百七話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第一百十八話（前書き）

全く・・・マツタケアイデアが浮かばないよ・・・

第一百十八話

「ねえ謙太」

「ん？」

荷物持ち（秀吉）にいくつかの荷物を渡し、俺のところ付近寄ってくる優子。

「あれやらない？」

近づいてくるなり、優子がある屋台を指さした。

「射的？」

そこには、なんのことはないただの射的屋台があった。

「あんなのがやりたいのか？」

別に射的の商品なんて大したことないだろうに・・・
なんてことを考えながら優子を見る。

「うん、まあ・・・。」

珍しく・・・はないが、優子が言葉を濁す。

・・・怪しい。

「なあ、なんで射的なんてやろうと思ったんだ？」

「え？えつと・・・思い出作り？」

「ふうん。」

なぜ疑問形なんだ・・・というツッコミは飲み込んで、射的の屋台を見る。

・・・見たところただの射的のようだが。

「とにかく、早くいこっ！！」

「ちよっ、おい！」

優子に引っ張られるようにして、射的屋台に向かう。

「・・・まあ、いいか。」

何だかんだでもう納得する。

こんなに楽しい空気なのに、断るってのもKYだし。

「優希、明久たちのところに行つていてくれ。」

「・・・わかりました。」
優希に明久たちのところへ向かわせ、俺も（渋々！後にあることのため、あえてここを強調しておく。）ついで行った。

五分後。

「・・・やめときゃよかった。」

俺の心を自責の念と後悔がおそう。

今俺たちは、二人羽織で射的をやっていた。

そう、二人羽織だ。

「ほら！もつとちゃんと狙って！」

俺の後ろの優子が耳元で怒鳴る。

「・・・狙うのはお前だろ。」

出している手は優子のものだから、優子が狙わなければならない。

「けど、ちゃんと指示してよ！」

・・・まあ俺は、説明責任を放棄していたからな。

「・・・面倒。」

だって二人羽織って・・・

「むっ、そういうこと言うなら・・・ほれ！」

優子は何を血迷ったのか、得物（鉄砲）を離して俺の胸を鷲掴みにした。

「キヤツ！や、止める！」

それが目的かああ！！！！

「だったら真面目にやりましょうね？」

優子が

「・・・もう死にたい・・・」

どうしてこうなったんだよ。

「ほら、どっち？」

優子が俺の耳元で囁いてくる。

さつきは怒鳴ったから気付かなかったけど・・・やべ、息が超くすぐりたい。

「み、右・・・」

俺は、とりあえず商品がある方に誘導する。

「こっち？」

優子が確認してくるが、

優子が何かを言うたびに、優子の吐息が耳にあたる。

あぶねえ、男だったら大変なことになっていた。

・・・既に胸揉まれてるけど。

「ここ？」

「あ、ああ・・・」

何かムラムラしてきたから早急になにもかも終わらせたくなくて、俺は適当に返事した。

・・・これ以上俺を焦らさないでくれっ！！

「それじゃ・・・えいっ！！」

パン！

ポトツ・・・

優子が撃った弾は何かにあたったけど、それどころじゃない。

・・・今すぐにも優子を張り倒しかねない。

「おめでとございます！」

店員がそう言っつて賞品を渡しに来る。

「・・・もう終わりか・・・」

「終わりでいいよ・・・」

優子は残念そうだったが、それどころじゃない。

店員が二人羽織を外したところで、ようやく一息つけた。

・・・拷問か。

第一百十八話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに・・・いつもあとがきが適当でございませう。

第一百十九話（前書き）

テストでした・・・

ま、中の上でしたよ。

それではいってみましょう。

第一百十九話

「ふえ〜・・・」

俺は満身創痍でアイツらの所に戻った。

・・・本当に疲れた。

「あ、姉上・・・」

「ああ秀吉、お疲れ様。」

優子が秀吉から荷物を受け取る。

・・・あいつもお疲れだな。

「アキ君、楽しんでますか？」

ふと玲さんが明久に聞いた。

「うん！」

明久は笑顔で答える。

まあそうだろうな。

俺も楽しいし。

「・・・雄二、楽しい？」

霧島も、夫を気にかける。

「あ、ああ・・・」

雄二はまだ何かを警戒しているようだ。

・・・全く、面倒くさいやつだな。

「雄二、もっと楽し・・・」

「あら明久君、ここにも楽しそうな催し物がありますよ？」

突然、姫路がわざとらしく看板を指さしながら行った。

【第一回 納涼ミス浴衣コンテスト 〳〵街一番のっ！！夏美人を見
つけ出そう！！】

「第一回納涼ミス浴衣コンテスト、かあ。」

「ミスコンか・・・」

「面白そうじゃのう。」

「・・・撮影チャンス。」

男性陣が一様に興味を示す。

「けど、正直言ってここにいるメンバーの上はいないと思うぞ?」

「そ、そんなことないですよ〜!」

何故か優希が照れる。

・・・あながち間違いじゃないか。

「取り敢えず、みんなで行って見ない?」

頭にお面をかぶって手には水ヨーヨーを持っている美波が言った。

満喫してますね、美波さん。

「まあ、行ってみるだけならいいか。」

どうせ他にやることもないし。

「いつそのことみんなで参加してみたら?」

キュピーン×7

女性陣が明久の言葉に反応する。

・・・背筋に強烈な寒気がつ!!

「ああ、いや、無理になってわけじゃなくて・・・夏の思い出にそういうのもいいかなって。」

みんなが気分を害したと勘違いしたらしい明久がごもりながら言う。

いや、違うぞ明久!

今お前は俺を死の淵へと追い込んだんだ!

「・・・いいですね。」

「え、ホント?」

姫路が、黒いオーラを出しながら言う。

気づけや明久!

「な、なあ優子!ちょっと別の屋台に・・・」

ガシッ!

「逃がさないわよ?」

「クソおっ!」

なんとということだ・・・

「参加しよつか!」

美波がやけに明るいい声を出す。

怪しすぎる！

「・・・」

流石に何かを感じたらしい明久が俺をチラチラと見ながら、タラタラ・・・ダラダラと脂汗を流している。

・・・まあ、もう手を取られてる時点では俺の予想は確定しているのだが。

「・・・きつと心に残る。」

霧島まで乗り気だっ！？

もうこれは殺傷事件が起きかねないっ！！

俺はもうすでに覚悟していたのだが・・・

「はい、出場しましょう！・・・ここにいる全員で？」

玲さんの発言は、俺の予想をはるかに超えていた。

「全員・・・だっ！？」

「・・・散開！」

俺のリアクションとほぼ同時に逃げ出す明久&雄二・・・っておい！

ヒュン！×2

「なっ・・・！？」

俺が息つくひまもなく、美波&霧島が瞬歩を使う。

ガシッ！

バッ！！

「うわああああー！！」

ゴンッ！

メキッ・・・

明久沈黙。

ヒュン！

シュツ！

「んなあっ!?!」

クルクル・・・

ドンツ！

雄二拘束完了。

・・・ば、化けもんだ!!

「あわわわわわ・・・」

さすがの優希も引いている。

・・・俺でも引くわ。

「ついに人の域を超えたわね・・・」

「恐ろしいのお・・・」

「・・・こくこく。」

一様に引く俺たち。

「「なんでこんな目に・・・?!」」

犠牲になった二人が必死の想いを伝える。

「・・・まさか私たちに謝りもせず、謙太の上半身を見ようとしたことを許すと思っているの?」

霧島が、持っている縄を鞭のように鳴らしながら言う。

・・・怖ええええ!!

「甘いですね。」

「甘いわ。」

そして、美波や姫路もそれに加わる。

「・・・僕は謝ったと思うけど・・・」

「あんなので謝ったうちに入ると思っている?」

「土下座の上にどんな謝り方が!?!」

明久は土下座までしたらしいが、それも一蹴される。

「大丈夫だよ！」

そのとき、愛子が二人の前に出ていった。
事情の説明か？

それならいいが・・・

「ちゃんとメイク道具は持ってきてるから！」

・・・死刑勧告だった。

「ま、待て！俺の体格じゃ女装は無理だ！この場は明久の女装で収めてくれ！」

「一人だけ助かるつもりか！？この裏切り者！」

明久たちが不毛な争いをする。

え？なぜ不毛かって？

それはもちろん・・・

「二人とも、往生際が悪い。」

「少しは男らしく覚悟を決めた土屋を見習いなさい！」

「・・・?!」

誰一人として助からないから。

第一百十九話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第二百二十話（前書き）

マツタク進みませんね。
頑張ります。

第二百一十話

「……」

明久たちがは、乗ってきたバンの中で着替えを行った。
着替えを手伝ったのもちろん秀吉。

そして今は、それぞれが自分の彼女ないし妻にメイクをされている。
そんな中で、俺は（縄で拘束された状態で）明久たちの着替えを待
った。

……縛られる意味あるのか？

「……ひどい、ひどいよ秀吉。」

バンの中から、明久のそんな声が聞こえた。

やっと着替えが終わったか……

「すまぬ。手加減は出来ぬ性分なのじゃ。メイクは演劇の技術の一
部じゃからのう。」

一緒に出てきたのは……秀吉？

「……あれ？姫路と美波は??」

てつきりあいつらがメイクをしているものだと思っていたが……

「姫路さんたちなら、玲さんと一緒に買い物に行ったわよ？」

俺の見張りをしていた優子が行った。

手にもっている鞭は現地（露店）で調達したものらしい。

……怖いよ！

「買い物か……一体何を？」

「たしか、試合観戦のときのおつまみらしいわ。」

優子が首をかしげながら行った。

こいつも詳しいことは知らないのか。

「ほら、ミスコンの会場って、一回出たら次入るときには最後尾で

見なきゃいけないじゃない？それが嫌らしいの。」
明久君の勇姿を見届ける！なんて意気込んでたわ。
と苦笑いする優子。

ふむ、なるほどな・・・

「で、優希は？」

「あの子は受付に行ったわ。五人分出しに行ってもらったの。」

「へえ、五人分・・・」

五人分、五人分・・・？

「・・・なあ、もしかしてお前たちでないの？」

「当たり前じゃない。」

即答！？

「自分の浴衣姿を見世物になんてされたくないわよ。」
優子が、少し不機嫌そうに言う。

「ま、まあ誰でもそうだろうよ。」

・・・無論俺たちもだ。

その部分に人権はないのか・・・？

「まあいいじゃない。優勝賞品だってあるらしいから、それを目指せばいいんじゃない??」

「その賞品と引換えにいろいろなもの失う気がするよ・・・」
つつーか最近扱いが荒い。

特に女になった辺りからは、そうとう損してる気がする・・・

「しょうがないじゃない。早く男に戻ってもらえないと、イチャイチャできないんだから。」

俺を見下しながら、平然と言う優子。

・・・「まだ付き合っていないだろ」というところはスルーする。
何されるかわかんねえし。

「だったらせめて友達のように接してくれよ・・・」

「無理。」

「またもや即答!?!」

早押しクイズじゃねえんだぞ!?!

こいつは一体どこの高みを目指しているんだ？！

「だって、ここで友達みたいに接したら好きじゃなくなり・・・なんでもない。」

優子は急に顔をそらした。

・・・8割位言い切ってるんだけど、そこもスルー。

「と、とにかく！この待遇が嫌ならさっさと男に戻りなさい！！」
ゴスっ！！

照れ隠しに殴られる。

・・・鞭の柄で。

「・・・わかりました。」

頭蓋骨が陥没したかのような錯覚に襲われながら返事をした。

・・・痛い。

「こっちは終わったよ〜！！」

「・・・こっちも。」

「二人とも、お疲れ様。」

そんなことを話している間にみんなの女装が終わったらしい。

愛子と翔子が笑顔でこっちに来た。

『相変わらず元気だね。何かいいことでもあったのかい？』とでも
言いたくなるほどの笑顔だ。

・・・いや、言わないけど。

「・・・土屋香美って何。」

「お前らはまだいい。俺なんて女装の上に外国人という設定だぞ・・・」

「・・・確かに、外国人のスポーツ選手になら、雄二くらいの体格の人いるよね。」

男性陣は沈んでいたが、気にすることではないだろ。

「おお。もう着替えは終わったのですか。」

優希や玲さんたちも戻ってきた。

「三人ともとってもお似合いですね。」

「ホント、すごく可愛いわ。」

「アキ君、綺麗に育ってくれて、姉さんは嬉しいです!」

三人が明久たちをべた褒めする。

・・・ちよつと羨ましい。

「・・・姉さん、それ弟に言うセリフじゃない。」

玲さんの言葉に、明久が呆れるようにため息をつく。

「まあ、明久だからな。」

俺は、笑いながら明久を見た。

・・・しかし、改めて見るとかなり似合っているな。

「・・・さすがはアキちゃ。」

「その呼び方はやめて!」

あれ?この呼び方は悪かったのか。

「悪い悪い。けど、雄二はちよつと・・・な。」

女には見えるんだが、少なくとも浴衣が似合うタイプじゃない。

「・・・そうだね。」

雄二はどこからどう見ても男だからね。と明久も苦笑いで答えた。

「・・・私が言うのはなんだけど、雄二には色気が足りない。」

そんな話をしている俺たちをよそ目に、霧島が大きなため息をついた。

まあ、雄二に高望みすることがそもそも間違いないんだけどな。

正にアスリートだし。

「だったら着せるな!!」

雄二が霧島（と、俺もか？）に怒鳴る。

・・・よせ雄二、その叫びをしたところで虚しくなるだけだ。

「で、ムツリーニは」

「・・・屈辱っ!」

そして、ムツリーニは震えながら下唇を噛んでいた。

今回は取られる側だからな。

「そんなことないよ」。とつても似合ってるよ、ムツリーニ君
そんなムツリーニを励ます愛子。

・・・似合うことが屈辱なんだと思っぜ。

まあ、そんなことより・・・

「・・・秀吉。」

「なんじゃ?」

俺は、優子、俺、優希と共に目の前で行われている光景を眺めていた秀吉を呼んだ。

「なんでお前も浴衣を着ているんだ。」

秀吉は、まあ普通に違和感がないくらい浴衣を着こなしていた。それを言ったら明久たちも違和感はないがな。

・・・雄二以外。

「・・・ワシにも分からぬのじゃが、明久の姉上に渡されての。」

秀吉は、困ったように自分の浴衣の裾を持ち上げた。

「・・・へえ。」

まあ・・・どうでもいいか。

「ワシ的にはどうでもよくないのじゃが・・・」

秀吉が何か言っているがスルーの方向で。

「それじゃ、会場にいこっか。」

「・・・ああ。」

こうして、俺たちのミスコンが静かに幕を開けた。

第二百二十話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに・・・」

第二百一十一話

『これより第一回、納涼ミス浴衣コンテストを開催します。パン！』

『ワアアアアア！！』

観客の歓声が聞こえる舞台裏で俺たちは（渋々）準備をしていた。「ったく、なんで俺たちがこんな目に……」俺は、愚痴を言いながら浴衣の裾を直していた。

ちなみに順番は、提出順だから俺たちは先頭付近に固まっていた。その中では……俺、明久、ムツツリ、雄二、秀吉の順だ。トップバッターかよ……。

「出場するからには、優勝目指して頑張るのよ？」
優子がバン！と俺の背中を叩く。

……優勝商品は浴衣らしいから、それが目的か。

「謙ちゃん、絶対勝てますから安心してくださいね！！」

「……むしろそれが不安だ。」

今は曲がりなりにも女とはいえ、元男がミスコンで優勝するってのはどうなんだ？

「大丈夫よ。今は女なんだし。」

優子たちが俺の優勝を疑っていないのも気になるが、まあそこはいだらう。

「それじゃ、頑張ってくださいね？」

「うう……」

明久は、姫路&美波に浴衣を直してもらっていた。

明久、女子と遜色ねえ……。

「大丈夫、バレやしないから！」

美波が明久のオビを締めながら行った。

まあ、こいつは問題ないだらうが……。

「……雄二、自分を信じれば勝てる。」

「勝てるかつ!!」

雄二はかなり不安だな。

メイクが汚ギヤル並みの濃さだ。

・・・雄ギヤルといったところか？

その一方で・・・

「可愛いところ、しつかり撮ってあげるからね！」

ビデオカメラを携えた愛子がムツツリに言った。

「・・・クソっ！」

ムツツリは悪態をついたが、もうどうしようもない。

・・・まあ、絵的にいえばムツツリなら問題無いな。

あとの出場者は・・・秀吉か。

「秀吉は」

「あんな奴のことはほっといて、さっさと行ってきなさい！」

「命令系だ!?!」

優子が珍しく命令系で起こってきた。

・・・この様子だと、優子は何か隠しているな。

俺に隠すようなこと・・・秀吉に何があっただんだ!?

「いや、別に危害は加えてないわよ？」

「そうなのか？」

てつきり、自分より浴衣が似合ってたからという理由で折檻されたのかと思っただが。

「・・・今すぐく失礼なこと考えなかった？」

優子が訝しげな目線でこつちを見る。

「まさか。そんなわけねえだろ。」

内心冷や汗をかきながらも、俺は飄々と返した。

・・・顔に出ってたのか？

「そう、ならいいけど・・・」

優子が、ふうと溜め息をつく。
危ない危ない。

危うく秀吉の二の舞に・・・いや、考えるのはよそう。
また心読まれそうだし。

「秀吉は・・・ちよつと散歩に行ってくるって言ってたわ。大丈夫よ。出番までには戻ってくるから。あ、ちよつとトイレに行ってくるわ。頑張ってるね」

優子が、まるで苦しい言い訳を言う時のように口早に言うと、どこかに消えていった。

・・・天国への散歩じゃなければいいんだがな。

俺達5人は、出場者が控えている部屋の中で作戦会議をしていた。

・・・ちなみに秀吉は、何もなかったかのようにはトイレから帰ってきたが

「ワシはなぜ女子トイレで寝ておったのじゃ？何があったかも覚えておらぬし、あちこちが痛むぞい。」

確実になにかあったことだけは確かだった。

・・・優子！

「どうする雄二？」

明久がすぎるような目で雄二を見た。

「早く負けて開放されるしかねえな。」

雄二が、苦い顔をしながら言う。

・・・おっかしいなー？

「雄二は不細工だから、予選落ちが決まったようなものじゃねえのか・・・？」

「・・・言うな。女装が似合っつてのも不本意だが、さすがにそれは悲しくなる。」

雄二が沈んだ顔で俺の肩に手を置いた。

「・・・悪い。」

「分かれば・・・いいんだ。」

雄二は雄二で苦勞しているらしい。

「そうだ！」

明久が、何かを思いついたように手をポンと打った。

・・・あまり期待は出来ないが。

「いつそのこと、男だつてことをばらせば」

「・・・それは無理。」

明久の提案は案の定馬鹿丸出しの回答で、勿論ムツツリが否定した。

「もしかしたら、学園の関係者や知り合いがおるかもしれぬぞ？」

秀吉が言った。

「ああ。お前ら　雄二と明久はもう学園では知らない奴が居ないほどの有名人だから、三年の奴らや一年共に見つかつてもアウトになる。」

「・・・こいつと同じ扱いなのは不本意極まりないがな。」

俺がそう言うと、雄二は面倒臭そうに舌打ちをした。

「それはこつちのセリフだ！　だいたい」

「コホン、そんなことより話を戻すぞ。」

「無視かよ！」

明久が何か言おうとしたところで、雄二がそれを強引に打ち切った。

「もし誰かにバレてみる・・・。俺達は女装趣味があるだけでなく、コンテストに出るほど自信があつて露出癖がある、とてつもなく痛い男だということになつちまう！！」

雄二がかなり苦い顔をする。

多分俺も似たような顔になつていたはずだ。

・・・ここまで不細工じゃないが。

「そんな！　もしそんなことになつたら、僕の社会的信用がああああ！！！」

「それは初めからないと思うがのう。」

「激しく同意。」

アキちゃんジャンルがムツツリ商会で確立されているらしいがな。
・・・誰に売れてるのやら。

「いいか！俺たちがこの危機を脱する有一の戦法は、女装している
事実を隠しながら予選に落ちることだ！！」

雄二のその言葉で、俺達はスクラムを組んだ。

・・・勿論気分で。

「これは、俺たちの男をかけた戦いだ、いいな！！」

「「「「おう！！」「」「」

俺達は、予選落ちを固く誓い合った。

『先ずはエントリーナンバー1番さんです。』
まずは俺だ。

「そんじゃ、逝ってくる。」

「うん、謙太の後ろ姿、しっかり目に焼き付けておくよ。」
明久が親指を立てて俺を見送った。

・・・やめてくれ。

『それでは、どうぞ！』

アナウンサーのその声で、俺はステージに上がる。

『ワアアアアア！！』

会場の熱気は最高だった。

・・・この熱気で肉が焼けそうだ。

『お名前をどうぞ』

さて、こっから気合入れるか！

「あー、佐藤優。」

俺は、できるだけヤンキーっぽく言った。

・・・この反応なら、司会者は困るだろう。

『はあ、佐藤さんですか。』

予想通り！

アナウンサーは少し引いている。

『佐藤さんは、何かご趣味とかは・・・？』

「アタシ？強いていえば、バイクに乗ることかな。実は私、こっ
見えても族長やってるんだよね！」

ハツタリもいいところだ。

しかし、相手はいい感じに引いていた。

『そう、ですか・・・。では、特技は？』

「そうだな。喧嘩かな？やっぱ族長とかやってると、どうしても喧
嘩っ早くなっちゃうんだよね。そのおかげで今強くなっただけみたい
な。」

思いつきり嘘だ。

・・・まあ喧嘩っ早いのは認めるが。

『そうですか・・・それでは小幡さんから一言どうぞ。』

司会者はもう無理だと思っただけ、締めに入ろうとした。

『そんなに綺麗な浴衣を着ているのだから、更生したらどうかね？』
しかし、スポンサーが、最もらしいことを言ってくる。

まあ、ここで反発すれば終わりだ！

「うっせーんだよ！好きでやってる事に文句は言われたくないね。」

俺はそう言いながらスポンサーに近寄ろうとしたが、やらなきゃよ
かった。

なぜなら、実はオビの結びが甘く、下に垂れていたのだ。

そうとも知らず歩き出し・・・オビを踏んだ。

「おっとー！！」

後ろに倒れようとしたから、踏ん張るために思わず足を開くが、そ
れがまずかった。

ステーン！

「キヤッ！」

大股開きのまま尻餅をつく。

『うおおおおおおおおおお！！』

『素晴らしい！びゅーていふる！！』

スポンサーと観客の興奮が聞こえる。

・・・まさか！？

『しーろ！しーろ！しーろ！』

「白・・・」

俺のパンツの色を連呼する観客。

大股開き＋オビ外れ＋座る＝パ○ツ丸見え

つまりは・・・

「ちよつ俺エロハプニング多すぎだろおおおおおお！！」

俺はそう叫んで、急いで会場からはけていった。

「あら謙太、ずいぶんと暴れてくれたじゃない？」

はけた先にいたのは優子。

・・・うわ・・・

「さて、どういうことか説明してもらいましょつかしら？」

優子が俺を睨みつけながら言う。

ああ、あの暴走族てきキャラか。

「・・・普通に恥をさらしたくなかったんだよ。」

俺は今更嘘つくのもアレだったし、本当のことを言った。

当然だろ???

「それじゃないのよ。なんであんなサービスショットを見せたのかしら？」

優子はやれやれと首を振る。

サービスショット・・・

「あれは事故だろ？」

「事故でもなんでも関係ないわよ」

「え？おいちよつとま・・・！！」

なすすべもなく優子に葬り去られた。

・・・何されたんだ俺？

第三百二十一話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに！」

第二百二十二話（前書き）

いつの間にか150部突破してたけどそれがどうした。
最近は2〜3話で一日分のが多いから全然嬉しくない。
という訳で今日はちょっと頑張りました。

第二百二十二話

ん・・・

誰かに揺すられている感覚で俺は意識を戻した。

なんで寝ているかは忘れたが・・・誰が揺すっているんだ？

それを確認すべく、俺は少し目を開けた。

「謙太、起きてよ。」

俺をゆすっていたのは優子だった。

・・・すべて思い出した。

確か・・・いつの間にか優子に落とされてたんだっけ。

・・・思い出す意味なかった。

「ねえ。」

優子が俺を起ここそうと揺する。

さて、記憶を取り戻したことだし

「・・・。」

二度寝しよう。

今起きたらさらなる折檻を受ける気がする。

・・・三十六計逃げるに如かり。

「全く・・・優希、全然起きないわよ？」

「ああ、そういう時は目の前で脱いだらいいですよ。多分気配を察知して突っ込むと思いますし。」

「ええ?!」

優希がサラリと爆弾を落とす。

・・・寝ていたらそれはそれで危険な状況になりそうだ。

ま、まさか優子は脱ぎ出すなんて言わないよな？

「そ、そうなの・・・。」

優子がそう言ったあと、浴衣の帯を解く音が聞こえた。

グッ・・・ここで突っ込んだら負けな気がするし、我慢、我慢。

「・・・。」

スルスルスル・・・

・・・耐え切れませんっ！！

「おい！何やってるんだよ！」

「ほんとに起きた？！自分の時は起きなかったのに！？」

やっぱり反射で目を覚ましてしまった。

我ながら（悪い意味で）大した忍耐力だ。

・・・まあいい。

優子の驚きながらも赤らんだ顔、オビが解けかけている浴衣を見て、ついでに辺りを見渡す。

・・・外じゃねえか。

「全く、何処で脱ごうとしてるんだよ！」

「・・・凄いわアンタ。普通なら気づいても狸寝入りだと思ったのに。チキンね。」

優子は、全く違つところで驚いていた。

チキンって・・・俺もそうしたかったけど、こればかりは属性化してるんだよ！！

「まあそんなことはいいわ。今ちょうどバーベキューを始めるところだから、みんなのところに行こ？」

なんだ、俺を起こしてたのはそんなことか。

「ああ、わかった。」

俺は体を起こし、優子の力を借りて立ち上がった。

・・・よし、体にダメージはない。

「こつちこつち！」

「早く来るです！」

優子、優希コンビが俺を呼ぶ。

元気な奴らだ。

「・・・はいはい。」

俺は欠伸をしながら優子たちを追った。

「・・・謙太、起きた？」

「おっはよー！謙太くん！」

バーベキュー・会場では、女性陣が座って（PS　ゲームをしながら）待っていた。

優子曰く、明久たち男性陣が罪滅しに炭に火をつけていて、女性陣は暇を持て余していたらしい。

「災難でしたね。」

「確かに。あれはさすがに嫌よね。」

「自らが招いた結果とはいえ、さすがにアレには同情しました。」
女性陣が哀れみの視線を送ってくる。

・・・思いつかせないでくれ！！

「まあ、男に戻るまでの辛抱だし・・・」

「・・・え？」

俺がそう言うと、三人はなぜか首をかしげた。

「あ、パンチラのことじゃないのよ？木下さんから　何でもありませんごめんなさい。」

美波が突然俺に謝りだした。

何があつた？

「どうしたんだ、美波？」

美波に事情を聞こうとするが、全く聞こえていないようだ。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい。ひたすらお経を唱えるように謝っている。」

おかしな奴だ。

「で、優子がどうしたんだ？」

「え？あ、はい。木下さんが佐藤さんの浴衣を　何でもありませんすみませんでした。」

「????？」

次は姫路が俺に謝る。

・・・いや、俺じゃないな。

「優子、お前何かした？」

「え？なんのこと？」

俺は後ろにいた優子を振り返るが、優子は何事もないような顔をしていた。

・・・何事だ？

「えつと・・・玲さん、結局何があつたんだ？」

「いえ、私にはとても・・・」

玲さんは苦笑するばかりだった。

・・・何なんだ一体？

「それじゃ、俺は明久たちのところに行くてくる。」

結局有耶無耶のままだったが、俺は優子にそう言つて明久たちのところへ向かった。

・・・男性陣の手伝いをしないといけないし。

「・・・謙太、来たか。」

やけに落ち込んだ雄二が話しかけてきた。

「何があつた？」

「みんな謙太のせいでひどい目にあつたんだよ・・・」

明久が、何かを悟りきつたかのような顔で行つた。

・・・ん？俺のせい？

「・・・あんな屈辱、生まれて初めてだ。」

ムツリが悪態をつく。

・・・???

「お主も大変だったのじゃろうが、あまり巻き込まないでほしいのじゃ・・・」

秀吉は苦笑いで行つた。

・・・何があつたんだ？

「・・・なあ、俺が寝ている間になにかあつたのか？」

「コッブウツ!!」「」

俺の言葉と同時に三人が鼻血を吹いた。

・・・怪しい。

「い、いやあ、別に何も無いよ?ね、雄二!」

「あ、ああ。べ、別に何も起きてないよな、秀吉!」

「そ、そうじゃのう。別になーんにも起きておらぬのじゃ。な、ムツリーニ!」

「・・・(コクコク)」

四人が必死で否定する。

・・・何かあったな。

「なあ明久、何かあった?」

俺は、一番反応がわかりやすい明久の目の前に座った。

「な、なに?べ、別に何にも起きてないよ?謙太が木下さんに襲われてたなんてこと全然起きてないから!」

明久自爆。

「コッおいつ!!」「」

三人が明久に突っ込む。

・・・なるほど、欲しい情報は手に入った。

「(馬鹿野郎!俺たち、ひとり残らず葬り去られるぞ!)」

「(ええ!?そんな、僕は何も言っていないのに!?)」

「(お主は本当にアホじゃな!わしはまだ死にとうないぞ!)」

「(・・・俺もまだ死にたくない!!)」

四人が何かを相談しているが、そんなの知ったことじゃない。

俺にはそれ以上にやるべきことがある。

「さて、優子に事情聴取と行くか。」

俺は絶望の表情のまま相談をしている4人を尻目に、優子のところへ行った。

・・・何考えてやがる。

「おい優子。」

「どうしたの？準備終わった？」

「もう出来たですか？」

優子たちはゲームに飽きたようで、トランプをしていた。

「ああいや、ちょっと優子に用事があったな。」

俺にとっても、優子にとっても重大な用事だ。

「私？」

「ああ。ちょっといいか？」

俺は、海岸のひと目のつかないところに優子連れ出した。

「どうしたの？」

優子は、心当たりがないような素振りで見せてくる。

本当に根も葉もない噂だといいのだが・・・

「実は、話したいことがあってな。」

「な、なんなの？（ノノノ）」

優子が何を勘違いしたのか、少しずつ顔を上気させていく。

・・・なんつーか、話しづらい。

「一つ聞くが、俺を脱がしたという噂は本当か？」

優子の顔が固まった。

「さ、さあ？ナンノコトカシラ??」

勢いよく顔をそらす優子。

・・・黒だ。

「ハア・・・お前、ついに同性愛に目覚めたのか？」

「ち、違うわよ！ただ、観客席から下着がよく見えなかったから純粹な好奇心で・・・って私のバカ!!」

見事に自爆。

・・・ちよーーーーつとオシオキが必要かな。

「・・・」

「ヒッ！ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいイ

「イイイイ!!」

青い顔をしたまま顔をそらし、ひたすら謝罪をする優子。

その顔は恐怖で引きつっていた。

まあそうだろうな。

「で、どうする?」

「ど、どうするって?」

おずおずと俺を見る優子。

俺は一旦息を吸い

「反省の印に、始業式の日に背中に『私は貧乳の痴漢ですごめんなさい』って書いた紙を貼って登校するのと、デコに『私はしてはいけないことをしてしまいましたレズですみません』と書いてある顔アップの写メを、俺が知ってるすべてのアドレスに一斉送信するのとどっちがいい?」

一気にまくし立てた。

「どっちも嫌!!」

優子が顔を引き攣らせたまま首を振る。

「そ、そんなことされたら私の学校でのキャラが崩れちゃうじゃない!絶対む」

「なんだって?」

「ごめんなさい許してください。」

俺の一言で、一瞬で土下座に移行する優子。

「……ここまでさせたら、まあいいか。」

「ったく……今回だけは不問にしてやるから。」

「ほんと!?!」

優子の顔が一気に明るくなる。

「その代わり、二度とするなよ?」

「うん!」

一応釘を指す俺。

・・・甘いか？

「じゃ、あつちにもどるぞ。」

「はい！」

優子は笑顔で答えた。

俺が寝ている間の出来事を整理するとこんな感じだ。

? 優子が俺を仕留める。

? 優子が勢い余って(??)俺の浴衣を脱がす。 問題点1

? その光景をたまたま見ていた明久たち。

? その明久たちに釘を指す。「アンタたち、このことを謙太に言ったら、今の格好の写真を新聞部に売りつけるわ。」

? 明久たちは服従の証に火焚きを命じられる。 問題点2

? 暇になった女性陣はとりあえずゲームを始める。

? 俺が起こされる。

ということらしい。

・・・いろいろ問題があつたが、まあ全てスルーしよう。

結局、バーベキュー自体は何も問題なく終わった。

第二百二十二話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに」

第二百二十三話（前書き）

すみません・・・

これ以上のアイデアがありませんでした・・・

ということ、グダグダですが二話終。

第二百二十三話

「ザザー・・・ザザー・・・」

「大方片付いたな。」

「そうですね。」

俺たちはバーベキューを終え、食休みをしていた。

「プハー！」

「良い食いつぶりじゃったのう。」

明久が、幸せそうな顔で寝ている。

「・・・最近は食事に困ってるわけじゃないよな？」

「なーんか食い足りねえなー・・・」

雄二が、爪楊枝で歯の隙間の何かを取りながら言った。

「そういうば、こいつはもっぱら焼く専門でそこまで食べてなかったっけ？」

「残念だが、もう食材はつきてるぞ。」

俺が肉、野菜などのトレーを指さしながら言った。

「おー、よく見ると結構食ったな。」

「そうか・・・仕方ねえ、現地調達でもすつか。」

雄二はそう言って立ち上がった。

「現地調達・・・なるほど・・・だがパスだな。」

「そういうば、ここ海だったな。」

「ま、俺はもう特に腹が減っているわけじゃないし。」

「そうか、それは残念だ。」

雄二は、さほど残念でもなさそうに首をすくめた。

「そういえば海があるんだもんね。それじゃいこうよ。」
「ああ。」

明久たちがそう言っつて、潮干狩りに洒落込もうとしたとき
「そういえば……」

『……ギクツ!』

姫路が何かを思い出したように行つた。

……最悪の事態を想定し、その場に戦慄が走る。

「私、家でマドレーヌを作つて」

「い、行こう雄二! 貝を探しに!」

「おう、取るぞ明久! この先何も食べられなくなるくらいにな!」

「夜の海は、風情があつて良いしな! ムツツリーニ」

「……貝は好物!」

そう言つて駆け出す男子四人。

「アイツらどうしたのかしら?」

「……知らない。」

美波たちが啞然とする。

当然の反応だ。

「あれ? 謙太はいかないの?」

「俺はいい。」

今日は疲れてるし……今回はかりはパスさせてもらおう。

つてか、姫路がここに来る時、そんなモノは見かけなかったし。

「で、マドレーヌがどうしたの?」

愛子が話を続ける。

「はい。マドレーヌを作つたんですけど、テーブルに置いたまま忘れて来ちゃつたんです。」

「へえ、それは残念でしたね。」

いや、幸運だつたと思う。

「それじゃ、俺たちは先に帰つとこうぜ?」

どうせ時間を忘れて……あと二時間くらいは帰つてこないだろうし。

「そうですね。それじゃ、帰りましょう！」

「そうね。待っておくのも面倒だし、自力で帰ってこれるわよね。」
優希と優子はもうすでに帰り支度を終えていた。

「・・・俺は既に　　というかバーベキューの片付けだけだからとっくに終わっているが。」

「・・・たつたの3〜4キロ。」

「それくらいなら、あいつらは余裕よね。」

霧島、美波ももう終えたようだ。

「それでは帰りましょうか。」

「はい。明久くんたちなら大丈夫でしょうし。」

「そうだよな。ボクはもう疲れちゃったよ。」

姫路たちも片付けを終えたようだ。

「それじゃ、帰ろっか！」

『おー！』

こうして、俺たちは先に帰って家で疲れを癒した。

その後の出来事。

A M 6:00

女性陣+俺が起床

A M 7:00

朝食作り。姫路&玲さんとひと悶着。

ちなみに妥協点はサラダのみ任せるといふ点。

A M 8 : 0 0

明久たち起床。料理完成。

A M 8 : 1 0

朝食。姫路&玲さんが作った特製ドレッシングで俺たちノックアウト寸前。

そのほかはそうとう美味くて少し驚いた。

A M 9 : 0 0

帰宅のため車に乗る。俺たちは後ろで雑魚寝（昏倒）。

P M 3 : 0 0

街に到着。明久宅で解散。

以上で一泊二日のお遊び合宿終了。

第二百二十三話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第二百二十四話（前書き）

目が痛い・・・

ぜってえ花粉飛んでるよ・・・

第二百二十四話

季節の変わり目。

それは多少なりとも何かを感じさせるものだ。

「んー・・・今日から新学期か・・・。」

いつもと同じように目を覚ました俺は、ほのかに香ってくる秋の香りに感慨を覚えつつ伸びをする。

かく言う俺も、あと数十分後に始まる新学期に向けて、ある決意を抱いていた。

「そろそろ男に戻ってやる・・・。」

そう、絶対に男に戻ってやるという、強い決意を。

「謙ちゃん、ご飯できましたよー!!。」

優希が、いつものように俺を起こしに来る。

「おう。いつもありがとな。」

俺は優希に礼を言いながらテーブルにつく。

たまには感謝くらいしとかないな。

「そんなー！これくらいお高いごようです!!。」

「高いのか?。」

優希のわざとしか思えない誤用に突っ込む。

まあ、たしかに毎朝ホテル並み（少し誇張しすぎているか?）の料理を作ってるから、高いと言えば高い気もするが。

「冗談ですよ。それより、今日から学校ですね。」

優希がトースト（自家製）をかじりながら言った。

「そうだな。」

俺はスクランブルエッグを食べる。

美味い。

「まだFクラスは試召戦争は出来ないみたいですし、しばらくは落ち着いた生活を過ごせそうですね。」

「確かにな。」

あと一ヶ月半。

それまで俺たちはあの畳とちゃぶ台で過ごさなければならぬ。買い換えてあるだけマシではあるが。

「御馳走様でした。」

そんな会話しながら朝食を済ませ、久しぶり……三日ぶりに制服に袖を通す。

「制服……久しぶりってわけでもないですよね。」

優希が、本来なら夏休みには縁がないはずの制服を見ながら言った。

「ああ。結構な頻度で補習だったからな。」

俺は補習だったし、優希は学校で自習をしていたし。

……と言っても、エアコン完備の部屋と、扇風機だけの蒸し暑い教室とでは環境に雲泥の差があるが。

「それじゃ、さっさと着替えていきますか。」

「そうだな。」

俺達は短時間で着替えを済ませ、学校へ向かった。

「おーっす、今日もまだまだあつっ」

『おはようございます、優様!』

あ、そういえばこいつらと会うのは久しぶりだったな。

久しぶりに顔を合わせたFクラスの面子を見て思い出した。

何度も脱走を企てようとしたFクラス面子は、全員揃ってごうも

生徒指導室で、鉄人と地獄の補習をしていた。

そして残った俺、姫路、美波、秀吉は、ガランとしたFクラスで各教科の先生から補習を受けていた。

Aクラス設備とFクラス設備の差が雲泥の差だとすると、Aクラス設備と補習室の設備の差は月と鼈だ。

「ってか、俺は優じゃなくてけん」

『優様!』

ダメだ。聞く耳もたねえ。

「あー、めんどくさ。」

俺は説得を止め、いつもの席に座った。

「おはようなのじゃ、謙太。」

「秀吉か。おはよう。」

横の秀吉といつものように挨拶を交わす。

『秀吉と優・・・かなりお似合いのカップルだな。』

『コイツ・・・兄弟共にたぶらかしやがって・・・』

『しかし、今では立派な女子だ。女子に手を挙げるのは男として・・・な?』

Fクラス面子が頭の悪い会話を繰り広げている。

「全く・・・居心地悪いことこのうえないぞい。」

「同感だ。ハアー・・・」

俺は大きなため息を吐き、ちゃぶ台に突っ伏した。

さっきの元気はどこへやら。

気怠いだけの始業式、俺、姫路、美波だけしかやってなかった課題提出などを済ませ、いつのまにやら昼休み。

俺は一人で学園長室へ向かっていた。

「(コンコン)失礼します。」

「・・・来たさね。」

俺が学園長室に入ると、珍しく小言を言わずに招き入れたババア。

「準備は?」

「とつくに済んでるよ。」

ババアは、面倒そうに学園長室の真ん中を指さす。

「召喚フィールドを展開するから、そこに立ちな。」

ババアはそう言ってなにやらパソコンをいじり出した。

「ああ。」

俺は学園長室の真ん中に立つ。

カタカタカタ・・・

「それじゃ、いくよ。」

「・・・いつでも来い。」

俺のその言葉と同時に召喚フィールドが展開された。

そしてそこに・・・

「おうおう、わしは同じ人間に二度とあったことはないのじゃが・・・

・珍しいのう、お嬢ちゃんよ。」

あのおじいさんがいた。

第二百二十四話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第二百二十五話（前書き）

眠さMAX・・・

今回もかなり短めでごめんなさい。

第二百二十五話

「で、なんの用かね？」

秀吉よりも更に年季の入ったジジイ口調で話しかけてくるおじいさん。

「えと・・・俺を男に戻して欲しいんですけど。」

俺は少したじろきながら意思を伝える。

「？何を言っておるのじゃ？」

そのおじいさんは何が言いたいかわからないと行った顔をしてきた。本当に何のことがわからないようだ。

・・・むう。

「驚いた。自分で撒いた種なのかい。」

ババアが意味のわからないことをつぶやいた。

・・・自分で巻いた種？

「・・・おいババア、そろそろ教えるよ。」

俺は、目を丸くしているババアを見る。

「全く、あの様子だとあんたが悪いことは明白なんだけど・・・

この前少し説明したけど、これはこの学園のオカルトさ。」

ババアが肩を竦めながら言う。

「それは聞いた。そうじゃなくてこの存在が一体何なんだと聞いているんだ。」

俺は少し語気を強めていった。

「この学園のオカルトそのもの・・・と言ったらわかるかい？」

「？どういうことだ？」

ババアが何を言っているのかが理解できない。

「つまり、それがこの学園に召喚システムなるものを生み出した元

凶・・・というより救いの神さね。」

ババアがペラペラとまくし立てる。

「へえ、要するに神様ってことか？」

そういうことか。

だとしたら俺の体の変化も分かる。

「そこらの解釈はあんたに任せるよ。自分で巻いた種は自分で回収しな。」

ババアは再びそう言うと、再びパソコンをいじり始めた。

・・・これ以上は干渉しないってことか。

「話は終わったかね？」

ふと気づくと、いつの間にか腰を下ろしていたおじいさんが、ゆっくりと立ち上がった。

「ああ、はい。」

俺は改めておじいさんに向き直る。

・・・見た目は普通なんだけどな・・・

「それで、男に戻せとはどういうことじゃ？」

「ああ、それはですね・・・」

俺が簡潔に説明すると、おじいさんはふむふむと相槌を打ちながら話を聞き

「却下じゃ。」

却下された。

「どうしてですか!？」

戻れないと困るんだけど!!

「どうしても何も、ワシを騙したのじゃろう? 騙した相手に元に戻せとは無理な相談じゃないかね。」

「ッ!? それは・・・」

俺は思わず言葉につまる。

確かに虫が良すぎたよな。

・・・悔しいが、このままの姿でいるしかないみたいだ。

そう考え、謝って戻ろうとした時・・・

「・・・まあじゃが、ワシはおなごには優しくすると決めておるし、チャンスくらいはやってもらいたいぞ?」

おじいさんがそんなことを行った。

「本当ですか!？」

思わぬ提案に、勢い良くお祖父さんに近づく。

「ああ。ワシが出す条件をクリアできれば、男の体にしてやらんでもないぞい。」

おじいさんは人当たりの良さそうな笑顔を浮かべつつ言った。

「条件を教えてください。」

俺は、男に戻る喜びと、条件は何かという不安の両方かられながらお祖父さんに問う。

「何、簡単じゃよ。ただ」

おじいさんは、一瞬不敵な笑みを見せ、その後こう言った。

「ワシに召喚獣で勝てば良い。」

第二百二十五話（後書き）

優希「次回はいよいよバトル展開です！」
謙太「次回をお楽しみに。」

第二百二十六話（前書き）

今回はやっとバトル回です！
思わず筆が進みました。
では、どござ……

第二百二十六話

「その程度でいいんですか？」

あまりに拍子抜けする内容に、思わず聞き返してしまった。召喚バトルならある程度慣れてるし、何より腕輪がある。

「その程度・・・とは、ワシも舐められたものじゃ。」

そう言っつて不敵に笑うおじいさん。

・・・どういう意味だ？

「よく分らないが・・・とりあえず勝てばいいんですよ？だつたら受けます。サモン、シンクロ！」

俺は、約一ヶ月半ぶりに召喚獣を召喚、シンクロする。

召喚獣は変わっていないことに少しホツとしつつ、俺はおじいさんを見る。

・・・先頭準備は整った！

「そつか、では行くぞ。サモン！」

そう言っつておじいさんが召喚獣を召喚する。

お祖父さんの召喚獣は、予想を裏切らないデザインだった。

・・・いや、ある意味では完全に外されたわけだが。

「・・・ゼウス。」

そこには、神々しい光と共にゼウスをもした召喚獣が立っていた。

右手には雷霆・・・雷の弓を持ち、左手には金剛の鎌を持っている。

相手は神々の王かよっ・・・

「よく知っておるな。雷を司る天空神であり、神々の王。お主に勝ち目はあるかな？」

そう言っつてまた笑うおじいさん。

召喚獣自体では大きく劣っているが、肝心の点数が良ければ、あるいは・・・

総合科目 ??? unknown / 15000

「なん・・・だと・・・!?」

点差が倍以上・・・軽く死ねるっ!

「さて、それでは始めようかのう。」

そう言つて雷霆を構えるおじいさん。

・・・とりあえずまずは様子を見ないと・・・

俺は槍を構え、おじいさんに接近

ヒュン!

「うわっ!!」

間一髪のところまで雷帝から放たれた雷を避ける。

・・・容赦ねえ。

「あれをよけるか・・・なかなか楽しめそうじゃな。」

そう言つて、再び雷霆を構える。

打つ前に接近・・・

ヒュン!

「んなつ!! アブねえっ!」

次は溜め動作もなくストレートではなつてきた。

・・・やつぱは接近戦しかねえ!

「うおおっ!!」

俺は地面を蹴つて接近し、槍で袈裟斬りをかける。

「甘い!」

その攻撃は、鎌によつて簡単にいなされてしまつが、俺の目的はそれじゃねえ。

「はっ!」

いつかのヤンキーを打った時と同じ掌底を相手の下腹部に向けて放つ。

硬え、俺の掌が砕けそうだ。

「ぐっ……」

しかし、相手も俺の掌底をもろに受け、一旦後ろに下がる。

そして自分の点数を確かめ

「おおっ……あっはっは、わしにダメージを与えるとは、賞賛に値する！」

ニヤリ……いや、大笑いした。

もうキャラが変わってる……

俺はそんなことを言いながらも点数を確認する。

総合科目 Fクラス 佐藤謙太/5110

総合科目 ??? unknown/13245

……いくら格闘と言っても、全然減ってねえし。

「……やべえ、勝てる気しねえわ……」

敗北を悟った俺は思わず歯ぎしりする。

……さっきの言葉の真意がようやく分かったぜ。

「ほれ、どんどん行くぞ。」

おじいさん……ジジイはそう言って雷霆を構える。

引いてる場合じゃない！

「はぁぁぁっ……！」

俺は再び地面を蹴り、槍を構えたままジジイに特攻する。

ヒュン！

一瞬雷が頬をかすり、激しい痛みが俺を襲うが、その程度・・・なんのことはない！

「喰らえやっ！！」

俺は槍を突くために構える。

「甘いと言つておる！」

そう言ったジジイは再び鎌でいなそうと鎌を斜めに傾ける。

・・・そこが狙い目だ！

「そらっ！」

俺はぶつかる直前で槍をジジイに投げた。

これならタイミングが狂っていなすことは出来ないはず！

「ふん、タイミングをずらしたからといって、この程度当たらんわ
！」

しかしジジイはなんのことなくそれをかわす。

だが問題ない。ジジイが避けたその先には・・・

「貰ったああっ！」

バスターソードで唐竹割りを放つ俺がいた。

その距離わずか三センチ。

「さすがによれんか・・・」

ジジイは避けるのを諦めたようで、腕をクロスして防御する。

「せいっ！」

俺は渾身の力でバスターソードを振り下ろし、地面に叩きつける。
・・・どうだ？

総合科目 Fクラス 佐藤謙太 / 3009

総合科目 ???? unknown / 9880

「・・・マジかよ。」

思わず弱音が漏れてしまう。

掠っただけで二千近く削るなんて・・・化け物か!?

俺の額に嫌な汗が垂れる。

だ、だが、奴にも5000近くのダメージは与えている・・・!!
俺はそう思いジジイを見た。

「・・・」

ジジイは沈黙したまま何も話さない。

・・・不気味だ。

「取り敢えずっ・・・!」

俺は、呆然としているジジイからマウントポジションを取り、顔面を殴りまくる。

30、40、20、60、50と、少ないダメージをコツコツと与えていく。

さすがに顔面は鋼鉄のような固さではなかったが、それでもなかなかの防御力だ。

・・・俺も1〜2点ずつ削られてるはずだな・・・

そんなことを考えながらも手は止めない。

このままなら、押し切れる!

俺がそう思い、パンチを強めたその刹那。

「・・・いてえんだよ小僧」

ジジイの言葉と同時に俺の召喚獣は壁に叩きつけられていた。

一気に1000点近くが削られる。

「がっはっ・・・?!?!?!」

驚きと何が起こったのかわからない不安、そしてフィードバックによるダメージを受けながら、俺はジジイとその召喚獣を見る。

「・・・図に乗ってんじゃねえぞ。」

そこに居たのはジジイではなく、若いホスト風の男だった。

グラスンをかけ、漆黒のスーツ・・・喪服を身にまとったこの男は、おもむろに俺（召喚獣）に近づいて言った。

「ちよつと処理落ちしている間に4000・・・いや、5000か。結構減らしてくれたなあ？」

そう言ったグラスンの足元には・・・

「ハデス・・・」

右手に杖を持ち、左手に隠れ兜・・・アイドス・キュエナーを持つた冥界の神が、俺を睨んでいた。

そして、俺の召喚獣&ハデスの頭上に表示される点数は・・・

総合科目 Fクラス 佐藤謙太/2143

総合科目 ??? unknown/4199

「全く、とんだ性悪餓鬼だ。相手が処理落ちしている間くらい待つこともできねえのか？」

処理落ち・・・ババアのパソコンか。

「・・・勝負に待ったはねえ。」

俺は恐怖にかられながらもせめてもの抵抗を行い、相手を睨みながら言った。

「やはり最近のガキは、口ばかり達者だな。まあ、そんなことは正直どうでもいいんだが・・・」

グラスンは面倒そうに頭を掻き、そして俺を見据えた。

そして

「テメエはうぜえから殺す。」

はつきりとそう言い切りやがった。

「じよ、上等じゃねえか・・・」

俺は本気の恐怖を感じながらも、目一杯虚勢を張った。

・・・ビビったらマジで殺られる・・・

「そうか・・・じゃあ死ぬ。」

その言葉と同時にハデスは俺に向かってきて・・・

シユン

「え・・・」

消えた。

無。

完全なる無。

・・・アイドス・キュエナーの力かつ！

「どこだ・・・」

俺は召喚獣に全神経を集中させる。

「ひゃっはあ！見えねえ恐怖に怯えろ！そして最後には、沈め、消えろ、死ぬ！」

目を真っ赤に充血させたグラサンは、「アヒヤヒヤヒヤヒヤ」などというゲスな笑いを浮かべながら俺を見る。

「・・・やべえ、完全に怒らせたな。」

俺はどこか客観視したような意識でそう言いながら、バスターソードを構える。

・・・さて、どう来る？

俺は五感を研ぎ澄まし、集中する。

タッタッタッタ・・・

「そこだっ！」

俺は、僅かに聞こえた足音を頼りに右後ろを突く。

「・・・上だ小僧。」

その言葉と共に具現化したハデスが、杖の先端を俺に向け落ちてくる。

・・・あの杖、鋼鉄製かよ！

「ちいっ！」

俺は咄嗟にバスターソードを上構え、その段平な刀身を盾換わりにする。

・・・ッ!!なんて衝撃だ!!

俺は背骨が嫌な音を立てる。

「くうううっ!!」

俺は、痛みに耐えながら攻撃に耐える。

こいつを弾けば・・・チャンスが巡ってくる!

しかし、最後には・・・バスターソードが限界を迎えた。

ピキッ・・・

「マズッ!」

俺は咄嗟に身を翻し、バスターソードを置いたままその場から離れる。

「避けたか・・・だが、この刀はもう使い物にはならねえな。」

そう言ったグラスアンが、ハデスを使ってバスターソードを折る。

・・・折られてしまっつては、また手元に戻すことができない。

どうする・・・

俺は点数を見ながら考えを巡らせる。

総合科目 Fクラス 佐藤謙太 / 1440

総合科目 ???? unknown / 3998

「万事休すつてとこだな。それじゃあ、大人しく死ね。」

そう言つて鋼鉄製の鎌を振り上げるグラスアン。

追い詰められた・・・。

「もう動けないか。まるで蛇に睨まれたカエルだなあ？」
いや、強いて言うなら猫に捕まったネズミか。

そんなどうでもいいことを言いながら、グラサンは俺を突こうとしてくる。

ネズミ、か・・・

俺がもしネズミなら・・・窮鼠、猫を噛んでやるっ！

俺は、ダメ元で手元にあった槍を突いた。

ヒュン！

「んなっ・・・」

俺がついた槍が、偶然相手の喉を突いた。

・・・実は、召喚獣は弱点を突かれると、その時点で消滅してしまう。

シューウウウ・・・

相手の召喚獣が消滅していく。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ・・・」

俺は何が起こったか分からないまま、その場に倒れ付した。

第二百二十六話（後書き）

謙太「……………一体何が？……………まあいい。次回をお楽しみに。」

第二百二十七話（前書き）

今回はなんと！

ババア目線で始まります・・・

見たくない方は飛ばして結構ですが・・・

全体的に気持ちの悪い出来になっているのであしからず。

・・・まあなんにせよ、一先ず女性編は終わりということぞ。

第二百二十七話

藤堂カヲル目線

私は目の前で起こっている事象に少しばかり興味を抱きながら、パソコンを操作していた。

・・・結論から言えば、あのガキ・・・佐藤はこの学校の主に勝った。

とはいっても、主とえば聞こえはいいが、奴は只の亡霊。

ただ少し『神に魅入られた』だけで、奴自身は神の力というものは全く使えない。

強いて言えば・・・奴の召喚獣、もしくはその点数に少しと、奴が存在していることに少しだけ、神の恩恵が入っているとは言えなくもないが・・・

「しかし、それでも三倍以上点差のある化け物に勝つとはねえ・・・」

あのガキの潜在能力には驚いた。

あの土壇場で奴の首に槍を刺すなんて芸当は、そんじょそこらのガキではまずもって不可能。

更にいえば、フィードバックで既に意識が飛んでいてもおかしくないほどダメージを受けていた。

あの状態から召喚獣を操作できたのは、それこそ神の力って奴なのかもしれない。

「忌々しい餓鬼が・・・消すか。」

そう言った奴は、寝ている佐藤に近づき、止めを刺そうとした。

「やめときな。見苦しいったらありゃしないよ。サモン。」

私は奴にそう言い、召喚獣を出した。

「・・・チツ」

奴は舌打ちをして、佐藤の背中に手をやった。

「ったく、いちいち面倒なことをさせる・・・」

奴がそう言つと、佐藤の背中に幾何学模様が現れた。

「こいつを女にしたのもアンタでしょうが。いくら遊びだったからとはいえ、後片付けができないようじゃあまだまださ。」

私はそう言つと、パソコンにいくつかの数式を打ち込んだ。

すると、佐藤の背中に現れた幾何学模様が佐藤に吸い込まれ、そして消滅した。

・・・一先ず、これで終了さね。

「ご苦労さん。これに懲りて反省することさね。」

私がenterを押すと、特別性フィールドが消滅し、奴も元の・

・ジジイ姿へと戻った。

「ふう・・・それじゃ、後始末は頼んだぞい。」

そう言つて立ち去る奴。

・・・これで一仕事片付いたし、そろそろ行くとするさね。

私は佐藤へ書き置きを残し、午後から予定されていた召喚システムに関する企画会議へと向かった。

謙太目線

「イタタ・・・」

体中の激痛によって無理やり起こされた俺。

「ひどい目にあつた・・・」

さつき起こつたおぞましい体験に身震いしながら、俺は状況を確認した。

倒れていたのは学園長室の床・・・つまり俺はあのあと放って置かれたということ。

時刻は3:00・・・かれこれ1〜2時間ほど寝ていたということになる。まあ、バトルの時間を考えると1時間ってところだろう。

そして体は

「・・・女のままかよッッッ！」

何も変わっていなかった。

・・・騙されたっ！！

「あんのババア・・・」

俺は怒りに体を打ち震わせながら立ち上がった。

・・・外傷はないようだ。

「帰ってきたら事情聴取だ　ってん？」

俺の目に床に落ちていた・・・というよりは置いてあった紙に目が止まった。

・・・書き置きか？

俺はそれを拾い上げ、文面を読んだ。

『済まないね。色々私に聞きたいことがあると思うが、出張で出ている。本当はきちんと説明する義務があると思うけど、居ないものはしょうがないから現状だけを手短かに書く。まず、今回はとりあえずアンタの勝ちさ。そして彼奴はアンタの体を元に戻した。まあ、アンタが起きたときにはまだ戻ってないと思うけど、夜ぐっすりと寝ればもどるはずさ。午後の授業については問題ない。私が連絡を入れておいた。そのほかのことは、後日私のところにくれば説明する。・・・以上さ。』

手紙は、ババアらしいと言えばババアらしい簡潔な物で、内容はほんの少しの事実だけだった。

・・・まあ、俺の怒りを収めるのには役立ったから良しとしよう。

「一晩・・・か。」

俺は自分の体をちらつと見て、大きなため息を吐いた。

一晩も待ちたくねえよ・・・

「まあ・・・いいか。」

さっさと帰れば治るんだし。

俺は一人で自己完結し、学園長室を後にした。

書き置きの裏

『PS：アンタには期待してる。この学園を頼むよ。』

第二百二十七話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第二百二十八話

「はぁ・・・疲れた・・・」

体中の痛みには耐えながら午後の授業をこなした俺は、そのままちゃぶ台に突っ伏した。

あ、昼飯まだだ。

・・・さっさと帰りたい。

「なかなか大変だったようじゃのう。」

横の秀吉が教科書・・・否、演劇の台本を片付けながら話しかけてくる。

・・・そんなの読んでるからFクラスなんだ。

「体もまだ戻ってないのにこの状態だからな。・・・辛い。」

俺は大きなため息を吐く。

「そういえば、まだ体が戻らないんだね。」

「ああ。まあ明日にはもどるんだけどな・・・」

俺と明久がそんな会話をしながらふとまわりをみると、Fクラスのメンツの顔が揃って絶望に変わっていた。

「そんな！優さんはもういなくなってしまうのか！！」

「そんなことになったら、このクラスの女子が三人になってしまう！！」

「なんだと！？それだけは避けたい！」

少しずつガヤガヤとします教室。

そんな中でいつものメンバーは・・・

「何を言ってるんだ皆！女子は秀吉と姫路さんの二人だけで美波！？」

明久がなんだか見当違いなことを言っていて、

「アキ？・・・ちよつといいかしら？」

「ギヤアアアア！」

美波はいつものように明久に関節を決めていて、

「・・・！（カシヤカシヤ！！）」

ムツツリはいつものように低い目線からシャッターを切っていて、

「明久君、私は女の子としてみてくれてるんですね・・・（ポツ）」
姫路は明久が行ったことで頬を赤らめていて、

「ワシは男じゃと言っておるじゃろう。まあ悪い気はせぬが・・・」
秀吉はなんだか矛盾したことを口走っていて、

「ZZZ・・・ん？なんだ、また明久は何かやらかしたのか。」

雄二は明久が痛めつけられているのを嬉しそうに見ていて、
そして俺は・・・

「ああ・・・。これでこそ学校、これでこそFクラスだよな。」

新学期が始まったことに感慨を抱いていた。

やっぱ学校はこうでないと。

「ったく、本当に飽きさせないクラスだよ！」

俺はそう言っただけで明久たちに加わった。

今学期もまた、みんなで馬鹿やりたいな！

下校時刻。

「で、ムツツリー二君の背におぶられてるってわけなんだね？」

俺は、ムツツリー二におぶられながら愛子、優子と帰っていた。

「お馬鹿だねー！無理して動いたせいで全身筋肉痛なんて。」

俺の状況を理解した愛子が、ころころと笑ってくる。

・・・言い返せない。

「・・・」

「そういえば、なんでムツツ・・・土屋君なの？」

優子が？マークを浮かべる。

・・・まあ当然だな。

「ああいや、前にムツツリをおぶって帰ったことがあったからさ。」

今日はその反対って感じで。」

というのは建前で、明久、雄二が共に諸事情で帰ることが出来なかったからだ。

「……諸事情というのはご想像に任せる。」

「……いい加減、その呼び方はやめて欲しい。」

「あつはつは。それは遠慮しとく。……そういえば前の時も愛子に会ったよな。」

ムツツリの苦情を聞き流しながら、俺は前……一学期のことを思い出していた。

「そうだったねー。その時はムツツリー二君が貧血で倒れてたんだっけ?」

「……忘れた。」

他愛もない昔話に花を咲かせながら帰る俺たち。

平和だ……

「おっ!」

俺がそう考えたとたん、何かを思い出したような顔で俺を見た。

嫌な予感……

「……どうした?」

「そういえば、あの時謙太くんは嬉しいことを言ってくれたよね?」

ダラダラ……

何か恥ずかしい過去が暴かれようとしているっ!!

「嬉しいこと?」

なぜか優子が聞き返す。

「止める!別に言わなくて……もごっ!」

俺が静止しようとしたところで、誰かから口を塞がれた

「……興味がある」

「……ホゴゴoooooooooooo!!(ヤメoooooooooooo!!)」
むつつりイイイイイ!?

「えっと確か……スタイルがいいとか、可愛いとかだったよね

「？」

「……」

俺は顔を真つ赤にして押し黙る。

「……言つたよ、言つたけど……!!」

「……(ノノノ)」

「まああの時は、僕もちよつと謙太くんになびいていたからねー。」

「!? 愛子、それホント!?」

顔を真つ赤にする優子の横で、愛子は続ける。

「……拷問だろこれ！」

「あはは！まあ、今は違うけどねー。」

そう言つてムツツリを見る。

「……反抗してやろうか。」

「へえー? じゃあ今の本命つて誰よ?」

「ふえ? ああ、えつと……」

愛子が一瞬たじろく。

「……この隙に。」

「むつつり?」

「え? あ、まあ……つてあつ!!」

頭を使つている間にムツツリの名前を言つと、愛子は肯定した。

「……ムツツリここにゐるのに。」

「……俺はなんと返事したらいい?」

「はわつ!! い、いや今のは間違い……」

愛子はそう言いかけ、ニヤけながら愛子を見る二つの目線に気づいた。

愛子、いいチャンスじゃねえの?

「くうつ……僕はそんな純愛型じゃないんだけど……」

「……? 何を言つている?」

顔を真つ赤にする愛子に、ただ一人何が言いたいかわからないといったムツツリが尋ねる。

普通ならもう気づくと思うが……むつつりつて、もしかして明久

型？

「愛子、ほら！」

優子に促され、渋谷前に出る愛子。

「あ、あのさ、ムッツリー二君……」

「……」

いきなり改まる愛子に、ムッツリが顔を硬直させる。

いい雰囲気になってきた。

「（優子！）」

「（わかってるわよ！）」

俺達は、二人からこっそり離れ、様子を見守ることにした。

さて、どう出る？

「僕、ムッツリー二君のことがす……」

「……す？」

「好きなのっ！！」

ついに自分の気持ちを言葉にした愛子。

「……!？」

そんな愛子の言葉に驚きを隠せないムッツリ。

「エロい話とか、そうじゃない話……はあんまりしないけど。とにかく気が合うし、優しいし、そんなムッツリー二君が大好きなのっ！！」

顔を真っ赤にしながら続ける愛子。

「……」

黙って愛子の言葉を聞くムッツリ。

「だから、ちょっとちよっかいを出しちゃったりもしちゃっけど……それも許してくれるし、もう私にはむっつりに君以外いないのっ！！」

自分の気持ちをこれでもかと伝える愛子。

いつもは飄々としている愛子が自分の気持ちを伝える姿を見て、思わず惚れてしまいそうになる。

・・・可愛い。

「・・・愛子。」

そのとき、おそろく俺と同じ気持ちだったであろうムツツリが愛子を抱きよせ・・・

「だから・・・ふえ？」

CHU?

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

キスをした。

「・・・おめでとう、でいいのよね？」

「・・・おそろく。」

余りにも素早い動きで一瞬驚いたが、まあキスしたのは確かだ。

・・・こうして、またひとつカップルが成立した。

第三百二十八話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに！」

第三百二十九話 お料理対決 前編（前書き）

やっとDVD特典後半ができます・・・

第二百二十九話 お料理対決 前編

その後、いい感じのムッツリたちを置いて、優子に肩を借りながら帰った俺。

そしてさあ寝ようというときに、事件は起きた。

ヴー、ヴー、

「メール？誰から・・・」

特に疑問も持たずにメールを確認する。

ちなみにメールの宛名は美波。

「・・・」

メールを見た途端、俺の眠気が一気に覚めた。

そのメールの内容とは・・・

今週末に女子の料理対決やるから、審査員よろしく〜

美波

「え・・・なにこれ、死亡フラグ？」

思わずそうつぶやいてしまう。

・・・嫌がらせか露骨な死亡フラグだろ、これ。

「ただいまです〜。・・・謙ちゃん、どうしたですか？」

優希が帰ってきて俺の部屋に来た。

優希が心配しているところを見ると、恐らく俺は悲痛の面持ちをしているのだろう。

「・・・優希、今まで世話になった。」

「本当にどうしたのですか!？」

ああ、これじゃあ自らフラグ建設しているようなもんだ・・・

「今日はとりあえず寝るよ・・・お休み。」

「そうですね・・・。おやすみなさい。」

なんかグダグダのまま俺は眠りについた。

朝

「治ったああああああ！！！」

昨日とは打って変わって、俺は朝からテンション最高だった。

「おはようございます。どうしたのですか？」

いきなり大声を出した俺を心配したのか、エプロン姿のまま部屋に入ってくる優希。

「おはよう！ やつと体がもとに戻ったんだよ！！！」

優希にVサインをする俺。

いやー、なんと清々しい朝だろう！

「そうですか！ それは良かったですねッ！」

優希がニコニコしながら俺に抱きついてくる。

こんなに喜んでくれるとは、かわいいやつだ。

「これでやっと、謙ちゃんと愛を育むことができますね！」

・・・前言撤回。

恐ろしいやつだ。

「いや、愛は育まないから。」

「ええ〜・・・それは残念です。」

俺が冷静にツッコミを入れると、優希はつまらないといったようにそっぽをむいた。

・・・従姉弟同志って、基本結婚しないからな？

「この高いテンションだったら許してくれると思ったのですが・・・

」

なんて策士だ・・・

「まあ、とりあえずはおめでたいですね！」

「ああ。ありがとな！」

俺は優希に礼を言って部屋から出したあと、制服に袖を通した。

これだよコレ!!

「料理、もう出来てますよ。」

優希がそういい、俺はリビングに出た。

「いただきます。」

こうして、もとに戻った俺の一日が始まった。

そして週末。

元の体に戻ってから一番最初の関門がやってきた。

キッチンの前に並んだ6人の女子。(優子、優希、姫路、美波、愛子、霧島)

それに対するように立つ5人の男子。

「・・・メンバーは揃った。」

霧島が、俺たちを確認しながら言う。

ここは霧島宅。

そして今から行われるのが・・・

『第一回 料理王は誰だ!!乙女の料理バトル(仮)』
である。

「それでは、始めましょうか!」

姫路がエプロンをつけたまま張り切っていった。

「・・・俺たちは何をすればいいんだ?」

手持ち無沙汰な俺たちがすることを聞いていない。

「えーっと・・・とりあえず男子は勉強でもしてて。」

優子が適当に言う。

「……………」

適当すぎるだろ・・・

こうして、俺達は死への道を踏み出した。

第三百二十九話 お料理対決 前編（後書き）

謙太「次回をお楽しみに」

第三百三十話 お料理対決 後編

「なあ、ひとつ質問があるんだが・・・」
俺は、知らされていなかった中で最も重要なことだけを優子に尋ねた。

・・・せめてメニューくらいは知っておかないとな・・・
「何？料理のメニュー以外の質問なら受け付けるわよ？」
「そこが知りたいんだけどーっ！！」

畜生！これじゃあ全く対策が打てねえじゃねえか！

「大丈夫よ。私もだいぶ料理は上手くなったから。」

優子が、手をヒラヒラとさせながらキッチンへと向かった。

・・・俺が憂慮しているのは優子の料理の腕前じゃねえんだよっ！！

「謙ちゃん！大人しく男の子がいる部屋に戻ってください！」

優希が、俺の背中を押してキッチンのある部屋から出した。

あーあ・・・

俺は、重い足取りで明久たちのところへ向かった。

ガラッ！

「はあ、やっぱりダメ・・・」

俺はため息をついて部屋に入ろうとしたが、ドアを開けたところで足が止まった。

「・・・あ・・・」「・・・」

部屋にいた四人も同じように固まる。

「・・・おい、何やってるんだ？」

思わずそんなアホな言葉が漏れてしまう。

・・・見れば分かるのに。

「あ、いや・・・これはだな・・・」

最も困った表情の雄二が、なんとかといった感じで言葉を吐く。

ほかの三人は固まったまま動かない。

俺は、そんな三人に呆れながらこういった。

「・・・何で皆倒れてるの?」

明久目線。

ことは十五分前にさかのぼる。

僕たちは、謙太が女子の皆と交渉しているときに、先にこの部屋に戻ってきていた。

「さすがに・・・今回はまずいかもな。」

雄二が、苦い顔でそんなことをつぶやく。

「うむ。審査員と言われたからには、ワシらも逃げられぬのじゃろうな。」

秀吉も、同じように苦い顔をしている。

「・・・絶望的。」

ムツリーニも・・・というか、この部屋自体が暗い雰囲気だった。

「・・・はあ・・・」「」「」

僕たちは一様に溜め息をつく。

どうしよう・・・

「しかし・・・こつ雰囲気が悪いと、更に体に悪いんじゃないか。」

雄二が、何かを考えながら言った。

「ああ、それって小学生とかが学校に行きたくないとお腹が痛くなるとかいうやつだね。」

僕も経験があるからよくわかる。

「そうじゃな。それでは気晴らしにしりとりでもやらぬか?」

秀吉がそんなことを言った。

「・・・いい考え。」

「そうだね。少しでも体の負担を減らさないかね。」

僕たちは一も二もなく賛成した。

・・・気晴らしがないと鬱になりそうだったし。

「そうだな。長くなると困るし、三秒ルールな。それじゃ・・・」
「待つんじゃない。」

雄二が最初の言葉を言おうとするのを、秀吉が遮った。

「どうした？」

「どうせなら、ただのしりとりではなく、罰ゲーム付きにでもせぬか？」

秀吉がなかなか粹な提案をしてきた。

そっちの方が熱中できるかもね。

「・・・そうだな。じゃあ、負けたやつは今回の料理を食う量増やそうぜ。」

「」「」「」「」

雄二の一言で、一気に周りが凍りついた。

・・・この勝負、負けられない！

「そ、それではワシから・・・しりとり」

こうして、秀吉から、死のゲームが始まった

「・・・りんご。」

「い、いりら。」

「ラッパ」

・

・

・

十分後

「・・・マヨネーズ」

「ず？ず・・・ズッキーニ！」

「アウトだ、明久。」

雄二が、僕にアウトを指摘する。

「いや、それを言うならさっきの秀吉もアウトだったね。」

僕は、さっきあえて見逃した秀吉の間違いを指摘する。
フッフッフ・・・これを見越していたんだよ！

「何を言うか明久よ！アレはぎりぎりセーフじゃろっ！アウトなのはムツツリー二じゃ！」

秀吉がムツツリー二に責任転嫁し、

「・・・！？・・・アウトは雄二。」

ムツツリー二は雄二に責任転嫁する。

「んだとムツツリー二！？」

ああ、やばい・・・

喧嘩になりそうだ。

「まあまあみんな、落ち着いて」

「・・・じゃあお前が食うか？」

「秀吉。アウトだよ！」

ごめん秀吉、やっぱり自分が可愛いんだよ。

「何を言うか明久よ！」

「いや、アウトだったね！」

珍しく意見が対立する僕たち。

「それじゃあいつそのこと・・・」

「拳で決める！！」「」「」

こうして、僕たちは五分くらい殴り合ったのであった。

「へえ・・・」

雄二からの説明を聞き、俺は一言、

「アホだな。」

それだけを言った。

「あ、アホだなんて・・・」

「この後の生命がかかっておったのじゃぞ・・・」

「・・・無念！」

三人が、フルフルと震えながら首を振る。

なんだかなあ・・・

「どうせ死ぬんだ、腹くくつとけ。」

「・・・なにげにひどいこと言うよね。」

けどそうだよね・・・

と肩を落とす明久。

・・・しょうがない。これが運命なんだ。

第三百三十話 お料理対決 後編（後書き）

謙太「次回をお楽しみに」

第三百三十一話 お料理コンテスト 大死食会？（前書き）

昨日はすみませんでした・・・
所要が重なって報告もできずじまいでした・・・
反省します。

第三百三十一話 お料理コンテスト 大死食会？

三十分後・・・

「皆さん、できましたよ」

優希が、俺たちを地獄に誘う言葉を放った。

「あ、ああ・・・」

俺達は、必死で作り笑いをしながらダイニングへ向かった。

「ここで待っていてください。」

そう言っけてキッチンの方に駆けていく優希。

「・・・い、いよいよだな・・・」

「・・・(ゴクリ)」

俺の言葉で、みんなが息を呑む。

「気を抜くな！少しでも気を抜いたら、即座にノックアウトだぞ！」

「・・・おお！」「」

雄二が激を飛ばす。

「僕たちの目的は・・・」

「・・・生存っ！！」「」

みんなで力強く頷き合う。

「皆で一連托生じゃ。」

「・・・絶対生き残る！」

それぞれが決意を口にし、自ずと緊張感が高まる。

「そんじゃ行くぞ！」

「・・・おおー！！」「」

こうして、俺たちの大死食会が始まった。

「まずは前菜ですよ」

そう言っけて優希がもってきたのは、サーモンのカルパッチョ。

・・・こいつは普通にうまそうだ。

「「「「「いただきます。」」」」」

五人で取り皿に取り、手を合わせる。

「・・・」

俺は、慎重にカルパッチョを口に運んだ。

・・・

「美味い！」

脂ののつたサーモンと、バルサミコ酢の酸味がほどよく混ぜり合って美味い。

「ああ。これは美味い。」

「本当に美味しいよ！」

「これならいくらでもいけるのうー！」

「・・・満足。」

他の四人も絶賛する。

「そ、そう？」

少し照れながら出てきたのは美波。

なるほど、美波は料理がうまそうだし、これは文句なしだ。

・・・つてか、しょっぱなから姫路とかじゃなくて本当に良かった。

「美波、美味しいよ！」

明久が美波に感想を伝える。

「そ、そっか。よかつた・・・」

美波が胸をなで下ろす。

・・・まあ胸はないんだけど。

「・・・謙太、今失礼なこと考えなかった？？」

「め、メツソウモゴザイマセンヨ・・・」

クソっ・・・エスパークか？！

「まあ、美味しいなら良かったわ。」

そう言っ去っていく美波。

・・・一人目クリア。

「次はスープですよ！」

そう言った優希が持ってきたのはポトフ。

これは恐らく優希だな。

「というか、一人一品づつのフルコースにしたのか？」

前菜、スープときたら、もうこれはフルコースしかないだろう。

「え？あ、はい。人数が少ないので簡略版ではありますが。」

優希がそう言いながら俺たちにスープを配る。

これも美味そうだ。

「……」いただきます。「……」

今回は、特に緊張せずにスープをすする。

……ん？

「どうしたんですか？」

「あ、えーっと……美味いんだけど、ちょっと味が薄いような……」

「……」

何というか……水っぽい。

「そうですか。……だそうですよ、愛子ちゃん。」

「そっか……残念だな。」

俺のコメントを聞いて、少し残念そうな愛子が出てきた。

あちゃー……優希と思って辛口コメントしちゃったよ。

「まあ、美味いけどな。」

俺はバツが悪くなり、思わず頭を掻く。

……まずったなー。

「あ、ありがとう。……ムツリ二君、どうかな？」

愛子が、珍しく弱気のままムツリに尋ねる。

「……美味しい。」

ムツリは、相変わらず無口だったがそれでも愛子を褒める。

……いい感じ。

「そっか！よかった。」

愛子は、ホッと息をついてその場にへたり込んだ。

「・・・愛子？」

ムツリが愛子を心配する。

「・・・こいつら、結構派手な愛情表現だよなー・・・」

「ああいや、初めてこんな料理作ったから、緊張してて・・・」

愛子は、バツが悪そうに笑った。

ま、こんなのも悪くないか。

「次は魚料理ですよ。」

優希が、少しウキウキしながら持ってくる。

「・・・恐らくこれが、優希の料理だな？」

皿に乗っていたのは、スズキのグリル、上にハーブのソースが乗っている。

いつも以上にこだわってるな・・・

「・・・」「・・・」

優希の料理を見たことがない四人が、その料理を見て啞然としてい

る。

「ちよつと頑張っちゃいました」

優希がそう言ってみんなの前に皿をおく。

「・・・っつーか、スズキなんて高級魚、どこにあったんだ？」

「・・・たまたま冷蔵庫に入ってた。」

気配もなく現れた霧島が言った。

「・・・たまたまスズキが冷蔵庫に入ってるなんて、さすがは金持ちだ。

「さあ、早く食べてくだ」

「・・・」「いただきます！」「・・・」

優希が言うやいなや、俺達は勢い良く食べ始めた。

・・・まあ当然か。

「う、美味いつ!!」

「今まで食べた料理の中で最高だよ!」

「明久が食べた料理など、たかが知れておる気がするが、そんなこととは今はどうでもいいぞい!」

三人が、すごい勢いで食べ進めていく。

「あれ?ムツツリは冷静だな。」

「・・・さっきの料理もうまかった。」

「ああ、そうか。」

愛、だねえ・・・

「謙ちゃん、どうですか?」

「ああ、言わなくてもわかるくらい美味しい。」

「そうですか!良かったです。」

俺がそう言うと、優希は意気揚々と戻っていった。

・・・後三品。

第三百三十一話 お料理コンテスト 大死食会？（後書き）

謙太「次回は死ぬな・・・次回をお楽しみに。」

第三百三十一話 お料理コンテスト 大死食会？（前書き）

眠いです・・・

何か最近疲れがたまってやたらと眠い・・・

あ、ちなみに、今日はまだ姫路の料理は食べませんのであしからず。

第三百一十一話 お料理コンテスト 大死食会？

「次は食休みのデザートですよ。」

優希がそう言って持ってきたのは、メロンシャーベット。

あー、この感じは・・・

「優子だな。」

・・・見ればわかるんだけど。

「「「「「いただきます。」」」」」

デザートまで手を合わせるのかは疑問だが、とりあえず手を合わせ
て一口。

「美味しいね。」

明久が満足そうな顔で言う。

「おお、姉上も腕を上げたのう。」

秀吉が、驚いたように声を上げた。

「・・・美味しい。」

相変わらず無口ながらも褒めるムツツリ。

「へー、木下姉は本当に万能なんだな。・・・美味しい。」

雄二が、改めて優子に感心しながらアイスを口に運ぶ。

優子が褒められるのをみてたら、こっちまで嬉しくなるな。

・・・それにしても美味しい。

優希達を作った料理と遜色ない・・・というのは言い過ぎかもしれ
ないが、それでも十分美味しい。

うーん・・・比べるなら、少なくとも今まで食べたアイスで一番う
まい。

・・・ムツツリの気持ちがよく分かる。

「ど、どうかな・・・？」

いつの間にか出現していた優子が、おずおずと聞きに来る。

「美味しい。」

「そ、そっか。それは良かったわ。」

優子が陰に隠れ小さくガッツポーズした。

・・・可愛い。

「ん？な、なによ??」

優子が、俺の顔をのぞき込んで来た。

「ああいや、なんでもない。」

顔をのぞき込んで来た優子と目が合い、思わず目をそらす。

・・・ち、近い・・・

「それじゃ、今度は謙太に料理を作ってもらおうかな?」

優子が、なんの脈絡もない言葉を吐き出した。

え?

「俺は料理できないからな?」

「吉井君にでも教えてもらえばいいじゃない。」

一応優子に俺が料理ができないことを伝えるが、一蹴される。

「・・・まあ、そうだな。」

料理はできたほうがいいから、この機会に明久に教わるのも悪くはないか。

「それじゃ、頑張ってるね。」

優子は、そう言ってキッチンに引っ込んだ。

「次は肉料理で〜す!」

相変わらず上機嫌な優希が次にもってきたのは・・・フォアグラ!?

「……………」

余りの豪勢さ&クオリティに目を丸くする俺たち。

確実に霧島が作ったということは分かるが、それでもまさかフォア

グラが出るとは・・・

「・・・今日はちよつと頑張った。」

少し顔を赤くした霧島が、雄二の隣に現れた。

「いただきまーす」

思わぬ高級料理にビビりながら、おずおずと一口。

「普通に美味しい・・・」

食材が食材なら、料理人も料理人だ。

普通に優希と張り合ってるんじゃないか？

「雄二、こんな美味しい料理を作れる嫁がいて、幸せだな。」

「なっ・・・馬鹿なことを言うな！」

俺が雄二を茶化すと、雄二は顔を真っ赤にしてそっぽをむいた。
素直じゃない奴だ。

「ふぐっ！み、水・・・」

「あ、明久よ！そんなに詰め込んで死んでしまうぞい！」

「・・・しかし、確かに美味しい。」

残りの3人は、相変わらずアホな行動を続けているが・・・まあそれだけ美味しいということだ。

「・・・喜んでくれて、嬉しい。」

皆の反応に満足したのか、霧島が笑みを浮かべる。

ふう、次はいよいよ・・・

「地獄、だな。」

俺は大きく息をのんだ。

第三百三十一話 お料理コンテスト 大死食会？（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第三百三十一話 お料理コンテスト 大死食会？（前書き）

これで終わりです。
・・・グツダグダ。

第三百一十一話 お料理コンテスト 大死食会？

「最後はデザートですよ」
優希が持つてきたのは恐らく蜜柑ゼリーのようなもの。

「……ついに来たっ！！」

「……………」

沈黙する俺たち。

いや、まだ死にたくないんだけど……

「ま、まだ死にたくは無いぞ……（フルフル）」

秀吉に至っては顔を真っ青にしてフルフルと首を振って否定を表している。

その目に涙が浮かんでいる涙は、おそらく見間違いではないだろう。

「どうぞ」

しかし、なにも知らない優希が、俺たちの前に皿を並べる。

「あ、ああ……」

「い、いただきます。」

それを雄二と明久が最初に受け取り、とりあえず毒味でひとくバタッ！

「……え？」

口に入れようとした瞬間、二人は意識を失ったように机に突っ伏した。

「……ゼリーの臭いだけで！？」

「ど、どうしたのですか？」

影から様子を見守っていたらしい姫路が、心配そうに明久に駆け寄る。

「あ、ああ姫路さん……」

目を虚ろにさせた明久が、力なく答える。

「あの、明久君。もしかして、私の料理が食べたくないのですか……？」

涙混じりの姫路の声。

・・・申し訳なきで一杯になる。

「い、いや、そんなことないんだよ。ただ、今までいっぱい食べたから、少しお腹いっぱいになっちゃって・・・」

明久がうつろな目のまま答える。

上手いよけ方だが、その程度で避けきれるはずがないだろう・・・
「そうですか・・・。けど、そうなるだろうと思って、食べやすいように色々と入れてみたんですよ？」

そう言つて、明久が取り落としたスプーンを明久に近づける。

「はい、あ〜ん？」

姫路が満面の笑みでゼリーを明久の口で運ぶ。

傍から見てればとても妬ま　微笑ましい光景だ。

・・・姫路がもっているゼリーが殺人兵器でなければな。

「あ、あーん・・・」

渋々口を開ける明久。

パクツ（料理を食べる音）

ドン！（机に倒れる音）

ビクビク・・・（痙攣を起こしている音）

・・・一つの儂き命がちった。

「あ、明久君？」

急いで明久に駆け寄り寄る姫路。

・・・もう手遅れだ。

「あの、あ、明久君？」

「・・・（ビクビク）」

意識不明のまま痙攣を起こす明久。

・・・このままだとマジでマズイな。

「秀吉、救急車！」

俺は、さっきまで恐怖で震えていた秀吉に指示を出す。

「もう手配しておる！」

食べなくてよかったのがよほど嬉しかったのか、秀吉は嬉々として
てきぱきと作業をする、

「ムツツリーニ、AEDはあるか？」

「・・・当然。」

そう言っつてムツツリーニが取り出したのは紛れも無くAED。

「・・・どこで手に入れたんだよ。」

「それじゃ、さっさとセットしろ！他には」

「謙太君！」

俺の言葉を遮って俺を呼んだ姫路が、悲痛な面持ちのまま俺たちの
ところへ来る。

「どうした？」

「明久君が倒れたのは、私の料理が原因でしょうか・・・」

姫路がとても申し訳なさそうな顔をしていて、下手したら泣き出し
そうだ。

「あ・・・」

俺は一瞬反応に困ったが、笑顔でこう言った。

「多分食いすぎだろう。」

「・・・騙されてくれっ！」

「そ、そうですね。それなら良かったです・・・」

納得はしてないようだったが、とりあえず信じてくれてよかった・・・

「心配するな！大事に至ることは・・・ないと思うし。」

俺は努めて明るく振舞った。

「・・・姫路はまだ、自分の料理の威力を知ってはいけないからな。

「そうですね・・・それなら良かったですけど・・・」

姫路は依然明久から目を離さない。

その周りでは、美波が明久の手を握っており、秀吉とムツツリがA

EDで蘇生をしている。

・・・助かりやいいけど。

「早く治って欲しいなら、美波みたいに寄り添っておいてやればいいんじゃないか？」

「えっ?!み、美波ちゃん！」

姫路は今気づいたかのような素っ頓狂な声をだし、慌てて明久の隣に行った。

・・・ふう。

明久は、病院に行く前になんとか助かって、家に帰る俺たち。

「・・・明久君が倒れちゃって残念です。」

姫路が残念そうに言う。

・・・お前のせいだけだな。

「まあ、しょうがないだろう。」

俺はそう言っつて、姫路を慰めた。

「・・・最後に入れた硫酸がまずかったのでしょうか？」

・・・食わなくてよかった。

「では、このへんで。」

「ああ。またな。」

そう言っつて姫路と別れた。

・・・ハア。

「・・・明久大丈夫か？」

俺は、姫路の想い人を心配せずにはいられなかった。

第三百三十一話 お料理コンテスト 大死食会？（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第三百三十二話 王様ゲームその1（前書き）

昨日はすみませんでした！

実は機能犬に指を噛まれて、病院行ったら包帯をグルグル巻きにされて小説かけませんでした・・・
本当にすみませんでした！

・・・まあ、今も腫れてるんですけどね。

第三百三十二話 王様ゲームその1

ある日のFクラス教室。

『・・・』

放課後、例のお料理対決と同じ十一人で、一つのテーブルを囲っていた。

何をしているのかというと・・・

「・・・王様ゲーム!!」

『イエーイ!!』

また馬鹿なことをやっていた。

・・・青春ってやつか。

「明久、ルールの説明を頼む!」

「OK!」

雄二に話を振られた明久が、ルール説明を始める。

「また馬鹿なことをやるのね・・・」

優子が呆れたようにため息をつく。

まあ、本来ならこんなことに参加するようなタイプじゃないからな。

「いいじゃねえか。面白えし。」

「そうですね、楽しまないとです!」

俺と優希は優子にそう言い、机に向き直った。

「それじゃ始めるぞ!」

雄二の鬼気迫る表情に、一同が息を呑む。

つてか雄二つて、こういうどうでもいいことにかなり心血を注ぐタイプだよな・・・

そんなどうでもいいことを考えながら、一回戦を待った。

「よし、お前ら覚悟はいいか？」

雄二がクジを引き、不敵な笑いを浮かべる。

「ああ。」

「当然よ。」

「早くやるです！」

俺達もクジを引き、開くタイミングを待つ。

「行くぞ・・・せーのっ！」

『王様だーれだー!!』

その言葉と同時に全員がくじを開く

ピラッ。

「チツ・・・」

・・・俺の数字は4。ハズレだ。

横の優子も外れだったようで、顔をしかめている。

・・・優希は相変わらず笑顔で、当たりか外れかわかんない。

「よっしや！」

俺が辺りの反応を確認していると、雄二がガッツポーズをしながら立ち上がった。

「・・・また厄介な奴が引きやがった。」

「・・・そうね。」

俺たちは同時にため息をつく。

面倒なことになりそうだ・・・

「それじゃ、命令だ。そうだな・・・」

雄二が腕を組んで命令を考える。

・・・チツ。

何言われるかわかったもんじゃなし、取り敢えず自分が標的にならないことを願いながら

「4、5、6が、鉄人に『好きです、付き合ってください』と告げてこい！」

見事に標的になった。

「・・・なっ・・・貴様!?」

俺達は同時に雄二に詰め寄る。

「なんて命令するんだ！そんなことしたら完全に誤解されるじゃないか！」

「・・・不名誉な！！」

「流石にしょっぱなから飛ばしすぎだ！」

俺達は抗議を申し立てる。

「第一、ここにいない奴を巻き込むってのは」

「何文句言ってるのよ、謙太。」

「ムツツリーニく〜ん。往生際が悪いよ〜？」

「そうよアキ、さつき自分で説明したじゃない。」

『王様の命令は！！』

「絶対っ・・・」

女性陣に指摘され、俺達は唇を噛んで職員室へと向かった。

「って、鉄人！！」

「なんだお前ら。まだ居たのか。次は何をする気だ？」

職員室に入ると同時に疑いの目をかけられる俺たち。

・・・当然の仕打ちだ。

「僕たちと付き合ってください！！」

「ハア？」

さっさと開放されたくて、周りのことも考えずに三人で声をそろえて爆弾発言をする俺たち。

「お前ら・・・何があったのかは知らんが、俺にそういう趣味はないからな。」

そう言って軽くあしらおうとした鉄人だったが・・・

『西村先生って、男子生徒に人気だったのですね。』

『ええ。そして本人もまんざらでもなさそうですね、その気があるのでは・・・』

先生たちの誰かが爆弾発言をする。

全く、とんだ濡れ衣だ。

「・・・事情が変わった。お前らこいつを食らっつけ。」

「そうですね。早く誤解を解いて
ゴスッ！」

「ゴフアッ！」
何故か明久を殴り倒す鉄人。

・・・その方法じゃ語弊を招くだけだぞ。

「そうだ。こいつを掛けとけ。」

そう言つて、職員室から何か書かれた板を持ってきた。

「・・・もうこんなことはせんように。」

メキッ！

「グハアッ！」

鉄人の本気の一発で、俺は完全に意識を手放した。

「くくくくくく・・・」

俺達が満身創痍でFクラスに戻ると、ほかの奴らは律儀に待っていてくれたようだ。

「次、秀吉のばんよー」

「うむ・・・」

律儀に待っていてくれたようだ・・・

「はい、ありがとう。」

「しまったのじゃー！」

律儀に・・・

「むう・・・ほれ、雄二。早く引くのじゃ。」

「ああ。お前がババを持つてる。」

「くくく気づけよー！！」

あまりの待遇に、思わず大声を出す俺たち。
放置プレイなんてまっぴらなんだよ！

「なんじゃ、帰ってきておったのか。」
秀吉が今気づいたかのように俺を見る。
「しょうがない。この戦いは次回に持ち越したな。」
「次回つてなんだ!!」
また俺たちがターゲットになるとでも!?
「どうでもいいから、さつさと座りなさい。」
「どうでもよくねえからな!?!」
扱いが雑すぎるんだよ畜生!

「じゃ、二回戦だな。それじゃ」
「それじゃ行くぞ!」
「オオオオオオオオツ!!」「」
雄二の言葉を遮り、俺たち三人が異様に盛り上がる。
「お、おう・・・」

雄二もその迫力に気圧されたのか、少し萎縮している。
「少しは落ち着きなさいよ・・・」
優子が俺たちに呆れながらクジを引く。

「・・・あんな屈辱に耐えられるはずないだろう!!」
「行くぞ!セーの!」
『王様だーれだ!』
全員が引いたのを確認して、二度目の王様を探す。

「あ、私です」
次に引いたのは優希のようだ。
俺の番号は2だから、外れますように
「2番と4番が、セーラー服に着替えてください。」
「なんだとお!?!」「」
また当たった。

・・・二連続とは、なんとという屈辱!?!

「冗談じゃねえ、そんなの着れるか!!」

もう一人は雄二のようだ。

「・・・雄二、これ。」

「準備が良すぎるだろっ!!」

霧島が、雄二用のセーラーを取り出し、雄二に迫っている。

「・・・王様の命令は絶対。」

「チクシヨオオオオ!!」

結局、それを持って逃げていく雄二。

・・・南無。

「ま、俺の分はないからパスということで」

「謙太、これ」

「お前もかつ!!」

優子が、満面の笑みで俺にセーラー服を渡す。

・・・あれ?これって中学の制服?

「・・・これ、もしかして優子のか?」

少し心配になり、ご機嫌な優子に尋ねる。

心配っちゃ心配だが、まあ、それならそれで

「心配しないで。秀吉の演劇用だから。」

心配する必要なしか。

優子は笑顔のまま俺をFクラスから出した。

・・・なんだろうこの残念な気持ち。

第三百三十二話 王様ゲームその1（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第三百二十二話 王様ゲームその2

「全く、とんだ恥さらしだ。」

俺達は渋谷セーラー服に着替えてFクラスに戻った。

「謙太、メイクしなくても似合ってるじゃない。」

優子が俺を見てやっぱりといったような顔をする。

「謙ちゃん、とっても可愛いですよ。」

優希の反応も予想通りだ。

予想通りだけど・・・

「恥ずかしいからやめてくれ・・・」

俺は女装が似合って喜ぶ明久のような人間じゃないんだよ・・・

！！

俺は、助けを求めて雄二を見る。

雄二、たすけ

「・・・ゆ、雄二、似合ってる・・・と思う。」

「雄二、心配しなくても似合ってるからね。あ、けどあんまり近づ

かないで欲しいな。」

「・・・不潔。」

雄二は俺以上の窮地に立たされていた。

「・・・」

雄二は今にも泣き出しそうな顔で俺を見た。

・・・前言撤回。

似合って良かったっ！！！！

「それじゃ三回戦。」

俺たちが辱しめられたあと、三回戦が始まった。

「せーの」

『王様ダーレだ!』

雄二の掛け声でみんなが札をめくる。

「・・・頼む、王様であってください!」

俺はそうつぶやき、祈るような気持ちで札をめくる。

頼むから、やり返させてくれっ!!

ピラッ

俺が開いたクジには大きな王冠が・・・

「ヨッシャアアアア!」

俺は天に拳を掲げる。

やっと俺のターンが来たっ!!

「なっ、お前かっ・・・」

「まさか謙太とは・・・」

「・・・しまった。」

明久たち三人が一樣に顔をしかめるが、もう遅い!

「さて命令だが・・・ここは、王様ゲームらしい命令で行こうか。」

俺はそう言っつて、前々から決めていた罰ゲームを言い放った。

「1、3、5番は、自分が好きな人を大声で言え!」

フッフッフ、これなら誰が言ったとしても得するだろう!

「・・・ええっ?!」

俺のセリフで反応を示したのは、姫路、美波、秀吉の三人だ。

・・・なんだ。みんな明久族じゃないか。

「じゃ、一番から。」

「・・・え、ウチから!」

俺の言葉で明らかにたじろく美波。

「どうした?王様の命令は絶対だぞ?」

そう言っつて美波にプレッシャーをかける俺。

ドS?何とでも言え。

さあ、早く言っつがよい!

「うっつ、覚えてなさいよ!」

涙目でそういった美波は立ち上がり、明久の真後ろに立った。

「え？美波、もしかして・・・」

「ちよつとごめんね？」

ゴキッ！

ドサツ・・・

関節技で明久を締め落とした美波。

・・・これはちよつとなのか？

「お、おい島田？」

目の前で起こった一瞬の出来事に目を丸くしていた雄二が突っ込む。

「ウチが好きなのは・・・アキ。」

それだけつぶやいた美波は、顔を真っ赤にしてそういつと座り込んでしまった。

・・・なるほど、明久に聞かれたくなかったのか。

「じゃあ、次はにば」

「明久君ですっ！」

俺が順番を言うのさえ遮る姫路も、そう言つて美波に寄つていった。

・・・明久の野郎、今更ながらモテモテだな。

「・・・美波ちゃんもだつたんですか？」

「瑞希も・・・よね。」

そんな俺の心境を知らない美波と姫路は、二人で何かを話し合っている。

・・・二人はそつとしておいたほうがよさそうだ。

「じゃ、秀吉だな。」

「わ、ワシは演劇が恋人じゃ。」

そう言つてそつぽを向く秀吉。

むう、面白くないなあ・・・

「秀吉？そついえば日記に吉井君がどうのつて・・・」

「姉上！その話は廊下で！！」

そう言つて強引に優子を連れていく秀吉。

『・・・』

それにより凍りつく一同。

・・・この質問はしなきゃよかったかも。

第三百三十二話 王様ゲームその2（後書き）

謙太「次回をお楽しみに！」

第三百二十二話 王様ゲームその3（前書き）

しばらく更新できなくてすみませんでした!!

えつと理由はですね・・・夏風邪なんです・・・

38度ちよい熱がでて、この二、三日寝込んでたんです。

申し訳ありません。

やはり部活をやめたせいで抵抗力もとい体力が極端に落ちてます・

・

まあそんなわけで、ようやく今日回復してパソコンに向かったわけですが、ひとつ嬉しいことがあります。

それは・・・スランプから立ち直れたことです!!

どうやら慢性的な風邪だったらしく、ズーッと頭を蝕まれていたようです。

それが吹っ切れたおかげで、少しだけ文章にキレが出るようになりました。

・・・読んでいる方がわからない程度かもしれませんが。

という訳で、この小説を待っていてくださったみなさんありがとうございます。ごさいました。

昨日のアクセスを見ました。

とくにゼロになってると思ったら、まだ150近くもアクセスがあったことに少し驚きました。

ありがとうございます。

これからも頑張りますので、この拙い小説をこれからもよろしくお願ひします。

第三百三十二話 王様ゲームその3

「ひ、秀吉・・・アンタも攻撃色出すのね・・・」
「姉上が悪いのじゃ。明久に聞かれたらどうするつもりだったのじゃ・・・」

廊下から疲れきった二人が戻ってきて、ゲーム再開。

「それじゃ行く」

「ちよつと待つのじゃ。明久はどうしたのじゃ？」

え、明久？ああ、あの馬鹿ね・・・

「僕がどうかしたの、秀吉？」

明久は、秀吉に呼ばれた途端、何事もなかったかのように起き上がった。

首関節外されて何事もなかったかのようにって、どんな体の構造してるんだよ・・・

「おお、そこにいたのか明久よ。・・・さっきの話は聞いておらんかったじゃろうな？」

秀吉はそんな明久にトテトテと近づき、小声で事実確認を始めた。

・・・気絶してた事に気づいてなかったのか？

「さっきの話？なんのこと？」

「・・・そうか。それならよいのじゃ。」

明久のアホづらを見て安心したのか、秀吉はそれ以上の追求をしなかった。

「え？何？なんのはな」

「いくぞい！」

『王様だーれだ！』

「ねえちよつとおー！」

みんなが明久を無視し、予め引いていたくじを開けた。

・・・悪いな。お前に聞かせることはできないんだ。

くじを開ける・・・7、ハズレか。
じゃあ王は・・・

「あ、ボクだね」

俺が目で探し始めた矢先、そう言って立ち上がったのは愛子。
また厄介なことになりそうだ・・・ってかこのメンバーで俺に危害がないのは霧島くらいじゃないか？

・・・まあいいか。

「それじゃ、2番が4番のほつぺにチュウで？」
ルンルンで命令を下す愛子。

よし、取り敢えず被害はまぬがれた。

・・・しかし、相変わらず羞恥心を感じさせない命令だな。

「謙太くん、今何か失礼なことを考えなかった。」

「滅相もございません。」

鋭い目で見てくる愛子を相手に、執事のように振舞ってごまかす俺。
クソツ、こいつら・・・日に日に鋭くなってきてないか？

「あつ・・・」

そんなことを話していると、明久が反応を示した。こいつが被害者
っぽいな。

それじゃもう一人はつと・・・

「本当ですか!？」

ああ、姫路だ。

明久の反応を伺っていたところを見ると、どうやら姫路が4番だな。
と、いうことは・・・まさか!？

「あ、明久君・・・」

足取りも軽く明久のところへ向かう姫路。

・・・泣いてない。泣いてないし、今明久を殺そうなんて考えてないっ！！

「明久君が2番ですよ？私が4番なんですよ。」

「ほえ？」

明久に対して、顔を赤らめながら自分の番号を話す姫路。

なんだろう。この心の中に潜むドス黒い気持ちは。

今すぐ明久を血祭りに上げてやりたい。

王様でも誰でもいい！誰かが命令を出してくれたら今すぐにでも殺つてやるっ！！

ああもう、明久のとぼけた顔が憎らしいっ！！！！

「本当はこういうのはあんまり良くないと思うんですけど、命令は絶対だからしょうがないですよ。だから私は」

「あの、姫路さん。」

明久が、延々と理由を語る姫路の言葉を遮った。

姫路のノロケを延々と聞かされた周りみんな・・・命令を出した愛子さえも口を開けてぽかんとしていた。

・・・命拾いしたな、明久。

美波もどす黒いオーラをまとい始めているし、これ以上姫路がノロケを続けるならお前は死ぬ運命にあったのだが・・・

「どうしたのですか？明久君。もしかして、ゴタクはいいから早くキスさせてくれと言っているのですか？」

姫路が再びノロケを開始する。

・・・よし、死ね。

「そうじゃなくて、これ・・・」

俺がカッターナイフを手に背後から飛びかかるうとしたとき、明久がある一枚の紙、クジを取り出した。

「僕、3番なんだ。」

「え？」

明久の言葉を聞いた俺と姫路は固まってしまった。

クジの番号は確かに3番。

脅かしやがって・・・

「じゃ、じゃあ2番は・・・」

「瑞希、いらっしやい。」

オロオロしている姫路を呼び、笑顔で手招きをしているのは・・・

美波だった。

ああ、そういうことか・・・

「キヤアアアア！！」

「・・・」

その後、姫路の叫び声だけがこだまする結果になった。

「あれ？ボクこの命令しないほうがよかったかな？」

愛子が申し訳なさそうな顔をしていたのは言うまでもない。

第三百三十二話 王様ゲームその3（後書き）

謙太「風なんてダサイよな。」

優希「そうですね。」

謙太「ま、続きがかけて何よりだ。」

優希「そうですね。」

「「これからもよろしくお願いします！」」

第三百三十二話 王様ゲームその4（前書き）

何か今回少しおかしくなりましたが・・・
取り敢えず王様ゲーム編終了です。

第三百三十二話 王様ゲームその4

「お、終わったか？」

戻ってきた姫路たちにおずおずと尋ねる雄二。

「・・・良いものなのか悪いもののかはよくわからんが、すごいものを見た。」

「わ、わかりました。こういうちょっとエッチなものもOKなんです
ね・・・」

顔を真っ赤にした姫路がうつむきながらボソボソといった。

「いやー、ごめんね。」

愛子が頭をかきながら姫路に謝った。

俺もまさかあんなことになるとは思わなかった。

もし清水にアレをしたら、嬉しさのあまり泣いてしまっんじゃないか？

「・・・実際に起こる可能性は限りなくゼロに近いが。」

「いいえ。愛子ちゃんが悪いんじゃないです！でも・・・」

姫路は気にしてないというふうに変子を気遣っているが、何かを決意したような様子を垣間見せている。

「・・・何を想ったんだ？」

「いやいや。さすがのボクも少しやりすぎたと」

「それならもう私だって、容赦しませんからね。」

「ええっ？」

愛子の謝罪を遮るように、姫路がとんでもないことを言い出した。

「・・・容赦しませんって、何をやる気だ一体？」

「普通、女の子はいやらしい罰ゲームを嫌がるものなのじゃが・・・」

「!」
「!」
秀吉のつぶやきに反応した優子が、なぜか俺の襟首を掴んで廊下へ引つ張り出した。

「なんだよ一体?」

俺を連れ出した優子は、とても神妙な顔をしていた。

「・・・何を考えている?」

「アンタたち、姫路さんに変なこと吹き込んでないわよね?」

最近姫路さんがアンタたちに毒されてる気がするのよね・・・と

優子は珍しく(?)俺を疑うような目で一瞥しながら言った。

なるほど、そのことが・・・

「まさか。俺たちが何かするはずないだろう。ただ・・・」

心当たりは、あるな。

俺はあるひとつの可能性を優子に示唆した。

「・・・まあ、あくまで俺の憶測であって、あっている確率は宝くじと同程度だろうが・・・不思議と当たっている気がするんだ。」

優子は、俺の話した可能性を聞き、何かを考え始めたが、

「そう。それなら別に、行き過ぎなければ本人にとってはいいい兆しだと思っし、しばらくは矯正する必要もないわね。」

優子はそう言っつて、少しだけ不機嫌そうにそっぽをむいた。

どうやら、俺が未だに姫路に好意を寄せているとでも思っつてるんだらうな。

「な、なによ!」

俺の目線に気づいたのか、少し顔を赤らめて顔をそらす優子。

「別に。」

俺はそう言っつて、Fクラス教室に戻った。

「遅いですよ、お二人とも!」

姫路が俺たちを早く座るように急かしてくる。

「ああ、悪い。」

俺は姫路に頭を下げ、元の位置についた。

「それじゃ行きますよ、せーの！」
姫路が音頭をとって王様ゲームは続く……

その後は、雄二がグルグル巻きになったり、秀吉、明久、俺の女装写真が焼かれただけだったから、特に面白くもなかったんだが……
「面白くないってなんだ!!」……聞こえない聞こえない。

まあそんなこんなで、俺たちの王様ゲームはお開きになり、それぞれが帰路についた。

もちろん俺は優子、優希ペアと。

「そういえば、さっきなんで出ていったんですか？」

優希が俺たちの前を歩きながら言った。

「別に大した用じゃない。」

俺は流石にあのことを言っただけで回るのは気が引けたので適当に話をそらした。

「そうね。ただの質問よ。」

優子も俺の意を察してくれたようで、うまく誤魔化してくれた。助かった。

「ふーん。そうですか。じゃ、先に帰って料理しますから！」

優希は特に疑いもせず納得すると、スキップで前にかけていった。

「……姫路さんのこと、言わなくてよかったの？」

優子が俺を見ながら言った。

「あー……アイツはしらなくていいんじゃないか？」

彼奴には、姫路の過去なんて関係ないだろうしな。

「そう。ならいいけど。」

優子も、もうそれ以上姫路の話はしなかった。

・・・なあ姫路。

お前、確かに明るくなったよな。

方向は・・・ちよつと間違っているかもしれないが、それでも昔よりは明るくなったと思う。

姫路って、昔はこういうことには参加せず、一人で勉強をしているような奴だったよな。

・・・何時からなのだろうな。

俺は転校していたから、正確な時期はわからない。

けど、ひとつだけ分かることがある。

お前のその頑張りの動機は『明久と一緒にいたいから』であり、『明久と同じ立場に立ちたいから』なんだよな・・・

姫路の行動の動機になれている明久が羨ましい、本当に。

まあ今は、姫路以上に大切な人ができたから、殺したいほどじゃないんだが・・・

・・・とにかく、俺はお前の初恋がうまくいくことを祈っている。誰も傷つかない結果があるのかはわからないが、お前ならそこに行ける気がする。

・・・頑張ってくれ。

第三百三十二話 王様ゲームその4（後書き）

謙太「次回をお楽しみに」

第三百三十三話（前書き）

すみません！

てつきり投稿したと思ってたらまさかの次話投稿画面で停止して
いました・・・

昨日は塾で気づかなくて・・・
すみませんでした！

第三百三十三話

秋になり少しずつ涼しくなっている気がする今日この日。

一週間後に強化合宿を控えた今日この日の、いつもの日常。

「また補習じゃないか！雄二のバカヤロー！」

「んだと！？テメエがワリいんだる明久！！」

・・・日常。

「瑞希、絶対にアキは渡さないんだからね！」

「それはこつちのセリフです！」

・・・日常。

「異端者には死を！！」

『オオ！！！！』

・・・日常

「秀吉・・・じゃないよな？優子か？」

「な、何を言っついてい・・・おるのじゃあ、謙太よ？わた・・・わたし

は秀吉じゃぞ！」

・・・日常？

優子目線

・・・ことは昨日に遡る。

「木下さん。」

時は放課後。

「あ、はい。なんですか高橋先生。」

なんの警戒もせずに戻事をした私。

・・・思えば、それが全ての始まりだった気がする。

「明日の放課後、時間ありますか？」

少し困った表情をした先生の質問。

「はい。特に部活に入っているわけではありませんし。」

私は先生の表情に少し疑問を持ちながらも、自分の予定を話した。

「そうですか。それは良かった。実は・・・あなたに是非この学園のプロモーションビデオに出演して欲しいの。」

「へ？」

私は、思わず惚けた声をだした。

プロモーションビデオね・・・

「プロモーションビデオって、私は一体何を・・・」

「内容は、特に大したことではないわ。」

説明された内容も、学校では優等生を演じている私には特に苦労することのなさそうな内容で一安心。

・・・ただ一つを除いては。

「校歌、ですか・・・」

「ええ。この学園の校歌を、合唱部と一緒に歌って欲しいの。」

先生の口から校歌という単語を聞いた私は、思わず顔をしかめてしまった。

・・・私、あんまり歌が上手くないのよね。

「優等生の木下さんなら余裕でしょう？」

「うっ・・・」

高橋先生にそう言われ、言葉に詰まる。

「それでは、明日の放課後、よろしく頼みますよ。」

高橋先生は私の反応を受けると取ったのだろう。

配役が決まったことに心無しか嬉しそうに、教室を去っていった。

・・・どうしよう。

・・・おかしい。

「ど、どうしたのじゃ謙太よ。」

・・・さつきから秀吉の様子がおかしい。

「さつきから反応が冷たいの・・・じゃ。」

・・・つてかこれ優子だ。

「謙太よ、無視しないで欲しいのじゃ。」

・・・なぜここにいる!?

「ひどいのじゃ。無視しないで欲しいのじゃ。」

秀吉・・・もとい優子が俺に執拗に構ってくる。

・・・何が目的だ。

「・・・おい優子。」

「何?・・・じゃなかった。なんのことじゃ?」

・・・まだはぐらかせると思ってるのか。

「・・・秀吉、今日は女装しないのか?」

俺は、少しカマをかけてみることにした。

「ほえ?」

予想通り、優子が惚けた声を出す。

「いつもだったら、何かしら女の格好してるだろ?」

俺が茶化すように言つと、優子は顔を真っ青にして

「・・・ちよつと用事が。」

どこかへ消えていった。

おそろく、秀吉のところに行つたんだろう。

・・・すまん秀吉。

優子目線

「・・・どういふことよ秀吉。」

「だからそれは、濡れ衣じゃというところだ。」

「嘘をつかないで！」
「嘘じゃないと言つとるじゃろつが!！」
「まだ白を切るといふの?それなら!」
「待つんじゃ姉上!それは……」

しばらくお待ちください

謙太目線

「ぜえ、ぜえ……」
疲れきつた様子で戻ってきた優子。

「おかえり。」

俺は、そんな優子をねぎらうように笑顔で言った。

……この場合秀吉か?

「ただいま……」

息を切らしながら答える優子。

「あれ?結局女装しなかつたんだな。」

「当然でしょ……じゃろつが」

秀吉口調を忘れながらも返事をする優子。

「そついえば、昨日の話の続きだが……」

「昨日の話つて……?」

優子は、しまったといったふうな顔をしている。

……実際は大したことを話してねえんだけど。

「あれだよあれ。お前が明久にラブレターを渡すつて話。
これは勿論ハツタリ。」

「!?!」

しかし優子は、ビックリマークが浮かぶんじゃないかというくらい驚いた。

「FFF団に見つかったらどうするんだ？」

俺の話聞いていた優子は、あいつもうそんなこと考えてたのかというような顔をしている。

「……要するに目を白黒させている。」

「……ちよつとトイレに。」

そう言っただけで立ち上がる優子。

「……面白そうだし、もう一個追加するか。」

「秀吉、間違えて女子トイレに入るな……ってもういない。」

「……早いな。」

優子目線

「秀吉？」

「ま、待つんじゃない！拷問器具なんて置いて、とりあえず話し合いを
！！」

「死になさい！」

……秀吉、DEAD

第三百三十三話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第三百二十四話（前書き）

今回は惚気話です！！

気分が悪くなったらすみません・・・

第三百三十四話

「ふう・・・」

優子が秀吉にオシオキをして戻ってきた。

「お疲れさん。」

「・・・ええ。本当に疲れたわ。」

俺の言葉に、優子は標準語で答えた。

なんかもう秀吉口調が面倒になったらしい。

・・・早いな。

「いいじゃない。どうせバレてるんでしょ？」

優子は何を今さらと言いたげな目で俺を見てきた。

「・・・ってか心読むな！」

全く、どうやったら読心術なんて使えるんだよ・・・

「・・・言葉に出たわよ。」

優子はそういうと、ふうと大きなため息をついた。

・・・迂闊だった。

「ねえ謙太、秀吉。」

「ん？」

騒ぎも収まり、暇を持て余しつつ優子と話していると、さっきまで追われていた明久が来た。

「木下優子さんが、学校のプロモーションビデオに出てるらしいから、見にいつてみない？」

明久はそう言っただけで俺と優子に手をだした。

へえ、明久にしては粋な提案だ。

「・・・そうだな。どうする秀吉？」

俺は賛同し、優子を見た。

優子がどう思っているかはわからないが、俺としてはちょうどいい。俺も秀吉の晴れ姿を見ておこうと思っていたところだし。

「ま、優子が嫌なら行かねえけど。」

「そうじゃな。わた・・・ワシも見に行こうと思っていたところじや。」

優子も賛同したため、俺たちは秀吉を見に行くことにした。

ガヤガヤ・・・

「おっ、やってるやってる。」

俺たちが優子・・・もとい秀吉を見に行くと、そこではどこで調達したのかと言いたくなるほどの高級なビデオカメラが並べられ、撮影が行われていた。

「へえ・・・」

優子が感嘆の声を上げる。

優子もさすがに見たことのないような設備だったようだ。

「さすがはAクラスだね。」

「ああ。この設備は是非とも欲しい。」

明久の声に賛同する俺。

カメラとかあったらいろいろできそうだし・・・。

「しっかし、こっからだと秀吉が見えねえな・・・」

「たしかにのう。」

俺たちがいるのはどちらかという後ろのドア。

遠目+人だかりのせいでよく見えない。

「せつかくだ。こっそり忍び込むか？この人ごみなら紛れられると思っし」

「・・・佐藤？」

俺の言葉を遮る小さな声。

「ん？」

俺が振り返ると、霧島が呆然と佇んでいた。

「おう、霧島。」

俺は普通に挨拶をする。

「どうしたんだこんなところで？」

まあ大方先生に用でもあったのだろうが。

「・・・それはこっちのセリフ。」

俺の疑問に対して霧島はそう言うと、ドアを開けて教室に入り俺たちを手招きした。

「・・・立ち話は好きじゃない。」

「おう、サンキュ。」

「ありがとう、霧島さん！」

「・・・ありがとうなのじゃ。」

俺たちは霧島の好意を受け取り、教室内のソファに腰掛けた。

「・・・だいたい検討はつくけど、何をしにきた？」

霧島が、俺たちにお茶を入れてくれながらそう尋ねてきた。

「ああ。俺達は、ひでよ。」

ゴスツ！

「優子の歌を見に来たんだ。」

霧島には話していいと思って正直に言おうとしたら、見事に脇腹を殴られた。

イテエ・・・

「・・・そう。そんなことだろうと思った。」

霧島はそう言うと、秀吉が歌っているステージの方をむいた。

「・・・優子、本当にすごい。優子には本当に弱点がない。」

霧島がそうつぶやいた。

「ああ、同感だ。」

そのことについて何も反論するつもりはない。

「……そういえば」

何かを思い出したように、霧島が机から身を乗り出して俺たちだけに聞こえるように行った。

「……優子のどこが好きなの？」

霧島から浴びせられた唐突なその質問。

「……!?!」

横の優子は明らかにうるたえている。

「……まあ当然か。」

「わあ……」

明久は、秀吉の演技に魅入っていて、話を聞いていない。

「……ふむ。」

「……しいていえば、不器用なところ、かな。」

俺は二人に聞こえるように言った。

いろいろあるが、一番はそこだな。

「……なんつーか、守ってあげたくなる。」

「……!?!」

弱点が好きだと言われたことに優子はうるたえながらも、若干顔を

赤らめている。

嬉しい反応だ。

「……」

霧島は、急に黙り込み、何かを考え始めた。

そして何かを思い出したかのようにクスッと笑い、

「……私とおんなじ。」

少しだけいたずらっぽくそう言った。

「ねえ謙太。」

帰り道。

俺は優子と一緒に帰っていた。

優子は、ついさっきまで顔を赤らめて顔をそらしていたが、急にさつき思い出したように俺に疑問をぶつけてきた。

「さつき言ったこと、本当？」

優子の真っ直ぐな目が、俺を見ながら言った。

「……あんまり見ないでくれ、惚れてしまう。」

「嘘なわけないだろ。」

俺はそう言っつて優子から目をそらした。

「……まあ、結論から言えばとっくに惚れてるんだけど。」

「へえ……」

優子は、俺の答えに何か考え込み、

「じゃあ、もっと不器用になるわね。」

優子はそう言っつて俺の前を歩きだした。

「……もっともっと、謙太が告白してくれるくらい好きになってもらえるように。」

ぼそぼそと優子が何かをいったが、さすがに聞き取れなかった。

第三百三十四話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに！」

第三百二十五話（前書き）

優子編、何かなあなあのまま終わっちゃってすみません。
ダウトは飛ばします。なぜなら入る余地がないから。

・・・という訳で試運転行っちゃおー！！

第三百二十五話

優子、秀吉入れ替わり大作戦から三日。

俺たちは再びよく分らない自体に巻き込まれていた。

「『召喚獣の試運転？』」

思わず聞き返したその言葉は、学園長もといババアから発せられた言葉だ。

ババアは、俺たち補習しているところに突然入ってきて、

「今日の補習は召喚獣の試運転さ。」

なんてことを言い出した。

いきなり何なんだ。

「試運転って召喚獣の衣装変更に関わるものですか？」

そういつたのは姫路。

ちなみに今教室にいるのは、Fクラスのいつものメンバーだった。

他の奴らは鉄人と仲良く補習を受けているのだが・・・これのためだったのか。

「まあ、そんなところさね。ちょっと面白いことになったから、ア
ンタらに頼みたいのさ。」

ババアは頷きながらそう言った。

・・・いつ見ても汚らしい光景だ。

「どうしてウチらなんですか？」

美波がババアに尋ねる。

まあ、それは当然の疑問だ。

自分で言うのもなんだが、俺たちみたいな問題児を使うよりは、A
クラスの秀才共を使ったほうがいいに決まってる。

Aクラスを使わないということはつまり・・・

「それは都合がいい」

「調整に失敗したんだろ？」

俺は、ババアの婉曲表現を遮るように言った。

要はこういうことだろ。

「……なるほど……」

俺の言葉に、一様に頷くFクラスの例のメンバー。

まあ、実績があるし(二度目の試召戦争)。

「違うさね。ただちよつと危険なだけさ。」

『危険なのかよっ!』

さらりと爆弾発言をするババア。

こいつは他人をなんだと思つてやがる。

「大丈夫さ。総合科目の点数が二千いかなければ、特に何の問題もないさ。」

「……」

ババアが言う言葉に沈黙する俺たち。

まあ、ここには4人くらいそんな奴らがいるからそいつらに任せればいいんだし、俺には関係ないな。

「と、言うわけで、この実験には吉井、木下、島田、土屋、坂本の五人に参加してもらう。姫路、佐藤、霧島には外れてもらうさね。」

「……はーい」

皆一斉に頷く。

うん、妥当なメンバーだ……霧島?

なぜ霧島がここに……って聞くのは野暮か。

あいつは雄二のいるところにはどこにでも現れるからな。

「……ちよつと待てババア。」

突然、誰かが不服そうな声を上げた。

「どうしたんだい、坂本。」

その声を上げたのは雄二。

全く、どんな不満があるってんだ。

「……俺は普通に2000点行ってるぞ。」
問題あった。

つてか、いつの間にか雄二頭良くなったんだな。

「アンタなら、何があつても構わないからな。」

ババアはそんな雄二の提言を一蹴した。
なるほど、それはもつともだな。

「オイッ！！ふざけん」

「じゃ、無事に終えたら報酬もあるから、頑張るんだよ。」
ババアは、雄二の言葉を無視して教室から去っていった。

「……つたく、何で俺がこんな目に。」

ババアが去ったあと、雄二はしばらく愚痴を垂れていた。

「まあ、しょうがないんじゃないか？」

「……しょうがない。」

俺達は一応雄二を宥める。

じっさい、選ばれたもんはしょうがないんだし。

「……翔子がなぜいるのかという質問はいらねえよな。」

雄二はそう言っただきくため息をつくとか何か吹っ切れたかのように立ち上がった。

「それじゃ、さつさと終わらせるか。」

そういった雄二は、大きく伸びをした。

「そうじゃな。サモン。」

「……サモン。」

「さつさと終わらせよつか、サモン。」

雄二より一足先に召喚する三人。

「……まだ衣装変更は済んでないみたいだな。」

「そうですね。」

三人が呼び出した召喚獣はどれも制服姿で、どうやら初期状態に戻っているようだ。

『へえ、試運転というだけあって、制服なのね。』

『……武器を持っていない。』

『可愛いのう。』

「そういえば最初に出した召喚獣もこんなだったな・・・ってえ？」

「一年生のころを思い出しますね・・・ってあれ？」

俺達は、今の会話に妙な違和感を感じた。

「・・・召喚獣が、喋ってる？」

霧島が、珍しく信じられないと言った顔で召喚獣を見ている。

「・・・ええっ!?!?」「」「」

そして霧島の言葉に一応に驚く俺たち。

・・・あのババア、嵌めやがったな。

第三百二十五話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに」

第三百三十六話（前書き）

この話は結構面白いですよね。
原作何回も読んで吹き出しました。
という訳でどうぞ。

第三百三十六話

「なんだよコレ・・・」

俺達は、目の前の光景について思案していた。

目の前の召喚獣たちはキャツキャツと騒ぎながら、しきりに周りを見渡したり、何かを考えたりしている。

「ババアの話だと、操作性の向上って話だったが・・・」
雄二が腕組みをして考えている。

・・・そんなに考え込む話でもないだろうに・・・

「どうせミスだろ。」

俺は大きなため息をついた。

・・・ババアの研究ズサン過ぎやしねえか？

「そうだね。あの黒金の腕輪の時みたいな状況だよね。」

明久が、感慨深げに何かを考えている。

・・・そういえば、それが原因で試召戦争負けたんだな。

「しかし、こうして勝手に動いてると和みますね。」

姫路が秀吉の召喚獣を撫でながら言った。

「へえ、召喚獣に触れるのか。」

雄二が感心したように言う。

へえ、だとしたらフィードバックも付いてるんじゃないのかな？

「秀吉、フィードバックはあるか？」

「んむ・・・ワシにはよくわからぬが、少なくとも撫でられる

感覚はないぞい。」

秀吉はそう言ってしきりに自分の頭を触ったりしている。

『・・・！』

そんな秀吉の動作を見て、ムツツリー二の召喚獣が写真を撮ろうとしたが・・・

『・・・カメラがない・・・』

そう言ってあからさまに落ち込んでしまった。

・・・こいつはそのまんまだな。

「可愛いですね〜」

優希が、膝の上に秀吉の召喚獣を載せた。

こうして見ると、たしかに和むな・・・ん？

「ってお前らいつのまに・・・」

ふと気づいたときには、優子と優希、ついでに愛子もいつの間にか現れていた。

Aクラスにはどこでもドアがあるのか？

「・・・確かに悪くはないわね。」

優子も、秀吉の召喚獣を見ながら少し頬を赤く染めている。

そこはやっぱり女の子なんだな。

「なによその目は・・・」

「別に？（ニヤニヤ）」

優子が、俺の視線に気づいてそっぽをむいた。

こういう女の子っぽいところを見れるとやっぱり・・・あれだな。

「抱きしめたくなるな。」

「なによいきなり?!」

優子がさらに顔を真っ赤にする。

ああいかん、口に出してしまった。

「謙太・・・」

「仲睦まじいのはいいことなんですが・・・」

「見てることちが恥ずかしくなるからやめてくれない・・・?」

気づくと、明久、姫路、美波が顔を真っ赤にしてうつむいていた。

・・・やりすぎたか？

「可愛いですね〜」

そんなひと騒動も終わり、一先ず召喚獣を観察することにした俺たち。

「よしよし。」

『ふにゆ〜』

秀吉の召喚獣は相変わらず優希の膝の上でゴロゴロしている。

そんな秀吉（小）の面倒を見ている優希は、なんだか嬉しそうだ。

へえ、子供が好きだったのか。

その一方で、

『アキ〜』

「ちよつと、待ちなさい!！」

美波の召喚獣が、美波から逃げるように明久のところに向かっていく。

・・・ん？召喚者に逆らってる？

「召喚者の意思にも逆らうみたいだな。」

「・・・召喚者の本能に従順。」

雄二と霧島が召喚獣について考察をたてている。

もしそうなら、この召喚獣はただの欲望の塊じゃねえか。

・・・だとしたら、ムツツリー二の召喚獣が面白そうだな。

「大丈夫だよ美波、よしよし。」

明久は子供の扱いに慣れてるのか、手馴れた感じで美波（小）をあやしている。

「全くも〜・・・」

美波はそんな召喚獣に呆れながらも、少し嬉しそうだ。

まあ、召喚獣とはいええ、明久に密着できてるのは事実だからな。

「かわいいよねー。」

「そ、そうかな??？」

なんか惚気話みたいなのも聞こえてくるし。

・・・人のことを言えないか。

『優希さん、ちょっと話を聞いてくれぬか?』

五分ほどして、秀吉の召喚獣が優希の膝の上で言った。

「はいはい、いいですよ。」

優希はそれを快く承諾した。

将来は子煩悩になりそうだ。

『今朝、近所の男子中学生に告白されてしまったんじゃ。』

「……」

思わず絶句。

オイオイ、これは人の秘密までも平気でばらすのか!?

「何を言うとするか、そんなはずが……」

『今月はもう三人目じゃ。』

「……」

再び絶句。

「そ、それは大変ですね……」

優希が一応相槌を打つが、さすがに驚きを隠せないようだ。

「だが、こいつはレアだな。」

雄二がふとそんなことを言った。

「……まあそうだよな。」

「たしかに、秀吉の隠し事なんて滅多に聞けるものじゃないからな。」

「こいつの演技は超一級だし、見抜けるはずがないからな。」

「そうですね。木下君はポーカーフェイスですし。」

姫路が苦笑混じりに言う。

それが侵害だといったふうに秀吉が口を挟んだ。

「何を言うておるかお主ら。わしは常に自然じゃ。」

「

『演技を褒められたのじゃ。嬉しいのじゃ!!』

「・・・」

が、見事に本心を言われた。

秀吉が、明らかに落胆している。

ってかこいつ、ここまで自然と嘘つけるのか・・・

「・・・木下ってこんなに平気で嘘つくのね。」

「・・・弟ながら不安に思えてきたわ。」

「ムツツリー二君とは大違いだね」

「・・・何の事？」

一様に苦い顔をする皆。

そんな視線の中で秀吉は・・・

「ワシの社会的地位をどうしてくれるのじゃ・・・」

『そんなこと言っても、本当は嬉しいのじゃ』

召喚獣に掴みかかっていた。

・・・ご愁傷さま

第三百三十六話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第三百二十七話（前書き）

目が痛い・・・

第三百三十七話

召喚獣のオシオキを終えた秀吉が、やれやれといったふうに戻ってきた。

「ワシの言葉が信用されなくなったらどうするのじゃ。勘違いするでないぞ。演技はせいぜい1割じゃ。」

秀吉はそう言つて必死に弁明をしようとするが・・・

『実は5割なのじゃ。』

「・・・」

召喚獣に一瞬で暴かれた。

ジー・・・

「御生じゃ！ワシをそんな目で見ないでくれ！」

明らかにたじろく秀吉。

・・・恐ろしい。

「ほかの二匹は大人しいの？」

もとよりあまり秀吉に興味がなかった優子が、ほかの二匹を探しながら言う。

「さあ、どうだろうな・・・」

俺は、視界に入ってしまった一匹の召喚獣を見ながら言った。

『・・・み、みえ・・・！！（ブハッ！）』

視界に入ったのはムツリ（小）

正座していた姫路の正面で畳を床になすりつけ・・・あとはご想像の通り。

「つ、土屋君！何をやってるんですか！？」

「・・・俺の意識じゃない！！（ブンブン）」

姫路の怒声に首を振るムツリ。

・・・バレバレだったの。

「あ、そうだ。ムツツリー二君！」

愛子が何かを思いついたような輝いた顔でムツツリを呼んだ。

「・・・何？」

『・・・エロの話なら大歓迎』

・・・アホ。

「アハハっ！そういう話もいいけど、今はチョくっつと違うんだよね。」

ムツツリ（小）のセクハラ発言を軽快に笑い飛ばす愛子。

ある意味、笑い飛ばせるのはすごいことだと思っが・・・

『・・・スパッツの中にしか興味はない。』

しかし、そんな愛子からそっぽを向く召喚獣。

「・・・っ！」

ペチペチペチペチ！

そろそろ限界を感じ出したのか、ムツツリは召喚獣を叩き始めた。

「あははー！ほんつとによく喋るね！面白い！」

「・・・面白くない！」

けらけらと軽快に笑う愛子に対して、若干ムツとするムツツリ。

『・・・スパッツの中みたい。』

そんなムツツリをあざ笑う（？）かのようにセクハラを続けるムツツリ（小）。

全く、本心を隠すのは大変そうだな。

「・・・っ！！」

ペチペチペチペチ！

『・・・叩かないで欲しい。』

再び召喚獣を叩くムツツリ。

「あははっ！正直者だね〜！」

愛子はまたまた笑って済ませたが、若干顔が赤らんでるのはおそろく気のせいじゃないだろう。

・・・ラブラブか。

「それじゃ、ちょっといたずらしてみようかな？」

そういった愛子は、おもむろにスカートの裾を持ち上げ・・・

「スカートの中、みたい？」

愛子はあるうことか逆セクハラをやらかした。

・・・何やってるんだ。

「・・・そんなものに興味は」

『スカートの中には、ロマンや夢や希望があり興味が尽きない。タイト、ミニ、ロング、フレア、プリーツなど、様々なスカートがあり、そのどれにも異なった魅力があるが、キュロットだけはスカートを名乗るべきじゃないと思う。』

「・・・興味はない。」

ここまで話しておいて否定するのか。

・・・白々しい。

第三百二十七話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに」

第三百二十八話（前書き）

受験辛っ・・・

文月学園があればいいのに・・・

第三百三十八話

「そういえば、美波のはどうなんだ？」

俺は、二匹の状況を見ていた美波に聞いた。

確か美波（小）は、明久とじゃれてたと思うが・・・

「え？ウチ？ウチは特に問題ないけど・・・アキ？」

美波が、確認のためか明久を呼んだ。

「何、美波？」

明久が返事をする。

美波（小）は相変わらず明久の上でじゃれていた。

この分だと、そうそう何も起きないだろうな。

『あのね、あのね』

しばらく明久に撫でられていた美波（小）が、明久に何かを話しかけた。

「なに？」

それを笑顔で聞こうとする明久。

微笑ましい光景だな。

『ウチね、いっつも酷いことしてるけど、ほんとにはアキのことが』

「いやあああつっ！」

ゴスツッ！！

美波が、素晴らしい反射神経で明久をぶん殴った。

「・・・なぜに明久？」

「なんで殴られるの・・・？」

思わず明久と同じことを聞いてしまった。

・・・おそらくは自分を殴ることに抵抗があったのだろうな。

「・・・全く、島田さん」

優子が珍しく美波を呼んだ。

・・・どうしたんだ？

「そういうことばかりしてるから彼に勘違いされるんですよ。」
優子が、ふうとため息をつきながら美波に言う。

「なるほど。さすがに見てられなかったのか。」

「ええっ!? 彼だなんて、まだ付き合ってもないし……」
その言葉に顔を真っ赤にしてうつむく美波。

「こういうところは女の子っぽいと思うんだけどな……」

「そ、そういうえば美波の好きな人って聞いたこと無いね。」

明久が、そんなことを言いながらヨロヨロと立ち上がった。

「……全く、おめでたいのやら違うやら。」

「ウチの好きな人!? 言えるわけじゃない!」

再び美波は顔を真っ赤にしてうつむいた。

「……ああ、そういうこと考えたら……」

『ウチが好きなのはね、あ』

「きゃああああ!!」

「うわアアアア!」

バコッ!!

再び美波の拳が飛んだ。

「ひ、卑怯よアキ! そうやってウチの好きな人を聞き出そうだなんて!」

顔を真っ赤にして、肩で息をしながら明久を睨む美波。

手ではしっかりと召喚獣の口を抑えている。

「あんたも召喚獣を出して、本音を喋りなさい!」

「ええっ!? やだよ!」

美波が無茶を言い、明久は当然のように断る。

「……明久のは面白そうだな。」

「なあアキヒ」

「謙太、1976年にオリンピッククがあったのは？」

俺が明久を引つ掛けようとしたところで、優子が突然そんな質問をしてきた。

・・・なんのつもりだ？

「モン』トリオールだろ。ストでスタジアムが未完成だったらしいが、どうしたんだいきなり・・・？」

なんの意味もない質問をされ、若干戸惑う俺に、優子は笑顔で行った。

「すぐにわかるわ。」

ボンツ 召喚獣出現。

「んなあつ?!」

すぐわかった。

けど・・・マジかよつ!!

「謙太、これで本心を聞けるわね。」

優子が不敵な笑いを浮かべる。

チツ、どうすれば・・・

「バカだなあ謙太。」

明久がニヤけながら俺を見る。

明久に馬鹿呼ばわりされるとはつっ!

「僕はそんなトラップに引つかからないからね。」

「明久君。これ読めますか？」

姫路が取り出したのは、『格差問題』と書かれた紙

普段なら引つかかるだろうが、今出すのはさすがに間が悪かったな。

「姫路さん、僕をバカにしちゃ困るな。かく『サモン』だいでしょう？」

「はい、正解です。」

ボンツ 召喚獣出現。

「しまったアアアツ!!」

明久のバカさに思わず唾然。

・・・明久は所詮こんなものか。

「畜生、雄二も出せよ！」

明久が雄二にそう叫ぶが、その叫びは雄二には届かない。

「バカだなあ、俺が出すわけないだろ、アキヒ。」

「・・・雄二、『法の精神』は？」

「モン』テスキューだろ。」

ボンツ 召喚獣出現。

「しまったあつ！！」

・・・雄二も引つかかるなんて。

Fクラスに着実に毒されつつあるな。

「『・・・やつぱり雄二は馬鹿だな。』」

明久が、やれやれと頭に手を当てながら言う。

・・・お前もだ。

「『なんだとクソ明久っ！！問題の中に入ってたのも気づかねえくせに。』」

それに負けじと雄二も反抗する。

・・・明久と同レベルに落ちるなよ。

「『なんだとっ！？』」

「『やんのかっ！？』」

メンチを切り合う二人。

・・・ここは収めなきゃな。

「『落ち着け、お前ら両方とも馬鹿だから』」

「『『『なんだと！？』』』」

一斉に睨まれた。

・・・逆効果だったか。

「ねえねえ三人とも。」

俺たちがメンチを切り合っているときに、愛子がケタケタと笑いながらやってきた。

『・・・気をつける。』

迫ってくる愛子の餌食になっていたムツツリ（小）はそう言いつつ、力尽きた。

・・・何されるんだ？！

第三百三十八話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに」

第三百三十九話（前書き）

これで自動化編終わりです。
お疲れ様〜！！

第三百二十九話

「……っ……!!」「」

愛子の接近に伴い硬直する俺たち。

……何を仕掛けてくる？

「そんなに固まらないでよ。大したことじゃないからさ。」

愛子がそう言いながら近づいてくるが、信用ならねえ……

つてか後ろのムツツリに何をしたんだよ……!!

「本当に？」

明久が、警戒しながらそう尋ねる。

横の雄二も少し顔をしかめるほどに警戒している。

「ホントだよ。ちよつと聞きたいことがあるだけだから。」

愛子がいつもの笑顔を浮かべたままさらに近づき、俺たちの前で止まると……

「僕、いつもはスパッツを履いてるんだけど……今日はスパッツはいてないんだ。」

愛子はそう言うと、自分のスカートの裾をつまんだ。

……なんだ、そんなことか。

「あつはは、何を言つて」

『めくらせてください!』

「るのさ工藤さん……(ダラダラ)」

「そつだぞ、俺たちを」

『俺が先だ!』

「からかつても無駄だからな……(ダラダラ)」

明久と雄二は笑って流そうとしたが、召喚獣が自爆した。

「……ちよつとこつちに来て!」

「明久君、お話があります……」

「……雄二。」

二人は、各々の彼女に連れて行かれた。

「『『ぎやアアアアアアア』』」
「『全く、普段からエロい事ばかり考えてるからそうなるんだ。』」
俺は召喚獣と共に溜め息をついた。

閑話休題

「あれ？謙太くん効いてないの？」

愛子が少し怪しむような目で俺を見る。

「ん？当然だろ。」

俺は首を振って否定する。

『俺がその程度の事で動じるとでも？』

俺の心を召喚獣が代弁する。

うん、全くもってそのとおりだ。

「む、謙太くんって本当に朴念仁なんだね・・・」

愛子が少し残念そうに口を曲げる。

「謙ちゃん、流石ですねッ！」

優希が俺に抱きつこうとしてくるのをさりと避ける。

なぜ抱きつこうとしたんだ？

「愛子ちゃんのパンツに興奮しないなんて、謙ちゃんすごいですよ
ね！」

「・・・謙太、朴念仁もいいけど、ちょっとくらい女の子に興味を
もったほうが・・・」

優希が言った同意を求める言葉に、優子が複雑そうな表情をしながら
言う。

・・・優子の下着にだったら興味津々だけどな。

『優子の』

・・・まさかッ!!

「せいッ!」

ポゴッ!

『ゴフッ!?!』

ヒュンッ・・・バンッ!

「何事!?!」

俺は全てを察知し、召喚獣が口を開くのと同時に召喚獣を蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされた召喚獣は黒板に激突し、頭を抱えてうずくまった。

フウ、危ない危ない。

「・・・」

その行動を見ていた優子たち三人が啞然としている。

ああ、傍から見れば不審者か。

「悪い悪い。ちょっと教育をな・・・」

俺はそう言って召喚獣を捕まえた。

・・・全く、余計な真似を・・・

「フフフ・・・今何と言おうとしたのかな・・・?」

案の定というかなんというか、愛子に嗅ぎつけられた。

「いやあ、なんのことだか・・・」

俺はシラを切りながら、召喚獣の頸動脈であろう場所を締める。

・・・これで黙ってくれればいいけどな。

『・・・』

召喚獣は白目をむいて黙り込んだ。

よし。

「あれ?召喚獣がしゃべらないわね・・・?」

密かに回答を期待していたらしい優子が、召喚獣をつつく。

・・・その程度じゃ起きねえよ。

「さアな。寝てるんじゃないか？」

・・・いいえ、締めてます。

「そうですか」。残念です。」

優希がさほど残念でもなさそうに言った。

こんな感じであっさり引いてくれればいいんだけどな・・・

「ま、起きたときには全て忘れてくれるといいんだけどな・・・」

俺はそう言っただけで召喚獣の拘束を解いて、座布団に座った。

「・・・『サモン』さん、ですか？」

ボンッ

「キヤあああ!!！」

やっと落ち着いたと思ったら。またどこからか聞こえてくる姫路の悲鳴。

・・・まだ終わらねえのか。

「さて、そろそろ終わったかね。」

ババアがそう言いながら入ってきた教室は悲劇だった。

・・・明久は姫路に召喚獣諸共ぼこられている。「ぎゃアアア

!!！」

・・・美波は召喚獣の対応に四苦八苦して、ついにはゴミ箱に閉じ込められている。

・・・雄二は何故か霧島の胸に抱かれている。「キヤツホオオオオ

!!！」

・・・秀吉は教室の済で体育座りをしている。

・・・ムツツリは血だまりで召喚獣と共に倒れている。

・・・愛子、優子、優希はその状態についていけずに苦笑している。

・・・そして俺は・・・

『ギヤアアアアア!!』

「いつぺんだまれえエエエ!!」

召喚獣をボコっていた。

「あんなたちは、どうやったらこんな状況が作れるんだい・・・」
額に手を当てながら召喚獣のフィールドを解除するババア。

・・・何か今日は疲れた。

第三百二十九話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに」

第四百四十話（前書き）

昨日は諸事情で更新できずすみませんでした・・・

第四百十話

召喚獣の試運転が終わりはや数日が過ぎた。
またいつものように教室に入ると・・・

「おーっす」

「いやあアアアアア!!」

・・・いきなり明久の悲鳴を聞いた。

「どうしたんだ明久・・・」

俺は若干呆れながら明久に話しかけた。

「見ないでえっ!!汚れた僕を見ないでエエエ!!」

「落ち着くのじゃ明久!」

明久は既に精神崩壊しかけていて返事をしない。

メンドクセエ・・・

「・・・何があつたんだ?」

俺は、しょうがなく秀吉に尋ねる。

「おお謙太か、実は・・・明久が脅迫にあつておつてのお・・・」
秀吉が深刻そうに事の顛末を話す。

「・・・へえ。」

俺はそれを聞いて頷き、そして一言。

「どうでもいい。」

「どうでも良くないよっ!!」

即座に明久に突っ込まれた。

・・・ハア、冗談に決まつてるじゃないか。

「・・・まあ、確かに謎ではあるな。」

俺はそう言つて、明久の写真を奪い取つた。

「あっ！！」

明久は困ったような顔をするが、取り敢えず、どんな写真家を見ないことには対策が・・・

一枚目 メイド写真

二枚目 着替え中、半裸（トランクス only）

三枚目 手にブラ&笑顔

「これは・・・どうしようもないな。」

「そんなんっ!？」

俺の言った一言に明らかに動揺する明久。

「どうにかならないの!？」

必死で俺に懇願してくるがおそらく俺が行った言葉の意味を履き違えているのだろう。

「落ち着け明久。俺がどうしようもないといったのはこんな写真を撮ろうとする犯人のことを言っただけだ。」

「それって遠まわしに僕がどうしようもないって言ってるよね・・・」

明久は俺の言葉を聞いてあからさまに落ち込んだ。

まあ、実際そうだし・・・

「二人とも落ち着くのじゃ。そういつことはムツツリーニ聞いたほうがよいのではないかのう?」

俺たちがまったくもって無駄な会話をしていると、秀吉がそんなことを言った。

・・・なるほど。

「・・・蛇の道は蛇ってことか。」

確かにいい案だ。

あいつなら分かりそうだし。

「・・・ムツツリーニ？なんで？」

・・・明久は相変わらず理解してないようだが。

「ムツツリーニならこういうことに詳しいじゃろうが。」

秀吉が、そんな明久に説明すると、明久は目を輝かせた。

「さすがは僕のお嫁さんだね、秀吉！」

「んなっ！！（気持ちは嬉しいのじゃが）婿の間違いじゃろうが！！」

明久のジョーク（？）を顔を真っ赤にしながら否定する秀吉。

・・・なんだかなあ。

「・・・お前らさあ、いちやつくのはいいけど、ムツツリに相談しにいかねえのか？」

「あ、そうだね。」

俺の言葉でやるべきことを思い出した明久は、ムツツリのところへ向かった。

「わわわワシはイチャついてなど居らぬぞ！」

「はいはい。」

「確実に信じておらぬな・・・」

秀吉は、若干落ちこみながら明久に続いた。

第四百四十話（後書き）

謙太「次回を楽しみに。」

第四百一十一話（前書き）

サッカーやべえ・・・
8 0ってなんなんだよ・・・

第四百一十一話

ムツツリは、屋上で雄二と何かを話していた。

なかなか珍しい組み合わせだな。

「ムツツリーニ、実は相談が」

「後にしろ明久。俺が先約だ。」

明久がムツツリに相談しようとしたところを、雄二に止められた。

「・・・先約？」

「どうしたのじゃ、雄二。」

俺と秀吉が訳を尋ねる。

「・・・どうやら、ここにいるのは何かワケありのようだな。

「・・・雄二の結婚が近いらしい。」

ムツツリが簡潔に説明する。

何事・・・？

「な、なんだ、そんなのもう決まってることじゃないか。」

ピクツ

明久がつまらなさそうに言った言葉に、雄二が反応する。

まあ、たしかに明久の言葉は否定できないが、おかしいと思えよ・・・

・

「明久よ、少し言いすぎだと思ふのじゃが・・・」

秀吉が若干苦笑いしながら明久を止めるが、それでも止まらない。

「いや、もうこれは決定事項なんだよ秀吉。というか、あんなに綺麗な人に結婚を迫られていて断る雄二は馬鹿なんだよ。」

「まあ、確かに否定はできないな・・・」

前半はともかく、後半は否定できないのだが・・・

フルフルフル・・・

フルフルフル・・・

明久が次々と放つ言葉で、雄二の怒りのボルテージがどんどん上がっていく。

「そんなどうでもいいことより、僕の方が大変なんだよムツツリー

二！このままじゃ、女装趣味の変態にされちゃう」

「お前の変態こそ今更だろうがボケエツ！！」

雄二が、すごい形相で怒鳴りながら振り向いた。

あ、雄二のリミッターが外れた。

「なんだと！？あんな綺麗な奥さんをたぶらかしてる妻帯者のくせにつ！大人しく人生の墓場に帰れエツ！！」

明久も負けじと応戦する。

・・・明久にしては難しい言葉を使っていて面白いな。

「二人とも、落ち着くのじゃ！」

「ここまで馬鹿にされて、落ち着いてられるか！とつととメイド喫茶に帰れこのド変態明久！！」

秀吉の静止も無視して罵詈雑言を浴びせ合う二人。
うわー・・・

両方と目的を射てるから反論できないんだよね・・・

「なんだとこのこぶ付きがあっ！」

「黙れこのニューハーフがあっ！！」

「・・・お前ら、その言い合い楽しいのか？」

「ぐうううううっ・・・！！」

・・・さんざん罵りあった拳句、俺の一言がきっかけでお互いに目に涙を浮かべ出す始末。

全く、本当にアホだな。

「・・・傷つくだけならお互い黙ってればいいのに。」

「まあ、こつこつ奴らだからな。」

「・・・アホな奴らじゃ。」

俺達は一様に若干呆れ、ため息をついた。

「で、雄二は何があったのじゃ？」

口喧嘩も終わり、少し落ち着いてきたところで秀吉が切り出した。

「ああ、じつはだな・・・」

そう言つて懐からMP3プレイヤーを取り出した雄二。

「これなんだ。」

そのMP3プレイヤーを俺たちに見せる雄二。

「・・・自慢？」

「ちげえよ！」

なんだ・・・

これを持つてることを自慢してるのかと思った。

「これは翔子の物だ。」

そういつた雄二は、おもむろに何かを操作する。

・・・霧島？

「雄二、まさか霧島さんの」

「黙れ馬鹿。」

「ひどい！」

明久が何か言おうとしたのを雄二が一蹴する。

「こいつはどうでもいい。重要なのは中身なんだ・・・」

そう言いながら雄二が再生ボタンを押す。

すると、流れてきたのは音楽ではなく・・・

『愛してる、しょーこーこーこーこー！！』

どこかで聞いたような声が聞こえてきた。

「これは・・・召喚大会のときのワシのモノマネじゃな。」

「ええっ!?!?・・・あはは、霧島さんはかわいいねえ。そんなセリ

フを記念にとつておきたいなんて・・・」

秀吉のその言葉に、明らかに動揺する明久。

まあ、こいつが原因だしなあ・・・

「だが、これがどうしたんだ？」

「一応付き合つてるんだし、これを録音するくらいなら本当に可愛い

ものじゃないか？」

「・・・婚約の証拠に父親に聞かせるらしい。」

「ああ・・・なるほどな・・・」
俺の質問に、雄二がぐったりしながら答えた。
・・・っというかさすがは秀吉の声真似。
この様子だと、おそらく霧島は未だに気づいていないと見た。
恐ろしいな・・・

「けど、これとムツツリー二にはどういう関係があるの？」
そこで、明久が疑問を切り出す。

珍しく良い所にきづいたな。
「なんの関係もないんじゃない？別にボイスレコーダーとかを使えば」

「重要なのはそこなんだ。」
「へ??？」

雄二は、明久の言葉を遮っていった。
重要？

「・・・雄二、どういう意味だ？」
ムツツリが話に食いついた。
そういえばこいつへの依頼だったっけ。

「翔子は機械音痴なんだ。その翔子が録音したとは思えない！」
ムツツリからの疑問に、雄二はそう断言した。

「・・・なるほどな。要するに、録音した犯人を見つけて欲しいということだろ。」
霧島ができないということは。誰かが霧島にプレゼントしたというのが一番高い可能性だ。

「ああ。蛇の道は蛇だと思ってな。頼む、ムツツリー二。」
「・・・そっちは引き受けた。で、明久の相談は？」
ムツツリが、明久に話を振る。

すると、明久は妙に神妙な顔つきになり・・・

「実は・・・僕のメイドパンチラが全世界に流出しそうなんだ・・・」

・・・頓珍漢な回答をした。

「・・・??何があつた?」

明久の言葉に疑問符を浮かべるムツツリ。

「ああごめん、はしよりすぎた。要するに・・・」

そう言つて明久は事の顛末を説明した。

「・・・ふむ。」

ムツツリはそれを聞いて頷き、そして一言。

「・・・興味ない。」

「なしてえっ!?!」

見事に切り捨てた。

おお、ムツツリも俺と同じ思考回路か。

「・・・冗談。写真を見せて。」

「だよね・・・びっくりしたよ。」

ムツツリの言葉に安堵した明久は、懐から例の写真を取り出した。

「・・・」

ムツツリはそれを受け取り、集中して写真を見出した、

「黙々と写真を見られると恥ずかしいんだけど・・・」

明久がバツが悪そうに頬をかきながらいった。

「・・・これはっ!?!」

そんな明久の言葉を無視して見ていたムツツリは、突如大声を張り上げた。

「ど、どうしたのムツツリーニ!?!」

ムツツリの突然の行動に驚く明久。

俺が見た写真にはそんなに驚くものは写って・・・いなかったと言えは嘘になるが。

「うっつ・・・」

ムツツリは地面に倒れ込み、そして一言。

「・・・俺のより、ベストアングルっ!?!」

「うわあぁっ！！身近にも伏兵が！？」

明久がそんなムツツリの反応を見て絶望する。

・・・こいつも盗撮犯だったか。

「・・・安心しろ明久。俺は無料で撒いたりしない。」

「有料ならまくんだ！？」

胸を張ってそういったムツツリだったが、撒くのに違いなかった。

「・・・撒くんじゃない。売るんだ。」

「大した違いはないよ！」

明久が、涙目になりながらムツツリに突っ込んだ。

・・・はぁ。

第四百一十一話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第四百二十二話（前書き）

なかなか進みません・・・

第四百十二話

「……という訳だけど、頼めるかな？」

事態が落ち着き、改めてムツツリに頼む明久。

「……」

さすがにいきなり二つは厳しいと思ったのか、ムツツリは少し顔をしかめている。

まあ、自分には何ら関係の無いことだからな……

「……ムツツリー」

そんなムツツリに、雄二がこう言った。

「今回の件、恐らく何か関係があると思う。明久の分もなんとか調べてくれないか？」

「雄二……」

雄二の言葉に少し驚く明久。

確かに雄二にしては珍しく、明久に助け舟を出した形だが……まあそんなことはどうでもいい。

「……すまない、俺にも色々予定があるから……。」

しかし、ムツツリはよほど大事な予定があるのか、なかなか首を縦に振らない。

「……もう限界じゃないか？」

「そうか……なら仕方ない。」

雄二はとうとう折れたのか、なおも渋るムツツリにこういった。

「もし調べてきたら、明久の秘蔵本を」

「……必ず調べておく！」

雄二が言い終わる前に即答したムツツリ。

「……それでこそムツツリスケベだ！」

「よし、交渉成立だな。」

そう言つて、気合を入れるように手のひらを拳で打つ雄二。

「あはは……ちょっと痛いけど、まあしょうがないよね。」

明久も、少し苦笑いしながらその契約を了承した。

「・・・（ムスッ）」

そんな会話を、少し複雑そうな表情で見つめていた秀吉。

「・・・謙太よ、男にとって、エロ本とはそんなに重要なものなのか？」

そして何を思ったのか、突拍子もない質問をしてきた。

「さあな、俺に聞くなよ。」

「・・・そうじゃったな。」

俺がそつけない返答をすると、なぜか落ち込んだ秀吉。

「・・・あの会話に混ざりたいのか？」

「いや、そういうわけではないのじゃが・・・」

そんな秀吉を見ていった俺の質問に、秀吉は首を振った。

・・・それならいいのだがな

「・・・以上で、学力強化合宿の説明を終わる。何か質問がある奴はいるか？」

終業のHR時、明日の強化合宿についての説明が行われた。

「気をつけるよ。クラスごとに集合場所が違うからな。」

鉄人が注意するようにいい、なんとなく集合場所の欄を見・・・なんだとっ!？

その欄を見て思わず身体が硬直する。

「どうせAクラスはリムジンバスで行くんだろ、なあ・・・どうしたんだ謙太？」

「ワシらは狭いマイクロバスかのう・・・謙太よ、どうしたのじゃ？」

どうやら、雄二と秀吉が俺の引きつった顔に気づいたらしい。

「……これを見る。」

俺はそう言っつて二人に集合場所の欄を見せる。

「どれどれ……んなっ!？」

「なんじゃと!？」

案の定、それを見た二人も固まる。

そして……

「おい鉄人! どうして俺たちだけ現地集合なんだよ!!」

「……なんだと!？」

雄二の言葉でクラスの全員が鉄人を見る。

全員の視線を浴びた鉄人は……

「あー、それはだな……予算削減だ。」

「……オイッ!!」

大人の事情を暴露しやがった。

そんな全員で突っ込むが、もはやどうしようもない。

「ハア……」

なんなんだこの格差は……

第四百二十二話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第四百二十三話（前書き）

えつと・・・

先に書いておきますが、井上先生が書いた一個目はともかく二個目は完全に僕のアイデアなので、学校とかで披露すると痛い目にあいます・・・多分。

第四百十三話

そんなこんなで当日。

結局電車で行くことになり、電車に揺られる俺たち。

「楽しみじゃのう。」

「・・・楽しみ。」

電車の乗り合わせは、秀吉、ムツツリ、須川の三人だが、須川は既に熟睡モードに入っているため、俺たち三人で話している。

・・・さつきから、秀吉&ムツツリがウキウキしているが、こいつら遊びのつもりだろうな・・・

「しかし、卯月高原か・・・」

俺は、旅のしおりを読みながらボソリとそうつぶやく。

「あそこは確か、おしゃれな避暑地じゃのう。」

「・・・ホテルも豪華。」

そう言ったムツツリが、どこから持ってきたのか分からない、今回泊まる予定のホテルのパンフを俺に渡す。

「・・・へえ。これは結構なりゾートホテルじゃねえか。」

俺は素直な感想を言った。

一見すると、ただのリゾートホテルにしか見えないし、やっぱり結構金持ち学校だなと改めて思わされた。

「じゃろ？楽しみじゃの。」

秀吉が、さつきから少しそわそわしている。

・・・もしかしたら、秀吉はこういったみんなでお泊りみたいな経験が少ないのかもしれないな。

「・・・これでやっとワシが男じゃということが証明出来るからの

お。」

前言撤回。

コイツ、明久や雄二に裸を見せることしか考えてねえ・・・

「全く・・・そんなことしなくても、お前は男だろうが・・・」

そんなツッコミをつぶやきながら、大きくため息をついた。

電車に乗り始めて約一時間。

「はあ……」

話題も尽き、すっかり暇になってしまった俺たち。

ムツツリ、須川は寝ていて、秀吉はなにやら雄二たちの会話に参加している。

暇を持て余さないように、ひとまず寝ようとしたが……

「惨たらしく死になさい。」

「僕の罵倒エスカレーターしてない!？」

アホな会話が聞こえてきたから、俺は秀吉と同じように、明久たちの座席に向かって顔を出した。

「……ムツツリを踏んでいる気がするが、まあいいや。」

「……なんの話をしてるんだ?」

「あ、ちようど良かった。」

俺が声をかけると、美波に何かを言っていた明久が俺に気づいてそう言った。

「……ちようどいい?」

「ねえ美波、さっきの二つの質問、謙太にもやってあげてよ。」

「質問?質問って、勉強の?」

明久の言葉に疑問を感じ、俺はそう聞いた。

「……まあまさか、姫路以外のメンバーがここで勉強するとは思えないが。」

「いや、心理テストだよ。……ほら美波。」

明久がそういって、美波を促した。

心理テスト、ねえ・・・

「じゃ行くわよ。第一問。次の色でイメージする異性を上げてください。一、緑。二、オレンジ、三、青。」

美波はそう言うのと、少し期待した目で俺を見た。

いや、よく見ると、みんながそんな目で見ていた。

・・・やりづれえ。

「あー・・・」

俺はそう言っで心を落ち着かせると、質問に答えた。

「緑は・・・霧島、姫路のどちらかかな。」

やっぱ緑は優しさの緑だし。

・・・まあ霧島はクールだから青でも良かったんだが。

「黄色は・・・愛子、美波のどちらかだな。」

やっぱ明るい感じがするし。」

「で、青は・・・優子か？」

これだけは理屈じゃなくて、なんとなく青といったら優子なんだよな・・・

「へえ〜？」

「な、なんだよ・・・」

俺の答えに満足したのか、美波がなんか温かい目で俺を見てくる。

「で、色の意味は？」

俺は美波に言った。

・・・やっぱ、これ聞かないと意味ないからな。

「え・・・続きまして第二問！」

美波は、俺の言葉に一瞬戸惑い、その後何事もなかったかのように続けた。

「いえよ・・・」

俺は若干呆れながら言ったが、美波は耳を貸す様子がない。

・・・まあいいや。

「1〜10の数字で、あなたが浮かべたものを一つ順番に言いなさい。」

第二問はそんな内容だった。

あーっと・・・

「4と5だ。」

「ふむふむ。」

美波はなぜか破れた心理テストの本を見ると満足そうな顔をして行った。

「最初は普段みんなに見せてる顔で、4はめんどくさがりで常識人ね。」

へえ、俺って常識人なんだ・・・

俺が少し驚いていると、続いて二つ目の数字の意味を言う美波。

「次はあまり見せない顔だけど・・・不器用だけど素直、そして一途よ。」

「んなつ・・・」

俺は思わず顔が赤くなった。

一途って・・・恥ずっ!!

「くくくニヤニヤ」「くく」

「見るな!そんな目で俺を見るな!!」

俺は皆の暖かい目から逃れるように自分の椅子に座った。

恥ずかしい・・・

第四百四十二話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに」

第四百四十四話（前書き）

バカテスいつの間にか完結してた・・・
録画したつきり見る暇なかったからな・・・
取り敢えず、おめでとうございます！
早く小説の10巻がみたいですな！

第四百四十四話

「……。」

「起きたようじゃな。」

しばらくして、ムツツリが目を覚ました。

「おっ、ムツツリーニ。おはよう！」

明久が軽快に挨拶をする。

「……空腹で目が覚めた。」

明久を一瞥したムツツリは、そう言って自分のバックを探り始める。

「……そういえば、もう昼か。」

どろりで腹が減ると思った。

俺はバッグを膝の上に置き、バッグの中を探る。

ガサガサ……

ガサガサ……

「……ヤベエ、忘れた。」

俺は、自分のバッグに弁当を入れていないことに気づいた。

確かに入れたはずなんだが……

「あー……もしかして優希のバッグに……??」

俺は、一つの可能性を思いつき、ガツクリと肩を落とした。

だとしたら、昼食抜きしかないな……

「ん、んむ？け、謙太よ、も、もしかして弁当を忘れたのか??」

秀吉が戦々恐々とした顔で俺に尋ねてきた。

「ああ。実はな……」

俺はそこまで言って、ひとつの案を思いついた。

……カンパをもらうか。

俺はそう思い、秀吉にダメ元で聞いてみた。

「そうだ秀吉、よかつたらちよつとカンパを……」

「姫路よ、（ちようどいいタイミングで）謙太は昼食を忘れてしまつたようじゃ。」

俺の言葉を無視して、秀吉が明久たちの方へ何かを言う。

・・・姫路？

「そうなんですか？だったらこれをひとついかがですか？」

そう言つて、姫路が満面の笑みでサンドウィッチの入ったバスケットを俺に差し出してきた。

・・・えーと、姫路さん？

何か腐臭っつーか腐卵臭っつーか、化学の実験で香ってそうな匂いがしているのですが？？

「姫路、ちなみにこれの具材は・・・？」

一応、劇物が入っていないかどうかを聞いてみる。

「秘密です？」

が、さらりとかわされる。

・・・クソオツ！！

「そ、そうか・・・」

くそっ、このままじゃ合宿所につく前にあの世に着いちまう・・・
何か策は・・・?!

「そ、そうだ姫路！せっかくだし、一番最初は明久に食べてもらったらどうだ？」

「ふえっ！？そ、それは・・・」

苦し紛れではなった言葉だったが、思いの外クリーンヒットしたな。
・・・イケルっ！！

「お前が心を込めた料理なら、明久だつてイチコロだぞ！」

うん、ストレートな意味でイチコロです。

「・・・そうですよね！私殺ります！」

姫路は俺の言葉を受けて決意した方だ。

やりますの発音がおかしかったが・・・まあいいか。

とりあえず・・・合掌。

『明久君！どうぞ！！』

『えっ、姫路さん！？分かった！自分で食べるから口に詰め込まないでうぼあっ！！』

『・・・』

『・・・あれ？明久君、もしかしてお気に召さなかったですか？』

『大丈夫だ、姫路。明久はあんまり旨いもの食ったから眠くなったんだ。』

『そうなんですか・・・ふふ、可愛い寝顔ですね。』

『瑞希！一人だけずるいわよ！・・・私もアキに食べさせたかったのに。』

『美波ちゃん・・・』

『アキの悶え苦しむ姿が見たかったのに！！』

『美波、ちゃん・・・？』

『・・・さよならじゃ。』

『・・・今まで楽しかったっ！』

『木下君に土屋君、どうしたのですか？』

『・・・いや、なんでもない。』

第四百四十四話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに」

第四百四十五話（前書き）

ようやく復活です！

テスト終わるまで長かった・・・

昨日まではIPHONEでツイッターしてましたよ・・・

まあ結果は散々だから別にいいんですけど・・・

これからもよろしく願います。

第四百十五話

『卯月高原、卯月高原、お出口は左側です……』
車内にアナウンスが響き、電車が停止したことでようやく目的地に着いた俺たち。

「やっと着いたわね〜」

美波が大きく伸びをしながら電車を降り、そう言う。

「のどかそうで良いところですね。」

姫路は、電車を降りて辺りを見渡し、感慨に浸っているようだ。俺たちも本来はそうしたいところなのだが……

「……明久を早く部屋に！」

「……それどころではなかった。」

「秀吉、明久を運んでくれ。」

「わかつているのじゃ！」

秀吉が頷き、明久の腕を持つ。

「……やけにルンルンなのが気になるが、まあいいか。」

「雄二は秀吉を手伝ってくれ。」

「あー……分かった。」

雄二は気だるそうに返事をしながら、明久を担ぎ上げた。

流石は筋肉バカ、力だけは余るほどあるな。

「……謙太、お前今無礼なこと考えなかったか？」

「まっさかー？」

「……カンがいい奴だ。」

「行くぞ秀吉。」

秀吉を引き連れて合宿所へ向かおうとする雄二。

「雄二、ワシが持てぬではないか。」
それを秀吉が止めた。

「・・・わざわざ持ちたいなんて、何がしたいんだ？
ん？別にいいだろ？」

雄二も俺と同じ考えなのか、眠そうに欠伸をしながら答そう答えた。
「ワシだつて持ちたいのじゃ！」

珍しくワガママを言う秀吉に、若干興味をそそられた様子の雄二が、
目を光らせた。

「・・・ほう、何故だ？」

「そ、それは・・・」

やはりというかなんというか、秀吉は答えに詰まる。

「特に理由はないんだろ？じゃ、早く行くぞ。」

雄二は、秀吉を気遣ってかそう言つて、再び歩き出した。

「むう・・・」

秀吉は不服そう唸りながらも、渋々後に続いた。

・・・最近秀吉の考えが読めねえ。

「ムツツリ、おまえは早くAEDを。」

「・・・」

俺はムツツリにも指示を出すのが、反応がない。

「・・・ムツツリ？」

呼びかけるが返事はない。

・・・面倒な。

「あ、あそこにミニスカ女子校生が！」

俺がそう言つて適当な方向を指さすが、それでも反応がない。

・・・おかしいな、姫路の料理でも食つたのか・・・？

少し心配になり、ムツツリに近寄る俺。

「おい、ムツツ」

「+*\$#%ーーー」

「ギャアアアアアア!!」

俺がムツツリの顔をのぞき込んだ途端、ムツツリは俺の顔面に向けて嘔吐した。

なんだよコレ!?

「ななななにするんだオマエオイテメエ!?!」

まさかの事態に気が動転しながらもムツツリにキレる俺。

・・・顔がクセエし!!

「・・・電車酔い。」

口元の汚物を拭いながら答えるムツツリ。

・・・電車酔い?

「そんなのあるかあああああ!!」 あります

聞いたこともない言い訳に再びキレる俺。

「テメエどうしてくれるんだよ!」

そう言っただけ俺が詰め寄ると、ムツツリは俺から距離をとるように離れた。

「・・・どういうつもりだ?」

「・・・済まない。けど臭いから近寄らないでくれ。」

「・・・お前の所為だアアアアア!!」

ムツツリの理不尽な要求に三度キレた。

・・・どうしてくれるんだ本当に。

「・・・取り敢えず合宿所に行くぞ。そうすればシャワーがある。」

ムツツリは俺をいなすようにそう言っただけ歩きたした。

「クツ・・・覚えとけよ・・・」

最後の最後に正論を言われて言葉に詰まりながら、俺達は合宿場へ向かった。

第四百四十五話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第四百四十六話（前書き）

相変わらず眠い・・・

第四百十六話

卯月高原、合宿所内にて・・・

「あーあ、ヒデエ目にあつた・・・」

シャワーを浴び終え、ようやく一息ついた俺。

手には例の汚物まみれのワイシャツを持っている。

「この制服、洗濯機とかにぶち込みてえんだけどな・・・」

そんなことを呟きながら、俺はまだ慣れない合宿所内を歩く。

今は、着替えがなかったからしょうがなくという理由で、備え付けの浴衣を着ている。

「もつやることなくなつたんだよな・・・」

先生たちに無理を言つてシャワーを借り、汚物を洗い落とした俺は、端的に言つと・・・暇だった。

いや、正確に言えば暇ではないが、いそいで風呂まで走ってきた所為で自分の部屋がどこかも分からず、こうしてうるついている次第だった。

「明久が無事生還してればいいんだけどな・・・」

何も考えずにうるついていると、ふと少しだけ友人の安否が心配になった。

・・・が、当然部屋がわからない為行きようがない。

「さて、どうしようか・・・」

俺は一度立ち止まり、辺りを見渡してため息をついた。

・・・とりあえずは部屋を探るか。

まずは先生達を探すべきだと思い、俺は再び歩き始めた。

「……どこにも居ねえエエエエエ!!」
十分間探し回って、俺は文月学園の関係者を一人も探し出せなかった。

普通ここまで探し回ったら一人くらいには出くわすだろ!?

「どうすりゃいいんだよ……」

俺は、そう言つてガツクリと肩を落とした。

……高校生にもなつて、迷子になるとは思わなかった。

『……何だ? やけに騒がしいが……』

俺がガツクリうなだれていると、近くの部屋から聞き覚えのある声が聞こえた。

……もしかして!

「何があつ」

「てつつじーん!!」

「佐藤!? なんなんだ一体!？」

俺は、相変わらず凄みのある顔をした鉄人をものともせず、その胸筋に飛び込んだ。

いやー、良かった。

てつきりこのまま一生こうしている羽目になるかと思った。

「……なんだお前。」

外国で日本人にあつたときに感じる妙な親近感と同じようなものを存分に味わっている俺に、鉄人が呆れ顔で問いかけた。

「ああ、すみません。迷子なんです。」

「は?」

事情を聞かれた俺が端的に説明すると、鉄人はもの見事に呆れ顔になった。

……まあ、高2で迷子なんて普通ねえからな。

「すみません、端折りすぎました。要するに……」

俺は事の顛末を鉄人に話した。

「ふむ、迷子か……」

それを聞いた鉄人は、俺の説明を理解できなかったのか、何かを考え始めた。

「……そういうわけで、部屋が知りたいんですよ。」

「……ハア、やれやれ……」

俺の言葉に、鉄人は呆れたように頭に手をつき、そして……

「どうして俺の生徒はこんなにバカばかりなんだ……」

小さくそうつぶやいた。

……申し訳ない。

「302、302……」

俺は、鉄人に教えてもらった番号を頼りに、再び部屋を探し始めた。番号が分かればあとは早い。

「……ここだな。」

302、ようやく俺は部屋の番号を見つけた。

「……うーっす。」

『えっ』

俺は適当にドアを開け、絶句した。

『……謙太？』

「……優子？」

そこには……下着姿の優子が居た。

第四百四十六話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第四百七十七話（前書き）

活動報告にバトンを書いたので、よかったですらどうぞ

第四百七話

「・・・何やってるのよ。」

優子が冷たい目線を俺に向けながら言う。

今はもう制服に替えているが、まだ顔の赤みは消えていない。

「すみません・・・」

そんな優子に、俺は誠心誠意の土下座をしたまま言った。

・・・本当に申し訳ないと思う。

「入る前にノックぐらいしなさいよ。」

「はい・・・って怒るところですか!？」

優子の言葉に違和感を感じ、思わず顔を上げ聞き返す。

ここは普通女子部屋に入ったことを怒るところじゃないか？

しかし、俺の言葉を聞いた優子は、面食らったような顔になった。

「え？他にどこがあるっていつのよ。」

優子はきょとんとしたまま言った、

どうやら、本当に疑問に思っているようだ。

「いや、ここはどう考えても女子部屋に入ったことを怒るだろ？」

「え？」

俺が思ったとおりの言葉をいうと、再びきょとんとする優子。

・・・パニックで何かを勘違いしてるみたいだな。

「いや、え？じゃなくて」

「何言ってるの、謙太の部屋はここよ。」

優子が、こいつ何言ってるんだとでも言いたげな目で俺を見て、そう言った。

・・・ん？

「・・・どづいつことだ？」

「どづいつも何も、あんたの部屋は」。

俺の疑問に、優子がそう答えて下を指さす。

「・・・マジか？」

「うん。」

即答。

・・・おかしいと思っっているのは俺だけか!?

「なんでこんなことに・・・」

俺は土下座のまま頭を抱えた。

おかしい、どう考えてもおかしいだろ!!

「本当は、AクラスとFクラスが相部屋になるはずだったんだけどね・・・」

優子が、そんな俺の様子を見かねて言った。

「Fクラスは姫路さんと島田さんだけで、私たちの部屋の人数が少なかったのよ。」

「だからって男が来たらまずいだろ・・・」

優子の説明にイマイチ納得できないまま、取り敢えず起き上がる。

このいやらしい手口、ババアの仕業か・・・

「まあ、私たちが『是非!』っていったんだけどね。」

「原因はお前か!」

優子がポロリとこぼしたカミングアウトに思わず突っ込む。

結局お前かよ!!

「だって・・・HRで学園長に頼まれたから、だったら私たちが」

「ちょっと待て、ほかの女子にまで頼もうとしたのかあのババアは・・・」

思わぬ優子の言葉に、大きなため息が出る。

・・・冗談じゃねえよ。

「結構大変だったんだからね? 思いの外人気でびっくりしたわよ。」

「え、本当か?」

優子の言葉に、思わず声色が明るくなる。

そんなに人気だなんて、俺もまだまだ捨てたもんじゃないな。

「・・・何よ、やけに嬉しそうじゃない。」

そんな俺の態度を見た優子が、少し気分を損ねたように言った。

「まあ、人気だって言われて喜ばない奴はいないだろ。」

むしろ嫌われてるかとはかり思ってたし。

「それはそうだけど・・・」

俺の言葉に、優子が残念そうな顔をした。

「・・・ちよつとフォローを入れておくべきだな。」

「・・・まあ、優子と同じ部屋になれてよかったよ。」

「ほんと!？」

そう言つと、さっきまでとはうって変わって顔を輝かせる優子。

「・・・ちよつと照れくさいな。」

「ああ。三日間よろしくな。」

俺がそう言つて手を差し出すと、優子は満面の笑みで俺の手を握り、

「うん!」

大きく頷いた。

第四百七十七話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第四百四十八話（前書き）

テストの結果が返ってきた！

結果は・・・なんと国語が学年一位！？

これを書いていた成果かもなーなんて思った。

というわけで合宿編どうぞ・・・

第四百八話

お互いベッドに腰掛け、しばらくほのぼのと談笑していると、ふいにあることを思い出した。

「・・・そういえば、俺の鞆は？」

よく考えたら今は浴衣だ。

さすがに強化合宿でこの格好はよくねえだろうし・・・

「ああ、たしか・・・クローゼットじゃないかな？」

クローゼット、か・・・

女子部屋ってかなり近代風なんだな・・・

俺は少し感心し、バッグを探すついでに改めて部屋を見渡してみた。

部屋にはテーブルにベッド、机の上には備え付けの菓子まである。

やっぱり素直に豪華だな・・・

「このクローゼットの中か？」

俺は、部屋の奥の方にあつたクローゼットを指した。

「あーっと・・・多分。」

優子の不確定な返事を受け、俺はクローゼットを開けた。

「・・・」

そこには、確かに俺の鞆があつた。

・・・その横には優子の下着が散らかっていたが。

「・・・優子、これは一体なんの拷問だ？」

「あつ！？」

優子は、俺の呆れた顔を見てようやくそのことに気付いたらしい。

「見ないで！！！」

ゴキッ！！

「へぶっ！？」

素早く俺の首を曲げる優子。

首が嫌な音を立て、猛烈に意識が遠くなる。

・・・悪魔かつ！！

「何・・・を・・・」

俺は、薄れゆく意識の中で優子を呼ぶ。
理不尽すぎるぞさすがに・・・

「しばらくそこで寝てて!!」

「ヒドいなおい・・・」

俺は一瞬苦笑いを浮かべ、意識を手放した・・・

「謙太、おきてっ!!」

折角気持ち良く失神していたのに、突然優子にやり起こされた。

「・・・どうしたんだよ優子。」

俺は、重いまぶたを無理やりこじ開け、優子を見た。

「・・・その目は怒りに打ち震えている。」

「アンタがよく知る男子三人が、女子の脱衣所にカメラを仕掛けたのよ。」

優子が、できるだけ冷静にそう言った。

「・・・なんだ、そんなことか。」

「へえ・・・」

俺は適当に返事して、再び眠りにつこうとする。

「寝ちゃダメ!」

「うがつ!!」

が、さつきとは逆方向に首を曲げられ、無理やり起こされる。

「・・・さつきはそれのせいで寝ただけど!？」

「・・・どうせ明久たちだろ?」

三人というのなら、明久、雄二、ムツツリ以外に考えられない。

「そう。だからその人たちを懲らしめてきて欲しいのよ。」

優子がそう言って手を合わせる。

「・・・へいへい、りょーかいです。」

俺は、適当に返事して部屋を出た。
アイツら、また面倒なことを・・・

俺は、優子に教えてもらった部屋番号を頼りに明久たちの部屋にたどり着いた。

・・・ここか。

「おいこら明久、お前また面倒なことを・・・？」

俺はそう言いながら部屋に入り・・・絶句した。

「」「ううっ・・・」「」

そこには瀕死の3人と、呆れ顔の秀吉がいた。

「・・・何やってるんだ？」

俺は思わずそう言いながら畳に腰掛ける。

「おお、謙太。実はこやつら、覗きと間違えられたのじゃ。」

秀吉が、端的に説明する。

・・・ん？

「間違えられた？」

思わずそう聞き返す。

・・・こいつらが覗きじゃないのか？

「もちろん、まだ覗いてないよ・・・」

「・・・見つかるようなへまはしない・・・」

明久とムツツリが畳に突っ伏したまま言う。

「その返事はギリギリだと思っぞ・・・」

「・・・そういうこと言ってるから疑われるんだ。」

俺達は、同時にため息をついた。

第四百四十八話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第四百十九話（前書き）

えっと・・・今回はちょっと異質です。

美春の謙太ファン設定を思い出して書いてみました。

学園祭編の『第八十四話』に乗っているので、気になる方は見てみてください。

・・・まあ、ここから先にどうするかはまだ全く決まっていなくてすけど。

それではどうぞ・・・

第四百十九話

「・・・上等だ。」

雄二が、不意にふらりと立ち上がった。

「どうした、雄二?」

「あつちがそう来るのなら、こっちもやってやるうじゃねえか!」

雄二が、目に決意の炎を灯しながら言った。

「ハア・・・結局そうなるのか。」

「雄二・・・まさか!」

「ああ。本当に女子風呂を覗いてやる!」

雄二は明久に向けてそう言い放った。

「・・・やっぱり。」

「・・・雄二。」

明久は、そんな雄二の思いを理解して頷き・・・

「そんなに霧島さんの裸が見たいなら、直接頼めばいいじゃないか。」

「

「・・・いや、全く理解していなかった。」

「ば、バカ!翔子の裸になんて興味ねえ!!」

雄二は、そんな明久の言葉を顔を真っ赤にして否定する。

「・・・コイツ、まんざらでもなかったな?」

「・・・例の尻に火傷があるという犯人探しか。」

「ああ。」

秀吉が言った言葉に頷く雄二。

「・・・尻に火傷?」

「・・・お前ら、女子のケツなんか見て一体何をやっているんだ?」

俺は、思わず四人に問いかけた。

「・・・犯罪臭がするのは俺だけか?」

「ああ、そういえば説明していなかったな。」

そう言って、雄二は簡単に説明をした。

「・・・へえ、で、その犯人探しにのぞきか・・・」
発想が安易すぎる・・・

「覗きはさすがにやりすぎかと思ったが・・・向こうがそう来るなら遠慮は無用！思う存分覗いて犯人を見つけてやる！」

雄二が、少し目を輝かせながらそう言った。

あ、本音が出たな・・・

「と、言うわけで・・・」

雄二は、爽やかな笑顔で俺の方をつかんだ。

・・・この先は予想できる。

「一緒にのぞきをしようぜ！」

「却下。」

雄二の誘いを即答で断った。

「なんだとオオオ!？」

あからさまに驚く雄二。

いやいや、俺の普段の行いを見てればわかるだろ・・・

「お前、それ本気で言ってるのか!？」

「本気じゃなきゃなんなんだ。」

「お前それでも男か？」

「いつぺん女になった。」

「あーもうこの意気地なし！男なら根性見せる！」

「やだ。面倒。」

俺は、雄二の誘いを頑なに断った。

「・・・そうまで言われちゃしょうがねえ。」

雄二は、そう言ってくるりと背を向けた。

・・・お前のしつこさは分かっている。

「・・・こうなりゃ実力こうへブツ!!」

振り向きざまに裏拳を繰り出そうとした雄二の顔面にハイキックを放つ。

「綺麗に入ったなー。

「雄二!？」

明久が驚きながら、吹っ飛んだ雄二に駆け寄る。

「・・・悪いな。なんと言われようと協力することはできない。」

「・・・何故？」

そう言っただけで去ろうとした俺を、ムツツリが未だに引き止めようとする。

「・・・優子と同じ部屋になったんだ。」

俺は顔をそらしながら言った。

「・・・済まない。」

ムツツリはすべてを察したように頷くと、もう何も言わなかった。

「ただいま。」

俺は明久たちの部屋を出て、自分の部屋に戻ってきた。

「おかえり、お疲れ様ー」

優子がひよっこり顔をだし、俺をねぎらってくれる。

「・・・そういえば、この部屋って、俺と優子だけじゃないよな？」

「優子、この部屋って、俺たち以外に誰が来るんだ？」

俺は片付けをしながら、優子にそう問いかけた。

「ん？そういえば言っただけじゃなかったっけ・・・」

優子は記憶を探るように顎に手を当てた。

「ひとりは優希なんだけど、あと一人が、えっと・・・」

「ただいまですー!」

優子がそう言いかけたところで、優希の声がした。

「・・・どうやら風呂に行っていたらしいな。」

「おかえり、優希。」

「はい！いい気持ちでした！」

優希は出迎える優子に、上機嫌で言った。

「おう。」

「あれ？謙ちゃんも戻ってきてたんですか？」

優希がそう言っただけで俺のところに行こうとしたその時……

「謙太様……！！！」

「んなあつ?!」

なんか懐かしい声が聞こえ、俺は何者かに張り倒された。

「……美春？」

「はい！ずっと逢いたかったです！」

俺にもたれかかっているのは、あの美波大好き美春だった。

第四百十九話（後書き）

謙太「次回をおた」

美春「謙太様——!!」

優子「こら！離れなさいっ！」

優希「謙ちゃんは私のものですよお!!」

謙太「・・・嬉しいのは嬉しいんだけど、このツッコミがない現
状をどうすればいいんだ・・・？」

勇吾「次回をお楽しみに。」

第一百五十話（前書き）

美春回です！

第五十話

「……いろいろ聞きたいことはあるけど、とりあえず離れてくれ。」

俺は俺の腰に抱きついている、美春を引きはがした。

「あう……」

美春はなおも抱きつこうとじたばたもがいている。

……どうい風風の吹き回しだ？

「……一体どうしたんだ？」

俺は美春を座らせ、最も気になっていた質問をした。

コイツ、男が大嫌いじゃなかったか？

「どうしたもこうしたも、美春は謙太様のファンクラブ会員ですよ。」

「あ……覚えがあるようなないような……」

そっぴいえばそんなものもあつたな。

すつかり忘れていた。

「そして……憧れの謙太様と一夜を過ごせるのですから、テンションが上がらないはずじゃないですか!!」

「あつ……おい!!」

美春は興奮してそう言い、再び俺に抱きついてきた。

「謙太様!!……こうして抱きつくのを見ました!!」

「分かった、分かったからとりあえず離れてくれ!!」

俺は、必死で美春を引き剥がそうとする。

若干大きいものがあたってすぐく気になるんだけど……

「美春ちゃん!離れるです!!」

「そっぴい!!とりあえず離れて!!」

優希と優子も手伝って、ようやく離れた美春。

「離してください〜〜!!」

なおもがく美春に若干の恐怖を覚えつつ、俺は美春に質問を続けた。

「お前、男は嫌いだったんじゃないのか？」

「謙太さんは女装が可愛かったから問題ないです。」

即答された。

「・・・心折れそうなんだけど。」

「じゃ、じゃあ明久」

「吉井明久!? あんな豚の名前を出さないでください! 汚らしい!」

明久の名前に対して拒絶反応を起こす美春。

この反応は少し過剰すぎる気がするが・・・まあ妥当だな。

俺は独り合点して頷き、質問を続けた。

「あいつも女装をしてただろ？」

「あんな豚、可愛くもなんともないですよ!!」

本当に明久のことを嫌いなのか、鳥肌を立てながら拒絶する美春。

「・・・やっぱり美波に好かれているからか？」

「お姉さまは関係ありません! 私は豚が嫌いなんです!」

「久しぶりに心を読まれたなオイ!!」

美波の恋心との関係も否定する美春。

「・・・さすがにもう理由が見当たらないんだが・・・」

「まあいいじゃないですか!・・・とにかく、この三日間よろしく
お願いしますね!」

美春は満面の笑みでそう言い、手を差し出してきた。

「・・・そうまで言われるとさすがに断れないな。」

「・・・わかった。よろしくな。」

俺は美春の手を取り、握手をした。

「ありがとうございます！！あの、ひとつ頼みがあるんですけど・・・」

俺が握手に答えたことに満足したのか、美春が珍しく顔を上気させながら言った。

美春が頼み事なんて、珍しいな。

「どうした？」

「・・・これから、お兄様って呼んでいいですか？」

美春は何かを決意したような目で言った。

「お、お兄様・・・？」

思わずオウム返ししてしまったが、どう考えても困る。

・・・再びFFF団の餌食にされても困るし・・・

「お願いします！」

美春は頭を下げて頼み込んだ。

・・・頼み込むようなことじゃないと思うんだけど・・・

「・・・しょうがないな。」

結局心が折れ、渋々了承した。

「はわ〜！ありがとうございます！」

美春は本当に嬉しそうにはしゃいだ。

・・・まあ、この程度ならな。

「それでは、よろしくお願いしますね、お兄様！・・・」
美春はそう言って、もう一度笑った。

第百五十話（後書き）

美春「お兄様ー！ー！！」

優子「・・・謙太のことよね？」

優希「・・・多分。」

謙太「ほっとけ。次回をおたの・・・うわっ！」

美春「おっにいさまあアアアアア！！」

謙太「分かったから離れてくれえええええ！！」

勇吾「・・・收拾つかなくなってきたけど・・・まあいいか。次回をお楽しみに。」

第一百五十一話（前書き）

異端審問会久々の登場。

・ ・ ・ 近藤出才子乙

第五十一話

美春とのちよっとしたほのぼののあと、しばらくして。

「そういえば、お兄様。」

美春が、ふと何かを思い出したかのように言った。

「ちよっと変な話を聞いたんですけど・・・」

「変な話？」

美春の突然の言葉に、思わず聞き返してしまう。

「はい。Fクラスの三人が、木下を配下に加えて覗きを試みたって。」

美春は、若干顔を歪めながら言った。

「へえ・・・」

「そういえばそんなことを言ってたな・・・」

「ちよっと確認してくる。」

俺はそう言って立ち上がった。

「そうですか、行ってらっしゃいませ。」

美春もあわせて立ち上がり、俺に向かって礼をした。

意外に礼儀正しい奴だな。

「あと、くれぐれも豚共にお気を付けください。」

「お、おう・・・」

敬語の中で一瞬感じた美春の殺気に、身震いしつつ部屋を出た。

再び明久の部屋。

「・・・まあ、ここまで来ると何と言っべきか少し悩んでいるのだが、とりあえず・・・」

「死刑！」

「いや、ちよっと待てえっ！ー！」

俺は死刑宣告をされていた。

・・・部屋を出たあと、明久の部屋に入ると同時にFFF団のアホどもに囲まれ、拘束された。

・・・面倒な奴らだ。

「何だ被告人・・・いや死刑囚、何か言い残すことはあるのか？」

須川が、俺の言葉を聞いて面倒そうに顔を上げた。

「ってかまさかの死刑確定!？」

須川の言動に、思わず突っ込んでしまう。

「・・・近藤一級査問官、続けたまえ。」

「はい。」

須川は、俺の反応を無視し、延々と俺の罪状を述べている近藤の話に熱心に耳を傾けている。

まったくもうどうしたらいいんだ・・・

「・・・以上、被告人佐藤謙太には17個もの罪状がありました。」

近藤がようやく罪状(?)を読み終え、顔を上げた。

・・・と言っても、例のよくわからないマスクをかぶっているせいで表情は読めなかったが。

「うむ、近藤一級査問官、ご苦労だった。」

須川は満足げに頷き、そして一言・・・

「それでは死刑!」

『了解!』

俺の死刑宣告をした。

「っておおい!!」

「何だ、まだ何かあるのか?故、佐藤謙太。」

「俺はもう死んでいるのか!？」

再び須川に突っ込む俺。

「もう死んだも同然だろう、それより遺言は考えたのか？」

俺のツッコミ・・・というより悲痛の叫びをスルーし、またまた物騒なことを言い出す須川。

・・・いやもうなんでもいいんだけど。

「安心しろ、遺言はきちんと俺たちが聞いて心の中にとどめておくから。」

「いや、せめて誰かに伝えてくれよ!!」
できれば優子とかに伝えて欲しい・・・

「全く面倒な・・・さっさと殺せ!」

『了解しました!』

「いや、ちよつと待て!」

俺の言葉を無視して、二人の男子生徒が俺を担ぎ上げる。

「やめる、やめてくれええええ!!」

ドスン!

ドスン!

ドスン・・・

朝。

「・・・大丈夫、謙太?」

「大丈夫ですか・・・?」

俺は、優子と優希の声で目を覚ました。

「・・・イツツ!!」

・・・昨日の今日だからか、やはり体中が痛い。

全く、面倒な真似を・・・

「謙太、まだ動いちゃダメよ。」

「そうです、動いちゃダメです。」

俺の反応に気づいた二人が俺を止める。

いやいや、俺はそこまで弱くないぞ・・・

「いや、この程度どうということとは」

「そうじゃなくて。」

優子が、静かにというジェスチャーをして、俺の足元を指さした。

「・・・美春。」

そこには、座ったままやすやと寝息を立てている美春がいた。

「美春ちゃん、謙ちゃんが外に放られてるのを見つけて、ここまで連れてきてくれたんですよ。」

優希が、微笑ましそうな目で美春を見ながら言った。

・・・へえ。

「・・・おにいしゃま・・・すう・・・」

「おお・・・」

美春が、寝たまま俺を呼んだ。

・・・俺の夢でも見てるのか？

「ほら、寝言もあんだのことばかりよ。」

優子も、まるで子供を見るような目で美春を見ている。

・・・ファン、か。

「・・・可愛いやつ。」

俺は、なおも寝息を立てる美春の頭をぐしぐしと撫でた。

「お兄しゃま・・・やっぱり可愛いでしゅ・・・」

・・・おい。

第百五十一話（後書き）

謙太「次回をおた」

美春「おにい、しゃま〜・・・」

優子「・・・なついているわね。」

優希「本当に兄妹みたいですわね。」

「・・・羨ましいかも」

謙太「どこがだ？次回をお楽しみに。」

第一百五十二話（前書き）

最近視力が落ちている気がする・・・
・・・けどまあどうにかなるか。
という訳で再び美春回。

第一百五十二話

そんなこんなで、美春を起こして食堂にて。

「お兄様〜〜！」

「!?!」

美春が俺を呼ぶのと同時に、一斉に俺に向く驚きの目。

「……まあ、当然だろうな。」

「……ちよつと離れてくれ。周りの目がすごくに気になるから。」

俺は美春にそう言い、少し距離を取ろうとしたが……

「ダメです！美春が寂しさで死んでもいいのですか!?!」

「……どこのうさぎちゃんだ。」

……そんなやりとりの末に結局美春の押しに負け、こつして一緒に食べていた。

「……謙太、どんな魔法を使ったの？」

俺の右斜め前にいる美波が、疑いの目で俺を見ながら言った。

その疑いの視線はわからないでもないが……

「別に何も」

「嘘だな。」

「少しは信じるよ!?!」

俺の言葉を遮って全員が否定する。

「……俺に味方はいないのか!?!」

「……お前、薬でも盛ったか？」

「謙太、木下さん、黒崎さんに加えて清水さんまで欲しがらだなんて……」

「……この変態つ!?!」

「将来弟になる身としては、あまり犯罪行為はやめて欲しいがの
．．．」

雄二以下Fクラス四人が俺を責める。

「．．．なんで俺はいわれのない軽蔑を受けているんだ。」

『佐藤謙太、貴様は異端審問会の掟に背いた。』

「いや、何時の間に集まってるんだよ!？」

気づけば、周りをFクラスの連中に囲まれていた。

「．．．逃げ場なしか？」

『大人しく異端審問会の裁きを．．．』

「．．．黙りなさい豚共。」

F F F 団が俺に詰め寄ろうとしたその時、美春が声を上げた。

「さつきからおとなしく聞いていれば、美春がお兄様に薬を盛られた？冗談じゃありません。」

美春はそう言っていると、雄二に詰め寄った。

「あなた達みたいにデリカシーも考えずに覗きをするような下賤な豚共と違って、お兄様は絶対にそんなことをしません!！」

「おいちよつと待て、誰が豚だつて?」

美春の言葉に、雄二が反応して美春に詰め寄る。

「あなたたちのことです!覗かれる女性のことも考えられないあなた達の頭の中は、もはや豚以下です!」

雄二に睨まれるが、それでも姿勢を崩さない美春。

「．．．つてめえ、言わせておけば」

それにますます腹を立て、美春に手を出そうとする雄二を見かねた俺は、それを止めた。

「．．．雄二。」

「チツ．．．」

俺に軽く舌打ちし、俺の手を振り払う雄二。

「……ふう。」

「美春、お前ももう十分だ。落ち着け。」

「嫌です、お兄様を馬鹿にされたのに、放つてはおけません。」

俺は美春をなだめようとしたが、美春は聞かなかった。

「美春……」

「まずその四人は、お兄様と女子全員に謝りなさい。」

「……分かった。」

「……確かに、謝らなきゃね。」

「……了承。」

「……分かったのじゃ。」

明久たち四人は渋々ながら頷いた。

「そしてそのフードの男たち。あなた達がお兄様に裁きを与えるですって？逆にあなたたちが裁きを受けるべきです！豚の分際で、

汚らわしい！」

『くっ……』

美春の言葉にたじろくFFF団。

「……私が言いたいことは以上です。」

美春はそう言って椅子に座り、無言のまま残っていた朝食を食べ始めた。

「美春。」

「……すみませんでした、お兄様。」

皆が散ったあとで俺が美春を呼ぶと、美春は俺に深々と頭を下げた。そんなつもりじゃないんだが……

「謝らないでくれ、むしろ……ありがとな。」

「・・・えっ？」

美春は、俺の言葉に驚いたような表情をした。

そんなに驚かなくてもいいんだけどな。

「美春が俺をそんなふうに見てくれてるって知れて嬉しかった。」

「お兄様・・・」

「けど、俺はそんなに完璧な奴じゃないってことを、覚えておいて欲しい。俺は、どこにでもいる普通の学生なんだ。」

俺は、感謝の気持ちを込めて美春に自分の気持ちを述べた。

「・・・わかりました！」

俺の気持ちを聞いた美春は大きく頷き、

「それでは、私はその完璧じゃない部分を補わせていただきますね！」

そう言い切った。

第百五十二話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

美春「お兄様ー！愛しています！！」

謙太「・・・分かった、分かったから・・・」

第一百五十三話（前書き）

優希回ですが・・・謙太さようなら。

・・・いや、べ、別に書いていてむなしくなったりとかそついうあれ
じゃないからな!？

第一百五十三話

そんなこんなで朝食を終え、勉強時間。

「……………」

「……………悪かった。」

俺は、優子と優希に謝っていた。

「…………別に悪いわけじゃないわよ。」

俺の謝罪に、不機嫌そうな顔をした優子が言った。

…………その顔で言われてもな。

「…………そうです。謙ちゃんが誰とイチャツこうと自由です。ただ・

……………」

優希はこれまた不機嫌面でそう言って、息を大きく吸うと…………

「私たちに見せつけないでください！」

俺を思いつきり怒鳴った。

…………初めて優希に怒鳴られたな。

「…………すまない。」

俺はそう言って、もう一度頭を下げた。

…………さすがにやりすぎだな。

『急に大きな声を出して…………どうしましたか？』

俺たちの騒ぎを聞きつけたらしい遠藤先生が、そう言って俺たちの机の前に来た。

「いえ、謙ちゃん…………ごほん、謙太くんが私たちにテストを見せてきてきたので、腹が立ってつい…………すみませんでした」

優希がそう言って遠藤先生に頭を下げる。

…………苦しい言い訳だな。

「そうですね。自習時間ですから、なるべく静かにお願いします。」
しかし遠藤先生は納得したようにそう言うと、また部屋から出ていった。

「・・・ふう。」

優希は小さくため息をつくと再び俺を見た。

「・・・」

優希のふてくされた表情を見ていらなくなった俺は、優希に言った。

「・・・どうすれば許してもらえます？」

その言葉を聞いた優希は一瞬顔を赤くし・・・

「・・・キス。」

か細い声でそう言って目を閉じた。

「・・・え？」

「オイオイ、さすがにこんな場所じゃちよつと・・・」

「じゃあ許しません。」

優希はそういうと、再びぷいとそっぽをむいた。

「・・・しょうがない。」

「優希。」

「なんです・・・」

CHU?

優希がこっちを向くのと同時に、俺は優希のおデコにキスをした。

「~~~~~!？」

一気に顔を真っ赤にする優希。

「いとこなんだし・・・おでこで許してくれ。」

俺がそう言うと、優希はブンブンと首を縦に降った。

「・・・良かった。」

「・・・全然良くねえな・・・」

第一百五十三話（後書き）

謙太「じ、次回をお楽しみに・・・ガクッ」

第百五十四話（前書き）

・・・満を持して新キャラ登場！

まあなんとというか・・・全く設定を考えていないのですが、まあそれはいいでしょう。

では、お楽しみに・・・

第一百五十四話

「大丈夫？」

「……あ、ああ。」

聞いたことのない声で、俺は二度目の起床をした。

「……誰？」

俺は顔を上げながら、取り敢えずそう尋ねる。

美少年……と呼ぶべきか、制服を見なければ女と間違われてしまいそうな程中性的でありながら、秀吉とはまた違った、小学生と間違われそうなほどのあどけなさを残した顔。

そして、長くも短くもない髪を、装飾のない無難なゴムでまとめているという変わった風貌。

こんな生徒、うちの学園にいたっけ……？

「あ、えつと……そういうえば自己紹介がまだだったね。」

男子生徒は思い出したようそう言い、しかしながら名を名乗ることはなく俺の縄を解きはじめた。

……言わねえのかよ。

「……よし、これで解けた。」

男子生徒は俺の縄を解きそう言つと、部屋を出ようとした。

……っておいおい、言わない気か？

「……待つてくれ。まだ名前を聞いてない。」

俺はそう言つて、どこか抜けているその男子生徒を呼び止めた。

……色々と素性が気になるところだ。

「ああ、忘れてた。」

ようやく思い出したのか、その男子生徒はバツが悪そうに笑つと、俺の目の前に来て言った。

「あみやしすけ雨宮出雲。転入生で、一応Aクラス所属です。よろしく！」

「ん？あ、ああ……」

俺は取り敢えず、雨宮と名乗ったその男子生徒が差し出してきた手

を握り返す。

・・・身長ちいせえな。

「えっと・・・あ、そうだった。」

雨宮は握手をしたことで何かを思い出したのか、俺に背を向けながら言った。

「Fクラス代表からの命令です。『向かってくる女子をすべてたたくつぶせ!』とのことです。」

「・・・はあ?」

俺は、雨宮の口から唐突に言われたその言葉を理解することができず、間抜けな声でそう聞き返す。

・・・女子をたたきつぶせ?

「詳しい話は後です。とりあえず・・・サモン」

そう言つて、雨宮は召喚獣を出した。

雨宮によく似た中性的な顔立ちながら、いかにも格闘家、強いていえばストリートファイターのリ○ウのような格好の召喚獣が、魔方阵から姿を現す。

・・・あれ?

「・・・召喚獣を出せる? 一体どういう」

『こつちにもいたわ!!』

俺が雨宮に尋ねる前に女子の声が聞こえ、たちまち俺たちは女子たちに囲まれた。

「待て、一体どういう・・・」

「来る!!!」

『サモン!!!』

女子十人程度が、同時に召喚獣を呼び出す。

・・・あれ?

「サモン、もしかして・・・敵視されてるのか？」

俺は、ひとまず護身用に召喚獣を呼び出す。

・・・なぜに女子から嫌われている!?

『おとなしく捕まりなさい!』

「捕まる? 一体何のことだよ？」

俺は、全く意味が分からないまま、敵の攻撃をガードする。

英語 W 女子 x 8 / 132、141、126、225、110、1
87、201、102

英語 W Fクラス 佐藤謙太 / 411

全員の点数が100点台&俺の得意教科ではないため、一筋縄では
いかない。

・・・いったいどうすれば

「しょーりゅーけん!!--」

ドゴーン!

『きゃああつ!!--』

俺の後ろで雨宮の大声、そして爆発音が起こり・・・雨宮を囲んで
いた女子6〜7人の召喚獣が吹っ飛ぶ。

そして、砂煙にまぎれて点数が表示される。

英語 W Aクラス 雨宮出雲 / 722

「しゃがんで!!--」

「お、おう・・・」

雨宮がそう叫び、俺は雨宮の言うとおりにしゃがむ。

一体何をする気だ?

「はどーけん!!--」

チュドーン!!--

『きゃああっ!?!』

再び聞いたことがある技名がして、俺を囲んでいた女子が吹っ飛ぶ。

・・・マジでス〇ファ!?!?

「さあ、今のうちに行こう!?!」

「おい、ちよっとま」

「いいから!」

俺は、雨宮に為す術なく引きずられた。

・・・誰かこの状況を整理してくれ!

第百五十四話（後書き）

謙太「次回をおた」

出雲「次回をお楽しみに！」

謙太「・・・おい。」

第百五十五話（前書き）

昨日はすみませんでした。
久々のパソコンブツチで・・・

第一百五十五話

「……どういうことだ、雄二。」

俺は、俺の前に指揮官面で座っている雄二にそう言った。

「なんの話だ？」

「俺をあんなにしておいて、俺に協力を頼むなんて、虫が良すぎるんだよ！」

知らばつくれようとする雄二に、ついつい大声を出してしまう俺。

……誰が協力してやるかよ。

「そうか、それは残念だな……」

雄二は残念そうに肩をすくめると……

「サモン」

……召喚獣を呼び出した。

「なんのつもりだ？」

そう尋ねた俺に、冷やかな笑みを浮かべる雄二。

「女子の援軍になってもらおうと困るから、ここで片付けてやるんだよ。」

雄二はそう言うと、周りを取り巻いていた5〜6人の生徒たちに指示をだした。

……面倒な。

「……サモン。来るなら来い、相手してやるよ。」

俺は召喚獣を呼び出し、戦闘体制をとった。

『サモン！！』

俺の言葉に何も反応をせず、召喚獣を召喚する雄二の取り巻き。

英語 F、Eクラス5名 / 91、83、46、77、23

英語 Fクラス 佐藤謙太 / 473

「・・・久々の戦闘だ、腕がなる。」

俺はそうつぶやくと、一番近くにいた召喚獣に飛びかかった。

「喰らえ!!」

その召喚獣は、手にした槍を俺に向け威嚇するが・・・甘い!!

「槍つてのはこうやって使うんだよ!!」

キーン!!

その槍を持っていたパルチザンで弾いた俺は、そのままの勢いを殺さずに召喚獣を横払いした。

・・・まずは一匹撃沈。

「・・・後ろがから空きだアツ!!」

そう言った二匹目が、竹刀で俺の背を狙ってきた。

「遅いぜエ!!」

竹刀を手で受け止め、反対にもつていた槍で一突き。

これで二匹だ。

『てやあっ!!』

二匹目がやられたのを見てしびれを切らしたのか、三人が一度に飛びかかってきた。

・・・好都合だ!

「サイクロンストームっ!!」

俺は背に背負っているバスターソードを抜き、その場のノリで新技を繰り出した。

・・・ただの回転切りだけど。

『ぐわあっ!!』

しかし、やはりというかなんというか効果抜群で、三匹の召喚獣はあっという間に消滅した。

・・・勝負ありか。

「ちょっと待って!」

俺が立ち去ろうとしたところで、静観していた雨宮が俺を呼び止めた。

「・・・なんの用だ?」

「えっと・・・次は僕と戦ってくれない?」

俺が不機嫌面で雨宮を見ると、雨宮はおどおどしながらそう言った。

「・・・雨宮と、ねえ。」

「別に俺は構わねえけど。」

俺はそう言っつて、再び召喚獣を呼び出す。

・・・点数が若干減っているが、まあ大丈夫か。

「じゃあ行くよ、サモン!」

英語 Fクラス 佐藤謙太 / 412

英語 Aクラス 雨宮出雲 / 509

雨宮は、召喚獣を呼び出す。

「・・・アレ?さっきのと違うんじゃないか?」

よく見ると、雨宮の召喚獣はさっきのS〇ファキャラとは違う召喚獣だった。

・・・これも見たことある気がするんだけど。

「ああ、今回はメ〇ルギアだね。」

雨宮はそんなことを言いながら構える。

・・・今回は?

「ああ、僕の召喚獣は、出すときによって、どんなキャラになるかが違うんだよ。」

兩宮はそう説明した。

・・・ん？

「・・・要するに、いろいろなゲームとかアニメのキャラに変わってることか？」

「そういふこと。」

兩宮は笑顔で肯定して、持っていたM4を構えた。

・・・面倒な戦いになりそうだ。

第一百五十五話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに」

第一百五十六話（前書き）

今回久々のバトル回。

まあ、今回はかなり軽目ですけどね。

第五十六話

「それじゃ、早速はじめようか。」

「いつでも来い。」

俺達はそう言い合って勝負を始めた。

取り敢えず、点数の利はあっちにあるから・・・

「・・・先手必勝！」

俺は剣を抜き、雨宮に接近した。

「甘いよ！」

雨宮は持っているM4を乱射し、弾幕を貼った。
なるほど、弾幕で近づかせないか。

・・・なら！

「ピーッ！」

「グルウウウー！」

俺は一旦後退し、久しぶりにドラゴンを呼び出した。

・・・お久しぶり。

「わあ！ドラゴンだ！」

雨宮が感嘆の声を上げる。

うわー、やりづれえ・・・

「・・・あー、取り敢えず行くぞ。」

俺は気を取り直して、高くに上昇した。

・・・さて、こっからだ。

「空中かぁ・・・けど、僕は飛び道具だよ？」

俺の行動を見た雨宮は、不思議そうな表情をした。

・・・まあ、そうだろうな。

「ま、見てな！！！」

そう言った俺はドラゴンと共に雨宮の上空を旋回する。

今回、ドラゴンには150点程度の点数を与えているから、かなり速度が出ている。

「むー・・・狙いづらいよ・・・」

そう言っただけで困惑しながらも、弾幕を貼るためにM4を撃ち続ける雨宮だったが・・・

カチツ、カチツ・・・

「た、弾切れ？」

雨宮の持っていたM4が沈黙し、雨宮が不抜けた声をだした。

・・・来た！

「今だっ！！」

俺はドラゴンに乗ったまま急降下し、左手に握っていた剣を右に構え直した。

「くっ！」

雨宮はそう言い、懐からMk・22を取り出すが・・・若干遅い。

「オラあっ！！」

「うわっ！！」

俺は剣を振るい、銃を握っていた召喚獣の左手を切り落とした。

・・・よし、これで勝ったな。

英語 Fクラス 佐藤謙太 / 221

英語 Aクラス 雨宮出雲 / 101

「うっ・・・やっぱり強い・・・」

雨宮は泣きそうになりながら、片腕でAK-47を構える。

・・・そういえば相手は転校生。

やりすぎたかな・・・？

「もう勝負はついた。十分だろ？」

「うー・・・」

「戦死させたくはない。おとなしく武器をしまえ。」

俺はそう言つて、自分も武器をしまおうとしたが・・・

「まだ、まだ終わりじゃない！」

ダダダッ！！

「うわっ！！」

出雲がそう言つて、片手で構えたAKを俺にぶっぱなしてきた。

・・・あぶねえ！！

「そんなに戦死してえのか！」

俺は口笛を吹いてドラゴンを操り、ドラゴンと俺とで挟み撃ちした。

「喰らえっ！！」

俺が正面から盾のようにを構えて正面から、

「グルウツ！！」

ドラゴンは雨宮の背後に回って頭突きを放った。

「わあっ！！！！」

俺とドラゴンとのサンドイッチを受けた雨宮の召喚獣は、音も無く消滅した。

・・・俺の勝ち。

「・・・流石は佐藤君だよ。」

出雲は、まだ目を赤くしたままそう言った。

・・・なんかすごく申し訳ない。

「まあ、それほど事でもねえんだけどな・・・。」

お前も慣れるよと付け加え、俺は雄二たちの部屋を後にした。

・ ・ ・ もちろん、雄二の召喚獣、本体共に軽くボコツておいたが。

「雨宮出雲、か・・・」

・ ・ ・ なかなか面白そうなやつだ。

俺は、転入生に少しの期待を抱きつつ、自分の部屋に戻った。

第一百五十六話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

キャラ紹介？（前書き）

時間が無いのでキャラ紹介だけです

キャラ紹介？

名前：雨宮出雲

容姿

身長：163

顔：中性的な美少年

体型：とにかく小柄

髪型：中途半端な長さの髪を、ゴムで止めている

性格：ふわふわとつかみどころがない。感情の起伏が激しく、表情がコロコロと変わる。ついでに泣き虫

趣味：ゲーム、アニメ鑑賞。好きなアニメはガ○ダム。

特技：ゲームが上手く、アニメの知識は狭く深い。自分が好きなアニメはそうとう語れる。

成績：Aクラスの結構上位に位置している（総合科目、3792）

得意科目：英語、英語W（500）700、調子にムラがある。（

苦手科目：数学、物理（計算が苦手、100）150）

召喚獣：自分が見たこと、やったことがあるゲームやアニメのキャラになる。完全にランダム。

腕輪：そのゲームの必殺技を使える。ダメージは自分の点数の2倍

5倍。

弱点：（アニメ関係で）熱くなったら周りが見えなくなってしまふ。

人間関係：完全に外から来たため今はまだ薄いですが、他人に取り入るのは得意。

悩み：金欠。

過去：ごく普通の家庭に育った。比較的常識的かつ幸せに育った。
特に事件は無い

備考：年の離れた妹と二人暮らし。

キャラ紹介？（後書き）

出雲「次回をお楽しみに!!」

第一百五十七話（前書き）

今回はちょっと複雑です・・・

第五百五十七話

途中2、3回男女様々な奴らに襲われ、満身創痍で帰宅。

「はぁ・・・ただい」

「お兄様ー!!」

部屋に入ると同時に、美春に飛びかかられた。

「つと、危ない・・・」

・・・が、後ろに回避。

「あつ!!」

体重をかけるところを失った美春は、思いつき前につんのめった。

「よつと・・・」

ガシッ

そして床に激突する寸前に、なんとかキャッチ。

危ない危ない・・・

「大丈夫か？」

「はい、なんとか・・・」

どうやらどこも怪我してないようだ。

ふう・・・

「そついえばお兄様。」

美春をベッドに下ろし、一息ついたあと。

美春がふと何かを思い出したように俺に言った。

「どうした？」

「いえ、大したことじゃないのですが・・・お兄様、覗きの誘いを
けたそうですね。」

美春の話は、さっきの雄二の話。

美春の視線から察するに、結構興味がありそうだ。

「ああ、そんなことか。もちろん蹴ったぞ。」

「やっぱりそうなんですか？さすがはお兄様、そこらの豚とは核が違いますね。」

「俺も人間だし、構成成分は一緒だから……。」

「けど、どうしてですか？」

美春は、興味津々といったふう聞いてきた。

「……それにしても、目をキラキラさせた美春はとても可愛らしい。うーん……」

美春って、普通にしたらモテると思うんだけどなあ……

「……謙太さん？」

美春が、顔を見られていたことに気づいたのか、少し顔を赤くしながら言った。

「ああ、悪い……聞きたいか？」

軽く謝って、美春の返答を待つ。

「……もちろんです！」

美春はもちろんイエスの返答。

「そうか。じゃあどこから話そうか……」

俺はそう言って少し考え、そして事のいきさつを話しはじめた。

優子目線

『で、雄二はなんて言ったと思う？』

『いえ、あんな豚のことなんてわかりません……』

『ああ、そういえばそうだよな。』

『……この世で存在を許されている男性はお兄様だけです。』

『いや、それ結構恥ずかしいからやめてくれ。』

……中から、謙太と美春の楽しそうな声が聞こえてくる。

そして私は、部屋の外から二人の話に聞き耳を立てている。

……何やってるんだろ、私。

私は、自分のしていることに若干の後悔を抱き、ふと謙太のことを想った。

「謙太は、ずっと私を見ていてくれると思ってたけど、やっぱりそう簡単にはいかないんだね。」

「今までで、一番胸が苦しい。」

「これが、嫉妬ってやつなのね。」

「ハア。」

私は、大きい溜息を一つついて、謙太たちの部屋の前から離れた。

「こうなってしまうたら行く場所は一つ。」

私は目標の部屋につくと、部屋をノックした。

「誰？」

中から、聞きなれた代表の声がする。

「私、優子よ。」

「入っていいよ。」

私が名前を出すと、代表はそう言ってドアを開けてくれた。

「ありがとう。」

私は代表にそう言って、部屋に入る。

「おっ？優子来たんだ。」

優子が、相変わらず軽い口調で私にそう言った。

「てつきり部屋で彼氏といちゃついてるかと思ったよ。」

「うっ。」

優子のその言葉にぎくりとする私。

「私もそのほうがよかつたんだけどね。」

「どうしたの、優子？」

代表が、私のそんな様子を悟ったのか心配したように話しかけてきた。

「うっん、なんでも……。」

私はそう言いかけて、ふと考え直した。

「このことは、代表たちに聞いてもらったほうがいいのかな。」

「あのさ代表。」

「・・・何？」

私は代表を呼ぶと、意図せず少し目に涙を貯めていった。

「今日は、泣いてもいいのかな？」

第一百五十七話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに。」

第一百五十八話（前書き）

今回は優希回です。

なんというか、駄文ですみません…

第二百五十八話

優希目線

私は、男の子たちの覗きのせいで少し遅れてしまったお風呂を終え、部屋に帰りました。

「ただいまですー」

「おっ、おかえり。」

「おかえりなさい。」

私の声に、話をしていた謙ちゃんと美春ちゃんが反応します。

「あーあれ、優子ちゃんはまだですか？」

「あー・・・、優子ならまだ帰ってきてないぞ。」

「いや、心を読まないでください！」

謙ちゃんが、私の心を読んで言いました。
ん？

帰ってきてない・・・ですか？

「あれ？優子ちゃんはもう上がったはずなんですけど・・・」

優子ちゃんは、もう三十分前くらいに上がったはずですよ。

着替えなんかも持っていたはずですよ、一旦この部屋に帰ってくるはずなんですけど・・・

「よくわからんが・・・多分、霧島と愛子の部屋で遊んでるんじゃないか？」

「あー・・・なるほどです。」

私は謙ちゃんの推測に納得し、

「それじゃあ、ちょっと見てくるです。」

「そうか、行ってらっしゃい」

そう言っただけで自分の部屋を後にしました。

翔子ちゃんたちの部屋にて。

翔子ちゃんの部屋に入った私。

私は今、困惑しています。

なぜなら部屋の中では・・・

「うわぁーん!!」

大泣きする優子ちゃんと、

「・・・よしよし。」

それを慰めながらも若干ふくれっ面の翔子ちゃんと、

「優子、しょうがないよ。」

いつも通りの笑顔で優子ちゃんを励ます愛子ちゃんと、

「三人とも羨ましいです・・・」

瑞希ちゃんが三人を羨ましがっていて、

「・・・(ノノノ)」

美波ちゃんは、メールの文面を見て顔を真っ赤にしていました。

「何があつたんですか・・・」

私はそういつてため息をつきました。

閑話休題

「ごめんね優希、心配かけちゃって。」

優子ちゃんが、私にそう言って謝りました。

「いえ、大したことはありません。」

私はそう言つて、優子ちゃんを見ました。

笑つてはいるものの、まだ目は真っ赤です。

「・・・言えないことは言わなくていいのですが、何のことで泣いていたのですか?」

私は改めて、さっきの騒動の原因を聞きました。

「ああ、えつとね・・・」

優子ちゃんは一瞬戸惑った様子になりながらも、話してくれました。

「・・・ほら、謙太って誰にでも優しいじゃない？」

「確かに・・・そうですね。」

確かに・・・

言われてみると謙ちゃんは、他人に冷たくすることがほとんどないと思います。

「あの、だからそれがさ、何かモヤモヤするというか・・・なんて言ったらいいんだろ。」

優子ちゃんは言葉を選んでいる様子で、うんうん考えながら一つ一つ言葉を紡ぎます。

「腹が立つってというか、モヤモヤするってというか・・・」

優子ちゃんは何と言うべきか、悶々と考えています。

「要するに・・・私は嫉妬しちゃうってるのよね。そう、嫉妬よ。」
「やっといい言葉が浮かんだのか、優子ちゃんはスッキリしたようにそう言いました。」

「嫉妬・・・ですか。」

「うん。私は・・・私は謙太が他の女の子と話してるのが許せないの。謙太が他の女の子と楽しそうなのが気に食わないの。」

優子ちゃんは、一気にそう言って言葉を止めると・・・

「・・・まあ、それも含めて全部が恋なのよね。」

そう言って小さく笑った。

恋、か・・・

私はみんなと他愛もない話をしながら、優子ちゃんが言ったことを考えていた。

よく考えると、私はそんな気持ちになったこと無いな・・・

私の謙ちゃんに対する気持ちは、どうなのかな・・・

嫉妬なんて、考えたこともなかったけど・・・よく考えたら、それが普通なのかな。

もしかして私は・・・私は恋をしていないのかも。

・・・恋ってなんだろう。

第百五十八話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに」

第百五十九話（前書き）

今回は少し少なめです

第五百五十九話

夜が明け、強化合宿も実質的な最終日となった。

俺はいつものように着替えを済ませ（もちろん別室で）、食堂へと向かった。

「流石はお兄様、張り切ってますね！」

美春が俺の後ろを歩きながらそう言う。

・・・そう見えるのか？

「・・・まあ、昨日は誰かさんのせいでまともに勉強できなかったからな。」

俺はそうだけ言って、再び前を向いた。

誰かさんというよりは、だれかさんたちというべきなのだろうが、この際同じことだ。

「へえ・・・やっぱりお兄様は勉強が好きなのですね。」

美春がそう言ってクスリと笑う。

・・・そう言われると恥ずかしいな

「まあとにかくだ、今日はしっかり勉強しないとな。」

俺はそう言って強引に話をやめた。

・・・強引すぎて日本語がおかしい気もするが、そこは「愛嬌」ということにしておこう。

「そうですね。」

美春は特に疑問を感じなかったようで、俺の言葉にそう頷いた。

閑話休題

「頼む！俺たちの仲間になってくれ！！」

食堂にはいるなり雄二が、そういつて俺に土下座をした。

・・・どうやら俺は、今日も勉強させてもらえないようだ。

「昨日も言っただろ、俺は参加しないって。」

俺は、半ば呆れながら雄二をみた。

美春とは別れたあとだったから、大きな騒ぎにはならなかったけど・

どうしてこいつは朝からこんなことを言ってくるんだ。

「ってか、まだ諦めてなかったのか？」

俺は、霧島に聞かれないようにポリウムを落として、雄二にそう
いった。

昨日の時点で、はつきりと戦力差がわかっただろくに・・・

「・・・ふん、謙太は分かかってないな。」

雄二は俺を鼻で笑った。

わかってない？

なんの話だ・・・

「ほら、昔からよくいうだろ？ー据え膳食わぬは男の恥ってな。」

「・・・その幸せな頭、叩き割ってやろうか？」

思いもよらぬ雄二の言葉に軽くきれた。

・・・しばいてやろうか。

「頼む！！突破口を開いて高橋女史を倒してくれるだけでいいんだ
！」

「言っておくがそれかなりの重労働だからな！？」

雄二の覗きに対する情熱に若干引ながら、だが一方で俺は、理不尽
な雄二の懇願に突っ込みつつもあることを考えていた。

このチャンスに、今後の生活の邪魔者を消すか。

「・・・まあ、条件次第で引き受けてやらんこともないが。」

俺はてのひらをかえしたように、雄二にそういった。

「本当か！？」

途端に顔を輝かせる雄二。

「ああ。お前らFFF団が、俺に一切手を出さないというのなら、
特別に受けてやる。」

「わかった！是非頼む！！」

雄二はその条件を了承して頷いた。

・・・そんな、自分の明るい学園生活のために、一丁張りますか。

第百五十九話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに！」

第一百六十話（前書き）

今回、久しぶりに時間が取れました！！
一時間あると全然違いますね
というわけで、どうぞ。

第一百六十話

そして、補給と勉強を終えて、夕方。

「謙太！参加してくれるんだね?!」

俺が雄二たちの部屋に行くと、明久が俺を歓迎した。

「ああ。とはいっても、覗く気はねえけどな・・・」

「なんと、それではなぜ参加するのじゃ?」

俺が覗く気がないことを伝えると、秀吉が怪訝そうな顔をした。

「・・・そういうお前だつてのぞく気はないだろうが。」

「まあ・・・ひまつぶしだ。」

「へえ・・・」

実際は、優子や優希たちとの平穏な学園生活のためなんだけど・・・
わざわざ言つのも面倒だつたし、適当にはぐらかした。

「けど、秀吉のお姉さんとかは怒らないの?」

「・・・まあ、十中八九怒るだろうな。」

明久の問いに俺は少し気落ちしながら答える。

「・・・なんて謝ろうか。」

閑話休題

「とにかくだ。」

雄二が軽く咳払いをして、俺たちの話を打ち切った。

「これでようやくまともな戦いができる。」

そう言った雄二がノートを取り出し、俺たちの集合場所から女湯までのルートを書き記す。

「相手の布陣はおそらくこうだ。」

そう言つて、予想される配置を雄二が書いていく。

その布陣のトップには・・・

「Aクラス、ねえ。」

女湯までの一直線に入る前に先頭が予想される場所であり、必ず通る食堂に、教師陣とAクラスの布陣が書かれていた。

「おそろくだが、一番勢いがある状態の俺たちを止めるために、Aクラス女子が総動員されるだろう。」

雄二がそう言っつてその後ろの陣形を書き加えていく。

「・・・A～Eまで、奥に行くほど弱くなっていくのか？」

雄二の書いた陣形では、奥に行けば行くほどクラスのランクが下がつていつている。

「・・・こう言っつ陣形になるのか？」

「ああ。そしてここに・・・」

雄二は、止めというふうに大きな丸を二つ書いた。

そして、その中に書かれた名は・・・

「鉄人、だね・・・。」

「高橋女史、厳しい相手だな・・・」

おそらく請け負うことになる相手に、小さくため息をつく俺と明久

「分かっていると思うが・・・お前らは、この二人を相手にしてもらう。」

雄二がそう言っつて俺らを見た。

「・・・わかつてるよ。」

「・・・やらなきゃいけないんだろ？だったらやってやるよ。」

俺達はそう言っつて頷いた。

「なんとしてでも、ワシらがお主らを二人の場所まで連れてくのじや。」

「・・・任せろ。」

秀吉とムツツリが、そう言っつて頷いた。

「厳しい戦いになると思うが・・・お前らには期待している。」

雄二は至極真面目な顔をして、俺らの肩を叩きながらそう言っつた。

「・・・うん。」

俺達はお互いを見て、そう頷きあった。
・・・さあて、いつちよやるか！

そして入浴時間。

「野郎ども、行くぞ！！」

『オオ！！！！』

雄二の声に、男共が声を上げる。

「目指すは？」

『桃源郷！！』

その愛言葉で、一斉に動き出すFとDの男子。

「俺たちも行くぞ。」

「。。。わかった。」

俺、明久はもちろん、Dクラス代表なども加わった精鋭十人が、行動を開始した。

「最初に当たるはずのAクラス戦は、俺とDクラス代表の2人で部隊の指揮にあたる。」

雄二が、小走りしながら改めて作戦を伝える。

「AとCクラスは来るとしたらそこだよな。」

Dクラス代表の平賀が、雄二にそう問いかける。

「ああ。。。来るとしたららの話だけだな。」

そんな話をしている間に、食堂に到着した。

『遅いぞ坂本！』

「わーお。。。根本か。」

そこには、予想通りAクラスの女子が待ち構えていたようだ。

それと応戦するのは、BとDクラスの男子。

B、Cクラスの説得は成功か。

「よし、俺たちはここで離れるぞ。」

雄二はそう言っつて、戦場へとかけていった。

・・・死ぬなよ。

雄二たちと離れ、フィールドの隙間をぬって先へと進・・・

「いかせないわよ！」

「大人しく止まるです！」

もうとしたところで、優子、優希の二人が俺たちの前に立ちふさがった。

この二人がかりは・・・どうやら、俺の足止めが目的のようだ。

「とりあえずお前たちは先にいけ。」

俺は明久たちにそう言っつて、優子たちを見た。

幸い、召喚フィールドにいるのは俺だけ。

あいつらは先に進めるだろ・・・

「OK。死ぬなよ、謙太！」

「つたりめーだ。俺を誰だと思っつている？」

明久に俺はそう軽口をいい、明久たちが先に行くのを見届ける。

そしてその後、優子たちの方を向き直った。

・・・さて、どう説得する？

「優子、話を・・・」

「聞くわけないでしょ。」

優子はつつけんどんにそう言った。

・・・取り付く島も無しか。

「遠藤先生、Aクラス、木下優子と黒崎優希が佐藤謙太に勝負を・・・」

「Aクラスの雨宮出雲が受けまーす。」

勝負を始めようとする優子の声を遮って、俺の前に登場してきたのは・・・雨宮。

「ども、佐藤くん。」

このピンチに、兩宮はいつもの軽い感じで俺たちにそう挨拶をした。
・・・助かった。

「おお・・・取り敢えず、任せた。」

俺は出雲にそうだけ言つと、先を急いだ。

第一百六十話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに」

第百六十一話（前書き）

今回は語り部が変わります

第六十一話

雄二目線

俺達は、最も強力と思われるAクラス+教師陣と戦っている。

とはいっても、フィールドを展開している教師は召喚ができないためそこまで教師陣の驚異はない。

・・・が、正直言っただけ勝てる気がしない。

「明久たちは・・・無事に進んだみたいだな。」

俺は、取り敢えず自分の使命を達成できたことに安堵し、再び指揮を取り始めた。

「2〜3人がかりでかかれ！サシじゃ勝ち目はないぞ！」

俺は声を張り上げ、みんなに指示を出す。

戦場にAクラスの姿はない。

・・・やはり来なかったのか。

「それじゃ、俺もそろそろ・・・」

キュウウウン！！

「・・・なんの音だ？」

どこからか、何かを溜めるような音がして、その後・・・

チユドーン！！

謎のレーザーが飛んできて、一気に周りの召喚獣が全滅した。

「な、なんなんだあ!？」

とりあえず自分が召喚獣を出していなかったことに安堵しつつ、戦況を見渡した。

・・・正確に言えば、全滅ではない。

召喚していた教師陣はもちろん、Aクラスの子はあまり消耗していなかった2〜3割ほど残っているし、根本や平賀をはじめとした

B、C、Dクラスの半数ほど運良く生きのこったようだ。

E、Fは・・・望み薄だな。

「戦況は有利になったが・・・誰の技だ？」

他のフィールドに干渉するほどの攻撃なんて・・・
俺は、レーザーが飛んできた方を見る。

「・・・雨宮だったか。」

そこには、雨宮が仁王立ちしており、その正面に、二人の女子の召喚獣が立っていた。

あいつなら、何をやってもおかしくない。

・・・ちなみに女子の方は、謙太の彼女ペアか。

「っと、取り敢えず雨宮の援護に・・・」

「・・・いかせない。」

雨宮のもとへ向かおうとした俺の前に。少し息を切らせながら立ち
はだかったのは・・・

「翔子、そこをどけ。」

俺は、無駄と知りながらも一応そう言う。

ハア、面倒だな・・・

「・・・それは出来ない。浮気願望がある夫を矯正しないとイケないから。」

翔子は、そう言って、レーザーを喰らい点数の減った召喚獣を構え
させた。

「・・・分かった。速攻で片付けてやる！」

俺はそう言って召喚獣を召喚した。

こうなったら四の五の言ってられない。

・・・即効で倒す！

数学 Fクラス 坂本雄二 / 322

数学 Aクラス 霧島翔子 / 310

僕は召喚獣を呼び出し、前に立ちふさがる女の子二人、そして召喚獣を見た。

うーん、やっぱり強そうだ。

「じゃ、今回の召喚獣、お披露目と行きますか。」

僕はそう言って、召喚獣を呼び出した。

・・・今回の召喚獣は、両手にバスターライフルを持ち、背中に機械の翼が生えていた。

「・・・今回の召喚獣は、ウィングゼロカスタムか。これはまた強そうだ。」

一人でそうつぶやいたあと、僕は二人を見た。

「・・・君にはなんの恨みもないけど、謙太を追うためにすぐ倒させてもらうわね。」

「・・・覚悟するです。」

女の子たち二人は、そう言って召喚獣を構えさせた。

んー・・・

「あのさ、そういうのって・・・召喚獣の点数を見てからにしたほうがいいと思うんだけど。」

僕はそう言って召喚獣を指さした。

英語 W Aクラス 雨宮出雲 / 621

英語 W Aクラス 木下優子 / 391 黒崎優希 / 401

「・・・確かにすごいけど、この程度なら。」

「謙ちゃんの点数に比べれば、恐るに足りません。」

二人はそう言って再び武器を構え直す。

・・・しようがない。

「しばらく黙っててもらおうよ。『開放』。」

僕はそう言って、腕輪の能力を開放した。

キユウウウウン！！

バスターライフルが、エネルギーを貯める。

「・・・何する気かわかんないけどっ！！」

「こういうのは先手必勝ですっ！！」

二人が飛びかかってくる。

あーあ、危ないなあ・・・

チユドーーーン！！

エネルギー充填を完了した僕の召喚獣は、ゆっくり回りながらバス

ターライフルを撃った。

『うわああああっ！！』

『きやああああっ！！』

叫び声とともに、前の二人やほかのフィールドにいた召喚獣さえも餌食になる。

・・・なんか罪悪感を感じるよ。

「けど、もうこれで勝負つい・・・おお！！」

僕がそう言いかけたところで、二人がまだ立っていることに気づいた。

点数もまだまだ残っているみたいだ。

「ふう・・・なかなかやるじゃない。」

「けど、まだ点数的有利は変わりませんね。」

二人はそう言って僕を見た。

・・・なかなか楽しめそうだなあ。

英語 W

A クラス

木下優子 / 211

黒崎優希 / 269

第六十一話（後書き）

謙太「次回をお楽しみに!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2760s/>

馬鹿とテストと大脱走!!

2011年11月28日23時56分発行